混沌学院

銀凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
混沌学院

【Ｎコード】
Ｎ５２６９Ｐ

【作者名】
銀凪

【あらすじ】
ここは混沌学院。その名の通りあらゆる作品のキャラクター達が生徒あるいは先生として通っている。この学院で銀さんが！ナギが！ルフィが！悟空が！そしていろんなキャラが所迷わず大暴れ！なんでもありの学園コメディが今始まる！感想をお待ちしています！どんどん送ってください！

［登場作品］
銀魂、ハヤテのごとく!、ワンピース、ドラゴンボール、とある魔

術とある科学、テイルズオブ、迷い猫オーバーラン！、ファイナルファンタジー、ボーカロイド、メタルギアソリッド、けいおん！、灼眼のシャナ、戦国ＢＡＳＡＲＡ、機動戦士ガンダム、魔法先生ネギま！、ギャグマンガ日和、遊戯王、おまもりひまり、スーパーマリオ、星のカービィ、ポケットモンスター、ＭＯＴＨＥＲ、ひぐらしのなく頃に、絶体絶命でんぢゃらすじーさん、荒川アンダーザブリッジ、ＴｏＬＯＶＥる、ボボボーボ・ボーボボ、ＢＬＥＡＣＨ、ＮＡＲＵＴＯ、魔法少女リリカルなのは、北斗の拳、ムダヅモ無き改革、俺の妹がこんなに可愛いわけがない、Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！、侵略！イカ娘、エルシャダイ、これはゾンビですか？、べるぜバブ、とらドラ！、ゼロの使い魔、ローゼンメイデン、トリコ、ブレイブルー、とっとこハム太郎、ＩＳ、ピューと吹く！ジャガー、魔法陣グルグル、セクシーコマンドー外伝すごいよ！マサルさん！、魔法少女まどかマギカ、探偵オペラミルキィホームズ、緋弾のアリア、名探偵コナン

（作品が増え次第この部分は更新します）

第1話：混沌って・・・何かワカメっぽい漢字だね（前書き）

一部のキャラ崩壊がありますが気にしないでください。

第1話：混沌って・・・何かワカメっぽい漢字だね

ここは私立混沌学院。何で混沌というかとその名の通りである。あらゆる世界のキャラ達がこの学院に集まったようなものだ。どのクラスもかなり個性的でもうめちゃくちゃな生徒がわんさかといる。この学院の先生は大丈夫か？精神崩壊しないか？という質問も多々あると思う。大丈夫だ！この学院の先生もめちゃくちゃだからだ！で、２年Ｚ組の窓側の席、そこに座っている少年駄眼鏡・・・志村新八は心からこう思った。何でこんな学院に入学してしまったのだろうと。その時後ろから叫び声が聞こえた。

「こらー！ハムスター！私のハヤテにべったりとくっつくなー！」

「いいじゃない！それにハヤテ君は誰のものでもないよ！」

三千院ナギと西沢歩の毎度おなじみハヤテの取り合いが始まった。続いて、

「くたばれぇ！土方ァ！」

「なにしやがんだてめェェェェ！」

風紀委員の沖田が天敵の土方にバズーカをぶっ放した。そして、

「お姉さまーーーーー！」

「ええええい！うっとおしいいいい！」

同じく風紀委員である御坂が黒子に超電磁砲をぶっ放した。

「御坂ぁ、なにするんだ？オラの弁当がぶっ飛んじまったよ。」

「そうアル！温かいご飯が一気に真っ黒に染まってしまったヨ！」

「俺達『早朝早弁の会』の会合を邪魔するんじゃねーよ！」

窓の方で弁当を食べていた悟空、神楽、ルフィがこう言った。で、教室のドアが開いて風紀委員長である近藤が入って来た。彼はそのままお妙の所に行った。

「お妙さ」

「朝からうるせーんだよくそゴリラァァァァァ！」

右腕から渾身のストレートをゴリラに放ちゴリラは黒板にぶっ飛

んだ。で後ろのドアから別クラスのベジータが現れた。
「カカロット！今日こそ貴様との決着をつけるぞ！」
「おう、ベジータか！よし、かかってこい！」
悟空はそのまま教室でベジータと戦った。二人の放たれる気弾があちらこちらにあたって爆発する。
「ギャアアアアアア！」
新八は叫びながら逃げていた。だが途中でずっこけてしまったが何かに顔を守られた。顔を触ると何かざらざらした。それはメロンパンの残骸だった。
「おーまーえぇぇぇぇぇぇぇ！」
声がしたので新八が顔を上げるとそこには鬼神と化したシャナが新八を睨んでいた。
「あああああのっ・・・・これは・・・・不意の事故で・・・・」
シャナは謝ろうとする新八の言葉を無視して炎を放った。
「あああああああ！」
「待てェェェェ！」
新八は廊下に出て逃げたがシャナも廊下に出て追って来た。途中新八とシャナは巧にぶつかったがそれどころじゃなかった。
「おわぁぁぁぁ！」
巧はバランスを崩し、倒れかけた。でなぜかクッションみたいに柔らかいものが巧の顔を守った。それは文乃の胸だった。
「・・・・・・・」
「文乃っ、これは・・・あの・・・・」
「二回死ねーーーー！」
強烈なパンチが巧の顔に命中しそのまま廊下の後ろの方へブッ飛ばされた。
「また巧と文乃か。」
「いいじゃないの？本人達が良ければ。」
新八と同じクラスのロイドとコレットとジーニアスが登校してきた。

「ああっ、ロイド君！助けてェェェェェェ！」
新八はロイドに助けを求めた。
「どうしたんだ新八？」
「シャナが追ってくるゥゥゥゥ！」
「待てェェェェェ！」
「・・・仕方ないな。」
ロイドは腰にある二切れの剣を取りシャナに向かって行った。
「オイシャナ、またメロンパンの事で暴れてんのか？」
「そうよ！あのメロンパンはこの町内でとてもおいしいの！」
「わかったわかった。いつか俺がおごってやる。」
「・・・・・いくつ？」
「一つだよ。」
「・・・・・十で」
「一つ。」
「十！」
「一つ！」
「十！」
「一つ！」
シャナは左手から炎を発した。
「わかったわかった！・・・・はぁ、今月のこづかいが・・・」
シャナはご機嫌で教室へ戻って行ったがロイドは浮かない顔だった。
「ゴメンロイド君。半分は僕が出すから。」
「ああ。ありがとう。」
新八が教室へ戻ったら騒ぎはさらに悪化していた。
「かめはめ波ーーー！」
「ギャリック砲ーーー！」
悟空とベジータはまだ戦っていた。
「まだ戦ってんのかよアンタら！てか他の所で戦え！」
新八は叫んだが無駄だった。その横に神楽とルフィが新八のバッ

クから弁当を取りだし中身を食べていた。
「てめーーーーーらァァァァァァァァァァァ！何やってんだァァァァァァァァ！」
新八はコソ泥二人に怒りのゲンコツを浴びせた。その音は下の１年の教室に聞こえた。
「憂、上が騒がしいけど。」
「またお姉ちゃんのクラスかな・・・」
新八のクラスメイトの唯の妹の憂と友人の梓が話した。そこに、
「あーずーにゃーん！」
憂の姉の唯が入って来たのだ。
「遊びに来たよー！」
「先輩！来ていいんですか？あと少しで予鈴が鳴りますよ！」
「ちょっとだけだよー。今悟空君が隣のクラスのベジータ君と戦ってるから邪魔になるかなーって。」
「そうですか・・・」
その一方、上では。
「御坂ァ！なに俺にレールガン撃ってんだァァァァ！マヨネーズが台無しだろォ！」
「なんですのゴリラ？私のおねい様とのふれあいを邪魔しないでくれます！」
「ハヤテ！そんなハムスターに赤くしているのではなィィィィィ！」
「死ねぇ！土方ァァァァァ！」
と騒ぎがヒートアップしまくっていた。そんな中担任の銀時が教室に入って来た。
「てめーら、バカ騒ぎは止めろー。朝のホームルーム始めっぞー。」
銀時の一声で教室は一気に静まり返った。
「今日伝えてーのは特に無し。・・・あ、そーいやー松平のとっつあんが今日の体育は外でマラソンって言ってたなー。」
ええええええ！何で！ふざけんな！なんでやねん！と声が上がった。

「理由は二日酔いで指導するのが面倒だからだ。じゃ以上！」
銀時はそう言うと去って行った。その後生徒達は話をした。
「マラソンか・・・随分勝手な理由だな。」
「仕方ないよ。逆らったら殺されるもん。」
「けどマラソンはヤダなー。」
という声が上がった。新八は意外と体力があるので愚痴とか言わないがほとんどの生徒が愚痴を言っていた。そんな中。
「おい神楽、今日のマラソンでどっちが勝つか競争しようぜ！」
「分かったアル！絶対に負けないアル！」
異常な体力の持ち主の悟空と神楽はこんなこと言ってるし、
「マラソンか・・・それで弱った土方さんを・・・」
殺人計画を立てている輩もいる。
「ハヤテー、」
「大丈夫ですよ。僕もお嬢様のペースで走りますよ。」
んなこと言ってる奴もいる。
「・・・そう言えば一時間目は・・・・」
新八はバックから予定表を出した。科目は日本史、担当は・・・桂雪路。そこでチャイムが鳴りほとんどの生徒が席につき、先生の到着を待った。だが何分たっても雪路は来ない。
「おい、おせーな。」
「死んでんじゃね？」
「それはない。」
などと声がしたがその後、教室の扉が開いた。その時異臭がした。で、べろんべろんに酔った雪路が入って来た。
「へーい、じゃあーじゅぎょーはじめっぜぇぇぇぇい！」
「お姉ちゃん！また授業前にお酒飲んだの！」
雪路の妹であるヒナギクが叫んだ。
「飲んで悪いかーーー！飲まなきゃやってらんねェェェ！」
「まったくもう！」
ヒナギクはカンカンだった。

「じゃートッシー！伊達正宗の真似やってェェェ！」
「誰がやるかァァァァ！オメーがやれェェェェェェェ！」
「じゃー私がやるー！いくぜー！れっつぷぅあらオレェェェ
「誰がやるかァァァァ！オメーがやれェェェ
「授業になんねぇェェ
ェェェェェェェェェェェェェェェェ！」
二時間目。２Ｚは理科室へ移動した。
「へーイ！じゃあボーイ達！この顕微鏡でこの植物を調べ・・・ない！」
「調べないのかよ！」
全員からツッコミを受けた理科担当のイワンコフ先生はそんな事を気にせずそれぞれの班に一台つつ顕微鏡を渡した。
「ヒーハー！この特殊の葉っぱには肉眼では見えない微生物がたくさんいるの！観察して感想を書いたプリントを授業の最後に渡してね！」
その後、それぞれの班で顕微鏡を使った実習が始まった。新八の班のメンバーはヒナギク、澪、ジーニアスと真面目軍団だった。これなら静かに実習ができる・・・と思っていた矢先。
「ほーこりゃスゲー。土方の奴がたくさんいるわ。」
「誰が微生物だ？」
「ありぃ？ここに誰かいるんですかィ？肉眼では見えないなー。」
こう言いながら沖田は土方の足を踏んだり蹴ったりやりたい放題。
「このヤロォォォォォ！」
当然、怒った土方は顕微鏡を手に沖田に襲いかかった。
「こりゃおもしれー！」
「すごいなー！オラ感動したぞ！」
「かっけーアル！」
早朝早弁の会のバカどもが顕微鏡で遊び始めた。三バカは顕微鏡

についてあったレンズを抜きとり投げ始めた。投げたレンズは妙の後頭部に命中した。
「誰？私の頭に何か当てたの・・・てめぇぇぇぇかぁぁぁぁぁぁ！」
妙は観察中だったハヤテの後頭部をおもいっきり蹴った。
「ギャアアアアアアアア！」
「貴様！何をする、ハヤテは関係ないぞ！」
「知るかァァァァァ！」
妙とナギの壮絶な戦いが始まった。その一方で、バカの方の桂が勝手に変な事を始めていた。
「何やってんの桂君？」
新八はバカをやっている桂に聞いた。
「ああ、理科の実験ならこう言うのが一番絵になるかなって。」
右手にビーカーを持った桂が答えた。
「桂君、これは実習よ、実験ではないのよ。」
真面目な方の桂が言った。
「みーおーちゃん。」
クラスのムードメーカーの律が真面目にやっていた澪の所へ来た。
「何だ律？お前もしっかりと」
澪が目にしたのは律ではなく学校にある人体模型だった。ビビりな澪はそれを見た瞬間に気絶した。立ったままで。
「見てみてー、レンズマン！」
その一方で唯が顕微鏡のレンズを手にして遊んでいた。
「見て、巧ー、すごいわよー。」
「にゃあ・・・」
「ちょっと、千世！巧は関係ないでしょ！」
迷い猫の方もだんだんとうるさくなってきた。
「うるさいわねぇぇぇぇぇぇ！必殺、デスウィンク！」
イワンコフはウィンクをした。その後、衝撃でいろいろぶっ飛んだ。
「あああああ！」

その時、バカの方の桂が手にしていたビーカーが落ちた。その後・・・爆発した。

三時間目、体育。グラウンドに待っていたのは松平先生ではなく副担のスネーク先生だった。

「あれ？スネーク先生。どうしたんですか？」

「実は松平先生が突然嘔吐して病院へ運ばれたんだ。」

「へ・・・・・へー。」

「先生からはマラソンって伝えられているが今回はかくれんぼだ！」

スネーク先生がこういうと皆は喜んだ。

「これからチーム分けをする。鬼側、隠れる側。ルールは鬼が隠れる側を見つけたら追いかけるんだ。その時援軍を呼んでもいい。隠れる側はタッチされたら牢屋ゾーンへ行く。その時、まだ捕まってない隠れる側にタッチされたら。復活することができる。・・・これじゃあけいどろだ。まぁいいや。」

その後、じゃんけんでチーム分けをした。で、新八の所属するチームが決定した。西沢、ヒナギク、ヤムチャ、希、沖田、近藤、妙、クラウド、コレットなど個性的な面々だ。

「それでは三十秒後に始める。隠れる側はこの間にグラウンドのどこかに隠れる事。ちなみにダンボールは使用可能だ。」

カウントが始まった。近藤の提案でそれぞれ別の所で隠れることにした。新八は隅っこの方にしゃがんでいた。

「けいどろ、開始ィ！」

スネーク先生の声が轟いた。鬼があちらこちらに散らばった。その様子を新八は見ていた。数分後、

「くたばれ土方ァァァァ！」

沖田の叫び声が聞こえた。何だ？と新八は顔を上げ様子を見た。その様子とは沖田が土方にとび蹴りを放っていた。その後、土方が見つけたぞ！と叫び、周りの鬼が沖田の周囲を囲んだ。だが沖田も黙ってはいられない。辺りの鬼をマトリックス並みのアクションで

蹴り飛ばした。
「今だ！」
ハヤテは沖田に向かって走った。だが沖田はマトリックスの有名な弾丸をよけるシーンの真似でハヤテの体当たりを避けた。その後ハヤテの背中に蹴りをお見舞いした。
「なるほど、・・・いいセンスだ。」
言ってる場合か！反撃ありかよ！と新八は心の中でスネーク先生につっこんだ。と隣に何かの気配を感じた。隣にはクラウドがいた。
「・・・何やってんの？」
「・・・興味ないね。」
「いや、何でここに。」
「・・・君といると見つからないと思って。」
「あ・・・そう。」
新八は黙った。そんな中、爆発音がした。新八がその辺りを除くと爆心地にヤムチャがいた。もちろんあのポーズで。
「何でェェェぇェ！」
「ふん、素直に捕まらないからよ。」
ヤムチャの少し離れた所に御坂がいた。新八が少し呆れている所に何か聞こえた。その声は新八も知っている声だった。その瞬間、新八の中でもう一人の新八が目覚めた。
「うォォォォォ！お通ちゃーーーん！」
その声は新八の大ファンの寺門通だった。
「おい、新八！むやみに外に出て」
新八を止めようとしたクラウドにもある声が聞こえた。セフィロスとの戦いで命を落としたエリアスの声だった。
「エリアス！」
クラウドも外へ飛び出た。だが本当の声の主は初音ミクだった。
「新八君、クラウド君、捕まえた！」
一方、新八とは別の方の隅で。
「ハヤテ君が敵なんて・・・」

「歩、今はそれどころじゃないわよ。」
近くにあったラブダンボールに入っているヒナギクと西沢はこの状況を見ていた。牢屋ゾーンには戦闘不能のヤムチャ、今さっきミクに捕まった新八とクラウド。まだ半数以上の生徒が見つかってないもしくは捕まっていない。自爆行為に出た沖田は周りの鬼を全滅してからまたどこかへ身を隠した。
「今は身を隠すしかないわね。」
「うう～ハヤテく～ん。」
少しずつ移動しているヒナギクと西沢だった。

始まって約十分後、新八達の他にも捕まった生徒が集まった。空腹で動けない悟空、神楽、ルフィ。他クラスの授業のテニスをこっそり見ていてとっ捕まったエロコック、サンジ。座り込んで会話している唯と律。
「まだ、いるな。隠れている奴が。」
見張りをしている土方がつぶやいた。土方は警戒していた。このクラスでも運動神経が抜群であるヒナギクと希を。いつ、どこで、どのように現れるのかわ分からない。他にも天敵である沖田が襲ってくるかもしれない。とにかく土方は警戒をしていた。その時だった！
「土方、覚悟ォォォォ！」
上空から沖田が急襲してきた。土方はそれをよけ沖田をタッチしようとした。だがその隙に希が牢屋ゾーンにダッシュしてきたのだ。
「ちっ、遅すぎる！」
それでも土方は腕を伸ばし希を捕まえようとした。しかし、失敗に終わった。希のおかげで動けない人物以外は全員解放されたのだ。
「くそぉぉぉぉ！」
土方は叫んだ。そして、無言で立ち上がりポケットに入れてあったマヨネーズを飲みほした。そして近くにいた紬に見張りを任せ自らも戦場へ旅立った。

「レッツパァァァァァリィィィィィィィィ！」
土方の鬼のような攻めで次々と隠れる側を捕まえて行った。そして、牢屋ゾーンには大量の生徒が捕まっていた。
「おい、あと一人はどこだ！」
土方は同じチームのゾロに聞いた。
「しらねーよ。」
「くっ、どこにいるんだよ・・・」
とそこへ瞬間移動で黒子がやって来た。
「おい、どうだった。」
「駄目でしたわ。どこにも見当たりません。」
「くっ、もう一度さがしに行くぞ！」
土方の命令でもう一回探しに行くが結局見つからず時間切れとなった。
「くそ・・・」
「で？誰なの？最後の一人は。」
「あ、俺です。」
スネーク先生の近くにあったダンボールが動いた。中から山崎が現れた。
「おめぇぇぇぇかよぉぉぉぉぉぉぉ！」
土方のむなしい叫びが轟いた。まぁこの学院の授業はこんなもんです。

第1話：混沌って・・・何かワカメっぽい漢字だね（後書き）

感想よろしくお願いします。できれば銀魂×ハヤテのファンタジーも応援よろしくお願いします。

第2話：どこの学校にも七不思議はある

昼休み、風紀委員の集団が怪談話で盛り上がっていた。
「でさー・・・その女に言ったんだよ。何でこんな所にいるかって。・・・そしたらその女が・・・」
ゴクッ、誰かが生唾を飲む音がした。
「その女」
「マヨネーズが足りないんだけどォォォォォォォォォォォォ！」
ギャアアア

「そういえばロイド君は寮暮らしだったよね。」
「ああ。」
「じゃあまた明日。」
「ああ。またな。」
ロイドは学校に入った・・・と思ったら学校の方から悲鳴が聞こえた。
「何だ！」
ロイドと新八とシャナは悲鳴のあった方へと走って行った。そこにはうずくまっている一人の女生徒がいた。
「大丈夫か？なにがあった！」
「ゆ・・・幽霊・・・。」
「へ？」
「学校の方で幽霊が出たのよ！」
新八は少し戸惑った。幽霊なんているはずがない。だがその女生徒の目は真剣だった。
「まぁ、明日にも銀さんに伝えておくよ。」
「わ・・・わかった。」
女生徒は寮暮らしという訳でロイドが連れて行ってくれた。シャナもそのまま帰路につき、新八も自宅へと急いだ。
その夜中、文乃と巧が夜の学校にいた。文乃が忘れ物を取りに来たのだ。
「文乃、何で俺まで行かなきゃいけないんだ？」
「し・・・仕方ないじゃない。」
文乃は巧の腕につかまっている。巧が懐中電灯で廊下を照らしている。廊下はいかにも何かが出そうな気がした。で２Ｚ教室。文乃の忘れ物を回収し帰ろうとした。その時だった。何かの声が聞こえたのだ。
「う・・・嘘よ・・・」
「あ・・・・あああ」
アアアア

アアアア

「さぁ。」
その後、銀時が教室に入り朝のホームルームが始まった。
「いきなりだが、昨日幽霊騒動があった。いたずらした奴出て来い。」
と銀時はこう言った。で、一部の生徒から声が上がった。子供か？とかガキっぽいとか。
「・・・このクラスにはいねーみたいだな。じゃーこれで朝のホームルームは終了だ。」
銀時は教室から出て行った。その後、生徒達の話で幽霊の事が話題となった。
「知ってるアルか？この学校の七不思議。」
「しらねーなーどういうもんだ？」
「それはね・・・」
神楽がルフィに混沌学院七不思議を教えた。
・廊下に響く謎の音
・職員室の霊
・古の黒魔術師
・暗黒の魔物
・炎のランナー
などの内容であった。
「すげーなー！今度クラスの皆で肝試しやろーぜー！」
「いいアルね！」
その後、神楽とルフィはクラスの皆に肝試しの事を話した。で、その夜中。
「皆、集まったか？」
ルフィは声をかけた。参加するのは新八、神楽、ルフィ、チョッパー、ハヤテ、ナギ、悟空以上の面々だった。
「楽しみだなー。早く幽霊と戦いてぇよ。」
「悟空さん、変なこと言わないでくださいよ。」
「そそそそうだぞ！本当に来たらどうする！」

「大丈夫だよオラが倒すから！」
「ドキドキするなーこういうの初めてだもんなー。」
などと胸をはせるもの、ビビるくせに何で来たんだよという者が集まった。そんな中。
「あれー？皆も集まったんだー？」
向こう側から放課後ティータイムの面々が来た。
「律、おめーも肝試しか。」
「そうだよー。」
「わわわわわわ私はさん・・・参加しないって言ったのに・・・」
澪は涙目で訴えている。
「それじゃあ集まった事だし夜の」
「何だテメーら、夜の学校で何するつもりだー？」
銀時が迷い猫同好会とヒナギクを連れてやって来た。
「先生。それに文乃さんやヒナギクさん達までも。」
「幽霊騒ぎで風紀が乱れるとね。」
まあいろいろとあって２Ｚの面々は夜の学校に入り七不思議解明ツアーを始めた。まず最初に廊下に響く謎の音。
「謎の音って何だよ？」
「知りませんよ。」
そんな事を言いながら廊下を歩いていた。最初何もなかったが・・・のちのちにガタ・・・ガタ・・・と音が聞こえた。
「え？」
「マジ？」
「嘘？」
誰もが声を上げた。だがここで恐怖心もかけらもないルフィ、悟空、神楽が音が聞こえている教室に向かって行った。
「おいいいいい！先に進むなァァァァ！」
「呪われるよォォォ！」
「怖いよハヤテェェェ！」
「ぼぼぼぼぼ僕がお守りしますぅ！」

泣きわめく面々。そんな中。
「落ち着けテメーら。こんな時こそ冷静さを失っては駄目だろうが。」
銀時はこう言ったが足はかなり震えていて冷や汗もかなり出ていてそれに視線もあっちへ向いたりこっちへ向いたりしていた。
「先生・・・怖いんですか？」
唯が聞いた。
「ななななななななななななななわけねぇぇぇぇぇぇぇぇだろろろろろろ！」
銀時はかなり動揺していた。そんな中音がでかくなってきた。で、銀時は白目をむいて気絶した。
「せんせぇぇぇぇ！」
「おい大変だ澪も」
律は澪を指さした。澪も立ったまま気絶していた。
「最悪だァァァァァァ！」
新八とチョッパーとあと動ける面々が気絶した二人を背負いルフィ達の後を追った。
「遅いぞおい。」
「オラ腹減っちまったぞ。」
「びびって動けなくなったと思ったアル。」
バカ三人組が音が発している教室の前で待っていてくれた。
「いいか、1，2の、3であけるからな。」
「はい。」
銀時は教室のドアを手にし息を吸った。
「1、」
「2の」
「さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
勢いよく教室の扉を開けた！そこにいた人物が目にした光景とは！
「お妙さーん」
とある男子生徒が椅子に頬ずりをしていた。もう台詞で分かるだ

ろう。風紀委員長、近藤だった。
「お妙さーん。んふふっ、んふふっ」
「何してんの？」
新八が変なものを見る目でバカゴリラを見つめた。
「ししししし・・・新八君？あれ？皆ァ！なんでここに？」
「七不思議解明ツアーやってるの。」
顔色一つ変えないで唯が言った。
「オメーは何やってんだ？」
「あ・・あの・・・えと・・・・その・・・アレです！アレアレ！」
「そうか・・・アレなのね・・・」
文乃は近くにあった椅子を手にした。
「私はあんなのにびびってたのね・・・・」
近藤は察した。文乃から発する怒りのオーラを。
「二回・・・」
「あわわわわ、ちょっと待て！そんなことしちゃ」
「死ねェェェ

職員室からは泣き声が聞こえていた。
「・・・開けるぞー。」
銀時は普通にドアを開けた。で、目にしたのは。
「うううううう」
「何やってんの服部君。」
そこには銀時の同僚の服部が自分の尻に座薬を入れていたのだ。
「あ、銀時先生。どうしたんですか？アンタも痔か？」
「んなわけねーだろ、何やってんだよこんな遅くに。」
「いやーねー見ての通りだよ。俺さぁ家族に痔の事内緒にしてんだよ。隠れて座薬入れるとこさー見られたくねーンだよ。だから学校でねぇ。」
「そうかそうか。」
無表情の銀時は痔野郎に近づき怒りの表情で乗っている椅子を蹴りとばした。
「あああああああああ！」
職員室の椅子は回転式なので回る回る。で壁に激突し服部は目を回したがそれでも立った。だがその時を待っていたように他の面々が痔野郎に襲いかかった。そして。
「これで終いだァァァァァ！」
ナギは近くにあった新品のチョークを尻に向かって投げた。投げたチョークは全て尻の穴に入った。
「ギャァァァァァ

銀時は扉を開けた。目にしたものは・・・土方が何かを作っていた。
「土方ァ何作ってんだァ？」
「新種のマヨです。」
「・・・・・あ、そ。」
そのまま皆は教室を出て行った。

「・・・・・次・・・・」
「暗黒の魔物アル・・・・・」
「どこにいるんだ？」
「化粧室アル。」
やる気が無い集団が化粧室へ向かった。
「・・・開けるぞ。」
銀時が聞いた。で皆は無言で首を縦に振った。銀時は扉を開いた。だが目にしたものはとんでもなく酷い・・・文字にあらわせないくらい顔の者が立っていた。
「アアアア

新八が目にしたのは立ったまま気絶している銀時と澪だった。

「はぁ・・・はぁ・・・今のは心臓に悪い・・・」

「そうだったアルね。本当にこの世のものではないネ。」

まだ恐怖のスッピンを見て心臓がバクバク鳴っている。

「つ・・・次は」

「炎のランナーアル。」

銀時達はグラウンドにある巨大な木に炎らしき明かりを見つけた。でそこへ行ってみると・・・。

「何やってんの？」

銀時はその人物に聞いた。その人物とは沖田だった。右手には小さいハンマー、左手には釘を持っていた。で木には土方の写真があり釘に打ちづけられていた。

「土方を呪おうと日々努力してんです。」

「・・・へー。」

「いまから盛り上がるところなんで邪魔しないでください。」

「そうか、悪かったな。」

銀時達はその場を離れた。

その後、他に余った不思議を解明したがとんでもなくつまらない事実だった。

「・・・これで終わりか・・・」

「・・・何も言えないアル・・・」

「・・・これで解散するか。」

そして皆はそれぞれの家に帰って行った。だが、幽霊騒動は終わらなかった。

この学院には寮がある。男子寮と女子寮である、２Ｚにも何人か寮で暮らしている生徒がいる。近藤、土方、沖田、山崎、ロイド、コレット、エミル、マルタなどである。何故今こんな事を書くとい

うと、あのしょぼい七不思議解明ツアーの帰り、新八はあの幽霊騒動を思い返していた。あの女生徒の言ってた幽霊って・・・何だ？

翌日。

「見たんだよ、本当に！男子寮のベランダにいたんだよ！」

エミルが騒いでいた。

「俺も見た！遠くだけど何かがいた！」

などと他の生徒も目撃情報を言った。昨日の七不思議解明ツアーでいろんな意味で疲れている新八にはもうどうでもいいと思っていた。

「夜の学校は楽しかったぞ・・・怖かったけどハヤテが全力で守ってくれた。」

「いいなー、ナギちゃんいいなー。」

ナギは昨日の事を恋のライバルの西沢に話していた。新八はため息をついた。

「カカロット、貴様見たか？幽霊を。」

「・・・あの七不思議の真実か？」

「そんなものではない。男子寮に出てくるらしい。」

「あ、そ。」

「・・・貴様がこんなにやる気が無いとは・・・珍しいな。」

「はぁ・・・」

「・・・邪魔したな。そろそろ朝のホームルームだから戻るぞ。」

ベジータは自分の教室に戻って行った。今の新八には男子寮の幽霊なんてどうでもよかった。あの事件が発生するまでは。

数日後、校内ニュースでこんな記事が書かれていた。

『謎の幽霊か？行方不明者続出！』

『幽霊騒動、昨日も生徒Ａさんが・・・』

新八はこの記事を見てギョッとした。その後、ダッシュで職員室へ向かったが会議中だった。数分後、会議が終わったのを見て新八は幽霊騒動の事で銀時に相談しようとした。

「先生！今日の新聞」
「見たよ。このことじゃ上も困ってやがる。」
「どうすれば・・・」
「記事をしっかり見たか？」
「へ？いいえ。」
「昨日は女子寮で起こったんだよ。」
「へー。」
「だから今夜も女子寮で起こるかもしれねぇ。」
「はぁ・・・で。」
「放課後、頼りになるメンバーを連れて俺んとこ来い。なるべく寮暮らしな。」
　放課後、新八は頼りになる生徒、土方、沖田、近藤、ロイド、御坂の五人を連れて銀時の元へ来た。
「先生。連れてきました。」
「おう、早速だが悪ィが今日は女子寮に潜入する。」
「な・・・何だってェェェ！」
「別にいやらしい事をしに行くんじゃねぇ。幽霊退治だ。」
「どうやるんですか？」
「そこは手を打ってある。来い！」
　銀時が誰かを呼んだ。そして銀時の所に一人の少女、２Ｂクラスの伊澄が来た。
「別クラスの伊澄さん。」
「この幽霊騒動がここまで大きくなってしまうとは私も予想外です。被害者が増える前に退治しましょう。」
「ああ。だがどうやって女子寮に乗り込むんだ？」
「それについてはプロを呼んである。」
　プロ？誰もがそう思った。その時だった。銀時の近くのダンボールからスネーク先生が現れた。
「待たせたな！」
「いや別に。・・・プロってこの人ですか？」

「ああ。」
大丈夫かな・・・新八は多少不安になった。

その夜。女子寮に不審な段ボールがあった。この中にスネーク、銀時、新八、近藤、沖田、土方、ロイドが入っている。
（大丈夫ですか？こんな潜入方法で。）
（大丈夫だ！俺も何回かダンボールに助けられた！）
（そうかな・・・）
とここで焦げ臭い匂いがした。土方の段ボールが燃えていた。
「のわぁぁぁぁぁ！何でだァァァァ！」
「ちっ、気付かれたか。」
「何やってんだてめェェェェ！」
土方の後ろで土方がかぶっているダンボールを燃やそうとした沖田に土方が間一髪気付き沖田に襲いかかった。だがそのせいで女生徒達にばれてしまった。
「！」（あの効果音付きで）
「・・・先生、何やってんですか？」
「え？」
「伊澄さんが入室許可しましたよ。幽霊退治のためにって。」
「・・・・・・・意味ねェェェェェェ！」
新八はシャウトした。

数分後、上から悲鳴が聞こえた。
「なっ！行くぞ！」
銀時達は急いで階段を駆け上った。そして屋上。そこには泉を抱えた男が立っていた。
「ゆ・・・幽霊！」
「いや違う、あいつには足がある！」
「何もんだテメェ！」
「ふふふふ・・・・私は・・・」

男は自分の正体を現した！
「変態紳士、クマ吉！」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
まさかの変態という名の紳士の登場に銀時達は無言となった。
「おーい、うさみちゃん呼んでこーい。それか警察。」
「あ、ちょっとやめて！呼ばないで！お願いだかから。」
「うるせー性犯罪者。」
「なぁトシ、携帯あるか？」
「ああ。」
土方は警察に電話した。
「ああ・・・でもこのスーパークマ吉は捕まらない！なぜなら変態という名の紳士」
「オラァ！」
銀時は近くにあった棒っきれを変態に向かって投げた。
「ぐふぅ！」
変態は泉を離しそのまま地上へと落ちて行った。
「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
「終わったな。」
その後、変態は拉致、誘拐で捕まった。おまけに窃盗などの疑いで。なお、彼が捕えていた少女達は無事解放した。
「結局こんなオチかよ。」
「いいんじゃないんですか？」
とこんな会話をした銀時と新八だった。

第2話：どこの学校にも七不思議はある（後書き）

感想などお待ちしていまーす。

第3話：意外なところで知ってる奴と会うと多少気まずい（前書き）

注意！この話では多少キャラ崩壊が含まれております。苦手な人は戻ってください。覚悟がある人は読んでください。

第3話：意外なところで知ってる奴と会うと多少気まずい

風紀委員。混沌学院の平和と秩序を守るために生まれた組織。その活動の評価は高い。今回は彼らの話をしよう。

「じゃあよろしくお願いします。」

近藤はとある話をしていた。そこに丁度黒子がやって来た。

「なんですの？今の方々。」

「ブシテレビだ。今度俺達の活動をメインに番組を作るようだ。」

「えええええ！そうですの！いつ？」

「慌てるな。後で皆に伝える。」

その後、風紀委員の会合で近藤は今の事を伝えた。歓喜の声が上がった。

「すごいな！服はどうしよう！」

「おしゃれしないと。」

「待て待て待て、今回はありのままの俺達を撮るんだ。派手にオシャレとかしないでいい。」

はーい。と声が上がった。何事もなかったらいいんだけど。と近藤は思った。

会合が終わった後。

「なぁ・・・ハヤテ、土曜あいてるか？」

「ええ。」

「今日さ、商店街のくじ引きで『ドリームランド』のチケットを二枚もらったんだけど・・・一緒に行ってくれるか？」

「いいですよ。」

ナギがハヤテにデートを申し込みＯＫをもらった。後ちなみに彼らも風紀委員である。

翌日、風紀委員の取材が始まった。

「おい、そこの穴あきやろー」
「ああん？」
沖田は一人の不良に話しかけた。
「おもいっきり校則破ってんじゃねーかー。」
「ああん？テメーらに関係あるかよ？」
「直せ。」
「ヤダ。」
「でねーと。」
沖田はバズーカを取り出した。
「撃つ。」
「へっ、所詮は脅しだろ？こんなんで俺は」
ドカーーーーーーーン！
「何やってんのアンタ！」
この時、沖田とコンビを組んでいた御坂が怒った。
「仕方ねぇよ、こうするしかなかったんだ。」
と御坂の肩をたたく沖田。少しして御坂は自分の手にバズーカがあるという事に気付いた。
「何やってんだよ御坂。」
冷や汗を思いっきりかいて他人ごとを言う沖田。
「ちょ！やったのアンタでしょ！」
「誰かァァァァァ！御坂がおかしくなったー！殺されるゥゥゥゥ！」
「レールガン撃つわよ！」
こんな中でもカメラは回っていた。

「おいヒナギク、後ろの奴は何だ？」
「ナギ、今日は取材よ。この前の会合で言ってたわよ。」
「そうだったな。」
「何もありませんように・・・」
ハヤテ、ナギ、ヒナギクの三人は繁華街へパトロールへ行った。
何故繁華街かというと１８歳未満のくせしてこんな所行くバカがい

るのだ。そういう奴をとっ捕まえて補導するという事だ。で、案の定スナックの前に一人の男がいた。
「あれって・・・」
「うちの学生服・・・」
「はぁ・・・ちょっとすみません。」
「ああん？」
「何でこんな所で。」
「うるせーな！競馬で負けたんだよ！飲むしかねーよ！」
「学生がここにいては」
「黙れつるぺた女ァ！」
その言葉にナギとヒナギクが反応した。
「ちょっと来なさい。」
その後、ナギとヒナギクはその学生を連れ路地裏に行った。で、その直後にあの学生の悲鳴が聞こえた。

「今回は会合の場面を撮ります。準備はいいですか？」
「いいぜ。」
風紀委員の担当である松平が言った。
「・・・てめーら集まったか。今回は明日の重大な任務の事を言う。」
「重大な任務・・・」
「こっからは自由参加だ。命が欲しい奴は帰れ。」
「すみません。明日は用事が。」
と言ってハヤテとナギは帰った。そしてなぜか土方も。
「・・・残ったのはオメーらか。」
そこには近藤、沖田、ヒナギク、御坂、黒子がいた。
「いいメンツだ。・・・今から明日の重大任務の事を言う・・・ついに奴が動く。」
「それは本当かい？とっつあん。」
「ああ、明日は命懸けだ。皆の命を俺に預けてくれ。」

「わかった。皆、こっちへ。」
この場にいる風紀委員は集まって円陣を組んだ。
「明日は何が何でも成功する！エイ、エイ、」
「オー！」
「で、奴って誰？」
「知るかァァァァァ！」

数分後、ハヤテはネット喫茶にいた。土曜のナギとのデートに関する事だった。彼はデートを一度もした事が無い。なのでチャットを使いあらゆる人にアドバイスしてもらおうと考えた。周りには役に立つ人物がいないのだ。
「えーと・・ハンドネームは・・・『通りすがりの執事』・・・と。」
ハヤテはそのまま文章を書いた。
し『突然でスミマセンが誰かデートをする時の態度とか相手の女の子にどうすすればいいのか教えてくれませんか？明日が初デートなのです。』
その後、『フルーツポンチ侍』という人物からすぐに返信が来た。
フ『デートする時の態度？どう接すればいいか？そんな事は自分自身で考えろ！』
ハヤテは少しひいた。何でこの人怒ってるんだ？
し『すみません。本当に困っています。出来れば何かアドバイスか何かくれませんか？フルーツポンチ侍さん？』
で、その後の返信が。
フ『フルーツポンチ侍ではない、桂だ。』
ハヤテは思わず頭にパソコンを突っ込んでしまった。思いっきり知ってる人だからだ。
フ『切腹しろ、切腹しろ、切腹しろ・・・』
ハヤテは少し馬鹿桂に殺意を持った。何で切腹しなくちゃいけないんだ？ここで『美しき天使』という人物が入って来た。

美『皆、相手は困ってるのよ。少しは真面目に考えたら？』
　ハヤテは少しうれしかった。優しくしてくれる人がいたからだ。
美『今度私が女の事教えてあげるわ。どう？今度オフで合わない？』
　ハヤテは少しひいた。いきなり誘ってくるからだ。ちなみに『美しき天使』の正体はマダオであった。そこに『フルーツチンポ侍』が入って来た。
チ『いつ会います？』
　ハヤテは心の中でこのバカ引っかかった！と叫んだ。
美『嘘じゃボケェェェ！テメーは一生エロサイトで××してろぉ！』
フ『切腹しろ・・・・・』
　ハヤテは思った。駄目だこりゃァァァァ！そんな中。『光』と言う人物が入って来た。
光『えーと・・・明日恋する彼とデートすることとなりました。誰かアドバイスか何かくれませんか？』
　ハヤテは自分と同じ悩みを持ってる人がいるなと思った。で次のような事を書いた。
し『光さんも明日デートなんですか？僕もなんです。』
光『執事さんもですか？どうやら私達同じ悩みを持っているようですね。』
し『そうですね。ここでどうするか話し合います？バカどもは置いといて。』
光『ここより現実で話し合った方がいいですね。今夜7時〇〇ビルの5階のレストランで話し合います？私はこう見ても大富豪なので私がおごります。』
し『いいんですか？』
光『ええ、今から予約しますので』
　数分後。
光『予約が取れました。Bの21番です。では今夜お待ちしています。』
　そして『光』はログアウトした。

「光さんも同じ悩みを抱えてるんだ。何かいい情報が手に入るかも。」

ハヤテは喫茶から出て行った。でその後のチャット世界では『かわいい萌え猫』という人物が入って来た。

猫『みなさーん、大切なお知らせがありまーす！これから午前０時までに巧さんと文乃さんはバカップルという記事を１００件書かないと○ウル○サエ○ィの死神が○解状態であなたを殺しまーす！実際私のクラスの□□という奴がこの記事を見たら翌日首なし死体で見つかりました！よろしくお願いしまーす！』

というものだった。ちなみにこれを書いたのは夏帆である。こんなものに引っかかるバカは・・・・

「マジでかァァァァァァァァァァ！」

「マジでかァァァァァァァァァァ！」

いた。桂と近藤であった。

バカの事はほっといて○○レストラン。ハヤテは店員にＢの２１と伝えるとそこに案内してくれた。そこにいた人物、『光』の正体とは・・・

「お・・・お嬢様！」

「ハ・・・ハヤテ！何で・・・」

その正体とはナギだった。どうやらナギも明日のデートで誰かに相談をしてもらおうとチャットの人々に相談したのだ。

「まさかハヤテもそうやって相談を・・・」

「こんな偶然があるんですね。」

「そうだな・・・これはデートの前夜祭だな。」

「そうですね。」

二人はグラスにオレンジジュースをいれ、乾杯をした。

ここで話を今朝に戻す。土方が自分の下駄箱を開けるとそこには手紙が入っていた。そこにはこう書かれていた。

『拝啓、土方様。私は1年×組の松平栗子と申します。以前からあなたの事を想っていました。そこにドリームランドのチケットがあります。勝手で済みませんが明日、暇なら私と少し付き合って下さい。　好きな人のためならマヨネーズの海にもダイブする栗子』
土方はマヨネーズの海にダイブするという文を見た。相手の女の子は相当な覚悟をしている。付き合ってやるか・・・と土方は手紙をバックにしまった。

翌日。ドリームランドにて風紀委員は集まった。
「そういえば今日のニュースで政府のお偉いさんの徳川茂茂が来るって。」
「まさかとっつあん・・・」
ここにいる全員は思った。重要な任務はこれだって・・・
「政府のお偉いさん？知るかそんなの。」
「え？だって。」
「そんなやつより大事なもんだよ。」
え？何？何だ？と誰もが思った。で、後ろからはかわいい女の子と土方が現れた。
「まさか土方がうちの栗子と・・・おいヒナギク、おめぇちょっと台になれ。」
「ちょっと待てェェェェェェ！」
ここでヒナギク、御坂、黒子がつっこんだ。
「何？奴って娘の彼氏ってか土方さん？」
「そうだ。成功報酬はチロルチョコを3個ずつやるからな。」
「いるかァァァァァァ！」
「いいですぜぇ。」
土方を殺す気マンマンの沖田。で、他の人は・・・
「とっつあん、俺は帰るぞ。」
「ああ。」
呆れて近藤は帰って行った。同じく呆れたヒナギクも帰って行っ

た。
「御坂ァ、黒子ォ、おめぇらはどうするんだ？殺し屋同盟に入るか？」
「誰が入るかァァァァァ！」
一方その頃。
「ハムスターが役に立つとは思ってなかったわー。」
「でもいいじゃん。皆でネズミーランドに行けるんだから。」
入り口には２Ｚの面々がいた。そこに帰ろうとした近藤とヒナギクが合流した。
「あり？皆。どうしてここにいるんだ？」
「ハムスターがクラス分のチケットを当てたんだよ。」
「すごい！何この偶然！」
「ゴリラはどうしてここにいるんだ？」
「ああ・・・」
近藤はいきさつを皆に話した。
「化粧してくれれば良かったアルね。」
などと言ってる奴がいろいろいた。
「まー今日は楽しもうや。滅多にねーぞこういう機会。」
「そーですね。じゃー遊ぼ」
西沢が言おうとした瞬間。彼女の眼には腕組をしているハヤテとナギを見かけた。その光景はヒナギクも見た。で、ライフルを取り出した。
「・・・・先生。いまからシューティングしますので台になってくれます？」
「ちょっと待てェェェェェェ！」
ここでナギを射殺する気マンマンの西沢とヒナギクに銀時と新八はつっこんだ。
「何考えてやがる！バカか？バカなんですかァァァァ！」
「バカじゃありません。ただ許せないだけです。」
「銀さん。この人達はバカじゃありません。病んでいます。」

「これがヤンデレっつーのか。オラ始めて見たぞ。」
「ヒナさん！追いますよ！」
「了解！」
と言った後ヒナとハムはどっかへ行ってしまった。
「あーもう！俺らはあのバカヤンデレを追うから皆は楽しんでろ！」
はーーーーい！と他のメンバーはどっかいってしまった。新八、神楽、近藤、ルフィ、悟空、放課後ティータイム以外は。
「何だオメーら？俺をアシストしてくれるのか？」
「ええ。何かあったら大変ですからね。」
「普通の遊園地より面白そうかも！」
「いや、洒落に何ないかもしれないよ。楽しむんじゃねーよ。」
「よし！今日はハヤテとナギの護衛！そしてあのバカヤンデレの処理！これを目標とする！行くぞ、ついて来い！」
ラジャーーーーーーーー！この場にいた２Ｚの面々は叫びヒナとハムの後を追った。

一方その頃、メリーゴーランドにて。
「ちくしょー全然距離が縮まらねー。」
メリーゴーランドに乗ってライフルを構える松平と沖田。
「当たり前でしょ！永遠と回り続けるのよ！距離が変わるわけないでしょ！」
「くそ・・・奴ら考えましたね。」
「考えてはいないんじゃないの？」
メリーゴーランドの時間が終わりまた二人はどこかへ行った。
「すまんが少しトイレ。腹がいてぇ。」
「俺もでぃ。」
松平と沖田はトイレへ行った。
「・・・やな予感がしますわ。」
「ええ。」
とりあえず御坂と黒子は土方達の後をこっそりと追った。

一方銀時チームは・・・
「あーもう！狙いにくい！」
「止まれよこのカップ！」
コーヒーカップに激怒しているヒナとハムに銀時が言った。
「バカかオメーら？ハヤテの事を想いすぎてバカになったか。」
「止まれ、止まれよォォォォォ！」
ヒナギクの言葉むなしくコーヒーカップは回る回る。で・・・
「いまだ、ショットチャンス！」
西沢はライフルの引き金を引いてしまった。弾はハヤテとナギをおもいっきり外し、ある人物をかすめた。その人物とは・・・
（将軍かよォォォォォォォォ！）
偶然にもコーヒーカップに乗っていた徳川茂茂だった。

「土方殿。私アレみたいですぅ。」
栗子が指さしたのはヒーローショーだった。少しひいたがたまにはいいかと思い会場に入って行った。会場は親子連れが多かった。今回やるショーは長年テレビで大人気の戦隊もの、『カラー戦隊イロレンジャー』だった。その会場にハヤテとナギ、それに将軍までいる。こうなればまた事件が起こるであろう・・・。
「あれ？先生。」
黒子はここで銀時達を発見した。
「黒子、どうしたんだ？御坂とデートか？」
「んなわけないでしょう！松平先生と沖田が何かやらかさないか監視しているんです！」
「とっつあんの監視って・・・いないじゃん。」
「・・・今は土方さんの護衛ですけど。」
御坂は土方の方へ指を向けた。で、黒子は事情を説明した。
「何ィ！あいつがデデデデッ・・・デートォ！」
「はい。相手が松平先生の娘でそれで抹殺しようと。」

「んだよ。こっちも同じような状況かよ。俺らもよーナギを射殺しようとヒナとハムがバカになっちまってよー。それで監視だ。」
「そうですか・・・・」
ここでブザーが鳴った。しばらくしてド派手なＢＧＭが流れた。
「自然の色、ミドリグリーン！」
「神秘の色、アオブルー！」
「大地の色、キイロイエロー！」
「愛の色、モモピンク！」
「そして情熱の色！アカレッド！」
「我ら、イロレンジャー！」
人気の戦隊が出てきて子供たちのテンションはＭＡＸに達した。神楽とルフィも口を開けて喜んでいる。で、何か長い話をした後にスピーカーから声が聞こえた。
『フフフフ・・・無駄な事をするな・・・イロレンジャー』
「誰だ！まさかヒキョウ団！」
レッドが叫び後ろから黒装束をまとった人物が出てきた。で、その人物は黒装束を脱ぎ捨てた。
「ええええええええええ！」
この場にいた銀時、御坂はもちろん、土方や黒子まで驚いていた。その人物とは・・・さっきトイレに行ったはずの松平と沖田だった。
「何やってんだあのバカ共はァァァァァ！」
銀時は叫んだ。だが彼を無視して松平は続けた。
「はいぃぃ、ここで会場のバカから一人人質にするぅ。」
「あの・・・誰ですか？勝手な事は止めてください。ヒキョウ団は」
レッドの人が言った。だが沖田はレッドにアッパーカットを入れた。そのはずみでレッドの仮面が取れ、正体が明かされた。その正体は長谷川、マダオだった。
「オメーも何やってんだァァァァ！バイトかァァァァァ！ってか子供の夢をぶっ壊したァァァァ！」
とまぁ色々な事が起こり、銀時は一気にツッコミを入れた。

「はぃ、じゃあそこの彼女といる黒髪ィ。オメーが人質だァ。」
松平は土方を指名した。
「俺かぁ？ったく冗談じゃ」
土方が愚痴を言ったところだった。沖田はバズーカを発射したのだ。
「オィィィ！何してんだァァァ！」
土方は怒った。
「お嬢様！ここにいては危険です！」
「そうだな！」
ハヤテとナギはここから去って行った。
「ヒナさん！逃げるよ！」
「決まってるじゃない！追うわよ！」
彼らの後を追うようにヒナとハムも彼らを追って行ってしまった。
「オメーらァァ！あのバカ共を追ってくれ！俺はこの状況を何とかしたら行くから！」
「わかった！」
新八達も出てって行った。よく見ると他の子供達も逃げている。
「おいおいおい、早くしないと死ぬぞ。」
「あああああああああああ！」
ドコーン！バコーン！チュドーン！と辺りはもう大惨事。
「逃げ場はない！死ねェェェェ！」
沖田にバズーカを発射させる松平。だが土方は間一髪でよけたがとある人物にバズーカの弾は命中してしまった。その人物とは・・・
（また将軍かよォォォォォォ！）
沖田のせいでアフロヘアーになってしまった徳川茂茂だった。
「とっつあん！もう弾がありません！」
「ちっ、敵さんもどっかへ行きやがった！」
「追いますか！」
「おうよ！」
「追うなァァァァァァァァァ！」

ここで銀時、御坂、黒子はバカ二人の顔面を床にたたきつけた。
「銀時ィ！テメ―何すんだァァァ！」
「こっちのセリフだ！あんたこそ何やってんだ！子供の夢を壊すんじゃねーよ！」
「知るかァァァ！こっちは子供の夢を壊してまであの土方を抹殺しようと頑張ってんだぞ！それをお前」
「黙れ！この犯罪者ァァァァァ！」
「あの～。」
ここでレッドだったマダオが言った。
「今日はもう中止ですので、早くここから出てって下さい。」
「あ・・・ああ。」
というわけで、場所を移した後銀時は松平と沖田を縄で縛り御坂に渡した。
「こいつらをどっかに放置しておけ。俺はまだヒナギクと西沢の事があるから・・・」
「はい。」
ちくしょー！離せー！などと後ろから言っていたが無視して銀時は新八達を探そうとした。その時だった、携帯が鳴ったのだ相手は新八。
「どーしたー？」
『銀さん！大変です！ヒナさん達が姿を消しました！』
銀時は顔を手にやった。
「わーった。俺もとっつあんの事が終わったからそっちへ向かう。どこだ？」
『場所はザ・ビューティフルワールドの所ですハヤテさんとナギちゃんはここで並んでいます。』
「ああ。今行く。オメーらは先にその何だかワールドだかに乗ってろ。」
『わかりました！』
その後電話は切れ銀時は御坂に言った。

「とっつあんの事頼むぜ。こっちも大変な事になってきやがった。」
「はい！」
銀時は走って去って行った。ちなみにヒキョウ団は沖田にS的な方法で縛られてしまい動けなかった。

ザ・ビューティフルワールドについた銀時。そこに紬と悟空がいた。
「オメーら、新八達は？」
「新八君達なら今さっき中に入りました。」
「そうか。悟空はどうだ？」
「今さっき飛んで辺りを調べたんだけど見つかんねーぞ。」
「ああ、そうか・・・どの辺であの二人は姿を消したんだ？」
「気が付いたらいつの間に。」
「はぁ、忍者かよ。・・・もしかしたら・・・あの中とか？」
銀時はビューティフルワールドを見た。
「すげーーーーー！」
「かっくいーーーーー！」
ルフィと神楽は目を輝かせていた。神秘的なイラストがあちらこちらにある。とても素晴らしい光景を見た二人はただただ感動するばかりであった。
「神楽ちゃん、ルフィ君、僕達の目的はハヤテ君とナギちゃんの」
「すげーーーーなーーーーー！」
「りっちゃん！回ってるよ！回ってるよ！」
「すごい景色だ。お妙さんと一緒に見たかったな。」
「おめーらァァァァ！しっかりとみはれェェェェ！どこからヒナとハムが来るかわからねぇだろうがァァァァァァ！」
新八が怒声をまちきらかした後だった。新八の視界にはライフルを構えているヒナギクの姿があった。
「いた！ルフィ君、あそこにヒナギクさんが！」
「わかった！いくぞ！ゴムゴムのライフルぅ！」

ルフィは手を伸ばし、ヒナギクに攻撃した。ヒナギクは悲鳴を上げながら水に落ちて行った。
「よし！後は西沢」
「あっ！そこに西沢が！」
澪が指をさした先には西沢がライフルを構えていた。
「俺に任せろ！ライフルぅ！」
ルフィはヒナギクと同じように西沢を攻撃し水に落とした。
「ふー・・・これでおしま」
新八が安心した矢先だった。船が揺れたのだ。
「ななな何だ！」
新八と澪が後ろを見たらびしょ濡れのヒナギクと西沢が立っていた。
「ギャアアアアアアア！」
「ヒィィィィィィィィ！」
「よくも・・・」
「邪魔してくれたわね・・・」
ビショビショに濡れながらも二人は新八を襲った。
「ナギをやる前にテメーをやってやるゥゥゥ！」
「あああああ！たっ・・・たっ・・・助けてェェェ！」
「待ってろ新八！澪！ゴムゴムの・・・」
ルフィは両手を後ろに伸ばした。
「バズーカァァァァァァ！」
ルフィの攻撃はヒナギクと西沢に当たり二人はそのまま天井を突き破り星となった。
「よし！」
「二人って・・・・あんなキャラだったんだ。」
新八はこう呟いた。

一方土方の方は。
「土方殿、私あれに乗りたいですぅ。」

「あれか・・・」
土方の目に映る光景は・・・観覧車。
「いいぜ。」
「ありがとうございますぅ。」
二人は観覧車へ向かった。

「ちくしょー！離しやがれェェェ！」
「誰か助けてェェェ！Sは打たれ弱いのォォ！ガラスの剣なのォォォォォ！」
ランドのどこかで縄をグルグルにきつく巻かれ身動きができない松平と沖田。二人は黒子の瞬間移動で連れてかれ訳の分からない場所に置いてかれた。
「くそーーー！あの女ァァァ！」
その時、沖田の目にある者が映った。
「土方さん。」
「何ィ！」
「どこに向かってんだァ？」
沖田が視線を土方達の目的地を移した。
「とっつあん、まずい。あいつら観覧車へ行くつもりだぜぃ。」
「へー。何でまずいんだ？」
「決まってるじゃないですか。あいつら、チューをするつもりでさぁ。」
「ななななななな何ィ！」
「観覧車はチューをするために作られたもんなんですからねぇ。」
「許せん・・・・許せん・・・・！ブルァァァァァァァァァァァァァ！」
松平は怒りの力で縄を切った。
「さすがとっつあん。」
「沖田ァ！ぐずぐずするなぁ！行くぞぉ！」
「おう！」
松平は走った。その途中携帯を使いある者に電話した。

「おい、俺だ！あれを使うぞ！」
『いいのか！あれを使ったら』
「俺が許可する！オメーは早く来い！」

「ハヤテ・・・観覧車へ行こうか・・・」
「いいですよ。」
二人のデートを見守り、そろそろ終わりの時間が近付いてきた。
「これで最後のアトラクションになるな。」
「そうですね。」
「色々あったけど楽しかったね！」
「おめーはな。」
銀時達はそう話していた。夕日が二人をやさしく包み込んでいた。

一方混沌学院の秘密基地。
「松平先生から連絡があった。あれを使うぞ、オタコン！」
「いいのかいスネーク？」
「俺は知らん！ただあの人が必要と言っていた。」
「そうか・・・でもあんまり目立たないでね。」
「わかってる。」
そこにルフィによって星にされたヒナギクと西沢が降って来た。
「おわぁぁ！」
「君達は２Ｚの・・・」
「スネーク先生・・・今から・・・ドリームランドに行くんですか？」
「ああ・・・今から行くとこだが・・・」
「早くして下さい。」
「だが俺のじゅん」
「は・や・く！」
二人は鬼のような形相でスネークを睨みつけた。その後、グラウンドが開き中からメタルギアが現れた。

「行くぞ！」
メタルギアはドリームランドへ飛んで行った。
「大丈夫かな・・・」
オタコンは呟いた。

「来たか。」
松平は呼び寄せたスネークを見つけた。
「先生！乗ってください。」
松平と沖田はメタルギアに乗り込み、目的を話した。
「娘のデートを邪魔したい？はぁ！こんなくだらないことでメタルギアを使わないでくださいよ！今から帰りま」
「いやいや言うならオメーは出てけェェェ！」
「ヌワァァァァァァ！」
松平にけっ飛ばされスネークは追いだされてしまった。
「大丈夫だ！俺が責任を持って返す！」
「おい！ちょっとォォォォォォ！」
スネークはただただ見るしかなかった。そこに銀時達が来た。
「スネーク先生。どうしてここへ？」
「ああ、銀時先生実は・・・・・」
スネークは今の事を話した。
「えええええええええええ！そんな事の為にィ！」
「ああ、で教え子のヒナギクと西沢もいる。」
「銀さんヤバいですよ。」
「ああ・・・・・使いたくなかったがあれを使うしかねーなー。」
と言い、銀時は携帯を取り出しある人物に電話をした。
「ああ。ありがとう。」
「誰ですか？」
「２Ｇの担任だ。」
「２Ｇ・・・ま・・・まさか！」
新八達はまたひと騒動あるなと確信した。

で、観覧車。ここには運命のいたずらか土方と栗子、ハヤテとナギが乗っている。
「いいのか、俺みたいなマヨラーで、とっつあんが怒るだろう。」
「それは承知です。自分の運命の人は自分で見つけたいのです。」
「・・・強い譲ちゃんだな・・・」
と会話していた土方組、ハヤテ組は・・・
「綺麗な夕日ですね。」
「そうだな・・・」
「ところであのチャットの最初の文章で恋するって書いてありましたよね、それって・・・」
その時だった。ズシーン、ズシーンと音がした。誰もが窓をのぞいたらそこにはメタルギアが立っていた。上には黒スーツでサングラスをかけた松平、沖田、ヒナギク、西沢がライフルを持って立っていた。
「チーム、殺し屋13・・・」
「参る！」
その直後、全員ライフルを構えた。
「ちょ、え？まさか・・・」
「おいおい・・・」
「発射ァ！」
松平が叫んだ瞬間だった。上空からビームが降って来たのだ。
「何だ何だぁ！」
上を見たらガンダムがこっちへやって来たのだ。そして後ろからZガンダム、ストライクフリーダム、インフニットジャスティスがやってきた。
『松平先生！こんなバカな事は止めてください！』
コクピットのキラが叫んだ。
「ふざけんなぁ！こんな程度で俺の邪魔をする気かぁ！」
殺し屋13はメタルギアに乗り込んだ。

「このレールガンでジャンクにしてやらァァァ！」
松平はレールガンのチャージを始めた。だが、その隙にガンダム達はビールライフルで撃ちまくりメタルギアは木端微塵となった。
「ぎゃあああああああああ！」
松平達の悲鳴が轟き叫ぶ。そんな中ハヤテ組は・・・
「・・・ハヤテこっちへ来い。」
ナギはハヤテを呼んだ。
「何ですかお嬢様。」
「顔を近付かせろ。」
「はい。」
ハヤテは自分の顔をナギに近付けた。そして、ハヤテにキスをした。
「・・・・！」
「恋でもしてないとこんなことしないぞ。」
「・・・・はぁ・・・」
「ハヤテ・・・これからの未来・・・ずっと・・・ずっと・・・ずうううっと私の隣にいてくれ・・・ずっと私を守ってくれ・・・」
「・・・・・分かりました・・・・お嬢様。」
こうして、数々の大騒動（ってか本人達は知らないが）を乗り越え今、1組のカップルが生まれた。ちなみに土方はまたデートしようねって言って終わった。

ちなみに風紀委員を取材していた人はもう封印するか・・・と言って帰って行った。この事は誰も知らない。・・・風紀委員の話じゃなかったね。

あと一つ。この後からハヤテとナギはバカップルになり、授業中でも問答無用でイチャイチャするようになった。あと数日の間、ヒナギクと西沢は元気が無く、何だか魂が抜けたような感じだったという。

第3話：意外なところで知ってる奴と会うと多少気まずい（後書き）

これでタグのハヤナギの意味が解明されました。二人はこれ以降こういうキャラでお願いします。

第４話：学校のプールってよく落ち葉とか入ってたよね（前書き）

多少下ネタとかエロネタが入っています。苦手な人は戻ってください。それでもいい人なら読んでってください。

第４話：学校のプールってよく落ち葉とか入ってたよね

夏のクソ熱い時期、２Ｚでは誰もだ暑さでだれていた。
「あ～～～～～熱い～～～～～。」
と言うような声があちこちで響いていた。そんな中誰もが楽しみにしていたのは体育のプールこの暑い教室としばらくおさらばして冷た～いプールにダイブでイヤッホォォォォ！と誰もが楽しみにしていた・・・一部の男達とは別に。一部の男達とは２Ｚのエロコック、サンジとストーカー風紀委員長近藤、そして二次元好きの家康、九兵衛の側近であるロフト好きの東城。このメンバーだった。
「じゃあこの次はプールっつーから今回は早めに終わる。遅れないでねー。」
と世界史教師の雪路がこう言って授業を終わらせ誰もが水泳バックを手にプールへ向かった。だがエロ軍団は違った。一つにまとまって何かを話していた。

「う～ん、今日もプール日和だなぁ。」
一足先に水着に着替えたスネーク先生が言った。
「あ、先生。」
「おう新八か。皆が早めに着替えたら俺も早めに始めるから。」
「はい・・・で、松平先生は？」
「今日は俺と松平先生で行う。何か理由があるが俺も知らない。」
「そうですか。」
新八はそう言うと男子着替え室に入り着替え始めた。新八のほかにも着替えている者が何人かいた。
「おらァァァァァァ！」
沖田がハヤテの腰につけてあるタオルをはぎ取った。
「ウワァァァァァァァァ！」
「へー、意外と大きいな。ハヤテのあれ。」

「な・・・何するんですかァァァ！」
よく着替えでやるような事をやっていた。
「あれ？近藤さんとサンジ達がいねーなー。」
土方は着替えながらつぶやいた。
「いつかくるよ。」
悠二は言った。だが、これから起こるハプニングを誰が予想できたか・・・・。

「女子更衣室・・・ンフフ・・・」
「近藤、俺達の計画はまだ始まってない。無駄な行動は止めろ。」
「ああ、すまない。」
男たちはそう言ってさきへ急いだ。

「よし、全員集まったな！」
スネークは言った。
「これから準備体操をする、ちゃんとやんないと足をつるぞ！あと、シャワーを浴びてないのにプールに入るなよ！」
「はーい！」
「じゃあ最初に屈伸だ！1，2・・・」
数分後、準備運動を終えシャワーを浴びついにプールへイン！と思ったら。
「ちょっとすまないがここで重大な事を言う。」
遅れて松平がとある人物を連れ現れた。なぜか銀時も一緒だ。
「ちょっとこの方が久しぶりにプールで訓練したいって言うからこの人も一緒に授業を受けてもらう。はい、じゃあ自己紹介して。」
と言って男は羽織っているマントを取った。男はブリーフ一丁だった。その顔は新八にも分かった。
「余は徳川茂茂、水着も下着ももっさりブリーフ派だ。」
(将軍かよォォォォォォォォォォォォ！)
その正体は前の話で遊園地で悲惨な目に会った将軍だった。

「はい、じゃあプールに入って！」
とスネークが言ったので誰もが飛び込んだ。
「ふう～気持ちいい～～」
「じゃあ次に向こう側へ泳いで！」
スネークの号令に合わせて皆は向こう側目指して泳いで行った。
「すごいな皆、こんなに早くつくなんて。」
「おいスネーク、お世辞はいい、時間の無駄だ。早速だがテメーら、今日の授業は特別ゲストがいるっつーからレクレーションだ。何かしたい競技はあるか？」
「ハイハイハイ！俺は水中騎馬戦がいいです！」
ここでサンジが返事をした。
「水中騎馬戦か・・・いいな。将軍もいるしそろそろサービスシーンが必要だ。今日は水中騎馬戦をする！」
女子からは非難の声が聞こえたが松平はそれを無視した。新八の心の中は不安でいっぱいだった。

チーム分けをし、試合が始まる。で、新八のパートナーは・・・
（将軍かよォォォォォォォ！）
新八の背に将軍が乗っている。
「新八ィィ、もし将軍に何かあったら終わりだからなァァァ！お前の人生がァァァ！」
「変なこと言わないでくださァァァァい！」
「それでは・・・始めぇ！」
試合が始まってしまった。
「あああああああ！どうすればいいんだァァァァ！」
「新八君と言ったか・・・このまま突っ込め。」
ええええええ！と新八は思った。自分たちのクラスは化け物並みの強さの者がわんさかいる。将軍をあの中に入れるんじゃあまるで１００人のヤンデレ言葉の中に誠をぶちこむようなものだ！
「うおォォォォォォ！」

ここでクラウド、ゾロ組が襲って来た。
「あああ！」
「やばいな・・・ここは私に任せろ！」
「え？」
茂茂は手を払った。そこから風が舞った。その後、上に乗ってたクラウドの海水パンツが風によって切り刻まれた。
「な・・・・何ィ！」
「まず一人。」
クラウドはそのまま倒れ、その後あれを隠しながらプールから出た。
「将軍強ェェェェェェ！」
「よし、このまま女子のポロリを拝むぞ！」
「・・・犯罪じゃ・・・」
新八が言っている途中で茂茂は風を起こし続けた。風は男子人の海水パンツを破きまくったが女子は異常な早さでよけて行った。
「くっ！しぶとい！」
「あの～下手したら僕とあなた・・・牢屋行きですよ。」
「ふん、あんな風に私達女子が負けると思った？スク水なめんなぁ！」
「いや、別にそんなこと言ってませんよ。」
「知るかァァァ！」
女子の軍団が新八組に襲いかかって来た。
「今だ！」
「てりゃァァァァァ！」
この時を待っていたかのようにサンジ、近藤、家康、東城が新八の前に現れた。
「フハハハハァ！女子ィ、新八君を倒したければ俺らを倒せえ！」
「フフフ・・・この私に敵うものかァァ！」
女子の一団がエロ軍団に襲って来た！
「行くぞ！ウオリャアアアアア！」

エロ男共は危険を介して禁断の楽園へと行った。だが男達のパラダイスタイムは数秒で終わった。
「今だ！オリャアアアア！」
茂茂は巨大な風を起こした。それは前方の女子たちを吹き飛ばした。だがポロリは無かった。代わりにエロ男のポロリがあった。
「おいぃぃぃ新八ィィィ！もう少し本気だせェェェ！」
「僕関係ないですよ。」
「将軍！頑張ってくれェェェ！」
「俺に性欲を持てあましてくれェェェ！」
「アンタら本当に教師？」
新八がつぶやいた。

で、終了のチャイムが鳴りシャワー浴び、更衣室に入るが・・・
「やっぱハヤテのあれ意外とでけーな。」
「わわわっ！沖田さん止めてください！」
「俺のと比べるとまだまだだな。」
「ルフィさんまで！」
「悠二も意外とあるな。」
「悟空止めてよ！」
完全に下ネタトークで盛り上がる男子。そんな中、
「澪って意外と胸あるわねー。」
「ちょっとやめてよ、ナミ。」
「吉田も結構あるネ。その乳、私によこせよ。」
「ちょ、神楽ちゃん見ないで。」
「いいなー、ナギちゃんはいつもハヤテ君のあれ見てるんでしょ？付き合ってるんだから。」
「バカかハムスター！まだそこまでいってなーい！」
女子の方から話が聞こえてきた。この話で男子達（一部除く）は赤くなった。だがそれが悲鳴に変わった。
「のぞきよー！」

「へんたーい！」
この声を聞いて男子達は驚いた。今時のぞきをするバカはいないと思ったからだ。

放課後、
「ではこれから女子更衣室を除いた変態どもを見つけようと思う。どうせ犯人は誰だっつっても正直に答えるわけねーから今から調べる。つーわけでサンジ、近藤、東城、家康。自白しろ。ってか自分の罪を認めろ。」
「ちょっと待てェェェ！」
ここでサンジが叫び声を開けた。
「俺らがやったっつー証拠はあるんですか！」
「アラバスタ編のラストのちょっと前のとこで女湯覗いてたろうが。」
「そんだけで犯人にされるんスか！」
「それと近藤、東城。銀魂組から二人も出るなんて俺ぁ悲しいぞ。」
「ちょっと待ってくれ先生！証拠はあるんスか！」
「そうです！もし違ってたらカーテンのシャーってなるとこ10年分おごってもらいますよ！」
「カーテンのシャー10年分っていくつだよ。お前らも3年Z組銀八先生第2巻で女湯覗いてたろうが。」
「先生、俺が二次元しか興味ないのは知ってますね。何でこの俺までこんな」
「家康、てめーもアニメ迷い猫オーバーランの4話で女湯覗こうとしたろうが。」
「ぐぅ・・・」
「それかロイドとエミル。おめーらもそうじゃねーか？『スケベ大魔王』の称号を持ってるんだし。」
「んな訳あるかァァァァァァァァ！」
「冗談だ。それより・・・・」

銀時はエロ男達への疑いの目を止めない。もちろん女子も男達へ疑いの視線をかけている。
「できりゃー俺もテメーらの事を信じたい。これでも教師だからな。けど真実っつーもんは1つしかねーンだよ。」
「どこの少年探偵ですか？」
新八がこう言った後、しばらくの沈黙が続いた。そしてこの沈黙を破った者がいた。
「この難事件、俺に任せておけ！」
一人の男子が立ち上がった。桂小太郎。バカの方の桂。狂乱の奇公子。ミスターカオス。
「ヅラぁ、オメーみてーなバカがこの事件とけるのか？」
「任せてください。」
ヅラはなぜか猫背で前に立った。
「どうも、Ｌです。」
「何がＬだ。デスノートの読み過ぎだ。」
「では第一発見者証言を言って下さい。」
桂は銀時を無視して第一発見者である澪に聞いた。
「はい。あれは私が隅っこの方で着替えてた時でした。やけに光る物があったので何かなーと思ったらカメラでした。その後何か声がしましたけど誰の声だかはっきりとしませんでした。」
「そうですか・・・」
「あの、」
ここで吉田が手を挙げた。
「どうぞ。」
「わたし、あの後廊下で何者かがやけに長いものを持って走ってるのを見ました。」
「フムフム・・・ではそれが異常に改造されたカメラのレンズ」
「それはちげーぞ。」
ここで悟空が不満げに手を挙げた。
「ありゃ購買部で数量限定で売られているスーパーハイパーアルテ

ィメットフランスパンの事だよ。今日のプールの帰りに買って行ったんだよ。」
「じゃあ私が見たのは・・・」
「オラのフランスパンだ。」
「うーん・・・これで事件は」
ここで風紀委員が入って来た。手には何かが覗いている。
「校舎裏に異様に改造されたカメラのレンズがありました！」
「本当にあったァァァァァ！」
銀時が中を除くとそれは2，3メートルほどの長さのカメラのレンズだった。
「どこで売ってんだ？こんなもん。」
呆れながら銀時は言った。
「他に証言がある人。」
し～ん。
「もういないみたいだな。」
「だがカメラのレンズを調べれば何とかなる！」
ここで桂は何かの粉と麺棒らしきものをバックから取り出した。
「これで指紋を調べる。」
慣れた手つきで桂は指紋を調べる。・・・・・だが、
「だめだ、指紋は見つからない。」
「まじかよ・・・」
誰もがそう思ったその時！また一人風紀委員が入って来た。
「先生！デジタルカメラを見つけました！」
「でかしたァ！」
銀時がデジタルカメラに保存されている写真データを調べた・・・
そして。
「ビンゴだ。こいつに盗撮された写真があった。今日の日付だ。」
「ぐぐぐ・・・」
ここで女子の怒りケージが１００％近くになった。
「おいおいおい、まだ怒り爆発するなよ。絶命奥義出すのは犯人だ

けにしろ。」
「で、指紋は？」
ここで桂がまた指紋を調べた。
「う～ん、これもだめか・・・」
「おいヅラ、このカメラに何か持ち主の手がかりとなる写真とかねーか？」
「まだです。」
銀時と桂が写真を調べ始めた。

まずい・・・本当にまずい・・・。
ここで冷や汗を流すのはサンジ。あのカメラはサンジの物だからだ。もちろんこの騒動の犯人はこのエロ男子どもである。もし見つかれば初代サムスピのごとく真っ二つ・・・いやサムスピ零の無修正版みたいに酷い目に会うのは分かっている。サンジは近藤、東城、家康とアイコントクトを取り相談をした。で、結果が出た。
「ぐあああああああああ！」
「ぐおおおおおおおおお！」
「ぐえええええええええ！」
「ぐうううううううう！」
四人はいきなり腹を押さえて苦しそうに悶えた。
「どうした？」
「い・・・いきなり腹がァァァァ！」
「で・・・出るぅ！」
「オイオイ、急だな。早くトイレ行って来い。」
「あ・・・ありがとうございますうぅぅぅ！」
変な格好で四人は出て行った。・・・もちろん腹痛は嘘。この間にとんずらしてしまおうという事だった。
「いいか・・・息をひそめて行くぞ。」
「ああ・・・だがどうやって学院から出れば・・・」
「あ。」

ここでサンジの目に映ったものはダンボール。
「アレかぶって行くぞ。」
「おう。」
四人は息をひそめ、スマートにダンボールを被り誰の目にも映らず学院から出た・・・はずだった。

「ぬおォォォォォォォォォォォォ！」
「どーしたんですかスネーク先生？」
翌日、グラウンドで雪路がむなしい悲鳴を上げているスネークに聞いた。
「俺の・・・俺のダンボールがァァァ！」
「・・・・・ダンボールが無いんですか？」
「そうだ！誰だ取ったのはァァァァァァ！」
「そんな大げさな。」
「何が大げさだ！俺にとっては大事なものだ！俺の魂なんだ！それを盗むとは・・・許さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
スネークは怒りを爆発していた。

「結局犯人は見つからなかったなー。」
「でも今日もやるみてーだぞ。犯人探し。」
２Ｚの生徒達は昨日の話で盛り上がった。男子はよくあんなことするよなーとかばかじゃねーの？などと哀れみのコメントが多かったが女子はまだ怒りケージが１００％だった。
「はーいてめーらぁ席つけぇ。」
今日は珍しくは早めに銀時が現れた。
「今日は大事な話をする。昨日、スネーク先生の魂であるダンボールが何者かに盗まれたらしい。このことでスネーク先生はカンカンだ。これからこの調査とともに昨日の変態どもの捜索をする。」
で、ここで汗をかいているのは昨日ののぞき事件の犯人の４エロである。

「ん？どしたー、汗ぐっしょりかいて、気分でも悪いか？」
「は・・はい！そうです！」
「オイオイ、大丈夫か？保健室行って来い。」
「わ・・・分かりました！」
とここで４エロは教室を出て行った。
「おいやべーぞ、まさかこんなことになるなんて。」
「俺だって予想してねーよ。まさか昨日の段ボールか？」
「ああ・・・あれ・・・ドブ川に捨てちまったよな。」
「・・・・・・・ああ。」
４人はそのまま学院に出た。丁度その時間帯は体育をやって無くすんなりと学院を出れた・・・はずだった。

昼休み。
「ちょっと、おねーちゃーん。」
唯の妹である憂が２Ｚへ来た。
「どうしたの憂？」
「今日の一時間目におねーちゃんのクラスの人が校門を出てくのを見かけたんだけど。あと昨日、同じ人がダンボールを被って出て行ったんだけど・・・。」
憂の言葉に反応したのが丁度カードゲームで遊んでいた銀時とスネーク。
「ちょっといいか？そのことしっかりと話してくれ。」
「はい。」
憂は今日の事、そして昨日の事を話した。
「おいおいおい・・・あいつらの犯人フラグがもうピンピンじゃねーか。いや死亡フラグか。」
「奴ら・・・許さん！」
話を聞いた怒りのオーラ爆発のスネーク。とここで昨日のカメラをいじくっていたルフィが叫んだ。
「おいこれ、サンジの部屋じゃねーか？」

ルフィの言葉でクラス中がルフィの前に集まった。
「確かにこれはエロコックの部屋だ。」
「そうだな。」
「まさか・・・」
「ああ。犯人はサンジだな。」
「一緒に消えたゴリラと糸目と二次元オタクも怪しいアル・・・・」
ここで全員が確信した。犯人はあいつらだ。

放課後。
「大丈夫だよな。死なないよな。」
「大丈夫だ、俺は世界中のレディと仲良くなるまで死なない！」
「無理だろ。それだったら二次元に入れば？」
「ふざけるな！・・・それもいいかも・・・」
サンジが言った後上空で何かが通った。
「・・・ヘリか・・・」
「ん？・・・・おい・・・あれヘリじゃねーぞ！」
４人の目前に現れたのはヘリではなく戦闘機だった。
「ハァァァァァァァァァリヤァァァァァァァ！」
「貴様らァァァァァ！俺のダンボールを盗んだ罪、償ってもらうぞォォォォォ！」
乗っていたスネークがバルカン砲をぶっ放した。
「アアアアアアアアアアアアアア！」
「待てェェェェェェ！」
４人は全速力で逃げた！近くにあった壁に隠れて何とか目を免れた。
「ハァ・・ハァ・・これで・・・」
と安心したのもつかの間。後ろからサムスピのナコルルとリムルルのデュエット曲『心をつないで』の合唱が後ろから聞こえてきた。何事かと後ろを見たらナコルルとリムルルのコスをした２Ｚの女子が迫ってた

「あ・・・あのぉ・・・」
「え・・・え～っとぉ～・・・」
謝ろうとしたがあまりの恐ろしさで少しひいた。逃げようとしたらその後ろからハリヤーの音が聞こえた。とここでサンジは高笑いをした。
「いやーまいったまいった。まさかこうなるとはこの俺も予想がつかなかったよ。でもこの逃走劇。スリルがあって面白かったよ。また時間があったら相手をしよう」
「かっこつけんなぁぁぁぁぁぁぁ！」
２Ｚの女子とスネークはエロ男子どもに襲いかかった。この後の展開は・・・文字では表せないぐらいの悲惨さです。

第４話：学校のプールってよく落ち葉とか入ってたよね（後書き）

今回は今年（２０１０年）の９月にかいたものです。こんな寒い日にこんな話をしてすみませんでした。

あとこの話でサムスピをネタにしましたが知っているだけでやった事はありません。スーファミの奴を持っていましたがすぐ売りました。分からない人。すみませんでした。

第5話：ペットの世話はちゃんとやれ

『緊急放送です。皆さん、体育館の方へ行ってください。』
ある日の下校時刻、突然と緊急放送が流れた。一部の生徒は愚痴を言ってたが結局は2Z全員体育館へ移動した。少ししてヘルメットをかぶった校長のアテネが言った。
「皆さん！とんでもないくらいの緊急事態が起こりました！近くの動物園へ移動中のトラックが横転し中にいた動物が全て逃げてしまいました！この動物はとんでもなく凶暴なので皆さんは安全ができ次第下校ができます。」
凶暴な動物か・・・新八は思った。どうせライオンかトラだろ？と。しかし新八の予想は大きく外れることとなった。

「凶暴な動物かー、どんなんだ！」
ここで危機感ゼロのルフィが目を輝かせた。
「やめなさい、食べられたら元も子もないわよ。」
ナミがルフィにチョップを撃った。
「確かにな。でも試し斬りには最適だぜ。」
「アンタも何言ってんのよ！」
続けてナミはゾロにもチョップを撃った。
「皆さん落ち着きましょう。ハンターの人が何とか」
その時だった。グラウンドの方からとんでもないくらいの大きさの咆哮が聞こえた。誰もが窓の外をのぞいた。外にはティガレックスがいた。
「え？嘘？マジで？何で？」
新八は頭が混乱した。何でモンスターがいるんだ？何でこの学院に？と思っていたころだった。上空からリオレウスが現れたのだ。
「ギャアアアアアアアアアアアアアア！」
新八は腰を抜かしてしまった。

「かっくいー！」
ルフィはリオレウスに乗り込んだ。
「何やってんだあのバカ！」
教室にいた全員はルフィにツッコミを入れた。
「どうした？」
ここでレウス装備の銀時が教室に入って来た。
「何でレウス装備してんの？」
「仕方ねーじゃん。今からリアルハンティングだよ。あとそれと風紀委員の奴ら。とっつあんが呼んでるぞ。」
「はい。」
ハヤテ達風紀委員は松平の所へ行った。
「緊急事態だ。てめーら。今からこの装備に着替えて戦え。」
松平の指さした方向には古龍装備があった。
「何であるんですか！」
「細かい事は気にしない。」
ハヤテ達はしぶしぶと装備に着替えた。
「ハヤテーこれかわいいか？」
とナギはキリン装備をハヤテに見せた。
「似合いますよ。」
「おい、ファッションショーじゃねーンだぞ。真面目にやれ。」
土方は言ったが彼はマヨネーズの着ぐるみを着ていた。
「あんたこそ真面目にやれェェェェェ！」
「俺は真面目だ。」
いろいろあったが全員装備をしてグラウンドにいるティガレックスとの戦いとなった。
「へいへいへーい！こっちだ！×××がー！」
近藤が後ろの方から挑発をした。ティガはその言葉を聞いた後真っ先に近藤に向かって行った。
「あああああああああああ！」
「何やってんだあのアホ！」

「助けてェェェェ！」
誰もが走って向かうが間に合わない！もう駄目だ！と思ったその時だった。一閃の雷がティガレックスに命中したのだ。
「え？」
「ヒュウ。おもしれーことになってんじゃねーか。」
近藤が顔をあげたらそこには２Ｂの伊達正宗が立っていた。
「オィィィ！出しちゃったよ！ついにやっちゃったよ！」
「正宗殿！」
ここで後ろから真田幸村と前田慶次がやって来た。
「大丈夫か？」
「あ・・・ああ。」
幸村は座り込んでいる近藤を起こした。
「徳川殿！あれを頼む！」
と幸村は屋上にいた徳川家康に向かってに叫んだ。
「分かった・・・忠勝ーーー！」
家康（徳川）が叫んだら上空から巨大なロボットがやって来た。
「忠勝！あの魔物に攻撃だ！」
忠勝と呼ばれたロボットは右手に持っている武器をティガレックスの頭部にぶつけた。
「よし今だ！モンスターボール！」
慶次は袋からモンスターボールを取り出しティガレックスに向かって投げた。モンスターボールはティガレックスに命中し取り込んだ。しばらくは動いていたがやがて動かなくなった。
「よっしゃ！ティガレックス、ゲットだぜ！」
「待たんかィィィィィィ！」
ここで土方は叫んだ。
「何でアンタらがいるんだァァァァ！そして何だその捕獲方法、ポケモンかァァァァ！」
「いやーＧ組のウソップとフランキーにモンスターを捕まえるならこれた一番だって。」

「だからってこれは無いだろォォォォ！」
「おい、風紀委員さんよォ、まだお客さんがいるぜぇ。」
上空からリオレウスがやって来た。
「仕方ねぇな・・・」
「ああ・・・」
「そんじゃあ・・・行くぜ・・・」
ここで正宗と土方は息を吸って同時にこう叫んだ。
「レッツパァァァァァァァァリィィィィィィィィィィ！」

目の前の光景を見て新八は唖然としていた。何だか混乱して訳が分からなくなてきた。
「どうなってんの？」
突然校舎が揺れた。新八が下を見るとグラビモスが校舎に向かって突進をしていた。
「あああああああああ！」
新八はどうするかわからなかった。だがその時一筋の光が降った。
「アムロ、ガンダム。行きまーす！」
アムロが乗るガンダムがグラビモスに挑んだのだ。
「アムロ、今回は私も手伝おう。」
上空からシャアが乗るジオングが現れた。
「シャア！奴の光線は気をつけろ！超合金を焼かれてしまう！」
「ああ、分かった！」
アムロ&シャア対グラビモスの戦いが始まった。シャァは囮となりグラビモスの気を引いていた。そこにアムロ操るガンダムのビームサーベルがグラビモスに命中した。ここでアムロはビームライフルを取り出した。
「いけ！モンスターボール！」
ビームライフルからモンスターボールが発射された。
「さすがアムロだな。」
「なっ！まだいるぞ！」

上からリオレイアが襲って来た。だがアムロは有名なラストシューティングの構えでレイアを撃った。
「よし、グラビモスとリオレイア、ゲットだぜ！」
この光景を見て新八は呟いた。
「・・・滅茶苦茶だ・・・」
で後ろを見るとクラスの面々は誰もいなかった。
「おいいいいい！何で誰もいないんだァァァァ！」
叫びながら廊下を走った。

「ハァァァァ！」
クラウドの大剣がゲリョスの頭部に命中した。続いて悟空の蹴りがゲリョスの頭にある何か光を発するところを破壊した。
「よし！・・・これでどうすればいいんだ？」
「おーーーーい！」
ここで2Gのウソップが走って来た。
「ウソップ、どうしたんだ？」
「お前らも戦ってるって聞いてこれを持って来たんだよ。」
悟空にモンスターボールが大量に入っている袋を渡した。
「おおお！これがモンスターボールか！すげぇなオイ！」
「弱ったモンスターはこれで捕まえる事が出来る。俺はもう少しボールを作って」
「その必要は無いよ！」
ここで誰かが叫んだ。後ろからモンスターの軍団を従えているミクが現れた。
「・・・・・ミク、後ろのモンスターは一体・・・」
「みっくみくにしたの。」
クラウドはモンスターを見たら全員手にネギを持っていた。
「・・・・・みくみく菌・・・すげぇ・・・・」
ウソップが呟いた。

「喰らえ！操気弾！」
ヤムチャの手から気が現れ、それをイャンクックに向かって投げた。だがイャンクックはそれをよけた。
「甘い！」
ヤムチャは右手を動かした。それに合わせるように気も動いた。
「ハッハッハ！この俺が貴様ごとき序盤の雑魚に負けるわけ」
ヤムチャが叫んだ瞬間だった。後ろからババコンガの放屁攻撃がヤムチャに決まったのだ。
「このゴリラ！何を」
前からイャンクックの火炎玉が飛んできた。で、ガスと火が一緒になったんでヤムチャの周りにガス爆発が起きた。当たり前のようにヤムチャはあのポーズで気を失った。

「速攻魔法発動！バーサーカーソウル！問答無用でずっと俺のターン！」
２Ｎの闇遊戯が群がるランポスの軍団に立ち向かっていた。
「ドロー、モンスターカード！ドロー、マジックカード！ドロー、トラップカード！」
彼は雑魚相手にルール無用の残虐決闘をやっていた。
「ふはははは、口ほどにもないＺＥ！」
（何やってんだよもう一人の僕！）
ここで本当の人格である遊戯が闇遊戯の心に話しかけた。
（雑魚ばかり相手にしてはこの騒動は終わらないよ！ここは思いっきり強いモンスターと戦わないと！）
「だけどＡＩＢＯ、ここには雑魚しかいないＺＥ、どこにいけば」
（君の前にいるよ。）
闇遊戯の前にはシェンガオレンが立っていた。
「まままままま待ってくれ！こんなのと戦えってのか！無理だＺＥ！」
（これでも君は王なのかい？）

「うっ！」
（どんな困難にも立ち向かい、それを突破する、それが皆に頼れる王じゃなかったのかい！）
「ＡＩＢＯ・・・・わかった！俺は手札より神３体を特殊召喚するＺＥ！」
闇遊戯の背後からラー、オシリス、オベリスクが現れた。
「さぁ行くＺＥ！この蟹野郎！」
「それは俺の事か。」
後ろから遊星が現れた。
「あっ、違う！俺が言ってるのはあのモンス」
ここで闇遊戯はシェンガオレンに踏みつぶされた。
「・・・とことんついていない奴・・・」
呟いた遊星も後ろから突進してきたティガレックスにブッ飛ばされた。

一方、調理室では。
「いい、モンスターが来たらこれを投げるのよ。」
文乃、千世、希に袋いっぱいの暗黒物質を渡したお妙。
「これを食べたらあまりのおいしさに一発で昇天よ。」
「いろんな意味で昇天しそうですけど・・・」
冷や汗をかいて言う文乃。
「でもこれはいい兵・・・武器ですわ！」
千世もこう言う。
「にゃあ・・・何とかなるかも。」
希も続けて言った。その時、調理室の近くにフルフルが現れた。
どうやらまだこっちには気づいていない。
「今がチャンスよ、私の料理を投げるのよ！」
袋から一握りの暗黒物質を取り、フルフルに向かって投げた。フルフルは暗黒物質に気付きそれを口にした。食べてしまった。その後、電撃ではなくゲロを出し、その後痙攣を起こし動かなくなった。

希がフルフルの近くに寄り、フルフルの体を調べた。
「にゃあ・・・・心臓が動いてない。」
かわいそうに、フルフルは暗黒物質を食べて昇天してしまった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
新八はグランドでドスランポスに追いかけられていた。その背後からはリオレイア（亜種）。
「誰か、誰か助けてェェェェェ！」
ここで、
「避けろ！」
と声がした。新八は横に跳んだ。その後、一発のロケットランチャーがドスランポスに命中し、爆発を起こした。ドスランポスはリオレイア（亜種）の目に当たった。
「大丈夫か？」
「スネーク先生！」
新八の目にはロケットランチャーを構えているスネーク先生の姿が見えていた。
「無事だったんですね！」
「ああ、無限バンダナとダンボールのおかげで助かったよ。」
「そうですか・・・」
「新八、君はダンボールを被って逃げるんだ！ここは俺に任せろ！」
「いいんですか？ってか大丈夫なんですか？ダンボールって・・・」
「大丈夫だ！俺も何回もこいつに命を助けられた！」
「はぁ・・・」
新八は不安でいっぱいだった、だが結局はダンボールに被りその場を去って行った。

騒ぎが始まり数時間後、たいていのモンスターは捕獲されたが・・・、
「おい、まだいるのかよ。」

「ああ。とんでもなくすごい奴がいるって・・・」
いうような声が上がった。新八もスネークのダンボールで何とか無事でいられた。本当に何もなければいいんだけど・・・と思った矢先だった。
「ギャアアアアアアア！」
「で・・・でけェェェェ！」
「すごく・・・大きいです。」
などと声が上がった。新八がその方向を見るととんでもないくらいの大きさのラオシャンロンがこっちへ歩いてきたのだ。
「エエエエエエエエエエエエエエ！」
「おい！誰か、竜属性の双剣持ってねーかー！」
「持ってねェェェ！」
「ＨＡ！これなら俺達に任せろ！」
ここで正宗と幸村、慶次と家康がラオシャンロンに向かって行ったが無駄だった。
「ここは僕達が！」
アムロ達ＭＳも挑んだが結局は無駄に終わった。
「認めたくないものだな・・・若さゆえの過ち」
「知るかァァァァ！結局アンタらは何がしたかったんだァァァ！」
変な事を呟くシャアに新八はツッコミをした。
「オオオオオオオオオオ！」
スネークはロケットランチャーを連射するが無駄だった。
「くそぉ、いいセンスだ。」
「何がいいセンスだよ。」
新八は呟いた、だが今はそれどころじゃない。
「あわわわわ！もう学院に近くなってる！おしまいだァァァァ！」
「まだだ！」
ここで風紀委員のメンツが学院の前に登場した。
「俺達の学院は俺達が守る！武器の用意はいいかぁ！」
近藤が叫び、皆はラオシャンロンの腹に目がけて走って言った。

何人かが傷つき倒れたが立ち上がり、再び戦いを続けた。そして数十分後。
「グアアアアア！」
「近藤さん！」
最後の砦である近藤がハヤテ、ナギを置いて力尽きてしまった。近藤の他にも土方、沖田、ヒナギク、御坂、黒子が倒されてしまった。最後に残ったのはハヤテとナギだけになってしまった。
「ハヤテぇ・・・」
ナギはハヤテの手を握り締めた。そんなナギをハヤテは優しく抱きしめた。
「大丈夫です。二人でラオシャンロンを倒しましょう！」
「・・・ああ！」
その時だった。二人の周りに壮大なオーラがまとわれた。二人は息を合わせポーズを決めていく。そして・・・
「喰らえ！」
「私とハヤテの」
「愛の力を！」
二人の手からビームが発射された。ビームはラオシャンロンに命中した。そしてそのまま夕方の一番星となった。
「ありがとう！」
「ハヤテかっくいー！」
「ナギいいぞー！」
ハヤテ！ナギ！ハヤテ！ナギ！とコールが続いた。二人は互いに手を取り夕暮の空へ飛び立ち、夕日の中へ消えて言った。

「何だこのオチ！」
男子寮で寝ていたロイドが飛び起きた。
「・・・・・・夢か。」
と言ってまた布団にもぐりこんだ。

第5話：ペットの世話はちゃんとやれ（後書き）

銀八先生からひと言

銀八「というわけで今回から質問とか受け付けようと思います。その内容を面白おかしくやっていきたいんでよろしく。」

作者「どしどし応募してください。」

第６話：どっちかっつーとスーファミとか６４とかその辺のゲームが一番おもし

今回はドラクエ３のネタバレを含みます。今現在ドラクエ３をやっている人は今回は見ないでください。それでもいい人は見てってください。では始まります。

第６話：どっちかっつーとスーファミとか６４とかその辺のゲームが一番おもしろいんだよ

「何でこうなったァァァァァァァァ！」
新八の叫び声でこの話は始まる。新八の周りには城があり、塀の外からは塔が見える。何でこうなったのか・・・それでは少し時間を戻そう。

「くらいやがれぇぇぇぇぇ！」
「負けるかァァァァァァ！」
男子寮のロイド達の部屋で神楽、ナギ、近藤はスマブラ（６４）をやっていた。
「おい神楽、６４コントローラーのスティックを壊さないでくれ。最近どこの店でも売ってないんだ。」
「分かったアル！」
「いいの？こんなに騒いでて。それに何で神楽ちゃんやナギちゃんまで・・・」
「いいじゃないか。大勢いた方が楽しいし。」
その後ろからは。
「魔法カード、『地割れ』発動！これで銀時先生のブルーアイズを破壊！」
「んなこと予測してたんだよ！喰らえ！『リビングデットの呼び声』！これで墓地のブルーアイズを特殊召喚！」
「何ィ！今の俺には手札が無い・・・負けだ。」
銀時とスネークが遊戯王で遊んでいた。
「何やってるんですか？」
「見りゃわかるだろ。」
「ええ。」
新八は公軽く返事をした。もうめんどくさい言い合いはゴメンなので新八は早々と会話を止めた。とその時だった。

「ロイド！こんな所に珍しいものがあったよ！」
ロイドの彼女であるコレットが何かを見つけた。
「どーした？エロ本か？」
「性欲持てあまし系か？」
教員二人がコレットが手にしている物を見た。
「おおー、懐かしいなー。ファミコンじゃねーかー。」
「へー。これがファミコンですかー。始めてみましたー。」
ハヤテと銀時は言った。
「おい、スマブラ終わったらこれやるぞ。丁度ドラクエ３がある。」
「いいですねー。」
誰もが賛成した。これが悲劇の始まりだった。
「よし！やるぞ！」
銀時はファミコンの電源をオンにした。その時、テレビからものすごい光が発した。光は混沌学院を包み込んだ。新八はそのまま意識を失った。

で、最初の場面になった。とにかく新八は近くにいた人に話を聞いた。
「スンマセン！ここどこですか？」
「ぶきやぼうぐはそうびしないといみないぞ。」
「・・・・は？」
「ぶきやぼうぐはそうびしないといみないぞ。」
「・・・だからここは」
「ぶきや」
新八は呆れてその場を去った。
「あ、新八君。」
後ろから声がした。放課後ティータイムの面々だった。
「唯さん、それに皆さんも。」
「この人・・・先輩のクラスメイトですか？」
新八を知らない梓が聞いた。

「そうだぜー。こいつは２Ｚの神速のツッコミマスター、志村新八だ！」
「誰がツッコミマスターだ！」
「それよりここはどこ？」
紬の声で誰もが静かになった。確かにどこだ？ここ。
「今さっき話しかけましたけど同じことしか言いませんでした。しかも平仮名で。」
「う～ん・・・」
唯は考え込んだ。
「どうした唯？」
「ここ・・・見た事があるんだよね・・・」
「え？じゃあここは」
「思い出した！」
「え！」
誰もが唯の方に目を向けた。
「ここはドラクエ３のアリアハンだよ！」
「・・・は？」
「だって今流れているＢＧＭがドラクエ３の町の音楽だよ！」
新八は耳をすませた。よーーーく聴くと確かに音楽らしきものが流れている。その音楽は新八も聞いた事がある。確かにこれはドラクエ３だ。
「・・・まさか・・・」
新八は光ったファミコンの事をティータイムの面々に言った。
「さすが小説。何でも有りだね！」
「でもどうやったら帰れるんだ？」
「とにかく今はゲームを進めましょう。」
新八達はアリアハン城へ入って行った。
「よくぞきた！アリアハンのゆうしゃよ！」
で始まる王様のあいさつを聞き終えた新八達は町の入り口の近くにあるルイーダの酒場へ行った。そこにはハヤテとナギがいた。

「新八さん！」
「眼鏡！」
「二人とも！」
軽く再会の会話をした後、何でここにいるか聞いてみた。
「何でここへ？」
「いやーまず仲間を集めようとしたんですがなかなか・・・」
「でもお前達がいるなら心強い！」
「そうですね。」
「ところで新八さんの職業は？」
「へ？」
「調べるならステータスって言えばいいですよ。」
「はい、ステータス！」
新八はステータスって言った。そして、下の方にコマンドらしきものが現れこう書かれていた。

しんぱ　ＨＰ：１０　ＭＰ：１０　め：１
ゆい　ＨＰ：９　ＭＰ：２３　け：１
みお　ＨＰ：１０　ＭＰ：２１　け：１
りつ　ＨＰ：１６　ＭＰ：１９　け：１
つむぎ　ＨＰ：１７　ＭＰ：２０　け：１
あずさ　ＨＰ：１１　ＭＰ：２２　け：１

・・・と出た。
「『け』って何？けいおんのけ？」
「どうやら賢者の『け』らしいな。」
「じゃあ『め』は？」
ここで誰もが声を合わせて言った。
「眼鏡じゃね？」
「職業眼鏡って何だァァァァァ！あと『しんぱ』って何だァァァ！名前かァァァァ！濁点も一文字ってかァァァァ！」
「ですね。」
とまぁこんなパーティーでアリアハンを出て行った。

「さてどうしましょう。」
「銀さん達もいるなら探そうよ。」
「じゃあ情報を集めないとな！」
「無駄ですよ。どうせ同じ事しかしゃべらないから。」
会話していたら突然ＢＧＭが変わり辺りは暗くなった。
「何だ何だ！」
前にはスライムの軍団。で、下のコマンドには『スライムがあらわれた！』と表示された。
「どうやら戦闘らしいな。」
「はい！」
張り切ってるのもつかの間。唯の下にコマンドが現れた。
「へ？何これ？」
「どうやらこれで行動を決定して戦うみたいです。」
コマンドには
・こうげき
・じゅもん
・ぼうぎょ
・どうぐ
の四つがあった。
「じゃあ戦う！」
と次に新八の下にコマンドが現れた。コマンドの内容は
・ツッコミ
・ぼうそう
・どげざ
・めがね
の四つだった。
「オィィィィィィ！何だこのコマンドォォォォォ！役にたたねェェェェェェ！」
「とにかくツッコミを選ぶんだ！」

されるがままにツッコミを選んだ。そして1ターン目のバトルが始まった！
ゆいのこうげき！
スライムAに2のダメージ！
みおはメラをとなえた！
スライムBに10のダメージ！
スライムBをやっつけた！
ハヤテのこうげき！
かいしんのいちげき！
スライムDに9のダメージ！
スライムDをやっつけた！
しんぱのツッコミ！
レンズがわれた！
しんぱに999のダメージ！
しんぱはしんでしまった！（ざまぁ（笑い））
ナギのこうげき！
スライムAに3ダメージ！
つむぎのにらみつける！
スライムAをやっつけた！
スライムCをやっつけた！
スライムたちをやっつけた！
「ちょっと待てェェェ！」
HPが0になって棺になった新八が叫んだ。
「何？この不公平！何でツッコミをしただけで死ぬんだよ！神ゲーだよね！クソゲーじゃないよね！」
それぞれけいけんち5をてにいれた
11Gをてにいれた
レンズのはへんをてにいれた
「一ついらねぇのが混じってるゥゥゥ！後このざまぁって何？明らかに僕への嫌がらせだよね！あと紬は何やったんだァァァァ！」

「知らないよ。とかく進もう！」
という訳でどんどんと話を進めるハヤテ達・・・。大丈夫だろうか・・・。

一方ロマリア城地点では・・・銀時のパーティーが何かと戦っていた。
クリフトはザラキとなえた！
ゾーマにはいみがないようだ。
「おいいいいいい！何で序盤でラスボス出てくるんだよォォォ！しかもクリフトいるしいィィィ！3じゃねーのかよォォォ！」
ゾーマのこうげき！
クリフトはしんでしまった！
キーファのこうげき！だがキーファはあいするおんなのためにぼうけんをやめたためこのばにはいなかった！
「オイィィィ！俺のパーティーは役立たずしかいねェェェ！」
ゾーマのこうげき！
きんときに235のダメージ！
きんときはしんでしまった！
きんときたちはぜんめつした・・・
「終わったァァァァァァァ！」

一方また別の方では。
「なぁベジータここどこだ？」
「知るか。」
「それにしても大きい神殿だね～。」
「コレット、のんきなこと言ってないで先に進もう。」
悟空、ベジータ、コレット、マルタがダーマ神殿へ入って行った。

で、またまた別の方では。
「俺が何をしたァァァァァァァ！」

牢屋で叫んでいる土方。そばには文乃、クラウド、睡眠中のゾロがいた。
「出せ！ここからだしやがれェェェェェェェ！」
「うるせぇぞ、土方。眠れねーじゃね・・・何だここ？」
「知らないわよ。気が付いたらここにいたんだもの。」
起床したゾロに文乃が軽く今の状況を教えた。
「牢屋か・・・そこをどけ。」
と言ってゾロは牢屋を蹴った。騒音をたてて扉は開いた。
「行くぞ。」
「いいのかぁぁぁ！ってか見張りは・・・」
見張りは気付かなかった。ってか近いのに来なかった。
「どうなってんだこの世界はァァァァァ！」
土方の叫びが部屋いっぱいに轟いた。

で、またまたまた別の方では。
「ここは・・・アウターヘヴン！」
スネーク先生がドラクエと別の世界へ行ってしまいました。

で、またまたまた別の方では。
「ここは・・・キノコ王国！」
ドラクエと別の世界へ行ったヴラが目の前の光景を見て感動をしていた。

「・・・先生まで棺になってたんですね。」
「・・・・ああ。」
「で、置いてかれたと。」
「ああ。」
アリアハンの教会。ここで棺になった新八と銀時は再開した。
「何でここにいるの？」
「置いてかれました。・・・先生は・・・」

「全滅してここに来たんだよ・・・クリフトのバカはまたどっか行くし・・・最悪だよ。」
「あれ？先生ですか？」
ここで御坂と黒子とミクが銀時の元へ来た。
「う・・・うっ・・・うっ・・・助けてくれェェェェェェェェ！」
「僕も！自由に動きたいィィィィィ！」
「そうしたいんですがGが足りません。」
「・・・・・・・・はぁ・・・・・」
「すみません・・・」
ここで新八を置いてったパーティーが現れた。
「皆さん！来てくれたんですね！」
途中で仲間に加わった神楽が言った。
「宿屋に泊りに来たアル。」
「それだけェェェェェェェェ！」
新八はパーティーのステータスを見た。

かぐら	ＨＰ９９９	ＭＰ０	せ：８９
ハヤテ	ＨＰ７６５	ＭＰ４６４	ゆ：８９
ナギ	ＨＰ８７８	ＭＰ５５７	ゆ：９６
ゆい	ＨＰ４５７	ＭＰ７６９	け：８６
みお	ＨＰ５４２	ＭＰ７５５	け：８６
りつ	ＨＰ５７８	ＭＰ６７８	け：８７
つむぎ	ＨＰ無限	ＭＰ無限	け：９９
あずさ	ＨＰ６７８	ＭＰ６７９	け：８７

「この短期間で何があったァァァァァ！そしてむぎはチート使っただろォォォォォ！」
「そんな、私はただこの世界の神に少し強くしてと頼んだだけですよ。」
「頼んでねーだろ脅しただろ！」
「おーい・・・だったら早くバラモス」
「倒しましたよ？」

「はぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
「で、今からゾーマの奴を倒しに行きます。」
「そう・・・」
と言って神楽達は宿屋へ行ってしまった。
「じゃあ私達はここで待ってます。」
御坂はこう言った。
「え？何でよ。」
「だってこういう話ってラスボスを倒したら終わりでしょう。だったらチートメンバーに全てを託しましょう。」
「・・・・・・・・・」
しばらくの間を開け、銀時は叫んだ。
「俺活躍してねェェェェェェェェ！」
ちなみに全員無事に元の世界に戻れました。あとこれからゾーマとの戦いを書きますけど他の連中の話はまたどこかで書きます・・・覚えてたら。

「きたか・・・ゆうしゃかぐらよ。」
「うっしゃー！私が勇者アル！」
「今それどころじゃないでしょ。」
「われのやぼうをとげるために・・・きさまにはしんでもらう！」
「こんなんだっけ？ゾーマのセリフ。」
てな感じでゾーマとの戦闘が始まった！
ゾーマがあらわれた！
つむぎのこうげき！
ゾーマに１２４のダメージ！
つむぎのこうげき！
ゾーマに１２５のダメージ！
つむぎのこうげき！
ゾーマに１４６のダメージ！
つむぎのこうげき！

ゾーマに１５６のダメージ！
つむぎのこうげき！
ゾーマに１８７のダメージ！
つむぎのこうげき！
ゾーマに２００のダメージ！
つむぎのこうげき！
ゾーマに２４２のダメージ！
つむぎのこうげき！
ゾーマに３２１のダメージ！
ゾーマをやっつけた！
「ずっとむぎのターンかよ！」
ここにいる誰もが叫んだ。

第６話：どっちかっつーとスーファミとか６４とかその辺のゲームが一番おもし

感想、質問、どしどしご応募ください。

第7話：最近の漫画の文化祭のシーンってメイド喫茶多くね？（前書き）

こんな真冬に文化祭の話をしてすみません。これもかなり前ワードで書いたやつです。まぁ気にせず読んでください。

第7話：最近の漫画の文化祭のシーンってメイド喫茶多くね？

風が涼しくなってきた頃、混沌学院は文化祭の準備で忙しかった。それはもちろん２Ｚもそうである。

「はいじゃあ文化祭でやるだしもんを決めます。意見があるやつは何か言えや。」

銀時は黒板の前でこう言った。

「はいはい！私劇がやりたいです！」

ここで神楽が手を挙げ言った。

「劇ってオメー・・・去年みたいな事になったらどうする？」

銀時が言う去年の事って？それは一年前にさかのぼる・・・

混沌学院の体育館、今そこで当時１Ｚの面々が劇、『１０１回目のプロポーズ』をやっていた。ちなみに主人公の武田鉄也のやってる役は近藤でヒロインは妙。なんでこうなったかというとくじで決まったのだ。で、内容は・・・

「僕は死にましェェェェェェん！」

定春が扮するトラックに突っ込んで行くがブッ飛ばされた。で、その衝撃で妙の胸に当たってしまった。

「何すんじゃこのセクハラゴリラァァァァァァ！」

リンチが始まってしまった。しかも途中で神楽も乱入してきた。

「ギャアアアアアア！お妙さん、これ劇」

「死ねェェェェェ！」

妙のリンチは収まらない。

「アネゴ、今アル！このセットをあのゴリラにぶつけてフィニッシュアル！」

「わかった！向こうは頼んだ！」

妙と神楽はセットの背景を倒した。セットは近藤の頭部に命中した。で、セットの残骸に埋まってしまった。その後、ドリフの全員

集合でよく流れたＢＧＭをバックに劇は終わった。

「こんなことになっただろうが。あの後ゴリラ、全治１カ月の大けがだっただろうが。」

銀時は黒板にある文字を書いた。

禁則事項。

１、なるべく皆が知ってる奴。

２、怪我とかないように。

３、問題にならない奴。

４、再現無理なドラマとかは止める事。

「以上の事を守ってやりたい劇をやれこの条件なら劇をやってもいい。あと俺は関係ないから。お前らが主役だから。」

その後、クラス中が集まって話が始まった。で、数分後。

「何やるか決まったか？」

ハイハイハイ！と声が上がった。

「神楽。」

「私は『相棒』をやりたいアル！」

「却下。」

「何でアルか！」

「色々無理あるだろうが、諦めろ。」

神楽はぶーぶー言ってたが席に座った。

「ハイハイハイハイハイハイハイハイ！」

「・・・ヅラァ・・・そんなにテンション高いんだ。まともな奴だろうな。」

「当然です。この日の為に自分でシナリオを作ってきました。」

この時点で銀時は嫌ーーーな予感がした。で銀時は桂からシナリオ本を受け取った。内容は・・・勇者桂の愉快な冒険記・・・タイトルはべただが製作者が馬鹿桂だからかなり心配だ。

「えーっと・・・昔々ボリンシスの村にシュウゾウという名の若者・・・ハイこの時点で没！」

「何でですか！」
「異様に厚い！無駄に長い！話の最初からタイトルとの名前と関係ない名前の奴が主人公！それと矛盾の多い設定！もう訳分かんねーよ！」
銀時はシナリオ本を破り捨てた。
「先生。なら俺のシナリオはどうですかィ？」
沖田が銀時に自作のシナリオ本を渡した。
「ヅラよりは薄いな・・・どれどれ・・・土方暗殺計画か。いいな。」
「いいわけあるかァァァァ！」
ここで土方が怒声を上げながら立った。
「何？これ、俺が死ぬ話！」
「はい。この話で１００回以上は死にます。」
「この薄さで！」
「２ページにつき１０回死にます。」
「死にすぎだろぉ！てかこれアウトでしょ！」
「う～ん・・・いいと思うんだけど。」
「よくねェェェェェ！」
土方が沖田のシナリオ本を破り捨てた。
「じゃあ！先生これは！」
近藤がシナリオ本を作った。
「オイオイ、シナリオ本作りすぎだろ。この小説の作者か。」
近藤のシナリオ本のタイトルは『近藤とお妙』だった。
「ゴリラぁ、こんなの作るなよ。今ので死亡フラグが立ったぞ。」
「そうですよ、あまりにもふざけると殺しますよ。」
片手にはさみを持ったお妙が笑顔で言った。
「はいはいはい！」
ここで西沢が手を挙げた。
「何だ西沢。実写版『とっとこハム太郎』でもやりたいのか？」
「違います！どうせ劇をやるならラブロマンス」

「去年の事を覚えてねーのか？そのせいでゴリラは帰らぬ人となったんだよ。」
「あの・・・生きてますけど。」
「はい！私は『ＭＯＴＨＥＲ』をやりたいです！」
唯が言った。
「無理だろ。ってかオメーは軽音部の方があるだろ。」
「じゃあ私は『ＭＯＴＨＥＲ２』をやりたいでーす。」
紬が続けてこう言った。
「おめーらは軽音部の方があるって言ってるだろうが。ってか無理だよ『ＭＯＴＨＥＲ』は。確かに名作だけど時間がなぁ・・・」
ここからはいろんな生徒が色々な事を言いまくった。
テイルズオブシンフォニア！無理だから、ってか何でヒロインのお前が言うんだよ。
はぐれ刑事純情派！だから再現無理なドラマは止めろって。
メタルギアソリッド！だから無理だって。
けいおん！だからオメーらは軽音部の事があるだろ。
世紀末伝説・マジカル☆デストロイ！却下。ってか俺の話聞いてた？
ボボボーボ・ボーボボ！いいなぁ・・・。いいわけあるかァァァ！（新八）
ドラクエ３！前の話で酷い目にあったから却下。
土方暗殺帳！候補に入れとくか。入れんなァァァァァァ！（土方）
マヨネーズ大冒険！却下。
北斗の拳。雑魚は土方で！候補に入れ・・・入れんなァァァァァ！（土方）
切ないラブストーリー・・・お妙と・・・ズシャアア！グバァァァァ！
シンデレラのシャナたん！だから主役のお前が言うな。
コマンドー！無理だから。

ホーム・アローン！無理だから。
ＴＯＬＯＶＥる！おいおいおい、いまさら言うけどＴＯＬＯＶＥの連中もこの学院の生徒だぜ。
ＭＯＴＨＥＲ３！確かに名作だけど無理がある。
「ああもう！ややこしい！」
銀時は叫んだ。
「ってかテメ―らが色々言うから何やりてーか分かんねーよ。もう。」
「だったら『ロミオとシンデレラ』」
ミクが言った。
「それお前の曲だろうが！・・・・ロミオとジュリエット・・・」
ここで黒板にロミオとジュリエットと銀時は文字を書いた。
「今俺ん中で候補にこれがあがった。てめーらの実現不可能な作品より色々な漫画の文化祭の劇の王道であるロミジュリだ。文句あるやつはいるか。」
と言った。これにはクラス全員が賛成した。
「よし、次はロミオ役とジュリエット役を決める。」
銀時は黒板に文字を書き始めた。

ハヤテ　ナギ
ロイド　コレット
エミル　マルタ
シャナ　悠二
御坂　黒子
巧　文乃

「この中のバカップルから決めるぞ。」
「待てェェェ

ど何でシャナちゃんと悠二君がバカップルなわけ！」
吉田が銀時に質問をした。
「漫画、灼眼のシャナを見てて思ったんだよ。」
「それだけで！」
「ちょっと！何で私と黒子が書かれてんのよ！」
怒り爆発の御坂が同じく銀時に質問をした。
「ネタ。」
「ハァ！」
「いいですのよ。黒子はお姉さまとロミオとジュリエットができるだけで・・・ああっ、黒子の体は」
御坂は銀時と黒子に向かって電撃を放った。
「先生！何で巧と私がのってるんですか！」
爆発アフロになった銀時に向かって文乃は叫んだ。
「オメー告っただろうが大嫌い！大嫌い！大嫌い！大好き！って。よかったなー巧。滅多に捕まんねーぞ。こういう巨乳」
「死ねェェェェェ！」
顔を真っ赤にした文乃は銀時にドロップキックを浴びせた。
「先生、小説『迷い猫オーバーラン８巻』で私と巧がキスをしたって知ってますか？」
と千世が言った。
「あ、そーいやーそうだった。」
銀時は黒板に書かれてあった文乃の文字を消して千世と書いた。
「そうそう、これでいいのよ♪」
と言う千世の頭に文乃のゲンコツが飛んだ。
「せんせェェェェ！何で俺とお妙」
と言った矢先、近藤の後頭部にコンパスが刺さった。後ろから妙が微笑みかけた。
「文句が多いなー。じゃあまた別の奴を書くぞ。」
と言って銀時は黒板にヒナギク　ヅラと書いた。
「おい、Ｗヅラ。おめーらでもいいか？」

「いいわけあるかァァァァ！」
Wヅラは叫んだ。
「先生！こうなったら私とハヤテ君」
「アホかハムスター！ハヤテは私の彼氏だぞ！」
クラスがまたまた騒いできた。そこにロッカーから一人の女子生徒が現れた。今になってようやく出番が来た猿飛あやめだった。
「だったら私がジュリエットで先生がロミオ」
銀時はM豚をロッカーに蹴り飛ばし頑丈にロッカーの扉をしめつけた。
「はぁ・・・だったら誰がいいか多数決を取るぞ。」
銀時はクラスに紙を配った。数分後。
「結果が出た。ロミオ役、澪。ジュリエット役、ヒナギク。以上だ。後の役はてきとーに決めろ。」
「待って下さい！」
ここで澪とヒナギクが席を立った。
「何で女の子同士なんですか？」
「知るか。けいおん！でもやっただろ。ロミオとジュリエット。そん時の配役が女の子同士だろ。大丈夫だ。キスはさせねー。心配するな。」
と言って銀時は教室を出ようとしたが。
「あ、そうだ。ハヤテ、エミル、ジーニアス、ナギ、ヒナギク、澪、ミク、御坂。放課後この教室に残れ重大な話がある。」
それだけ残して銀時は教室を出て行った。
「重大な事って・・・何だろう。」

放課後。教室には銀時に呼ばれたメンバーがいた。他にもスネークもいた。
「じゃあ話を始める」
と言って銀時は一枚のポスターを取り出した。そのポスターには『第２０回！混沌学院コスプレキング決定戦！』と書かれていた。

「おめーらこれ出ろ。」
「エエエエエエエエエエエエ！」
皆は叫んだ。
「何でですか！」
ヒナギクは銀時に質問をした。
「それには訳がある。優勝したらな・・・図書券がもらえるんだよ。」
「それだけの為に・・・」
「ただの図書券ではない！一万円分だ！これはクラスの担任副担も貰えるし、優勝した奴には理事長から何かすごい物を貰える！」
「嫌ですよ！そんな事の為に」
「大丈夫だ。何かおごる。」
「本当ですか～。」
「本当だ。」
「ところで何でこのメンバーなんですか？」
ジーニアスは聞いた。で、銀時はもう一枚のポスターを取り出した。それには『混沌学院美男美女ランキング！』と書かれていた。
その内容は・・・

男子部門
第1位：2Z　綾崎ハヤテ
理由　かっこいい、同姓婚の認められているオランダへ移住して結婚してくれ！
第2位：2Z　沖田総悟
理由　いい男。甘いマスクがいい！いじめられたい
第3位：2Z　エミル
理由　頑張り屋で努力家。守ってあげたい。
第4位：2Z　ジーニアス
理由　かわいい、天才、勉強教えて。
第5位：2Z　坂田銀時先生

理由　やる時はやる。かっこいい！

女子部門

第1位：2Z　三千院ナギ

理由　ツンデレ最高！ツインテール最高！抱きしめたい。

第2位：2Z　秋山澪

理由　頼りになる。かわいい。守ってあげたい。

第3位：2Z　桂ヒナギク

理由　かっこいい！優しい。貧乳はステータス。

第4位：2Z　初音ミク

理由　歌が上手。ネギくれ。みっくみくにされた。

第5位：2Z　御坂美琴

理由　ツンデレ最高！かっこいい！電撃最高！

「という事だ。前やった美男美女コンテストで上位5位がまさかの全員2Zだったんだよ。学院の人気者として出れば盛り上がるし図書券はもらえるし一石二鳥・・・いや三鳥以上はいく！」

「確かにそうですけど・・・何で沖田さんがいないのですか？後先生も入ってましたよね。」

「奴が出れば最悪な事となる！あとこれは生徒しか出られない！」

「はい・・・」

「こ・・・コスプレって・・・まさか・・・」

澪がオドオドとしながら銀時に聞いた。

「ああ・・・これが音楽担当のさわ子先生に頼んで作ってもらった衣装だ！」

銀時は近くにあった布を取った。そこには危ない水着が数着。ハーマイオニー衣装が一つ、あとはメイド衣装があった。

「これを着て出てもらう。」

「待てェェェェェェ！」

ここで全員が叫んだ。

「まだかこれを着て出るんですかぁ！ヤバいでしょこの衣装！」
「大丈夫だ。去年、あのヅラがエリザベスの衣装で出た。」
「あの人が！」
「結果は0点より下だった。この最低記録は誰も破られていない。」
「知りません。ってかこのハ―マイオニー衣装って・・・」
「ハヤテ専用だ。」
「やっぱりィィィィィ！」
「先生！」
話の途中で唯と律が入って来た。
「何だオメーら？軽音部はどうした？」
「忘れ物を取りに来てこの話を聞きました！澪にこの衣装を着せるのは無理だと思います！忘れたんですか、去年の軽音部の発表！」
「去年？ゴリラの怪我とは別に・・・あ～。」

ここでまた去年の文化祭の話をしよう。軽音部は独自の曲を作りそれを発表した。それはかなりの大好評だった。
「皆・・・ありがとーーー！」
澪があいさつをし、退場しようとしたその時だった。澪は下に引いてあったコードに引っかかりずっこけてしまった。ちなみのこの時の衣装はゴスロリ風の衣装・・・という事は・・・スカートの中が見えてしまったのだ。しかも客席側で。この事件は澪にとってかなりのトラウマになってしまったのだ。

「忘れたのですか！先生！」
「忘れてねーよ。あれからはファンの奴らがギャーギャー、ギャーギャーうるさかったなー。」
「そうです！だからこの危ない水着を澪に着せるのはかなりの難関です！」
「そうか・・・」
ここで銀時は唯と律の耳元で何か囁いた。

「先生！いざとなったら私が無理矢理でも澪に着させます！」
「律ゥゥゥゥ！」
澪は涙目で友の名を叫んだ。
「あとちなみにテメーらのエントリー票だしちゃったから。」
「何してくれてんだァァァァテメーはァァァァ！」
呼ばれた奴らは銀時に殴りかかった。

「はー！おいしかったー！」
ここは学院近くの喫茶店。銀時は唯と律にパフェをおごっていた。
「頼むぜー。澪にあの衣装を着せるのはお前らが頼りだ。本当に頼むぜ。」
「わっかりましたー！」
「ところでオメーらの方はどうだ？」
「順調です！」
「そうか。去年は盛り上がったからなー。」
「まーあんなことがありましたからねー。」
「ああ。」
「今年はあずにゃんが入ったから去年よりは盛り上がるよー！」
「そうか・・・」
銀時は席を立った。
「そろそろけーるぞ。暗くなってきたし。」
「はーい。」
と言って勘定を払った後、唯と律は帰って行った。
「俺も帰るか・・・ジャンプ見てねーし。」
と言って銀時も学院へ戻って行った。

「ああロミオ！何であなたはロミオなの！」
ヒナギク扮するジュリエットの有名なセリフが聞こえた。でその後は色々と進んだ。ちなみに作者はオチを知っているけど話の詳しい内容とかロミオとジュリエット以外の登場人物とか台詞とか一切

分からん！なのでこのことを承知してもらいたい。

「君を見てるといつもハート・・・」

音楽室からも軽音部の練習が聞こえる。唯が『ふわふわ時間』の練習をしている。２Ｚでロミオ役をやる澪の代わりに唯がボーカルをやる事になったのだ。

「ふー・・・ここで休憩。」

「そうですね。あれこれ何時間かやってましたからね。」

「は～い、お茶の時間よ～」

紬がお菓子と紅茶を持ってきた。

「待ってました！」

「ほー、うまそうだな。」

ここで放課後ティータイムの面々は気付いた。なぜか銀時がいる。

「せ・・・先生！何でここに？」

「オメーらの練習を聞いてたんだよ。」

「すごいアル！いつもの唯とは違うアル！」

神楽もいた。

「神楽ちゃんまで。」

「いいじゃないの？先生と神楽ちゃんもどうですか？紅茶とお菓子。」

「いただきます！」

「どこも頑張ってるなー。」

新八は背景のセットの色塗りをしていてこう呟いた。

「何だかすごい人が来るって噂みたいだよ。」

新八と同じ作業をしていた悠二が言った。

「すごい人？芸能人かな？」

「まぁ始まれば分かると思うけど。」

「悠二！メロンパン持ってきたよ！」

「悠二君！ポカリ持ってきたよ！」

ここでシャナと吉田が悠二に差し入れを持ってきた。
「ありがとう。」
「ところで作業は進んでる？」
「まあね。結構進んでるよ。・・・他の人と比べれば。」
悠二は周りを見た。
「おりゃァァァァァァ！」
「おわァァァァァ！何してんだ沖田ァ！」
土方は小道具の剣を振りまわしていた沖田を怒鳴った。
「いやー多少リアルな表現を混ぜた方がいいかなって思いましてねぇ。この剣の錆になってくれます？」
「そうか・・・ならテメェはこのリアルに作った俺の長剣の錆になれェェェェ！」
喧嘩を始めたいつもの風紀委員の二人。
「お姉さまー、この黒子がお手伝い」
「あーいい、こっちは何とかなる・・・」
ここで御坂はなぜか制服の下がスースーすると感じ調べてみた。
「！」
「まーたお姉さまってば・・・また子供っぽい」
「くゥゥゥゥろォォォォォォこォォォォォォォォォ！」
御坂は自分の下着を持っている黒子に超電磁砲ぶっ放した。で別の所では。
「お妙」
「おらァァァァァァァァァァァァ！」
ストーキングゴリラをいつものように撃退するお妙。
「見ろ悟空！このマークどうだ？」
「すげぇなルフィ！かっこいいぞ！」
ロミオとジュリエットに関係ないドクロのイラストをセットに描くルフィ。そして感動する悟空。
「Z～Z～Z～」
どうどうと教室の真ん中で昼寝するゾロ。

「アンタも起きない！そして手伝いなさい！」
ゾロの腹部に拳を決めるナミ。
「ふ～みのちゃ～ん、何か手伝い事は」
「無い。」
ラブハリケーンを発しているサンジはあちらこちらの女子に手伝うって聞いてナンパをしているが結局は断れている。
「若ァァァァ！私も何か手伝う。」
「無いからいい。出来るなら帰ってくれ。」
変態東城に帰ってくれと言った真面目な九兵衛。
「ははは・・・これで大丈夫かな・・・・」
新八は少し不安になって来た。

で、文化祭当日。辺りはワイワイガヤガヤで騒がしかった。２Ｚのロミオとジュリエットの劇はもう完璧。昨日のまとめ稽古も上手くいった。軽音部も１００％完璧だった。で演劇とか部活の発表とかは学院の体育館で行われることとなった。
「けっこういるなー。」
「そうですねー。」
新八、悠二、巧、ロイドはこう言った。周りには神楽、文乃、千世、希、悟空、ルフィなどクラスメイトもいた。
「おー、テメーらここにいたのか。」
ここで銀時とスネークがやって来た。
「銀さん、スネーク先生。」
「今日は楽しみだな。この日の為に皆頑張って来たからな。」
「そうですね。何か起こんなきゃいいけど・・・。」
と言った矢先、新八の背後で何かの気配がした。で、後ろを見たらそこには徳川茂茂が座っていた。
（将軍がいるゥゥゥゥゥゥゥゥ！）
心の中で叫んだと同時にブザーが鳴った。ステージの端から司会役のミクが出てきた

「皆さん、本日は混沌学院の文化祭に来てくれてありがとうございます。全生徒この日の為に色々と準備をしてきました。どうか、最後まで見守って下さい。まず最初はお登勢理事長とキャサリン教頭の劇です。」
ミクはステージの端へ戻って行った。その後、幕が上がった。少ししてＢＧＭが流れてお登勢理事長のナレーションが入った。
『この物語は二人の少女の勇気と絆の物語である。』
両端から誰かが出てきた。その人物とは・・・セーラー服を着たお登勢理事長とキャサリン教頭だった。
「いっけな～い。」
「遅刻遅刻ゥ。」
二人はわざとらしくぶつかった。
「あたたたたた・・・あれ？キャサリンっち？」
「オ登勢ッチモ遅刻～？」
二人は笑ったその時にまた理事長と教頭のナレーションが入った。
『二人は同じ学院に通う』
『幼馴染。デモ彼女タチニハアル秘密ガアルノ・・・ソレハ』
ここで電気が消えた。で、少しして派手なＢＧＭが流れた。で、日曜朝八時半からやっているアニメのコスプレをした二人が現れた。
『二人の秘密・・・』
『ソレハ・・・』
台詞の後、ポーズを決めて叫んだ。
「ふたりはタマキュア！シルバーソウル！」
ここで新八に吐き気が起きた。新八だけではない。他の人も同じように下を向いていた。そしてその後野次が飛んだ。
「何してんだー！」
「気持ちわりーよ！」
「引っ込めー！」
「死ねー！土方！」
「どさくさに紛れて何言ってんだ沖田ァ！」

「ウェェェェェェ！」
「おい、誰かはいたぞ！」
「最悪だァァァァ！」
と非難の声が上がったのでショーは強制終了となった。
「ええ・・・いま放送事故並みに悲惨なものを見せてしまった事を深くお詫びいたします。・・・次は戦隊ものです！カラー戦隊イロレンジャー！」
ここでステージの下からドリームランドでやっていたショーの戦隊が現れた。
「やぁ！混沌学院の皆！正義の味方、イロレンジャーだ！」
「ここでヒキョウ団が悪さをするって連絡があったんだ、だから奴らを倒さなければ」
（その必要は無い！なぜならここが貴様らの墓場だからなぁ！）
後ろから黒マントの二人組が現れた。その時、新八は嫌な予感がした。で、その予感は的中してしまった。
「フハハハハ！ヒキョウ団に代わってサドサド団が貴様らを抹殺してやるわァァァ！」
やっぱりィィィィィィ！その正体とは・・・松平と沖田だった。
「何だ貴様ら、ヒキョウ団は」
「ヒキョウ団は俺達の犬となったぁ！」
沖田は後ろへ戻った、で後ろからヒキョウ団らしき者達が首輪をつけてハイハイ歩きで沖田につれてこられた。
「何してんだアンタァァァァ！」
新八は叫んだがバカには聞こえなかった。
「まずそこの赤いの、貴様から調教してやるわぁぁぁ！」
言って沖田がレッドにドロップキックをした。で、マスクが取れてしまった。その正体とは・・・マダオだった。
「おめーまだそのバイトやってたのかよォォォ！」
今度は銀時も一緒で新八は叫んだ。
「あああ！何するん」

マダオは言ったが沖田はそのままマダオが着ているタイツを脱がし、マダオは全裸となった。
「よし！このまま他の奴らを一網打尽とするぞ！」
沖田は他の４人に襲いかかった。そこで幕が下りた。
「・・・・・・すみません。また気持ち悪いものを見せてしまって・・・」
汗だくで話しているミクの後ろからイロレンジャーらしき人達の悲鳴が聞こえた。
「では少しした後、１Ａから発表していきます。その間にトイレとか行ってきてください。」
と言ってミクはステージの外へ戻った。だがイロレンジャーの悲鳴はまだ聞こえる。

「ヒーモヒモヒモヒーモヒモォォォォ！」
ここで２Ｕの発表が終わった。
「えー、個性的な歌をありがとうございました。続いては２Ｚのロミオとジュリエットです！」
と言った後、拍手とともにカーテンの幕が上がる・・・。何事もなければいいが・・・。と新八は思った。
「ああ愛するロミオ、あなたは今どこへ・・・あなたの事で今の私は胸がいっぱい・・・」
ジュリエット役のヒナギクが台詞を言った。練習の時は嫌嫌でやっていたが今の時はかなりノリノリだ。
「ジュリエット！」
ここで、ステージ外からロミオ役の澪が現れた。
「ロミオ！来てくれたのね！」
「ジュリエット！君の為ならたとえ火の中水の中・・・僕は君の為に命をも捨てる！」
澪はセットの上にいるヒナギクの所に行った。
「ああ・・・ロミオ・・・愛するロミオ・・・」

「会いたかったよ・・・」
ここで二人は抱きついた。周りからはオオ！とか色々なが上がった。新八も二人のなりきりに少し退いていた。で、少ししてラストシーン。
「ロミオ・・今から私もあなたの所へ行きます・・・」
と言ってヒナギクは剣を胸に刺すふりをして地面に倒れた。で・・・
「ジュリエット・・・待っていてくれ、僕も今すぐに行く・・・」
で澪も剣を胸に刺すふりをして地面に倒れた。そして、ファンファーレが流れて２Ｚの劇は終了した。周りから拍手喝采で、中には涙を流す者もいた。
「すご・・・」
新八は呟いた。

午後の部、ここで唯達系音部の発表が行われる。
「では、去年大好評だった軽音部です！では放課後ティータイムの皆さん！よろしくお願いします！」
ミクが紹介をした後ステージの幕が上がった。唯達はもう準備ができていた。
「皆さん！放課後ティータイムです！今年は１Ｚのあずにゃんが加わったので去年よりパワーアップしました！それでは聞いてください！『ふわふわ時間』！」
唯のＭＣの後、律の合図で演奏を始めた。そして、観客の人々は大いに賑わった。
「けいおんさいこー！」
唯の声でさらにヒートアップした。そして、演奏は終了した。
「最後まで聞いてくれてありがとうございました！」
唯が別れのあいさつをし、ステージの外へ行こうとした。
「放課後ティータイムの皆さん、ありがとうござ・・・」
ここでミクの言葉が途切れた。唯達も足をとめた。いたるところ

からアンコールが響いているのだ。
「・・・・時間はあります！」
「・・・・アンコールにお応えしてもう一曲やります！」
観客は喜んだ。唯達は再びステージに戻った。
「では聞いてください！『ぴゅあぴゅあはーと』！」
曲が終わるまで、唯達は何だか幸せな気分だった。

それぞれの部活の発表が終わりそろそろ終盤になって来た。ところで司会者がゼロスに変わった。
「レディースエーンドジェントルマン！お待たせしましたぁ！今から今年度の『混沌学院コスプレキング決定戦』を始めまァァァァす！」
テンションノリノリで始まったコスプレキング決定戦。その時、新八の背筋に嫌な寒気が走った。・・・・嫌な予感がする！
「では最初！２Ｅ組よりララちゃん！」
ここでＴＯＬＯＶＥるのヒロインのララが現れた。その時新八は驚いた！何でェェェェェェ！と心の中で叫んだ。その後、新八は近くにいる銀時に聞いた。
「何でＴＯＬＯＶＥるも混じってんだァァァァァ！」
「この話は基本何でも有りだからだ。」
「・・・はぁ・・・」
ため息をつく新八、それをよそにスネークは呟いた。
「性欲を持てあます。」

「さぁ！続いては今年度『混沌学院美男美女ランキング』のトップ集の登場だぁぁぁぁぁぁ！」
ゼロスの紹介で２Ｚの人気者が現れた。ハヤテはハ―マイオニーで後の男子集はメイド姿で。女子は全員危ない水着で。
「おォォォォォォォォとォ！ここでまさかのサービスシーンだァァァァァ！まじかで見られない読者はかわいそう！」

彼らの登場で観客は大興奮した。
「帰りたい・・・」
「早く終わって・・・」
ハヤテとエミルは呟いた。
「いやー、大人気ですねぇ！ハーマイ・・・おっと、ハヤテ君。」
「同じクラスのよしみで早く帰らせて下さい！」
「駄目駄目ぇ、こんな早く帰っちゃあファンに失礼だろ？」
そうだそうだ！帰らないでェ！ハヤテー結婚してくれェ！などと声が上がった。
「じゃあ次にハヤテのかわいい彼女のナギちゃんにインタビューしたいと思います！」
「ゼロス！貴様！こんな所で何を言うんだ！恥ずかしいではないか！」
「えーっと・・・ハヤテファン、ナギファンには残念なお知らせ・・・二人はもう付き合ってます！」
ここでハヤテとナギはゼロスを突き倒した。
「二人は数ヶ月前から付き合っています！かなりラブラブです！授業中でもイチャイチャしてます！」
ハヤテとナギはもう言う事が無かった。ただひたすら顔を赤く染めていた。
「ではここでキスをしてもらいます！」
「あわわわわ！何言ってるんですか！」
「ラブラブ何だろう。」
「それでも人の目が」
「ハヤテ」
ナギが呼んだ。
「何ですかおじょ」
ここでナギがハヤテにキスをした。観客は騒いだ。
「お嬢様・・・」
「奴を黙らせるのはこの方法しかない・・・多少恥ずかしいが・・・

」
「いやー御馳走様でした！じゃあ・・・野郎の気持ち悪いメイド服姿は置いといて・・・」
「えええええー！」
観客の女子から声がした。
「はぁ・・・仕方ない。会場のレディの為だ。じゃあインタビューするぜ。エミル君、メイド服の気分はどうよ？」
「よくありません！何かスースーします！」
「そうかそうか！で、スカートの下は何？ズボン？」
「・・・・体育の制服です・・・」
「そうか！ハヤテは直に来てるってのにねぇ！というわけでさわ子先生！」
後ろからさわ子先生が現れた。
「今からハヤテ君の生着替えを始めたいと思いますぅ！」
「えええええええ！聞いてない」
「ふふふふふ！かーくごぉぉぉ！」
「はっ！ちょ・・・やめて・・・・・・・アァァァァァン！」
ハヤテの叫び声が会場に響いた。で、その姿は・・・スク水。
「ヒャ～ハハハハハハ！似合いすぎ！マジで似合いすぎ！」
「笑い事じゃありません！」
涙声で怒るハヤテ。
「ひー・・ひー・・じゃあ次はレディ達に話を聞いちゃうぜ！で、どうよ。気分は？」
「よくない！」
「はずかしい・・・」
「早く帰りたい・・・」
「この衣装・・・プレジェクトディーヴァでもない・・・」
「ん？あれ・・・よく見たら澪ちゃん以外胸ないね！でもこれはこれでいいよ！」
「それ・・・褒めてるの？」

鬼モードのヒナギクが木刀をゼロスにつきつけた。
「いやぁぁぁ、その・・・すんません・・・ん？」
ゼロスの目にはカンペが見えたカンペには『時間が無い！早くしろ！』と書かれていた。
「いやぁ、そろそろ残念だけどお別れの時間だね。」
「やっと帰れる・・・」
「じゃあ２Ｚの皆さん！本日はありがとうございました！」
拍手の中２Ｚは帰って行く・・・だが事件は起きた。
「おわぁ！」
「お嬢様！」
ナギがこけてハヤテがナギのクッションとなった。だが、ハヤテに押され澪が少しよろけた・・・そして、壁の方で少し出ていた釘が澪の水着の腰の部分を破いた。で、澪はこけて水着が少しずれてしまい・・・見えてしまった。本人もそれに気づくのは数秒後だった。
「アアアア

「澪も・・・ごくろうだった。・・・元気出せ。」
あの日以来生気を失った澪に銀時は励ましの言葉をかけた。ちなみに去年創設された澪ちゃんファンクラブの会員はこの前の文化祭以来、3倍の人数に増えた。

第7話：最近の漫画の文化祭のシーンってメイド喫茶多くね？（後書き）

銀八「俺の出番いつだァァァァァァァァ！」
作者「というわけで質問やら感想やらをお待ちしていまーす。」
銀八「俺を出しやがれェェェ

第８話：テスト前の徹夜にご用心

最悪だ・・・２Ｚの一部の生徒は心の中からそう思った。混沌学園には定期的にちょっとしたテストがある。そのテストで得点が全体の４割以下だと再テストがあるのだ。で・・・その結果は・・・

「それじゃあこの前の定期テストをお返しします。」

２Ｚの英語担当であるマリアがこの前やったテストの返却を始めた。

「秋山澪さん。よく頑張りましたね、満点です。」

「あ・・ありがとうございます！」

「桂ヒナギクさん。あなたも満点です。」

「やった・・・」

「三千院ナギさん。ナギ、頑張ったわね。満点よ。」

「フフン、当然の事なのだ。」

「シャナさん。満点よ。」

「当然の結果よ。」

「志村新八さん、・・・６９点・・・地味ですね。」

「ほっといて下さい。」

「西沢歩さん、・・・５５点・・・」

「再試験なくてよかった・・・」

「神楽さん、・・・４５点。」

「うっしゃ！ギリギリある！」

「孫悟空さん・・・４１点・・・本当にギリギリでした。」

「ヒェー、あぶねぇあぶねぇ。」

「モンキー・Ｄ・ルフィさん・・・同じく４１点。」

「うっし！」

「近藤勲さん・・・３４点、再試験です。」

「ちくしょ～！」

「土方さん・・・・２１点」

「くっ・・・」
「後この文章だけ達筆ですけど・・・」
マリアが指をさす問題の答えにはＭＡＹＯＮＥＺＵ　ＬＯＶＥの文字だった。
「先生、この達筆でボーナス点」
「あげません」
土方はチクショーと呟いて席へ戻った。
「沖田さん・・・１２点」
「ちっ・・・」
「後この文章だけ達筆ですけど・・・」
マリアが指をさす問題の答えにはＨＩＪＩＫＡＴＡ　ＩＳ　ＤＥＡＤの文字だった。
「先生。この文章の達筆と土方の死でボーナス点」
「あげません。」
「沖田テメェ本気で斬るぞ。」
しぶしぶ席に戻る沖田。
「桂小太郎さん・・・０点。」
「何でですかァァァァァ！」
バカの方の桂は叫びながらマリアの方へ向かった。
「当たり前です。答案は真っ白ですから。あと・・・」
マリアは桂の答案を裏返した。そこにはやけにリアリティなエリザベスの絵が描かれていた。
「何ですかこれ？」
「ペットのエリザベスです。テスト時間をフルに使って描きました。」
「あの・・・テストですよ。お絵描きの時間ではないですよ。」
「だから先生。この絵に免じてボーナス１００点」
「あげませんよ。」
というようにどんどんと発表された。で、再試験になったのは・・・近藤、土方、沖田、桂、ロイド、ヤムチャだけった。

「再試験になった人は来週の放課後、再試験を行います。場所は2Bです。」
と言ったところでチャイムが鳴った。
「範囲は定期テストと同じ所です。それでは起立、礼。」
「ありがとうございましたァァァ。」

「はぁ・・・どうしよう・・・」
「俺もだよ。」
ここでため息をつくのがロイドとヤムチャ。
「まさか悟空より下とは・・・」
「どうしよう・・・コレットに教えてもらおっかな・・・」
「いいなロイド。お前には優秀な彼女がいて。」
「確かに勉強の方は優秀だけど・・」
ここでドタンバタンと騒音が聞こえた。
「・・・・まさか。」
ロイドは音のした方へ行った。
「いたたた・・・」
コレットがこけて倒れていた。しかも壁を貫通して。
「コレット・・・またか。大丈夫か？」
「うん、大丈夫だよ！」
「おいおいおい、またコレットかよ。」
ジャンプを片手に銀時がやって来た。
「今月入って7回目だぞ。気をつけろよ。」
「はーい。」
その光景を見ていたヤムチャはこう呟いた。
「ロイドもいろいろ頑張ってんだな。」

「あああああ！どうしよう！本当にどうしよう！」
ここで頭を抱えて迷っている近藤。
「仕方ねぇ。真面目に勉強するしかねぇな。」

と土方は言った。
「どうせ範囲は同じなんだ。そこんとこを集中的にやれば何とかなる。」
「そうか！分かったぞトシ！」
と言って近藤は走って去って行った。
「・・・大丈夫かな？」
去って行く近藤を見ながら土方は呟いた。

で、ロイドとヤムチャ、土方辺りは真面目に勉強をしていったが・・・翌週。２Ｂにて。
「近藤さん・・・何でこんなにやつれてんすか？」
「ああ・・・トシか・・・この日の為に一睡もしないで勉強をしたんだ。」
「少しは寝ろよ。で、沖田のバカは・・・」
「大丈夫でさぁ。昨夜は土方の死ぬ夢を見ておかげでぐっすりと眠れました。」
「そうか。嫌な夢だな。」
「何だもういたのか。」
ここでロイド、ヤムチャ、桂が２Ｂへ入って来た。
「お前ら。勉強はしたのか？」
「当たり前だ。この日の為にもっと美麗なエリザベスの絵を描けるようになったぞ！」
「ヅラぁ、英語のテストだぞ、落書きのテストじゃねーンだよ。」
ここで土方は確信した。一人落ちたと。
「俺達は大丈夫だ。」
「自信はある！」
「そうか。ならいい。」
それぞれが席へ着き、テスト前の勉強を始めた。そして数分後、マリアが入って来た。
「はい、これから英語の再テストを始めます。」

と言ってプリントを生徒達に渡した。
「いまから５０分間テストを始めます。早く終わってしまっても見直ししててください。」
そしてテストという名の戦いが始まった。ロイドとヤムチャと土方はしっかり勉強したのですらすらと解けた。・・・だが・・・。

数分後。轟音を立てて近藤が倒れた。
「近藤さん！」
ここでマリアが近藤の所へ寄った。
「どうやら勉強のしすぎで頭が真っ白になったようですね。近藤君？分かります？」
「あれ？ここはどこだ？そして僕は誰だ？」
「頭の中が真っ白になったァァァァァ！」
近藤は記憶を失った。で次に２Ｎの闇遊戯が立ち上がった。
「もう駄目だ！こんな難問解けるはずがない！」
ここでＡＩＢＯが現れた。
（君ならできるよもう一人の僕！自分を信じるんだ！）
「でももう何が何だか分からないＺＥ！」
（だったら僕に代わる？一応僕英語少しは分かるけど。）
「頼む！ＡＩＢＯ！」
ここでもう一人の遊戯と交代をし・・・
「出来ました！」
と言ってマリアにプリントを提出し闇遊戯に変わった。
「さすがＡＩＢＯだＺＥ！」
でマリアが遊戯の答案を見て・・・
「遊戯君？何ですかこれは？」
「どうしたんだ？」
遊戯は自分の答案を見た・・・答えには・・・
問１　以下の言葉を略しなさい。
（１）　これはリンゴですか？　いいえこれは私のお稲荷さんです。

答　ＭＡＲＩＡ　ＩＳ　ＭＩＳＯＪＩ
（２）　これは何ですか？　これはあなたの抜け殻です。
答　ＯＴＯＳＥ　ＩＳ　ＢＡＢＡＡ
（３）　あなたは一体何なんですか？
答　マリアさんじゅうななさい　マリアさん　じゅうななさい
マリア　さんじゅうななさい　マリア　３７歳
「ＡＩＢＯ！これは」
遊戯は後ろを見たそこにはなぜか実体化した遊戯が立っていた。
「ドゥヒン☆もう一人の僕！永遠にお休みー♪」
「ＡＩＢＯーーーーーーー！」
その一方マリアは教室にあった電話である人物に電話をかけその後呼び出し音が鳴った。
『２Ｎの闇遊戯君。マリア先生とともに理事長室へ来て下さい』
「・・・・・・！」
「さぁ、行きましょうか♪」
「ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ！ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ！ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ！」
闇遊戯は最後まで抵抗したが結局はマリアに連れてかれた。その後、下の階から闇遊戯の悲鳴が轟いた。

「ナァァァァァァ！」
２Ｂの真田幸村が頭を抱えた。
「分からん！何のことやらさっぱりだ！こうなるんだったら正宗殿の口調を真似しとけばよかったァァァァ！」
「くよくよするな！幸村よ！」
ここで教室を出て行ったマリアの代わりに武田信玄先生が来た。
「どんな難問でも思いっきりぶつかれ！そして砕けろ！諦めたらそこで終了だ！そういう事はお前が一番知ってるではないか！」
「お館様・・・」
「叫べ！幸村！腹の奥底からァ！」
「おおお！お館様ァ！」

「幸村ァ！」
「お館様ァ！」
「幸村ァ！」
「お館様ァ！」
「幸村ァ！」
「お館様ァ！」
「幸村ァ！」
「お館様ァ！」
「幸村ァ！」
「お館様ァ！」
「幸村ァ！」
「おや」
「黙ってやってろォォォォォォォォォォォォ！」
怒った土方が叫びながら二人の顔を机にたたきこんだ。

ヤムチャはテストを終わらせ、見直しも済ませ、少しボーっとしていた。そこに沖田が何かを合図した。
（どうした？沖田？）
沖田はテストを裏返した。体はフリーザ様第２形態だが、顔はマリアだった。という絵が描かれていた。ヤムチャは爆笑しそうになったが何とかこらえた。その後、ヤムチャもテスト用紙を裏返して何か描き始め、沖田に見せた。それは体はケンシロウのイラストだがだが顔はマリアのイラストだった。
（どうだ？沖田？）
（ヤムチャ、やるじゃねぃか。）
二人の落書きバトルが始まった。体は戸愚絽１２０％だが、顔はマリア。体は東方不敗だが、顔はマリア。体はドラえもんだが、顔はマリア。体はマリアだが、顔がラオウ。
体はマリアだが、顔はこまわり君。（マニアック過ぎてすみません。）体は江田島平八だが、顔はマリア。体はマリアだが、顔がマリク。

体はマリアだが、顔がゴンさん。
「何しているんですか？」
ここでマリアが現れた。マリアはヤムチャと沖田の答案用紙を取り上げ、裏の落書きを見た。そして怒りのオーラを発した。
「どうですかぃ？この芸術作品。」
「これのどこが芸術ですか・・・・！」
震える声で声を発したマリア。
「二人とも、ちょっと廊下へ・・・」
マリアはヤムチャと沖田を廊下へ連れ出した。その後、二人の悲鳴がこだました。

今２Ｂの教室には怒りのオーラがまだ発生しているマリアと机にめり込んだまま気絶している幸村と信玄。廊下にはあのポーズで気絶しているヤムチャと沖田。そして記憶を失った近藤。そんな中で時間は過ぎて行った・・・そしてチャイムが鳴った。
「はい。では後ろの人からプリントを集めてください。今日はこのまま帰っていいです。」
とプリントを集め、今日は解散となった・・・。

翌週。２Ｚにて・・・。
「じゃあ近藤、土方、沖田、ヅラ、ロイド、ヤムチャ。この前の再テストの結果だ。まず近藤からだ。」
「僕は近藤という名前ですか？」
「・・・そーいやー記憶失ってたんだ。・・・じゃあ土方。」
「はい。」
「８７点だ。」
土方は銀時からこの前のテストを受け取った。
「次ィ沖田とヤムチャ。・・・二人共８９点だが・・・この後ろの落書きは何だ？」
銀時は答案用紙の後ろに描かれてあった改造マリアのイラストを

見た。
「ああこれはマリア改造計画です。」
「しょーもねーなー。だったらもうちょういネタに走れよ。体が（ピーーーー！）で顔がマリアとか、体がマリアで顔が」
ここで銀時の背後から殺気が走った。
「ふ・・・二人ともとにかく頑張った！」
震える手でテストを渡した。
「次、ロイド。７７点。・・・で・・・ヅラぁ、４１点・・・マリア先生が言うにはこの前のテストのビリがオメーだヅラ。」
「何でですかぁ！」
叫んでから桂は銀時の方へ向かった。銀時が桂の答案用紙を裏側にした。そこにはすごくリアリティなエリザベスが描かれていた。
「何だこれ？」
「エリザベスです。」
「それは分かる。ただなー、お絵描きタイムじゃねーンだよ。テストは。それなのにオメーは何やってんだよ。」
「描きたいから描いただけです。」
「アホかオメーは。だったらヤムチャと沖田が描いた改造マリアの方がネタとして面白かったわ。あの人は頑張って１７歳って言ってるけどありゃどう見てもみそ」
ここで呼び出し音が聞こえた。
『２Ｚの銀時先生。マリア先生が呼んでいます。とんでもなく怖いオーラを発しているので早く体育館倉庫の裏側へ来て下さい。なぉ、来ないと翌朝とんでもない事になるって言ってました。』
「・・・・・・・・・・・・オメーら・・・・祈っといてくれ。」
と言い残し、銀時は体育館倉庫へ向かって行った。そして、銀時の叫び声が学院中に響き渡った。
「こんなオチでいいの？」
今回全く出番が無かった新八が呟いた。

第8話：テスト前の徹夜にご用心（後書き）

作者「さて、今回は質問も何もないので脇役の人と話したいと思いまーす。じゃあ1Zのあずにゃん。」
梓「やめてくださいその呼び方。」
作者「で、どうよこの作品？」
梓「滅茶苦茶ですね。全体的に。」
作者「そうですね、でもこれをうりにしているんで。」
梓「ははは・・・それよりあの人銀時先生ですよね。」
銀八「あー？呼んだー？」
作者「ああ、あの人は銀八先生。小説内の銀時とは違うから。」
梓「わかりました。」
銀八「何この企画？楽しくおしゃべりのコーナーか？だったら俺にもしゃべらせろ。質問や感想をどんどん送ってください！お待ちしていまァァァァァァす！」
梓「それ最後に言う言葉ですよね。」
作者「そうだな、じゃ話のネタもないんでこれでお開きということで。」
梓「早すぎないですか！？」
作者「というわけでまた次回～。」

第9話：転校生の特典。その日一日だけクラスの有名人になれる（前書き）

新キャラ登場しまーす。
銀八「まさか俺が本編に！？」
出るわけねーだろ。
銀八「・・・・・・。」

第9話：転校生の特典。その日一日だけクラスの有名人になれる

早朝、混沌学院の近くで爆音が鳴っていた。音の元となってるのはロードローラーだった。乗っているのはＤＩＯ様ではなく学生服風の衣装を着た双子だった。

「何だか今日は学校を休みたい。」
ナギは朝食中に言った。
「何でですか？」
ナギの執事であり、彼氏であるハヤテが聞いた。
「やな予感がする・・・」
「でも行きなさい。」
混沌学院英語教師でありナギのメイドであるマリアが言った。
「お嬢様、大丈夫ですよ。何があっても僕が守ってあげますから。」
「ハヤテ・・・」
ナギはハヤテに抱きついた。ハヤテもナギを抱きしめイチャイチャし始めた。
「あの～そんな事をやってる暇があったら朝食を食べてくださいね。」
ひきつった顔でマリアが言った。

7時半ごろ、新八は混沌学院についた。そこにはクラスメイトである初音ミクが校門に立っていた。
「あれ？ミクさん。おはようございます。」
「あ、新八君。おはよう。」
「どうしたの？誰かと待ち合わせ？」
「そうだけど・・・ここへ来る途中にロードローラーを見かけなかった？」
「いえ・・・」

「そう。道に迷ってるのかな・・・」
一体どうしたのと聞こうとしたら遠くの方で爆音が聞こえた。それと同時に悲鳴も聞こえた。
「な・・・何だ？」
「もしかして・・・」
新八はしばらく様子を見ていた。数分後、悲劇が起きた。新八の目の前にロードローラーが突っ込んできたのだ！
「ギャアアア

起き上った新八が聞いた。
「私の従兄。」
「へ？」
「誰？この地味オーラ全快の眼鏡さんは？」
「誰が眼鏡さんだァァァァ！ってか従兄ぉ！」
「うん、そうだよ。今日から２Ｚに入るって。」
「鏡音リンです。」
「鏡音レンです！」
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！と新八の声が響いた。

「というわけで。今日から皆と一緒に勉強する仲間の鏡音リンとレンだ。仲良くしろよー。」
朝のホームルーム。銀時が軽くリンとレンを紹介した。
「えーと。ミクの従兄らしいから二人ともミクの横でいいな。」
「はい。」
「ミク、この学院の事をこの二人に教えてくれ。」
「分かりました。」
リンレンはミクの横の机に向かった。
「あと、もう一人くるっぽいけど・・・なかなかこねーから授業始めっぞ。今日の課題はジャンプの未来について」
「待たんかィィィィ！」
ここで窓を突き破って乱入者が現れ、銀時に蹴りを入れた。この乱入者を見てナギは目を大きくした。それはハヤテも同じだった。
「何で国語の授業でジャンプの未来について勉強せなあかんねん！」
ハイテンションで銀時にツッコミをした。
「ぐ・・・いててて・・・お・・オメーら、こいつは今日から皆と勉強する事になった・・愛沢咲夜だ・・・皆・・・あとは・・た・・・のん・・・だ・・・」
と言い残し、銀時は倒れた。
「つーわけでヨロシクな。」

「せんせェェェェェェ！」
今クラスはそれどころじゃなかった。
「え、何！咲夜ちゃんもナギちゃんの従兄なの！」
唯は驚いた。昼休み。誰もが今日の転校生の所に集まっていた。
「まあな。ところで噂で聞いたんやけどナギとハヤテが付き合ってるって・・・あれ、本当か？」
「本当だぜー。あの二人、文化祭でチューしたぜ！あれはすごかったなー。」
「本当か！いやー見たかったなー。」
「恥ずかしい事を言うなァァァァァ！」
顔を真っ赤にしたナギとハヤテの飛び蹴りが律の脳天に命中した。
「いたぁ！何するんだァ！」
「ところで咲、何でお前が転校してくるんだ。」
「私の話を聞けぇ！」
怒る律を置いといてナギは従兄の咲夜に聞いた。
「いやー、作者の都合でねー。」
「何だよその理由！」
ここで新八がツッコミをした。
「何やこの眼鏡。」
「誰が眼鏡だァァァァァ！朝にもリンレンにも言われたんだよォォォォ！」
「ああ、こいつは２Ｚの神速のツッコミマイスター！志村新八だよ！」
「何か前と変わってない？」
自分を紹介した律に新八は軽いツッコミをした。
「ツッコミ？」
ここで咲夜はどこからか取り出したか分からないが巨大なハリセンを新八に向けてこう叫んだ。
「ウチと勝負や！」

「はい、という訳で！眼鏡ＶＳ咲夜ちゃんのツッコミ対決の始まり始まりィィィ！」
ゼロスの掛け声で勝負が始まった。
「こらぁ！誰が眼鏡だァァァァ！名前でいェェェェ！」
「司会は俺様、ゼロスでお送りしま～す！」
「オイィィ！無視かァ！」
新八の叫びを無視してゼロスは続けた。
「では今回の対決の趣旨は誰かがボケたら早く、正確に、面白くツッコミをしてもらいます！それで審査員に見てもらって最終的に点数が多い方の勝ちとします！では審査員の皆さんどうぞ！」
ゼロスが審査員の人物達の紹介を始めた。
「審査員のスネークだ、趣味はダンボール集め。」
「何だよその趣味！」
「何やその変な趣味！」
二人はいきなりツッコミをした。
「おー、まだ始まってもないのにいきなりツッコミをした！でもこれはまだ点数には入らないんだよね・・・じゃあ次の方どうぞ！」
「将軍の徳川茂茂だ。よろしく頼む。」
「って将軍かよォォォ

でこの学院にいるんだ。私は君が転校してくる前にこの学院にいたんだ。」
「何やその理由！」
「まぁ・・・序盤の方でハンデがついてしまいましたけど今から始めたいと思います！ではレッドカーペットに注目して下さい。」
その後、音楽が鳴り右から桂小太郎が現れた。
「一番！桂小太郎！ラップをやります！」
「やな予感がするぅ！」
「ラップ？サランラップか？」
ここでヅラはわきに抱えていたラジカセを地面に置いて再生ボタンを押した。そのあとあのラップの音楽が流れた・・・。
やるなら今しかねーＺＵＲＡ♪
やるなら今しかねーＺＵＲＡ♪
攘夷がＪＯＹ♪
ＪＯＹが攘夷♪
「はいここで」
と言った時点でヅラの足場が開き、ヅラは落ちて行った。
「（ピーーーーーーーーーーーー！）の（ピーーーーー！）のコーナーかァァァァ！」
「何やあのラップ！吐き気がしたわ！」
ここでそれぞれの台に新＋４０　咲＋５０と付いた。
「ここで新八６０点！咲夜ちゃん５０点！点差が一気に縮まったァァァ！」
「何なんですか今の？何で桂さんが？」
新八は今の悪夢の事を聞いた。
「次も今のようにおなじみの面々がボケまくるからそこでツッコミをしてもらう！後ちなみに罰ゲームもあるから。」
「おいィィィィ！それを先に言えェェェェェ」
「何で今頃言うんやァァァァ！」
ここで新＋５０　咲＋５０と付いた。

「じゃあ次お願いします！」
右から土方が現れた。
「二番、土方十四朗。マヨネーズ」
ここで床が開き土方は落ちて行った。
「何でだァァァァァァ！」
土方は叫んでいた。
「マヨネーズで何をするつもりだったんだァァァァ！」
「何やあいつ！マヨネーズの何やァァァ！」
その後、すぐに次の生徒が現れた。
「三番、沖田総悟。土方のバカを殺し」
ここで床が開いた。で、下から声が聞こえた。
「くたばれ土方ァァァァァ！」
「おわァァァァァァ！」
「攘夷がＪＯＹ♪」
「下で何が起きてんだァァァァ！」
「早く助けてやれェェェ！」
次は・・・
「四番！２Ｂより真田幸村！おおおおおお！おや！かた！」
床が開いた。
「様ァァァァァァァァァァァ！」
「うるせェェェェョ！」
「何で戦国武将がここにいんねん！」
次に・・・
「五番、２Ｕより星です。一曲歌います。ヒーモヒモヒモ」
床が開いた。
「何だよその歌！」
「いやでも頭に残るわ！」
だが歌は下から聞こえていた。
「ヒーモヒモヒモヒーモヒモーヒーモヒモヒモヒモヒーモヒモォォォォォォ！」

「黙れェェェ！」
二人のツッコミが見事にシンクロした。
数分後。
「いやーなかなかいい勝負ですねー。ここで観客の人にインタビューをしたいと思います！転校生の鏡音リンさん。どうですかこの勝負？」
「これはいい勝負よ！この戦いは後に歴史に名を刻むと思います！」
「何の歴史だァァァァ！」
「そうですか。じゃあ同じく転校生のレンさん。どんな感想をお持ちで？」
「素早さ、正確さ、アクション・・・その三つのステータスは二人ともほぼ同じです。しかし、少しのミスが後に苦しい展開にさせるでしょう。」
「お前は解説者かァァァ！」
今の状態は新八３５０点、咲夜３４５点。地味だが点差はある・・・しかし、この後の展開でどうなるのかは・・・分からない。
「では最後となりましたぁ！このツッコミですべてが決まります！ではどうぞ！」
右から来たのは・・・
「三十番、ネギです・・よろしくお願いします・・・」
その人物とは２Ｚの数学担当であり、２Ａの担当であるネギ先生だった。
「ボケる気ねェェェ！」
「何か出したよこの作者ァァァ！」
ここで新＋１００、咲＋５０と付いた。
「な・・・何でや！何でウチがこんな低い点数。」
「ここは私が解説しよう。」
茂茂が席を立った。
「実は前から作者はネギまのキャラを出そうとしていたが最近は全

く見なくなってしまった。で、この前暇つぶしにネギま7巻を見たからな。で、ようやくこの場で出せるのだ。ちなみに前々からだそうとは思っていたらしい。」
「お前は作者の何が分かるんだァァァァ！」
咲夜は将軍の髷をむしり取った。
（あのバカやりやがったァァァァ！）
この場にいた全員が思った。とここで罰ゲーム、咲夜とランプがついた。
「えええええええ！ウチが罰ゲームぅ！こういう場合って男がやるもんじゃないのか！」
「負けは負けだ。素直に罰ゲームを受けろ。」
「ぐぅ・・・」
ここで咲夜の前にテーブルが運ばれてきた。上にはシュークリームがあった。
「罰ゲームは激辛シュークリームを食べていただきまーす！」
「待たんかぃ！」
咲夜は巨大ハリセンでゼロスの頭をたたいた。
「べたべたやなぁ！それだったら恥ずかしいコスとかそんなんじゃないのか！」
「・・・・・・あ！」
ゼロスは教室を出て行った。その後、さわ子先生を連れて戻って来た。
「いやー実はこの子が先生の作った衣装を着てみたいと言ってましてねー。」
「本当！」
さわ子は咲夜を見渡した。
「いい素材ねぇ～。」
「あの・・・この先生は何や？」
「さわちゃん先生だよ。」
「この人が作る衣装はかなり大胆だぜ～。」

唯と律が言った。この時点で咲夜は嫌な予感がした。
「あ！ウチ、少し用を」
「嘘ついたって無駄無駄♪」
さわ子は嫌がる咲夜を連れて出て行った。
「・・・さーて優勝した新八にはここに立ってもらいまーす！」
ゼロスは新八を台の上に載せた。
「優勝おめでとうございます！今の御心境はどうですか？」
「うれしいです！やっぱこの作品のツッコミ役はこの僕しか」
と言った瞬間だった。床が開き新八は落ちて行った。
「・・・・忙しい中審査員の皆さんには来ていただきありがとうございました！じゃあまた次の・・・え？次ない。・・・じゃあごきげんよう～」
ゼロスがしめて戦いは終わった。ところ変わって職員室にて銀時が呟いた。
「俺前回と今回で・・・出番なくね？」

第9話：転校生の特典。その日一日だけクラスの有名人になれる（後書き）

作者「ここでお知らせがあります。少ししたら2Zのクラス票を作りたいと思います。要望があったら他のクラスの連中のクラス票も作るので楽しみに待っていてください。」

梓「他にもご感想、ご意見も受け付けています。」

銀八「お便り待っているぜ！早く俺を活躍させ」

作者「銀八先生、そればっかだとしつこいって言われるぞ。」

銀八「・・・。」

第１０話：修学旅行での行き先に困ったら・・・そうだ、静岡行こう（前書き）

１０話超えました！これからも応援よろしくお願いします！

第１０話：修学旅行での行き先に困ったら・・・そうだ、静岡行こう

「という訳で修学旅行は静岡だ！」
銀時は言った。
「先生！何で静岡なんですか？ここは普通京都か沖縄でしょ？」
新八が聞いた。
「理由は秘密だ。」
「秘密かよ！」
「せんせーい！」
ここで早朝早弁の会の連中が一緒に手を挙げた。
「静岡ってミカンが有名だよな！食べられるんだよな！」
「静岡しか無いステーキ屋があるって聞いたぞ！そこ行くのか？」
「静岡茶は飲めるアルか！楽しみアル！」
食関係に関する質問。
「それは言ってからのお楽しみだ。」
「先生。」
ここでハヤテの彼女のナギが聞いた。
「静岡って何かありましたっけ？」
「たりめーだよ。富士山あんだろ。それに徳川家康の何かって前言ってたぞ。それに夕方からはアニメの再放送がやってんだよ。」
「マジで！」
「それに土曜日にはぐっさんの相方がレギュラーで出ている番組もあるぞー。」
「それはどうでもいい。」
「先生！今東静岡でガンダムが見れるって本当ですか！」
千世が聞いた。
「ああ。見れるぜ。」
「フフフ・・・悪いとこじゃないわね・・・静岡って。」
（この話を書いている時点では東静岡のグランシップって場所にガ

ンダムが立っています。まぁ後にかたずけられるけどね。）
とまぁその後は色々と静岡に関する質問が飛び変わった。そして授業終了のチャイムが鳴った。
「じゃあまた明日らへんに修学旅行のしおり持ってくるから。じゃあ今日はこれで解散！」

時は流れて修学旅行一日目。混沌学院は４泊５日で修学旅行をする。で、２Ｚバスの中・・・。
「ぐおォォォォォォォ！リュカがかわいそうだぁぁぁぁぁぁ！」
「出来る事なら変わってやりたいィィィィ！」
「エンディングまで泣けねェェェェェ！」
２Ｚはバスの中でアニメ映画『ＭＯＴＨＥＲ３』を鑑賞していた。ちなみに３部に分かれていてその１部である。
「おめーら、少しは・・・ぐすん。静かに・・・ズズズ・・・見やがれ。」
「アンタも泣いてんのかよ。」
涙を流しながら話している銀時に新八は呟いた。

「はい、じゃあここで２０分の休憩だ。できるなら便所行って来いよー。」
途中のサービスエリアで休憩を始めた。新八は何か飲み物を買おうと店に入った。店には静岡名物の緑茶や土産で有名なこっこやうなぎパイが置いてあった。新八はペットボトルで販売されていた静岡茶を購入し、バスに戻った。バスには数名が残っていた。
「ハヤテ！Ａのエリアにヴァジュラが行ったぞ！」
「ここは俺に任しておけェェェ！」
「お願いします、土方さん！」
ハヤテ、ナギ、土方はゴッドイーターの協力プレイで遊んでいる。別の方では・・・
「おい！誰だ？俺に赤こうらをぶつけた奴！」

「知るかァァァ！んなことよりこっちは風船が一つしかない・・・死んだァァァァ！」
クラスの男子集がマリオカートのふうせんバトルで遊んでして、それぞれがいろんな遊びをしていた。
「おー、新八。オメーも戻ったのか。」
ここで後ろから銀時の声がした。
「先生。」
銀時は自分の席に戻りＤＳの電源を入れた。そしてバスによくあるペットボトルを入れるところにお菓子を置いた。
「何やるんですか？」
「何って・・・ＭＯＴＨＥＲ３だよ。スネーク先生に進めてくれって頼まれてよー。」
「そ・・・そうですか・・・。」

休憩時間が終わり、一同は最初の目的地である富士山のふもとへ来ていた。
「おおおおおおおお！」
「すんげぇぇぇぇぇぇ！」
「やっぱまじかで見るとすごい迫力！」
「確かにすげーな。」
「珍しいな。沖田が感動するなんて。」
土方は沖田に言った。
「いやいや、俺が感動したのは樹海の方ですぜい。あん中に土方を」
「てめーをあん中にぶちこんでやろうか？」
いつものようにバトルを始める土方と沖田。
「巧～見て見て、すごい山ね～。」
巧にくっつく千世。
「千世！あんた巧にくっつきすぎよ！」
ツンデレの文乃が怒鳴る。で無口の希は巧の背中に寄るだけ。でまたまた別の方では。

「ハヤテ、すごいな。」
「はい。とても雄大で美しいですね。」
イチャイチャするハヤテとナギ。
「は～あの森見てたらブロッコリー食いたくなってきたよ。」
「俺もだよ悟空。」
「ドレッシングをいっぱいかけて食いたいアル。」
変な会話をする早朝早弁の会。とここへ・・・
「カカロットォォォォ！」
２Ｎのブロリーが悟空に向かって突進してきた。で、悟空は間一髪それをよけた。
「あの中にお宝があるかも～。」
目を煌かせてナミがこう言った。
「あるわけねーだろ。あるとしたら死体だよ。」
新八は言ってやった。
「この景色見てたら歌が浮かんだ！」
「僕も！」
「私も。」
「じゃあいっしょに歌おうか！」
「うん！」
ボーカロイド達は突発的に自作した歌を歌い始めた。

夢の樹海
そこには、夢と希望があふれてる。
絶望した者だけがここへ来る。
やらかした奴が森へ行く。
少ししたらそれはパラダイス～。

「何縁起の悪い歌歌ってんだよ！」
新八はツッコミをした。
「澪～夜中にここに来ると自殺した者の悪霊がどど～んと」

「いやァァァァァァァ！」
澪はバスの中へ走って向かって行った。そんな光景を見て新八は思った。このクラスのテンションはどこへ行っても変わらねぇ！とそこで妙がぶっ飛ばした近藤に当たって転倒した。

で夕方、奴らが止まる旅館にて・・・
「うおォォォォォォォォ！すごい！らんまがやってるぞ！」
「へー、懐かしいですねー。」
ハヤテとナギは再放送でやっていたらんまを視聴していた。その一方では。
「おらァァァァァ！」
「こなくそォォォォォ！」
ゾロとサンジが卓球で勝負をしている。
「うめぇぇぇぇ！」
「この饅頭、中にお茶が入ってるぞ！」
「すげーうまいアル！」
静岡の食に感動している早朝早弁の会。その横にはお茶饅頭を食べている唯の姿もあった。
『てめーら、そろそろ晩飯の時間だから宴の間に来い。』
銀時から連絡が入った。その後、誰もが宴の間にやって来た。目の前にはすごく豪華な料理があった。
「おおおおおおおおお！」
その光景には誰もが感動をした。
「えーっと。今から挨拶」
「いただきやァァァァァァァァす！」
銀時のいう事を聞かずに生徒達は目の前の食事を食べ始めた。
「・・・・・誰も俺の話聞いちゃいねー。」
「まぁ・・・・銀時先生・・・」
ここでスネークが銀時の肩に手を置いた。スネークの手には酒瓶があった。

「今夜は飲みましょう。」
「・・・・ああ。」
その後は宴モードに入った。
「1番、志村新八『お前の母ちゃん××』歌いま」
新八がこう言った瞬間にあちらこちらから何かが飛んできた。
「歌うな！」
「おんち眼鏡！」
「眼鏡！」
「眼鏡歌うな！」
「死ね土方！」
「おーい、確か玄関の所に日本刀飾ってあったよな。」
批判の声が上がった。次にミクがカラオケマシーンの前に来た。
「じゃあ私が歌いまーす。聴いてください『ワールドイズマイン』」
ここで盛大な歓声が起こった。
「何この差。天と地だよね。」
新八は呟いた。

「じゃあこれから温泉タイムだ。あんまり騒ぐんじゃねーぞ。」
その後、銀時の号令のもと2Zの面々は温泉へ向かった。そんな中またバカな事を考えているバカがいた。それはプール着替え覗き事件の犯人どもであった。
「いいか、今回は前回のようなミスは犯さない。いいな。」
「ラジャー。」
エロ軍団は体操着で女湯の裏側の森へ入って行った・・・。

一方男湯では。
「はぁ〜〜〜いい気持ち〜〜〜」
新八が癒されていた。だが、
「待てぇ！沖田ァ！タオルを返しやがれぇ！」
「ボハハハハハーー！潜水艦桂号が今通るゥゥゥ！」

「うひょー！やっぱ温泉は泳ぐに限るぅ！」
「ルフィ！泳ぐなよ！」
「そう言うチョッパーも泳いでんじゃねーか！」
「オメーら静かにしろォォォォ！」
新八は叫んだ。そして思った。どこへ行ってもこいつらのテンションは変わらねェェェ！とそこに。
「だから！ハヤテは私の嫁だ！いや婿だ！」
「何でシャナちゃんは悠二君にいっつもくっついてるわけ？」
「うるさいうるさいうるさい！」
「だーかーらー私と巧の関係はただの幼馴染だから！」
女湯の方から声がした。で、一部の男子集はフラグ建てまくりの悠二、巧。そしてかわいい彼女がいるハヤテの方を睨んだ。そして殺意を抱いた。
「ねぇ・・・何か皆怖いんだけど・・・」
「どうしたの？何でそんな目でにらんでるの？」
「皆さん・・・一体どうしたんですか？」
ここで銀時とスネークが彼らの後ろに立ち・・・叫んだ。
「くたばれやこの女たらしくそ野郎はァァァァァァァ！」
強烈なアッパーカットを決めた。
「ウワァァァァァァ！」
三人は上空へ舞った。その後、バシャアアアン！と音がした。
「ヨッシャァァァァこのまま女湯へ落ちてオメーらの評判落ちやがれェェェ！」
「アンタら本当に教師？」
ジーニアスは叫んだ。

「ヒヒヒ・・・女湯まであと少しだ・・・」
「ああ。皆。頑張れよ。」
エロ男達は地道に女湯へ近づいて行った。そこに何かが飛んできた。かなり尖っている木の枝だった。

「誰だ！」
近藤は叫んだ。前方から二つの影が現れた。ロイドとエミルだった。
「お前ら、全然懲りてないな。」
「反省して下さいよ。本当に。」
「・・・俺らの野望を粉砕するつもりか・・・・」
「ああ。」
「だったら俺達の楽園の為のロードの為に・・・・散ってもらうぞ！」
「ならばこっちも全力で行くまでだ！」
二人のスケベ大魔王ＶＳエロ４男子の戦いが始ま
「誰がスケベ大魔王だァァァァァァ！」
・・・・・とにかく戦いが始まった。

第１０話：修学旅行での行き先に困ったら・・・そうだ、静岡行こう（後書き）

次回！

銀時とスネークのアッパーで女湯へ入ってしまったハヤテ、悠二、巧の三人。そこで待ち受けるものとは、そして楽園の為の戦士達と楽園の守護神との戦いの行方は！次回『サービスシーンは文字では表せない』どうぞご期待！

「お前はもう、死んでいる。」

「え？これ次回に続くの？ってか何でケンシロウがいるのォ！」

第１１話：サービスシーンは文字では表せない（前書き）

今回は前回の続きでございます。ちょっとえっちいネタや下ネタがあるので注意してください。

金色の闇「えっちいのは嫌いです。」

・・・

第１１話：サービスシーンは文字では表せない

（どこだ・・・ここは？何か温かい・・・フワフワする。）
意識がもうろうとしている巧に何か後頭部に当たる。
（何だこれは？それにすごく柔らかい・・・）
「・・・！・・・・・！」
（誰だ？誰かの声が聞こえる。・・・けど聞き取りにくい。何か叫んでいるようだ。）
「巧っ！巧っ！」
（文乃？何でここにいるんだ？ここは男湯・・・）
ここで巧は気付いた。自分達が銀時らのアッパーカットでブッ飛ばされ、女湯へ入ってしまった。
（そうか・・・じゃあここは女・・・）
ここで巧は意識が戻った。後ろには文乃がいた。という事は後頭部に当たる物は・・・。
「あ・・・あの・・・これは・・・先生達にブッ飛ばされて・・・」
「分かってる・・・分かってるけど・・・」
その瞬間、文乃の拳が巧の後頭部に命中した。
「どこに落ちてんのよォォォォォ！」
「ギャアアアアアアアア！」
メキメキィ！
変な音がしたが気にしなかった。巧は後ろの壁にぶつかった。
「はぁ・・・はぁ・・・先生！何やってんですか！」
文乃は事の原因となった教員に向かって叫んだ。
「そりゃー・・・むかつくからだよ。」
「アンタそれでも教師？」
文乃は叫んだ。とここで千世と希が巧の方へ向かった。
「巧大丈夫！変な音がしたいけど。」
「にゃあ・・・何だか後頭部が割れる音がした。」

千世と希が巧の方へ向かって行った。あとちなみに今の巧の状態はタオルがありません。なので、男の重要なところが丸見えになってしまっています。
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・」
千世はもちろん。羞恥心があまりない希まで赤くなってしまった。
「あんたら！どさくさにまぎれて何とんでもないもの見てんのよ！」
「見たくて見たわけじゃ・・・・・」
「・・・・にゃあ・・・・意外とおお」
「はい！そこ、それ以上は言わない！」
で、ハヤテの方は・・・。
「大変だ！ハヤテが目を回している！」
ナギが落ちてきた衝撃で目を回しているハヤテを抱きかかえてこう叫んだ。
「ハヤテ！私だ！わかるか！」
だがハヤテは依然と目を回したまま。ナギは自分の胸にハヤテを寄せ優しく抱きしめた。裸と裸で。
「ちょっと！何やってるのナギちゃん！」
「そうよ！いくら付き合ってるからって」
「うるさい！今のハヤテはちょっと危ない状態なのだ！」
「今の状態でも十分危ないよ！」
「黙れ！とにかくハヤテの事は彼女であるこの私に任せろ！」
ナギは叫んだ。
「ハヤテ君って肌が綺麗だねー。」
ここで唯が顔を出した。で、ハヤテの頬の所を触った。
「わー、すべすべー。」
「へー、どれどれ・・・すごっ！本当にこれが男子の肌かよ！」
律も出てきてハヤテの顔を触った。で、女子たちが一斉にハヤテの肌を触りだしたのでナギの怒りが爆発した。
「貴様らァァァァァ！ハヤテは私の彼氏だぞ！触れるでないィィィ

ィィ！」
「いーじゃんケチー！」
律がぶーぶーと文句を言い始めた。
「どーせ減るもんじゃないんだし」
「そんなの知るかァァァァ！」
ナギの叫びは女湯に響いた。悠二の方は・・・。
「・・・・・・・・・ここ・・・・どこ？・・・・」
「悠二！気がついたのね！」
「悠二君！私が分かる！」
悠二の方にいたシャナと吉田が声を上げた。で、悠二は彼女達のあられもない姿を見てまた気絶した。

「・・・・何でこうなるの？」
銀時はなぜか白くなっていた。そこでスネークが銀時の肩をたたいた。
「風呂出たら・・・飲みます？」
「ああ・・・」
銀時とスネークは先に温泉から出て行った。で、完全に呆れている新八達も後に出て行った。

「グワァァァァァァ！」
一方でロイドとエミルＶＳエロ軍団の戦いはすごい事になって来た。サンジがエロパワーで序盤から圧倒し、後ろから近藤、東条、家康の援護もあり一気に攻めていた。数的にはエロ軍団の方が有利なのだが戦力的にはロイドとエミルの方が上だ。だが、エロ軍団の奥底から発するエロパワーがロイドとエミルを圧倒したのだ。
「ロイド・・・すみません・・・僕もう・・・駄目・・・で・・・す・・・」
ここでエミルが傷ついて倒れた。１対４。完全に不利な状態だ。ロイドは両手に持っている剣を一つになるように重ねた。そして、

そこから光が放たれ2つの剣は1つになっていた。
「これが俺のエターナルソードだ！」
「はん！いくら秘奥義の武器を出したって。」
「俺達のエロパワーは止まらないィィィ！」
エロ軍団はロイドに向かって走って行った。
「俺も本気で行くぞ！喰らえ、天翔蒼破斬！」
ロイドの周りから光が放たれた。
「おおおおおおお！これが」
「俺達の」
「エロパワァァァァァァァァ！」
4人の拳から巨大なビームが発射された。それはロイドを飲み込むぐらいの大きさだった。
「しまっ・・・グワァァァァァァァァ

「本当よ、かなり傷があったわ。」
「大丈夫かしら・・・」
黒子の視界には御坂の全裸が映っていた。
「ああ！お姉さまァァァァ！」
「何してんだオメェェェェはァァァァァ！」
飛びついて来た黒子に大きな電撃をお見舞いした。

「やべーよ気付かれてきたんじゃね？」
「ああ、そろそろここから抜け出さないとな。」
エロ軍団は茂っている木の上にいて、望遠鏡で女湯を覗いていた。
「ヤベッ！」
「どうしたサンジ？」
サンジが声を上げたので家康が聞いた。
「い・・いや、今紬ちゃんと目があったような」
「んな訳ないだろ。ありえないよ。」
「・・・ああ。そうだ」
その時、喋っているサンジの口に何かが入った。石鹸だった。近藤が女湯を見たら紬が石鹸を持ってピッチャーが投げるような構えをしていた。
「え？おい、まさ」
近藤の口に石鹸が入った。その速さはレーザービーム並みだった。とここで木の下から声が上がった。
「いたわよ！」
「またアンタらかよ！」
「ヤベッ！気付かれた！」
サンジと近藤は石鹸を投げ捨て逃げようとした、だが。
「喰らえェェェェェ！」
妙が何かを投げてきた。妙の最終兵器である暗黒物質。もとい、かわいそうな卵焼きであった。暗黒物質はエロ軍団のズボンの尻の所に命中した。その威力はたとえズボンをはいてあったとしてもか

なり熱く感じ、彼らの尻はやけどを負った。
「ギャアアアアアア！」
「熱い！熱い！」
ここでまた別の方から何かが飛んできた。チャクラムだった。目の前には笑っているが怒りのオーラを発しているコレットと陰で顔が見えなくなる程怒っているマルタだった。
「えーっと・・・その・・・」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！とジョジョの漫画でよく見る効果音が出てきそうなオーラの二人を見てサンジは口を開いた。
「いやーまた俺達の計画を破るとは・・・さすがは女子の結束力だ。俺達の結束力も一枚岩だが、君達の方が二枚も三枚も上手だったらしい。今回は完敗」
「かっこつけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
女子たちはエロ軍団のに襲いかかった。そして、彼らの修学旅行がここで終わった。ちなみに残りの日にちはガンダムを見たりプラモ工場を見たりしていた。そんなこんなで修学旅行は終了した。話の細かい内容は・・・多分番外編とかで書く！・・・と思う。

第１１話：サービスシーンは文字では表せない（後書き）

梓「最悪な話でしたね・・・。」
銀八「ああ・・・。」
作者「仕方ねーだろ、ノリでこんな話書いたからよー・・・。」
闇「確かにひどいです。」
銀八「おい、何でヤミちゃんがいるんだよ。」
作者「さーね？」
闇「ノリで出したなら・・・結城リトより先に始末します。」
作者「やめてくれェェェ！・・・あとオメーさぁ、本当はリトのこと」

シュッ！

作者「ギャアアアアアアアアアアアアアア！」
銀八「何で俺もォォォォォォォォォォォォ！？」
梓「・・・次回も楽しみにしてくださーい。」

第１２話：サンタはいると信じたい（前書き）

今回はクリスマスの話です。これも前にかいたやつですけどまぁ気にしないで見ていってください！

第１２話：サンタはいると信じたい

混沌学院は冬休みに入っていた。それから数日後のクリスマス、誰もがいろんな風にこのクリスマスの日を迎えていた。で、その日の夜。夜中の道をリアカーの通る音がした。リアカーの主は銀時とスネークだった。

「じゃあ今からドッキリサンタ大作戦を行う。」

「ラジャー。」

ドッキリサンタ大作戦とは！今から銀さん達が２Ｚの生徒達の家へこっそりと向かいこっそりとプレゼントを置いてくるというありきたりな大作戦だ！

「じゃあこっから近くは・・・唯んちか。」

銀時は手にしている地図を手にし呟いた。あとプレゼントは冬休み前に銀時が『もしサンタにプレゼントをお願いするなら何がいい？』とアンケートを取ったのだ。

「えーっと、唯のプレゼントは・・・」

銀時が唯のプリントを取り出し見て見るとそこには『ＰＳ３』と書かれていた。銀時は後ろのリヤカーを覗いた。中には・・・うまい棒『チョコ味』がたくさんあるだけ。

「じょーだんじゃねーよ。これをポストにぶち込んどけばいいよ。」

「銀さん、後このカードのよろしく。」

スネークは銀時にクリスマスカードを渡した。そこには『メリークリスマス、ダンボールかぶれよ！』と文章とダンボールの絵が描かれていた。

「何これ？後半の奴いらないよね。」

「俺の趣味だ。」

「だからってあんたの趣味を使うなよ。めんどいからこのままいくけど。」

銀時達は唯の家についた。

「さーて、このうまい棒とカードを」
「何やってるんですか先生？」
窓の方から唯の声がした。
「・・・・・・・」
「先生ですよね。もしかしたら不審者・・・」
「・・・こんばんは、サンタクロースだよ～。（銀時、スネーク裏声）」
「・・・へ～」
唯は終始変なものを見るような眼で銀時とスネークを見つめ窓を閉めた。で、唯の家のポストにうまい棒とクリスマスカードを入れた。
「次は・・新八の家だな。」
「ああ、早く行くぞ。」
後ろから何者かの声がした。
「おめーら、そこで何やってるぅ？」
「ヤベッ・・・って・・・あんたは・・・」
「松平先生！」
そこには混沌学院の体育教師である松平が立っていた。
「ありぃ？銀時とスネークじゃねーか。サンタの衣装来て何やってんの？」
「いや、実は」
銀時は松平にドッキリサンタ大作戦の事を伝えた。
「おいおい、それだったらおじさんも混ぜろよ。」
「大丈夫か？」
「このおじさんをなめちゃいけないよ。」
「はいはい、じゃー頼みますよ。」
銀時とスネークは新たに松平をメンバーに加え次々とプレゼントを運んで行った。
「次は・・・学院の寮暮らしの連中か。」
銀時が呟き、一同は学院へ向かった。冬休みになると寮暮らしの

生徒は実家へ帰るが一部の生徒はここに残る事が出来る。今残っているのは風紀委員の連中とロイド達であった。銀時達は学院に入り、見張りのこの大作戦の説明をした。
「はい、という訳で寮に入ったんだけど・・・」
「鍵がかかってんじゃね～の？」
スネークと松平は少し不安になった。だが銀時は余裕の顔だった。
「大丈夫だ。ここの管理人にこの作戦を言った後これを借りたんだよ。」
「何だ？」
「ふっふっふ・・・」
銀時はポケットを探った。で、何かを取り出した。
「チャラリラッタラ～マスタ～キ～（銀さんだみ声）」
「おおおお！」
「これさえあればこの寮のどこの部屋も鍵がかかってようと開けちゃうよ～（銀さんだみ声）」
「これさえあればプレゼントをあげられる！」
「じゃあ行くか。こっから近くだと・・・土方達か。」
銀時達は忍び足で土方達の部屋へ向かって行った。

「じゃああけるぜ～」
銀時は部屋のかぎを開け部屋に入って行った・・・と思ったら。
「ありぃ、何やってんすか先生？」
後ろから声がいた。S王子の沖田だった。
「・・・・・・・・」
「先生？」
「こんばんは、サンタクロースだよ～。（銀時、スネーク、松平裏声）」
「何してんだいィ？いい年こいて。」
「・・・これには訳が・・」
その後沖田にこの大作戦の事を話した。

「へぇ～こんな事をやってるんですねィ～。」
「そうだ。だから君にもこれをやろう。」
スネークはうまい棒とカードを渡した。
「こんなもんいりませんけどまァ貰っときましょう。」
「じゃあこの事は誰にも話さないでくれ。」
「へいへーい。」
一同は部屋の中に入って行った。
「・・・土方の奴・・・何してんだ？」
銀時が目にしたのはマヨネーズの抱き枕を抱きかかえながら爆睡しているマヨネーズ柄のパジャマを着た土方の姿だった。しかも顔がかなりにやけている。
「ンフフ・・・マヨネぇ～ズぅ～・・・グーグー・・・」
「んだよこいつ、夢の中までマヨネーズかよ。」
そんな事を小声で呟きながら銀時はプレゼントをわけた。
「さて、土方さんに何かプレゼントしましょうかねぃ。」
沖田が呟いた。
「珍しい光景だな。何やるんだ？」
銀時が聞いた。沖田はポケットから辛子マヨネーズを取り出し、土方に向かってマヨネーズをかけていった。
「さーて、これで俺のプレゼントは終わりだ。じゃあ先生方、新年あけに会いましょう。」
「あ・・・・ああ。」
辛子マヨネーズまみれの土方を無視して一同は学院を出て行った。

「次はハヤテとナギのバカップルか・・・」
銀時が目にしているのは三千院の屋敷。ナギとハヤテの愛の巣。家の前にはポストが無かった。仕方なくギントキはインターホンを押した。少しして声が聞こえた
「どちらさま・・・・」
「すいませ～ん、２Ｚ担任の銀時ですけど。」

「・・・・そうですか・・・・」
「・・・信じてねーな。」
「当たり前だろ、こんな格好で。」
「こんな遅く誰ですか・・・って銀時先生。」
英語の担任であるマリアの声が聞こえた。
「マリア先生、いやマリア様。実は２Ｚの教え子たちにプレゼントをこっそりと渡して回っているんです。」
「そうですか。それでハヤテ君とナギに・・・お疲れ様です。じゃあ今から門を開けますね。」
しばらくして目の前の門が開いた。そして、案内人のＳＰが出てきて屋敷まで案内してくれた。
「じゃあ気をつけてください。」
「ああ・・・何で気をつけなきゃいけないんだ？」
銀時はＳＰの一人に聞いた。
「実はハヤテ様とナギ様は寝ている間でも互いを守ろうとここ最近新しい技を覚えたようです。」
「技ァ？」
「その技は『睡眠虐殺拳』といわれています。この技は寝ている間でも守りたいものを守るためにとにかく暴れるという技です。とにかく二人を起こさないようお願いします。決して起こしては駄目です！では健闘を祈ります。」
と言い残し去って行った。
「・・・何だか物騒な技覚えたなー。」
「とにかく急ごう。でないと朝になってしまう。」
その後、三人は忍び足でハヤテとナギの部屋に向かって行った。
「ったくよー、どんだけ大きいんだよこの屋敷。」
「そうだな、こりゃ迷いそうだな。」
「オイオイ、これで迷ったらヤバいんじゃないの？」
「ああ・・・あ・・・あ・・・あ・・・ブワァックショイ！」
銀時は大きいくしゃみを出した。

「ヤベェ！気付かれたか！」
「いや・・・何も」
その時だった。カシャン、カシャンと金属音の音が聞こえた。
「え？何？何これ？目覚めちゃいけない者が目覚めちゃった？」
「大丈夫だろ？どうせ鎧が倒れたんだよ。」
「鎧なんておじさん見かけなかったけど。」
「どっかにあるんだよ！こういう屋敷には西洋鎧がいくつかあるだろ！」
「あるの？」
「探せばある！」
などと話していたらその音は次第に大きくなっていた。そして・・・
「愛するお嬢様をさらいに来たかこの愚か共がァァァァァァ！」
パジャマ姿だけど両手に巨大なマシンガンを装備したハヤテが現れた。
「あああああああ！」
「何あれぇ！何かとんでもない格好で現れたァァァァ！」
「死ねェェェェェェ！」
ハヤテは両手のマシンガンをぶっ放した。
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！」
「ハハハハハハ！僕のリロードはレボリュージョンだ！」
サンタ三人組はとにかく走って逃げた。で、壁の所に隠れていた。
「何だよあれ、何だよあれ、・・・もうあれ兵器じゃねーか。人間兵器じゃねーか。」
「何だったんだあの威圧感・・・メタルギアよりはあったぞ。」
がくがくしている二人だが松平が立ってこう言った。
「何オメーらブルブルしてんだ。あんなもん所詮は人間だろーが。」
と言って松平はハヤテに立ち向かった。手には拳銃を持っていた。
「あの～まさか・・・とっつあん！聞いてる！」
「おいおい・・・まさかあれで・・・ズドンと一発？」

「たりめーよ。」
「待て待て待て待て待てエエエエエエエエエエ！」
銀時とスネークは松平を止めに入った。
「それだけはやっちゃだめェェェェ！俺達の人生終わる！」
「大丈夫だよ。急所は外すって。」
「それでも問題あるだろうがァァァ！」
「みぃぃぃぃつけたぁぁぁぁぁぁ！」
ハヤテに場所がばれてしまった。
「いやァァァァァ！」
「ちっ、しゃーねーなー。」
「おい、まさか本気で」
カチッ、バキューン！
しばらくの間、誰も喋らなかった。目の前にはハヤテが倒れている。松平が持っている拳銃には煙が上がっている。
「・・・・やりやがったァァァァァァ！この人本当にやっちゃったよォォォォォォ！」
「自首するんだ！今なら間に合う！」
「大丈夫だ、気絶しているだけだよ。」
よく見るとハヤテは白目をむいて気絶していた。
「よし、じゃあプレゼントを置いておけ。」
「置けるかァァァァァァァ！」
ここで何かの音がした。空気を斬る音だ。それは段々と銀時達の近くに近づいてくる。
「オイオイ、今度は何だ？」
恐る恐る銀時は後ろを見た。そこには全身からオーラを放っているナギだった。
「きぃぃぃぃさぁぁぁぁまぁぁぁぁぁぁかぁぁぁぁぁぁ！私のハヤテを撃ったバカはァァァァァァァァ！」
「アアアアアア！俺じゃない！撃ったのこのひ・・・」
銀時は自分の手に拳銃が置いてあるのを今知った。

「そうだよー、この銀髪が日ごろの恨みだかと言って」
「おィィィィ！何罪を人になすりつけてんだァァァァ！」
銀時と松平が何かやっているうちにナギが何かの構えをしていた。
「二人とも・・・何か嫌な予感が」
「くたばれェェェェェェ！」
ナギの両手から巨大な気弾砲が放たれた。
「アアアアアアアアア！」
ドコーン！チュドーン！バコーン！デデーン！辺りはもう色々と爆発が起きていた。サンタ達は壁に追い詰められてしまった。
「ふっふっふ・・・これで貴様らも年貢の納め時だな・・・」
「ヒィィィィィィ！」
「終わりだァァァァァ！」
とんでもなくデカイ気弾が三人を襲った。
「アアアアアアアア

と思っていた。近くに神楽のペットである巨大犬の定春がこちらを見ていた。
「・・・・ほれーワンちゃん。これあげるから見なかった事にしておいて」
三人が近づいたら案の定噛みつかれた。
「ギャアアアアア！」
三人は痛みのあまり神楽の家へ入ってしまった。
「ヤベーよ入っちゃったよ。」
「黙って帰ろう。そうしよう。」
「ああ・・・ん？」
銀時はこたつで爆睡している神楽を見つけた。
「ちょっと待ってて。いたずらしてくっから。」
「オイオイ、それならおれもやらせろ。『ダンボール命』って書かせたい。」
「おじさんも忘れんじゃねーよ。」
三人は神楽のいる部屋へ入って行った。で、いたずら書きを始めた。
「どうだこれ？」
「ププッ！ククク・・・」
「オイ。」
ここで神楽が目覚めて島た。しかし寝ぼけていた。
「あ・・・やば・・・」
「肉まんはどうしたァァァァァ！」
「あああああああ！」
神楽は銀時の足を掴んだ。で、その反動で銀時はこけた。その後、神楽がこたつの中へ入ろうとした。
「ああああああ！助けてェェェェェ！」
スネークの足を掴んだがスネークも転倒し、松平の足を掴んだ。
「ちょっと何やってんの！」
「ってか今それどころじゃなくない？」

三人は神楽にこたつの中に引きづり込まれていった。その後、こたつがガタンガタンと揺れていた。

翌朝。

「う～こたつで寝てしまったアル～。」

神楽が目覚めた。で、机の上には肉まんが置いてあった。

「おおおお！肉まんアル！サンタさんが持ってきてくれたアル！」

と言いつつ神楽は肉まんをほおばった。

「おいしっ♪」

満面の笑みで喜ぶ神楽だがこたつからは手が伸びており、血文字で『メリークリスマス』と書かれていた。

第12話：サンタはいると信じたい（後書き）

作者「メリクリ。」
梓「何ですかいきなり？」
作者「だって今日はクリスマスじゃん。」
銀八「あー、そういやーそうだな。」
闇「何かプレゼントでも？」
作者「ああ、しかし俺がかなえられる範囲でな。」
銀八「ハイハイハイ！俺は本編での出番」
作者「却下。次、あずにゃん。」
銀八「ひでェェェェェ！俺の願いは？」
作者「だから俺がかなえられる範囲っていてんじゃん。」
銀八「かなえられるじゃん！」
作者「うるさい！あずにゃんはなにかある？」
銀八（無視されたァァァァァ！）
梓「特に何も。」
銀八「へー、じゃあヤミちゃんは・・・リトの心」

シュッ！

作者「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
銀八「結局こんなオチか・・・って俺も巻き添えくら・・・アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
梓「・・・まぁ・・・とにかくメリークリスマス！！」

第１３話：年末は嫌にでもテンションが上がる（前書き）

今回の話は大晦日にアップしたかったけど用があるかもしれないので今日アップします。

第１３話：年末は嫌にでもテンションが上がる

年末、本日は大みそか。今年の最後である。（これを書いてるのは９月だけど。）町の商店街もいつもより買い物客でにぎわっている。新八はここへおせち料理の素材を買いに来た。志村家ではいつも新八が料理を作っている。姉に任すと死んでしまうからだ。そんな中聞き覚えのある声が聞こえた。

「はい、いいですか？このクリーナーを使うと・・・ほら！どんな頑固汚れもこの通り！」

「桂君！」

「ん？ああ、新八君ではないか。」

近くでバイトをしていたヅラと会った。

「何やってるの？バイト？」

「そうだ。この時期になるとウチの親戚の店の手伝いをしているんだ。」

「へー。」

「新八君もどうだ？このクリーナー。すっごく汚れが落ちるぞ！」

「買い物の帰りにお金が余ったら寄ってくよ。」

「そうか。」

新八は先へ行った。もしかしたら他に会う人がいるかもしれないな、こんな人ゴミじゃ・・・と思っていた矢先。

「あれ？新八じゃん。」

後ろから担任の銀時の声がしたのだ。

「先生。どうしたんですか？」

「ジャンプをめぐってコンビニ回ってんだよ。近道かと思ってここに来たが・・・まさかこうなるとはなー。」

「ハハハ・・・」

銀さんらしいなーって心の中でそう思った。と前の方に置いてあった段ボールが少し動いたのを新八は見た。目撃した。で、案の定

ダンボールを取ったら中にはスネーク先生がいた。
「何やってんですか？」
「！」（あの効果音付き）
「だから何やってるんですか？何かの訓練ですか？」
「そ・・・そうだが。」
「そうみるとただの不審者ですよ。」
「くっ・・・新品のダンボールだから見つからないと思ったのだが。」
「関係ないだろそれは。」
「まぁいい、君は買い物か？」
開き直ったスネークが聞いた。
「ええ、ウチの料理は僕が作ってるんです。」
「確かにそうだな。あの姉が作ってたら今頃お前は」
ここで銀時の後ろの壁に何かが刺さった。はさみだった。
「・・・・！」
「あ、先生。すみません手が滑っちゃいました～。」
妙は笑顔で刺さったはさみを抜いた。
「あ！・・・いいよいいよ！間違いは誰にもあるからね！」
「姉上。何でここへ？」
新八は姉に聞いた。
「実は今さっきマリアさんからウチでパーティーやらないかって聞かれたのよ。で、今からナギちゃんちに行くところよ。」
「マジでか！俺も行っていいのか？」
「いいんじゃないんですか？先生だし。」
「おっしゃー！」
銀時は手を振り上げて喜んだ。
「他にも誰か来るんですか？」
新八が聞いた。
「ええ。２Ｚの人達がほとんどくるみたいよ。他のクラスの子も来るみたいだし。」

「へー楽しそうですね。僕も買い物が済んだら行きますって言っといてください。」
「わかったわ。」
妙はナギの家へ向かって行った。
「じゃー俺らも行くからよー、またナギんちで会おうぜ。」
銀時とスネークもナギの家へ向かって行った。新八は買い物を終え、食材を冷蔵庫に入れその後ナギの家へ向かって行った。

「あ、新八さん。」
「よー眼鏡。貴様も来たのか。」
三千院家のパーティーに来た新八は丁度外にいたハヤテとナギに挨拶をした。
「結構２Ｚの人が来てますよ。」
「へ・・・へ～。」
ここで奴らの叫び声が聞こえた。
「もう騒いでるね。」
「はい。」
会話をした後新八とハヤテとナギは中へ入って行った。とすぐに騒ぎに巻き込まれた。
「ハハハーーー！マヨネーズばんざァァァァァァい！」
と言いながら全身マヨネーズだらけの土方。
「ギャーハハハー！ゴリラのダンスを見せてやるゥゥゥ！」
全裸の近藤が変な踊りをしていたり、
「りっちゃん！これすごくおいしいよ！」
「おー！こりゃうめー！」
「おい律、これオラが狙ってたやつだよ！」
「関係ないもーん。」
唯と律と悟空が騒いでいたり、
「巧っ！今日は私と」
「文乃！抜け駆けは止めなさい！」

「・・・にゃあ・・・」
迷い猫同好会の連中が騒いでいたりもう色々と騒いでいた。
「変わんねーなー。いつものテンションだなー。」
呟いていたら妙によってブッ飛ばされた全裸ゴリラに命中した。

「ハイじゃあ今から王様ゲームの始まり始まりィ！」
前のステージの方で松平の叫び声が聞こえた。
「ハイじゃあ今から人数分のくじが入ってる箱をわける。全員が引き終えるまで見るんじゃねーぞぉ！」
その後、パーティー参加者にくじがわけられた。で、わけ終えて新八がくじを見たら『２４番』と書かれていた。
「よっしゃぁぁぁ！俺が王様だァァァ！」
ここで銀時の声がした。
「おーっと！ここで銀時が王様を引いたァ！では早速命令を言ってくれェ！」
「そうだな・・・じゃあ、２３番を引いた奴は下着になってもらいますぅ？」
あぶねェェェ！新八は思った。下手したら自分が下着姿になっていたからだ。で２４番を引いた人物は・・・・
「何で俺が・・・・」
涙目で下着姿になっていたクラウドだった。オメーかよ！と新八は心の中で思った。
「ハイじゃあ次行くぞぉ！」
第二戦が始まった。
「ハハハハハー！私の時代が来たのだァァァァァ！」
王様を引いたのはナギだった。
「はぃ！じゃあ命令を言ってくれェェェ！」
「３２番と６５番がこのハーマイオニー衣装を着る！」
と叫び、奥の方からハーマイオニー衣装を取り出してきた。新八は手元のくじを見た。そこには『１１番』と書かれていた。そして、

３２番と６５番を引いた奴が現れた。それは・・・
「何でこーなるの？」
「じょ・・・冗談じゃない！」
自分の運のなさに嘆いている銀時と怒り奮闘のベジータだった。
似合わねェェェェェ！と誰もがそう叫びたくなったが殺されるので言うのを止めた。
「ハイじゃあ次いくぜェェェェェ！」
松平の叫びが天高々に響いた。その後も王様ゲームは続いた。で、５４回戦終了時には・・・近藤が全裸になり、新八の頭にはマヨネーズがベッシャリとかかっていたり、正宗がバニー姿だったり、幸村がふんどし一丁だったり、澪が下着姿だったり、ナギが執事服姿だったり、ハヤテがスク水だったり、銀時がセーラー服姿だったり、ヒナギクがアフロヘアーで鼻に長い鼻毛をつけたり、沖田がドレス姿だったり、悟空がＴＯＬＯＶＥるのララの衣装だったり、文乃がかなりきわどい水着だったり、ヅラがここでは言えない姿だったりスネークがブルマ姿だったり、ルフィが忍者姿だったり、ロイドがメイド服姿だったりと色々と危ない光景が生まれていた。
「何じゃこりゃあァァァァァ！」
マヨネーズが頭にかかった新八が叫んだ。
「ハイじゃあ次行くぞォォォォ！」
「まだやるんかい！」
「何言ってんだ？このままやるに決まってんだろ。おじさん張り切っちゃうよ。」
「張り切るなァァァァァ！」
新八の叫びむなしく王様ゲームは続いた。新八が引いたくじには『王様』と書かれていた。
「よっしゃァァァァァ！僕が王様だァァァァァァ！」
「ハイィ！２Ｚの新八君！命令を言ってくれェ！」
「ハハハハハ！４３番が全裸になる！」
その声で誰もが手元のくじを見た。で、誰かが手を挙げた。

「はいじゃあ命令に従ってください！」
その後、４３番を引いた人物は新八の命令に従った。その人物は・・・あそこが足軽の徳川茂茂だった。
（将軍かよォォォォォォォォォォォォ！）
新八は心の中で叫んだ。あと、二人とも涙目になっていた。

ご～ん、ご～ん、と除夜の鐘が鳴り始めた。だがパーティーは未だに騒がしい。あの後、新八が全裸になったり、シャナがヒモビキニ姿になったり、近藤が妙にブッ飛ばされたり、唯がスク水になったり、律がでこにともだちのマーク描かれたり、土方がマヨネーズぶっ放したり、松平のグラサンが粉砕されたり、アテムが沖田に半殺しされたり、スネークがダンボール祭りだか言って辺りにダンボールを散らかしたり、将軍が色んな意味で覚醒したり、ヒナギクが間違えて酒を飲みハヤテにキスをしようとしたらナギにけっ飛ばされたり、銀時が糖尿で気絶したり、ミクがゾロをみっくみくにしたり、ルフィが肉を食い過ぎてベジータと喧嘩になったりとさらに混沌を深めていった。その後、１１時５９分になった。
「カウントダウン始まるぞォォォォ！」
松平の叫びで誰もが前のステージに注目した。目の前にはカウントダウン用の時計があった。そしてその時計が１０を示した。
「いよいよだな。」
「ああ。」
誰もが静かになりカウントが５を示した。
「始めるぞ。５」
「４」
「３」
「２」
「１」
「ハッピーニューイヤァァァァァァァァァァ！」
パーティー会場にいた全員が歓喜の叫びをあげた。と、その時だ

った。上空から何かが降って来た。銀時がよく見たらそれはあの人物の宇宙船だった。
「おい・・・まさかありゃ・・・皆逃げろォォォォォォォ！」
銀時の叫びでこの場にいた全員は屋敷の外へ逃げた。宇宙船は屋敷に命中し爆発をした。その連鎖で屋敷も半壊した。
「あーっはっはー！ここが何千院の屋敷かー？あーっはっはー！」
煙の中から高笑いで宇宙船の持ち主が現れた。それは混沌学院の技術教師の坂本辰馬だった。坂本は辺りを気にせずただ笑っていた。その後、皆にフルボッコにされた。

次回！混沌学院ドラキュラ編開始！
ある日、平和な学院に突如起こった生徒達の謎の消失、２Ｚのハヤテ、悠二、巧までもが行方不明となった！その陰には昔から学院に伝わるドラキュラ伝説と関係があった！
次回『たまには俺だってシリアスもんやるよ』どうぞご期待！
「お前はもう、死んでいる。」
「また北斗の拳みたいな次回予告かよ。ってか大丈夫なのか作者？」
ちゃんと話は考えてあります。お楽しみに！

第13話：年末は嫌にでもテンションが上がる（後書き）

銀八「なぁ・・・何この次回予告？長編って何？」

作者「混沌学院でも長編ものをやります。次回からドラキュラ編ね。」

梓「大変そうですね。」

作者「そうでもないけどね。」

銀八「あとさー、この話いつやるの？」

作者「年明けからやりたいと思います。ぜひ見ていってください。」

闇「それよりほかにも言いたいことがあるんじゃないですか？」

作者「ハイ。実は伽藍さんの『銀魂のごとく』にてこの混沌学院と短編の3年Z組雪路先生が紹介されました。この場でもう一度お礼を申し上げます。ありがとうございます！これからも応援をよろしくお願い致します！」

銀八「じゃ、今年はこれで最後ってか？」

作者「混沌物語はしばらくアップします。あと前から言っているようにヒナギクが主人公の物語も今書いているのでそちらの方も書き終えてアップしていきたいです。」

銀八「そうか。じゃ、今年最後だからそれぞれ一言ずつ言ってこう

ぜ。まずあずにゃんから。」

梓「ええ！えーっと・・・これからもこの作者の作品の応援をよろしくお願いします！！」

作者「それ俺が言うことじゃね？」

銀八「じゃあヤミちゃん。」

闇「こんな作者ですけどこれからもよろしくお願いします。」

作者「だからそれ俺が言うことじゃ・・・」

銀八「じゃ、俺だな。おい作者！本編で俺を出せ！！」

作者「結局オメーは最後の最後でそれかよ！！・・・俺から一言。これからも混沌学院、混沌物語を書き続けたいと思います。読者の方々も幸せな年末・・・そして今回のオチのように辰馬の馬鹿が来ないよう」

ヒュ～～～～～～～～～～

作者「え？何この音？」

銀八「ま・・・まさか」

ドッゴォォォォォォォォォォォォォン！

作者「だ・・・誰だ！」

辰馬「アッハッハ～！スンマセ～ン。万事屋金ちゃんってどこですか～？」

辰馬以外の全員（結局こんなオチかいィィィィィィィィ！！！！）

第１４話：（ドラキュラ編）たまには俺だってシリアスもんやるよ（前書き）

作者「ドキドキハラハラの大長編、始まるよ！」

銀八「あんまり期待するなよー。」

梓「銀八さんの言うとおりです。」

作者「・・・ひどくね？」

第１４話：（ドラキュラ編）たまには俺だってシリアスもんやるよ

混沌学院の離れた所に誰も使っていない小屋がある。そこには２Ａのエヴァンジェリンが採取した薬草の倉庫でもある。この事は担任のネギも承知している事で、２Ａの一部の生徒もこの事を知っている。だが副担は知らなかった。

「ひ～妹子に法隆寺完成してるって手紙出したのに全然できてなかったよチクショ～。」

と慌てた声の２Ａの副担の聖徳太子（ギャグマンガ日和の方）がこの辺りに走って来た。

「何かいい小屋ないかな～いい小屋・・・お！」

彼が目につけたのはエヴァンジェリンの小屋。彼はこの小屋の事を知らなかったのだ。で、彼は無理矢理小屋を開けてしまった。このバカの行動でのちに大きな事件が発生する。

「坂田先生。最近僕のクラスの副担見かけましたか？」

銀時に声をかける先生がいた。２Ａの担任、ネギである。彼は１０歳でまだ子供だが銀時や雪路よりは常識人で頭もいい。意外と頭もいいとスネークもその事は驚いている。

「あのバカ太子か？・・・そーいやー最近見かけねーなー。」

銀時はそう返事した。

「そうですか。」

「いいですよ。あのバカがいなくて僕は平和ですからね。」

ここでバカ・・・聖徳太子の付き人である小野妹子が言った。

「まーそうだな。」

「そうですけど大丈夫でしょうか？」

銀時は妹子の返事に賛同したがネギはなぜか嫌な予感がした。

数週間後。

「誰か巧知らない！」
文乃が２Ｚの生徒や他の生徒に話しかけるようになった。数日前、下校中に巧と別れ帰路に就いた文乃だが翌日、巧が欠席で驚いてその帰りに彼が住んでいるストレイキャッツに行ったがまだ帰っていないと彼の姉の乙女に言われた。文乃は学校中で情報を集めていて、乙女も警察に連絡し、自身も独自で巧を探している。
「まだ巧君帰ってないんだ。」
「そうみたいだな・・・無事ならいいが・・・。」
新八とロイドは呟いた。クラスメイトが消えたので銀時とスネークも懸命に探しているが巧はいつまでたっても見つからなかった。

また数週間後。
「悠二が消えた！」
「誰か知らない！」
今度は悠二が消えてしまったらしい。シャナと吉田は懸命に情報を集めるが誰も悠二を見ていないとしか返事をしない。
「今度は悠二君までも・・・」
「オイオイ、まだ巧が見つかってないんだぞ。」
不安で一杯の新八とロイド、そこにナギが息をきらせて教室に入って来た。
「ハヤテ！ハヤテはいるか！」
「ナギ、どうした？ハヤテはまだいないぞ。」
ロイドがそう言ったらナギはその場にヘナヘナとしゃがみこんだ。
「そうか・・・どこ行ったんだよ・・・ハヤテェ・・・」
ナギの様子を見てた新八は確信した。ハヤテも行方不明だと。そんな事を思っていたら朝のチャイムが鳴った。そしてプリントを持った銀時が入って来た。
「テメーらにかなり重要な話をする。先週からウチの学生が何人も行方がわからねーらしい。この事に巧も巻き込まれたと俺はそう考えている。」

「先生！悠二もいません！」
「私のハヤテもそうだ！」
「・・・はー、２人も出ちまったか。」
「先生！もしかして他のクラスの人も」
「ああ、このクラスだけじゃねー、他のクラスもそうだ。今からプリントを分ける。しっかりと目を通してくれ。」
銀時はプリントを渡し始めた。新八が目を通したらそこには『行方不明者リスト』と書かれていた。
「このプリントに描かれている奴の情報を持ってる奴。俺かスネーク先生、もしくは他の先生に話をしてくれ。じゃあ朝のホームルームは以上。」
銀時はそう言った後教室を出て行った。

放課後、新八が帰ろうとしたら２Ａの前に銀時がいた。
「先生何やってるんですか？」
「ん？新八か、いや実はよー俺はこの事に関してある奴に疑惑をかけている。」
「誰ですか？」
「見ればわかる。」
銀時がそう言った後、２Ａ教室に入って行った。そして、窓際に座っていた少女に声にかけた。
「この事件の首謀者はオメーだろ、エヴァンジェリン。」
銀時が声をかけた。見た目は小さい女の子だが・・・一体何者だ？新八はそう思った。
「フフ・・・やはり私を疑うか。」
「たりめーだ。おめーは前科ありだろ。」
「へ？前科ありって・・・」
「あ、そうか。オメーはまだ知らないか。実は」
「私は吸血鬼だ。」
少女の言った事に新八は目を丸くした。

「へ？吸血鬼？悪魔城の？」
「少し違うが・・・まあそういうもんだ。」
「えええええええ！吸血鬼って・・・ドラキュラですよね！この女の子がァ！」
「そうだ。いちいちリアクションが大きいぞ眼鏡。」
「黙れェェェ！・・・・って前科って何ですか？」
「ああ、実は・・・」

２Ａのエヴァンジェリン、見た目は小さい女の子だが年齢は何千歳でもある。彼女は一年の頃、吸血鬼騒動を陰で行って来た。そのせいで当時１Ａの生徒が何人も行方不明となった。だが担任であったネギとその事件を感づいた銀時とスネークとイワンコフとマリアそしてネギの生徒の明日菜の活躍によって無事騒動を解決することとなった。その後、彼女は１Ａの生徒として、そしてネギの師匠として学院生活を送ることとなった。

「そういえばあんな事件がありました。」
「だろ、もしかしてまたこいつが」
「今回は私じゃない。昨晩はファミコンをしていた。」
「・・・・・アリバイ持ってますよ。」
「ファミコンって・・・マニアックだなー。」
「ほっとけ！・・・ところで貴様らはこの学院に伝わるドラキュラ伝説って知ってるか？」
「あ、はい。この学院の離れた小屋にドラキュラが封印されてるとか。」
「おいおい、まさかあの伝説のドラキュラが犯人ってか～？いるわけねーだろデマだよデマ。」
　冷ややかな反応をした銀時にエヴァは声のトーンを低くして話した。
「実は数百年前、私はある一人のドラキュラを瓶に封印したんだ。

で、その瓶は私の小屋に封じ込めているのだ。」
「小屋って・・・あの離れ小屋！」
「ああ。実は数週間前からその封印がとかれたようなんだ。」
エヴァがそこまで話すと銀時の顔から汗が流れた。
「もしかしたら今回の騒動はあいつが関係してるかもな。」
「オイオイ・・・あの話本当だったのかよ・・・」
銀時がボーっとしているとエヴァンジェリンは席を立ち、教室を出て行った。
「助けるならなるべく早めにな。あいつは何するかわからん。特に男相手ではな。」
「おい、オメーはどうすんだよ。」
銀時は去ろうとしたエヴァンジェリンに聞いた。
「私は今から新しい封印装置を作りに行く。少し遅れるがお前なら死なないだろう。」
と言い残し去って行った。
「・・・はー・・・仕方ねー。新八、オメーは今回の事には首突っ込むな。」
「無理です。僕も戦います。」
「・・・今のオメーじゃ、どうやら足手まといになるだけみたいだ。」
「それでもいいで」
気持ちを変えない新八に銀時は新八の腹にパンチを入れた。新八はゴフゥ！と言って気絶した。
「・・・今回は俺が何とかする。俺も教師だ。生徒に傷ついてほしくねー。・・・後ろのテメーらもだ。」
後ろから悟空、ルフィ、ナギ、文乃、シャナが流れ込んできた。
「どうしてだ！俺たちなら」
「伝説によるとドラキュラは不死の力を持ち、どんな攻撃も通用しねー。」
「でも」

戸惑うルフィ達を置いて銀時は教室を去って行った。その後、自分の部屋にある木刀『洞爺湖』を腰にさし、学院の離れの小屋へ向かって行った。だが、銀時より先にルフィ達が待っていた。
「・・・テメーら。そこをどけ。」
「だったら俺達を連れて行け！」
「無理だ。あんまりしつこいと嫌われるぞ。」
「それでもいい！俺達は皆を助けたいだけだ！」
ルフィ達の意思は固い。銀時はその事に気付き、ため息をついた。
「しゃーねー・・・オメーらを連れてったこと、新八には内緒な。あとＰＴＡの連中も。」
そう言い、銀時一行は離れの小屋へ入って行った。

次回！ドラキュラの小屋へ潜入した銀時達、一行は討伐組と救出組に分かれた。そこで待ち受ける罠の数とは、そして、ハヤテ達の命運はいかに！次回、『他人の家へ入る時は挨拶をちゃんとしろ』今シリーズに新八の出番は無い！だから次回予告でつっこめ！新八！
「今度はＳＥＥＤみたいな次回予告・・・ええええ！僕の出番ないの！」
さ～ね～♪

第１４話：（ドラキュラ編）たまには俺だってシリアスもんやるよ（後書き）

銀八「オイオイオイ、なんかスゲー展開になってきたな。」

梓「大丈夫でしょうか？」

闇「この作者のことだからロクなことさせないと思いますけど。」

作者「俺の扱いひどくね？」

銀八「それよりさー、前の話ん時年明けにアップするって言ってたくせになんだよ、結局２０１０年の大晦日にアップしやがって。」

作者「いやー、実はクラス票をアップしようとしたんだけどミスしてなぜか2つになっちゃんたんだよねー。で、仕方ねーからこの話をアップしたってわけだ。」

梓「そ・・・そうなんですか。」

作者「じゃ、そういう事で。読者のみなさんも幸せな年明けを」

ヒュ～～～～～～～～、ドカァァァァァァァン！！

作者「ギャアアアアアアアアアアアア！何だ！」

辰馬「アッハッハ～！万事屋金ちゃんってどこですか～？」

作者「またオメーかァァァァァァァ！」

混沌学院クラス票　2年Z組（前書き）

以前クラス票作ってほしいという要望があったので作りました！

混沌学院クラス票　2年Z組

銀魂：新八、神楽、妙、近藤、土方、沖田、さっちゃん、桂、山崎、九兵衛、東条

ハヤテのごとく：ハヤテ、ナギ、ヒナギク、西沢、咲夜（転校してくる）

テイルズオブシンフォニア：ロイド、コレット、ジーニアス、ゼロス、エミル、マルタ

ワンピース：ルフィ、ゾロ、ナミ、サンジ、チョッパー

けいおん！：唯、澪、律、紬

ドラゴンボール：悟空、ヤムチャ

とある科学の超電磁砲：御坂、黒子

ファイナルファンタジー？：クラウド

ボーカロイド：初音ミク、鏡音リン、レン（転校してくる）

迷い猫オーバーラン：巧、文乃、千世、希、家康、大五郎

灼眼のシャナ：シャナ、悠二、吉田

俺の妹がこんなに可愛いわけがない：桐乃

担任と教科担当共

担任：銀時（現国も担当）　副担当：スネーク

世界史・日本史担任：雪路

数学担任：ネギ

理科・化学担任：イワンコフ

英語担当：マリア

体育・保健担当：松平（松平がたまに休むのでその時はスネークが代理でやっている）

音楽担当：さわ子

クラスの様子

　毎度毎度騒がしいがクラスの結束力は混沌学院一。それなりにクラスでの絆がかなり深い。

混沌学院クラス票　2年Z組（後書き）

どうでしたか？またかなり後の展開になりますけど後々更新するかもしれません。その時は混沌学院の後書き内で書きます。お楽しみに！！

第１５話：（ドラキュラ編）他人の家へ入る時は挨拶をちゃんとしろ（前書き）

新年初のアップです！！ぜひぜひ見ていってください！！

第15話：（ドラキュラ編）他人の家へ入る時は挨拶をちゃんとしろ

銀時達は小屋へ潜入した。小屋の中は変な瓶がかなりあって不気味だった。

「何だよこれ、悪の秘密基地か？」

「言ってる場合じゃねーよ。」

「ああ。」

「そうだ、ドラキュラ討伐組とハヤテ達救出組に分かれたらどうだ？」

「そうだな。二手に分かれた方がやりやすい。」

という事で一行は討伐組と救出組に分かれた。銀時は悟空、ルフィとともに前に向かって歩き、ナギはシャナ、文乃とともに辺りの部屋を散策して言った。

「ハヤテー！どこだー！」

「巧！返事しなさーい！」

声をかけているが返事はなし。し～んと静まり返るだけ。

「・・・そこにいるのは誰？」

シャナが誰かに声をかけた。ナギと文乃は気付かなかったがシャナはその者のオーラを感じ取ったみたいだ。ナギは耳を澄ましてみた。確かに何者かの荒い息が聞こえる。そして・・・闇の中から現れたものは・・・。

「ヒェェェェェイ！」

いきなり奇声を出しながら何者かが襲って来た。シャナが刀でそれを振り払い、その者は壁にぶつかった。その正体は・・・。

「た・・・太子先生！」

数週間前から行方不明になっていた聖徳太子だった。バカは体を上げまた襲ってきたが・・・。

「フン！」
「ポピィィィィィ！」
「ハァァ！」
「オワマァァァァ！」
などとごとごとくシャナに返り討ちにされていった。
「・・・・弱い・・・。」
ナギと文乃はかわいそうなものを見る目でシャナは襲ってくる太子・・・もといバカを見つめていた。

「ったくよー、肝心のボスはどこだよ？」
「どこだー！出て来いドラキュラー！」
「オラ腹減っちまったー。」
などと声を上げながらドラキュラを探している銀時、ルフィ、悟空。彼らはとにかくあらゆる部屋を開けまくって探していた。だが見つからない。
「は～、このままじゃ俺らが探しだす前に迷って死ぬんじゃねーか？俺らが。」
「あー、もう！出て来いドラキュラー！」
などと怒声を上げていた銀時らだが、背後から何かの気配を感じた。その気配をたどりついた先は一室の部屋だった。
「ここに奴がいるのか・・・」
声をあげ、木刀を手にし銀時は扉を開いた！その部屋にいたものは！
「・・・・小野・・・イナフ。」
入浴中のフィッシュ竹中さんだった。銀時は何も言わず扉を閉め去って行った。

一方、別行動しているナギ組が歩くのを止めた。シャナが何かの気配を感じたのだ。何も見えないがナギもその不穏な空気を感じた。一行が息を殺し、注意深くして前へ進んだ。シャナは何があっても

いいように刀を手にしていた。しばらくして前方から足跡が聞こえた。
「誰！」
シャナは叫んだ。だが返事は無い。
「返事をしないなら斬るわよ！」
刀を前に向けた。そして、前からの足跡が近くなり、正体が分かるようになった。その者は・・・
「ハヤテ！」
「ハヤテ・・・何だ。ハヤテか。」
行方不明だったハヤテだった。ナギと文乃は安心したがシャナは刀をしまわない。
「ハヤテ！心配したんだぞ！一体ここで何を」
「ナギ危ない！」
シャナの声によりナギは後ろに下がった。ハヤテがいきなり襲って来たのだ。
「くっ！」
「何でだ・・・何でだハヤテ！」
恋人のナギの言葉も無視してハヤテはまだ襲ってくる。シャナも抵抗し、刀を振った。その時ナギは見た。ハヤテの歯にドラキュラみたいな歯があった事を。

「先生、この部屋が怪しいぞ。」
悟空がある一室の部屋を見つめた。
「・・・そうか、このまま一気に」
「おらァァァァァァ！」
作戦を立てようとした銀時を無視してルフィは一人突っ込んで行った。
「あのバカァァァァ！」
その後ろを銀時と悟空が追う。部屋の中は目立ったものは無く机と暖炉、そして暖炉の上に古ぼけた自画像があっただけだった。

「んだよ、なにもねーじゃねー」
「先生！危ない！」
「おわっ！」
悟空は銀時を突き飛ばした。今さっき銀時がたっていた場所の下から植物のつたらしきものが現れたのだ。
『あ～ら～ん、数年ぶりのお客様かしらん？』
すぐに声が聞こえた。
「・・・てめーがドラキュラか？」
「喋ってないで姿を現せ！」
『じゃあリクエストにお答えするわ。』
天井の方から轟音が響いた。銀時が上を見たら何者かが宙に浮いていた。
「あと言っておくけど私はドラキュラじゃないわ。」
声の主は地面に降り立った。そしてこう叫んだ。
「私はカマキュラよォォォォォォん！」
自己紹介をした。その顔を見た銀時は吐き気がした。
「うぷっ！何これ？気持ち悪い！」
「何だこいつ？本当に強いのか？」
ルフィが疑問を持った。
「何言ってんのよ～ん。私は強いのよ。なぜなら私は吸血鬼だから！」
「・・・・・イメージと違ったが・・・オイ！ハヤテ達をどこへやった！」
悟空はカマキュラに向かって叫んだ。
「ハヤテ達・・・ああ！つい最近手に入れた男の子達ね！かわいかったわ～。」
「そんな事は聞いていない！」
「・・・・・あなた・・・口のきき方には気をつけたら？」
「何！」
悟空がひるんでいる時、カマキュラは瞬間移動で悟空の後ろに移

動していた。だが、悟空もその行動を読み取り裏拳で応戦した。裏剣はカマキュラの鼻に命中した。
「フフフ・・・やるわね。」
「まだこんなもんじゃねーぞ。なぁ！ルフィ！」
「おう！くらえ、ゴムゴムのガトリング！」
ルフィはカマキュラの背後でゴムゴムのガトリングを放った。
「うおおおおおおおおおおお！」
ルフィは段々と技の威力を高めていった。そして、フイニッシュの一撃が決まった。カマキュラは吹き飛ばされ壁に激突した。
「ゴフ！」
「なんだ、こんな程度か。」
「てめー、ハヤテ達はどうした！」
「・・・私に攻撃を当てたご褒美に聞かせてあげる・・・。最近手に入れた男の子の中に執事服を着ている子がいたわ。だけど今は私の執事なの。」
「あぁ？どういう事だ！」
「・・・・・今のあの子はただの吸血鬼。見境もなく人の血を吸い取るように改造したわ。」
「てめー・・・」
銀時の木刀を握る手が強くなった。ルフィも悟空も怒りをむき出しにしている。
「巧と悠二はどうした！」
「・・・他人の心配より自分の心配をしたらどう？」
その直後、三人の足場からツタが現れ三人を捕まえた。
「しまった！」
「オーホホホ。これで活きのいい吸血鬼の素材がまた手に入ったわー♪これであのチビ吸血鬼に復讐してやるわぁ！」
「エヴァの事か！」
「そうよぉ。でも助けられるかしら？こんな状態で？」
銀時が何とか脱出しようとしたが抵抗するたびに絡まっているツ

タの力が強くなっていく。
「さーてと、これであなた達も私の忠実な部下に・・・」
「く・・・くそ・・・」
段々と力を失って行く銀時の首筋にはカマキュラが牙を立てていた。
「いただきまァァァす！」

そしてナギの方では。
「がァァァァァ！」
「ガハァ！」
操られているハヤテの蹴りがシャナの腹部に命中した。シャナはよろつき、後ろに下がった。ハヤテは上空に上がった。そして、右手の拳でシャナを床にたたきつけるように殴りつけた。その一撃で床が破壊された。
「う・・・うううう・・・」
完全に戦闘不能になったシャナの右腕をハヤテはつかんだ。そして、そのまま壁にたたきつけた。
「アアアアアアアアアアア！」
シャナは叫んだ。ここでシャナは感じた。この一撃で右腕の骨が砕けたと。
「ナギ・・・文乃・・・悠二・・・ごめ・・・ん・・・」
意識がもうろうとしていく中でシャナは呟いた。彼女の眼には止めを刺そうとしているハヤテの姿が映っていた。だがその時上空から雷鳴の音がした。そして、天井を貫きハヤテに命中した。
「ヒュウ♪危機一髪だったな。」
雷鳴とともに現れた人物が声を上げた。その人物は２Ｂの正宗だった。続いて上空から幸村とナギの親友の伊澄が現れたのだ。

一方銀時の方は。
「・・・・・あれ？」

銀時はカマキュラにかまれる瞬間、目を閉じていた。そして目を開けていたら自分に何も変化が無いのに疑問を持った。
「俺・・・噛まれたんじゃ・・・」
少し離れた所にカマキュラが倒れているのを見た。
「へ？どうなってんの？」
「先生、無事か！」
「悟空、ああ。ルフィはどうだ。」
「俺は大丈夫だ！」
三人が無事を確認し合っていた時だった。
「ヒーハー！大丈夫？ボーイ達！」
「そ・・・その声は・・・」
「麦ちゃーん！大丈夫―？」
「ま・・・まさか・・・」
その声の主はイワンコフ先生とルフィの親友のボン・クレーだった。

次回！
絶体絶命の銀時達に現れた助っ人たち！彼らの活躍で戦場は一気に優勢に変わる！そんな中、事件に感づいた２Ｚの生徒達も参戦する！だが、誰かが犠牲になってしまう！次回『崖に追い詰められても諦めるな』・・・さらば・・・しんぱ
「ええええええ！ちょっと僕が・・・嘘でしょォォォォォォ！」

第１５話：（ドラキュラ編）他人の家へ入る時は挨拶をちゃんとしろ（後書き）

銀八「いやー、ついに２０１１年だなー。」

梓「そうですね。」

作者「俺もいい大人だよ・・・。この前まで子供かと思ってたけど・・・ハァ。」

銀八「そーいやーさー、アンタ前に生徒紹介とか言ってた割に紹介したのあずにゃんだけじゃねーか。」

作者「ああ、あの企画は不定期でやるってことでお願いします。そして今回出てきたオリジナルキャラクターの紹介を今からしたいと思います。」

オリキャラ紹介

名前：カマキュラ
歳：軽く１０００年は超えている
性別：・・・・・・・
好きなもの：男子の血
嫌いなもの：女子、ニンニク、十字架、エヴァンジェリン
技：植物のつたを操れます

銀八「オイオイ、なんだかすげーな。」

闇「ええ、でも私なら軽く倒せると思います。」

作者「大長編とかでオリキャラが出てきたら紹介したいと思います。
では新年も混沌学院を応援よろしくお願い致します！！」

第１６話：（ドラキュラ編）崖に追い詰められても諦めるな（前書き）

あと少しでドラキュラ編も終わりです。その後はまたいつものような話でお願いします。

第１６話：（ドラキュラ編）崖に追い詰められても諦めるな

操られたハヤテの攻撃により危機に陥ったシャナ。だが絶体絶命の彼女を２Ｂの正宗、そして幸村と伊澄が救った。彼らの増援により状況はずいぶん変わった。

「大丈夫か、シャナ殿！」

「え・・・ええ・・・」

「それ以上声を出さないでください。あなたは今かなり危険な状態です。少し待ってて下さい。」

伊澄はこう言うと右手をシャナにかざした。そして、伊澄の右手が光り輝き、シャナの傷をいやした。

「あ・・・ありがとう。」

「いいえ、だけどこれは応急処置にすぎません。私にできるのはほんの少しの治療だけです。」

「グ・・・グ・・・・グガァァァァァァァ！」

ハヤテは突然雄たけびをあげ、突進してきた。

「しまった！」

「ヘイ！ここは俺に任せな！レッツパーリィ！」

正宗は自慢の六爪流でハヤテに挑んで行った。

「真田幸村ァ！おめーは他の奴らの捜索を手伝ってくれェ！」

「任せた！文乃殿！ナギ殿！ここは正宗殿に任せと俺達は先へ」

「嫌だ！」

ここでナギが叫んだ。

「ど・・・どうして！」

「私はハヤテの主だ！そして彼女だ！ハヤテを救うまで私はここにいる！」

「・・・しょうがない、文乃殿！我らの先へ参るぞ！」

「わ、わかったわよ！」

文乃と幸村は先へ走って行った。
「正宗、ハヤテをなるべく傷つけないでくれ。頼む。」
「ＯＫ！俺に任せとけ！」
その直後、正宗の刀とハヤテの拳がぶつかり合い、その衝撃で廊下中が振動した。

「ボーンちゃァァァァん！」
「麦ちゃん、無事でよかったわァァァん！」
涙のボン・クレーがルフィに語った。
「皆ー！今はそれどころじゃないわよ。」
イワンコフの声で銀時達は前方のカマキュラを見た。
「あなたたちィィィ！この私をこんなにこけにして・・・ゆるさなぁァァァい！」
怒りをあらわにした。カマキュラの怒りで部屋の下から伸びているツタの数が倍以上に増えた。
「あ、言うの忘れてたけどエヴァちゃんが２Ｚの生徒達に先生がヤバいから助けに来いって言っておいたから。」
「ハァァァァァァァァァ！あのガキ、何勝手に」
「銀さァァァァァん！」
ここで新八の叫び声が聞こえた。銀時が後ろを見たら部屋の入口に新八が来ていた。続いて後ろから土方、桂、御坂、クラウド、ロイド、エミル、ゼロスなど２Ｚの面々が来ていた。
「何カッコつけといてやられてんですか！」
「かっこわり～ね～。」
「先生、俺達も戦います！」
「てめーら・・・」
銀時は自分の教え子たちの顔を見た、皆戦う気だ。
「・・・これだけは言っておく、絶対に怪我とかするなよォォォォォォォ！」
「オオオオオオオオオ！」

銀時達は再びカマキュラに挑んで行った！

一方文乃の方では。

「・・・誰かが後ろから追ってくる・・・」

「嘘！じゃあ正宗は」

「それは無い、正宗殿があっさり負けるなどとそんな事は・・・」

文乃と幸村がそう言った後、後ろを見た。すると、声が聞こえた。

「巧ィィィィィ！どこよ！どこにいるのよォォォォォォォ！」

「・・・にゃあ・・・巧・・・返事をして・・・」

「・・・まさか・・・」

文乃はやな予感がした。そして、声の主がものすごい速さで文乃の方へ来た。で、正体は。

「千世！希！それに吉田まで！何やってるのよアンタら！」

「文乃！あんただけ抜け駆けなんてずるいわよ！巧は私の下僕なんだからねっ！」

「はぁ！アンタまだそんなこと言ってんの！」

「巧ィィィィ！今行くからァァァァァ！」

千世は走るスピードを上げ、文乃を追い越した。

「あっ！待ちなさいコラァァァァァァァァ！」

文乃もスピードを上げた。

「お待ちくだされ文乃殿、千世殿ォォォォォォ！」

幸村は先に走って行く二人の名を叫んだ。

その一方、正宗とハヤテのバトルは。

「・・・今何か走り通ったけど・・・まぁいいか、これで止めだァァァァ！」

正宗は右手の剣から雷を発し、ハヤテの方へ向け放った。正宗の猛攻によりハヤテは完全に押されていた。そして、止めの一撃が今放たれたのだ。雷はハヤテに命中した。

「ギャァァァァァァァァァ！」

黒こげになったハヤテが床に倒れた。
「ふー・・・これでおわっ」
ガシッ！正宗は自分の右足が掴まれているような感覚がしたので自分の足元を見た。足元にはいつの間にか回復をしていたハヤテがいた。
「な！」
正宗の一瞬のすきを見てハヤテは正宗を突き倒し、上乗りになった。
「チッ！しくじった・・・」
「ヒャーハハハ！」
「おぃ、ＳＭすんなら俺も混ぜろぃ。」
ここで沖田がハヤテに向かって飛び蹴りを放った。
「沖田！何でここに！」
「あー、ナギが。実は２Ａのエヴァっつーガキがなんか旦那がヤバいから助けに来いって言われて・・・で、何班かに分けてこの小屋を捜索中ってわけよ。」
「という事は皆が」
「ああ、２Ｚの連中全員来てるぜぃ。まぁ例外がいますけどね！」
沖田は喋っている途中に襲って来たハヤテを飛んでよけた。
「おい、風紀委員。２対１は好きな方か？」
「好きですぜぃ。何だって一方的に攻撃できるからねィ・・・」
「じゃあ行くぜ！」
沖田を加え、正宗は再びハヤテに向かって行った。
「・・・・・うう・・・」
「ねぇ、どうしたのナギ？」
シャナと伊澄の近くにいたミクが黙りこんでいるナギに言葉をかけた。その様子は唯や律も見ていた。
「い・・・いや・・・何でも・・・ない。」
「アアアアアアアア！」

「新八ぃ！テメ―何やってんだァァァァ！結局お前があしてまといになってんじゃねェェェかァァァァァ！」
銀時は逃げ回る新八に渇を入れた。
「無理無理無理無理！こんなの無理！下手したら・・・おわぁ！」
新八はこけてしまった。で、その反動で眼鏡を落とした。
「あっ、ヤベ！眼鏡が！」
新八が眼鏡を取ろうとし、手を伸ばした。だが、カマキュラの操るツタにより粉砕された。
「・・・・・新八・・・新八ィィィィィィ！」
銀時は眼鏡が粉砕されたところへ行った。そして眼鏡の欠片を手に取った。
「嘘・・・だろ・・・新八・・・新八ぃ！返事をしろ！」
「あの～銀さん？」
「大丈夫よ、今からあなた方もあの子の所へ逝かせてあげるわ。」
「それって新八の事か・・・新八の事かァァァァァァァ！」
悟空は怒りでスーパーサイヤ人となった。
「許さねぇ！おめぇだけは許さねぇ！」
「オホホホホ・・・無知な子供達ね・・・いいわ。相手になってやるわよォォォォォ！」
「うおおおおお！覚悟しろォォォォォ！」
「オメーがなァァァァァァァァァァァァァァァ！」
カマキュラに挑もうとした銀時と悟空の頭を掴み、新八はそのままカマキュラに思いっきりぶつけた。
「誰が眼鏡だァァァァァァ！もうそのネタうんざりなんだよォォォォ！」
「イテッ！イテッ！」
「や・・・ヤダなぁ新八ィ。ほんの冗談だよ、冗談。」
「何が冗談だァァァァァ！冗談にしても限度があるわァァァァァ！」
新八は最後の止めに同時に二人の顔面をカマキュラにぶつけた。
ゴツン！と鈍い音がした後カマキュラは倒れた。その後、新八は二

人の頭を掴んでる手を話した。銀時と悟空は目を回していた。

一方ハヤテと戦っている集は。

「オイオイ・・・いつになったら倒れんだよ・・・」

「ハッ・・・体力が・・・ありすぎだろ。」

ハヤテと戦っている正宗と沖田は体力の限界だった。一方的に攻撃を仕掛けているがハヤテはダメージを負っている様子は無い。

「フフフフ・・・」

「チッ・・・これじゃあ・・・・負ける」

正宗が負けを覚悟したその時だった。

「ハヤテ！」

ナギがハヤテの前に出たのだ。

「えっ、ナギちゃん！」

「オイ、何してんだ！早く戻れ！」

声が上がったがナギは警告を聞かずハヤテに近づいて行った。

「グググ・・・グアアアアアア！」

「あ・・・あぶなァァァァい！」

そこにいた澪は目をつぶった。数秒後、何も音がしないのに疑問を持ち、目を開けた。そこにはハヤテに抱きついているナギの姿があった。

「・・・・・・ハヤテ・・・聞こえているか？私だ。ナギだ・・・」

「ぐ・・・ぐあがぁぁぁぁ！」

ハヤテは暴れてナギの抱いている手を話そうとしたがナギは離さなかった。

「私だ！ナギだ！気付かないか！」

ナギはハヤテに向かって叫んだがまだハヤテは我を戻さない。

「いい加減に気付け！忘れたのか主の顔を！恋人の顔を！ハヤテ、ハヤテェェェ

「危ない！」
正宗と沖田がナギの元へ向かって行った。だが距離が開きすぎて間に合うかどうかわからない。
「・・・仕方ない。」
ナギはハヤテの首を自分の唇の近くに引っ張り、キスをした。
「これで・・・気付いてくれ・・・」
ナギは涙声でそう呟いた。自分でも気付かないうちにナギは泣いていた。その時だった、ハヤテが突然苦しみだしたのだ。
「え？」
「おい・・・な・・・何だ何だ？」
誰もがハヤテの周りに近づいた。
「ガァッ・・・アッ・・・アッ・・・アアアア

バターーーーン！ハヤテはぶっ倒れてしまった。近くにいたナギはもちろんミクや正宗、澪もハヤテの周りに向かって行った。
「どうした！」
「い・・・今頃になってダメージが・・・いきなりどっと・・」
ハヤテはそう言いかけ気絶した。
「・・・まぁとりあえず私はハヤテのそばにいる。皆は文乃達の方へ行ってくれないか？」
「はい。では行きましょう皆さん！」
ナギの問いに答え返事した伊澄。だが彼女は別の方へ行きそうになった。
「おい！こっちじゃねーのか！」
「ああ・・・じゃあ行きま」
「おい・・・こっちだぜ・・・はー仕方ない。俺が伊澄を連れて行く。」
「すみません。」
正宗は伊澄を背負い文乃達を探しに行った。後ろから唯達も付いて行った。

「おーーい！文乃ーー！巧ーー！悠二ーー！どこだーー！」
「返事してーー！」
唯達は文乃達の名を叫びながら探していた。色んな部屋を調べるが見当たらなかった。
「ちくしょー、一体どこだよ！」
律が目の前の扉を開けた。そこには目を閉じている巧と悠二、そして近くでしゃがみこんでいる文乃達となぜかあせっている幸村がいた。
「おい、どうした？」
「ま・・・正宗殿！大変な事になってしまった！」
「大変な事？」
正宗が疑問を持つ中唯は巧の肌をじっくりと見ていた。

「ねぇ、何かやけに肌が白くない？」
「気のせいじゃね？」
「気のせいじゃないよ。だってこんなに」
唯が巧の手に触れた。なぜか異様に冷たかった。その時唯の中に嫌な予感が走り、唯は巧の心臓部分に耳を当てた。で、次に悠二の所へ向かい、同じように心臓部分に耳を当てた。その後、唯は動かなくなった。ここで澪は動かなくなった唯に言葉をかけた。
「唯どうした？二人に何かあったのか？」
「・・・てない・・・」
「え？」
「二人とも、心臓が動いてない！」

次回！
最悪な展開になってしまった救出劇、だがその後に発した伊澄の言葉が・・・そしてカマキュラとの戦いもクライマックスへ！次回、ドラキュラ編終結！『過程はどうであれ最後に笑えれば一番いい』どうぞご期待！
「お前らの血の色は何色だーーー！」
「今度はレイかよ！いい加減北斗の拳ネタは止めろ！」

第１６話：（ドラキュラ編）崖に追い詰められても諦めるな（後書き）

作者「特別企画！！生徒さんいらっしゃい！今回のゲストはブロリーとパラガスです！！」

ブロリー「ブロリーです。」

パラガス「パラガスでございます。」

作者「今回はこの二人を出してほしいと要望があり、本弁だとかなり先になるので先にこの後書きでのおまけコーナーでだしました。」

ブロリー「出番はいつだぁ？」

作者「いや～実はかなり前からワードでこの話を書いていて今は４０話を書いています。」

パラガス「書きすぎですな。」

作者「ほっとけ。さて、この話をどう思いますか？」

ブロリー「クズ（ベジータ）の扱いのひどさに笑った。」

パラガス「そうだな、確かにベジータはあんまり出ていないな。」

作者「ははは・・・でもまー後に大長編で出す予定でいるから。もちろんブロリーも。」

ブロリー「フフフ・・・アーハッハッハー！！」

パラガス「私はいつ出るのでしょう？」

作者「かなり先。」

パラガス「・・・・・・。」

作者「あ、そーいやー銀さんやあずにゃん見かけねーなー。」

銀八「おーい馬鹿作者ー。ハンバーガー食うかー？」

作者「えー？今いいよ飯食ったばっかだし。」

梓「そんなこと言わずに食べてください！」

作者「どうした二人とも！何か目がおかしいぞ！」

闇「・・・！気を付けてください！この人たち・・・洗脳されています！」

作者「ハァ！？一体だれがやったんだよこんなふざけたこと！？」

？「それは僕だよ。」

作者「お・・・お前はァァァァァァァ！！」

おまけコーナー、次回に続く！

ブロリー「何だぁ？この話も続くのかぁ？」

パラガス「そのようですな。」

第17話：（ドラキュラ編）過程はどうであれ最後に笑えれば一番いい（前書き

作者「ドラキュラ編クライマックスです！」

闇「どうか見ていってください。」

作者「というわけで始まり始まり～。」

第17話：（ドラキュラ編）過程はどうであれ最後に笑えれば一番いい

唯が発した言葉はこの場の空気を凍らせた。なぜなら級友たちの心臓が止まっているのだから。そんな信じたくない現実に誰もが目をつぶった。

「嘘だ・・・嘘だ・・・！」

「じょ・・・冗談だろ・・・なぁ・・・まさか・・・」

澪と律の質問に唯は無言だった。唯の目は涙目になっていた。そんな中、伊澄が正宗の背から降り二人を調べた。そしてこう言った。

「大丈夫です。二人は何らかの方法で仮死状態になっているだけです。」

「・・・へ？」

「だから二人は死んでいません。」

「本当！」

叫んだのは文乃達だった。

「で、どうすればいいの！教えて！早く！」

「え・・・え～と・・・方法はあるんですが・・・」

「勿体ぶんないで早く教えなさいよ！」

「・・・その方法は・・・異性との接吻です。」

「「は？」」

文乃や吉田は目が点になった。

「私が調べた限りどうやら呪いの力で強制的に仮死状態になっています。この呪いは異性との接吻で解けるものです。」

「じゃ・・・じゃあ巧は」

「何言ってるのよ文乃！ここは巧の主の私」

「にゃあ・・・わたし」

迷い猫の連中が騒ぎだした。

「ゆ・・・悠二君・・・こ・・・これで封印が解けるなら・・・」

吉田は顔を悠二に近付けて行った。そして・・・。
「まァァァァァてェェ
ェェェェェェェェェェェ！」
鬼のような形相でシャナが入って来たのだ。
「シャナちゃん！どうしたの？ってか怪我は大丈夫なの！」
「あんなのただのかすり傷よ！それに一美！悠二の唇は渡さない！」
シャナと吉田も言い合いを始めた。
「・・・早く封印を解いてやれよ。」
律は呟いた。

「オラァァァァァァァァァァァァァァァ！」
新八は叫びながらカマキュラの顔面を殴っていた。彼の怒りの一方的な攻撃はまだ続いていたのだ。
「新八ィ！もう止めろ！あいつのライフはゼロだ！」
「んなこと知るかァァァァァァァァァ！」
「誰かァァァァァ！奴を止めてくれェェ
ェェェ
「ェ！ェェ！ェェェェェェ！」
新八はカマキュラの口の中に暗黒物質を詰め込んだ。
「ホゲェ！何これ・・・」
カマキュラは暗黒物質を口にしてしまった。その後、カマキュラは悲鳴を上げ気を失った。
「ウッシャー！」
「・・・志村シスターズ・・・恐るべし。」
誰もが呟いた。

一方、まだ騒がしいシャナ達の方は。
「だから私が！」
「いいよ、私がやるから！」
「だーかーらー、私がやるからあんた達は他の事をしてなさいよ！」
「何をォォォォォォ！私より胸が大きいからって調子こかないでよ！」
「にゃあ・・・今はそれ関係ない。」
などとまだまだ騒がしかった。
「あの～、もめてるのならじゃんけんで白黒はっきりとしたらいいのでは・・・」
恐る恐る幸村が提案を出した。
「いいわね。」
「一発勝負よ！」
「ジャーンケーン！」
その後、決着がついた。文乃は巧、そしてシャナは悠二にキスをする事になった。
「い・・・いくわ・・・よ・・・」
顔を赤めながら文乃は巧の顔に近付けて行った。シャナもためらいながら悠二に近づいて行った。・・・だが。
「あれ？」
「どこだここ？」
巧と悠二は目を開けた。
「シャ・・・シャナ！え！ななな何？この状況！」
「し・・・知らないよ！俺の方だって目の前に文乃が」
「あああああああ！」
「二回死ねーーーー！」
文乃とシャナは顔を真っ赤にして目の前にいる巧と悠二にパンチした。で、巧と悠二はまた気絶した。

「おい、大丈夫か貴様ら！」
ここでエヴァンジェリンとネギが壺らしきものを持って部屋に入って来た。
「あ、エヴァ、ネギ。大丈夫だ。あのカマキュラは新八によって倒された。」
「倒されたって・・・」
ネギは前方で白目をむいて泡を吹いていて倒れているカマキュラを見た。
「何があったんですか？」
「いずれ話す。」
「そんな事より早くあいつを封印するぞ。ネギ、銀時、手伝ってくれ。」
エヴァは気絶したカマキュラの前に立った。で、何かの暗証らしきものを呟いた。その後、カマキュラの周りに魔法陣が浮かび上がり、壺の中に入って行った。
「これで一件落着だな。こいつを封印した事により今まで行方が分からんかった奴もでてくるだろう。」
「そうだな。」
「じゃあ、帰りますか。」
新八がこう言った。銀時が生徒達の顔を見回しこう言った。
「よーし、じゃーけーるぞー。」
これでドラキュラ騒動は終わった。行方が分からなかった生徒や先生も見つかり皆歓喜していた。この事件解決により銀時とエヴァ、２Ｚの面々は英雄と呼ばれていた。

「・・・・あれ・・・ここは・・・」
その日の夜、今まで気絶していたハヤテは自室のベッドで目が覚めた。そして今まであった事を思い出していた。
「・・・お嬢様に・・・悪い事をしてしまったな・・・」
ハヤテは呟いた。執事であるハヤテがある時であるナギに襲いか

かったのだ。それが操られていても。ハヤテは自分の弱さを恨んだ。
「ハヤテ・・・起きたのか・・・？」
隣でベッドに潜り込んでいたナギが目を覚ました。
「お嬢様・・・」
「大丈夫か？まだ怪我は治ってないんだろ？」
「だ・・・大丈夫ですよ、今だってこーんなに。」
ハヤテはガッツポーズをしようとしたが腕や腰が悲鳴を上げた。
「イダーーーーーー！」
「・・・無理をするな。」
ナギはハヤテに抱きついた。
「お前は今苦しんでいる。私を襲ってことに後悔している。」
「え・・・」
「そう顔に描いてあるぞ。」
ナギはいったんハヤテから離れた。
「そんな過去の事は気にするな。私は今そんなこと気にしてないぞ。」
「・・・・！」
「そんな事より大切なのは今だろ？もしこれから先、またこう言う事件があって私に何か起きたら助けてくれ。もちろんお前に何かあったら私が助けに行く。」
「お嬢様・・・！」
ハヤテはナギに抱きついた。
「・・・励ましの言葉・・・ありがとうございます・・・」
「泣くなハヤテ。私は主として・・・恋人として当然の事を言っただけだ。」
「うう・・・」
「・・・願いがあるが・・・今度一緒にデートに行くか？」
ナギはハヤテに聞いた。ここでハヤテは気付いた、普通の日常を取り戻した事に、主が自分の過ちを許した事に。
「・・・いいですよ。」

ハヤテは笑顔でこう言った。

ストレイキャッツにて。今は巧と文乃は二人っきりだった。

「文乃、悪かったな。心配かけて。」

「べ・・・別に心配なんてしてないわよ！」

「はは・・・」

巧は苦笑いをした。だが巧は気付いている。文乃の本当の気持ちを。文乃は狼少女である、つまり今言った事と本当の気持ちが逆なのだ。つまり今の文乃の言葉は『巧の事を心配していた』という意味である。

「・・・皆心配してただろ？千世とか希とか・・・銀さんは・・・してなさそうだな。」

「そ・・・そうだったわ。あの人はいつも通りだったけど・・・あの人がいなかったら今頃どうなってたか・・・」

「ああ・・・・・・あとこれ律が言ってたけどお前が一番俺の事を心配していたって。で、誰よりも早く俺の所に駆け付けたって・・・」

「ななななな！そんなわけないでしょ！あ・・・あああれは・・・えと・・・その・・」

かなり動揺している。ここで巧は思った。本当に俺の事を心配してくれたんだって。

「文乃。」

「何？ってああ！」

巧は文乃に抱きついた。

「ちょっと！何すんのよ！」

「ゴメンな・・・心配かけて・・・ずっと・・・ずっと・・・」

「巧・・・」

「俺が銀さんやルフィみたいに強かったら・・・文乃にこんな思いはさせないのに・・・」

巧の言葉を聞いて文乃は涙が出てきた。

「バカ・・・別にいいのに・・・強くなくたって・・・・」
「文乃・・・」
「心配したんだから！本当に！・・・よかったよ・・・巧が無事で・・・本当に良かった・・・」
文乃は本音を言った。そして、文乃は泣き始めた。巧の腕の中で。
「ゴメンな・・・本当にゴメンな。」
ここでストレイキャッツの扉が開いた。
「巧！アンタ大丈夫！」
「にゃあ・・・巧・・・平気？」
ここでお見舞いの品を持った千世と希がやって来た。この状況で。で、この光景を見た。見てしまった。そして、二人とも気絶した。

「悠二、これ。」
「へ？」
悠二家にて、悠二の部屋にいたシャナが悠二に何かを渡した。メロンパンだった。
「いいの？」
「いいの、これ食べて早く元気になりなさい。」
「で・・・でも」
「何でもいいから早く食べる！」
シャナは無理矢理悠二の口にメロンパンを入れた。
「んぐ！ぐぅっ！うう・・・はぁっ・・・」
「どう？この隣町のパン屋のメロンパンの味は。」
「し・・・しっかりと食べてなかったよ。」
「そ・・・そう・・・。」
悠二は袋に入ってあったメロンパンを取り食べ始めた。
「今回は・・・ゴメン。色々と迷惑をかけて。」
「悠二・・・。」
「ホントに・・・シャナや皆に迷惑をかけたな・・・」
シャナはうなだれている悠二の顔を見た。だが彼女はこう言った。

「気にしないで、どうせあいつらも今回の事全然気にしてないはずだから。」
「そ・・・そう。」
「皆を信じなさい。」
「・・・・うん。」
悠二は窓から見える月を眺めていた。

騒動が終わってから数日後、新八の携帯に一通のメールが届いた。その内容は。
『Ｔｏ　エヴァンジェリン
Ｓｕｂ　おい眼鏡
本文　本日放課後にてあの小屋の後始末をしたい。だから手伝いに来てくれないか。あと私のメアドは一応登録しておけ。』
だった。放課後、新八はあの小屋に来ていた。他の２Ｚの面々もいた。
「皆、すまないな。呼び出して。」
「いいですよ、困った時はお互い様ですからね。」
「ああ。でわ早速だが小屋の中の薬品を地下に入れるのを手伝ってくれ。」
「おう！」
皆がこう返事をした。数時間後。
「ふー、これで終わりましたね。」
「ああ、だが・・・」
エヴァは小屋の方を見た。
「この小屋をどう処分しよう。」
「えええええ！処分しちゃうのー！」
唯が質問をした。
「ああ、この小屋には何かがいるとかで怪談や七不思議にされる事が多い。それで度胸試しで来る奴がいるんだ。だから今回のような出来事が起きないようにこの小屋を処分しようと決めたのだが・・・

どう処分しようか？」
　エヴァが考え込んでいたその時だった。上から轟音が響いた。新八が上を見たら宇宙船らしきものが小屋に向かって落下してきている。
「えええええ！何これ？ヤバいんじゃ・・・」
　新八が後ろを見たら全員が後ろの方へ避難していた。
「オィィィィィィ！僕を忘れるなァァァァァ！」
　新八も全速力で後ろに避難した。で、宇宙船らしきものは小屋に命中し爆発した。そして小屋の残骸の中から笑い声が聞こえた。この時、新八は気付いた。この宇宙船の持ち主を。
「アーハッハー！ようやく昆布学院についたかー。おっ、金時にエヴァンゲリオンじゃないかー、皆待っててくれたのかー。アーハッハー！」
　宇宙船の中から坂本辰馬が笑いながら現れた。その後、夕日は目が点になっている２Ｚとエヴァ、そして高笑いをしている辰馬を明るく照らしていた。

第17話：（ドラキュラ編）過程はどうであれ最後に笑えれば一番いい（後書き

前回のあとがきのあらすじ

何やかんだで銀八とあずにゃんは洗脳されちゃいました（笑）

作者「だ・・・誰だ！」

？「・・・ＢＧＭ・・・スタート！」

ブロリー「何だこれはァ？」

パラガス「はうぁ！あ・・・頭がァァァァ！」

作者「これはニコニコ動画で有名なＢＧＭ・・・最終鬼畜妹のＢＧＭ」

ブロリー「というか漢字間違ってないか？」

作者「・・・間違いがあったら感想のところに送ってください（小声で）」

ブロリー「おい・・・それよりもしかして貴様は・・・」

作者「有名な赤アフロの・・・！」

ドナルド「ドナルドです。」

作者「い・・・一体何の用だ！」

ドナルド「君を洗脳してこの作品を乗っ取ろうとしているんだ。」

ブロリー「な・・・何て奴だ。」

作者「そんなことさせるか！ブロリー！やっていいぞ！」

ブロリー「はい。」

パラガス「そんなことはさせるかァァ！」

作者「パラガス！何自分の息子の邪魔をしてんだ！」

ドナルド「そんなことがあると思って洗脳したんだ。ほら君も、いくよ。ランランルー。」

作者「・・・ニコ厨の俺にそんなの効くか！ブロリー！攻撃をしてもいいぞ！」

ブロリー「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！」

パラガス「ブロリー、何で俺の手をつかんでいるんだ？」

ブロリー「ハァ！」

パラガス「アアアアアアアアアアアアアアアアア！自分の息子に殺されるものサイヤ人の運命（さだめ）」

デデーン！！

ドナルド「アッハッハ。そんなの、効かない」

ヒュ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！

作者「何？この音。」

ドッカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！

全員「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

辰馬「アッハッハ〜、すいませ〜ん。万事屋金ちゃんってどこですか〜？」

全員「また辰馬オチかよォォォォォォォォォォォォォ！！」

第１８話：王道ルートは何があっても崩せない（前書き）

作者「今回はハヤテとナギのバカップルの話です。」

銀八「ってかお前が書く作品って高い確率でハヤテとナギが結ばれるよな。」

作者「・・・始まりまーす！！」

銀八「おい、何シカトしてんだテメー。」

第１８話：王道ルートは何があっても崩せない

「では互いに誓いの証を。」
とある教会にてひと組のカップルが結ばれる。観客には彼らの親しい友人達がいた。そして新郎は新婦の頭にかかっているヴェールを上げた。
「・・・綺麗ですよ。」
「ありがとう・・・。」
彼女は赤面した。愛する人にこう言われた事を。
「では・・・目をつぶってください。」
「はい・・・。」
彼女は目をつぶり唇を閉じた。・・・だがなかなかキスをしない。目を開けてどうしたのかと思ったらビックリした。なぜならそこに新郎の姿は無かった。いや、なぜか彼女は客席にいた。え？何で？と思って前を見たら新郎は別の花嫁キスを交わしていた。
「会場の皆さん、綾崎ハヤテ様、そして三千院ナギ様に祝いの言葉を！」
「皆さん、ありがとうございます！」
「私はハヤテを必ず幸せにするぞ！」
「ではそのまま新婚旅行へ行ってください！」
彼女の後ろから車が現れた。車は彼女をはね、ハヤテとナギを乗せ猛スピードで去って行った。
「待って、待ってよ、ハヤテくゥゥゥ

彼女はうずくまっている銀時を見た。
「どんな夢見てたんだよ・・・うなされてぞおめー。」
「そ・・・そうですか・・・。」
とりあえず授業に戻った西沢であった。

「歩、一体どんな夢見てたの？」
昼休み、心配したヒナギクが聞いてきた。
「そーそー、かなりうなされてたし泣いてたよ。」
近くにいた唯も聞いてきた。
「はぁ・・・実は・・・」
西沢は二人に夢の内容を喋った。
「そ・・・それは・・・悪夢だねぇ。」
「でしょ！最悪だよね！途中までいい展開だったのにぃ～！」
「同情するわ。」
ヒナギクが同情した。なぜなら彼女もハヤテの事が好きなのだ。なので同情するのだろう。
「そういえばヒナちゃんもハヤテ君の事が」
「あああああ！あああああああああ！」
ヒナギクは唯の口を押さえた。そんな中。
「なぁハヤテ、連休にお泊りデートでもするか？」
「いいですね。」
ハヤテとナギの会話が聞こえたのだ。ヒナギクはお泊りというキーワードに反応した。それは西沢も同じだった。

「で？何で俺らがあのバカップルの追跡をやんなきゃいけないんだよ。」
不満げの銀時がヒナギクと西沢に聞いた。後ろには新八と面白半分で来ている神楽、ルフィ、唯がいた。
「あたりまえでしょ、あの二人がいかがわしい事をしないかしっかりと見はるためです！」

「いかがわしいって・・・あの二人同じ屋敷に住んでんだろ？もう毎日がお泊りじゃねーか。どーせ、夜中にあんなことやこんな事」
銀時がそんな事を言ったらヒナギクと西沢の拳が飛んだ。
「グフ！何すんだ・・・」
「とりあえずこのまま待ちましょう。まだハヤテ君とナギの姿が見えない。」
銀時をほっといてヒナギクと西沢はひたすら待ち続けた。そして数分後。
「来た！」
西沢が言った。銀時達の前に腕組をしながら歩いているハヤテとナギが現れたのだ。
「おいおい、学校でも外でもあのバカップルぶりは変わってねーじゃねーか。」
「言ってる場合ですか、早く行きましょ」
「待て待て、いくら尾行っつってもばれちゃあしょうがない。実はこの道のプロに頼んであるんだよ。」
「プロ？」
ヒナギクと西沢は聞いた。そして銀時はこう叫んだ。
「では出てきてください！」
その時、ヒナギクの後ろの方で音がした。ヒナギクが後ろを見たらスネーク先生が座っていた。
「待たせたな！」
「プ・・・プロってスネーク先生！」
「そうだ。銀時先生、今回のミッションはハヤテとナギの尾行でよろしいんですね。」
「ああ。」
「では早速行きましょう！」
スネークは近くにあった壁の所まで走って行き、へばり付いた。その後、銀時達もスネークと同じように壁の所まで走って行った。
「どうやらこの先の道はこういう壁が多い。この壁を利用して死角

を作りながら行きましょう！」
「おう！」
声を上げたが、少しして問題が発生してしまった。ハヤテとナギは商店街の方に行ってしまったのだ。
「オイどうすんだスネーク先生。壁がなくなって来たぞ。」
銀時はスネークに聞いたがスネークは余裕の笑みだった。
「大丈夫だ・・・ついにこいつの出番だ！」
スネークは自分のバックからダンボールを取り出した。
「こいつの出番って・・・ただのダンボール」
「そうだ、だがこれがなかなか気付かないんだ！」
「・・・もういいや。」
とりあえず新八達はスネークからダンボールを借り、ダンボールを被ってハヤテ達を追った。だが、
「スネーク先生、俺の段ボールが無いんだが。」
「あ・・・ああ。実は急な事で数が足りなかったんだよ。」
「オイオイ・・・俺はどうすればいーんだ・・・ん？」
銀時の目の前には何も入っていないゴミ箱があった。
「あの・・・何だか僕達見られてません？」
「気のせいだよ。」
「そうだそうだ、気にしたら負けだ！」
「そうか・・・」
ここで新八の目にがたがた動くゴミ箱の姿が映った。
「・・・何あれ？」
新八は今の事をすぐに忘れて目の前のハヤテとナギの方に視線を移した。どうやら彼らはデパートに向かってるらしい。新八達もデパートへ向かったが・・・すぐ後ろでバキバキ！と音がした。どうやらゴミ収集車があのゴミ箱を粉砕する音だった。
「何でこんな所にゴミ箱があるんだ？」
「しらねーよ。とにかく先へ行くぞ。」
ゴミ収集車は去って行った。まぁその事は置いておいて新八達は

デパートの中に入った。中はかなり広く、潜んで移動するにはうってつけだった。
「皆さん、ここでグループに分かれて移動するのはどうです？」
「新八君の言う通りね。この人数で行ったら怪しいと思われるわ。」
「よし、じゃんけんで決めよう。」
でじゃんけんの結果。新八と唯、神楽と西沢、ルフィとヒナギクのグループで尾行をすることとなった。
「じゃあ皆、なるべく目立たないように尾行してね。」
「わかった！」
と言ってそれぞれ散って行った。
「そう言えば先生達はどうなったんだろ？」
「さぁ？」
新八は銀時達の事を少し考えたが今はそんな場合じゃないって思い尾行を開始した。

一方その頃。
「うわぁ！中から人が出てきた！」
「やっちゃったよ、俺らやっちゃったよ！」
「ぎゃーぎゃーうるせー、ったくとんだ災難にあったもんだぜ。」
ゴミ収集車の中から傷だらけの銀時が現れた。
「だ・・・大丈夫ですか銀時先生？」
不安げにスネークが聞いた。
「ああ、大丈夫だ問題ない。で、奴らはどこへ行ったんだ？」
「あのデパートみたいですね。」
「うし、そんじゃあ早速あのデパートへ行くぞ」
「あれ？先生じゃないっすか。」
後ろで声がした。銀時が後ろを見たらアテネ校長が土方、近藤、沖田、山崎を連れて現れた。
「あれ？何でオメーらが乳出し淫乱校長と一緒にいんだよ？」
「銀時先生、その呼び方は止めなさい。・・・実はハヤテがお泊り

デートと聞いて何か起こらないか尾行をしようと思ったんです。」
「んだよ、俺らと一緒じゃねーか。」
「へ？一緒って？」
「実はよー、ヒナギクと西沢が何か起こるんじゃないかって言ってよー。それで尾行ってわけだ。」
「じゃあなんでそんなに傷だらけなんですか？」
「聞くな。それより早くデパートへ行くぞ。」
「はい。」
銀時とスネークはアテネ達を加えデパートへ入って行った。

一方デパート一階にて。
「わあ～この服かわいい～」
「唯さん、今はそれどころじゃありませんよ。そんな事をしたら二人に尾行がばれる」
「この肉うまそうだなぁ～、なぁヒナギク、試食に行っても」
「駄目。今はそれどころじゃないわよ。」
「ど～でもいいだろ～。俺はただ面白ければ」
ゴキャン！ルフィの頭にヒナギクのゲンコツが命中し、ルフィは目を回し気絶した。そしてヒナギクは気絶したルフィを引きずって前へ進んで行った。
「い・・・いいのかな？」
新八は呟いた。

デパート入り口、ここでは銀時達がこれからどうするか話し合っていた。
「で、何で作戦会議しなきゃいけねーンだ？普通に尾行すればいいじゃねーか？」
「よくありません。ほんの少しのミスでもハヤテは気付きます。なのでなるべく細心の注意を」
「あ・・・あ・・・」

「ん？どうした土方？」
銀時は途切れ途切れに声を出している土方を見た。彼の視線の方向には『世界のマヨネーズ展』と書かれた看板があった。
「おい、今はそれどころじゃねーだろ、こんなとこでオメーのマヨ好きには付き合ってられねーよ。」
「何でですか！運命は俺をあのマヨネーズ展へ導いてくれたんだ！俺のマヨ魂は止められねェェェェェ！」
土方は叫びながら『世界のマヨネーズ展』へ走って行った。
「オィィィィ！何やってんだあいつゥゥゥゥ！・・・はぁ、まあいい、残った俺らだけで。」
「あ・・・あ・・・」
今度は沖田が声を出した。
「どうした？お前もマヨネーズか？」
銀時が沖田の視線の先の看板を見たらそこには『世界拷問道具一覧展（販売もしてます）』と書いてあった。
「何やってんだこのデパートはァァァァァァ！」
「先生！運命が俺をあそこへ導こうとしています！すみませんが俺は運命に導かれていきます！」
「オィィィィ！お前運命とか信じるキャラだっけ？あのマヨバカみたいな言い訳するなよ！」
「大丈夫でさぁ！全員の分のお土産は買ってきます！」
「いるかァァァァァァァァ！」
全員がツッコミをしたがその隙に沖田は『世界拷問一覧展』へ行ってしまった。
「はぁ・・・おれらでやるしかねーなぁ。」
「そうね。とりあえずここで別れてハヤテ達を探しましょう。」
「そうだな。新八達が奴らを尾行してるはずだ。」
そして、銀時達はここで別々に分かれてハヤテ達を探すこととした。

「ったくよ～奴らどこに行ったんだ？」
銀時は身を隠しながら辺りを散策していた。今銀時は婦人服売り場にいる。何故ここにいるのかというと入り口から近く、隠れる場所が多かったからだ。数分後、ここにいるわけがないか。と思った銀時が階段へ行こうとしたその時だった。
「あーもー！止めてくださいよお嬢様ぁ～！」
「おお！似合ってるぞハヤテ！」
いたぁぁぁぁぁぁ！と心の中で叫び銀時はすぐに身をひそめた。
その時、誰かと当たった。
「あっ、すんません。」
「いいえ、こちらこ・・・」
銀時は驚きで声を出しそうになったが我慢した。ぶつかった相手は西沢だった。
「ハムスター、おめーもここで見張ってたのか？」
「ええ。ところで先生はどちらに行ってたんです？」
「あと銀ちゃん傷だらけある。大丈夫アルか？」
「まぁ、長くなるから後で話す。とにかく今奴らの声がしたよな。」
「はい。」
そして、試着室から多分無理矢理女装されたハヤテが現れた。
「おお！似合ってるではないかハヤテ！」
ナギはそう言ってハヤテに抱きついた。
「ははは・・・でも僕は早く私服に戻りたいです。」
二人の笑い声が銀時達にも聞こえた。
「銀さん・・・何か私の怒りケージが」
「おい！こんなとこで怒りケージを爆発させんな！あとサムスピネタは止めろ！絶対に分かりにくいから！」
「そうアル！このネタはかなり分かりにくいネ！覇王丸とかナコルルとかリムルルとかいっても分かる奴は少ないアル！」
「わかりませんよ、最近ではＸｂｏｘ３６０で最新作が出たじゃありませんか。」

「別にどうでもいいんだよそんな事！」
とか言ってる場合にハヤテとナギの姿は無かった。
「ヤベ！姿を見失ったぞ！」
「しまった！早く追わないと」
「駄目アル！もうどこにいるのか分からないアル！」
「くぅ・・・」
銀時は唇をかみしめた。

一方食品売り場にて。
「ふぅ・・・ここにはいないようね。」
「なぁヒナギク～奴らがいないんなら試食コーナー行っていいか～？」
ヒナギクとルフィが身を潜めてハヤテ達を探していたがここにはいないようだった。その時、ヒナギクは背後に気配を感じ、後ろを見るとそこには近藤がいた。
「こ・・・近藤さん！どうしてここに？」
「何だ。ヒナギクとルフィだったのか。先生から聞いている。お前達もハヤテ達の尾行だろ。」
「え・・・ええ。・・・もしかしてあーたんの依頼で？」
「そうだ。」
「そう・・・あーたんならやりかねないね・・・けどここにはいないみたいですよ。」
「ああ、そう・・・」
ここで近藤は何かを見つけた。彼の視線の先には買い物中のお妙と九兵衛がいた。
「お妙さん！」
近藤は立ち上がり彼女の方へ走って行った。だが途中で足を滑らせてしまった。そして、近藤の手は彼女の後頭部にチョップをしてしまった。
「ああ・・・・！」

「あらホント、奇遇ですね。」
その直後、近藤の悲鳴が店内に轟いた。
「おいどうした？」
銀時達がヒナギクの後ろから現れた。で、この惨劇を目の当たりにした。銀時はポケットから携帯電話を取り出しアテネに電話した。
「もしもし・・・たった今、ゴリラが再起不能になった。」

「はぁ・・・どこにいるんだ？」
「私に聞いても分かんないよ？」
新八と唯はとにかくデパート内を回っていた。そんなことをしていたら山崎と会った。
「あ、新八君、唯さん。君達もハヤテ君達の尾行？」
「え・・ええ。山崎さんもそうですか？」
「はい。あの校長に頼まれたんですよ。」
「へーそうなの。」
「ええ。でもこっちはこっちで大変です。副長がマヨネーズ展へ行ったり沖田さんが拷問道具展へ行ったり委員長が再起不能になったり。」
「そ・・・そうなんですか。」
「ねぇねぇ！だったら私達と行動しない！」
「あ、いいですね。」
「じゃあ山崎さんも一緒に来るってことで。」
「ええ。じゃあいっしょに協力しましょう。」
「はい。」
ということで新八達は山崎を加えデパートを歩きまわった。

「あの・・・スネーク先生。これじゃあ目立ちませんか？」
「大丈夫だ、問題ない。」
「はぁ・・・」
アテネはスネークとともにダンボールを被り移動していた。スネ

ークは恥ずかしくなかったのだがアテネはとても恥ずかしかった。
「あの・・・客の視線が・・・」
「気にするな。校長だってあの服でいろんな」
ここでアテネはいきなりスネークに攻撃し始めた。
「おわぁ！何をするんだ！」
「服の事は言わないでください。」
「は・・・はぁ・・・」
ここでアテネの携帯が鳴った。
「はい。あ、銀時先生ですか。ええ・・・ええ・・・。分かりました。では入り口で。」
「どうしたんだ？」
「ええ。実は銀時先生の方で新八の方からハヤテとナギが帰ったって連絡があったって言ってました。」
「そうか。じゃあ俺達も入り口に戻ろう。」
「ええ。」
二人はダンボールから現れた。その時、周りにいた人が全員引いた。

「ここで全員集まったか。」
デパート入り口。銀時達は集まった。だがこの場に土方、沖田、近藤はいない。
「おい、あいつらは？」
「どうやら副長と沖田さんは仕事放棄で近藤さんは再起不能です。」
「はぁ・・・やっぱそうなったか。じゃあここにいる奴らであのバカップルを追うぞ！」
「おう！」
「で、奴ら今どこだ？」
「知るかァァァァァァァァ！」
デパートの入り口にて全員のツッコミが響いた。そんな中。
「ええ・・・ええ・・・分かりましたわ！ありがとうございます。」

アテネは携帯で誰かと会話をしていた。
「おい、淫乱校長。誰に電話してんだ？」
「実はうちの方でハヤテとナギを捜索してくれって命令をしています。で、今彼らはホテルに向かっているという・・・」
ここで全員の脳裏に嫌な予感がよぎった。ホテル？二人っきり？男と女？
「・・・オイオイオイオイオイオイオイ・・・これって・・・ヤバいんじゃねーの？」
「ホテルですよね。普通のホテルですよね！頭文字にラブとかついてませんよね！」
「あ・・・あいつらも性欲を・・・」
冷や汗で話している銀時と新八とスネーク。もちろん皆も冷や汗をかいている。
「ま・・・まさかハヤテとナギに限って・・・なぁ唯。」
「そ・・・そそそそそうだよ！やるわけないよ！だってまだ学生だよ！」
ルフィも唯も汗を垂らしてこう言う。だがヒナと西沢とあーたんは。
「私が・・・私がハヤテ君を・・・守る・・・マモルマモルマモルマモルマモルマモルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」
叫びながらホテルは向かって走って行った。
「オィィィィ！待てよ！待てよォォォォ！ってかお前ら病んでるじゃねーかァァァァァ！」
銀時はヤンデレトリオに向かって叫んだ。

次回！
ハヤテとナギのお泊りデートに急展開？まさか・・・ついにあれをやってしまう？そしてヤンデレトリオがまた暴走？そして話は予想外の方向へ？次回。『まさかこの話が長くなるなんて予想付かなかったｂｙ作者』どうぞご期待！

「我が生涯に一片の悔いなし！」
「オイ！最終回的コメントは止めろ！」

第１８話：王道ルートは何があっても崩せない（後書き）

作者「はい、混沌物語でも質問コーナーやっているのでここでもやりまーす。質問があるやつ手を挙げろ。」

梓「はい。」

作者「何だ？」

梓「この作品のイメージしているＯＰとＥＤは何ですか？」

作者「・・・いまさら言うなよ・・・書く話で俺が頭の中でイメージしているのは・・・。

第１話
ＯＰ：ｐｒａｙ
ＥＤ：ＲＵＮ！ＲＵＮ！ＲＵＮ！

第２話
ＯＰ：七転八起☆至上主義
ＥＤ：イチャラブＣｏｍｅＨｏｍｅ！

第３話
ＯＰ：ＤＲＡＧＯＮＳＯＵＬ
ＥＤ：カラコイ～だから少女は恋をする～

第４話
ＯＰ：ココロのちず
ＥＤ：風船ガム

第５話
ＯＰ：ｏｎｌｙｍｙｒａｉｌｇｕｎ（スペルが違う場合連絡ください）
ＥＤ：モンハンのファンファーレ

第６話
ＯＰ：ドラクエのメインテーマ
ＥＤ：そして伝説へ（ドラクエ３のＥＤ）

第７話
ＯＰ：Ｃａｇａｙａｋｅ！ＧＩＲＬＳ！
ＥＤ：Ｄｏｎ’ｔ ｓａｙ ｌａｚｙ

第８話
ＯＰ：ｓｔａｒｙ ｈｅｖｅｎｓ
ＥＤ：乾いた叫び

第９話
ＯＰ：炉心融解
ＥＤ：メルト

第１０話、第１１話
ＯＰ：燃え上がれ！ガンダム！
ＥＤ：シャアが来る！

第１２話
ＯＰ：あわてん坊のサンタクロース
ＥＤ：きよしこの夜

第１３話
ＯＰ：はっぴぃにゅうにゃあ
ＥＤ：雪のツバサ

ドラキュラ編（第１４話～第１７話）
ＯＰ：バクチ・ダンサー
ＥＤ：修羅

今回
ＯＰ：愛を取り戻せ！
ＥＤ：本日、満開ワタシ色！

です。ちなみに次回予告のイメージテーマは北斗の拳のてーれってーでおねがいします。もちろん千葉ボイズで。」

梓「な・・・長い答えですね。」

作者「気になる疑問や質問も送ってください、できる限りこたえます。感想も受け付けていまーす！あと曲の名前が違っていたら連絡ください。あともう一つ、誤字脱字もあったら連絡ください。よろしくお願いします。」

第１９話：まさかこの話が長くなるなんて予想付かなかったｂｙ作者（前書き）

作者「今回は前回の続きでーす。ＯＰは前回と同じ『愛を取り戻せ！』です。」

銀八「ユアーショッ！」

第１９話：まさかこの話が長くなるなんて予想付かなかったｂｙ作者

銀時達はダッシュでホテルに向かったヤンデレトリオを追っていた。
「はぁはぁ・・・今思ったけどどこのホテルかあいつら分かってんのか？」
「あ！銀さんあれ！」
銀時は新八が指さしたところを見た。そこにはハヤテとナギの後ろ姿が見えた。彼らが向かう先のホテルの看板には『ＬＯＶＥＨＯＴＥＬ』と書かれていた。それを見てルフィ以外は真っ白になった。
「・・・・・なぁ・・・あれ・・・・何て書いてあるの？・・・誰か・・・教えて。」
「すいません。真っ白で分かりません。なぜか真っ白です。」
「私・・・涙が出てきたアルね。」
「神楽ちゃん・・・私もそうだよ。」
「何だか・・・泣きたいです。」
皆半泣きの状態だった。だがルフィは何かを見た。
「おい、これ。『ようこそ！ラヴェ～ホテルへ！（決してラブホではありません。ちゃんとした高級ホテルです本当は『ＬＯＶＥＥＨＯＴＥＬ』何だけどもう一つのＥが今何やかんだで故障中だからただいま修理しています。大事な事なのでもう一度言います決してラブホではありません）』って書いてあるぞ。」
「・・・・・ややこしいわァァァァァァァァァァァ！」
全員のシャウトが空に響いた。
「・・・ここですね・・・。」
銀時の背後から目が病んでいるヒナギク、西沢、アテネが現れた。
「うおっ！おめーら目がこえーよ！」
「うるさい。黙れ。天パが。」

「お前、そんなキャラだっけ？」
とまぁ銀時達は先へ進んだ。で、チェックインをするのだが。
「今さっきチェックインしたハヤテ様とナギ様の隣室にチェックインしたいのですが。」
アテネは部屋を指定した。
「あの・・お客様。お部屋の指定ができませんけ」
「うるさい黙れ。とにかくその部屋にしたい。そうしないとマキナを無理矢理蛇に変身させお前を食えと命令するぞ。」
と脅した。店員はアテネの殺気にビビってすぐに鍵を渡した。
「さぁ。行きましょうか。」
「お・・・おう。」

「ウオォォォォォォォォォォ！すんげェェェェェェェェェェ！」
ルフィはホテル部屋を見てビックリした。それはそうだ。一応ここは高級ホテルなのだ。まぁ名前が多少ややこしいが。神楽と唯はベッドの上ではしゃいでいた。
「スゲー！ベッドがぼよんぼよんするアル！」
「トランポリンだよ！このベッドトランポリンだよ！」
「オメーら。テンション上げんじゃねーよ。隣にはハヤテとナギがいるんだからよー。」
銀時は声を潜めてこう言った。隣の部屋にはハヤテとナギがいる。もしばれたらこの尾行が失敗になるのだ。銀時は耳を壁に近付けた。どうやらハヤテとナギの会話を聞こうとしているらしい。
「こんなことやって意味があるんですか？」
「わからん。だが奴らの状況を知るためだ。あらゆる手を使わないとな。」
そして新八と神楽と唯も銀時と同じように耳を壁にやった。そして声は小さいが会話が聞こえてきた。
「あぁん・・・・はぁ・・・あん・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・どう・・・ですか？お嬢様。」

銀時達は凍りついた。
「なぁ・・・まさか・・・」
「だ・・・大丈夫ですよ。ハヤテさんとナギちゃんも一応常識を・・・」
「そ・・・そうネ！大丈夫アルよ！」
「うん！大丈夫大丈夫！」
と言ってまた耳を壁に近付けた。
「う・・・気持ちいぞハヤテ・・・」
「そうですか・・・」
「あ！・・・あぁぁ・・・駄目・・・そこは駄目ぇ」
ここで冷や汗が流れた。
「ねぇ・・・本当に大丈夫か？本当に大丈夫か？本当に大丈夫か！」
「さ・・・さぁ・・・分かりません。」
「分かりませんじゃねーよ。何か喘ぎ声が聞こえた様な聞こえない様な・・・」
また耳を壁に近付けた。
「ああ・・・そこ・・・うう・・・ああ・・・あぁん・・・ハ・・・ハヤテぇ・・・」
「うう・・・ハァ・・・ハァ・・・お・・・お嬢様・・・」
ここで銀時達の冷や汗がダラダラと流れ出した。
「オイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイ。こ・・・これって・・・まままままままままままままさか・・・あいつら・・・」
「ちちちちちちちちち違いますよ。やるわけが」
「だったらこの声はどう説明すればいいんだよ。もうヤバいんじゃねーの？この小説１８禁になるんじゃねーの？モラルが問われるんじゃねーの？」
「だだだだだだ大丈夫ですよ。きっと。」
ここでもう一回耳を壁に近付けた。
「はぁ・・・気持ちよかったぞ。ハヤテの足つぼマッサージ。」
「マッサージかよ！」

銀時達はずっこけた。
「よかったわね。歩、あーたん。」
「そうですね。」
「ええ。」
ヤンデレトリオは血の涙を流していた。
「オメーらこそ大丈夫かよ？」
銀時は呟いた。

その後、大した展開もなく時間が過ぎて行った。
「そろそろ晩飯の時間だな。」
「そうですね。」
「待ってました！」
誰もが喜んでいるが銀時は待ったをした。
「待て待て。晩飯ん時にあいつらと鉢合わせになったらどうすんだ？」
「あ、そうだな。」
「だからもう少し待ってからにしよう。」
銀時がそう言った後、隣の部屋が開く音がし足跡が聞こえた。
「どうやらあいつらも晩飯のようだな。」
「じゃあ帰ってきてから食いに行こう！」
「そうだな。」
数分後。ハヤテとナギが帰ってきたのか隣の部屋の扉が開く音がした。その後、銀時達は晩飯を食べるために下の階に行った。このホテルのレストランはジャズを流している。かなり上品なレストランだ。
「すげー上品な所だなー。俺らが来る所じゃねーんじゃねーの？」
「はいはい、独り言はほっといて何か頼みましょう。」
ヤンデレモードから戻ったアテネがこう言った。銀時達もメニューを注文し、ジャズを聴いていた。そして、ジャズの演奏が終わり司会者が現れた。

「演奏者の皆様、ありがとうございます。続いては本店では珍しいラップを流したいと思います。」
「ラップですか・・・たまにはいいですね。」
アテネが言ったが銀時は嫌な予感がした。なぜならラップと言ったら・・・。
「ではお願いします。ＤＪＯＺＵＲＡさんです！」
で、右からあの人物が現れた。私服のヅラだった。ついでにエリザベスもいる。銀時達は机にめり込んだ。
「な・・・何であのバカがいるんだ？」
銀時が呟く中あの音楽がレストラン中に響き渡った。
「やるなら今しかねーＺＵＲＡ♪やるなら今しかねーＺＵＲＡ♪攘夷がＪＯＹ♪ＪＯＹが攘夷♪ふざけた国に俺が天誅♪やるなら今しかねーＺＵＲＡ♪やるなら今しかねーＺＵＲＡ♪攘夷がＪＯＹ♪ＪＯＹが」
「ジョォォォォォォォォォォォォォォォォォォイ！」
銀時は飛び蹴りでヅラを蹴り飛ばした。
「グフォ！先生！何でここに？」
「それは俺のセリフだ。何でオメーがここにいるんだ？」
「バイトです。」
「はぁ・・・そうか・・・。」
「お客の皆様。取り乱してスミマセンでした、今から新曲『桂の歌』を聞いてください！」
ヅラは変な歌を歌いだすが銀時達は耳をふさいで食事をしていた。

「あー、何か今日は疲れた・・・。特に晩飯の時。」
銀時は部屋に戻りこう呟いた。他の皆もあのヅラの変な歌を聴いて無駄に疲れていた。
「今日は風呂に入って寝よう。」
「そうですね。」
男子達は風呂に入って行った。

「はぁ～気持ちいい～こんなデカイ風呂久しぶりだな～。」
「何言ってんだよルフィ。寮の風呂だってかなり大きいじゃないか。」
「俺はいつもシャワーで済ましてるからな。」
寮暮らしの山崎とルフィは会話をしていた。
「家の風呂よりデカイな・・・さすが高級ホテル。」
「ああ。」
銀時と新八とスネークも呟いた。

続いて女子たちも風呂に入った。
「さすがに変なものは浮いてないわね。」
ヒナギクが言った。で、女子たちはこんな会話をしていた。
「ねぇ、何でヒナちゃんはハヤテ君の事が好きになったの？」
唯がこんな質問をしたのでヒナギクはビックリして湯舟にもぐってしまった。
「う・・・うう・・・」
「答えてよ～。」
「答えるアル！さもないと・・・アレするアル。」
「アレって何？気になってしょうがない！・・・はぁ・・・」
「言う気になったアルか！」
「早く、早く！」
ナギクは少しの間をおいてこう言った。
「一目惚れよ。以前に助けてもらって・・・それで。」
「ハヤテ君が白馬の王子様に見えたってわけアルか。」
「そう。」
「じゃあ西沢と淫乱校長はどうだったアルか？気になるアル！」
「わ・・・私も同じように。」
「以下同文ですわ。」
「へ～助けた人が白馬の王子様に見えるって・・・何だか単純だね～。」

「い・・・いいじゃない！そうでもしないとラブコメ系の漫画が始まらないのだから！」
「・・・そういうもんなの。」
女子達はこんな会話を交わしていた。

夜中。女子達はベッドの上でぐっすりと眠っているが男子達は床下にいた。
「あ・・・あいつら・・・何であいつらだけあったか布団でおねんねで俺らが冷た～い床下でおねんね何だ？」
「当たり前でしょ。男子と女子が同じベッドで寝れるわけないでしょうが。」
「せ・・・先生・・・何だか花畑が見えてきた。」
「銀時先生・・俺もだ。花畑の向こうでグレイ・フォックスがおいでおいでをしている。」
「ルフィ・・・スネーク・・・あっちへ行くな。今はとにかく生きろ。」
この日の夜中はかなり冷えていたようです。

「ん～よく寝た～。」
「ふぁ～皆おはよ・・・」
翌朝。女子達は気持ちよく起きたが目を真っ赤にした男子達を見てびっくりした。
「ど・・・どうしたんですか？」
「どうしたもこうしたもねーよ。テメーらのせいでこっちは生死の境をさまよってたんだ。」
「そうですか。さぁ朝食を食べたらすぐに出発ですわよ。」
「・・・俺達を休ましてくれ・・・」
銀時達はこう呟いた。その後、朝食をとりホテルを後にした。アテネは携帯で話をしていた。どうやらハヤテとナギを見つけたらしい。

「ええ・・・ご協力ありがとうございます。・・・皆さん、どうやらあの二人は動物園にいるそうです。」
「動物園か・・・デートスポットとしてはお決まりだな。」
「では行きましょう！」
「おう！」
そして彼らは決戦の地、動物園へ向かって行った。

「ひえ～やっぱ連休だから人が多いですね～。」
新八がこう言った。動物園には大勢の家族連れがいた。そんな中銀時の携帯が鳴った。
「んだよ誰だ・・・・・」
相手の名前を見て銀時は声を失った。電話の相手はハヤテだったのだ。
「な・・・何であいつが・・・」
「とにかく出て見たらどうです？」
新八に促され銀時は通話ボタンを押した。
「もしもし？」
『あ、先生。今どこにいるんです？』
「ど・・・どこって・・・俺んちだよ。」
『でも動物の鳴き声が聞こえますよ？』
「アレだ。志村動物園録画したから見てたんだよ。」
『ははは・・・先生・・・冗談はやめてください。』
「は？」
『実は僕もお嬢様も先生達が尾行してるって知っていますよ。』
「な・・・何ィィィィィィィィィィ！」
まさかの展開に誰もがビックリ仰天した。
「い・・・いつから気付いてたんだよ！」
『最初っからです。・・・・・それより一つゲームをしませんか？』
ハヤテの提案を聞いて銀時は目が点となった。
『今からこの園内にいる僕達を見つければ。一日だけ僕がその人の

執事となります。この提案はお嬢様がしました。』
・・・ハヤテとナギを見つければ・・・一日執事・・・もしかしたらあんなことやこんな事や×××や・・・とヒナギク、西沢、アテネは頭の中でそんな事を考えていた。
『けど時間があります。今から12時の鐘が鳴るまでです。鐘が鳴ったらそこでゲームオーバーです。わかりましたか。』
「ああ、でもその前に・・・」
銀時は新八達を見回した。案の定ヒナギクと西沢とアテネだけがもういない。
「もう始めてる奴がいるから。」
『・・・まぁいいか。じゃあ先生達も頑張ってください。』
ハヤテがそう言って携帯の電話が切れた。

「ったくよーあいつが執事になったって俺らには大したメリットがねーじゃねーか。」
「そうですよねー。」
愚痴をこぼしながら銀時達は辺りをうろちょろしていた。
「でも久しぶりだなー。昔はよく姉上や九兵衛さんとよく行ってましたからねー。」
「私もそうだよ。憂と和ちゃんと一緒に遊びに来てた。」
「俺は初めてだな。動物園は。」
などといろいろと語る一行そんな中。
「チクショー！一体どこだァァァァァァ！」
目を血走らせて猛ダッシュで動物園を走るヒナギクを見かけた。
「・・・いいか。他人のふりだ他人のふり。」
「はい。」
その後、銀時達はまた歩き続けた。

「あ～ルフィ～。牛タンがこっちへ来てるアル～。」
「そうだな～サーロインとカルビがこっちに来てるな～。」

「悟空も連れてくれば良かったアルね～。」
「そうだな～。」
神楽とルフィは牛がたくさんいる牧場エリアに来ていた。食いしん坊の二人はよだれを垂らしながら牛を眺めていた。
「二人とも、そんな目で牛を見ていたの？」
多少呆れている山崎が聞いた。
「んなことはねーよ。お前も見ろよ。たくさんいるぜ、ホルモンと牛タンと牛丼とすき焼きと」
「そんな目で牛を見るなよ！何だか牛がかわいそうになってきたわ！」
ツッコミをする山崎。そんな中、牛の鳴き声が轟いた。
「な・・・何だ何だ？」
山崎は耳を押さえながら牧場を見た。そこにはいつの間にか牧場に入り牛を追いかけているルフィと神楽の姿があった。
「オイィィィ！何やってんだあいつらァァァァ！」
「ウッヒョーイ！こいつらを捕まえてサンジに料理してもらおうぜぇエェェ！」
「賛成アル！」
「何考えてんだあいつらァァァァァァ！」
頭を抱えて叫ぶ山崎。そんな中、ずしんずしんと地響きが鳴った。そして山崎は腰を抜かした。出てきたのは牧場の主、屁怒絽だったのだ。
「君達、牛さんがかわいそうでしょ？」
あの顔で二人に迫った。
「す・・・スミマセンでした・・・」
二人はその場で土下座した。

「はぁ・・・はぁ・・・一体どこにいるんだ？」
園内を走り回った様子のヒナギクが息を切らせてこう言った。ヒナギクが周りを見ると西沢もアテネも息を切らせていた。

「皆の方も見つかってないみたいね・・・」
ヒナギクは二人の様子をすぐに察知した。そして近くの自動販売機でポカリを買い、一気に飲み干しまた走り出した。西沢とアテネも遅れととられまいと思い少し休んでまた走り出した。

「お嬢様。考えましたね。」
「フッフッフ・・・。今頃奴らは動物園内を走り回ってるに違いない・・・。」
園内のどこか。ハヤテとナギの会話が聞こえた。どうやら彼らは自分達の勝利を確信していた。だが。
「あれ？銀さん、スネーク先生、あれハヤテ君とナギちゃんじゃないですか？」
「お、そーみてーだな。」
「じゃあ私達が見つけちゃったの！」
後ろの方から銀時、新八、唯、スネークの声が聞こえた。
「せ・・・先生！どうしてここが？」
「新八からここには動物園の他に植物園があるって聞いてよー。で、暇つぶしに来たらお前らがいたってわけだ。」
そう、ハヤテとナギがいたのは植物園。何でかと言うと最初、ハヤテは園内と言っていた。これはこの動物園と植物園をさしていたわけである。決して動物園の事ではなかった。ハヤテとナギはヒナギク達がこの動物園のどこかにいる！と決めつけたと確信し、それの心理的な何かを逆手にとってこの植物園にいたわけである。
「で・・・俺らが見つけたんだけど・・・」
「どーでもいい結果になってしまったな。」
銀時とスネークがこう言った。新八も執事がいなくともどうでもいい。
「じゃあこの勝負はどうなるんですか？」
「そうだ！白黒はっきりさせないと」
「そうだ！」

ここで唯が声を上げた。
「ねぇ、連休明けの放課後、音楽室に来てよハヤテ君！」
「え・・・ええ。」
と言った。一方銀時は携帯でヒナギクに電話をしていた。
「おめーら・・・残念だがゲームは終了した。」

連休明けの放課後、音楽室にて。
「アァァァァァァン！や・・・止めてくださいよォォォォ！」
「ふふふふ・・・次はこれを着て見ようか！」
「さわちゃん、このギリギリメイド服がいいんじゃない？」
「アアアアアアン！」
さわ子と唯と律がハヤテに着せがえをして遊んでいた。その様子を見ていて銀時と神楽は爆笑していた。
「ギャーハハハハハ！ヤベェ、似合ってる！マジで似合ってる！」
「ギャーハハハハハ！かわいいアルよ、ハヤテェ！」
「銀さんも神楽さんも笑い事ではありませんよ！助けて下さい！」
「でも一日執事なんでしょ？軽音部の。」
「律さんや紬さんがやさわ子先生はいなかったでしょ！」
「どーでもいいじゃーんそんなことー。」
「アアアアアン！」
ハヤテは涙目だった。唯と律はノリノリで服を選んでいた。その様子を目をキラキラさせながら紬はカメラのシャッターを切っていた。新八とナギは小声でつぶやいた。
「・・・やりすぎだろ。」
一方ヒナギク達は、連休明けの数日間真っ白に燃え尽きていたという。

第１９話：まさかこの話が長くなるなんて予想付かなかったｂｙ作者（後書き）

作者「はい、質問コーナーに入ります。まず最初、お便りから。『上条さんと一方通行はいつ出ますか？』上条さんたちはかなり先になりますけど出演します。あとちなみに二人とも同じ２Ｎのクラスです。」

ドナルド「僕からもいいかな？この学院の服装は一体何なんだい？」

作者「服装に関しては各作品の学生服をイメージしてください。例えばハヤテのごとくだったら白皇学院の服装・・・という風にイメージしてください。あと原作に学園がなかったら原作の衣装でお願いします。ワンピースだったらいつもの服装で。ちなみに銀魂は銀魂高校の衣装でお願いします。あと銀さんと神楽はメガネをしていません。」

パラガス「私からも。一体この作品にはいくつの作品が登場しているんですか？」

作者「えーっと・・・調べ終わり次第作品紹介の部分に［登場作品］の部分を作ります！ではこれで今回の質問コーナー終了！」

ドナルド「はっはっは、じゃあ次もよろしくね。」

第２０話：始めては疲れるもの（前書き）

作者「今回で新キャラ達が出まーす。」

銀八「まさか俺」

作者「出るわけねーだろ。今回のＯＰテーマは『カービィ！』です。じゃ、始まりまーす！」

第２０話：始めては疲れるもの

「はぁ？混沌学院小学部に行って来い？」
ある日、銀時はアテネ校長に呼ばれこう言った。
「はい。実は実習でしばらく小学部へ行き、向こうで軽く授業をしてほしいと依頼があったのです。」
「で、俺が適任ってか？」
「ええ。」
銀時は深いため息をついた。
「もちろんお礼は致します。あなたの場合はそうでもしないと動かないでしょ？」
「・・・・・お礼付きか・・・そんなら仕方ねー。行ってやるよ。」
「ありがとうございます。」
その後、アテネから小学部への地図をもらい、部屋から出て行った。

数日後、銀時は小学部の校舎の校門に立っていた。まずはここの校長に挨拶をして行けとアテネに言われたので案内係に案内されて校長室へ向かって行った。
「しつれーしやーす。」
「あなたが銀時先生ですか。アテネ校長から話は聞いています。」
くえす校長が銀時に挨拶をした。
「・・・オイオイ・・・ここの校長も乳出してんのかよ。混沌学院の校長は何で淫乱」
「ふふふっ、それ以上言うと・・・殺しますわよ？」
何かの気配を察した銀時はすぐに土下座した。
「スミマセンでした、スミマセンでした・・・・。」
「もういいですわ。それより今からあなたが実習するクラスを言い

ますけど・・・担当の先生がまだ来てませんわね。」
ここでまた校長室のドアが開く音がした。
「校長すみません、少し渋滞で遅くなりました。」
その声の主の顔を見て銀時は絶句した。その声の主はルイージだった。
「エエエエエエエエエエ！何で？何でこの人がここにィ？」
「あら、ルイージ先生。丁度よかったわ、この人が混沌学院から実習で来た銀時先生ですわ。」
「へー、アンタがそうかい。じゃあよろしく。」
「あ・・・ああ。」
その後、銀時とルイージは校舎内を歩いていた。
「まさかアンタまでもがこの小説に出てくるとは・・・。」
「ホント、何でも有りだよな。」
「あ・・・ああ。で、今気になったんだけどマリオはどこだ？」
その質問を聞いたルイージは歩くのを止めた。
「あ・・・まずい質問だった？」
「いや・・・実は兄貴はロゼッタとイチャイチャしてるのがピーチ姫にばれてその怒りの逆鱗に触れてしまって宇宙空間に放り出されてしまった。しかもその後にブラックホールが現れて兄貴はそれに飲み込まれてしまい行方不明となっている・・・。」
「何だよそれ。」
「まぁいずれひょっこりと出てくると思うけどね。」
「アンタ・・・すごい前向きだな。」
とまぁこんな会話を交わしながら銀時はルイージが受け持つクラス５Ｚの教室前に着いた。
「ふ～ようやくついた」
「銀時先生、危ない！」
扉を開こうとした銀時をルイージは突き飛ばした。その後、扉の方から無数のチョークが飛んできた。
「は！何だ何だ？」

「・・・まだあるな。」
ルイージはポケットから小さい石を取り出し教室の方に向かって頃がした。すると上の方から巨大なたらいが降って来た。
「な・・・何これ？ドリフのコントでもやってんのか？」
「違いますよ。おい、またお前か沙都子！」
ルイージが大声で行った後、教室の方から笑い声が聞こえた。
「オーホッホッホ！流石ルイージ先生ですわねー、この私のトラップを見事に見破るとは。」
「ってかこんなくだらねー事考えるのオメーしかいねーだろーが。」
ルイージはこう言いながら教室に入って行った。銀時もその後をついて行った。そしてルイージは教室の前に立ち銀時の紹介を始めた。
「前から言ってるように今日は混沌学院の方から実習の先生が来た。じゃあ銀時先生。自己紹介をお願いします。」
「お・・・おう。」
銀時は前に立ち、生徒の顔を見た。そして絶句した。目の前にはネス、ポーラ、リュカ、カービィ、ジョー、ピカチュウ、ルカリオ、梨花、沙都子、羽入など見た事のあるキャラクターばかりなのだ。
「・・・・・・・・ルイージ先生。このクラスはどうなってんの？」
「いや、どうもなにも・・・俺の教え子達ですよ。」
「イヤイヤイヤイヤ、教え子って・・・こいつらが？この面子が？」
「銀さーん、早く自己紹介をしてくださーい。」
「あ・・・ああ。混沌学院から実習で来た坂田銀時だ。ヨロシク。」
「はい、じゃあ連絡は以上。一時間目の準備をしとけよー。」
とルイージの号令で朝のホームルームは終わった。

「あー・・・何だかいきなり疲れた・・・。」
とんでもない光景を目の当たりにした銀時はこう呟いていた。そこに声をかけられた。
「おっ、アンタが実習の先生だな。」

銀時が顔を上げ、声の主を確認しようとした。で、ビックリした。声の主はクッパだった。
「オワァァァァ！な・・・アンタもこの学校の」
「いやいや、ワシは副但だよ。」
「おっ、クッパ。お前も来たのか。」
「おうルイージ。お前も大変だなー。」
「いや別に。それより大変なのは銀時先生の方だ。今から授業を担当するもんなー。」
「いやいやいや、アンタら敵同士じゃねーのかよ！」
銀時の質問にルイージはあっさりとこう答えた。
「いや、別に。」
「ワシのライバルはマリオだからな。裏の方ではワシとルイージは仲がいいんだよ。」
「いいのかそんな設定！・・・あと俺が授業するとか・・・」
「ああ。今から国語だからなー。だからアンタに頼もうって。」
「えええええ！いきなりぃ！」
「大丈夫だ。アンタも本家の方では色々と解決してるじゃないか。」
「それとこれとは別」
ここでチャイムが鳴った。
「じゃー頑張れよー。」
と言ってルイージとクッパは去って行った。
「オィィィィィィィィ！待ってェェェ

銀時は休み時間にルイージから授業の内容を聞いていた。なので今回の授業はすらすらと行えた。はずだった。
「ヒエェェェェェェェェェェン！」
少しして羽入の悲鳴が聞こえた。何事かと思い銀時が後ろを見たらそこにはカービィが寝ぼけて羽入を吸いこもうとしていた。
「Z～Z～おいしそうな蟹ペポ～。」
「ヒェェェェェン！僕は蟹じゃないのです～。」
「羽入！ちょっと待ってろ！」
銀時は叫び、カービィの所までかけて行ったそして羽入をカービィから遠ざけたが今度は自分が吸い込まれそうになった。
「うおぉぉぉぉぉ！」
「あ～蟹が消えたかと思ったら今度はおいしそうな綿菓子が現れたペポ～。」
「誰が綿菓子だァァァァァ！髪か？この髪の事を言ってんだろ！」
と言いながら銀時は何とか床にしがみついていたが段々とカービィの口の中に近づいて行った。そこにピカチュウが銀時の近くに近づいて行った。
「先生！今助けるピカ！」
「おい・・・ピカチュウ・・・まさか！」
「１０万ボルト！」
ピカチュウの周りが雷で光った。その雷がカービィと銀時を襲った。
「ギィィィィヤァァァァァァァァ！」
雷が収まり、黒こげになった銀時。天パは爆発ヘアーになっていた。
「ん～ふぁ～また寝ちゃったペポ。」
「が・・・あ・・・・うぅ。」
銀時はその場に倒れた。
「だ・・・大丈夫ですか先生？」
リュカが聞いてきた。

「い・・・・いや・・・・大丈夫じゃ・・・・な・・・・・・い・・・・」
銀時は傷つき倒れた。
「あ～酷い目にあったな～。」
保健室。銀時はここで治療を受けていた。
「本当にそうですね～。実習でこんな目にあうからね～。」
保健室の先生であるピーチ姫がこう言った。何で銀時が驚かないというともう驚くのに慣れていたからである。その時、保健室の扉が開いた。
「おーい、実習の先生がここにいるって聞いたから見に来たぞー。」
「あ、教頭先生。」
「教頭？」
銀時がその人物を見た。その人物とはでんぢゃらすじーさんだった。
「んだよ、アンタが教頭かよ。」
「何じゃ？驚かないのか？」
「色々ありすぎてもう慣れちまったよ。」
「そうか。」
その後、じーさんと銀時は雑談を始めた。
「でな。その前校長がぶち切れて今の校長に襲いかかったのじゃがたった2秒で負けてしまっての。それで校長の椅子を下ろされて今は・・・行方不明じゃ。」
「やっぱそうか。あの校長いずれは消えるって思ってたもんな～。」
「ははは。おっとそろそろ時間じゃの。」
「時間って？」
「今からみたいドラマの再放送があるんじゃ。」
「ドラマの再放送って・・・」
「じゃあの。まぁ頑張れよー。」
じーさんはそう言い残して戻って行った。
「じゃあ、俺もそろそろ戻るか。」

「そう。頑張ってね。後ルイージとクッパにヨロシクね。」
「ああ。」
銀時も保健室から戻って行った。

給食の時間。それまでの授業を何とかこなし銀時は少しお疲れモードだった。
「給食か・・・懐かしいな。」
と思っていたのもつかの間。また羽入の悲鳴が聞こえたのだ。
「おいおい、また羽入かよ。どうした？」
「梨花が僕の給食にハバネロの粉を入れたのですぅ～」
「羽入。何言ってるの？全然分からないのです。」
「まぁ、落ち着け。食えないんだったら先生のと変えてやる。で、どれだハバネロまみれの給食って・・・」
銀時が羽入の給食を見た。それはもう真っ赤っかで何が何だか分からないものだった。
「あ・・・あの・・・これは・・・」
「先生、ありがとなのです☆」
羽入はいつの間にか、銀時の席についていて給食を食べていた。
「先生、どうしたのですか？早く食べてください。」
「え？」
「早く、早く♪」
梨花がそそのかす。もう後に引けない銀時はハバネロ給食を一気に口に入れ飲み込んだ。で、余りの辛さに気絶した。

「はぁ・・・はぁ・・・あんた。よくこんな地獄を耐えてきたな。」
放課後、銀時はルイージにこう言った。
「ははは。でも最初の頃は苦しかったけどよ。でも月日がたつと自然と絆が生まれてんだよ。アンタもそうだろ？」
「ふ・・・そうだな。」
「まぁ、いずれはなれるもんよ。こういうのって。」

「ああ。」
「あ、そろそろ帰りの時間だな。今日はごくろうさん。」
「おう。おめーも頑張れよ。」
「ああ・・・じゃあな。」
銀時が混沌学院に入ろうとしたその時だった。
「またこっちにも遊びに来いよー！」
ルイージの声が聞こえた。銀時は腕を空高く上げて答えた。
「暇があったらなー！」
赤い夕陽の中、銀時の声が響いた。

第２０話：始めては疲れるもの（後書き）

質問コーナー

作者「じゃあさっそく始めます。まずお便りから『グレイ・フォックスと雷電とオセロットは出ますか？』かなり先になると思うけど要望に答えます！楽しみにしていてください！」

銀八「雷電かー。そういえば次のメタギアって雷電が主役なんだよな。」

作者「あー、ライジングね。」

ドナルド「楽しみだなぁ。」

作者「確かに楽しみだ。新たなメタギアが楽しめそうけど・・・俺、ＰＳ３もｘｂｏｘ３６０も持ってねーよ。」

ブロリー「金ためて買えば？」

作者「そうなればかなり先になる・・・まあいいか。お前らの方で何か質問はあるか？」

パラガス「私から質問です。また何か大長編でもやりますかな？」

作者「もう少ししたらやります。その時は次回予告で予告します。」

パラガス「お答えありがとうございます。」

梓「じゃあ私から。また誰かと誰かをカップルで成立させるんですか？」

作者「まだそのような予定はありません。またいろいろと考えておきます。おっとそろそろ時間だというわけでかいさ」

はーるーかーぜに磨かれてー

銀八「あん？何でバクチ・ダンサー流れてんだ？」

作者「あ、俺の着歌だ。えっと・・・誰だ？登録してねー奴からだ。」

梓「とりあえず出てみればいいんじゃないですか。」

作者「ああ・・・。もしもし？」

？『私から質問だ・・・。今回出てきたルイージはサブキャラの役割か？』

作者「え・・・えと・・・ルイージ達５Ｚはたまに出てきます。で、あなたは誰ですか？」

？『お前のファンだよ。ディープ・スロートでも名乗っておこうか。また連絡をする。」

ブツン、プープー・・・

銀八「まさかこの展開って・・・。」

作者「・・・あれだな。じゃまた次回お会いしましょう。あと今回のＥＤはＭＯＴＨＥＲ３愛のテーマで。」

第２１話：小学生から見たら高校生は立派な大人（前書き）

作者「今回は『銀魂×ハヤテ！ド○クエなストーリー～ツンデレ姫の冒険～』の内容を含みます。興味がある人は読んでください。」

梓「いいんですか宣伝しても？」

作者「さぁ？ちなみに今回のＯＰは・・・『二人三脚』でお願いします！」

梓「考えてなかったんですか？」

作者「ギックーーーー！」

第２１話：小学生から見たら高校生は立派な大人

ある日の朝、銀時はアテネ校長に呼ばれて校長室にいた。
「はぁ？小学部の奴らに何か劇やれ？」
「そう。この前やった２Ｚのロミオとジュリエットがかなりの高評価だったのでまたやってくれないかって聞かれたのよ。」
「で、俺達が許可してねーのにオッケーって言っちまったのか？」
「そう。」
銀時は深いため息をついた。
「あいつらがやるかな～、真面目な奴らはやると思うけどよ～。」
「そうでしょうか？このことは２Ｂ、２Ｎ、２Ｇ、２Ａ、２Ｔ、２Ｕの皆さんにも協力してもらうつもりですわ。」
その言葉を聞いて銀時は白くなった。
「おい・・・アンタ、あのクラスの連中が入ったら劇がボロボロになるぞ。」
「いいんじゃないの？その方が面白そうですし。」
「俺は面白くねーンだよ。大体ネギや他の先生は知ってんのかよ？」
「知ってますわ。」
「はぁ・・・何言ってんだよあいつら・・・大丈夫か？」
「はい、小言は外でお願いします。」
その後、銀時は校長室を出て２Ｚへ向かった。

「で、俺達が劇をする事になった。で放課後、何か打ち合わせするみたいだから。必ず出ろよ。」
で、教室を出ようとしたら質問の雨嵐が銀時を襲った。
「またやるんですか劇を！」
「何をやるんですか？」
「他のクラスの人はどうなんですか？」
「土方はいつ死にますか？」

「先生、沖田を仕留めていいですか？」
などなどの声が上がった。それに対し銀時は。
「だから詳しい事は放課後って言ってんじゃねーか。とにかく一時間目が始まるから早く支度しておけよー。」
そう言い残し、銀時は去って行った。

で、放課後、２Ｚの他に２Ｂ、２Ｎ、２Ｇ、２Ａ、２Ｔ、２Ｕの面々が集まった。面々の前には銀時の他にネギ、信玄、さわ子、スネーク、オタコン、太子が立っている。
「じゃあよく聞いておけ。今度やる劇は混沌学院小学部の連中に見せる事になっている。」
銀時の一言で辺りがざわついた。
「ハイ、静かに。じゃあ何をやりたいのか手を挙げて」
「ハイ！」
ここで混沌という名にふさわしい男、桂小太郎が手を挙げた。だが銀時は無視をした。
「他に誰か」
「ハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイ！」
「誰か」
「ハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイ

銀時は半信半疑でヅラの持ってきたシナリオ本を見始めた。その内容とは。

『１０数年前、魔王なる者が異世界から侵略してきた。圧倒的な魔力と力で人々は恐怖と絶望に落とされた。そんな中、義勇兵達が立ち上がり、魔王軍と戦った。その義勇兵の中でも一番に輝いた勇者たちがいた。１００体の魔物を一瞬のうちに切り裂いたギントキ、数々の魔法で魔物達を灰にしたカツラ、そして一人魔王に立ち向かったタカスギ。タカスギは自らを犠牲にし、魔王を消し去った。こうしてこの世に平和が戻ってきた。しかし、平和を取り戻すのにタカスギを含め、多くの犠牲を出した。生き残った義勇軍は死んでいった仲間の墓を世界の中心に建て、それぞれの場所に散って行った。そして、彼らの行方を知る者はいない、英雄カツラ、ギントキも今生きているのか死んでしまったのかは定かではない。こうして時が過ぎて行った・・・・・・。』

「・・・・これさぁ・・・この小説の作者が前に書いた銀魂とハヤテのごとくのクロスオーバー作品だよなぁ。」

「そうです。」

「はい、没ぅぅぅぅ！」

銀時はヅラの持ってきたパクリ作品のシナリオ本を破り捨てた。

「じゃあ先生、これはどうですか？」

２Ｔのルカがシナリオ本を持って銀時の方へ来た。

「んだこれ？」

「あの・・・これ僕が書いた奴じゃなくてイリアが書いた本ですけど。」

「あのウッヒッヒ～娘の事か？どうせロクなやつ書いて」

その時、銀時の頬をかすめるように銃弾が発射された。イリアが拳銃を撃ったのだ。

「あ・・・あ・・・あ・・・。」

「先生、次は心臓を狙いますよ。」
笑顔でイリアはこう言った。で、恐る恐る銀時はシナリオ本の中身を見た。で、イリアにこう言った。
「あの～視聴する相手が子供なので、こういった刺激的な作品話にしたいのですが。」
「で、先生。どういう内容ですか？」
ルカはシナリオ本を見て見た。で、かなりの刺激的な内容なのか顔が真っ青になった。
「じゃあこれは没で。」
「チッ。」
イリアが舌打ちをした。次に手を上げるものがいた。
「ハイハイハイ！」
「誰だ？こんなに多いと見分けが・・・って近藤じゃねーか。」
「はい！じゃあ俺の書いたシナリオ本を見せます！タイトルは『近藤とお妙　パート2』」
ここで近藤の後頭部にアーチェリーの矢が刺さった。
「・・・・ハイじゃあ次。」
「ハイィィィ！」
ここで2Bの幸村が手を挙げた。
「幸村ァ。オメーが何の作品考えてんだァ？」
「先生！劇ではありません！俺が考えた案は全員でお館様の名を叫ぶ」
「却下。はいじゃあ次。」
次に正宗がこう言った。
「じゃあ先生。これならどうだ？全員でレッツパーリィ」
「却下。」
とまぁ議論は長く続いた。黒子が自分と御坂のラブシーンのある劇を提案したら御坂のレールガンが発射されたり、アテムが自己満足的な劇を提案したら全員にボコボコにされたり、沖田が土方暗殺帳と言って土方が怒ったり、ウッドロウが空気にされたり、リオン

のお気に入りのジューダスマスクが何者かに粉砕されたり、ブロリーと悟空が戦いを始めたり、サンジが２Ａの連中にナンパしてあっさり断られたり、徳川家康と石田三成が戦いを始めたり、刹那がガンダムガンダムうるさかったり、ヤムチャが謎の爆発に巻き込まれたり、クラウドがアスベルとなぜか意気投合したり、キールが木をキールと言ったり、圭一が固有結界を発動したり、当麻がインデックスにかみつかれたり、カミーユの精神が崩壊したり、太子が妹子に殴られたり、芭蕉が変なキノコを食べたしまったり、星が変な歌歌ったりといろいろと混沌が生まれ始めた。

「静かにしろォォォォ！・・・ったく、予想通り訳がわかんなくなって来たな。」

「そうですね。」

半分疲れている銀時とネギ。そこに新八が手を挙げた。

「先生。やるなら皆が分かりやすいものにしましょうよ。例えば白雪姫とか。」

「おー。新八にしちゃーいい名案だな。おい、テメ―らもいいかー？」

銀時の一言で誰もが新八の提案に賛成した。

「じゃあ次に役を決めるぞー。まず主役の白雪姫」

ここでほぼ半数の女子が手を挙げた。

「はぁ・・・やっぱこうなったか。」

「先生！ぜひ私を白雪姫に！そして王子様はもちろんお姉さま」

「何言ってんのよ黒子ォォォォォ！」

御坂はレールガンを放つ。

「せんせーい、私はエミルと一緒にやりたいでーす！もちろん、キスシーンも」

「まままままマルタ！そこまでやると恥ずかしいよ！」

「私はカイルと一緒じゃなきゃやりませんよ。」

などと声が上がってきたので、銀時は少し呆れた。

「はぁ・・・やっぱこんな展開になったか。」

「どうしましょう？」
「こうなりゃ、脇役から攻めるしかねーな。」
銀時は前にあるホワイトボードに脇役の名前を書こうとしたが。
「先生。それより脚本や衣装はどうします？」
紬から声が出たのだ。
「あ・・・・・そういえばそっちも必要だな～。」
「脚本なら私に任せてください。」
紬がこう言った。
「そうか。ならお前に任せる。あと出来たら俺か他の先生に見せろよ。」
「はい。」
「で、衣装だ」
「ハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイ！」
さわ子がすごい勢いで手を挙げた。
「あ・・・アンタが衣装か？」
「大丈夫よ！それについてはかなりの自信があるわよ！」
さわ子は目を光らせて生徒の方を見る。生徒達はあまりの恐ろしさに一斉に退いた。
「・・・まずは役者を決めねーとな。じゃあキャラの名前書くぞー。」
その後、話し合いをしそれぞれが意見を出し合った。そして混沌学院版『白雪姫』のスタッフが決まった。その内容は。

監督・脚本：紬
衣装：さわ子
背景・舞台設定：アムロ、ロイド、ウソップ、フランキー、御坂、黒子
音楽設定：ミク、リン、レン、放課後ティータイムの連中、星
白雪姫：ハヤテ
王子：ナギ

悪の王妃：アテム
7人の小人：ヅラ、刹那（ガンダム）、シスター、新八、海馬、近藤、ウッドロウ
ナレーション：ゼロス

以上の内容だった。新八は内心かなり心配していた。本当に成功するのか？この内容で？

翌日から舞台の設定とか作曲とかが始まった。小人の役になった新八は紬が書いた台本を読んでいた。で、一回台本を見ながら劇の練習をやっていたが。
「おおおおおおお！白雪姫ェェェェェェ！何で死んでしまったんだァァァァァ！」
「許さん！この俺が直々に玉砕しに行ってやるわ！」
「神の名のもとに置いて犯人を八つ裂きにしてやる！」
「犯人のもとに武力介入を行おう。まず犯人を探さないと。」
「カット！いいよ、この調子でお願いね。」
「いいの？この調子で？」
新八は多少不安になった。他の所でも・・・。
「おいウソップ。こっから火花がバーって出てくるのはどうだ？派手でいいんじゃないか？」
「それも面白そうだな！いや～御坂の電撃と黒子のテレポートとアムロのメカニックで舞台の改造の幅が大きくなったからな～。」
おい、事故が起きたら僕達役者はどうする？新八は心の中で叫んだ。その一方。
「ねぇ、これは少し悲しい場面に流れるようにしたら？」
「ああそうだな。」
「それより最初の魔女の鏡の場面の音楽はどうする？」
「あーこれは何か低い音楽で頼むわ。」
音楽設定は順調にいっている。何事もなかったらいいんだけど。
新八は心の中でそう思った。

で、劇本番当日。新八達はさわ子が作った衣装を着て混沌学院の体育館ステージの裏側でスタンバイしていた。
「いやー、いよいよですねー。」
「フン、俺の華麗なる小人役を見せてやる。」
「俺は小人じゃない。俺はガンダムだ。」
「オイ刹那。まだそんなこと言ってるのか。」
「・・・まぁリラックスしましょう。」
「できませんよ！」
ここでハヤテが叫んだ。
「何ですかこの衣装？恥ずかしすぎですよ！」
ハヤテはドレス姿を見せた。その姿を見て新八達は笑いそうになった。
「に・・・似合いすぎ。」
「ふつくしい・・・」
「何笑ってんですか！同情は無しですかァ！」
涙声でハヤテは叫んだ。そこにナギの声がした。
「仕方ない。やるしかないんだ。お前ならできる。」
「お・・・おじょ」
誰もがナギの姿に見とれていた。完全に王子姿が似合っていたのだ。
「ちょ・・・似合いすぎ。」
「何だ。私はハヤテの嫁だぞ。それより・・・」
新八はステージの方を見た。観客である小学生達が集まって来たのだ。
「そろそろだね。」
「ああ。」
「よし、皆。頑張ろう！」
「おう！」
新八達は一致団結した。そしてブザーが鳴りステージの幕が上が

って行った。
『ここは平和な国であります。ここの王妃様はとても優しく大変綺麗でした。しかし、その王妃様が病で亡くなり、王は新しい王妃を迎えたのですがこの王妃が大変プライドが高く自分より美しい女性は許さないと言っています。そして今日も魔法の鏡に向かっています。』
ここで悪い王妃役のアテムが後ろ姿で現れた。
「鏡よ鏡よ鏡さん。この世の中で一番美しいのは誰だ～い？（アテム裏声）」
鏡役のシンはアテムの厚化粧で笑いそうになったが何とかこらえて台詞を言った。
「それはアテネ王妃様。あなたでございます。（シン裏声）」
「オーホッホッホー！やっぱり私が一番美しいのね～♪（アテム裏声）」
小学生の皆はアテムの裏声で爆笑していた。アテムは何で俺がこんな事を・・・と心の中で思っていた。
「あ、たった今王妃様より美しい人が現れました！この国のハヤテ王女がこの世の中で一番美人」
ここでアテムはブラック・マジシャンを召喚し鏡役のシンに攻撃した。
「あんたって人はァァァァァァァァ！」
叫びながらシンは散って行った。
「許さない・・・許さないＺＥ！やろぉ・・・バーサーカーソウルでずっと俺のターンでぶっ飛ばしてやるＺＥ！」
と言った後アテムはステージの外へ出て行った。

で、場面が7人の小人の所になるんだけど・・・
「ようこそ白雪姫。ここは我ら小人の家です。」
小人役のシスターが言った。
「いや、アンタ小人じゃねーだろ。服がビッチビチなんですけど。」

新八がツッコミをした。
「フハハーン。この海馬コーポレーションでゆっくりしていくがいい！」
「ここ、お前の会社じゃねーよ。」
とまぁ新八のツッコミを混ぜつつ劇は進んだ。
「ありがとうございます。小人さん達。」
「小人ではない！桂だァァァ！」
「俺は小人じゃない！俺達はガンダムだ！」
「アンタらは黙ってろ！」
怒りの新八がヅラと刹那（ガンダムの方）にドロップキックを浴びせ、二人はブッ飛ばされた。
「ところで、あのゴリラはペットですか？」
「いや・・・俺も小人だけど。」
近藤が言った。そこに。
「あの・・・私は？」
空気王であるウッドロウが呟いたが全く相手にされなかった。

話は順調に進み通りすがりの王子が王女にキスをする場面になった。
「ああ、美しい人よ。せめて僕の口付けを・・・」
ナギがそう言って自分の顔をハヤテに近付けた。辺りからは歓声が上がったが・・・。
「あれ？ちゃんとキスしてないよ。」
「あ、本当だ～。」
「しっかりやれよ～。」
などと声が上がり、その後にキスコールが上がった。
（どどど・・・どうしましょう。お嬢様・・・？）
（仕方ない・・・キスをするしかないな・・・）
（・・・わかりました。）
その後、ハヤテとナギの唇が重なった。で、歓声が上がった。

ラストシーン。悪の王妃が騒ぎたてるシーン。
「な・・・何だって！あのガキがナギ王子と結婚したって！」
そこに小人たちと王子が乱入してきた。
「悪の根源め！覚悟しろ！」
「何ィ！貴様らの方が覚悟しろ！リバースカードオー」
「滅びのバーストストリーム！」
「トランザム！」
「喰らえ！サイクロン！」
などと小人たちは必殺技を発動していた。シスターは片手に持ったヘビーマシンガンをぶっ放したり、ヅラは爆弾をアテムに向かって投げたり、近藤は名刀虎鉄ちゃんで斬りかかったりと大暴れ！悪の王女、アテムはやられてしまった。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「粉砕☆玉砕☆大喝采ィィィィィィィィ！」
海馬は決め台詞を決め、去って行った。で、他の奴らもステージの外へ去って行った。
『こうして、悪の根源は王子たちによって倒され平和が戻りました。で、王子と王女と小人たちはいつまでも末長く暮しましたとさ。めでたしめでたし！』
ここでゼロスのナレーションが終わりを告げ、ステージの幕が下りて行った。
「面白かったー！」
「最後すごい！」
「アテム生きてるの？」
などと声が上がった。後ろの方で見ていたルイージは丁度そこにいた銀時に話しかけた。
「すごいな～。まさかこういう展開の白雪姫になるとはな～。」
「まぁたまにはいいだろ。こんな話も。」
拍手をしながら話していた。で、ステージ裏では。

「が・・・あ・・・何で俺がこんな目に・・・」
本当にダメージを食らってアテムはボロボロだった。で、『押してはいけないボタン』を押してしまった。
「え？何だこれ」
「おい、アテム！下がれ！」
ウソップの叫び声が聞こえたが遅かった。アテムの下から花火が上がったのだ。
「ほぇ～花火もあんのかよ。」
「すげーな。ウソップ達も考えたな～。」
銀時とルイージは感心していたがアテムはそのまま青空の中の花火となって散って行った。
「・・・こんなオチでいいのか？」
「何、気にする事は無い。」
舞台裏で新八とウッドロウはそう呟いた。

第２１話：小学生から見たら高校生は立派な大人（後書き）

質問コーナー

作者「まず最初に連絡します。この混沌学院はワードでかなり書いております。今の所（２０１１年１月１４の時点）で４５話です。後々出すキャラはこの後書きで出演するかもしれないのでご了承ください。」

オセロット「というわけで質問コーナーの始まりだァァァ！」

ブロリー「何だぁ？こいつは？」

当麻「ん？どこだここ？」

一方通行「しらねーよ。」

雷電「おい作者、一気に出しすぎだろ。」

銀八「オイィィィィ！いろいろと出しすぎじゃねーか？」

作者「たくさんいた方が賑やかで面白いじゃん。」

銀八「確かにそうだけど！」

当麻「おい、ここどこだよ。」

作者「後書きコーナーとでも言っておこうか。」

一方通行「どうやったら帰れるんだ？」

作者「まー、この話が終わったらね。」

一方通行「ちっ、しゃーねー、おいとっとと質問に答えろ。」

作者「へーへー、おい、誰か質問ねーか？」

ドナルド「ドナルドから質問あるよ。」

作者「何だ？」

ドナルド「君は人気キャラ投票とかを行うのかい？」

作者「一応考えています。しかしこの作品キャラが多すぎてたまんないのでそこのところも考えています。でもこういう企画もしていきたいと思います。」

当麻「あ、じゃあ読者が選んだベストストーリー的なものもやるのか？」

作者「あ、いいねそれ。もうこの話も２０話超えたからやってみようかな。」

一方通行「いいのかよ。」

作者「おう。というわけでグレイ・フォックスカモン！」

グレイ・フォックス「説明は俺に任せてもらおう。投票は一人一票で頼む。書き方は例のように頼む

例

第１話

理由：山崎オチが良かった。

というように頼む。必ず理由も入れてくれ！」

作者「期限は１月３１日まで。範囲は１話から今回２１話まで！」

この場にいる全員「是非！よろしくお願いしまァァァァァす！」

作者「ちなみに今回のＥＤは『夢であるように』です。」

第２２話：雑魚キャラと言うのは何回も出てくるもの（前書き）

作者「今回はでんぢゃらすじーさんよりあいつが登場！」

一方通行「ってか知ってるやついるのか？」

闇「というよりあなた世代でいい歳こいてまだでんぢゃらすじーさんを読んでる人がいるのですか？」

作者「・・・・・・・・別にいいじゃねーか！」

第２２話：雑魚キャラと言うのは何回も出てくるもの

混沌学院小学部、グラウンド下にて。ここで謎の影が何やら作っていた。
「ぐっふふ・・・これであの淫乱校長とヒゲじじいをぶちのめしてやるのじゃ～い。」
謎の声が響く。そしてカンカンと何かを叩く音が響き渡った。彼の近くには巨大なロボットらしき影があった。

数日後。新八は近くの本屋に来ていた。理由は妙から料理本を頼まれたからだ。新八はどうせあの姉が料理本を使って料理をしても意味が無い・・・と思いながら本屋を回っていた。
「料理本、料理本・・・あ、あったあった。」
新八は料理本を取ろうとしたが、そこに他の誰かも手を出していた。それは小学部の教頭であるじーさんだった。
「あ・・・あなたは・・・小学部の」
「ああ、小学部の教頭のじーさんじゃ。」
「ああ。この前の劇の時いましたね。」
「あの話のオチがグダグダじゃったの～。」
「スミマセン。作者を批判してるんですか？」
会話をしていた。とその時だった。店の外で地響きが鳴ったのだ。
「ななななな何だ何だ！」
『出てこーい！ヒゲジジイ！お前がここいるのは分かってるんじゃーい！』
「この声は・・・。」
じーさんは店の外に出て見た。そこには巨大なロボットが立っていた。
「・・・な・・・何これ？」

「はぁ・・・元校長か。」
『その呼び方は止めーい！』
ロボットのコクピットから一人の人物が現れた。それはじーさんのライバル、元校長であった。
「お前、くえす校長にブッ飛ばされたんじゃなかったのか？」
「復讐の為に舞い戻って来たんじゃーい！まず貴様からぼこぼこのごちゃごちゃに」
元校長がこう言ってる時に、後ろから誰かがロボットに攻撃をしたのだ。その攻撃によりロボットは爆発を起こし、元校長は星となった。
「あらら・・・すぐにやられたの～。」
「大丈夫か？教頭先生。」
とある人物が現れたのだ。その人物はボボボーボ・ボーボボだったのだ。
「ボーボボか。すまんのう。助かったのじゃ。」
「いいってことよ。それより奴が帰って来たんじゃな。」
「ああ、それより今の事を校長に言わないとな。」
「そうだな。」
「じゃあ・・・新八君。銀時先生にヨロシクな。」
と言ってじーさんとボーボボは去って行った。新八は何か嫌な予感が起こるかもしれないな・・・。と心の中で思っていた。その予感が後々、当たってしまう事を今の新八には分からないのだ。

数日後。いつものように授業を受けている新八達。だがその日は違った。新八が窓をのぞいたら上空になんか変な物体が飛んでいた。まだ小さく形はハッキリとしなかった、どうせ飛行機かヘリかなんかと思っていたが・・・だが違った。その物体は小学部の方に近づいて行った、クラスの皆も謎の物体の存在に気付き窓の方へ寄って行った。
「な・・・何だよあれ。」

「ってか小学部の方へ行ったよな。」
「行ってみよう！」
と言ってクラスのほとんど（その時は歴史の授業だったので雪路がいた。で、彼女も含む）が外へ出て行った。外には他のクラスの人もいて新八は近くにいた幸村に声をかけられた。
「新八殿、一体なんだあれは？」
「ああ、幸村さん。あなたも気付いたんですか。」
「どうやら学院中の人が気付いたであろう。」
新八が辺りを見回すと1年から3年までほぼ全員がいた。その時声が響いた。
『出てこーい！淫乱校長とヒゲ教頭！』
その声に新八は心当たりがあった。その声の人物とはこの前じーさんとボーボボによって星になった元校長であった。どうやらまた変な機械を作ってリベンジに来たのだろう。

『出てこーい！早くしないと・・・撃つぞ！何かを！』
その様子を見ていたくえすとじーさんはため息をついた。
「またか・・・しつこいなあのバカも」
「ええ。もうほんと。訴えてやろうかしら。」
「とりあえずわしは理事長にこの事を言っておく。」
「ありがとうございます。私はあのバカを懲らしめておきますわ。」
「いいよいいよ。理事長に任せておけばいいのじゃ。」
「それもそうですね。」
二人はただぼんやりとこの光景を見ていた。

「くそ～あのバカ共は一体いつになったら現れるんじゃい～。」
コクピットの中で元校長は怒っていた。中々ターゲットの二人が出てこないのだ。色々挑発したが結局は出てこない、それに混沌学院の方から野次馬が現れている。
「ぐ～向こうがその気ならこっちは直接攻撃するのじゃ」

ここで下の方で爆発がした。何事かと思い元校長がモニターを見ると下の方にあるエンジンの一部が破壊されたみたいなのだ。
「えええ！何で？何でじゃい？」
外を見たら神楽とルフィがこっちに目がけて大きな岩を投げている。その隣には悟空とベジータが気弾を放っていた。
「ギャアアアアアア！何やってるんじゃいあいつらはァァァァァァ！」
元校長は何とかよけようとロボットの操作を始めた。
「ホワァァァァァァァァ！」
「オリャアアアアアアアア！」
「ダリャダリャダリャダリャ！」
「ハァァァァァァァァァァァ！」
神楽、ルフィ、悟空、ベジータは逃げているロボットに目がけて岩や気弾を放っている。その様子を見ている他の生徒達は彼らを応援していた。
「ちくしょー、全然当たんねーぞ。」
「こうなったら奥の手だ！」
悟空はそう言い超サイヤ人になった。そしてかめはめ波のポーズをとった。
「かーめーはーめー・・・」
「え？ちょ・・・まさか！」
その様子を見ていた元校長は大急ぎで逃げようとした悟空からかなり距離を取ったので少し安心をしたが・・・。
「ふ～危機一髪」
だがコクピットの前には瞬間移動した悟空がいた。
「アアアアアアアア！」
「波ァァァァァァァァァァァァ！」
かめはめ波はロボットを巻き込んだ。で、爆発した。悟空が降りてきたら生徒からの激励が待っていた。
「すげー！」

「流石悟空！」
「よっ、日本一！」
「へっへっへー、ピース！」
悟空は笑顔でピースサインを作った。くえすとじーさんはその様子を見ていた。
「どうやら出番は無かったみたいですね。」
「まぁめんどくさい事をやらなくてよかったのじゃ。」
と話していた。

数日後。２Ｚの面々は体育の授業でグラウンドでサッカーをしていた。
「ほあちゃあああああ！」
「グゲフゥ！」
神楽の放ったシュートが新八の顔面に命中した。ここで松平のホイッスルが鳴った。
「おいおいおい、何やってんだよ神楽。新八が死んだじゃねーか。」
眼鏡の破片を拾いながら松平はこう言った。
「先生。それは僕じゃありません。」
「ジョークだよジョーク。それより大丈夫か？鼻血出てるぞ。」
「え？ああ。本当だ。」
「おい、誰か保健室連れて行け。」
その後、新八はミクと保健室に行った。
「大丈夫？新八君？」
「ええ・・・でも鼻に詰めるのはティッシュじゃないんですか？」
鼻にネギを詰められた新八がこう言った。
「でも今日のサッカーはすごいね。神楽ちゃんとかが大暴れだよ。」
「ええ。ってかルフィさんや悟空さんしか止められないのに何で同じチームになったんだろ。」
「そうだよね。というよりサッカーのルール分かってるのかなあの人達。」

話をしていたら新八の他にロイド、ヤムチャ、サンジ、家康、ゼロスなどが神楽達にやられて保健室に連れてこられた。
「・・・・・・あの人達・・・本当にサッカーのルール分かってるのかな？」
「さぁ。」
その時だった。プール側から巨大なロボットが現れたのだ。
「え？何あれ？何なの？」
「分からないよ！」
と言いながら新八とミクは保健室の窓から外を覗いた。そして声が響いた。
『ヒャーヒャッヒャー！あのヒゲジジイと淫乱校長をぶちのめす前にこの前ワガハイの邪魔をしたバカ共に仕返しをしに来たのじゃーい！』
「あの声！」
巨大ロボットの方から元校長の声が響いた。その次にロボットの右手が開き中からミサイルが飛んできた。
「オワァァァァァ！」
「ギャアアアアア！」
外にいた生徒達は逃げ回っていた。
「やろー！ふざけやがって！」
「一気に行くぞルフィ！」
「おう！ギア2！」
超サイヤ人化した悟空とギア2を使ったルフィが巨大ロボットに向かって行った。
「喰らえ！ゴムゴムのガトリング！」
ルフィは一気に倒そうと最初から全力で行った。だが効いていないようだった。
『ふふふ。こんなへなちょこパンチがこの真・校長ロボに効くかァァァァ！』
その後、左腕のロケットパンチがルフィに命中した。

「ウワァァァァァァ！」
「ルフィ！お前よくも！」
怒った悟空はかめはめ波の構えを取った。
「かーめーはー」
『遅いんじゃーい！』
ロボットの口部分から太いレーザービームが放たれた。
「しまっ！ウワァァァァァァァァァァ！」
悟空はレーザービームに呑まれてしまった。そして地面へ落ちて行った。
「悟空さん！ルフィさん！」
保健室から見ていた新八は飛び出しそうになるがここで地響きがした。辺りを見回すと小学部の方から理事長である最強さんが現れたのだ。
『ギャアアアアア！こいつが理事長なのかよォォォォ！』
「アンタ知らなかったのかよ！」
元校長にツッコミをした。その後、最強さんの肩に座っている翻訳者のゲベが口を開いた。
「えーっと・・・元校長。今からお前をつぶすから覚悟しろって。」
『フフフ・・・覚悟するのはおま』
元校長が言ってるのに最強さんの右ストレートがロボットの腹を貫通した。
『エラーハッセイ、エラーハッセイ。シュウフクフノウ、シュウフクフノ・・・ウ・・・』
「ギャァァァァァァ！どうしてこうなるのじゃーい！」
『バクハツマデアト5ビョウ』
「エエエエエエエエ！爆発すんの！でもそんなこと言ってる場合じゃ」
ドッゴォォォォ

の口に入り・・・食べられてしまった。その様子を見ていた新八とミクは口を開けて見ているしかなかった。

数日後。食堂で昼食をとっていた新八だったがまたあの声が聞こえたので外へ行った。

「ギャーハッハー！今度こそワガハイが」

「アンタしつこいんだよォォォォォォォォ！」

叫びながら新八は校長を蹴り飛ばした。

第２２話：雑魚キャラと言うのは何回も出てくるもの（後書き）

作者「はい、どうでしたか今回の話？」

オセロット「俺のリロードはレボリュージョンだ！」

作者「しらねーよそんなこと！づ雷電はどうだ？」

雷電「づ雷電って何だ！あと俺の髪は地毛だ！」

作者「そうかそうか、当麻と一方通行はどうだった？」

インデックス「とうま！早くゴーハーンー！」

当麻「イテテテテテ！今そんな余裕はねぇ！不幸だァァァァァァァ！」

一方通行「・・・・・・わり、寝てた。」

作者「・・・銀さんやあずにゃんは？・・・ってあれ？どこ行ったんだ？・・・何だこの紙。」

『拝啓バカ作者へ
マイソロ３を予約しに出かけます。
銀八、梓』

作者「・・・何でおれの作品は誰も見ないんだァァァ！」

闇「・・・というわけで本当に応援をよろしくお願いします。

第２３話：いきなり辺りが暗くなったら誰もが不安になる　（前書き）

作者「今回の話はＴｏＬＯＶＥるを元としています。」

一方通行「いいのかそれをネタにして。」

作者「だいぶ前にララを出したからいいんじゃね？」

闇「えっちいのは嫌いです。」

作者「・・・というわけで今回は少しえっちい場面があります。嫌いな人は見ないでください。それでも別にかまわない人は見ていってください。」

一方通行「じゃあ、始まるぜ。」

作者「ちなみに今回のＯＰは『はっぴぃにゅうにゃあ』でお願いします。」

第２３話：いきなり辺りが暗くなったら誰もが不安になる

２Ｅ教室前。ここで何かが散らかる音がした。その音を着た新八がその方向へ行ってみたらそこにはララとペケがいた。
「ララさんどうしたんですか？」
「えへへー、ちょっと整理しようとして道具を出したんだけど失敗したみたいなの。」
「へ・・・へー。」
新八は散らかっている道具を見た。見るからに分かりやすいものと何に使うのか分からないものがたくさんあった。その中で新八は一つの道具に疑問を持った。で、近くにいたペケに聞いた。
「これは何に使うんですか？」
「これは『どこでもワープ君』と言います。その名の通りどこでもワープができます。」
「すごっ！こんな便利な」
「だけど服とかがワープできないという欠点があります。」
「なんだよそれ。」
新八とは別の方で巧と文乃がやって来た。
「何かすごいな。これ全てララの発明品か？」
「うん。そうだよー。」
「しっかしすごいわねー。全生徒の成績ベスト１０に入るからこんな発明も軽々としちゃうのねー。」
「いや、ララさんしかできないと思いますけど。」
巧は近くにあった発明品の一つを手にした。
「これは何？」
「あ、むやみにさわっては」
ペケが忠告を出した後、巧が持っている発明品が光を発した。新八は眩しさのあまり目をつぶった。次に目を開けたらそこに巧と文乃の服のみがあった。

「あれ？二人はどこ行ったの？」
「ララ様。もしかしてあれは。」
「うん。『緊急用ワープ君』が発動したみたい。」
「え？何それ？」
「その名の通りいざという時ワープする発明品です。欠点は・・・ワープ先がランダムと言う事です。」
「じゃあ二人はどこだか知らない場所で裸で・・・」
ここで新八の脳裏にヤバい想像が浮かんだ。
「ぎ・・・銀さんに言わないと！」
新八はすぐに職員室へ向かった。

「何？巧と文乃が服を残して行方不明？」
スネークと雪路と遊戯王カードで遊んでいた銀時は新八に聞いた。
新八は今さっきの出来事を話した。
「やばいな。色んな意味でヤバいな。」
「ああ。もしかしたら18禁的な事になってるかもしれん。」
「その前に皆で手分けして探さないと」
「その話本当なの！」
職員室に千世と希が入って来た。
「ねぇ新八！その話本当なの！」
新八に問い詰める二人。新八はその勢いで退いていた。
「え・・・ええ。」
「文乃の奴～巧と二人っきりで何しでかす」
「いや、話聞こうよ。」
新八は二人に話をした。
「きぃぃぃぃぃ！偶然とはいえ私の下僕に手を出すとはァァァァァァ！」
「にゃあ・・・すぐに探しに行こう。」
「ああ。その前に誰かに手伝うよう連絡しておけ。」
「はい。後ララさんも二人を見つけるため頑張っているみたいなの

で。もし見つけたら僕の方に連絡するって言ってました。」
「よし！じゃあ二人を見つけるぞ！」
「おう！」
掛け声が職員室に響いた。

一方その頃。どこかに飛ばされた巧はここがどこだかを調べていた。暗くて全然分からない。だがそのうちに何か柔らかくて温かいものに触れた。何だこれと思い触っていたらバキ！と音がし、ブッ飛ばされた。
「巧！アンタどこ触ってるのよ！」
文乃の怒声が聞こえた。もしかして俺は文乃の・・・と思ってた。

「よし、じゃあ俺らはこの辺をメインに調べよう。」
学院内一階にて、希と助っ人であるサンジと御坂が捜索を開始していた。
「にゃあ・・・私は向こうの方を探してみる。」
「わかった。じゃあ私は希と逆の方を探してみる。」
「よし、俺は女子更衣室を」
「待たんかいィィィィィィ！」
御坂はサンジを蹴りあげた。サンジは天井を貫通してしまった。
「ったく。アンタは本当に懲りてないわね。前科が2つあるって忘れたの？」
「にゃあ・・・そんな事より早く探さないと。」
「ああそうね。」
会話を終了し、希と御坂は去って行った。で、サンジの方は。
「いててて・・・御坂ちゃんってば・・・強く蹴りす・・・」
サンジの目の前には着替え中の2Nのなのはとレナの姿が映っていた。
「うほっ！」
「・・・・・・頭、冷やそうか。」

なのははサンジに向けてスターライトブレイカーを放った。

千世は銀時と新八を連れ巧達を探していた。

「巧ー！どこにいるのよ！返事しなさーい！」

「オイオイ、そんなんで見つかるわけねーだろ。もう少し頭使えよ。」

銀時はこう言った。確かに叫び続けるだけじゃ意味が無い。そんな事を思っていた時だった。かすかだが誰かの声がしたのだ、銀時を先頭に彼らは声がした方へ行ってみた。その声はなぜか誰かの鳴き声のような声だった。

「いいか。開けるぞ。」

銀時は声が聞こえている『男子更衣室』のドアに手をやった。で、一気に開いた！中にいたものとは！

「・・・何やってんの服部君？」

そこにいたのは座薬を入れようとしていた服部だった。

「あ・・・坂田先生か。いや、急に持病の痔が痛くなってどうしようもないからここに入ってんだ。」

「・・・服部先生。痔には何かを刺した方がよくなるって聞いたことありません？」

「・・・何それ？余計悪化するだけじゃん。」

とんでもない事を言った千世に服部はこう言った。だが銀時は近くにあったバトンを持ちこっちを見て微笑んでいた。

「ねぇ・・・何か嫌な予感がするんだけど。」

「仕方ないわね。銀時先生お願いします！」

「くたばれェェェェェェェェ！」

鬼のような表情の銀時は手に持ったバトンを服部の尻に突き刺した。その後、服部の叫び声が響いた。

一方スネークの方は。

「ったく、本当にどこへ行ったんだ？ダンボールで隠れてるのか？」

「スネーク先生。そんなこと言ってる場合じゃないですよ。」
「そうだよ、何かが起きてからじゃ遅いんだよ！」
スネークは唯と澪と協力して巧達を探していた。そんな中、何かを叩くような音が聞こえてきた。
「先生、これって。」
「ああ・・・間違いなく誰かがあそこにいる。」
「ゆ・・・幽霊じゃないよな？」
「こんな真昼間っから幽霊がいるか？」
そんな会話をしていたらスネーク達は音が出ている部屋の前に来ていた。
「いいか、開けるぞ。」
スネークが聞いた。唯と澪が首を縦に振った事を確認した後、扉を開いた。そこにいたものは！
「グッヒッヒ～、俳句の神よ～愚かな曽良に裁きを与えたまえ～イ～ヒッヒ～」
と言いながら曽良先生の写真が付いている藁人形を笑いながら釘を打ちつけている芭蕉先生がいた。
「ば・・・芭蕉先生！アンタ何やってんですか！」
「ん～、す・・・スネーク先生！いつからそこに！」
「い・・・今さっきですけど。」
「はぁ～そうか。悪いけど今の事見なかった事にしといてくれる？」
「あの・・・えと・・・無理です。」
「ええええええ！何でェェェェェ！」
「いや・・・だって。」
スネークは自分の後ろを指さした。芭蕉がそこの方を見たらそこには黒いオーラを発している曽良先生が立っていた。
「そ・・・曽良君！何でここに！」
「スネーク先生。ちょっといいですか？」
「入れないで！スネーク先生、入れないで下さ」
「どうぞ。」

「ひいいいいいいい！」
スネークは扉を閉めその場を去って行った。中からは芭蕉の叫び声が響いたという。

その頃、外では雪路と律が適当に辺りを探していた。
「はぁ～日差しが気持ちいい～。」
「でも先生、二人を探さなくていいんですかね～。」
「どうでもいいじゃ～ん。」
とまぁかなりどうでもいいと思っていた。そんな中、誰かの歌声が聞こえていた。
「何だこの歌？」
「行ってみよう。」
二人は声がする方へ行ってみた。そこにいたのは。
「妹子とツナはな～かよしトゥナ～イ。枕の中はツ～ナでいっぱ～い～。」
それはブランコに乗りながら上機嫌で変な歌を歌っている聖徳太子先生だった。
「あ、太子先生。何ですかその歌。」
「ああ、この歌か。この歌は私が作詞した妹子とツナの歌」
「変な歌歌うなこのアワビがァァァァ！」
妹子は叫びながら太子に飛び蹴りを放ったのだ。
「オワマァ！」
「アンタまたその歌歌ってたんですか？いい加減やめろよこのいも虫が！」
「いもはお前だ」
「いいから、ネギ先生に頼まれたんだよアンタを探せって！ネギ先生困ってたじゃねーか！」
「ひ～ん、もう少しブランコに乗らせて」
「駄目です！」
太子を引きずりながら妹子は去って行った。

「・・・平和だなー。」
「そうだねー。」
そんな様子を見て律と雪路はこう言った。

「大丈夫か文乃？寒くないか？」
「だ・・・大丈夫よ。」
どこだかわからない暗闇の中で巧は近くにあった大きな布を文乃に渡した。今は全裸になってしまい隙間から入ってくる風が寒い。
その後、二人は背中合わせで座っていた。
「結構寒いな。一体どこだろここ？」
「知るわけがにでしょ。」
「ははは、そうだよな。」
「あの時の事覚えてるか？」
「え？」
「小さい頃二人で森に入って探検して・・・それで迷子になってどうしようもなく二人で泣いたっけな。」
「う・・・あったわねそんな事。」
「で、シスターが見つけてくれて・・・その後叱られたよな。」
「うん。」
「あの時も背中合わせで座ってたよな。」
「そういえば・・・そうね。」
ここで少し間が空いた。
「今回もさ・・・誰かが見つけてくれるだろ。それまでの辛抱だな。」
「・・・ありがとう。」
「え？」
「こうやって私を安心させようとしてくれてるのね。」
「・・・ああ。怖がりのお前だからこうでもしないと」
「巧のバカ。」
文乃は巧の背中をつねった。痛さのあまり巧は少し声を上げた。

「私なら大丈夫よ。アンタが思っている以上に強く」
ここで何かが落ちる音がした。
「キャアアアアア！」
「ふ・・・文乃！」
文乃は巧に抱きついて。その衝撃で巧は倒れ文乃はその上に乗っている。
「う・・・うううう・・・・」
「だ・・・大丈夫だよ。何かが落ちただけ」
ここで扉が開く音がした。中からはルイージがネスとリュカを連れて入口に立っていた。ルイージはこの光景を見たその瞬間に扉を閉じた。
「お前ら、後は先生に任せておけ。」
「は・・・はい。」
「いいか、今見た事はすぐに忘れろ！いいな、すぐに忘れろ！今すぐに忘れろ！」
「はい。」
ルイージがこう言って体育委員であるネスとリュカが教室へ戻って行った。その後、ルイージは携帯を取り出し銀時に電話した。

「んだよ、小学部の体育倉庫にいたのかよ。」
「ああ、ビックリしたぜ。いきなりあんなシーンを見てしまったからなー。」
「で、どうだった？二人の様子は。」
「いや・・・ここで話すのはちょっと・・・」
銀時とルイージはこんな事を話していた。保護された巧と文乃は辺りから話しかけられていた。
「文乃！アンタ、ヤラシイ事してないでしょうね！」
「や・・・やるわけないでしょ！アンタバカ？」
「きーーーー！誰が馬鹿ですってェェェェェ！」
文乃と千世の喧嘩が始まった。その様子を見て巧は苦笑した。そ

の後ろから希が抱きついてきた。
「の・・・希！」
「にゃあ・・・無事でよかった。」
「希！あんただけずるいわよ！」
「あ！待ちなさい！」
千世も文乃も巧の方へ寄って行った。その様子を見ていた銀時とルイージは。
「おい、これでいいのか？」
「いいんじゃねーの？あいつらが良ければ。」
と話していた。

次回！
ある日、突然と行方不明となってしまったヒナギク、彼女を探すため銀時達が立ち上がるが・・・。だが当の本人は猫になっていた！次回混沌学院猫ヒナ編突入！『呪いには気をつけろ』どうぞご期待！
「お前らに明日を生きる資格は無い！」
「え、また長編やるの！」
はい。お楽しみに～♪

第２３話：いきなり辺りが暗くなったら誰もが不安になる　（後書き）

おまけの後書きコーナー

当麻「いろいろとこのコーナーの名前変わるな・・・。」

作者「気にするな！ちなみに前回のＯＰとＥＤを書き忘れたので今ここで書きます。

ＯＰ：微笑みの爆弾
ＥＤ：ロミオとシンデレラ

です。」

当麻「かなりこの時の話とあってないな・・・。」

作者「ほっとけ！とっさに頭に浮かんだんだよ！」

ブロリー「作者、それより質問がある。」

作者「はいはーい、何だ？」

ブロリー「２Ｚ以外のクラス票は作らないのか。」

作者「うーむ・・・一応考えているけど・・・難しすぎるんだよな～・・・一応クラスごとにいろいろ分けています。こんな感じで。

２Ｂ：戦国ＢＡＳＡＲＡ関連
２Ｎ：ニコニコ動画で人気のキャラ達

２Ａ：魔法先生ネギま！のキャラとギャグマンガ日和のキャラ
２Ｔ：２Ｚのロイド達以外のテイルズキャラ
２Ｅ：何かいろいろ

です。」

パラガス「ふむ、いろいろと滅茶苦茶ですな。」

作者「でもこれをうりにしている小説だからね～。」

銀八「おい作者、この次長編やるのか？」

作者「はい、次回から猫ヒナ編に入りま～す。お楽しみ」

梓「あ！もう一つ質問いいですか？」

作者「何だ？」

梓「前に連載していた銀魂×ハヤテの小説のＯＰとＥＤは何ですか？」

作者「ツンデレ姫の冒険か・・・考えています。こんな感じです。

ＯＰ：修羅
ＥＤ：木の芽風

でお願いしまーす。」

梓「無駄なことをいつも考えているんですね・・・。」

作者「ほっとけ！ちなみに今回のＥＤは・・・『雪のツバサ』でお願いします。じゃ、また次回にお会いしましょう！」

第２４話：（猫ヒナ編）呪いには気をつけろ（前書き）

作者「今回から長編に入りまーす。」

当麻「またかよ・・・」

作者「別にいいだろうが。ちなみにツイッターを始めたので俺のくだらない呟きを見ていってください。」

一方通行「ほんとくだらなそうだな・・・。」

作者「ちなみに猫ヒナ編のＯＰは『はっぴぃにゅうにゃあ』でよろしくお願いしまーす。」

第２４話：（猫ヒナ編）呪いには気をつけろ

ここ最近ヒナギクは憂鬱だった。前から好意を寄せていたハヤテはナギと付き合うし朝は朝で車に泥をはねられるし昼は土方と沖田の喧嘩に巻き込まれてマヨネーズだらけになるしその後の授業でイワンコフ先生の実験の授業でヅラが変なものを作りそれをこぼしてしまいその爆発に巻き込まれる。しかもこの作者が前に書いた銀魂とハヤテのクロスオーバー作品では第１話で敵に殺されその後にゾンビとして復活するというかなり悲惨な扱いを受けているしこの混沌学院の話でもほぼ空気扱いとされている。（ヒナギクファン、すみませんｂｙ作者）何でこんなについてないんだろ？そう思っていたら一匹の猫が通りかかった。

「猫・・・」

ヒナギクはその猫の方へ寄って行った。猫もヒナギクの方へ寄って行った。

「・・・かわいい・・」

ヒナギクは猫を抱きよせた。その時だった。

（ヒヒヒヒヒ・・・いい媒体がいたもんだなぁ・・・・）

「え？ばいた・・・」

ここでヒナギクの意識が途切れた。

翌日、２Ｚはいつものように騒がしかった。

「あ～うるさいな～いつもいつも。」

「仕方ない。皆騒ぎたい年頃なんだよ。」

新八とロイドは会話をしていた。で、朝のホームルームの鐘が鳴った。鐘の合図で誰もが席に座ったが空席があった。その席はヒナギクの席であった、新八は遅刻なのか？と思っていた。その後、少しして銀時が教室に入って来た。

「えー、今日の連絡は2時間目の歴史の授業は急遽自習となった。」
銀時の一言で誰もが歓喜した。
「オイオイ、喜ぶんじゃねーよ。今雪路んとこじゃーやべー事になってんだからよ。」
「ヤバい事って何なんですか？」
新八が聞いた。その後で銀時はこう言った。
「ヒナギクが行方不明になったんだよ。」
銀時の一言で誰もがざわついた。
「先生！ヒナさんどうかしたんですか！」
ヒナギクの友人である西沢が聞いた。
「俺も詳しい事はしらねーンだ。ただ今日の朝、雪路が実家からそう連絡があっただけなんだ。」
「そう・・・」
無事かな？大丈夫か？戻ってくるよな？何で土方が行方不明にならないんだ？沖田テメェ本気で斬るぞ。などと声が上がった。
「静かにしろ。この後ネギ先生の授業だろ？しっかりやれよー。」
と言い残して銀時は去って行った。

放課後、新八はヒナギクの家へ向かっていた。後ろからはロイドとコレットとエミルとマルタがいる。家へ着くと玄関前に警察と雪路が立っていた。
「雪路先生！」
「新八君、それに皆も。」
「ヒナギクが行方不明って本当か！」
「ええ・・・どうやら昨日の夜から言ないみたいなのよ。」
「心当たりはないんですか？」
「特に何も。」
ここで話を聞いて新八達は今の状況をまとめて見た。
1、　ヒナギクは昨日からいない
2、　特に心当たりはない

3、　最後に目撃された神社からは特に何も発見されていない
「・・・たったこれだけか。」
　ロイドが呟いた。
「でも今は悟空君がベジータ君とブロリー君と協力して空から探しているし・・・見つかると思うよ。」
「そうですよ、他のクラスの人達も探してくれているんです。希望を持ちましょう。」
「大丈夫だよ！ヒナギクの強さなら私達が分かっています。大丈夫ですよ。」
「皆・・・ありがとう・・・」
　雪路は皆に礼を言った。ヒナギク捜索は夜まで続いた、新八達が一生懸命探していたが結局は見つからなかった。
「はぁ・・・見つからなかったか。」
「明日があるよ。」
「そうですね。」
　コレットに励まされ新八は少し希望を持った。

（あれ・・・ここ・・・どこかしら？）
　真っ暗な所でヒナギクは目を覚ました。立ちあがろうとしたがうまく立てない、何度も立ちあがろうとしたが無理だった。
「にゃーにゃにゃ・・・にゃ？」
　ここで自分が意味不明な事を言ったのに気付いた、で手を見て見たらそこには肉球がついていた。何でこんなのが？と思っていたら近くに鏡らしきものがあった。それを見てみたらそこに映っていたのはピンク色の毛並みの猫の姿だった。
「にゃ？にゃにゃ？にゃにゃにゃ？（え？これが私？どうなってるの？）」
　ヒナギクは混乱した、何で自分が猫になっているのか？一体何が起きたのか？そんな事を思っていたら後ろから声がした
「ハヤテ、珍しいぞ。ピンク色の猫がいるぞ。」

「本当ですね。いるんだな～ピンク色の猫なんて。」
その声はハヤテとナギだった。ハヤテは猫ヒナを抱き上げた。
「にゃ！にゃにゃにゃ！（ちょ！ハヤテ君いきなり！）」
「捨て猫でしょうか？どうします？」
「どうって・・・連れて行くしかないだろ。」
「そうですね。」
という訳でヒナギクはハヤテ達に保護された。だが当の本人達はこの猫がヒナギクだと知らないようであった。

少ししてハヤテ達は三千院家の屋敷に着いた。
「タマ～、お～い、タマ～。」
ナギがペットのタマを呼んだ。タマは虎なのだがナギとマリアは猫と思っている。で、目茶苦茶ナギになついているのだ。
「にゃお～～～～ん」
「タマ～今日からこいつが三千院家の猫となったからな～シラヌイと一緒に仲良くするんだぞ～。」
「にゃ！にゃにゃにゃ！（虎！何でこの子虎を飼ってるの！）」
「じゃあ私は着替えてくるからな～。」
「にゃーーーーーー！（待ってェェェェナギィィィィィ！）」
ヒナギクの声むなしくナギは去って行った。
「にゃぁ・・・（はぁ・・・これからどうしよう）」
「どうしたお前？飼い主がいるのか？」
タマが話しかけてきた。
「にゃ・・・にゃあああああ！（え・・・虎が喋ってるゥゥゥゥゥ！）」
「おいおい、お前も普通に話せよ。こういう喋り方だと作者が面倒だろ？」
「そんな事はどうでもいいけど・・・あなた、私の言葉が分かるの？」
「まぁ俺も猫だからな。」

「虎じゃないの？」
「まぁそんな細かい事は置いといてだな、何か訳ありのようだな。俺っちでよければ力を貸すぜぃ。」
「ホント！ありがとう！」
ヒナギクは今さっきの事を話した。
「起きたら猫の姿になってた？どういう事だそれ？」
「私にもさっぱり・・・」
「とにかくお前さんがお譲とハヤテのクラスメイトだって分かった。あとは・・・いつチョッパーの奴が来るかだよな。」
ヒナギクはビックリした。ここでクラスメイトであるチョッパーの名前が出たからだ。
「あなた・・・チョッパーを知っているの？」
「ああ。あいつは前、俺っちが病気の時に助けてくれた恩人だよ。しかも動物の言葉が分かるみたいだからな。」
ここでヒナギクの脳裏にある名案が浮かんだ。それはチョッパーを通訳に使い自分がヒナギクだという事を皆に知らせる方法だ。とここでハヤテが部屋に入って来た。
「よーく見たらこの猫汚れてるなー。」
にゃ？（え？）この時、ヒナギクは嫌な予感がした。
「仕方ない。これからシャワーを浴びるからこの猫も一緒に洗おう。」
え？ハヤテ君とシャワー？ハヤテ君が洗ってくれる？この私を？え？え？え？え？ヒナギクは混乱していた。そんなヒナギクの気持ちを知らずにハヤテはシャワールームへ入って行った。
「中々見つからないな～」
「カカロット、こっちはどうだ？」
「おう、ベジータか。まだだ。オメーの方はどうだ？」
「まだだ。後はブロリー待ちだな。」
上空にて。上からヒナギクを探していた悟空とベジータは情報を

交換していたがどちらも見つからなかったようだ。とここでブロリーがやって来た。
「おう、ブロリー。オメーの方はどうだ？」
「全然だぁ、一体どこにいるんだァ？」
「う～ん。そろそろ腹減っちまったから寮に戻ろうぜ。」
「そうだな。」
と言ってサイヤ三人組は混沌学院の寮へ戻って行った。

三千院家のシャワールーム。今ここでハヤテがシャワーを浴びていた、で下の方で猫ヒナが顔を押さえて下にうずくまっていた。
「あれ？どうしたんだ？」
（いや～～～～～これ無理～～～～～ハヤテ君が全裸でこっちを見てる～～～～～～なんか恥ずかしい～～～～。）
猫ヒナはとにかく赤くなっていた。
「ん～この子・・・熱いの苦手なのかな～。」
その時だった。
「ハヤテ～私も入っていいか～」
外からナギの声が聞こえたのだ。ヒナは今さっきのセリフを頭の中で何回も繰り返した。え？一緒に入る？今からナギが入ってくるの？ハヤテ君がいるのに？ヒナギクがそう思っている間、バスタオル姿のナギが入って来た。
「お嬢様、この猫熱いの苦手みたいですよ。」
「そうか？私に任せて見ろ。」
ナギは猫ヒナを抱いてシャワーを浴び始めた。
「どうだ？気持ちいいか？」
（あ～～～～～出来るならハヤテ君にやってほしかった～～～～）
「お嬢様、しっかり洗って下さいね。」
「任せておけ！」
とまぁこんな感じでシャワーを浴びていた。

「ったくどこにいったんでしょうね。ヒナギクと土方さん。」
「おい、何だその台詞。まるで俺もどっかいったみてーじゃねーか。」
土方と沖田はヒナギクが消えた現場となった神社に来ていた。他にも1年風紀委員の初春と一護もいた。
「二人とも、喧嘩している場合じゃありません。」
「初春の言う通りだ。そんな事している暇があったらヒナ先輩に関する事を調べましょう。」
「ふー・・・それもそうだな。」
土方は神社を見回した。
「意外と広いな・・・よし、今から別々で散策するぞ。30分後神社の中央に集合。わかったな！」
「ハイ！」
その後、風紀委員たちは神社の周りを調べた。

「う～ん・・・なかなか怪しいものが見つかんないな～。」
初春は神社の右側の辺りを調べていた。その時、後ろから近づいてくる人物がいた。
「う～～～い～～～は～～～～るぅ！」
と言いながら初春のスカートを上げた。その人物は初春の友人である佐天であった。
「キャア！な・・・何するんですか佐天さん！」
「いや～つい初春が視界に入ったからね～」
「入ったからって・・・スカートを上げないでください！」
「ごめんごめん。で、今何やってるの？」
初春は佐天にヒナギクの捜索をしている事を伝えた。
「ヒナギクって・・・あの2Zの？」
「はい。他にも一護さんとヒナギクさんと同じクラスの土方さんと沖田さんが探し」
「沖田ァ！テメー何サボってやがるぅ！」

「違いますよ。休憩ですよ休憩。」
「永遠に休憩をさせてやろうかァァァァ！」
初春とは別の方で土方と沖田の喧嘩が始まった。
「・・・大丈夫なの？」
「はぁ・・・分かりません。」
初春はため息をついてこう言った。

「分かった。ありがとな。」
一護はその辺にいた霊に礼を言った。彼は幽霊が見えるのだ、で声が聞けるのでそれを利用して今はヒナギクに関する情報を聞いているが・・・。
「う～ん・・・収穫なしか。」
腕時計を見たらそろそろ３０分が経とうとしていた。
「仕方ない。初春や先輩達に頼ってみるか。」
一護はそう言った後神社の中央へ行った。

「はぁ・・・結局何にもなしか。」
土方はため息交じりにこう言った。自分たち以外にも近藤や山崎もヒナギクを探しているが今さっき連絡したら向こうも情報は無かったのだ。その後、一護と初春が中央に集まったが。
「すみません。何も手がかりとなるようなものは見つかりませんでした。」
「こっちもです。幽霊たちに聞いてみたんですけど誰も分からないみたいでした。」
「う～ん・・・まぁまた明日もこの辺を重点として調べる。また力を貸してくれ。」
「はい・・・そういえば沖田先輩は？」
初春がこう聞いたが土方は口を閉ざしたままだった。すると路地の方から沖田の声が聞こえた。
「土方さ～ん。いい話が見つかりましてぜぇ～い。」

「でかした！」
土方達が沖田の方へ駆けて行った。沖田の隣には・・・。
「おい、これ前に銀魂で出てたリヤカーのオッサンじゃねーか！」
そう、あのリヤカーのおじさんだったのだ。
「く・・・だけどこのオッサンが何か情報を。」
「ええ。さぁ、あの話をしてください。」
沖田に促されおじさんは話を始めた。
「アレは俺が金髪の女と」
「おい、帰るぞ。」
土方は初春と一護にそう言い帰ろうとした。
「待ってくだせぇ。この話、オチが最高なんです」
「んな事どうでもいいんだよ。」
土方達は沖田を置いて帰って行った。

その一方、町のどこかで謎の影が蠢いていた。
（う～ん・・・この姿じゃ・・・ちょっと動きにくいな。何とかして別の体を・・・）
そんな事を思っていたらちらりとサンジの姿が目に映った。
（お！いい体みっけ！）
その後、謎の影はサンジをつけて行った。

次回！
ハヤテとナギに拾われた猫ヒナはとんでもない光景を目にしてしまう！そして謎の影に狙われたサンジの運命は・・・そして謎の影の正体とは一体・・・。次回混沌学院『風呂に入る前に体を軽く洗っとけ』どうぞご期待！
「俺はアミバだ～！」
「だから何？」

第２４話：（猫ヒナ編）呪いには気をつけろ（後書き）

おまけコーナー

作者「という訳でおまけやりまーす。さて、今回はついに出てきた初春と佐天に話を聞きたいと思いまーす、つーわけでよろしく。」

初春「よ・・・よろしくお願いします。」

佐天「初春、堅くなりすぎだって。」

銀八「まーとりあえず肩の力を抜け。」

初春「そ・・・そそそそんなこと言われたって・・・。」

佐天「じゃあこれでどう？」

初春「キャアアアアアアアア！何やってんですか佐天さん！」

佐天「これで少しは緊張」

初春「とれませんよ！人前でスカートを上げられて」

ブロリー「ふ・・・フハハハ！」

パラガス「いいぞ！佐天、もっとやれ！」

闇「何言ってんですかあなた・・・。」

ドナルド「パラガス、逃げた方がいいと思うよ？」

当麻「というより逃げた方よくねーか？」

一方通行「ああ。」

闇「えっちいのは・・・嫌いです。」

パラガス「オワァァァァァァァァ！こうなるのもサイヤ人の運命・・・」

当麻「不幸だァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

一方通行「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！」

銀八「ギャアアアアアアアアア！何で俺もォォォォォォォォォォォォ！」

作者「・・・というわけでこの長編のＥＤは『本日、満開ワタシ色！』でよろしくお願いしまーす。じゃあドナルドさん、最後にあれやってください。」

ドナルド「うん、じゃあ行くよ。ランランルー！」

第２５話：（猫ヒナ編）風呂に入る前に体を軽く洗っとけ（前書き）

作者「というわけで猫ヒナ編の第２話の始まりはじまり～。」

一方通行「おめーってさー、長編長編て言うけど結局は４～５話で終わってんじゃん。」

作者「・・・細かいことは気にするな！」

当麻「いや！気にしろよ！」

第２５話：（猫ヒナ編）風呂に入る前に体を軽く洗っとけ

三千院の屋敷、今ここでハヤテ達は夕食を食べ終わり居間でテレビを見ていた。
『震えるぞハート！燃え尽きるほどのヒート！』
「おお！ハヤテ、見ろ！出るぞ、ジョナサンの必殺技の」
「あの～ジョジョもいいですけどこの猫の世話もお願いします～。」
今猫ヒナはハヤテの腕の中にいた。当の本人は・・・。
（今・・・私、ハヤテ君に抱かれてるのね・・・ハヤテ君の腕・・・あったかい・・・）
そんな事を思っていた。
「ああそうだ・・・今思ったけどこいつの名前はどうしようか？」
「あ。そう言えばそうですね。」
二人は名前がないって今気付いたが、この猫はヒナギクである。二人はそんな事知らずに名前を決め始めた。
「モモという名前はどうですか？」
「ありきたりだな。ジョジョでよくないか？」
「ははは・・・でもこの猫、メスみたいですよ。」
「そうか、それならバーバラでよくないか？」
「う～ん、僕はロールがいいと思いますけどね～。」
まぁその後はどっかで聞いた事のある名前が二人の口から飛び出した。で、結局は。
「よし、こいつの名前は『もよ子』に決定だ！」
「うん、いい名前ですね！」
（よくなァァァァァァァい！私はヒナギクなのにィィィィィィィィ！）
ヒナギクはこの名前にかなりの不満を持っていた。まぁ当然と言えば当然だが。そんな時、マリアの声が聞こえた。
「ナギー、お風呂湧いたから入りなさーい。」

「ああ分かった。じゃあ行くかハヤテ。」
「そうですね。」
二人はその後部屋を出て行った。しかし今のセリフを聞いてヒナギクの頭の中は嫌な予感がした。何でナギが風呂に入るのにハヤテも出て行くのか？何で一緒に出て行くのか？色々考えた結果、ヒナギクは二人が一緒に風呂に入るという答えにたどり着いた。
（何だ。一緒にお風呂に入るだけ・・・）
ここでよーく考えた。ハヤテとナギが風呂に入る？一緒に？二人の行動を考えて見るとこの後の展開が下手すれば１８禁すれすれになる事をヒナギクは知った。
（これヤバいよね！本当にヤバいよね！この作者の事だから面白半分で変な事を・・・）
次の瞬間、ヒナギクはダッシュで二人の後を追った。

「ったく、ヒナちゃんどこ行ったんだよ～。」
サンジは一晩中ヒナギクを探していた。彼も彼なりに一生懸命探していたがなかなか見つからなかった。そんな中、近くの路地裏で音がした。
「何だ？今何か音がしたような・・・。」
サンジは路地裏を調べるため中に入って行った。

「・・・やはり封印が解けてましたか。」
伊澄は自宅の蔵の中を見ていた。彼女が見つめる先にはふたの開いた瓶が転がっていた。
「伊澄殿！どうしたんですか？」
「何や？何か変なものが現れたか？」
近くにいた幸村と咲夜が聞いた。伊澄は転がっていた瓶を拾い袖に入れた。
「・・・大変な事が起こりそうです・・・！」

ヒナギクは赤くなっていた。なぜなら今彼女は猫状態でハヤテに体を洗ってもらっているからだ。
「もよ子って本当に変わってる猫ですよね～。夕方のシャワーは嫌がってたのに今はまんざらでもないなんて・・・」
「たまにいるさ。こういう猫。」
湯舟に使っているナギが答えた。
「お嬢様、次髪を洗いましょうか？」
「ああ。頼む。」
ナギは湯船から出てハヤテの前に座った。
「じゃあ行きますよ。」
「おう。」
ハヤテはナギの髪を洗い始めた。
「やっぱりハヤテは髪を洗うのが上手だな。」
「だって愛しているお嬢様の髪ですからね。」
その後、ハヤテはナギの髪についている泡を流した。で、二人一緒に湯船に入った。そしてヒナギクは見てしまった。湯船でイチャつく二人を。この様子はそれぞれの想像に任せます、ここじゃあ表現がアレ過ぎて書けませんので。

翌日、ナギは昨日の猫について話をしていた。
「へー、珍しいなーピンク色の毛並みの猫って。」
「すごいねー、世界は本当に広いねー。」
目を煌かせてチョッパーと唯がその話を聞いていた。その横にはリンとレンもいた。
「ねぇねぇ、今日の放課後ナギの家に行っていいか？」
「あ、私も行きたい！」
「僕も僕も！」
「ああいいぞ。皆まとめて来い。」
「よっしゃー！」
その後、教室のチャイムが鳴り銀時の代わりにスネークが入って

来た。
「あれ？スネーク先生。銀さんはどうしたんです？」
新八が聞いてきたのでスネークはその質問に答えた。
「銀時先生は昨日からヒナギクを探しているんだ。今日も雪路先生と協力して探しているんだ。」
「それで今日は。」
「ああ、しばらくは休みって言っていた。今日の連絡はその事だけだ。あと欠席者はいないか？」
新八は辺りを見回した。よくよく見るとヒナギク以外に空席があった。そこはサンジの席である。
「ん？珍しいな。サンジは休みか。」
スネークは出席簿を書き挨拶をして教室から出て行った。
「サンジが休むなんて・・・珍しいな。」
「そうだね・・・。」
新八はロイドと会話を交わした。この時、新八の中で何か嫌な予感がしていた。

放課後。チョッパー達はナギの屋敷に来ていた。
「うわ～～。かわいい～～～。」
唯はもよ子もといヒナギクを見てこう言った。リンとレンもメロメロだ。
「すごいな、まるでヒナギクの髪の毛の色のようだな～。」
チョッパーがこう言った。その後、ヒナギクは何か言い始めた。
「にゃ！にゃにゃにゃにゃ！（チョッパー君！私の声が分かる？）」
「え？な・・・何で俺の名前を知ってるんだ？」
チョッパーはこう言った。ここで言うけどチョッパーは動物の声が分かるのだ。
「にゃ！にゃにゃにゃ！（私よ！ヒナギク、桂ヒナギクよ！）」
「ヒナギク・・・？ヒナギクは人だぞ。」
「にゃにゃ！にゃにゃにゃ！（だからそのヒナギクが私なんだって

！なぜか猫の姿になってるのよ！）」
「どうしたのチョッパー？」
「この猫がヒナギクだというんだ。」
「ははは。いくらなんでもそれは無いぞ。」
「う～ん・・・じゃあ・・・お前が好きな奴は誰だ？」
チョッパーがヒナギクに質問をした。ヒナギクはうろたえながらこう言った。
「にゃ・・・にゃにゃにゃ～。（は・・・ハヤテ君）」
その後もチョッパーはヒナギクに関する質問をした。そして。
「ヒナギクだ！この猫はヒナギクだ！」
チョッパーの一言により辺りは騒然となった。
「え・・・じゃあ僕がヒナギクさんの体を・・・」
「お前何かしたのか？」
「じゃあ私達が風呂で・・・」
「何やったんだよお前ら！それより銀さん達に連絡しないと、ナギ、皆！他の人達に連絡をしてくれ！」
「ああ、わかりました！」
その後、屋敷に銀時達が集まった。
「こいつがヒナギクか？」
「はい。そうみたいです。ヒナギクしか知らない秘密をこいつは知ってました。」
「そうか・・・」
ここでしばらくの沈黙が流れた。何でヒナギクは猫になったのか？その時、部屋のドアが開き伊澄と咲夜と幸村が入って来た。
「・・・遅かったみたいですね。」
「お前ら。一体どうしたんだ？」
「先生・・・もしかしてこの猫が・・・ヒナギクさんですか？」
「え？何でその事を。」
伊澄は少しの間を開けて言葉を続けた。
「ヒナギクさんは今呪われています。」

「な・・・何だってェェェェェェ！」
「落ち着いてください。今ヒナギクさんは私達の祖先が封印した猫の妖怪に呪われてこんな姿になっています。どうやら、ヒナギクさんと接触して体を奪われたのでしょう。」
「ま・・・マジかよ。」
まさかの展開に銀時は驚いた。
「しかし、ヒナギクさんの魂が無事でよかったです。あとは体の方ですが・・・」
ここでまた扉が開いた。入って来た人物はヒナギクの体をした誰かだった。
「にゃ！にゃにゃにゃ！（わ・・・私！私の体！）」
「ヒナギク、ちょっと落ち着け！」
自分の体を見て感動しているヒナギクをチョッパーが落ち着かせるが、その人物は次にとんでもない事を口にした。
「先生、助けてくれェェェェェ！」
「だ・・・誰だお前？」
「俺ですよ！サンジ！サンジですよ！」
「・・・・・・は？」
「サンジです！昨日からヒナちゃんの姿になっていたんですよ！」
「ま・・・まぁ・・・とにかく落ち着け。何でこうなったか話してみろ。」
サンジは落ち着いた後、昨日の事を話した。
「実は・・・・」

サンジは昨日、怪しいと思って路地裏に入って行った。そこにいたのは・・・。
「あ、サンジ君。」
そこにいたのはヒナギクらしき人物だった。
「ひ・・・ヒナちゃん。こんな所で何やってんだよ。皆心配」
サンジが近寄ってきたらヒナギク？は手をサンジの後ろに回した。

「え？ヒナちゃん？」
「わ・・・を・・・」
「へ？」
「私と・・・キス・・・して。」
「うっひょひょーーーい！そういう事なら」
ヒナギク？に飛びついたサンジ。だがその直後から記憶が途切れた。

「という訳だ。気が付いたらこんな姿になっていた。」
「うん、だけどその前に・・・何で皆に知らせなかったの？」
「え、だって・・・あんなこと言われちゃ男がすた」
「お前はアホかァァァァァァァァァ！」
全員からツッコミを受けた。
「知らせろよォォォォォォ！もしおまえが今の事知らせたら運命は変わってたかもしれないのによォォォォォ！」
「仕方ないじゃないっすか！だって・・・あんな事」
「いいわけは止めろォォォォォォォォ！ったく・・・次から次へと何かが起こるな～。」
銀時は呆れていた。学校を休んでまでヒナギクを探しまわった結果がこれだ。もう何かが吹っ切れていた。だが、事件は解決していない。よくよく考えたら猫の妖怪がサンジの体を乗っ取っているからだ。
「は～～～どうすっかな～～～伊澄。何か手は無いか？」
「今の所・・・ありません。捕まえるしか手はありません。」
「はぁ・・・仕方ねぇ。皆、サンジの体を探すぞ。」
「はい。」
そしてサンジの体を乗っ取った猫の妖怪を探すこととなった。

（ぐひひひひ・・・こいつはいい体だ。いい運動神経をしている・・・。）

謎の影が屋根から屋根へ飛び移っていた。
（そろそろ・・・女の子と・・・・・ぐひひひひ・・・・。）
その後、謎の影は混沌学院の方へ向かって行った。

次回！謎の影の魔の手が１Ｚに迫る！一護はクラスメイトを守れるのか？そしてヒナギクとサンジの運命はどうなる？次回混沌学院『初対面の印象が後々大切になってくる』どうぞご期待！
「闇の炎に抱かれてバカなッ！」
「これ名台詞か？」
祝！マルタ、マイソロ３参戦！

第２５話：（猫ヒナ編）風呂に入る前に体を軽く洗っとけ（後書き）

おまけコーナー

作者「というわけでって皆？どこに行ったー？」

パラガス「おや、あなたも取り残されましたか。」

作者「パラガス、皆はどこだ？」

パラガス「これを。」

作者「何だこの手紙・・・何々？

『拝啓バカ作者、

海に行ってきまーす！』

・・・ふざけてんのか・・・あいつら・・・。」

パラガス「さぁ？」

一方その頃

銀八「イヤッホォォォォォォイ！」

一方通行「まさかこんな展開でハワイに行けるとは・・・。」

当麻「いいんじゃないの？」

梓「ドナルドさん・・・こんなところでもハンバーガーを販売しているんだ。」

ドナルド「あっはっは、そうだよ。」

ブロリー「ホアァ！」

オセロット「オワァァァ！」

雷電「オイ、ブロリー！少しは手加減しろ」

ブロリー「手加減って何だぁ？」

銀八「いや～みんな楽しそうだな～。って・・・何だあれ？何か女の子が海の方から・・・」

女の子「静まれ！人間ども！私はイカ娘！この地球を侵略しに来たでゲソ！」

一同「な・・・何だってエェェェ

第２６話：（猫ヒナ編）初対面の印象が後々大切になってくる（前書き）

作者「猫ヒナ編の３話、始まるよ～。」

一方通行「この作者のくだらないツイッターも見てくれよ。」

当麻「銀凪って調べれば一発で出るから。」

パラガス「ちなみに画像はイチャイチャするハヤテとナギ」

ヒナギク「作者さん・・・ここでもハヤナギ節なんですか・・・よかったね・・・よかったね・・・」

作者「ちょっ！怖い顔で見つめるなよヒナギク！」

第２６話：（猫ヒナ編）初対面の印象が後々大切になってくる

その日、一護は授業中に何かの気配を感じた。それは友人であるルキアや恋次、チャドや織姫も気付いていた。
（わかってるな、一護。）
（ああ。）
彼らは一斉に席から立ち上がり廊下へ出て行った。
「あ、お化け退治頑張ってくださーい！」
彼らの姿を見て丁度授業中で、彼らの事をよーーーく知っているネギ先生がこう言った。
「おい、ルキア！あいつの現れた場所は分かるか？」
「今調べ中だ！待っていろ！」
ルキアは手に持っている携帯電話を見ながら走っていた。その後、その携帯電話からアラーム音らしき音が鳴り響いた。
「お、ようやく察知できたぞ！場所は・・・」
「どこだ？」
「早く教えろよ。」
一護と恋次はルキアの携帯電話を見た。中には『場所：混沌学院１Ｚ』と書かれていた。
「おい・・・これって・・・」
「ああ。皆、早く教室に戻るぞ！」
一護達は急いで教室へ戻って行った。

その一方銀時達は２Ｚで作戦会議をしていた。
「えーテメーらに今の状況を教えようと思う。」
銀時はこう言った後黒板に以下の分を書き始めた。
・ヒナギクは猫になっている。
・サンジはヒナギクになっている。

・サンジの体は行方不明。
「とまぁこんな状況だ。誰かサンジの体を見た奴はいないか？」
銀時は生徒達に質問をしたが誰もサンジは見ていなかった。
「はぁ・・・ロクな情報がねーな・・・」
ここで下の方から梓の悲鳴が聞こえた。
「な・・・何だ！」
「あずにゃん！」
銀時と唯は急いで１Ｚへ向かった。その後ろから新八とヒナギクの体のサンジがついて行った。

その一方１Ｚではサンジの体をした何者かが窓を蹴飛ばし乱入していた。
「サンジさん！何やってる・・・」
注意しようとしたネギだが彼の気配を探った。そしてこう声を出した。
「あなた・・・サンジさんじゃありませんね。」
「魔法使いか・・・厄介な奴がいたもんだ！」
サンジの偽物はネギに向かって飛び蹴りを放った。だがネギの方も杖を取り出し魔法の壁を作った。
「ぐぅ！」
「最初っから全力で行きますよ！」
ネギは魔法の暗証を始めた。暗証を終わらせたその次の瞬間ネギの周りに何本もの矢が宙に浮かんだ。
「いっけー！」
ネギの号令で矢はサンジに向けて放たれた。
「うおっ！」
サンジの偽物は何とかよけていた。だが段々と後ろへ下がって行った。
「皆さんは今のうちに逃げて」
「そうはさせねーぞ。」

ネギがよそ見をした瞬間、サンジの偽物はネギの背後へ移動していた。ネギは裏拳を使おうとしたがサンジの偽物の蹴りの方が早かった。ネギは廊下の壁に向かって飛ばされた。
「ぐ・・・ぐぅ。」
「ふ、所詮はガキか・・・それより・・・」
偽サンジは教室を見回した。教室の中には梓と憂が逃げ遅れていた。
「ふふふ・・・結構いい子が残ってんじゃねーか。」
偽サンジが二人に寄って行ったがここで一護の幼馴染のたつきの飛び蹴りが脇腹に命中した。
「グフゥ！」
「梓、憂！今のうちに逃げな！」
「あ・・・ありがとう！」
たつきは再び偽サンジの方を向いた。偽サンジは脇腹を押えながら再び立ち上がった。で、たつきにこう言った。
「ぐ・・・うぅ。・・・うん？よくよく見たらオメーもかわいいな。」
「へ？」
その後、偽サンジはとんでもない行動に出た。

「おい！大丈夫か！」
今さっき1Zに着いた銀時は倒れているネギを起こした。
「う・・・サンジさんが・・・いきなり・・・。」
「く・・・偽物が来たのか。」
銀時が教室の方を見たら中からたつきの雄たけびが聞こえていてドコンドコンと音がしていた。
「な・・・何が起きてんだ？」
「銀さん！」
向こうの方から一護達がやって来た。
「銀さん！教室で何が起きてんだ？」

「しらねーよ。ちょっと見て見るか。」
銀時と一護が教室の中をのぞいた。目に映っているのは机を手にして暴れているたつきとギリギリでよけている偽サンジだった。
「お・・・おい、たつき！」
一護はたつきの名を叫んだ。で、彼女は彼らに振り向いた。
「アァァァァァァン？何か用かァァ？」
（お・・・鬼だ・・・瓦礫の中に鬼がいるぅウウウウウ！）
誰もが心の中で思った。
「ってかそんな場合じゃねー！」
銀時は教室の中に入り偽サンジを取り押さえようとした。しかし、偽サンジがその前に教室の外から逃げ出したのだ。
「あっばよー！」
「あ、クソ！待ちやがれ！」
「待てって言われて待つバカはいねーよォォォォ！」
と言って去って行った。
「くっ・・・逃がしたか。おい、無事かオメーら？」
銀時は近くにいた梓に聞いた。
「え・・・まぁ、他の皆さんは逃げたようですし、ネギ先生も今さっき唯先輩が保健室に連れて行って・・・たつきさんは・・・」
梓は戸惑った。あの場面を目撃したからだ。あの場面と言うのは偽サンジがたつきの頬の所にキスをしたからだ。まぁ初対面ってかあんまり話していない奴にそんなことされたら誰だってブチ切れるって銀時は思っていた。だが当のたつきは未だに鬼モードから戻れていない。何とか一護と織姫が落ち着かせようとしている。だが今はそれどころじゃないって気付いた銀時は携帯電話を取り出しある人物に電話した。
「もしもし、俺だ。実はかくかくじかじかで・・・ああ・・・ああ・・・そうか。悪いな。じゃあ頼むぜ。」
と言って携帯をしまった。
「あれ？誰に電話したんです？」

保健室から戻って来た唯が聞いてきた。
「ああ。月詠先生だ。」
「ツッキー先生のこと？」
「そうだ。今現在、頼れるやつはこいつしかいない。他にもあいつの生徒も手伝ってくれるみたいだ。」
「せ・・・先生。月詠先生のクラスって・・・まさか・・・。」
「ああ。そのまさかだ。」
一護は少し不安になった。

その一方偽サンジは女子更衣室の近くにいた。
「ぐっひっひ～ここにいればいずれは・・・やべっ、鼻血が」
ここで彼の頭上で何かがかすり壁に刺さった。それを見て見たらそれはクナイだった。
「クナイ？何でここに？」
「見ぃつけたァァァ！」
何だ？と思って上を見上げたら月詠の教え子であるうずまきナルトが上空から現れたのだ。間一髪避けようとしたが避けた先には分身が立っていた。
「おらぁ！」
「グフォ！」
偽サンジは分身の攻撃に寄り壁にめり込んだ。
「てて・・・ん？」
前を見たら追撃の螺旋丸を放とうとしているナルトとその分身がいた。
「ヤバッ！」
「喰らえ！螺旋丸！」
ナルトの螺旋丸は見事偽サンジに命中した。だが偽サンジは足でガードしていた。
「何っ！」
「ふ、読みが浅いんだよ！」

偽サンジはナルトを蹴り飛ばし、自らも追撃の為ナルトを追った。
「くっ！」
「今さっきのお返しだァァァァァ！」
その後、偽サンジはかかと落としを放った。かかとはナルトの頭に衝撃が走り、地面にたたきつけられた。と思ったら姿が消えた。偽サンジは何で？と思っていたら後ろから誰かに蹴られた。
「が・・・がぁぁ・・・・！」
「サクラちゃん！」
「ナルト、大丈夫？」
サクラは偽サンジをけっ飛ばし地面に降りた。
「サクラちゃん、他の皆は？」
「月詠先生が銀さんと合流して後で来る。他の皆は今来ると思うわ。」
「ちっくしょォォォォォ！」
偽サンジは声を上げながら立ちあがった。
「おわぁ！こいつまだ立ち上がるってばよ！」
「流石、サンジの体ね。かなりの体力だわ。」
「か・・・感心してる場合じゃねーってばよ！」
「仕方ないわね。」
サクラはナルトの手を取った。
「さ・・・サクラちゃん？も・・・もしかし」
「しゃーんなろぉぉぉぉぉぉぉ！」
サクラはナルトの体を武器にして偽サンジの頭部目がけて攻撃した。ゴツン！ナルトの頭と偽サンジの頭が互いに激突した。
「ギャアアアアアアアアア！」
二人は悲鳴を上げた。頭には巨大なタンコブが出来ていた。
「ひ・・・酷いってば・・・よ・・・・・」
「いーじゃないの、これであの変態は捕ま・・・てない！」
サクラが目を離した瞬間。偽サンジは最後の力を振り絞り逃げていたのだ。

「追うわよ、ナルト！」
「でもその前に治療してほしいってばよ。」
とまぁこんな会話をしていた。

傷だらけの偽サンジは何とかこの場を逃げ去り庭の方へ来ていた。
「はぁ・・・はぁ・・・んだよあの子。とんでもねーかいり」
と呟いていたら足元から何か音がし、その後で目の前から巨大な丸太が襲って来た。で、避けきれずに顔面に命中してしまった。
「オーホッホッホ！銀時先生の生徒だからバケモノかと思いましたけど私の見当違いのようでしたねー！」
偽サンジの頭上から笑い声が聞こえた。上を見て見てらそこには沙都子とカービィとピカチュウが立っていた。
「な・・・何ィ！」
「カービィ、ピカチュウ、続いてのトラップの準備をお願いするわ！」
「「アイアイサー！」」
沙都子の号令でカービィとピカチュウは近くにあったボタンを押した。その後、偽サンジの足場が崩れた。
「オワァァァァァ！何でだァァァァァ！」
「ルイージ先生！クッパ先生！お願いします！」
沙都子がこう言った後、足場の下からルイージとクッパがアッパーの構えをしていた。
「来たぞクッパ！」
「おう！分かった！」
偽サンジが近くなったのを確認するとルイージとクッパは同時にアッパーを偽サンジにかました。偽サンジは上空へ飛んでいきヒュルルル〜〜〜と音を立てながら地面に落ちて行った。
「お、アンタらも協力してくれたのか！」
ここで学院の方から銀時達がやって来た。
「あ、銀時先生。話はアンタの生徒の新八から聞きました。」

「い・・・いつの間に。」
「まぁ細かい事は置いといて・・・早く何とかしないと」
ルイージがこう言っている時だった。偽サンジはなぜか余裕の笑みであった。
「あん？何で笑ってんだ？」
「ククク・・・ようやく俺の真の力が解放された・・・」
「真の力？」
銀時が疑問を持っている時だった。偽サンジの周りからドス黒いオーラが放たれたのだ。
「な・・・何だよこれ？」
「クァーハッハ！俺の真の力を見せてやるわァァァァァァ！」
偽サンジは銀時達に襲いかかった！

次回！真の力を解放した偽サンジ、闇の牙が銀時達に襲う！銀時達はどう対処するのか、そしてヒナギクとサンジは元の体に戻れるのか！次回混沌学院猫ヒナ編最終回！『最後の最後で意外な奴が活躍する』どうぞご期待！
「しんのすけのいない未来に未練なんてあのか！」
「ヤベェ！マジで名言出てきた！」

第２６話：（猫ヒナ編）初対面の印象が後々大切になってくる（後書き）

おまけコーナー

パラガス「質問が届きました『エンジェルビーツ』のキャラは出しますか？と書いてあります。」

作者「作品は知ってるけど内容はあまり分かりませんが、少し興味があるのでいつか見てみたいと思います。だけど天使（かなで）だけは後々少し出番があります。」

パラガス「じゃあ次、他作品同士のカップルはできますか？」

作者「それも考えています。そうした方がもっと面白くなりますけど・・・どのキャラとどのキャラをくっつけようか考え中です。誰か助けてくれ。」

一方銀八たちの方は・・・

前回のあらすじ

侵略侵略侵略侵略侵略侵略侵略イカ娘！チュッ♪

銀八「し・・・侵略だぁ？」

イカ娘「そうでゲソ！」

銀八「オメー熱でも出してんじゃねーのか？」

一方通行「病院行って来い。」

イカ娘「・・・・・・！ブッー！」

銀八「おわっ！何かこいつ出しやがった！」

雷電「何だこれは！」

オセロット「これは・・・イカ墨？」

イカ娘「ふっふっふ・・・これで私の力を思い知った」

ヒュ～～～

このくだらないやり取りも次回で終わりまーす。

第２７話：（猫ヒナ編）最後の最後で意外な奴が活躍する（前書き）

作者「今回で猫ヒナ編クライマックスです！」

当麻「最後まで見ていってくれよな！」

銀八「あと後書きのくだらない話も今回で終わりします。」

第27話：（猫ヒナ編）最後の最後で意外な奴が活躍する

「な・・・何だ今の地響きは！」
伊澄とともに行動していた幸村と咲夜が驚いた。こんな時でも伊澄は冷静だった。
「・・・まさか真の力が解放された・・・！皆さん、急いでください！大変なこととなっています！」

その一方、真の力を解放した偽サンジと対峙していた銀時達。今彼らは劣勢であった。
「ぐぅ・・・何だよこの力！」
「ち・・・何だよこれ・・・まともに動けねぇ！」
「せ・・・せ・・・せんせ・・・」
ここで偽サンジの威圧で沙都子が気を失った。
「沙都子！・・・くっ、カービィ、ピカチュウ！沙都子を保健室へ連れてってくれ！」
「せ・・・先生は。」
「こいつを何とかしたら戻る！」
その後、カービィとピカチュウは沙都子を連れもどって行った。
「銀さァァァァァん！」
銀時の後ろからナルト達の声がした。
「お、オメーら。」
「何だよあいつ、いつの間にあんなに強く」
「真の力っつーのを解放したらしい。」
「ククク・・・いくら人数が集まろうとこの俺には・・・」
その瞬間、偽サンジの姿が消えた。
「な！」
「しまっ！」

ズシャァ！ナルトの背後で音がした。後ろを見たら偽サンジから出ている闇のオーラがナルトの腹を貫いていた。
「が・・・あぁっ・・・！」
「ナルト！」
ここにいる全員がナルトの名を叫んだ。サクラは急いでナルトの元へ駆けつけ治療を始めた。
「・・・先生。今から全力で行きます！下がっていてください！」
一護は斬月を前に構え霊力を放った。
「うおおおおおおお！卍！解！天鎖斬月！」
すざましい砂煙が舞った。そして中からは一護の姿が見えてきた。刀は小さくなっていて衣装も変わっていた。だがどこからか威圧が感じられた。
「はん？姿が変わったからってこの俺に」
シュッ！偽サンジの背後から音がした。一護が瞬間移動で背後に移動していたのだ。しまったと思って背後を見ようとしたが一護がより早く刀を切り上げていた。偽サンジは空に舞った、一護はそのまま追撃を行った。
「喰らえ！月牙天衝！」
一護の刀から黒く、巨大な刃が放たれた。偽サンジはよけようとしたが空中での制御が効かなく、そのまま斬撃を食らった。

「にゃ！にゃにゃにゃ！（え、今とんでもない事になっている！）」
三千院家にて、ヒナギクボディのサンジとチョッパーとナミが今の状況をヒナギクに伝えに来たのだ。
「ああ、今先生達が探しているんだけど・・・。」
「今さっき唯に携帯で連絡したんだけど１Ｚの一護が偽物のサンジ君と戦ってるみたい。」
「にゃ・・・にゃあ（そうなの・・・で、サンジの方は？）。」
「ああ、話によるとかなりの大怪我みたいだけど普通に動いている」
「大怪我・・・？おい！じゃあ俺が元に戻ったら・・・」

サンジはその後を考えた。で、すぐさま学院へ向かって走って行った。
「おい、サンジ！」
「にゃ！にゃ！にゃぁぁぁぁぁぁぁ！（私も連れてってーーーー！）」
叫ぶ猫ヒナを連れチョッパーとナミも学院へ向かって行った。

砂煙が待っている、中からは卍解した一護が立っていた。
「はぁ・・・はぁ・・・これでおしまいか・・・。」
一護がこう呟いた。しかし、黒いオーラが一護の体を囲んでいた。
「な！何だこ」
一護が振りほどこうとしたが黒いオーラは彼を強く締め付けた。
「グアアアアアアアア！」
「くくく・・・一瞬の油断が命取りになったな。」
傷だらけだが偽サンジが黒いオーラを操り一護を反撃していた。
「ぐ・・・くそ・・・」
「ヒヒヒ、くれでもくらェェェェェ！」
黒いオーラはさらに強く一護を締め付けた。体中からバキバキと音がしている。一護は体中の骨が折れている事を察した。
「ちっ・・・ぐふぅ！・・・あぁ・・・」
一護は意識を失いそうになった。卍解はいつの間にか解けていた。それは一護の体力の限界を示しているのもと同じだあった。
「止めグフォ！」
ここでルイージのファイアパンチが偽サンジの顔に命中した。偽サンジは地面にたたきつけられ体をひねらせながら宙を舞った。その後、急いで一護の元へ駆けて行った。
「おい！大丈夫か！」
「ぐぅ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
「こりゃやばいな。」
ルイージは携帯を取り出した。

「クッパ！銀時先生！少しばかりお任せします！」
「おう！」
銀時とクッパは偽サンジに立ち向かった。クッパは偽サンジが立ち上がる前に火炎弾を放った。火炎弾は偽サンジに命中した。続いて銀時の蹴りが腹部に命中し上空へブッ飛ばされた。
「グアアアア！」
「よし！一気に決めるぞ！」
クッパは息を吸い連続で火炎弾を放った。
「ヤベ！」
上空に上がりうまく火炎弾をよけれない。それでも何とか空中制御しようとしたが頭上には銀時がいた。
「オラァァァァァァァァ！」
雄たけびとともに銀時は偽サンジを叩き落とした。下からは火炎弾。偽サンジはモロに火炎弾を食らった。
「グハァ！」
「ふー、これで決まっただろ。」
「そうだな。」
ここで電話をし終えたルイージがやって来た。
「んだよ、もう終わったのか？」
「そうみたいだな。」
「まぁ、こんなに真っ黒けじゃーなー。」
ルイージは真っ黒けの偽サンジを見た。

その後、ルイージが呼びだしたピーチとディジーにより一護とナルトは病院へ入院することとなったが、サクラの治療のおかげでかなり回復していた。そして猫ヒナとヒナサンジが庭に到着し銀時の方へ集まったが、ヒナサンジだけは自分の体の方へ向かって行った。
「お・・・俺の・・・俺の体ァァァァァァ！」
「おい、嘆いている暇はねーぞ。どうやって元に戻せば」
「私に任せてください。」

ここで伊澄が到着した。
「伊澄。」
「今からの事は私にお任せ下さい。そもそも・・・」
伊澄は真っ黒けの偽サンジの方を見た。
「この悪霊は私の古い先祖が封印したものです。」
「こいつが？」
「ええ。かなりたちの悪い悪霊と言う理由で封印の瓶に封印されたのですが」
「え？あの瓶の事。」
ここで偶然通りかかった太子が声を上げた。
「あ、バカ太子。」
「コラ～誰が馬鹿だ～私は摂政だ～！」
「この世界で摂政もクソもあるか。」
「で、何で太子先生がこの瓶の話を知っているんです？」
「あ、いや。実は・・・。」

数日前。
「ひ～妹子に法隆寺できてるって二度目の手紙を出したのに結局法隆寺が完成してなかったよチクショ～。」
泣きながら太子は走っていた。どうやらまだ法隆寺が完成していなかったらしい。
「チクショ～いい小屋無いかな～いいこ・・・お！」
彼が目につけたのは何も変哲のない小屋。バカ太子はその小屋の中に入って行った。
「ひ～何だよここ～何かが出そ」
ここで何かに足を引っ掛けこけてしまった。それを手にしたら封と札が書かれた瓶だった。
「ん？何が入ってるんだ？」
太子は札をはがし瓶のふたを開けてしまった。中からは煙が上がった。

「ひぃぃぃぃ！何これ？何だよこれ～？」
（ふっふっふ。封印を解いてくれてありがとよ。）
「ど・・・どうもいたしまして～。」
（じゃあワシは大暴れするか！）
どこからか暴風が吹き荒れ煙は晴れて行った。そんな中太子はあまりの恐さで気絶していた。

「という事なんだ。」
「ねぇ・・・よーく考えると今回の事件もお前のせいじゃね！」
銀時の一言で皆気付いた。今回の猫ヒナ事件はこのバカ太子の行動が原因だってことを。
「え？何かあったの？ねぇ・・・何で皆怖い顔してんの？」
銀時は息を吸いこう叫んだ。
「こぉんの大バカ野郎がァァァ

その後、伊澄は地面に魔法陣らしき紋章を描いた。で、伊澄が何かの呪文を唱え始め、魔法陣がそれに反応するかのように光出した。そして、この時ヒナギクは自分の意識が一瞬の間飛んだように感じた。そして気を失った。

「う・・・ん・・・・」

「お。気がついたか！」

チョッパーの声が聞こえた。目を開けたらそこにはチョッパーと銀時、そしてクラスメイト達が立っていた。

「皆・・・」

「ヒナさん！無事でしたか！」

ここで西沢の声が聞こえた。隣にはハヤテとナギもいた。

「歩・・・」

「どうだ？久しぶりの自分の体は？」

銀時にこう言われヒナギクは自分の手を見た。それは正真正銘自分の腕だった。

「もしかして・・・元の体に・・・・。」

「そうだ。よかったな。」

ヒナギクは泣きそうになった。これでようやく今回の事件が終わったのだ。泣きそうになったヒナギクをクラスメイト達が励ましてくれた。だがサンジの方は。

「・・・・・・・・・・・・・」

「さ・・・サンジ君？何で包帯グルグル・・・」

ここでヒナギクは気付いた。今さっきの戦いでサンジの体はボロボロになっていたのだ。で、あのダメージがそのまま本物サンジに受けづいたのだ。

「・・・・・・・何で俺がこんな目に。」

こうサンジは呟いた。

一方封印された呪い猫は。

『ぐぞ～また封印された～』
瓶の中で呪い猫は嘆いていた。だが隣に違和感があった、そこにいたのは・・・。
『ヒ～ン。何で私も封印されるんだ～。』
そこには縄できつく縛られ呪い猫と同じように封印された太子の姿があった。

第２７話：（猫ヒナ編）最後の最後で意外な奴が活躍する（後書き）

おまけコーナー

作者「何やかんだで５００００アクセスを突破しました！応援ありがとうございます！」

パラガス「これからもこの作者をお願い致します。」

闇「また変なことをするかもしれませんがその時は軽くスルーしてください。」

今までのあらすじ

イカ娘対タコ男（フリーザ様）

フリーザ「許さんぞ虫けらどもォォォォ！このフリーザ様が直々に木端微塵に」

銀八「ブロリー、やっていいぞ。」

ブロリー「おう。」

ポーピー

フリーザ「な・・・何だ！この戦闘力ｈ」

バキュゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！

バッコォォォォォォォォォォン！

デデーン！！

フリーザ「オギャアアア

ブロリー「な・・・何て奴だぁ・・・。」

ドナルド「うん？これはイカ墨だな。」

銀八「イカ墨・・・何だ、ただのイカ墨か。」

イカ娘「ただのイカ墨じゃないでゲソ！このイカ墨は」

科学者A「何だあの子、口からイカ墨だと！」

科学者B「珍しい！すみません！あなた方はその少女の知り合いですか！」

全員「いや、全然。」

科学者A「じゃあ連れてっていいですか！」

全員「どうぞどうぞ。」

イカ娘「ええええええ！」

科学者A「ありがとうございます！」

銀八「いいえいいえ、さっさと連れ帰ってくださーい。」

イカ娘「ええええええええええ！それはないでゲソ！何でこんな展開」

科学者B「コラ！暴れるな！」

イカ娘「ウワァァァァァァァァ！」

バタン、ブーーーーー・・・・・

銀八「・・・さて、バカンスの続きと行きましょうか。」

くだらないおまけ物語、これにて終了。

第２８話：雪は食べれない（前書き）

作者「何で静岡には雪降らないんだろう。」

一方通行「知るか。」

闇「知りません。」

ＯＰ：バリバリ最強Ｎｏ１　ぬ～べ～出ないけど

第２８話：雪は食べれない

ある寒い冬の日、混沌学院では雪祭りが開催されていた。一部の生徒と先生が雪を利用して雪の造形を作っているのだ。その祭りにはもちろん２Ｚの面々も参加していた。

「うわ～皆張り切ってるな～。」

新八は思わず声を出した。校門をくぐったらそこにはあらゆる造形が作られていた。オリジナルの作品、どっかで見た事のあるような作品、シンプルな形の作品などいろいろあった。で、新八は銀時と神楽とルフィと悟空の姿を見つけた。

「あ、銀さんも参加してるんですか？」

「そうだ。たまにゃーこう言うのもいいかと思ってな。」

と言いながら銀時は柱らしきものを作っていた。

「何作ってるんですか？」

「見りゃー分かるよ。」

「銀さーん！こっちは作り終えたぜー！」

「準備万端アル！」

向こうの方から神楽達の声が聞こえた。

「おーう！こっちも作り終えそうだから、それ持ってこーい！」

銀時は神楽達に向かってこう叫んだ。で、神楽達は球体に固めた雪を持ってきた。

「よーし、後でこれをこの柱の両端に付けれ」

「待たんかいィィィィィィ！」

新八はシャウトしながら柱を折った。

「アンタら何卑猥なもの作ろうとしてんだよ！」

「何が卑猥だよ。俺らが作ろうとしてたのはなー、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だよ。」

「何だよその大砲！」

「オメー、あれだよー。この大砲はなー・・・かの某独裁者が秘密

裏に創作していた凶悪の秘密兵器」
「かの某独裁者って誰だよ？」
「ここじゃあ言えない人物だ。」
「あ・・そう。」
新八は呆れて他の所へ行こうとした。そこにハヤテが声をかけてきた。
「あ、新八さん。」
「あれ？ハヤテさん達も参加してるの？」
「ええ。実は三千院家の総力で作品を作っています。」
ハヤテが指をさした方向を新八は見て見た。そこには座って指示をしているナギと造形を一生懸命捜索中の三千院家ＳＰの皆さんが見えた。
「で、何作ってるの？」
新八が質問をしたらハヤテは何か渡した。
「何ですこれ？」
「設計書です。」
新八が開いてみて見たら絶句した。描かれていた絵はハヤテとナギだったが何て言うか・・・その・・・あの・・・かなり・・・かなりエロチックだったのだ。
「・・・これ・・・マジで作ろうとしてるの？」
「ええ。この作品は僕とお嬢様の愛をイメージして作られていますから。」
「だってこれ・・・軽く１８禁レベルじゃね？この設計。」
「いいじゃないですか。」
「よくねーよ！」
呆れた新八がシャウトした瞬間だった。
「お、新八君も来ていたのか。」
背後から桂が話しかけてきたのだ。
「桂さん、まさかあなたも何か作ってるんですか？」
「まあな。」

ここで新八は嫌な予感がした。あの桂が作るものといったらロクなもんじゃない。と思っていた。で、新八は桂に案内され桂の作品の前に来ていた。
「これだ。」
桂が見せるのは巨大なエリザベスの像。モデルがアレなのだがまぁ作品としては卑猥兵器を作ろうとした銀時達や１８禁作品を作ろうとしているハヤテとナギよりはましだった。
「どうだ？すごいだろ？」
「まぁ銀さんやハヤテさんの奴よりはましですね。」
「そう言えば先生達も参加しているのか？」
「はい。あそこで卑猥兵器を作っています。」
今度は新八に案内され桂は銀時の元へ向かった。
「おう、ヅラか。オメーも参加してたのか。」
「ヅラじゃありません。桂です。それより・・・」
桂は銀時達が作っているネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を見た。
「おっ、これはネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲じゃありませんか。完成度たけーなオイ。」
「え、知ってんのこの兵器！」
「ああ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲は某白馬に取り付けられていたが結局は敵方であるジークナンダラは白い魔王である某魔法少女の一撃によってあっさり負けてしまい結局は使われなかったかわいそうな平気だ。ちなみに２Ｇのアムロや２Ｎのなのはは関係ないみたいだ。」
「いや、関係ありそうでしたよ。」
「んな事よりヅラは何作ってんだ？」
銀時の問いかけを聞いて桂は新八と同じように銀時にエリザベスを作っているって説明した。
「オイオイ、そんなん作るつもりかよ。ぜってー笑われるぜ。」
「アンタも人の事言えねーだろうが。」

新八が冷たくツッコミをした。で、他の所へ行こうと歩き始めた。

一方校舎裏にて。

「うわ～結構にぎわってるね～。」

「そうだな。」

「だって年に一回の祭りだもんな～。」

「まぁこの学院は何回も祭りを開いてるけどね。」

２Ｇのキラ達がモビルスーツで登校してきたのだ。隣にはアスランが操るインフニットジャスティス。その隣にはシンが操るインパルスがいた。キラが学院を確認すると上空へ飛び向きを調整しながらモビルスーツ専用の駐車場へ向かって行った。

雪祭り会場にて、卑猥なものを作っている銀時組とエロティックなものを作っているハヤナギ。そしてここでもエリザベスの雪像という混沌なものを作っているヅラの他にも２Ｚの生徒達が祭りに参加していた。

「おおお！すげーなむぎ！」

「すごくリアルに出来てるね！」

唯と律は紬が作っている城みたいなものを見て感動している。で、その完成度がとんでもなく高いのだ。その様子を見ている澪と梓だが後ろで何かの気配を感じ後ろを見た。で、そこにはダンボールかぶったスネーク先生が立っていた。

「何やってるんですかスネーク先生？」

「！」（もちろんあの効果音付き）

「だから何やってるんですか？」

澪がダンボールを開けたらそこにはＣ４爆弾を持っているスネークがいた。

「あ・・・いや・・・それはその・・・」

「もしかしてその爆弾で優勝できそうな人の作品を破壊」

ここでスネークは声をあげて倒れた。続いてスネークのトランシ

ーバーからオタコン先生の声が聞こえた。
『スネーク、どうしたんだい？スネーク、スネェェェ

「ああ。優勝間違いなしだな。」
「お、すごいもん作ってるなー。」
向こうの方から近藤が現れた。
「あ、近藤さん。」
「もしかしたアンタも参加しているのか？」
「ああ、風紀委員総員でな。あそこに見えるのが俺達の作品だ。」
近藤が指さす方向には両手を上げポーズをとっているかなりリアリティな土方雪像だった。
「す・・・スゲー！」
「アレ土方だよな。すごく似ているぞ。」
「そうだろ？そういえば沖田の奴がやけに張り切ってたなー。」
その台詞を聞いたロイドとクラウドは嫌な予感がした。あの沖田が張り切る？まさか変なものも作ってねーだろーなー？と思った。二人のその予感は当たってしまった。ロイドが近くへ行ってみて見たらその雪像は全裸だった。
「オイィィィィィィィ！何だよこれ？やり過ぎだろ！」
「いや・・・あの・・・作ったの沖田だし・・・」
「あ、近藤さん。そろそろ完成ですぜぃ。」
雪像の方からリヤカーを引いて沖田が歩いてきた。リヤカーの中には卑猥なものが入っていた。
「オイ！何だよこれ！ってか何作ってんだよお前！」
「何って・・・これは土方さんのマダオですぜぃ。」
「何だよマダオって！」
「『まるでダンディなお稲荷さん』の略です。」
「略すな！」
ロイドがツッコミをした後後ろの方から土方の叫び声が聞こえてきた。
「何作ってんだ沖田ァァァァァァァァァァ！」
「あ、土方さん。どうですか？この芸術。」
「どこが芸術だぁぁぁぁぁぁ！こんな卑猥なもんが芸術と呼べるか

アアアアア！」
「いやーだって先生の方も卑猥なもん作ってるしハヤナギの方もエロいもん作ってますぜ。」
「だからってオメーも作るなよ！ってか俺をモデルにするな！」
沖田と土方の口喧嘩が始まった。その様子を見てロイドは呆れていた。

「おし、そろそろ完成するな。」
「そうだなー。」
銀時達が見上げているのは最終卑猥兵器ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲である。
「いやー色々と苦労したなー。」
「ああ。だが今となってはいい思い出だ。」
んな事を呟いていたら後ろからスネークとオタコンがやって来た。
「おう、銀時先生。」
「君たちも参加していたのか。」
「ああ。どうだ？これ。」
「すごいな。これってあのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だろ？完成度たけーなオイ。」
「そうだろ？新八の奴が作るなって怒ってたなー。」
「そうかな？以前メタルギアを作った時このネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲をつけようとした開発者が皆から批判を食らってしばらく来なくなったって事件があったけど・・・。」
「まぁ形はあれだが・・・兵器としてはレールガンを超えるからなー。」
「でもよー、新八がツッコミそうな作品はいくらでもあるだろー。」
銀時は周りを見て見た。ハヤナギは１８禁作品を作っていて沖田の方は土方と喧嘩している。他にも黒子が御坂を勝手にモデルにした何かヤバい作品作ってるし、２Ｎの海馬は自分の雪像を作ってい

るし（しかもやけにかっこいい）、ヒナギクの方はアテネ、西沢と協力してハヤテ（ほぼ全裸）の銅像を作っているし、コレットはあいかわらずドジで他の人の作品を破壊するし、マルタはエミルにお姫様だっこしている自分を作っているし、さっちゃんはなぜか半裸で雪の中に入ってるし、何かもう一般公開したらヤバいんじゃね？というレベルな光景が繰り広げられていた。そんな中誰よりも目立つ作品が銀時の目に入った。

「ありゃ・・・ディスティニーガンダム？」

目に映ったのは雪で作られたディスティニーガンダム。誰が作ったか銀時とルフィと悟空はその場に行ってみた。

「ひゃ～ひゃっひゃ～！いつ見てもすごい完成度なのじゃ～い！」

「あんたは・・・元校長。」

そこにいたのは小学部の校長であった元校長である。

「お、銀髪か。お前も参加してたのか？いや～残念じゃのう。優勝はこのワガハイじゃ～い！」

「おいおい、んだよこれ。完成度たけーなオイ。」

銀時はディスティニーを見た。細かい所をしっかりと再現していて細部までちゃんとしっかり雪で作っていた。

「しっかしすげーなー。」

「シンからディスティニーガンダムを盗んで雪で固めただけじゃねーの？」

（ギク。）

「そういえばあいつこの前ディスティニーガンダムが盗まれたって言ってたなー。」

（ギクギク。）

「まだ見つかってないんだろ？」

「そうだな。まだ何も言ってないし。」

銀時達の会話を聞いていて元校長は冷や汗をかいていた。そこにキラ達がやって来た。

「あ、銀時先生。」

「オメーらか。見ろよこのディスティニー。」
「すごいですねー。」
「ははは、俺の盗まれたディスティニーとそっくりだ。」
（ギクギクギク。）
皆が談笑している隙に元校長はなぜか後ろへ下がって行った。そんな中。
「何やってんのよ黒子ォォォォォォォ！」
怒りの御坂がレールガンを放ったのだ。レールガンは他の作品を貫通していった。
「何やってんだ御坂ァ！雪像が倒れるだろうがァ！」
沖田の怒声が聞こえた。どうやら雪像土方の足がレールガンでかけたみたいなのだ。
「いいぞ御坂！このままこの像をブッ倒せ！」
「その前に黒子をとっちめないと！」
御坂はまたレールガンを乱射し始めた。で、また別の方では。
「いやー出来てきましたねー。」
「そうだなー。」
ハヤテとナギは段々と出来始めた自分たちの（ピーーーーーーーーー！）を見ていた。
「これで優勝確実だな。」
「そうですね。」
と言っていた。完成しつつあるハヤナギの像は（ピーーーーー！）で（ピーーーー！）になっていて（ピーーーーー！）なものでありさらには（ピーーーーーーーーー！）であった。この作品を見て通る人皆ビックリしていた。色んな意味で。で、ヅラの方は。
「ふぅ・・・完成だ！」
ヅラが見上げる先にはかなり完成度が高いエリザベスの雪像。これをみてヅラはかなり上機嫌だった。
「ハッハッハー！これで優勝は」
その時、御坂のレールガンが雪像エリザベスの額をぶち抜いたの

だ。
「アアアアアアアアアアアアアア！」
「待ちなさい黒子ォォォォ！」
走って来た御坂がさらにレールガンを放ち雪像に全て命中した。
哀れな形となった雪像エリザベスは音もなく崩れていった。
「エリザベスゥゥゥゥゥゥゥゥ！」
ヅラは雪像の残骸の所に歩より膝をついた。
「そんな・・・嘘だろ？・・・何でこんなことが・・・・・・」
その後、涙目のヅラは両手に爆弾を持ちこう叫んだ。
「天誅ゥゥゥゥゥゥゥゥ

「おい・・・これもしかして・・・・。」
その後、ディスティニーの周りの雪が吹き飛ばされ中から本物のディスティニーが現れたのだ。
「ほ・・・本物だ！」
「あやしいと思ったら・・・あの人が盗んでいたのか！」
『くぅ～ばれてしまってはしょうがない。ここで散ってもらうのじゃ～い！』
元校長はビームライフルを発射した。キラ達はなんとかよ出ながら自分達のモビルスーツの元へ向かって行った。
『くっ、逃げたか。まぁいい。ワガハイはこのままとんずら』
『そうはさせるか！』
後ろの方で声がした。元校長がコクピットから確認したら後ろにはストライクフリーダムとインフニットジャスティスがいた。
『逃がさないぞ！』
『・・・フッフッフ。ワガハイに挑んだ事を後悔させてやるのじゃい。』
元校長は何かのボタンを押した。その後、ディスティニーの股間部分が開き中から何か現れた。
『こうなる事を悟っていたのが正解じゃい！いくぞ！新兵器『ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲』！』
「オイィィィ！何とんでもない所につけてんだよォォォォ！」
丁度その様子を見ていた新八がツッコミをした。
『くたばれェェェェ！』
元校長はネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲から巨大なビームを発射した。巨大ビームはストライクフリーダムに命中し、ストライクフリーダムは撃墜された。
『キラァァァァァァァ！』
「キラァァァァァァァァァ！」
アスランとシンが叫んだ。
『ダーハッハー！ワガハイに挑んだのが運のつきなのじゃーい！』

「くそう・・・」
「シンさん！」
新八はシンの所に駆け付けた。
「新八！丁度いい所に、キラを助けに行かないと！」
「はい！すぐにいきまふぇ！」
ここで黒子が走って来て新八に当たった。新八は転倒し雪にうもった。さらに後ろから土方やら沖田やら色んな人物が新八の上を走って行った。
「お～い・・・大丈夫か～？」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・誰かァァァァァ！助けてくれェェェェェェェ！」
祭り会場の中心でシンは叫んだ。

その後、祭りはどうなったかというと・・・。
「う・・ん・・・あれ？ここは・・・」
「あ、新八！気がついたか！」
「シンさん・・・祭りはどうなった・・・」
新八は辺りを見回した。その光景は崩れ去った作品が多々ありその中には気絶している人がたくさん倒れていた。他にもディスティーとインフニットジャスティスの残骸がありその上ではアスランと元校長が殴り合いをしていた。
「あ、皆無事だったんだ。」
「キラさん！」
「キラ・・・」
新八とシンは絶句した。キラの姿は巨大なタンコブが頭に出来ていてパンツ一丁で体のいたるところに軽いやけどの跡があったのだ。
「だ・・・大丈夫か？」
「ああ。少し寒いけどね。」
こんな光景を見て新八は腹の奥からこう叫んだ。
「何だこのオチィィィィィィィ！」

第２８話：雪は食べれない（後書き）

おまけコーナー

作者「どうしよっかな～。」

銀八「どうしたんだ？」

作者「猫ヒナ編の後書きでノリでイカ娘出したんだけど・・・結構反響があってね～。」

梓「確かに。」

作者「俺さ～、実はイカ娘知ってるけど・・・マンガとアニメ見たことねーんだよな～。」

パラガス「じゃあどうやって知ったんですか？」

作者「高校の時の友達とカラオケ行って友人が歌ってた。それで知った。」

パラガス「そうですか。」

ブロリー「じゃあこれからマンガとか買うのかぁ？」

作者「・・・中古で売ってたら。」

銀八「いや、新品で買えよ！」

ＥＤ：メタルギアソリッド１のＥＤテーマ　でお願いします。

第２９話：皆の前でアイデアを話すのは少し恥ずかしい（前書き）

一方通行「オメー、ツイッターでマイソロ３のことしか言ってねーじゃん。」

作者「それが何か？」

当麻「もしマイソロ３買ったらそればっかやってて小説の執筆が」

作者「今回のＯＰは『カルマ』でお願いします。」

一方通行「おい！話を途中でやめるな！」

第２９話：皆の前でアイデアを話すのは少し恥ずかしい

とある放課後、風紀委員室に集まる者がいた。そこには風紀委員長である近藤、副委員長の土方。そして近藤の隣には沖田が座っていた。彼らの前には同じく風紀委員で２Ｔのルークとティア。２Ｎ唯一の良心であり唯の幼馴染の和が座っていた。

「じゃあこれから特別会議を始める。」

近藤がこう言った後後ろから何かの箱を取り出した。それに続いてルークも後ろから箱を取り出した。実は二週間前、彼らは生徒達に次の祭りの内容を応募したのだ。で、今からその案を調べるのだ。

「うーん・・・結構案があるな。」

「そうだな、じゃあ近藤さんの方から箱の中を出してくれ。」

「おう。」

近藤が箱の中を出したら折りたたんだ紙がたくさん出てきた。その後、彼らは協力して案を見始めた。

「えーっとこれは・・・おっ、ルフィのアイデアじゃねーか。」

「ルフィ？どうせロクなアイデアださねーだろ？どうせ肉祭りだかそんなんだと思うぜ。」

「まぁ、見て見ないと分からないからな。」

と言って近藤はルフィの案を見た。そこには『肉祭り』と書かれていた。

「・・・トシ・・・正解だ。」

「ははは・・・あっ、これも近藤さんのクラスの奴じゃねーか？」

ルークがこう言った後一枚の紙を近藤に見せた。名前を見たら『２Ｚ：寿吹紬』と書かれていた。

「へぇーむぎも何か提案があるのか・・・どれどれ？」

近藤が紬の提案が書かれた紙を見た。そこには『愛の逃走劇、最強バカップル決定戦！』と書かれていた。

「はは・・・あいつらしいや・・・」
「ん？これって・・・おい、またアンタのクラスの奴だぜ。」
ルークが一枚の紙を渡した。そこにも『２Ｚ：寿吹紬』と書かれていた。内容は同じだった。近藤がほかの紙を見たら紬の提案がいくつもあった。
「オイオイ、どんだけやりたいんだよ、この企画。」
「でも、確かルールがあったわね。」
和がこう言った。彼女が言うルールとは提案を出す場合は１人につき１回だけなのだ。
「じゃあむぎの書いた提案は完全に無効」
ザクッ！何かが刺さる音がした。その後、近藤が倒れたのだ。
「近藤さん！」
土方と沖田とルークが近藤に寄った。土方が調べたら近藤の後頭部に鋼鉄のたくあんが刺さっていたのだ。
「おい・・・これ・・・まさか・・・。」
「いや、違う。絶対にあり得ん。」
しばらくの間沈黙が流れた。もし下手な事を言えばたくあんの餌食となるからだ。だがここでルークが立ちあがった。
「皆！脅しが何だ！こういうのはルールを守らない方が悪いじゃないか！だからこの紬って人の案は没」
こう言ったが彼もまたたくあんの犠牲となった。音もなくたくあんはルークの額に刺さり、ルークは倒れた。
「・・・仕方ねぇ。じゃあここは俺の案のマヨネーズ祭り」
土方はこう言ったが結局は頭上にたくあんが命中し、近藤やルークと同じように倒れた。
「・・・仕方ねぇ。こうなったら俺が考えた土方虐殺祭り」
沖田も同じようにこう言ったがまぁ結局は後頭部にたくあんが刺さり土方達と同じように倒れた。男子達が全員倒れて残ったティアと和は呟いた。
「ぜ・・・全滅した。」

「っつーわけで、今からうちのクラスで出場するバカップルを決めようと思う。つーわけでハヤテとナギ、ロイドとコレット、エミルとマルタ。オメーら出ろ。」
「はい！」
「ちょっと待てェェェ

あとちなみに近藤、土方、沖田、ルークはしばらく欠席でした。

数日後、全生徒が校庭に集まっていた。校門の前には『愛の逃走劇、最強バカップル決定戦！』と書かれていた。グラウンドには参加する男女、もといバカップルどもが集まっていた。ハヤテナギはもちろん、同じクラスのロイドとコレット、エミルとマルタ。そして巧と文乃、千世、希。悠二とシャナ、吉田。他のクラスからは２Ｕのリクとニノ。２Ｔのカイルとリアラ、シングとコハク。などなどバカップルが集まっていた。

「レディースエーンドジェントルメン！お待たせいたしましたぁ！今から混沌学院主催、会いの逃走劇、最強バカップル決定戦の始まり始まりィィィィ！」

「司会は私２Ｔのジェイドと。」

「２Ｚのゼロスでお送りしま～す！そして解説者には発案者である２Ｚの寿吹紬さんでーーーす！」

「よろしくお願いしまーす。」

ゼロスとジェイドのコンビが軽く競技の説明をした。その後、バカップル達がスタートラインに立ち準備運動を始めた。

「皆さん、準備はいいですか？」

司会のゼロスがバカップル達にこう言った。そして、審判であるスネークが少し間を開けてこう叫んだ。

「位置について！」

この掛け声でバカップル達は身構えた。

「よーい・・・ドン！」

スネークがスタートの合図をした。これに合わせてバカップル達が走り始めた！

「おい、始まったみたいだな。」

「ああ。」

「俺達もそろそろ準備を始めないとな。」

どこかの舞台裏、そこにはなぜかサンジと星がいた。
「くくく・・・リクよ。ニノさんの目の前で恥かかせてやるぜぇ～。」
「その意気込みだ、星。」

また別の方では。
「ヒナさん、始まりましたよ。」
「ええ。じゃあこっちも・・・支度をしないとね。」
「はい。」
サンジ達とは別の所の舞台裏、ここにヒナギクと西沢とアテネが潜んでいた。他にも舞台裏で潜んでいる人物達がいた。。

次回！ついに始まった『愛の逃走劇、最強バカップル決定戦！』、バカップル達に立ちはだかる数々の難問、そして難敵。彼らはこれらの難関を乗り越えてゴールへたどりつけるか？そしてどのバカップルが一体最強なのか？次回、混沌学院『バカップルって響きだけで何かイラッとくる』どうぞご期待！
エンディングまで泣くんじゃない。
「え？何この名言？この話・・・ラストに感動シーンでもあるの？」
いや、ギャグですよ。
「おい！」

第２９話：皆の前でアイデアを話すのは少し恥ずかしい（後書き）

おまけコーナー

作者「いやー、あと１話で混沌学院も３０話」

銀八「何が３０話だよ。」

梓「あなたが持っているパソコン見ましたけど５０話超えてたじゃないですか！」

一方通行「さっさとアップしろよ！」

作者「あ・・・あの～・・・それはちょっと・・・」

ブロリー「さっさとアップしないとお前を殺すぞ！」

作者「脅すな！」

ドナルド「だったら僕が洗脳して」

作者「洗脳するな！あと俺ニコ厨だから効かねーよ！だんだんとアップしていくから楽しみにしていろ！！」

ブロリー「待てない！」

作者「そこは待てよ！頼むから！」

梓「そうですよブロリーさん、気長に待ちましょう。」

ブロリー「・・・そうだな。」

作者「やっと騒動が終わったか・・・ちなみにＥＤは『修羅』です。
ではまた次回お会いしましょう。」

第３０話：バカップルって響きだけで何かイラッとくる（前書き）

作者「ようつべでエンジェルビーツの２話が見つかんねェェェェェ！！」

一方通行「知るかァァァァァァァ！！」

当麻「ってかそれ前書きで言う事じゃねーだろォォォォォォォォ！！」

第３０話：バカップルって響きだけで何かイラッとくる

競技開始から数分後、最初は普通の一本道だったのだが少しして初回の難関『綱渡り』があった。
「な・・・何だこれ？」
「知らないわよ。」
一番で走って来た巧と巧が背中で背負っている文乃、千世、希が最初の難関に着いた。
「とにかくこれを渡れってことでしょ？」
「そうみたいだな。」
「さっさと行きましょ！後ろから後の人達が」
千背がここまで言うと後ろからハヤテとナギがものすごいスピードで追って来た。
「ヤバッ！ハヤテ達だわ！早くしないと！」
「ああ！そうだな・・・でも・・・」
巧は綱の下を見た。下はプールだった。
『あ、いい忘れたけどプールに落ちたら失格なー。』
「始めに言えェェェェェ！」
巧は重要な事を後から言ったゼロスにツッコミをした。その後、巧は慎重に綱を渡り始めた。しばらくしてからプールの下から何か音がした。何だ？と思ったら巧目がけてボールが飛んできた。
「な・・・何だ今の！」
「ちっ、外したか。」
「大丈夫だ！次は俺が行く！」
下から声がしたので下を覗くとそこには別々の小舟に乗ったサンジと星がいた。
「お・・・お前ら！何でそこに！」
「へっへっへー！俺たちゃお邪魔キャラよ！」
「そう言う事だ！ヨロシク！」

と言いながらボールを次々に発射した。
「ギャ～ハッハ～！落ちろ～落ちてしまえェェェ

「お邪魔キャラよ！」
「お邪魔キャラ？何でそんなんやってんだよ！」
「当然だろ？オメーを情けない姿にするためよ！」
星の言葉を聞いてリクのプライドに火がついた。
「早く来いよ～！それとも棄権するか？このヒモ野郎！」
ブチブチブチブチブチ！リクの額が怒りマークで一杯になった。
「ハハハハハハハ！いいだろう！貴様の挑戦を受けよう！」
「かかってこいやー！」
リクはニノをだかえ、綱を渡り始めた。星はリク目がけてボールをどんどん発射するがなかなか当たらない。
「ちっくしょー！当たれよォォォォ！」
「星ィ！そんなに無駄撃ちしたらボールがなくなるぞ！」
サンジが星に向けてこう叫んだ。
「わーってるよ！・・・ってあれ？もうボールがなくなったァァァァァ！」
「はーはっはー！どうやらこの勝負、俺の勝ちのようだな。」
上からリクの笑い声が聞こえた。
「・・・見てろよ。」
星は船から黒い球を取り出した。
「この爆弾でも食らいやがれェェェェェ！」
と言いながら星は爆弾を発射した。
「ハァァァァァ！何やってんだあいつ！」
「リク、しゃがめ！」
ニノに言われた通りリクはしゃがんだ。星の放ったボールはリク達の上を通り過ぎ、サンジの船に命中し爆発した。
「ギャアアアアアアアアア！」
「サンジ！悪い、ミスったァァァァァァ！」
頭を抱える星をほっといてリク達は先に進んだ。
最強バカップル決定戦は最初から波乱の展開を迎えた。最初の綱

渡りで半数のバカップル達が脱落したのだ。で、今の順位は・・・。
1位　ハヤテ&ナギ
2位　ロイド&コレット
3位　エミル&マルタ
4位　カイル&リアラ
5位　シング&コハク
である。5位のシング組の後ろにはリク&ニノが追い上げている。で、少し離れた所に悠二&シャナ&吉田組がいる。彼らもまた綱渡りをクリアした者だ。
『ひゃ～さっすがハヤテ君とナギちゃん。早いね～。』
『そうですね。でもそろそろ次の難関ですよ。』
『おっ、そうだな！いや～この後の展開が気になるな～。』
そんな実況を聞きながらハヤテは走っていた。すぐ後ろからはロイド達がいる、下手したら追い抜かれそうだ。そんな中、彼らの目の前にボブスレーがあった。
「な・・・何だこれ？」
「さぁ？」
ハヤテが近くの看板を見たらそこには『第二の難関、愛のボブスレー』と書かれていた。
「とにかくボブスレーをやれってことだろ？」
「そうみたいですね。」
ハヤテとナギは近くにあったボブスレーを押し出し、滑り出した。ロイドとコレットもハヤテ達の後を追うようにボブスレーを押し出した。

その後、ボブスレーではハヤテ組とロイド組が激闘を繰り広げていた。戦闘はハヤテ組で後を追うようにロイド組が滑走している。その後ろからエミル達も追いかけていた。だが。
「ウワァァァァァ！」
ロイドの叫び声が聞こえた。後ろに座っていたナギがロイドの方

を見たらロイド達が突然現れたジャンプ台を滑ってしまい上空に上がっていたのだ。で、その後ロイド達はコースアウトしてしまった。
「な・・・何だ何だ！」
「おわぁぁぁぁ！」
ナギが唖然としていたら目の前にはいくつものジャンプ台が現れ、さらには多くのトラップが突然と出現した。
『オーホッホ！バカップルの皆さん。私のトラップを見事によけられるかしら？』
ここで突然、女の子の声がスピーカーから響いた。ってかその女の子は小学部の沙都子である。
『はい、という訳でこのボブスレーのコーナーは小学部の沙都子ちゃんの協力で完成しました！』
とまぁその後はゼロスと沙都子のトークが始まるのだがボブスレーをやっているハヤテ達はそれどころじゃなかった。コースも中盤になりそろそろボブスレーゾーンが終わろうとしていたその時だった。
『あ、ここで思い出しましたけどボブスレーゾーンには一つショートカットがあります。ショートカットは中盤にあってうまくいけばあっさりとゴールできるよう設計しました。』
この沙都子の台詞を聞いて後ろのバカップル達はショートカットを探し始めた。だが探すのに夢中でトラップにかかりコースアウト。またはそのままコースアウトなど、脱落者も現れた。
「ハヤテ！私達はショートカットを探さないのか？」
「別にいいです、確実にコースを進みましょう！」
ハヤテ組はこんな会話をした。で、後ろに続くエミル組は。
「エミル、このままハヤテ達に続くの？」
「うん。このまま続いて後から一気に追い返す！」
そんな会話をしていた。そして、段々と出口が見えてきた。最初にハヤテ組がゴールし続いてエミル組がゴールした。彼らはそのまま走り続けた。

『いやー面白くなってきたねー。』
『ええ。今のボブスレーでさらに脱落者も出ましたからね。』
『オーホッホ。私のトラップに敵は無いのですわ！』
『さーて・・・と・・・次の難関は・・・ついにあいつ等の出番か。』
『そうですか。ついに出ますか。』
『フフフ。楽しくなって来たわね。』
『紬ちゃん・・・ホントうれしそうだな。』
とまぁ司会者達は楽しく会話をしていた。

「ついに俺達の出番か。」
「そうですね。」
「大暴れしてやるか・・・。」
「俺も本気を出そう・・・。」
次の難関であるお化け屋敷。その中で謎の人物達が喋っていた・・・。

次回！
多くの脱落者を出しながら進んで行く『愛の逃走劇、最強バカップル決定戦！』次の難関であるお化け屋敷にてハヤテ達を待ち受けるのは誰か？そして優勝は一体誰にわたるのか！次回混沌学院『この大会の難関は初代マリパのミニゲームを元としています』どうぞご期待！
「ねぇ・・・銀さん。この話で僕達に出番はあるんですかね？」
「さぁ。・・・オイ作者。出番よこ」
あ、大丈夫。次辺りで出番が・・・
「うっしゃー！」
「でもロクな役じゃないような気がする。」

第３０話：バカップルって響きだけで何かイラッとくる（後書き）

おまけコーナー

ヒナギク「ねぇ・・・なかなか血桜忍の感想が来ないんだけど・・・」

銀八「誰に言ってるんだ？」

ヒナギク「作者よ。」

ブロリー「というより何普通に後書きに出てるんだぁ？」

パラガス「そうです。」

一方通行「ヤンデレは引っ込めよ。」

ヒナギク「・・・私、ヤンデレじゃないけど。」

一方通行「・・・マジで？」

ヒナギク「マジで。この馬鹿（作者）が馬鹿なことして私のキャラを完全に崩壊しているのよ。」

ブロリー「話変わるけど血桜忍って何だぁ？」

ヒナギク「・・・この作者が書いている私が主人公の小説よ。」

銀八「で、後から出したハヤテとナギの恋愛の方が人気でお前が主

役のやつはなかなか人気が上がらないんだろ？」

ヒナギク「・・・・・・・・・うん。」

銀八「・・・どんなもんか今見てくるから。」

数分後

銀八「シリアスばっかでつまんねぇェェェェェェェェェ！！」

ヒナギク「・・・正宗・・・装備・・・そし・・・テ・・・紅桜・・・装備！！」

銀八「おい、やめろ・・・それは・・・」

ズバァ！

銀八「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

第３１話：この大会の難関は初代マリパのミニゲームを元としています（前書き

作者「バカップル決定戦もこの話で終わります。」

一方通行「やっと終わるか・・・」

作者「ＯＰは・・・大塚愛の『さくらんぼ』・・・でいいか。」

当麻「かなり適当だな・・・アンタ。」

第３１話：この大会の難関は初代マリパのミニゲームを元としています

ボブスレーで多くの脱落者を出した最強バカップル決定戦。そろそろコース終盤であるお化け屋敷が見えてきた。
「お嬢様！そろそろ最後みたいですね！」
「ああ、一気に行くぞ！」
「エミル、あそこで一気に追い上げるよ！」
「任せて！」
上位２位のハヤテ＆ナギとエミル＆マルタはお化け屋敷へ入って行った。
『お化け屋敷へようこそ。』
『ここでは二人で協力してこの難題をクリアして下さい。』
「ゼロス、何で声のトーンが低いんですか？」
『お化け屋敷だからだよ、エミル君。』
『それより皆さん、前を見てください。』
ジェイドに言われた通り前を見るとそこには電球が置いてあった。
『今から皆さんには亡霊たちを倒しながら先にある発電機にこの電球をセットして下さい。』
『ちなみに、亡霊役の奴らはめちゃくちゃ強いんで・・・よろしく・・・。』
こう言った後スピーカーからお化け屋敷でよく流れるようなＢＧＭが流れた。
「・・・まぁ・・・先に行きましょう！」
「しまった！行くよ、マルタ！」
その後、ハヤテ＆ナギとエミル＆マルタの競争が始まったが・・・。しばらくして亡霊らしきものが現れた。戻ろうとしたら背後にも亡霊が二人いた。
「ハーハッハー！ここを通りたければ我らを倒し行けぇい！」

「・・・何やってるんですか先生？」
すぐに正体がばれ、亡霊役の銀時は戸惑った。
「先生？だ・・・誰だそいつは？俺はしらねーぞ。」
「・・・先生。あとで三千院家のシェフに超高級パフェを作ら」
「マジで！」
「・・・・・・やっぱり先生でしたか。」
「・・・ばれちまったらしょうがねー。」
と言った後、銀時は羽織っていた布を取った。それと同時に後ろの二人も布を取った。二人の正体は新八とルイージだった。
「ルイージ先生まで・・・あと新八さんも・・・。」
「しゃーねーだろ？沙都子の奴が張り切って、そんでもって俺らまでも巻き込まれちまったからよー。」
「え？他にもいるんです」
エミルが聞こうとしたがその声は途切れた。別室の方で悲鳴が聞こえたのだ。
「あちゃ～あいつら加減してんのかな？」
「ま・・・まさか・・・」
「そのまさかだ。ネス達もお邪魔の亡霊役として出演中だ。」
「そ・・・そうですか・・・。」
ハヤテ達はなぜか呆れていたが銀時達が戦いの準備をしていた。
「という訳で、俺達も戦いを始めるぞ！」
「はぁ・・・ハヤテ、今は一時休戦して協力して先生達を」
エミルがこう言っている最中にルイージがこっちへ向かって走って来た。
「うわぁ！」
「何とかよけたか・・・だが・・・。」
エミルはルイージのダッシュキックを交わしたがルイージは続いて裏拳を放ってきた。エミルは何とか左腕でガードした。だが予想以上にも一撃が重かったのだ、エミルは少し離れ左腕を握った。
「くぅ・・・つつ・・・」

「エミル、大丈夫！」
「ほ・・・骨に響いた・・・」
「んだよ、これでオシマイか？大したことねーなー。」
ルイージはエミルに向かって挑発をした。エミルは辺りを見回した。そこに丁度西洋鎧が飾ってありそこに握られていた長剣を取った。そして、ルイージに向かって行った。

「グフォ！」
銀時は片膝をついた。近くを見ると新八が気絶して倒れていた。ハヤテとナギはあの残虐非道の奥義、『睡眠虐殺拳』を使ったのだ。今の彼らはただの化け物。周りには殺意のオーラがついていた。
「い・・・一発ネタじゃなかったのかよ・・・あの技・・・。」
「くたばれェェェェェェ！」
ハヤテとナギは両手から巨大な気弾を発射した。
「オイオイオイオイオイ、これヤバいんじゃないの？俺ヤバいんじゃないの？」
何とか立ち上がろうとしたが余りの痛さに体が言う事を聞かない。それでもやっと立ち上がったが気弾は目の前に来たいた。
「ウオォォォォォォォォ！」
銀時は目をつぶった。その直後、何者かが銀時の目の前に現れ気弾を跳ね飛ばした。
「・・・ん？助かったのか・・・俺？」
前を見たらそこには黒いオーラをまとったヒナギクと西沢とアテネだった。
「お・・・オメーら。」
「先生。あの二人は私達に任せてください。」
「あ・・・ああ。俺は新八連れて保健室行ってくる。後は頼んだ。」
こう言った後、足を引きずりながら銀時は気絶した新八を連れて去って行った。
「・・・皆・・・いいわね。」

「ええ。」
「ナギを倒してハヤテを奪う！」
三人はナギに向かって突っ込んで行った。だがそれをハヤテが妨害をした。
「お嬢様を倒す前にこの僕を倒すんだな！」
「そうか・・・だったら・・・半殺しにしてあげるゥゥゥ！」
睡眠虐殺モードのハヤテとヤンデレモードの三人の戦いが始まった。

一方エミル&マルタ対ルイージの方は
「う・・・うぅ・・・。」
「エ・・・ミ・・・ル・・・」
「ふー・・・これでおしまいっと・・・。」
ルイージの前には戦闘不能のエミルとマルタが倒れていた。この時点で二人は脱落した。
「ふぅ、さすが銀さんの教え子だな、少し手間かかったぜ。・・・で肝心の銀さんは・・・。」
ルイージは戦いが過熱しているハヤテ達の方を見た。この時点でルイージは察した、銀時達がコテンパンにやられたと。
「はー・・・おーい、手ぇ貸すかー？」
ルイージがこう聞いたが全く相手にされなあった。もう一回聴いたが結局は同じだ。
「・・・この二人連れて保健室行こ。」
エミルとマルタを背負い、ルイージも去って行った。

「ＰＫサンダー！」
「オヤシロビーム！」
「ウワァァァァァ！」
「あああああああ！」
別室の方ではネス達が大暴れしていた。それによりバカップル達

もどんどん倒れていく。
「く・・・まだだ！喰らえ！斬空天翔剣！」
カイルが秘奥義を出したがカービィの吸い込みで邪魔された。その後、ピカチュウの電光石火でブッ飛ばされ壁にたたきつけられた。
「カイル！」
リアラがカイルの元へ行こうとしたがネスのＰＫサンダーが邪魔をした。杖を持ちネスに立ち向かおうとしたが羽入のオヤシロビームが彼女を襲った。だが間一髪カイルが助けに来てくれた。
「カイル！大丈夫なの？」
「うぅ！・・・少し左肩がいたいけど。」
リアラはカイルを起こした。目の前にはピカチュウとネスが放ったＰＫファイアーが迫っていた。だがカイルのバーンドライブで何とか切り抜けた。
「く・・・なかなかやるピカ。」
「・・・僕達も本気で行きましょう！」
「こっちも負けるか！」
その後、別室の方で５Ｚメンバーとカイル＆リアラの戦いが過熱した。

「いや～すごい展開になってきましたね～。」
「ええ。まさかこんなに続くとは思ってもいませんでした。」
「流石私。今度作者さんに出番増やせって交渉してみようかしら。」
「それは無理だと思う」
ゼロス達が話していると空から何か振って来た。それはボブスレーでコースアウトしたはずのロイド組だった。彼らはそのままゴールした。
「つつつ・・・どこだここ？」
「う～ん・・・あれ？どこ？」
まさかの展開に誰もが口を開けてポカ～ンとしていた。
「・・・ねぇ・・・あれは・・・」

「そうですね。優勝決まりですね！」
「え？優勝？」
「ハイ！そこで競技終了で～す！」
ゼロスの声が空高く響いた。

閉会式。ロイド組は台の上に立っている。後に彼らは奇跡を呼び起こしたバカップルとして有名となった。２Ｚの生徒達は彼らの間ありに集まり胴上げを始めた。
「いやーこれやってよかったねー。」
「同感です。」
そんな事を言うゼロスとジェイドの隣にはうれしそうにカメラでその様子を撮っている紬がいた。

一方、他のバカップル達は。
「喰らえェェェ！」
「当たるかァァァ！」
ハヤナギｖｓチームヤンデレのバトルは辺りを破壊するほど過熱して行った。別室のカイル達は。
「喰らえ！斬！空！天翔剣！」
「いっけー！ＰＫスターストーム！」
「こっちも行くピカ！『ボルテッカー』！」
カイルｖｓネス＆ピカチュウの戦いでも辺りを破壊するほどのバトルを繰り広げられていた。
「あなたさぁ、彼氏が英雄英雄と言ってるけどそろそろ現実に戻したら？」
「カイルは英雄よ。誰が何と言おうともカイルは私の英雄よ。」
「・・・アンタ何言ってるのよ。」
「アンタに言われたくないわよ。アンタショタコン？」
「誰がショタコンよ。私とネスは同い年よ。」
リアラとポーラは女子特有の口喧嘩を繰り広げていた。その様子

を見ている羽入はただあうあう言って慌てているだけであった。

そんな中、保健室にて・・・。

「・・・何でこんな扱いだよ？」

「ええ・・・ってかこんなオチで読者は納得しますか？」

「しらねーよ。」

ベッドの上で包帯グルグルの銀時と新八がこう会話していた。

第３１話：この大会の難関は初代マリパのミニゲームを元としています（後書き

おまけコーナー

作者「いやーこの前５００００アクセス言ったかと思ったらもう６００００いってたよ。」

銀八「なんかスゲーな！もしかして俺のおかげ？」

ブロリー「違う、俺だぁ。」

ドナルド「はっはっは、僕の頑張りのおかげだと思うよ。」

作者「・・・こいつら・・・後書きでしか出番ねーくせに・・・」

ブロリー「何か言ったか？」

作者「いいえ、べっべつに～。」

銀八「でもこれもみんなのおかげだな！ありがとよ！」

作者「・・・いつも応援している皆様、毎度毎度本当にありがとうございます！・・・ちなみに今回のＥＤは『バクチ・ダンサー』です。あと前回のＯＰとＥＤ書き忘れました。すみません。前回のＯＰは『ＧＯＮＧ』、ＥＤは『Ｌｉｓｔｅｎ！』です。また次回会いましょう！！」

第３２話：詩の暗記はかなりしんどい（前書き）

作者「今回の話はいろいろと自信があります。」

一方通行「アンタの自信はあてにならねー。」

作者「・・・ヒデー・・・」

第３２話：詩の暗記はかなりしんどい

ある日の国語の授業、生徒たちはみな机にプリントを出していた。しばらくして教室に銀時が入って来た。
「はいじゃあ宿題の自作の詩を作れ、今日はそれを発表してもらうぞー。」
銀時は以前の授業でオリジナルの詩を書けという課題を出したのだ。で、本日の授業で発表することとなったのだ。
「んじゃあ・・・澪、オメーから発表しろ。」
「え！わわわ・・・私からですか！」
「そうだよ。」
「むむむむ無理です！は・・・恥ずかしい！」
「だったら先生が代わりに言ってやろうか？」
「お・・・お願いします！」
銀時は澪からプリントを受け取り詩の発表をした。
「オホン、じゃあ言うぞ・・・

スゥイート☆タイム

甘い甘い森の中

クマさんとウサギさんが楽しくおしゃべり

川からはリンゴのジュース

・・・・何だこれ？」

「私の詩です、まだ途中ですよね。」

「うん。途中だけど止めるわ。何か・・・・恥ずかしくなってきた。」

「そうですか？私は真面目に頑張って書いたんですけど・・・・。」

「そうなんだ・・・じゃあ次。・・・・神楽か。」

「ハイ！」

神楽は名前を呼ばれたら元気良く返事し、席を立った。

「じゃあ私の詩を発表するアル！」

「おう、じゃあさっさと始めろ。」

「ハイ！

ラーメン　３００円

チャーシューメン　３５０円

ネギラーメン　３２０円

もやしそば　３２０円

坦々麺　４５０円」

「まった。オメーそれ詩じゃなくてお品書きだろ！」

「そうアル！昨日ルフィ達と寄り道したラーメン屋」

「そんな暇あったら詩を考えろォォォォォ！ったく次は・・・・悟空。

」
「オウ！」
悟空も立ちあがった。
「じゃあ早速発表しろ。」
「わかりました！じゃあ発表するぞ！

ハンバーグ　６５０円

チーズハンバーグ　７００円

イタリアンチーズピザ　６８０円」
「オメーもお品書きかよォォォォォォォォ！」
「先生、ラーメン屋じゃねーよ。昨日神楽達とラーメン屋の次に寄ったレストラン」
「どっちにしろ同じようなもんだろうが！はぁ・・・オイルフィ。オメーもまさかメニューの話じゃ」
「んな訳ねーだろ。じゃあ発表するぜ。」
ルフィは立ち上がり、詩を書いたプリントを持った。
「じゃあ言うぜ。

コーヒー　２００円

アイスティー　２００円

オレンジジュース　２００円」
「結局オメーも同じかよォォォォォォ！」

銀時は呆れていた。まさか同じようなネタが連続でやったからだ。
「はぁ・・・次は・・・ヅラ・・・」
悟空の次は混沌王桂小太郎。奴の事だ、どうせまたとんでもない事をしでかすにきまっているってか絶対に奴が真面目に詩を書いても混沌ワールドを繰り広げるだけだ。
「・・・ヅラは飛ばして沖田」
「待って下さいィィィィィ！」
桂の叫び声が聞こえた。その声を聞いた銀時はうなだれていた。
「・・・オメーの事だ、どうせまた変な事書いてんじゃねーのか？」
「失敬な。しっかりと書きましたよ。」
「本当か？」
「そんなに疑うなら今から発表しますよ。

宇宙

宇宙はかなり広い、今地球では火星とか金星とか言ってるけど宇宙にはまだ謎の世界が広がっている。もしかしたらナメック星みたいなのがあるかもしれないしまたはいろんな世界がある。まるで人の体の中のようだ。そういえば前にレントゲンで何か変なものが映ってるかなーって思ったら思ってたのと微妙だった。あとエリザベスもレントゲンをしたんだけど何か変なものが入っていたがまァ気にしなかった。たまにエリザベスから加齢臭がしてきているが最近は気にしていない。今思い出したけどこの前、エリザベスと本屋に行ったらエリザベスが地声で『んだよまたこのアイドルが表紙かよ・・・』って呟いてい」
「ハイ終了ー！」
銀時の飛び蹴りが桂の後頭部に命中した。
「結局こんな展開になったじゃねーかァァァァァァ！オメーは何が書きたいんだよォォォォ！」

「先生！まだ俺の発表は終わってません！これでもまだ序章」
「序章？一体どこまであるんだよ！」
「軽く１０章は超えます！」
「どこのロードだァァァァァァァ！」
銀時は何とかバカを静めて詩の発表を続けた。
「じゃあ沖田。今度はオメーが発表しろ。」
「わかりやした。」
沖田はプリントを持って立ちあがって発表を始めた。
「それじゃあ始めますぜぃ。
くたばれ土方」
「オイ、何だその詩は？」
沖田の詩のタイトルを聞いて土方は怒りの声を上げた。
「土方さん。人の発表の邪魔をしないでくださいよ。」
「それだったらお前は俺の人権を侵すな。」
「人権？マヨネーズ王国の人間はそんなもの存在しないんじゃないんですかぃ？」
「そうかそうか。ってんな訳あるかァァァァァァァァァァ！」
怒った土方は木刀を持って沖田に襲いかかった。沖田の方も木刀を持ち立ち向かった。
「・・・次は・・・ハヤテか。おい、発表し」
「先生！あの二人を止めなくていいんですか？」
新八が不安そうに公ったが銀時は冷静だった。
「いーんだよ。いつもの事だろ？それよりハヤテ、さっさと発表しろ。」
銀時に言われハヤテは席を立った。
「わかりました。
僕のかわいい」
「ちょっと待て。もしかしてその詩の内容って・・・まさかナギメインじゃねーだろーなー？」
「何で分かったんです？」

「やっぱりィィィィィ！オメー原作とキャラが変わり過ぎなんだよ！」
ハヤテの暴走を何とか止めた銀時、これまで数々の暴走が繰り広げてきたので顔には疲労の色が見えた。
「つ・・・次は・・・ナギがよ。どうせハヤテの事を書いたんだろ？」
「なぜわかった！」
「大体予想付くんだよ！・・・で・・・次は・・・マルタ。お前もエミルの事書いたんだろ？」
「その通り！」
「その通りじゃねーよ！オメーらまともな詩作ってねーなー！ったく。次、ゴリラ！早く発表しろ！」
「はい！」
銀時に促されて近藤は元気良く席を立った。
「俺の自信作、聞いてください！
００Ｇ～お妙に愛をこめて～」
と言った瞬間に近藤の後頭部に鉛筆が刺さった。まぁ犯人は察知できるだろう、銀魂ファンの人なら。
「・・・じゃあ次。・・・ゾロ。」
「うす。」
ゾロは軽く返事をし席を立った。
「じゃあ発表してくれ。」
その後、ゾロは軽く息を吸い詩の発表を始めた。

「詩」

そう言って席に座った。
「・・・何今の？今のが詩？」
「そうだよ。」
不審に思った銀時はゾロが書いた詩の内容を見た。そこには『詩』

と書かれていただけだった。
「・・・オメー、これ詩じゃねーだろ。」
「詩ですよ。だって先生詩を書けって言ってたじゃねーか。」
「・・・だから『詩』っつー文字を書いたのか。」
「どうだ？とんちが効いてるだろ？」
「ハッハッハ。書き直しじゃボケェェ
「ハ～・・・ハ～・・・次は・・・サンジか。飛ばしてクラウド」
「ちょっと待てェェェ
「ちょっと待てェェェ
ここでサンジが叫んだ。
「何で俺を飛ばすんですか！」
「たりめーだろ。オメーの場合ピー音が鳴るだろうが。」
「んな訳ないですよ！」
「じゃあ発表しろよ。」
「そこまで言うんならやってやりますよ！始めるぞ。
（ピーーーーーーーーーーー！）」
「結局こんな展開じゃねーかァァァ
「ハッハッハ。書き直しじゃボケェェ
銀時は怒声を散らしながらゾロのプリントを破り捨てた。
銀時が言った後、ヒナギクが席を立った。
「分かりました。聞いてください。
ピー音を出したサンジに向かって銀時は飛び蹴りを放った。

その後、数々の混沌な詩を聞いて銀時は疲れとイライラが頂点に達していた。誰もがまともな詩を作ってないのだ。クラウドはまともな詩かと思ったら空気扱いを自虐している詩だったし黒子は御坂の事を書いていて案の定電撃を食らうし土方はマヨネーズだし東城は下ネタだしロイドは宿題忘れているしコレットはなぜか俳句を発表するしヤムチャはなぜか爆発するしもうめちゃくちゃだった。
「あーもう！一体いつになったらまともな詩を発表するんだよ！・・・次・・・ヒナギクか。頼むぜ。もう俺へとへとなんだよ・・・。」

恋

夜の空、それを見ると思いだす

始めての恋を思いだす

いつかは言いたい

いつかは届けたい

この気持ち

だけどあなたは別の人を愛している

そしてその人と付き合っている

何で神様は残酷なの？

ドウシテ！ドウシテワタシダケコンナメニアウノ！

オシエテ！ワタシナニカワルイコトデモシタノ！

ワタシハワルクナイ！ワタシハワルクナイ！

クルシイ・・・クルシイヨ・・・ムネノナカカラナニカガ」

「ハイィィィィィィィ！止めェェェ

春の風が頬を触るイージマンション

出会いと別れの季節まようじ

人はこうして成長していくラッシュ・バンディグー

夏の太陽が体を照らすマッシュブラザーズ

蝉の声が耳を騒がすーパーファミコン

夏を通して人は強くなっていくぎ宮理恵

秋の落ち葉の音が足から響くレヨンしんちゃん

祭りばやしが各地で響き人は歓喜するーラ

それと同時に季節の終わり目を感じさせるナ

冬の雪が白に染まるーマニア

サンタの到来に子供は喜びはしゃぐランドタッシャー

そして一年が終わり春へ戻るナマリア

こうして人は季節を繰り返しながら成長していくいしん坊万歳！

・・・どうですか先生！」

詩の発表を終え笑顔の新八、だが銀時は浮かない顔だった。

「・・・詩としては良いと思うんだけど・・・文章の最後の無駄なやつ・・・何？」

「ああ、これはお通語と言って」

「オラァァァァァァァァァァァ！」

銀時の会心の蹴りが新八の腹部に命中した。蹴りを食らった新八はブッ飛ばされ気絶した。その直後、チャイムが鳴り響いた。

「これで終わりか・・・オメーら・・・今度やる時はまともな詩を書いてきてくれ」

銀時の言葉が止まった。その後、疲れが頂点に達した銀時はその場に倒れ、気絶した。

第３２話：詩の暗記はかなりしんどい（後書き）

おまけコーナー

作者「どうだった？今回の話。文化祭の話やクリスマスの話と同じくらい自信があるんだけど。」

銀八「どうだったっつーのは読者が決めることだ。」

梓「そうですよ！自信を持つのはいいけど持ちすぎはよくありません！！」

作者「え～、別にいいじゃ～ん。」

ドナルド「だったら僕が洗脳して」

銀八「それはやめーい！！」

第３３話：子供相手に余りむきになるな（前書き）

作者「今回の話で小学部５Ｚの新しいメンバーが顔を見せます。」

一方通行「いいのかよこれ・・・。」

梓「これ知ってる人います？」

作者「・・・始まります！！ＯＰは『Ｔｏｕｇｔ　Ｂｏｙ』です！北斗の拳２の主題歌です！！」

第３３話：子供相手に余りむきになるな

とある居酒屋、中では笑い声が響いていた。
「いやー、ホントにアンタらも苦労してるねー！」
「アンタよりましだよ。俺らは毎日沙都子のトラップの餌食になってるからよー！」
「そりゃそーだなーアーハッハー！」
笑い声を出しながら酒を飲んでいたのは銀時とスネークとルイージとクッパだった。
「それよりどーよ？今度銀さんとこのクラスと俺んとこのクラス対抗でけいどろかなんかやんねーか？」
「いーねそれ！なんか面白そう！」
「こうなったら俺のダンボールの出番だな。」
「んなわけ・・・ねーだろ！」
「アーハッハー！」

「というわけで今日の体育はルイージ先生のクラスとけいどろで勝負することとなった。」
翌日の朝のホームルーム、銀時は前に立ってこう告げた。
「先生！何でこうなったんですか？」
「前の場面をしっかり見ろよ。だからオメーは新八なんだよ。」
「関係ないですよね。それ。」
「先生、ルールはどうなるんですか？２Ｚ＆５Ｚ対土方ですかぃ？」
「何だよそれ、圧倒的に俺が不利じゃねーか。」
「ルールは２Ｚ対５Ｚで行う。ちなみに俺らが泥棒役だな。」
新八は心の中で思った。となると僕達が逃げる役か。まぁ相手が子供だし少し手を抜くか・・・。だがこの考えが後に後悔に変わるとは新八は思ってもなかった。

「というわけで今日の体育は銀さんとこのクラスとけいどろで勝負することとなった。」
５Ｚの朝のホームルーム。ルイージが前に立ちこう告げた。この言葉を聞いて子供達は喜んだ。
「いいかー、年上の人と交流するっつー事は滅多にないからなー。この事をちゃんと頭にいれとけよ。」
「先生！豪華賞品はあるんですか？ご飯とかご飯とかご飯とか！」
カービィが涎を垂らしながらこう言った。
「あのなぁ・・・一応遊びだからそういうのねーぞ。」
「残念・・・。」
「ハハハ。今日は皆が追いかける役だから頑張れよー。」
子供たちの返事が響く。そんな中、一部の生徒が闘志をむき出しにしていた。で、合同体育の時間。準備運動を済ませ、２Ｚの面々はグラウンドへ来ていた。まだ５Ｚの面々は来ていないようだ。そんな中、銀時が声をかけた。
「いいかー！戦いはもう始まってるんだ！奴らがどこからか来るかわからねーぞ！」
「・・・という事はもうけいどろが始まっている・・・。」
「よし！逃げないと！」
その後、誰もが一目散に散って行った。
「フハハハハ！この俺の華麗な走りを見せてやるぜ！」
当てもなく突っ走る桂と近藤、だが桂が何かを踏んだ。
「ん？何だ今の？」
「気のせいじゃ」
その直後、頭上から巨大なざるが降って来た。二人は降って来たざるの中に閉じ込められた。
「な・・・何だこりゃ！」
「オーホッホッホ！こんな仕掛けにかかるなんて何ておバカな方なのでしょう！」

桂が上を見たらそこには仁王立ちで笑っている沙都子の姿が映った。
「貴様！ここから出すんだ！」
「出せって言われて出す奴なんてこの世のどこにもいませんよ？」
「チクショー！だったらこの刀でざるをぶった切る」
近藤が刀を取り出しざるに斬りかかった、その直後だった。体に電流が流れ近藤はしびれてその場に倒れた。
「あ、言い忘れましたけどこのざるは触れると１００万ボルトの電流が体を襲いますよー！」
「くっ・・・万事休すか・・・。」
「他の方はどうでしょうかねー？」
沙都子が辺りを見回してみた。

「ギャアアアアアアアアアアアア！」
新八はどこからか現れた巨大な岩に追いかけられていた。
「何でェェェェェェ！何でこんなもんがあるんだよォォォォォォォ！」
とにかく新八は走った。だが目の前に壁があったので横に飛んでかわした。
「ゼー・・・ゼー・・・な・・・何とかなった」
「ニパー☆」
声がしたので上を見ると梨花が立っていた。
「ヒャアアアアアアアアア！」
とりあえず新八は梨花から距離をとった。だが後ろから・・・。
「あうあうー。」
と声がしたのだ。振り向くとそこには羽入が立っていた。
「おわァァァァァァ！」
新八は急いで急転換し別の方向へ逃げて行った。ルール上混沌学園のグラウンド中がこの戦いの舞台となっている。新八は気の上に登り何とかやり過ごそうとしていた。
「あ～何だよこれ・・・心臓に悪い。」

「本当にそうなのです。」
「だよね、本当に心臓に悪いよね。」
「うんうん、何でいつの間にいるのや・・・」
新八は隣を見た、そこには梨花と羽入が座っていた。
「エエエエエエエエエエエエエエ！何でェェェ

「無理だ、あの様子じゃ3人とも戦闘不能だ。」
「じゃあ俺達は・・・ここでずっと隠れてろか？」
「そうだな、だがいずれは場所を変えないといつかはばれてしまう。」
「ああ・・・しばらくはここで様子を・・・」
土方は会話を止めた。しばらく彼は無言となった。
「おい、土方。どうした・・・」
クラウドが辺りを見たら巨大なマヨネーズが立っていた。
「マヨネーズゥゥゥゥゥ！」
「おい！止めろ！アレどっからどう見ても罠だろ！」
クラウドが決死土方の暴走を止めようとするが土方の暴走は止められなかった。
「アイ、ラブ、マヨネーズゥゥゥゥゥ！」
土方は巨大マヨネーズに抱きつこうとした、だがその中からあの人物が現れた。
「お前はもう・・・捕まっている。」
中から現れた人物はケンシロウだった。ケンは目の前の土方を捕まえようとした。だが上空からクラウドがバスターソードを振りかざしたのだ。ガシィ！ケンの拳とクラウドの剣が互いにぶつかった。
「くっ・・・何であんたが小学生なんだ！どっからどう見ても俺らより年上だろ！」
「細かい事は気にするな・・・。」
クラウドのツッコミにケンはこう答えた。
「・・・あれ？俺のマヨは？」
「土方！やっと目を覚ましたか！」
「・・・えええええ！何でこいついるの？」
土方はケンを指さしこう言った。
「フ・・・ただ1対2になっただけか・・・いいだろう、相手になってやる。」
「え？何この空気、俺らがあの人に喧嘩売ったの？」

「知らない！とにかく逃げるぞ！あんなの相手にしたら殺される！」
土方とクラウドはケンから逃げた。だが目の前にレイが上空から現れた。
「おとなしく捕まったらどうだ？」
「いやだァァァァァァ！」
二人はレイから逃げた。
「おい、別々に分かれて逃げようぜ！」
「合点承知！」
クラウドはいったん土方と別れ、別々の道で逃げて行った。

「こ・・・ここまで逃げれば大丈夫だろ。」
クラウドは校舎側で死角がある壁の所で座っていた。あれから逃げ回って、人目がつかない場所を探し、ここに着いたのだ。辺りはどうなってるんだ？そう思いクラウドは中から出た。だがここでリン（北斗の方）と鉢合わせしてしまった。
「あ・・・その・・・」
「・・・ケェェェェェェェン！来ちゃ駄目ェェェェェェェ！」
リン（北斗の方）は叫んだ。その数秒後、上空からケンが現れた。
「リン・・・待たせたな。」
「オワァ！どっからやって来たんだよ！」
クラウドはケンと鉢合わせしてしまった。相手は暗殺拳の使い手、１００％勝てる見込みは無い。逃げようとしたいが足がすくんで動けない。そんな中、ケンがこっちへ向かって歩いてきた。逃げようとし後ろを向くが足が言う事を聞かない、もう駄目だ・・・エリアス。俺もこっちへ行くよ・・・。そんな事を思っていた。だがケンはクラウドをタッチしこう言った。
「捕まえた。牢屋へ行け。」
その瞬間、クラウドは全身の力が抜けたようにその場に座り込んだ。

一方ゾロは南極にいた。
「どこだここ？」
方向音痴のゾロは逃げていたが道を間違いなんやかんだで南極についてしまったのだ。

「おい、ゾロの奴が校舎から出て行ったけど・・・。」
「ありゃもう駄目だ、奴はカウントするな。」
けいどろの様子を見ていた銀時達はこう話した。今の状況、捕まっている・・・というより戦闘不能者は新八、近藤、桂、クラウドの４名である。ゾロはどっか行ったのでノーカウントである。
「ハハハ。でも銀さんとこの生徒も個性派ぞろいだな。」
「確かにな、でもケンが生徒って何かインパクトあったぞ。」
「まぁな、でも他に銀さん達が驚くような奴もいるぜ。」
「本当か。それは楽しみだ。」
銀時とルイージ達はこう会話をしていた。

「へっ、子供ごときがこの俺を捕まえられるか。」
ヤムチャは舞空術を使い空を飛んで逃げていた。こうなれば沙都子のトラップに引っかかる事は無く、このまま時間が過ぎれば自分は２Ｚのヒーローとなれるのだ。ヤムチャの顔が少しにやけた。その時だった。下から衝撃波がヤムチャが襲ったのだ。
「おわぁ！何だ何だ！」
前を見たら５Ｚの生徒の小泉ジュンイチローが歩いてきたのだ。
「エエエエエエエエエエエエエエエ！何でこの人がァァァァァァ！」
「くらえ！国士無双（ライジングサン）！」
小泉から衝撃波が放たれる。
「ウワァァァァァァァ！」
ヤムチャは衝撃波にのまれ爆発した。
「ふむ・・・まず一人と言ったところか。」
気絶したヤムチャを連れ小泉は牢屋ゾーンへ向かった。

「ふぅ・・・これ本当に小学生の力なの？」
ミクは校舎から離れた場所へ逃げていた。遠くの方から爆発音が聞こえ、クラスメートの叫び声が聞こえる。だが後ろから殺気を察知し後ろへ下がった。
「・・・誰？」
「俺のハジケを感じるなんざ・・・オメーなかなかやるな。」
ミクは声のした方向に振り向いた、後ろから首領パッチが現れた。
「あなたも小学部の生徒だったのね。」
「そうよ、いずれはボーボボの野郎を蹴落として俺が主役になってやるよ。」
「無駄だと思うけど。」
「うるせーよ！それより・・・この俺に捕まるかこの俺と戦うか・・・どっちだ？」
ミクは無言でネギを振りまわした。ネギによって風が発生し落ちていた木の葉を斬っていった。
「なるべく本気で戦いたくなかったんだけど・・・。」
「それが貴様の真の力か・・・」
「仕方ない！一気に決める！」
「かかってこい！」
首領パッチもネギを持ちミクに立ち向かった。
「俺が真のネギマスターだァァァァァァ！」
「違う！私が本当のネギマスターよ！」
二人の持っているネギが交差した後、辺りに激しい衝撃波が舞った。

けいどろが始まり数十分後。２Ｚの面々は次々と牢屋ゾーンへ連行された。２Ｎの女子達がやっているテニスをこっそり見ていてなのはやレナにブッ飛ばされまるこげになったサンジと空腹で動けなくなった神楽、悟空、ルフィ。喧嘩していて捕まった文乃と千世、

その喧嘩を止めようとした巧、御坂に抱きつこうとしたのだがあっさりとレールガンを放たれボロボロになった黒子、普通に捕まったロイドとジーニアスとエミルなど半分以上の生徒が捕まっていた。
「あとどのくらい？」
「半分ぐらいじゃね？」
「あと少しで僕達の勝ちだ！」
５Ｚの生徒達はこんな会話をしていた。
「隙を見せるな、いつどこからか奴の仲間が来るかわからぬぞ。」
皆が浮かれている中、ケンは隙を見せなかった。
「そろそろヤバいんじゃない？」
「ああ・・・まだ時間がある・・・全員見つかるのも時間の問題か・・・。」
牢屋ではあきらめムードが少し漂っていた、だが空腹で寝ていた悟空がいきなり起き上った。
「どうした悟空？」
「でっけぇ気を感じる・・・。」
「マジで？」
「ああ・・・オラの超サイヤ人の時の気を超えてやがる・・・！」
「誰だよそれ・・・。」
誰もが悟空のむいている視線の方を見た、その気の正体は・・・ハヤテとナギだった。
「お嬢様、こうなったら一気に皆さんを助けます。」
「ああ、わかった。」
二人は歩いて牢屋ゾーンへ向かって行った。
「皆、あの二人を止めるんだ！」
「任せろ！」
ケンが二人に向かって行った。
「ホァァァァァァァァ！あたたた

「な・・・何だと！」
「スミマセン、あなたの技・・・遅いですよ。」
ハヤテはケンの胸に触れた、その後触れた部分からかなり出血した。
「な・・・にぃ・・・！」
ケンは血を出しながら地面に崩れて行った。
「ケェェェェェェェェン！」
「まだだ！まだこの私がいる！」
小泉はマージャン牌を出した。
「これでもくらえ！国士無双（ライジングサン）！」
衝撃波が二人を襲ったがナギが腕を振り全ての衝撃波を返した。
「ぐぐぐ・・・無駄だったか。」
「そうです、今の僕達には敵がありません。」
気絶から目覚めた新八はその様子を見ていてただ呆然としていた。
「な・・・何でああなったの？」
「フフフ・・・実は昨晩・・・。」

満月の夜、月の光が・・・・・のハヤテとナギを照らしていた。
「ハヤテ・・・行くぞ・・・。」
「いつでもいいです・・・お嬢様。」
その後、二人は・・・

「という事をしたんだ。」
「待て待て待て待て待て待て待て待て待て待てェェェェェェェェ

「気にするわボケェェェ

だが後一人見つかんないのだ。
「後一人見つかった？」
「まだ、全然見つかんない。」
「どうしよう・・・もう時間ないよ。」
「負けるのかな・・・？」
「まだ大丈夫・・・」
キーンコーンカーンコーン・・・バトルの終了を告げる鐘が鳴った。戦いは２Ｚの勝利で終わったのだ。
「で、誰だ後一人って？」
「さぁ？誰だろ？」
誰もがそんな事を言っているその時だった。
「フッフッフ・・・俺の計画通りだな・・・。」
新八の後ろにあったダンボールから声がした。そして中から山崎が現れたのだ。
「お・・・オメーかよぉぉぉ

第３３話：子供相手に余りむきになるな（後書き）

おまけコーナー

作者「どうでした今回の話。」

銀八「いろんな意味でひどかったな。」

梓「下手したら本当にこの作品消されますよ！！」

一方通行「俺たちはどうなるんだよ！」

作者「・・・まぁ一応反省してます。」

ドナルド「そういえば次回に関して話があるって楽屋裏で言ってなかったかい？」

作者「楽屋裏とか言うなよ・・・そうです。ドナルドの言うとおり次回、２Ｚにあの妹がきます。兄も３Ｚにやってきます。」

当麻「だんだんとカオスになってくるな・・・。」

作者「いいんだよもともとカオスだったから！今回のＥＤは『あんなに皆一緒だったのに』頭の中で閃きました！では次回お楽しみに」

？「あら？私の出番はまだかしら？このビッチ作者。」

作者「！？」

第３４話：誰もが秘密を持っている（前書き）

作者「前回言ってた通り今回新キャラが登場します。」

初春「誰ですか？」

佐天「あー私も気になる。」

作者「確か前の話の後書きでヒント出したけど・・・。」

一方通行「俺は分かった。」

雷電「俺もだ。」

作者「・・・今回のＯＰも新キャラのヒント・・・というよりかなり大ヒントです。というわけで今回のＯＰは『ｉｒｏｎｙ』です。」

第３４話：誰もが秘密を持っている

ある朝、新八がいつも通り学院へ登校していた。で、校門前についたのだがそこで見かけない女の子がうろうろしていたのだ。何だこの子？新八はそう思っていた。その時だった。
「ねぇ、そこの眼鏡。」
「え？」
その少女に声をかけられたのだ。
「ここ、混沌学院で合ってるよね。」
「ま・・・まぁそうですけど・・・。」
「わかった。ありがと。」
少女はそういうと中に入って行った。
「誰だあの子？転校生かな？」
新八はそう呟いて２Ｚの教室へ向かった。

「なぁ、知ってるか？転校生が来るみてーだぞ。」
「マジでか？また来るのか？」
「この作者のネタが切れたんじゃねーの？」
教室にて早朝早弁の会の連中がこんな話をしていた。
「その話本当？」
コレットとマルタが会話に参加した。
「ああ、何か誰かが校長室で見知らぬ女の子と会ったって言ってた。」
「本当、どんな子かなー？」
「ホント、気になるね！」
その話を聞いたサンジが少し笑った。
「女の子か・・・クックック・・・」
その様子を見ていた新八は引いた。かなり引いた。しばらくして

チャイムが鳴り銀時が入って来た。
「はーいテメーら席つけー。今から転校生の紹介をする。おい、入ってこい。」
銀時に呼ばれ女の子が入って来た。その女の子は今朝新八に声をかけた女の子だった。その女の子は教室の前に立ち自己紹介を始めた。
「私は高坂桐乃、今日から皆と勉強することとなりました。よろしくお願いします。」
彼女の説明の後、教室から話声が聞こえた。結構かわいいな。モデルみたい。彼氏いるのかな？んな事より早く昼飯の時間になってくれ。土方死ねよ。それ今言うセリフじゃねーだろ、ってか今ここで斬るぞ沖田。そんな声が聞こえた。
「はいじゃあ開いてる席に座ってくれ。」
「わかりました。」
桐乃はそう言って席に向かった。

その後1週間、桐乃はクラスになじんだ。
「ねー、今日私の部屋に来ない？」
放課後、ナミが桐乃に聞いてきた。
「あ、ゴメン。今日何か先生が家庭訪問で来るみたいなの。」
「そう。じゃあまた来てね。」
「うん。」
桐乃はそう言うと寮の自分の部屋へ行った。
（早めにあれを片づけないと・・・。）
心の中でこう思っていた。

「はぁ・・・何で俺までもここに来るんだ？」
そう呟くのは桐乃の兄である高坂京介である。彼も3Zへ転入したのだが転校初日からハンコックによって石にされたり、更木と白夜の戦いに巻き込まれたり、やちるによって髪の毛がべたべたにな

ったり妹とは別で散々な日を過ごしていたのだ。そんな中、妹と出会ったのだ。
「あ・・・」
「む・・・」
彼らは一言もかわさず行ってしまった。なぜなら原作と同じようにあまり仲が良くないのだ。

ピンポーン♪
桐乃の部屋のインターホンが鳴った。扉を開けると銀時と新八が立っていた。
「おじゃましまーす。家庭訪問に来ましたー。」
「ああ、先生と・・・眼鏡。」
「あの～僕は新八です。眼鏡じゃないんで。」
二人は桐乃の部屋に入った。中は普通でまぁ年頃の女の子みたいな部屋だった。ちなみに何故新八がいるかと言うと銀時が同行を頼んだのだ。
「で、どうだこの一週間、何か変わった事あるか？」
「特にありません。皆とも不通に話しています。」
「そうか・・・そういやーお前に兄貴いるって３Ｚのハンコックが言ってたなー。どんな奴だ？」
銀時が京介の事の質問を始めた。桐乃は黙った。その様子を見ていた銀時と新八は思った。この兄妹・・・仲が悪いって。
「あー、悪いな、返事に困る質問をして・・・。」
「じゃあこれで僕達も戻りま」
ガタッ。何かの音がした、新八の手には何かが触れている。その方を見て見るとＤＶＤのパッケージだった。
「何だこ」
「ウワァァァァァァァァァァァァァ！」
桐乃は突然と叫び新八を突き飛ばした。
「ギャアアアアアアア！」

新八は飛ばされ玄関まで転がって行った。
「ハァ・・・ハァ・・・スミマセン。とり乱れて。」
「あ・・・ああ。どうした？ってかなんだそれ？」
「き・・・気にしないでください！」
「あ・・・ああ。じゃ俺は戻るから。もし何かあったら俺かスネーク先生に言えよー。」
銀時は気絶した新八を連れ部屋を出て行った。
「あ・・・危なかった。」
桐乃は手に持っているＤＶＤソフトを押し入れにしまった。

「おい、見たか昨日のメルル。」
「おう。あれはよかったなー。」
翌日、サンジと家康はこんな話をしていた。彼らが話していたメルルとは夕方からやっている女の子向けのアニメ『星くず☆ういっちメルル』の事である。内容は小さい女の子向けなのだがサンジや家康など一部の大きいお友達にも人気がある。
「サンジさん達本当に馬鹿ですね。」
「ああ、あんなアニメ見てるなんて子供かよ、あいつら。」
新八とロイドとエミルは哀れみの視線で二人を見ていた。そんな彼らを桐乃は睨んでいた。
「どうしたアルか？」
「え？いや・・・何でもないよ。」
神楽は桐乃に話した。神楽は不審に思ったがすぐにその事を忘れた。

「えーっと・・・『昨日のメルルは最高だった！あの時間であんな事をさせるなんて・・・まさに俺向けのアニメだろうが！』・・・と。これでよし！」
サンジは自室のパソコンでブログを更新していた。ちなみに言うが彼は今ブログをやっている。タイトルは『キングマユマユの間』

である。内容は自分が思った事をすぐに更新するというもの。
「おっ、もう感想が来ているじゃねーか！」
更新した後、すぐに観想の返信が来た。内容は『同感でござる』とか『同意見ですｗｗｗ』や『流石にあれは無いｗｗｗ』などの意見であった。中には（ピーーーーー！）画像も送られてきている。
「グヒヒヒヒ・・・さっすがアダルト仮面さんだな・・・。」
そんな中、『きりりん』と言う人から感想を送られてきた。稀に知らない人から感想が来るのでそんなに珍しくは無かった。
「おっ、新しい人か・・・『私もそうです！メルルは私の青春です！今日私の教室でメルルの事を悪く言うバカがいたので睨めつけてやりました！』か・・・おし、この子に返信するか『よくやった。もしメルルの事をバカにする奴がいたら俺がぶっ飛ばしてやる！』・・と。」
サンジは一通り返信するとパソコンをシャットダウンした。
「ふ～・・・しばらく休んだ後・・・家康から借りたゲームでもするか。」
そう言うとベッドに入りしばらく横になった。

翌日、サンジは家康に何かのＣＤを渡していた。
「サンジ、あのゲームやったか？」
「ばっちりよ。ヒロイン全員攻略したぜ。」
「さっすがだな。」
その様子を見ていた新八とロイドとエミルはこう話した。
「何だあれ？」
「エロゲーだろ。」
「本当にしょうがないですね・・・ってか救いようありませんね・・・。」
三人とも本当にむなしくなってきた。
「あ、そう言えば昨日のニュース見たか？」
「はい、確かエロゲーの主人公をまねて強姦を繰り返した男が逮捕

されたって話と歌舞伎の蛸蔵が暴力事件で逮捕されたって話ですね。」
「ああ。蛸蔵はどうでもいいけど・・・あいつら本当に大丈夫か？」
「確かにな、あれ１８禁だろ？将来が不安になって来た・・・。」
三人はため息をついた。

『こうして俺は立派なハーレムを作り世界的な王となった。　ＴＨＥ・ＥＮＤ』
サンジのパソコンの画面にこんな文字が表示された。
「ふー・・・これで『ウッハウハハーレム天国２』も終わったな。」
タイトル画面に戻った事を確認し、パソコンからＣＤを取り出した。その後、冷蔵庫を開きお茶を取り出そうとしたがあと少しで切れそうだった。
「ヤベーな。お茶がない。」
財布を持ち部屋を出た。その時何か急いでいる京介と会った。
「ありゃ確か・・・桐乃ちゃんの兄貴・・・？どうしたんだ？」
サンジが後ろを見ながら歩いていると前から怒声が聞こえた。怒声の主は桐乃だった。
「待てェェェェェェェェ！このクソ兄貴ィィィィィィィィィィ！」
「へ？どうした」
サンジは聞こうとしたが桐乃に押し倒され気絶した。
「どうしたんだあいつ？男子寮まで来て・・・。」
その様子を見ていたロイドが呟いた。

翌日の放課後、桐乃と京介は職員室に呼ばれていた。二人は銀時の前で座っていた。
「で、何でだ？何であんな騒いでたんだ？」
「それは・・・その・・・」
銀時は桐乃のポケットに何かのＣＤがある事に気付いた。
「おい、なんだそれ？」

「え？」
「だからお前のポケットにあるそのＣＤだよ。」
「・・・。」
桐乃は無言でそのＣＤを銀時に渡した。そのＣＤは何も書かれてなかった。
「んだこりゃ？何も書いてねーじゃねーか。」
「先生・・・それ、エロゲーです。」
京介が声を出した。
「エロゲー？これが？どうして分かるんだよ。」
「実は昨日、桐乃の所行って醤油借りようと思って部屋に行ったら・・・エロゲーやってたんですよ。」
「・・・はぁ？」
「で、その事について追及しようとしたら逆ギレして・・・それで追いかけられたんです。」
銀時はため息をついた。
「おい、俺はオメーが何にはまろうがどうでもいい、だけどよー逆ギレはまずくね？」
「そっち？何で私がエロゲーやってるって」
「んな事どうでもいいんだよ。言っただろ？お前がエロゲー好きだろうが何だろうがどうでもいいって。人間好きなものがあって当然なんだよ。秘密があって当然なんだよ。秘密がばれたっても堂々としてればいい。」
銀時の言葉を聞いて桐乃は黙った。
「オメーも兄貴なら妹の悩みぐらい聞いてやれ。それが兄貴だろうが。」
銀時は京介に向かってこう言った後、席を立った。
「じゃ後はオメーらで解決しろ。俺はジャンプ見てっから。」
と言って職員室から去って行った。

一週間後。

「はぁ？何言ってるの？メルルのいい所はかわいさじゃない！」
「違う違う、メルルのいい所は夕方から（ピーーーー！）シーンを拝めること」
「くたばれクソ眼鏡ェェェェェェェェェェ！」
「グフェ！何で僕ぅ！」
桐乃はあの事件以来より一層クラスになじめることができた。女子の他にサンジや家康等話し相手が出来たのだ。
「桐乃！メルルのＤＶＤまだアルか？続きが気になるアル！」
「ああ、ちょっと待ってて。今無理矢理兄貴に見せてるから。」
「・・・まさか桐乃があんなキャラだったとはな。」
「ええ。」
様子を見ていたロイドと新八はこんな会話をしていた。

第３４話：誰もが秘密を持っている（後書き）

おまけコーナー

作者「えーどうでしたか今回の話。」

オセロット「いいんじゃないのか？」

作者「この話書いている頃に俺妹読み始めたからね。」

梓「それよりあなたの後ろに誰かいるんだけど。」

作者「ん？」

黒猫「あら、ビッチ作者、私の出番はいつかしら？」

作者「・・・・・・いつの間に俺の背後に！」

黒猫「フッフッフ・・・」

銀八「こいつ、ステルス迷彩使ってたぞ。」

作者「・・・・・・・・・」

ガチャ。

グレイ・フォックス「大変だ！俺のステルス迷彩が盗まれた！」

作者「フォックスさーん、盗んだのこいつ。」

黒猫「盗んだとは酷い言い方ね。」

作者「ハイハイ愚痴は後で聞く。後お前の質問何？」

黒猫「私の出番」

作者「わりぃ、まだ考えてない。」

バジーナ「じゃあ拙者の出番は？」

銀八「オワッ！いつの間に！」

作者「まだ考えてませ～ん。あとあやせはかなり先ですがちょっと出ま」

黒猫・バジーナ「「私たちの出番を考えろォォォォォォォォォ！！」」

作者「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

初春・梓「「・・・・・・今回のＥＤは『ミエナイチカラ』でお願いしまーす♪」」

第３５話：ゲームのやり過ぎに注意（前書き）

作者「今回の話は少しヤンデレ部分があります。」

雷電「まさかまたヒナギクがヤンデレになるのか？」

オセロット「かわいそうだな。」

一方通行「やりすぎだろオメー。」

ブロリー「キャラ崩壊はあまりやらない方がいいぞ。」

ヒナギク「ソウヨ、ナンデワタシダケキャラホウカイガハゲシイ」

作者「おわ！ヒナギク出てきた！」

ヒナギク「アラ？ドウシテニゲテルノ？ドウシテ？ドウシテ？」

作者「オイィィィィ！紅桜持って近づく」

ヒナギク「ヒャッハー！」

作者「助けてェェェェェ！」

雷電「おい、作者助けるぞ！不本意だけど。」

ブロリー「あいつがいなければ後書きがなくなるぅ！」

オセロット「行くぞ！俺のリロードはレボルージョンだァァァァ！

！」

ドカーン！

ゴゴゴーン！

チュドーン！

梓「・・・今回のＯＰは『奈落の花』でお願いします。」

佐天「ひぐらしの人たちは出てないけどね。」

作者「・・・では始まり始まり～。」

第３５話：ゲームのやり過ぎに注意

ある日の朝のホームルーム。銀時は一枚のポスターを持って教室に入って来た。その後、そのポスターを黒板に張った。それには『２Ｚゲームキング決定戦！』と書かれていた。

「というわけで、今度のレクレーションでゲーム大会する事になった。」

「先生！ゲームって何ですか？土方虐殺ゲームですか？」

手を挙げ沖田が聞いた。

「あれだ、テレビゲームだ。」

「ちっ、そうですかい。」

「沖田、本気で斬るぞ。」

土方がそう言って沖田に睨めつけた。

「先生、何のゲームをするんですか？それとチーム戦ですか？」

新八がこう聞いた。

「何のゲームかは後のお楽しみだ。チームは男子ｖｓ女子だ。」

「エエエエエ！」

新八は驚いた。女子には意外とゲームがうまい神楽とゲーマーのナギ、千世。そしてエロゲーマスターの桐乃、男子にはロクなものがいない、まずゲームをやってなさそうな連中がいないのだ。まぁ罰ゲームがなければいいのだが・・・と思っていたその時だった。

「えー、ちなみに負けたチームはパンツ一丁でグラウンド１０週な。女子は下着で。」

エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！新八は心の奥でシャウトした。何この罰ゲーム？酷くない？

「いいか、勝てばいいんだ！勝てば罰ゲームを受けなくていいんだ！これは覚えておけ！以上！」

銀時はこう言って教室から去って行った。

「アアアア

者を選んでください。詳しい説明は各ゲーム時に説明します！では早速第１回戦を始めます！代表者を１名選んでください！」
銀時の説明の後、男子チームから近藤、女子チームから桐乃が立ちあがった。
「どうやら決まったようですね。では早速始めます！」
銀時とスネークはゲーム機のスイッチを入れた。ロゴの後、ＯＰムービーが流れタイトルが表示された。そのタイトルには『妹と遊ぼっ！ＥＸエディション』と書かれていた。
「よし、私の得意ゲームの一つだ！」
「フフフ・・・どんなゲームも俺が攻略してやるぜ！」
「勝敗はどちらが先にヒロインと結ばれるか！では早速・・・開始！」
戦いが始まった。最初の場面は主人公がベッドで寝ている時にヒロインの一人がいつの間にか横で寝ていたという何かありがちな場面からだ。その後、互いの画面にこんな表示が現れた。

・起こす

・妹が起きないようにそっと起きる

・ベッドから蹴落とす
「ふっ、こんなの２番目の選択肢に決まっているじゃない！」
桐乃は『起きないようにそっと起きる』を選択し決定ボタンを押したのだが・・・。

主人公『さて・・・アイラ（これはヒロインの名前）が起きないように起きねーと・・・。（俺はアイラが起きないようにそっと立ち上がったのだが・・・。）』

アイラ『フェ・・・？キャアアアアアアア！何でお兄ちゃんがここにいるの？』

主人公『それは俺のセリフだ！何でお前が俺の部屋で』

アイラ『キャアアアアアアア！』

ガン！

主人公『（俺の頭に何か固いものが激突した。その後、俺の意識が消えて行くのを感じた・・・）。』

ざんねん！おれのじんせいはこれでおわってしまった！

「シャドウゲイトかァァァァァァァァ！」
新八はかなりマニアックなツッコミをした
「何だよこの展開！完全に伝説のクソゲーのシャドウゲイトじゃねーかァァァァァァァァァァァァァァ！」
「くっ・・・流石新作ね。何が起きるか分からないわ。」
桐乃は再びニューゲムを選び最初から始めた。その様子を見ていた近藤は不敵に笑った。「フッフッフ・・・そうか、あの選択肢が駄目ならあれしかない！」
近藤は『起こす』の選択肢にカーソルを合わせ、決定ボタンを押

した。

主人公『おい、起きろ。（俺はそう言いながら近くに置いてあったマグロを起こした・・・これが俺を有名なマグロ漁師にさせる第1歩とは誰もが思いもしなかった・・・。）』

激動の第2部！マグロ対決編へ続く！

「「なんじゃこりゃあああああああ！」」

新八と近藤は同時にツッコミをした。

「何でマグロ漁師になってんだァァァァァァァ！馬鹿かこの主人公はァァァァァァ！」

最初からとんでもない展開、互いに出足をくじいてしまった。

「くっ、じゃあこの蹴落とすしか選択肢ないじゃない！」

桐乃は仕方なく『ベッドから蹴落とす』を選んだ。

主人公『オメーどこで寝てんだよ！（俺はアイラを蹴落とそうとしたが蹴落とす瞬間、アイラの姿が消えた。）』

アイラ『残念だがそれは・・・』

主人公『（声が聞こえた・・・すると扉の方からアイラが現れた。）』

アイラ『残像だ・・・お兄ちゃん。』

「何これェェェェェェェェ！妹超人じゃねーかー！」

新八はシャウトした。

「何これ？これが正解だったの？」

「そうみたいだ！早く進めてくれ、近藤さん！」

土方に促され、近藤も先へ進めた。その後はありとあらゆる展開が待っていた。妹のいたずらで入院してゲームオーバー、ヒロインの一人のドジで崖から落っこちてゲームオーバー、青いつなぎの男とのアッー！でゲームオーバー、目から火を吹いてゲームオーバー、ヒロインの一人が他の男と駆け落ちしゲームオーバー、天に召されてゲームオーバー、色んな意味で旅立ってゲームオーバー、船〇に何かかんだで崖に追い詰められゲームオーバーなどシュールというより目茶苦茶ななゲームオーバーが二人を待っていた。

「何だこれ？思いっきりクソゲーじゃねーかァァァァァァァァァァァァァ！」

新八は思いっきりシャウトした。その後、桐乃の画面が変わった。どうやら主人公が勉強しているみたいだ。

コンコン

サスレ『お兄ちゃん・・・いる？』

主人公『サスレか・・・一体なんだ？（俺はそういうと自室の扉を開けた、そこにはエプロン姿のサスレが立っていた。）』

サスレ『お兄ちゃん、今日の晩御飯ごめんね。』

主人公『あ・・・ああ、いや大したことないよ。（そういえば今日は珍しくサスレが出かけていたなぁ。）』

サスレ『だってお兄ちゃん、私の料理楽しみにしていたから・・・。』

主人公『ああ・・・で、用って何だ？』

サスレ『今日お洗濯している時このハンカチを見つけたんだけど・・・。』

主人公『あ・・・ああ。実は前に転んだ時に血が出て・・・同じクラスのイコルがハンカチを貸してくれたんだ・・・。（あれ？よく見るとこのハンカチ少し欠けてるな・・・。）』

サスレ『ええ！お兄ちゃん怪我したの！』

主人公『ああ・・・大したことないよ。』

サスレ『そう・・・大したことないんだ・・・あの血お兄ちゃんのだったんだ・・・あの部分・・・捨　てなければよかった。』

主人公『何か言った？』

サスレ『ううん！何でもない、何でもないってば！』

新八はこのやり取りを見て思った。どこかで聞いた事のあるようなやり取りだな・・・。

サスレ『それより今日の晩御飯どうしたの？』

主人公『ああ、近くのカレー屋で食べてきたよ。（本当は幼馴染のイタリのとこで食べてきたけど・・・まぁいいか。）』

サスレ『・・・・・・やっぱりあの女の匂いがする！』

主人公『へ？』

サスレ『お兄ちゃん・・・何で私に嘘をつくの？』

主人公『は？一体何のはな』

サスレ『とぼけないで！何で私に嘘をつくの？お兄ちゃんはそんなことしないのに！』

ドン！

主人公『オワァ！（サスレが机を叩いた、その衝撃で上に置いてあった鉛筆やら消しゴムなどが下に落ちた。）』

サスレ『どうせイタリさんのとこで食べてきたんでしょう？』

主人公『（ギクギク）そ・・・そんなことない』

ドン！

サスレ『本当の事を言って！食べてきたんでしょう？』

主人公『ああ・・・そうだ。』

サスレ『へー、それはよかったね！』

バン！ガラガラガラ！

主人公『や・・・止めてくれ！今度から気をつけるから！』

サスレ『あ・・・ごめん・・・それより最近私と遊んでくれなくなったね。』

主人公『当たり前だろ、お前ももう中1だし。』

サスレ『だから・・・だからって同じクラスのイコルさんとイチャつく訳？』

主人公『な・・・何でイコルの名前を・・・』

サスレ『知っているよ、あの人がどこに住んでいるか・・・。』

主人公『止めてくれ！（俺は携帯電話をとりとにかく誰かに連絡をしようとしたがサスレの足が俺の携帯電話を踏んだ。）』

サスレ『連絡しよう立って無駄だよ・・・それに奴らが化けて出てきても私がお兄ちゃんを守ってあげ　るから・・・。』

主人公『化けて出てきても・・・それ一体どういう意味だ？』

サスレ『そのままの意味だよ。今日晩御飯を作れなかったのはお兄ちゃんにまとわりつく害虫を退治したからだよ・・・。』

主人公『な・・・あ・・・・。（俺は言葉の意味を理解した・・・つまりイコル達は・・・サスレによって殺されたのだ。）』

サスレ『どう？私の手、生臭くないでしょ？』

主人公『うう・・・。（サスレが右手を差し出した。石鹸の匂いが強くて鼻がどうかなりそうだ。）』

サスレ『お兄ちゃんを守れるのは私だけ・・・私だけなんだから！』

主人公『やめろ・・・来るな・・・！来るなよ！』

サスレ『な・・・何で私を嫌うの・・・何で？何で？・・・あ、そうか！お兄ちゃんあいつらに毒され

たんだ！あいつ等の料理がお兄ちゃんを洗脳したんだ・・・。』

シャキン！

主人公『な・・・何するんだ！（俺は包丁を持って迫ってくるサスレに向かって叫んだ。）』

サスレ『何って・・・お兄ちゃんの消毒だよ、あいつ等の料理を食べたんだから・・・しっかりと消毒　しないと・・・。』

主人公『止めろ・・・止めろ・・・！（サスレは段々と俺との距離を詰めてきた。ヤバい・・・どうすればいいんだ？）』

サスレ『お兄ちゃん・・・お兄ちゃャァァァァァァァァん！』

ズシャァ！・・・ドサ

「・・・・・何これェェェ

主人公『ん・・・ここは・・・台所？』

サスレ『あ、目覚めたんだお兄ちゃん♪』

主人公『サ・・・サスレ・・・か？（暗くて分からなかったが段々と裸エプロンのサスレが視界に映った。）』

サスレ『うん、今日はお兄ちゃんの為に色々と料理を作ったんだよ。』

主人公『あ・・・ああ。（俺の目の前にはサスレが作った料理があった。・・・どれも俺の好物だ。）』

サスレ『さぁ・・・食べて。』

主人公『あ・・・ああ・・・む。
両手両足を拘束されている為うまく動けない・・・サスレが目の前まで近づいて俺の口に料理を運ぶ。）』

サスレ『どう？おいしい？』

主人公『あ・・・ああ。うまいよ。』

サスレ『じゃあ次は私特製の卵焼き食べる？』

主人公『ああ、ん・・・あぐ・・・もぐもぐ・・・ングッ。』

サスレ『どう？私の得意料理だからおいしいはずだけど・・・。』

主人公『流石だな、おいしいよ。』

サスレ『そうよね！私の得意料理だもんね！じゃあ次は八宝菜！お熱いうちに召し上がれ・・・』

主人公『あ・・・あつ・・・ハフハフ・・・うまいよ・・・。（俺はダ○○○倶楽部の上○か！）』

サスレ『どう？おいしい？イタリの八宝菜に敵わないけど・・・どうかな？』

主人公『あ・・・うまいよ・・・とてもな。』

サスレ『うんうん・・・じゃあ次行ってみようか・・・。』

主人公『へ・・・オワァ！（サスレは突然と俺の上に乗った。手には包丁が握られている。）』

サスレ『今度は私だよ・・・さぁ・・・食べて・・・』

主人公『止めろ！馬鹿な事はさっさとやめるんだ！早く手錠を解いてくれ！（俺は渾身の力を振り絞ってサスレを突き放した。）』

サスレ『キャン！』

主人公『ハァ・・・ハァ・・・早く俺を解放しろ・・・！』

サスレ『無駄だよ、お兄ちゃんは私を愛さなければならないという権利があるんだから。』

主人公『しらねーよそんなの！第一俺とお前は兄妹だ！結婚は出来ねーって知ってるだろ！』

サスレ『・・・お兄ちゃん・・・何で？何で私の事を嫌うの！』

主人公『く・・・オメーがそんなに病んでるとは思ってもなかった・・・（何とか時間を稼ごう。そうしている間に誰かが助けに来てくれるはずだ。）』

サスレ『・・・時間を稼ごうなんて無駄だよ、今この空間は私とお兄ちゃんしかいないんだから。』

主人公『ぐぅ・・・』

サスレ『フフフ・・・そうよ・・・お兄ちゃんの選択肢は一つしかないんだから。』

シャキン

主人公『止めろ！殺すな！殺さないでくれ！（俺は反抗した、近くに置いてあったスプーンや箸を口にくわえて投げた、だが包丁を持ったサスレには当たらなかった。）』

サスレ『私はお兄ちゃんが好き！誰にも渡さない！』

主人公『な・・・何するんだ！（サスレは俺に向かって突進してきた。）』

ズブ！

主人公『な・・・！（俺は悟った・・・サスレの持った包丁が腹に突き刺さった事を。）』

サスレ『あは・・・あはははは・・・これでお兄ちゃんはずっと私のもの・・・ずっと・・・ズット　ワタシノモノナンダカラ・・・アハハハハ・・・・アハハハハハハハハハハハハハ！』

主人公『あ・・・あ・・・（薄れゆく意識の中、俺の頭の中で狂ったサスレの笑い声が響いた・・・そしてそれを聞きながら俺は死んでいった・・・。）』

ざんねん！これでおれのじんせいはおわってしまった！

「結局シャドウゲイトかいィィィィィィィィィィィィ！」
新八はツッコミをした。
「結局話が長引いてこんなオチじゃねーかァァァァァァァァァァ！」
「くっ・・・まさかこんなに時間を食うなんて・・・。」
桐乃は悔しそうに下を向いた。一方近藤の方は・・・。

主人公『魔王！貴様もこれで終わりだ！』

魔王『フハハハハハ！かかってくるがいい、愚かな人間どもよ！』

主人公『オリャアアアアアア！』

魔王『ハァァァァァァァ！』

ついに魔王と対峙した主人公！彼の運命はどうなる・・・次回作へ続く！

その後、タイトル画面に戻された。
「ちくしょー！これで１０回目だよ！」
「アンタどんだけゲームオーバーになってんだよ！」
新八は思った。これいつになったら終わるの？しばらくして近藤もまたヤンデレルートへ入ってしまった。
「アアアアアアア！このルートかよ！今さっき見ていたら何か鬱になって来たんだよ！」
「近藤さんしっかり！何か打開策があるはずだ！」
土方は近藤のサポートに回った。だがヤンデレ妹の話は続く、もたもたしているうちに台所の場面へ移った。
「アアアアアア！ヤバい、ヤバいよトシィ！」
「ちっ、落ち着くんだ・・・何か打開策が・・・」
土方はコマンド表の『調べる』が選択可能な事に気付いた。
「近藤さん！コマンドの『調べる』が使えるみたいだ！」
「おっ、流石だなトシ！」

近藤は『調べる』の所にカーソルを移動させ、決定ボタンを押した。

サスレ『キャッ！何するのお兄ちゃん！』

主人公『すまん・・・顔が勝手に！』

ここでは書けないが・・・主人公はセクハラまがいの事をしていた。

「何やってんだこの主人公！馬鹿じゃねーの！」

新八は叫んだ、何か段々とサスレの顔が赤くなっていく、てかコレゲームにしちゃダメじゃね？というようなイベントが開始されてしまったのだ。

「ねぇ・・・これフラグ成立でいいのか？」

「しらねーよ俺に聞くなよ。」

近藤と土方はこんな会話をしていた。テレビからサスレの喘ぎ声が響き渡っていた・・・だが。

ドンドン！

右○『失礼します、こんな所で何をやっているんですかねぇ？』

主人公『・・・へ？』

亀○『お前、兄貴失格だな・・・。』

右○『亀○君、今銭○警部が近くにいるようなので彼に協力を要請してください。』

亀○『わかりました。』

主人公『（そう言って相○の二人が銭○警部に連絡して俺は婦女暴行の容疑で逮捕された・・・）』

銭○『ったく・・・ル○ンよりたちが悪い。』

右○『まったくです。さぁ、彼を連行しましょう。』

主人公『（こうして俺は数年間牢屋で過ごすこととなった・・・。）』

・・・・・・・・・・・・ガサガサ。

ル○ン『あぶねぇあぶねぇ、とっつあんがここまで来た時はヒヤヒヤしたぜ。これで俺もようやく逃げれ　るこった。じゃ、テレビの

前の皆、また会おうぜ！』

ル〇ンの台詞の後、ヒロイン達が歌うエンディングテーマをバックとしてスタッフロールが流れた。

「「「何だこれェェェ

第３５話：ゲームのやり過ぎに注意（後書き）

おまけコーナー

銀八「え～前書きで作者はヒナギクの襲撃に会い重傷なので俺が変わりに後書き」

作者「ども、作者です。」

銀八「オイィィィィ！いつの間にィィィィ！」

作者「言いたいことがあって復活したんだよ。この小説。あと少しで１０万アクセス超えるんだよ！」

銀八「マジでか！」

作者「まさかここまでいくとは思わなかった・・・。これも読者の皆さんのおかげです！！本当にありがとうございます！」

銀八「・・・１２月に初アップされてから・・・もう２ヶ月か・・・時がたつのははえーなおい。」

作者「そうですね。というわけでこれからも頑張って書きたいです！ＥＤは『Ｎｏ！Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！』です！次回もお楽しみに！！」

追伸

作者「え～。今回の話を携帯で見たところかなり見にくいと思うので２月２３日の時点で直しました。迷惑をかけてすみませんでした。これに合わせて前書きの最後の部分のセリフも訂正しました。では次回お楽しみに。」

第３６話：テトリスの長い棒はいらない時に来るとかなり邪魔（前書き）

作者「今回の話は銀魂を読んでいる人にしか分からないネタがあります。」

一方通行「どんなのだよ？」

作者「・・・山崎アンパン。」

雷電「オイまさか・・・。」

作者「ええ。ＯＰは関係ないけど『アンパンマンのマーチ』でお願いします。アンパンマンでねーけど。」

第３６話：テトリスの長い棒はいらない時に来るとかなり邪魔

第１回戦のギャルゲー勝負はまさかのル〇ンエンドで男子チームが勝利をおさめた、次の第２回戦のパズルバトルで男子チームが勝てば女子達は下着でグラウンド１０週の罰ゲーム・・・女子達は後がないのだ。

「おい、次のパズルバトルの代表者をさっさと決めろ。」

銀時がこう言った。男子チームからは新八と山崎が選ばれている。二人とも余裕の笑みだ。

「よし！こうなったら私が行くよ！」

「にゃあ・・・私も行く。」

唯と希が立ち上がった。そして１Ｐと２Ｐのコントローラ側に新八と山崎、３Ｐと４Ｐのコントローラ側に唯と希、それぞれ準備は良いようだ。

「ルールはテトリスだ。内容は２対２、各チームの代表２人がゲームオーバーになったらそこで敗北、いいな？」

「「「「はい」」」」

「よし、じゃあバトル開始！」

銀時の号令でバトルが始まった。

数分後、新八の方で動きがあった。丁度いいタイミングに長い棒が現れたのだ。

「よし！これで一気に消せば相手に大ダメージ」

と思っていたが突然とブロックが降ってくるスピードが上がった。

「うわ！何で？何で？」

「落ち着くんだ新八君！あせったらミスをする！」

山崎の声でいったん落ち着いたが気がついた時は長い棒はすでに積みかされたブロックの上にくっついていた。

「くっ、何でだ？」
「おそらく相手側の妨害だろう。」
新八は察した。相手がブロックを大量に消すとこっちに妨害が来るのだ。すると女子の方から歓声が上がった。唯と希が段々とブロックを消しているからだ。
「くっ、このままじゃ負ける！」
「ああ、新八君、ここは地道に消していこう！」
二人は作戦を変えた、これがいい結果となり徐々にブロックが消されていった。唯の方は少し焦っているようだ、だが依然として希は冷静だった。
「あわわわわ！どうしよう！」
「落ち着いて・・・攻める時は一気に攻める・・・。」
勝負は男子チームの優勢だった。一列づつ消していく先方の男子チームに地味に攻められていて唯と希のブロックは上に詰められていたのだ。
「フフフ・・・この勝負・・・貰ったぜ！」
「案外楽だったね・・・」
勝利オーラを発している新八と山崎、顔はかなりにやけていてかなり余裕の雰囲気だった。だが突然とブロックの落下スピードが上がったのだ。
「エエエエエエエ！何で？何でエェェェェェ！」
「いきなりこんな早くなるなんて・・・まさか！」
山崎は希の画面を見た、いつの間にかあれだけ積まれていたブロックがいつの間にか減っていたのだ。
「・・・地味に消してくのもいいけど弱点がある・・・それはいきなりの強襲に耐えられない事・・・。」
確かにそうだ、地道に消してダメージを与えるのもいいがいきなり大ダメージを受けるとペースを崩され敗北する可能性が大きくなる。山崎はあせった、新八も同様だった、いきなりの攻撃にペースを崩され、段々と列を消すスピードが落ちた。

「しまった！山崎、新八ィィィィィィ！」
男子達はただ新八達を応援するしかなかった。

ドォォォォォォォン！1Pゲームオーバー！
「しまった！やられたァァァァァァ！」
新八が最初に脱落した。状況は1対2、かなり厳しい状況だ。
「く・・・どうする・・・。」
唯と希は一気にブロックを消しまくった。段々と山崎のブロックが積まれていく。もう駄目だ！誰もがそう思ったその時だった。
「・・・ぱん・・。」
「へ？」
銀時は山崎の周りにオーラが発している事に気付いた。
「ウォォォォォォォ

んぱんあんぱんあんぱんあん

んぱんあんぱんあんぱんあん

「しまった！」
唯が脱落した、一発逆転か？状況はあんぱんモードの山崎と依然として冷静な希の一騎打ちとなったのだ。
「いいぞー！このまま決めろー！」
「頑張れェェェ！山崎ィィィィ！」
男子達は希望を見つけた。
「希、頑張れ！」
「あんぱんなんかに負けるな！」
女子も希を応援した。そしてバトルはラストスパートへ入った・・・。
「よし！山崎の所に長い棒が！」
「あ、希の所にも長い奴が！」
二人の画面に長い棒が降ってきた。山崎も希も下手したらゲームオーバーという所まで来ていた。こうなれば先にブロックを消した方が勝つ・・・！
「うおおおおおおおおお！」
山崎は一気に落下スピードを上げた。そして大量の列を消した！
「うおおおおおおおおおおおおお！これで俺達の勝ちはもくぜ・・・」
「まだ終わってない。」
希の一言で誰もが静かになった。希の方も列を消していた。
「なっ・・・」
山崎の一瞬の油断が勝負を左右した。
ドォォォォォォォン！２Ｐゲームオーバー！フィニッシュ！ウィナー３Ｐ＆４Ｐ！
ナレーションの声が響く、その後山崎は気を使いはたしてその場に倒れた。
「・・・よくやった山崎・・・後は俺達に任せろ・・・。」
土方は静かに呟いた。
「さぁて、次が第３回戦です！この勝敗で決着が決まります！勝負

内容は・・・『ゴッドイーターバースト』！」
銀時がこう叫んだ。この時、男子チームから土方、ゾロ、サンジ、クラウドが立ちあがった。
「俺らが行く。後は任せろ。」
女子の方はハヤテ、ナギ、千世、律が立ちあがった。
「オイちょっとハヤテ！何でテメ―が女子チームに入ってんだ！」
「お嬢様と敵対しない為ですよ。」
「オメーバカか？」
土方が哀れみの目でハヤテを見た。この後彼らは自分のＰＳＰを取り出し電源を入れた。
「勝負内容はどちらが高ランクで最高難易度のヴァジュラを倒せるか・・・ランクが同じだった場合はタイムで見る。分かったか？」
土方達は首を縦に振った。
「よし、じゃあ第３回戦、始め！」

次回！
ついに始まった第３回戦！ゴッドイーターの難敵であるヴァジュラを高ランクで倒せるのはどのチームか・・・そして罰ゲームはどのチームになるか？ついに決着か！次回混沌学院『一番初めのゴッドイーターは鬼畜ゲーだったｂｙ作者』どうぞご期待！
「ここから逃げろ！これは・・・命令だ！」
「逃げるな！生きることから逃げるな！これは・・・命令だ！」
「おい！何ネタばれのイベントの会話乗せてんだよ！謝れよ！」
まだあの場面へ行ってないゴッドイーターバーストのプレイヤーの皆様、スミマセンでした。

第３６話：テトリスの長い棒はいらない時に来るとかなり邪魔（後書き）

おまけコーナー

当麻「オイアンタ！あれひどすぎだろ！見ずらいよ！」

作者「しゃーねーだろ本家銀魂でもやってたからよ～。俺もびっくりしたよあれ。」

初春「だからって小説でもやらないでください！」

作者「いいじゃねーか！あのあんぱんの文字ワード１ページ分使ったんだよ。」

佐天「ページの無駄使い！」

銀八「ったく、どうしよーもねーなこの馬鹿。」

作者「黙れ天パ！ＥＤは『結ンデ開イテ羅利ト骸』でお願いしまーす。」

銀八「今回の話と関係なくねこの歌？あと少し怖くね？」

作者「いいじゃねーかって・・・銀さん、後ろの白い服着た人誰？知り合い？」

銀八「あん？・・・・・・ｇｙ」

梓「次回お楽しみに！」

第３７話：一番初めのゴッドイーターは鬼畜ゲーだったｂｙ作者（前書き）

作者「このころはゴッドイーターバーストばっかやってたな～。」

銀八「今マイソロ３ばっかやってるからな。」

作者「２でないかな～？」

梓「え～と・・・ＯＰは『Ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　ｃｌｏｕｄｓ』でお願いします。」

第３７話：一番初めのゴッドイーターは鬼畜ゲーだったｂｙ作者

崩れた街並み・・・崩壊した教会。今彼らはこの場に立っていた。
「おい、全員いるか？」
ロングブレードを構えた土方が言った。
「ああ。」
「俺はここにいるぜ。」
「おう。」
リーダーの土方は作戦を言った。
「今から別々に分かれて奇襲する。いいな？」
「「「わかった。」」」
「決して無理をするな、奴と遭遇したら連絡しろ。」
そう言って彼らは散会した。

女子チームもヴァジュラを探したため散会していた、ここでハヤテの方から連絡があった。
「どうしたハヤテ！」
『お嬢様！ヴァジュラと遭遇！すぐに来て下さい！』
「わかった！」
ナギは連絡を受けた後、すぐにハヤテの元へ向かった。その途中律と会った。
「ナギ、何かあったのか？」
「ハヤテがヴァジュラと遭遇したんだ！お前は千世に連絡を！」
「オッケー！分かった！」
律はナギの後ろを走りながら千世に連絡していた。
「な・・・何ですかこれ？何でいきなりゴッドイーターの世界みたいな感じになってるんですか？」

様子を見ていた新八が銀時に聞いた。
「いや、何でもそういう空気にした方が面白いって作者が。」
「作者かよ！」
新八は叫んだ、この後どうなるんだ？新八は心の中で思った。

「どこにいるんだ・・・？」
土方は外れにある廃墟にいた。廃墟の中に入り辺りを見回した。
「・・・ここもいなかったか・・・。」
去ろうとしたその時だった。何かの唸り声が耳に聞こえたのだ。
後ろを振り向いたらヴァジュラが立っていた。
「お出ましか！」
土方は緊急集合を使い仲間を呼び寄せた。その過ぎにヴァジュラが飛びかかってきたがギリギリでステップでよけた。土方は神機を銃にさせ弾丸を撃ち込んだ。
「ちっ、まだかあいつ等は！」
「土方！」
後ろの方でサンジの声がした。サンジはヴァジュラの電撃をよけながら攻撃をした。
「おい、他の奴らは？」
「後ろの方でマリモヘッドがいた！クラウドはあと少しで到着するようだ！」
「分かった！それまで俺らでダメージを与えるぞ！」
「おう！」

「はぁぁぁぁぁぁぁ！」
「喰らえェェェェェ！」
ハヤテとナギは華麗なコンビネーションでヴァジュラを圧倒していた。千世は彼らのサポートをしていた。
「回復弾うつわよ！」
「ああすまない！」

「お嬢様！ＯＰがたまったら銃で援護をお願いします！」
「おう！」
そんな中、律は一人アイテムを回収していた。
「ちっ、これ何個も持ってるっつーの。」
「律さん！そんな事やっている暇があったら援護して下さい！」
前線で戦っているハヤテが叫んだ。
「で、どうすればいいんだ？」
「とにかく後ろで銃弾を撃って下さい！」
「これか？」
律は爆発系の弾丸をハヤテにむけて撃った。
「あああああ！何やってるんですか！」
「射線上に入るなって・・・私言ってなかった？」
「カノンですか！そんな事やっている暇あったら戦って下さい！」
「あーごめんごめん。」
律も真面目に戦い始めた。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！神機解放！」
土方はヴァジュラを捕食しバースト状態になりインパルスエッジを連発した。
「いいぞ！このまま時間を稼げ！」
クラウドは剣を構え、力をためた。その後、刃から巨大なオーラが纏われクラウドはヴァジュラに向かって振り落とした。
「うし、一気に攻めるぞ。」
ゾロは一気に間合いを詰めヴァジュラに近づき、連続で斬撃を決めた。ヴァジュラはその場から離れ、別の場所へ移動した。だがその先には銃を構えたサンジがいた。
「こんな事になるっつー事は予測してたんだよ！」
サンジは貫通弾を連射した。
「いいぞサンジ！このまま攻め続けろ！」
「おう！」

サンジはダウンしたヴァジュラに近づき捕食した。クラウドもゾロも続いて捕食をした。
「皆！アラガミバレット連射するぞ！」
「「「おう！」」」
土方の号令に会わせゾロ達はアラガミバレットを発射し続けた。
「お嬢様！一気に叩きこみますよ！準備はいいですか？」
「こっちはいいぞ！」
ハヤテとナギはステップでダウンしたヴァジュラに近づき剣で何度も斬りつけた。その後、ヴァジュラは立ち上がり怒りで活性化した。
「今です！撃ち続けてください！」
「「わかった！」」
ハヤテとナギの後ろにいた千世と律がヴァジュラに向かって麻痺弾を連射した。
「うおおおおおおお！」
「痺れろォォォォォォ！」
何度も撃ち続けた後、ヴァジュラの周りに麻痺のエフェクトが現れた。
「皆！同時に捕食するぞ！」
「はい！」
ハヤテとナギが先に捕食し、後から律と千世が近付きヴァジュラを捕食した。
「グォォォォォォ

二人は活性化したヴァジュラに向かって行った。

「皆さん・・・完全にノリノリですね。」

ＰＳＰ片手に叫んでいる土方達を見て新八はこう言った。

「まぁいいじゃん。たまには必要だよ、羽目をはずすのも。」

「そうですけど・・・。」

新八がこう言ったその瞬間だった。同時にアラガミを倒した時のファンファーレが鳴り響いたのだ。

「なっ・・・同時だと！」

「くっ・・・何てこった・・・。」

少しして、各チームのリザルト画面が映った。討伐時間は４分３１秒。どのチームも同時にヴァジュラを討伐したのだ。そして肝心のランクは・・・。

「なっ・・・。」

「マジかよ・・・。」

ランクは男子チームがＳＳＳ。そして女子チームもＳＳＳだったのだ。

「ランクもタイムも同じ・・・最後の最後で引き分けか・・・。」

「先生どうすんだ！これじゃあお妙さんの下着姿」

その瞬間、近藤の後頭部にｗｉｉリモコンがめり込んだ。

「考えていてよかった・・・。」

銀時はその後で言い放った。

「真の最終決戦！スマブラＸガチバトル！」

「な・・・何ですかそれ？」

新八が聞いてきた。

「今からやるゲームはスマブラＸ。ルールはチーム戦の３ストックバトル、そしてアイテム使用禁止、ポーズ禁止、ハンデなし、タイムは無制限、ステージは終点、ディディー、メタナイト、ゼルダ、ポケモントレーナーなど強キャラは使えない！カービィ、ドンキーコングなど一緒に自滅できるキャラクターを使用する場合一緒に自

滅は禁止！以上の事を守ってこのバトルに決着をつけたい！」
銀時がこう言った後、各チームから2人の代表が選ばれた。男子チームからは桂とルフィ、女子チームから御坂と黒子。
「よし、じゃあキャラクターを選んでくれ。」
その後、各選手はマイキャラを選んだ。桂はマリオ、ルフィはルイージ、御坂はピカチュウ、黒子はリュカ。そして終点が選ばれ、戦いが始まった。
「真の最終決戦、スマブラXガチバトル、開始！」

次回！
ついに始まった真の最終決戦！スマブラXを舞台に罰ゲームをかけた戦いが今始まる！そして下着姿になってしまうのは一体どのチームなのか！次回、混沌学院『やっぱりサービスシーンは・・・』どうぞご期待！
「もっと！熱くなれよォォォォォォ！」
「また修造出た！」

第３７話：一番初めのゴッドイーターは鬼畜ゲーだったｂｙ作者（後書き）

おまけコーナー

エリック「やあ混沌学院を見ている諸君、このエリックが華麗に後書きに降臨」

オウガテイル「シャー！」

ソーマ「エリック、上だ！」

エリック「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

しばらくお待ちください

作者「というわけでおまけコーナーの」

銀八「ちょっと待てェェェェェェ！今の何なんだァァァァァァ！」

作者「ちょっとしたネタという事で。」

当麻「無駄に変な奴を出すなよ！」

作者「こういうことか？」

天界

ルシフェル「イーノック、そんな装備で大丈夫か？」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

銀八「待てーい！だから無駄に変なことすんじゃねーよ！読者が置いてきぼりになるだろうがァァァァァァァ！！」

作者「すみません、無駄にこういうことするのが好きなので。」

ドシャン！

イーノック「（ドヤ顔）」

銀八「何できてんだオメェェェ

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

銀八「待てーい！だから無駄に変なことすんじゃねーよ！読者が置いてきぼりになるだろうがァァァァァァァァ！！」

作者「すみません、無駄にこういうことするのが好きなので。」

ドシャン！

イーノック「（ドヤ顔）」

銀八「何できてんだオメェェェ

銀八「オメーは何してんだァァァァァァ！批判のコメントが来たらどうするんだァァァァァァァァ！！」

ルシフェル「ギャアアアアアアアアアアアアアア！」

ドォン！

神は言っている・・・私はまだここで

銀八「無駄にループするなァァァァァァァァ！読者に謝れテメーらァァァァァァァァ！！」

イーノック・ルシフェル「「すみませんでした。」」

佐天「今回のＥＤは『Ｎｏ　Ｗａｙ　Ｂａｃｋ』でお願いします。あと今回いろいろと悪ふざけをしてすみませんでした。」

第３８話：やっぱりサービスシーンは・・・（前書き）

作者「今回でゲームキングの話は終わります。」

闇「で、結局罰ゲームはどうなるんですか？」

梓「まさか・・・サブタイトルのように・・・」

作者「始まりまーす。あとＯＰは『蝋人形の館』でお願いします！」

一方通行「何か今回の話とミスマッチなＯＰだな。」

作者「ほっとけ！」

第３８話：やっぱりサービスシーンは・・・

『３・・・２・・・１・・・ＧＯ！』
テレビから声が響いた。その後、桂のマリオが御坂のピカチュウにスマッシュ技を放ってきた、だがそれを黒子のリュカのＰＫサンダーが邪魔をした。
「ヅラ！いきなりしかけんじゃねーよ！」
「ヅラではない、桂だァァァ！すまん、先走り過ぎた！」
「お姉さま、二人で一人づつ片づけますわよ！」
「わかったわ！」
御坂ピカチュウと黒子リュカはルフィルイージに技を仕掛けた。だがルイージのジャンプ力を使い、上空に飛んで技をよけた。
「これでもくらえ！」
ルフィルイージは上空コンボを御坂ピカチュウに放った。ダメージが段々と蓄積されていく、黒子リュカが邪魔をしようとしたが範囲攻撃によりふさがれる。
「ヅラ！一気に決めろ！」
「おおおおおおおおおお！」
ルフィルイージ下メテオが御坂ピカチュウを丁度下にいたカツラマリオの所に向けて叩き落とした。
「くらえェェェェェェ！」
カツラマリオのスマッシュ技が御坂ピカチュウに命中し画面外へブッ飛ばされた。
「ふっ、決まったな。」
「お姉さまの仇！」
黒子リュカはＰＫサンダー体当たりを桂マリオに放った。
「しまった！」
何とかシールドで防いだがその後の連撃によりシールドブレイク

されてしまった！
「あああああああ！甦れマリオォォォォォォォォ！」
桂はコントローラをガチャガチャ動かした。だがその隙に復活した御坂ピカチュウと黒子リュカのコンビネーションでブッ飛ばされた。
「あああああああ！」
「野郎！ヅラの仇！」
ルフィルイージは黒子リュカに向かってファイアジャンプパンチを放った。黒子リュカは上空へ吹っ飛び星となった。
「お姉さまァァァァァァァァ！」
「黒子、アンタの仇はとってあげる！」
「かかってこい！」
ルフィルイージと御坂ピカチュウが激しい戦いを始めたのであった！

「はぁ・・・はぁ・・・いい加減城外に落ちなさいよ・・・。」
「フフフ・・・そんなわけにはいかないのでな・・・。」
黒子と桂は大ダメージを負いながらバトルをしていた。別の方ではルフィと御坂が戦っている。
「へ・・・へへへへ・・・どうだ？俺のコンボは？」
「全然、あんなへなちょこコンボ、効かないわよ。」
二人はこんな事を言っているがダメージは１５０％を超えていた。
「へっ、後一発スマッシュ当たったらやばいんじゃないか？」
「それは・・・」
御坂は一気にルフィに近づき電撃を放った。
「お互い様でしょ？」
御坂はルフィが倒されるのを確信していた、だが実際は違った。ルフィは間一髪シールドで身を守っていた。
「しまった！」
「今度はこっちの番だ！」

ルフィは横スマッシュのコマンドを入れた。そして歓声とともに御坂は場外へぶっ飛んで行った。
「お姉さま！」
黒子は御坂の方を見た。桂はその隙を見逃さず黒子に一気に近づき攻撃を仕掛けた。
「よそ見は禁物だ！」
「はっ！」
気付いた時は遅く、黒子はすでにスマッシュ技でブッ飛ばされていた。

戦いが始まり数分後、桂と黒子のストックは2つ、ルフィのストックは3つ、御坂はあと1つと絶体絶命な状況。男子チームが今状況を支配していた。
「ハッハッハ！俺達の勝利は目前だな！なぁサンジ！」
「おう！これで女子のした」
話していた近藤とサンジの額に鋼鉄のたくあんと無数のコンパスが刺さった。
「まだ勝負は分からないわ！」
「そうよ！まさかの大逆転があるかもしれないじゃない！」
女子達がこう言った。
「いや～どうなるかなこれ？」
「知らないな～。」
銀時とスネークはバトルの様子を見て楽しんでいた。

「ハッハッハー！」
「行くぞォォォォォォォォォォ！」
桂とルフィは一気に勝負を挑んできて御坂と黒子はかなり苦戦を負った。下がろうとしたいが今の状態は挟み撃ちにされている。そして袋叩きにあっている。
「くっ・・・一体どうすれば・・・」

「仕方ありません！」
黒子は声を上げた。その後、桂マリオとルフィルイージが同時に吹っ飛んだ。
「な・・・何ィ！」
「皆さん・・・気付かなかったのですか・・・？」
「な・・・何がだァ！」
桂は黒子に聞いた。黒子は笑いながらこう言った。
「リュカの真髄は・・・上スマッシュにあると！」
スマブラXをやってる人、あるいはやってた人は分かるけどリュカの上スマッシュは隙が大きいがうまくいけば大ダメージを与える事が出来る。そんでもって最大限までためるとダメージが少しでもぶっ飛ぶのだ。（必ず倒せるとは限らないのでご注意を。）
「ぐっ！一気に巻き返されたか！」
「大丈夫、俺はあと二つ・・・それに・・・。」
ルフィはテレビ画面を見た。桂はストック１でノーダメージだが御坂はストック１で４５％のダメージを負っていて黒子はストック２で１００％の大ダメージを負っているのだ。
「俺達にはまだ勝機がある。」
「確かにな、ダメージ覚悟で攻めれば勝てる！」
「ふっふっふ・・・本当の勝負はこれからよ！」
そして彼らが操作するキャラが終点の上で激しくぶつかったのであった・・・。

『ゲームセット！』
テレビから声が聞こえた。数十分にわたって続いた戦い・・・そしてこの大会が終わったのだ。桂とルフィはうなだれていて御坂と黒子はやった！という顔でテレビを見ていた・・・。そしてテレビからリュカの勝利した時のファンファーレが鳴り響いた。

数日後。

「ギャー！ささささ寒いィィィィ！」
「後何周だァァァァ！」
「まだ半分もいってねェェェ！」
男子集はパンツ一丁でグラウンドを走っていた。その中には銀時もいた。
「なんでこーなるの！」
銀時は走りながらこう叫んだ。
「先生がいやらしい事を考えているからこうなるんですよ。」
ナギとその様子を見ていたハヤテがこう言った。しかも今ハヤテはハ―マイオニーになっていた。
「オィィィィィィィィ何でオメーは走んねーんだよォォォォォォォォ！」
「今僕はハ―マイオニーと言う女の子ですから♪」
「何じゃそりゃァァァァァァァ！」
銀時の叫び声が寒空の中響き渡った。

第３８話：やっぱりサービスシーンは・・・（後書き）

おまけコーナー

パチン

ルシフェル「話をしよう、あれは今から1万・・・いや、１０万年前か。私にとっては昨日のことだが君たちにとっては明日の出来事」

銀八「何してんだオメェェェ

銀八「何でゲームのネタをしたんだ？」

作者「ゲーム好きだからね。」

一方通行「何でそうなったんだ？」

作者「小さい頃、親戚の人がやってたファミコンに興味を持ってたからな～。」

闇「何をやっていたんですか？」

作者「覚えているのはマリオとドラクエ、アイスクライマー、あと忍者龍剣伝などなど。成長したのちいくつかやってみました。」

当麻「クリアできたのか？」

作者「無理だったよ、まだ俺がガキの頃だぜ？」

当麻「じゃあ今はどうだ？マリオとかドラクエはクリアできたろ。」

作者「・・・ドラクエは3で来たけど・・・スーファミ版の5とスーパーマリオブラザーズはいまだに無理・・・。」

当麻「無理かよ！」

作者「たりめーだろ！マリオの場合は8－3であのハンマーブロス地獄は無理だし5の場合は3人しかパーティ組めないし、そのくせ終盤あたりで無駄に敵が多いし！」

当麻「そうか・・・」

ブロリー「ファミコンのほかにプレステとかはどうなんだ？」

作者「初代プレステはたまに遊びます。ワンピースのグラバト２と北斗の拳とメタギアをちょくちょく遊んでいます。」

パラガス「プレステ２は？」

作者「持ってねーよ。」

パラガス「エエエエエエエエエエエエエエエエエエ？」

一方通行「２０１１年になってもか？」

作者「悪いか？」

一方通行「いや・・・そうでも・・・そういえばアンタ６４とかはどうなんだ？」

作者「話すと長くなる。いいかよく聞け、６４のゲームは神ゲーが多いんだ！マリオだったりスターフォックスだったりカービィだったり！６４がなかったらスマブラは出なかったんだぜ！後他にもマリオストーリーもポケモンスタジアムもあるじゃねーか！カスタムロボも面白かったな～。」

銀八「おい、話が長くなる前に帰ろうぜ。」

梓「いいんですか？」

闇「確かに長くなりそうですね。」

イーノック「だったら今回のＥＤは俺が言おう。『エアーマンが倒せない』じゃあまた次回に会お」

作者「テメーら、何ずらかろうとしてんだ！俺の話はまだ続くぞ！」

全員「や・・・やめてくれェェェ

第３９話：隠しカメラには気をつけろ（前書き）

作者「今回は後書きにて言いたいことがあります・・・。」

銀八「マジでか？」

闇「まさか最終回」

作者「んな訳あるかァァァァァァァァ！限界になっても限界を超えてこの話を書いてやるわァァァァァァァァ！」

梓「今回のＯＰは『アイラブユーならシャウトして！』です。」

第３９話：隠しカメラには気をつけろ

混沌学院裏庭、ここに『動画部』と書かれた看板と一戸建ての建物があった。その中には２Ｅの美希と理沙と泉がいた。
「いや～何か面白い事は無いかな～？」
「さ～ね～？」
彼女らは暇を持て余していた。そんな中、部員であるハヤテとナギが入って来た。
「お、来たかバカップル。」
美希がハヤテとナギに向かってこう言った。
「何してたんですか皆さん？」
「暇で暇でしょうがなかったんだ。あ、丁度良かった。ハヤ太君、女装してくれ。」
「いやです。」
ハヤテはそういうと近くにあった椅子に座った。
「あ～暇だな～。」
美希達は背伸びをしてこう言った。だが何かを閃きハヤテに質問をした。
「あ、そうだ。以前君達のクラスの神楽が言っていたが・・・君達の仲がとんでもないところまで発展したって本当か？」
「はい。それがどうかしたんですか？」
ハヤテが聞いてきた。だが美希はその質問に答えず去って行ってしまった。
「美希、どうしたんだ？」
「面白い事を閃いた！」
「あ、待ってよ～。」
美希達はどこか行ってしまった。
「・・・まぁいいか。」

「お！ハヤテ、この前の文化祭のＤＶＤがあったぞ！」
「あ、いいですね。見ましょう。」
ハヤテとナギは部室でＤＶＤを見ながら時間を潰していた。

美希達は職員室のマリアの所にいた。
「え？あの子達の部屋に隠しカメラ？」
「ああ。あの二人がどこまで愛し合っているか先生も気にならないか？」
「ん～・・・二人の事は自分たちで任せていますからね～。」
「あ？アンタ知らないのか？」
そこで机でジャンプを読んでいた銀時が声を出した。
「この前、ルイージ先生のクラスとけいどろをした時あいつら自分からとんでもないくらいの愛の領域に入ったって言ってたぞ。」
銀時の言葉を聞きマリアはすぐに携帯電話を取り出した。
「ええ・・・ええ。もしあの子達が・・・をしていたら・・・ええ・・・だからお願いしますね。・・・分かりましたありがとうございます。」
そう言ってマリアは携帯の通話を切った。
「皆さん・・・今日の夜、家に集まってください。銀時先生もお願いしますね。」
マリアの黒い笑顔を見て銀時は悟った。逆らったら殺されると。

というわけで夜。ハヤテとナギの寝室に隠しカメラを仕掛け、銀時達は隠し部屋でその様子を見ていた。隣には美希、理沙、泉、そして銀時に呼ばれた新八と面白そうだからついてきたルフィと桐乃がいた。
「わりーな新八。オメーがいねーとこの話が暴走しっぱなしになって止まらなくなるかもしれねーからよー。」
「ええ・・・確かにこう言う話だとブレーキ役が必要ですね。」
「うひょー、こういう感じ始めてだなー。」

「ええ。何かドキドキするわね・・・。」
軽く話しして数分後たったかがいくらたってもカメラにハヤテとナギの姿は映らない。
「ん？おかしーなー。」
「調子悪いんじゃないんですか？」
「だったら銀さんみてきてください。」
「何で俺が？」
「いいから早くして下さい。」
マリアに促され銀時は忍び足でハヤテとナギの部屋に向かっていた。
「こんな事になるならスネーク先生呼べばよかった・・・。」
こんな事を呟きながらこっそり部屋に入ったが・・・。
「な・・・何だこ・・・」

隠し部屋。相変わらず変化無の部屋の映像はほっといて新八達はトランプで遊んでいた。
「くらえ！２ペア！」
「フッフッフ・・・私は３カード！」
「だったら私は４カードだよ～♪」
「皆甘いわね・・・」
桐乃は手札を公開した。
「な・・・これは・・・！」
「ロイヤルストレートフラッシュ！」
「フッフッフ・・・私の一人勝ちね。」
そんな様子を横目で見ながら新八はマリアにこう話した。
「そう言えば銀さんはどうなったんでしょう？」
「そうね、ここから二人の部屋はあまり遠く」
「ギャアアア

がそこには何も映っていなかった。
「え？これどうなってるの？」
少し焦ったが結局新八とルフィはハヤテとナギの部屋に向かった。
「銀さん！」
新八は部屋の光景を見て絶句した。そこには巨大なネズミ捕りに捕まった銀時がいた。
「何だこれ？トムとジェリーか？」
「言ってる場合か・・・助けてくれ・・・。」
銀時を助けながら新八は辺りの様子を見回した。そこはハヤテとナギの部屋だがそこには自分たち以外誰もいなかった。まさかと思い隠しカメラの所へ行った。隠しカメラの前にはこの部屋の写真が映っていた。
「やられた・・・！」
新八は写真を手にルフィと共にマリアの所へ向かった。

「くっ・・・さすがハヤ太君だな。」
美希は悔しそうな顔だったがすぐに笑みを取り戻した。
「皆・・・実はこんなこともあろうかとこの屋敷中に隠しカメラを仕掛けておいたのだ！」
美希は機械をいじくった。その後、何十台もの映像が画面に映った。
「すごい・・・ってかいつの間に？」
「細かい事は気にしないでください、マリア先生。」
その後は美希たちの隠しカメラで辺りを見回した。だがそこには何も映らなかった。
「あれ？これなんです？」
新八は一台のカメラに変なものが映っているのに気付いた。
「ん？少しズームしてみよう。」
美希がズームボタンを押しその変なものを見て見た。そこには『残念！僕達はここにはいませんでした！ｂｙハヤナギ』と書かれて

いた。
「ちっくしょォォォォォォォォォォォ！結局こんな展開かよォォォォォォォォォ！」
「はぁ・・・俺らはただ踊らされただけなのかよ・・・。」
完全に肩を落とす男子集。だが美希はリベンジに燃えていた。
「フッフッフ・・・この私に挑むとは・・・いいだろう！ハヤ太君達のラブシーンを必ず撮ってやろう！」

翌日の放課後、動画部部室にて美希達は作戦会議を開いていた。
「皆・・・よく集まってくれた。」
美希の周りには理沙、泉。そして銀時、新八、ルフィ、桐乃、銀時に呼ばれてここに来たスネークがいた。
「早速会議を始めようと思う・・・誰か言い案は無いか？」
「んな事よりまたやるのかコレ？俺は昨日散々な目にあったから正直勘弁」
「君はあの二人の先生だから拒否権は無いぞ。」
美希にこう言われ銀時は黙った。
「で、結局は隠しカメラでやるのか？」
「いや、そうすればまた昨日と同じ展開になってしまう・・・それに・・・。」
美希は机に会った鋭くとがった鉛筆を壁の方に投げた。鉛筆は壁に突き刺さった。そして鉛筆が刺さった場所に近づき、そこを調べた。
「・・・ビンゴだ。」
「え？」
「盗聴器だ。どうやらハヤ太君が仕掛けたのだろう・・・。」
「どんだけだよ・・・。」
銀時はかなりのマジっぷりに驚いた。その後、銀時達は作戦会議を進めいくつかの案を出した。案は以下の通りである。
・隠しカメラ作戦。

・ダンボールで尾行作戦。
・めんどくせーから直接押し込み大作戦。
の三つである。
「では今日の夜、三千院家に集合・・・わかったな。」
「ああ。」
そう言った後彼らは解散した。

で、本日の夜。彼らは昨日と同じ隠し部屋にいた。
「隠しカメラは大丈夫か？」
「ああ。また昨日みたいなへまはしねー。」
隠しカメラを設置した銀時はこう言った。
「こちら本部、スネーク先生、聞こえますか？」
『ああ、こっちは大丈夫だ。』
無線からスネークの声が聞こえた。
「よし作戦を開始する。」
美希の号令と共に作戦が始まった。隠しカメラの映像には何も映っていない、少し余裕を持とう・・・そんな事を新八はそう思っていた。だがその時だった。
『皆、ハヤテとナギが来たぞ。』
スネークの声が聞こえた。カメラの映像を外に切り替えると手をつないだハヤテとナギが映った。
「了解、スネーク先生、なるべくばれないように尾行をしてくれ。」
『ラジャー。』
スネークは忍び足で屋敷に入った。
「さて・・・これからどうなるのだか・・・。」
美希は軽く微笑んだ。

数時間後、ハヤテとナギの方で動きがあった。二人は寝室に移動したのだ。
「先生、画面を見てください。・・・まさか・・・。」

「いや・・・落ち着け。・・・まさかやらかすんじゃねーか？」
「どうするんですか？色んな意味で大問題ですよ。」
「あー、あれだ今のうちにタイムマシンに乗って過去を改ざんしよう。」
銀時は近くにあったゴミ箱に顔を突っ込んでいた。
「アンタ何やってんですか？」
「おい、それより画面を切り替えるぞ。」
美希は画面切り替えボタンを押した。画面は寝室に移りパジャマ姿のハヤテとナギが映った。
『お嬢様、そろそろ寝ましょう。』
『そうだな。』
二人がベッドに入る所が画面に映った。
「おいヤバいんじゃねーのこれ？」
「そうだな。」
「俺ちょっとあいつ等のとこ行ってくる！」
「俺も！」
銀時とルフィはハヤテとナギの部屋に向かった。

「コラァァァァァァ！何やってんだテメーらァァァァァァ！」
銀時とルフィは扉を蹴り、中に入った。すぐに銀時はベッドの所に向かい布団をとった。そして中にいたものとは・・・。
「す・・・スネーク先生！」
ベッドにいたのは手足を縛られたスネークだった。銀時とルフィはすぐに縛られていた紐をほどいた。
「大丈夫か？」
「はぁ・・・はぁ・・・何とかな・・・。」
「一体どうしたんだ？」
ルフィが聞いた。スネークは彼らに話を始めた・・・。
「実はハヤテとナギがある部屋に入ったんだ。俺は気付かれないよう部屋の中に入ったのだが仲は暗く、辺りを探っていると誰かに頭

を叩かれ気を失ったんだ・・・。で気付いたら手足を縛られ布団の中にいたんだ。」
スネークの話を聞き銀時は下を向いた。
「チッ・・・やられたか・・・。」
そう呟いた直後に携帯が鳴った。相手はハヤテだった。
「な・・・何だ？」
『残念でしたね、先生。』
『私達のラブシーンをお目にかかれなくて残念だな。』
「・・・最初っから気付いてたのか。」
『ええ。』
『フッフッフ・・・先生達は屋敷でがっかりしているがいい・・・。』
ナギの言葉の後、電話は切れた。銀時はルフィとスネークにこう言った。
「くっ・・・ミッション失敗か・・・。」
その様子を見ていた美希、だが彼女は依然として笑みを浮かべていた。

数日後、銀時達は美希に呼ばれ動画部に来ていた。その中にはハヤテとナギもいた。
「で？何だ話って？俺まだジャンプ読んでる途中なのによー。」
頭を書きながら銀時は美希に聞いた。美希は巨大スクリーンのボタンを押した。そしてハヤテとナギのラブシーンが流れた。
「な・・・何でこれが・・・！」
「フッフッフ・・・ハヤ太君。君は心理戦と頭脳戦に関して色々言っていたが・・・私はこんなこともあろうかと君達が泊っているホテルを調査して君達の部屋の地味な所に隠しカメラを仕掛けたのだよ！」
美希は勝ち誇ったかのように言い放った。美希のセリフを聞いてハヤテとナギはうなだれた。

「負けた・・・」
「悔しい・・・」
その様子を見ていた新八は銀時にこう聞いた。
「まさかこの話これで終わりですか？」
「そのようだな。」
ただひたすら笑っている美希と地面にうずくまっているハヤテとナギを見ながら銀時と新八はこんな会話をした。

第３９話：隠しカメラには気をつけろ（後書き）

おまけコーナー

作者「・・・ついにこの時が来たか・・・。」

銀八「ああ。」

作者「それでは言います・・・ついに混沌学院、１０万アクセスを超えましたァァァァァァァァ！」

梓「それすごいんですか？」

当麻「すごいんじゃね？」

雷電「あいつもそうとう喜んでいるし。」

作者「細かい事はいいんだよ！さて今回は１０万アクセス達成記念として・・・ある企画を始めます！」

銀八「どんなんだ？」

作者「企画の名は・・・『２Ｚ人気ランキング！』いわゆる人気投票です！」

梓「ルールはどんなんですか？」

作者「ルールは簡単、ただ感想のところに好きなキャラを5名まで選んでください。例えばこんな風に

好きなキャラ

銀時
ハヤテ
ルフィ
悟空
スネーク

という風にお願いします。あと同じキャラでもかまいません。あともう一つ

新八の眼鏡
新八の眼鏡
新八の眼鏡
新八の眼鏡
新八の眼鏡

という風に２Ｚのキャラに関するアイテムもＯＫです。あと特別枠で後書きの連中も票に入れていいです！」

銀八「マジで！」

作者「期間はまだ決めてませんが本日から投票を受け付けます！皆さん、どうかご応募していってください！ちなみにＥＤは『「ごめん」というなら恋などしない』でお願いします。ＯＰ、ＥＤともハヤテのごとくに出てくる生徒会三人娘のキャラソンです。興味があったらユーチューブかニコ動で聴いてみてください！ではまた次回！」

第４０話：ラブコメで暗闇の中、男女二人っきりという場面になったら何か起こ

作者「ついに４０話達成！それを記念して」

銀八「その前に１０万アクセス達成して人気投票してんだろうがァァァァァァァ！」

闇「皆さん、是非ご応募してください。何度でも投票してもいいですよ。」

梓「ＯＰは『はっぴぃにゅうにゃあ』でお願いします。その理由は本文を見たら分かります。」

第４０話：ラブコメで暗闇の中、男女二人っきりという場面になったら何か起こ

２Ｚ教室にて、桐乃が女子連中と話していた。
「でも桐乃にあんな趣味があったとわねー。」
「でもいいんじゃないアルか？人には言えない秘密があったって当然ね。」
ナミと神楽がこう言った。
「あ、桐乃。メルルのＤＶＤボックス貸してやるぞ。」
「いいのナギ？」
「ああ。私もハヤテと一緒に全て見たからな。今日放課後来てもいいぞ。」
「分かった。ありがとう。」
その様子を見ていた新八とロイドはこう話した。
「桐乃さんも皆と打ち解けたみたいですね。」
「ああ、あれが逆にいい方向になったみたいだな。」
「眼鏡ー、攻略王ー、お前らもナギの家行くアルかー？皆でメルル見ようって企画が出たからなー。」
そう神楽に言われ、新八とロイドは少しして了解と言った。

放課後、新八達はナギの屋敷にいた。そこにはなぜか銀時とスネークがいた。
「何で銀さんまでも・・・。」
「しゃーねーだろ？うまくいけばうめーお菓子食えるだろうが。」
「それが目当てですか。」
新八は呆れた。後ろでは文乃と千世がまた巧の事で言い争いをしていた。

三千院家のビデオルーム。今ここで大画面でメルルが映っていた。

「すげーなー！」
「アレ魔法か？アレどっからどう見たってビームだろうが。」
「恥ずかしくねーのかあの恰好で？」
「アレがいいだろうが！」
「あのビームに当たって土方さんが死んでくれればな～。」
「そうだな、死んでくれればいいな。沖田が。」
などと２Ｚの連中は感想を上げていた。
「ハヤテ、トイレどこ？」
「ああ、ここから近くだと右手方向ですぐ行ったところです。」
巧は部屋を出てトイレへ向かった。
「あ、私も」
と言って文乃も出て行った。

「しっかしいつ見てもすごいなー。」
「ええ。千世の家とあまり変わんないんじゃない？」
巧と文乃はトイレへ行った後ビデオルームに向かっていたのだが。
「あれ？ここじゃなかったか・・・。」
「今さっきの道を左じゃなかった？」
二人は完全に迷っていた。
「う～ん・・・迷ったな・・・。」
「携帯で連絡・・・」
文乃は携帯をとろうとしたがバックがビデオルームにあるという事に気付き肩を落とした。
「はぁ・・・どうすればいいの？」
「とにかく手当たり次第屋敷を回ろう。」
巧と文乃はとにかく屋敷を回った。少しして大きな扉の前についた。
「何だこれ？」
「とにかく入ってみましょう。」
二人は扉を開け中に入って行った。中は暗く、少し蒸し暑かった。

「な・・・何だここ？異様に熱いな・・・。」
「知らないわよ・・・ここ・・・サウナじゃあるまいし・・・。」
ちなみに彼らが入った部屋の所には『サウナ室』と書かれていた。
そんな中一人のＳＰがこの部屋の前に来た。
「あれ？何でサウナ室開いているんだ？」
そう言ってサウナ室を閉めてしまった。
「あれ・・・嘘だろ・・・？」
巧が扉をガチャガチャいじくるが扉は動かない。二人は完全に閉じ込められたのだ。

一方。
「あり？どこだここ？」
もう一人迷子になっている奴がいた。ゾロである。とにかくゾロはあちらこちらウロチョロしていた。
「くっそー・・・どこだあいつら？」
「あら、２Ｚのゾロさん。」
ここで声をかけてきたのは２Ｂの伊澄でる。
「どうした？オメーも迷子か？」
「迷子じゃありません！ただ部屋の場所をど忘れしただけです。」
「そうか、じゃあ一緒に行くか？」
「はい、わかりました。」
色んな意味での迷い猫二人組が手当たり次第に屋敷を歩き回った。
で、いろんなボタンがある部屋についた。
「んだこれ？」
「さぁ？」
ゾロは手当たり次第ボタンを押した。
「何やってるんです？」
「ああ、適当にボタン押してりゃー隠し通路かなんかで俺達の目指す部屋につくかもしれねーからよーって思って。」
「そうですか。じゃあ私も手伝います。」

二人はとにかくボタンを押しまくった。特に何も起こらなかったがボタンの中に『サウナ室・温度上昇』と書かれたボタンがあった。彼らはその事に気づかないでその部屋から出て行ってしまった。

「あ・・・熱い・・・何でいきなりこんなに熱く・・・」
「し・・・知らない・・・わよ・・・。」
完全密室となったサウナ室で巧と文乃がこう会話をした。体中汗まみれ、熱気のせいで段々と体力が奪われていく。
「う・・・何か変なものが見えるように・・・。」
「巧・・・駄目・・・変なとこ行かないで・・・。」
数分後、巧は熱さを少しでも和らげるため服を脱いだ。服は汗でびっしゃびしゃだ。
「巧、あんたこんな所で何やってるのよ。」
「ああ・・・これで少しでも暑さをしのごうと。」
「馬鹿じゃないの？どうせこんな事やったって熱いってことは変わりな・・・」
バタッ！暑さで文乃が倒れてしまった。
「文乃！」
巧は文乃の所に近づいた。文乃は段々と弱くなっていた。
「だ・・・大丈夫・・・か・・・？」
巧も暑さで倒れてしまった。そして心の中でこう思った。ああ・・・俺は死ぬのか・・・こんな所で・・・？

「そういえば巧と文乃は？」
ナギはこう言った。そして誰もが声を出した。どうしたんだあいつら？何やってんだ？（ピーーーー！）でもしてんじゃねーの？変な事言ってんじゃねーよ！などと聞こえた。
「まさか・・・迷ってはいないだろうな・・・！」
ナギはそう言った後、近くにあった電話をとりＳＰに連絡した。
「緊急事態、緊急事態！私のクラスメイト、巧、文乃が屋敷内で行

方不明！総員で屋敷内を探せ！」
『ラジャー！』
ＳＰの声が響いた後ドタバタと音が電話から響きその後、電話が切れた。
「これで大丈夫だろう。さぁ、メルルの続きを見よう。」
「そうですね。」
と言ってハヤテとナギはメルルの続きを見始め銀時達も「まー大丈夫じゃね？」と言うような事を言ってビデオルームに残った。
「い・・・いいのかな？」
新八は呟いたがスネークの声でその呟きは消された。
「性欲を持てあます！」
だがその一方千世と希は一目散に部屋を出て巧と文乃を探しに行った。
「・・・いいんですか？あの二人。」
「いいんじゃねーの？」
銀時は新八の質問にこう言った。

「巧ィィィィィィィ！どこよォォォォォォォォォ！」
千世は絶叫しながら屋敷の廊下を全速力で駆けていた。そんな中、ある部屋で声が聞こえた。
「巧！ここにいたのね！」
千背が扉を開けたがそこにいたのは巧ではなく・・・。
「小野・・・イナフ。」
入浴中のフィッシュ竹中さんでした。
「にゃあ・・・千世。巧いた？」
希が千世の所へ来た。
「あ、希！巧は見つかった？」
「まだ。」
「もし文乃が巧と二人っきりで・・・ギャァァァ

「にゃあ・・・それはない。」
二人はこう言いながら廊下を疾走していた。

その一方、色んな意味での迷い猫の二人はまたボタンの部屋に着いていた。
「んだよ、またここか。」
「そのようですね。」
「ボタンを押す順番を間違えたか？」
「そのようですね。」
「よし、じゃあまた適当にいじくるか。」
その後、二人はまたボタンを適当に押しまくった。で、その中に『サウナ室・温度下げる』と書かれていた。

少ししてサウナの中、ゾロと伊澄のおかげでサウナ室は段々と寒くなっていた。
「はっくしょん！・・・う～何か寒くなってきたような・・・」
「ううう・・・知らないわよ・・・。」
巧と文乃は身を縮めて震えていた。なぜなら汗で体が濡れていていきなり寒くなり、そのせいでかなり凍えるのだ。
「巧、大丈夫？風邪引いてるじゃない？」
「悪いな文乃・・・心配させて。」
「べ・・・別に心配なんかしてないんだからね！」
ツンツンした文乃の言葉を聞き少し苦笑した。だがその時、巧は意識が遠のくのを感じ、地面に倒れた。
「巧！」
心配した文乃が巧のそばへ寄って行った。巧の目はうつろで体は完全に冷え切っていた。
「巧！巧！返事しなさい！寝たら駄目よ！」
文乃は腹の奥底から声を出した。だが巧は段々と弱って行く。
「ふ・・・み・・・の・・・俺は・・・もう・・・だ・・・め・・・

だ・・・せめて・・・文乃だけでも・・・無事に・・・生還・・・して・・・く・・・れ・・・」
「駄目！死なないで！巧！巧ーーーーーーーーー！」
文乃が叫んで、巧に抱きついたその時だった。扉が開いたのだ、扉の先にはゾロと伊澄が立っていた。彼らはこの状況を見てこう言った。
「「お・・・お楽しみ中・・・。」」

２人はしばらくして三千院家ＳＰに保護された。保護されたと連絡を聞き千世と希は一目散に巧の所へ向かった。
「巧！大丈夫？文乃に何かされなかった？」
「何その台詞！まるで私が巧を襲ったみたいじゃない！」
「この二人、抱きついていたぞ。」
空気を読まなかったゾロがこう言った。その言葉を聞いた千世は頭の中で何か考え、その後目まいを起こし倒れた。だが希がそれを受け止めた。
「千世は私に任せて・・・巧と文乃は早く元気になってね。」
希はそう言ってビデオルームに戻って行った。ゾロと伊澄はその後を追って行った。

その日の夜、二人は三千院家の病室で寝ていた。彼らの症状を見た病室担当のＳＰが「激しい気候の変更で体が弱っているから今日１日は安静にした方が言い、うちの保健室で眠ってなさい。親には連絡するから。」と言ったのだ。保護された直後、巧はいつの間にか眠っていた。で、今目が覚めたのだ。
「今日は散々な目にあったな・・・ん？」
巧は体を起こそうとしたが体の上に何かがあって起こせなかった。何かと思い目を凝らし見て見たら文乃が巧に抱きつきながら寝ていた。
「文乃・・・。」

文乃を起こさないように巧はまたベッドで横になった。
（文乃と寝るなんて・・・久しぶりだな。）
小さい頃、臆病な文乃の為巧はいつも横で寝てあげたのだ。文乃の寝顔を見ながら巧は昔の事を思い出していた。
「た・・・くみ・・・。」
文乃から寝言が発した。
「何で・・・気付かないのよ・・・こんなに長く一緒にいるのに・・・。」
巧は何だと思い文乃の寝言を聞いていた。
「私・・・巧のこと好きなのに。」
その言葉を聞いた巧は驚いた、だが文乃を起こさない様すぐに目をつぶり眠った。
「・・・本当に・・・鈍感なんだから。」
文乃は目を開けた。今のセリフは寝言は寝言ではなかったのだ。
「巧の・・・バカ。」
そう呟き文乃もまた眼をつぶり眠った。

次回！
ついにあの話の番外編が始まる・・・！書ききれなかった話の内容が今明らかになる！次回混沌学院、番外編、ドラクエ３編開始！
『装備は持ってるだけじゃ意味がない』どうぞご期待！
へんじがない、ただのしかばねのようだ
へんじがない、ただのしんぱちのようだ
「ただのしんぱちって何だァァァァァァァ！」

第４０話：ラブコメで暗闇の中、男女二人っきりという場面になったら何か起こ

おまけコーナー

銀八「オイィィィィ！また長編するのかよォォォォ！」

当麻「あとドラクエ編って何？」

作者「６話で言ってたやつです。」

インデックス「何か楽しみ！」

闇「あと人気投票の件はどうですか？」

作者「集まってるよ。本編の集だけだけど。」

後書きのやつら「マジでかァァァァァァァァァァ！！」

作者「後書きのアンタら今のところ０票。新八の眼鏡に負けて」

ブロリー「お前も０票だろうが。」

作者「・・・それを言うなァァァァァァ！・・・あと俺今悩んでいるんだよ。」

銀八「突然だな、何に悩んでるんだ。」

作者「『イースフェルガナの誓い』と『イースｖｓ空の軌跡』・・・どっちを買おうか悩んでいるんだ。」

後書きのやつら「んなこと知るかァァァァァァァァ！」

梓「・・・というわけで今回のＥＤは『奏でて星歌』でお願いします。」

第４１話：（ドラクエ３編）装備は持ってるだけじゃ意味がない（前書き）

作者「今回の話から長編、『ドラクエ３編』に入ります！詳しくは６話の内容を見てください！」

銀八「何でドラクエ３何だ？」

作者「ドラクエシリーズの中で一番思い入れがあるから。」

初春「そうなんですか。」

作者「そうなんですよ。というわけでドラクエ３編のＯＰはもちろんこの曲！『ドラゴンクエスト序曲』でお願いします！」

第４１話：（ドラクエ３編）装備は持ってるだけじゃ意味がない

これは６話のあの話の内容の完全版である・・・。一応ね。

あの日、伊澄は自室の蔵で調べ物をしていた。そして絶句した。伊澄は慌てて辺りを探し始め、封と書かれた札を発見した。

「伊澄殿！どうされた！」

「どうした？何かあったか？」

蔵の入り口で正宗と幸村の声が聞こえた。伊澄は袖からお守りらしき物を３つ取り出しそれを手にとり入口に戻った。

「どうされましたか？」

「正宗様、幸村様、これを身につけてください！」

伊澄はお守りを２人に渡した。

「何だこれ？」

「これから大変な事が起こると思います・・・！」

伊澄がこう言った瞬間だった。男子寮から光が発し、そこから学院全体を飲み込んだのだ。

「な・・・何だこれは！」

「遅かったですか・・・。」

「遅かったって・・・何がだ？」

「訳は後で言います！男子寮まで連れて行って下さい！」

その後、伊澄は正宗と幸村と共に男子寮まで行った。

そして・・・

「何でこうなったァァァァァァァァ！」

新八のセリフで６話が始まったのだ。

アリアハンから外に出た一同、紬のチート技で何とか難を乗り切

れたものの最初っから新八（職業：眼鏡）が死んでしまったのだ。
（何でだァァァァァァ！何でツッコミをして死ぬんだァァァァァァ！）
「知りませんよ、とにかく早く新八さんを元に戻しましょう。」
そう言ったのはハヤテ（職業：勇者）である。かなり時間が立っているので新八達のステータスを見直そう。今の所。

しんぱ　HP：0　MP：10　め：しに
ゆい　HP：9　MP：23　け：1
みお　HP：10　MP：21　け：1
りつ　HP：16　MP：19　け：1
つむぎ　HP：17　MP：20　け：1
あずさ　HP：11　MP：22　け：1
ハヤテ　HP：21　MP：9　ゆ：1
ナギ　HP：23　MP：10　ゆ：1

である。
「うーん・・・うーん・・・重いよぉ・・・。」
唯達は新八が眠っている棺桶を引きずりながら歩いていた。
「ゲームでもこんな重たいもの引きずって移動してるんだ。」
（すみません。）
「仕方ないよ、こうでもしないと移動できないからな・・・。」
少し進んだ所で唯達は一休みしていた。
「はぁ～つかれた～。」
（フィールドの真ん中で休んでていいんですか？モンスターが襲ってくるんじゃないですか？）
「大丈夫、何とかな」
律がこう言っている時だった。また視界が暗くなりモンスターが現れコマンドが現れたのだ。
「何だよまたスライムか。」

「うえ～めんどくさ～い。」
（ちょっとォォォォ！序盤はレベル上げが大事ですよォォォォォォ！）
棺桶の中から新八が叫んだ。で、その後コマンドが現れた。
「仕方ない、何か道具を使って。」
律がこう言って『どうぐ』を選んだ。
「律さん、まだ何も道具を持ってな」
ハヤテは言葉を詰まらせた。『どうぐ』の中に『しんぱち』があった。
（ちょっ・・・何で僕がいるの？）
「仕方ない！」
律は『どうぐ』から『しんぱち』を選んだ。
（あの～、律さん、何をするつもり）
りつはしんぱちをそうびした！
「いっけェェェェェェ！」
律は叫びながら新八が眠る棺桶を持ちスライムを叩いた。
りつのこうげき！
スライムＡに１０のダメージ！
スライムＡをやっつけた！
「なんだよー、大した攻撃力じゃないなー。」
（オィィィィィィ！何だよその扱い！）
そんな中でも戦闘は続いていた。
ハヤテとナギのラブラブアタック！
まものののむれをやっつけた！
「やりましたね、お嬢様。」
「ああ！私達の愛は無敵だ！」
（ラブラブアタックって何だァァァァァァァ！）
新八はこう叫んだ。

そんなこんなでレーベの村についた。
「そういえばここの村で何かイベントありましたよね。」

「ああ、確か」
ドラクエ３のネタばれを含みますので書きません。決して手抜きとか言わないでください。
「へぇー、じゃあここの村でこの先に重要な（ネタばれ注意！）を手に入れればいいのね。」
紬がこう言った。その後、先に進むために重要なアイテムを手に入れるための家へ向かった。
「あっ、クソ。鍵がかかってる。」
（そりゃそうですよ。だってこの先に進むための重要なイベントの一つですから。）
「う～ん・・・今さら城に戻るのもあれだし、まだレベルも低いし・・・。」
律が悩んでいる時だった。扉が開く効果音が聞こえたのだ。
「わぁ、むぎちゃんすごい！」
「そう？」
イベントの順序を完全に無視した紬が家の中に入って行った。
（エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！いいのかあれ？完全にチートじゃねーか！）
「知りませんよ。」
新八とハヤテが会話しているのを聞きながら梓は近くにいた澪にこう言った。
「棺桶なのによくしゃべる人ですね。」
「そうだな。」

まぁ色々あって重要なアイテムを手に入れ先に進むこととなった新八一行。だが律がいったん城に戻ろうと提案し一行はアリアハンにいた。
「どうしたのりっちゃん。何か忘れ物？」
「いやー、この後かなり難しくなるんだろ？だったら装備とか整えとかないとなー。」

律の言う事を聞いて誰もが納得した。
（で、何を売るんですか？）
新八が聞いた。そして新八を除く全員は目を合わせた。そして道具屋へ向かい売る物を売った。
「しんぱちか。しんぱちなら１０ゴールドでかいとるよ。」
（売るって僕ゥゥゥゥゥゥゥゥ！）
「１０ゴールドか・・・キメラの翼も買えないなー。」
（オイィィィィィィィ！売るなよォォォォォォ！）
「仕方ない。しんぱちを売りとばすか。」
「よし、ちゃんとうけとったぜ。」
そう言う訳で新八はたった１０ゴールドで売られてしまった。その後、一行はアリアハンを出て行った。
（オイィィィィィィ！待てェェェェェ！待ってくれぇェェェェェェェ！）
新八は叫んだが結局は意味がなかった。

その一方銀時の方は・・・。
クリフトはザラキをとなえた！
デュランにはいみがなかったようだ。
「オイィィィィ！なんで６の奴がいるんだよォォォォォ！３じゃねーのかよォォォ！」
デュランのこうげき！
クリフトに９９９のダメージ！
クリフトはしんでしまった！
デュランのこうげき！
きんときに９９９のダメージ！
きんときはしんでしまった！
きんときたちはぜんめつした・・・
（結局こんなオチかいィィィィィィ！）

次回！

ロマリアの地についたハヤテ一行、そこで奴らはガンタタを倒すよう王様から言われる。そして次回でも紬がゲームの流れを無視して大暴れ！そして今回の事件の黒幕の正体が明らかに・・・！次回、混沌学院『ドラクエのモンスターの中にはどっからどう見てもこれ人じゃねーか！という奴がいる』どうぞご期待！

「ダオスをたおす！」

「オイ！誰かこのダジャレ野郎を連れて行け！」

「下手なシャレは言うなシャレ！」

「ウゼェェェェェェェェ！」

第４１話：（ドラクエ３編）装備は持ってるだけじゃ意味がない（後書き）

おまけコーナー

銀八「何だこの話。滅茶苦茶じゃねーか。」

作者「まー６話時点であれだったからね。」

一方通行「確かにな。」

当麻「あり？梓はどうした？」

ルシフェル「見かけないな。」

作者「あずにゃんもこの長編に出演してるから。」

イーノック「そうなのか。」

銀八「おい作者！俺を長編・・・いや、本編にだ」

作者「ドラクエ３編のＥＤは『そして伝説へ』ドラクエ３のエンディングテーマです！」

銀八「おい！俺の話を区切ってんじゃねーよ！」

作者「悪いね。あと人気投票大募集してま～す。」

銀八「読者のみんな！俺に票をォォォォォォォ！」

第４２話：（ドラクエ３編）ドラクエのモンスターの中にはどっからどう見ても

作者「ドラクエ３編第２話、始まります！」

銀八「見てってくれよな！」

第４２話：（ドラクエ３編）ドラクエのモンスターの中にはどっからどう見ても

現実世界、伊澄は正宗と幸村と共にロイドの部屋に入って行った。
「あれ？ロイド殿達はどこだ？」
伊澄は部屋を見渡した。そしてテレビの前にファミコンがある事に気付き、そばへ行った。
「ファミコンじゃねーか。昔遊んだなー。」
「正宗さん！それに触らないでください！」
伊澄が叫んだ。その直後、砂嵐だったテレビ画面が音を立てて男性の顔を映した。
「だ・・・誰だ？」
「この方はこのファミコンの持ち主です・・・。」
「な・・・何でテレビに？」
幸村は伊澄にこう質問をした。
「このファミコンの持ち主はドラクエをクリアする前に事故で亡くなり、その怨念がこのファミコンに乗り移ってしまったんです。」
『貴様か・・・あの頃は世話になったな・・・。』
「伊澄殿！この方と何かあったんですか？」
「・・・幼い頃、私が初めて徐霊した霊です。」
『そう。俺は貴様がガキの頃、こいつに徐霊されかけた・・・。だが俺の強い怨念がさらに俺を強くさせて復活させたのだ！』
テレビの中の男性は叫んだ。
「くっ・・・皆を返せ！」
『くっくっく・・・中にいる奴がドラクエ３をクリアできたらな・・・。』
そう言った後、テレビはまた砂嵐になってしまった。
「皆・・・。」
三人はただテレビの前で立ちすくんでいるしかなかった。

その一方、ハヤテ達はロマリア城にいた。
「たのむ！ガンタタをたおしてくれ！」
王様にこう頼まれ、ハヤテ達は装備を整えフィールドの外にいた。
「で、どうするんだ？」
律が聞いてきた。ハヤテは地図を手にこう答えた。
「えーっと・・・この先にある塔に行ってガンタタを倒します。」
「それ重要なイベントなの？」
隣にいる唯も聞いてきた。その質問にはナギが答えた。
「そうだ、後に」
「お嬢様、ネタばれを含みます。」
「ああ、そうだな。」
ナギはネタばれの質問を唯に答えた。気になるんだったら実際にドラクエ３をやってください。というわけでシャンパー二の塔についた一行。
「うー、大丈夫か？まだ私達レベル低いぞ。」
ナギはこう言った。ちなみに今のステータスは・・・。

ゆい	ＨＰ：３４	ＭＰ：６４	け：９
みお	ＨＰ：３２	ＭＰ：５６	け：８
りつ	ＨＰ：４５	ＭＰ：４２	け：８
つむぎ	ＨＰ：９９９	ＭＰ：９９９	け：９
あずさ	ＨＰ：２９	ＭＰ：６７	け：８
ハヤテ	ＨＰ：４３	ＭＰ：１３	ゆ：９
ナギ	ＨＰ：４３	ＭＰ：３１	ゆ：９

である。
「・・・あれ？紬さん？ＨＰとＭＰの値おかしくありません？」
「そう？おかしいわねぇ？」
紬はそう言っているが誰もが（絶対にチート使った・・・！）と

思っていた。その時だった。モンスターが襲って来たのだ。
「おい、何か来たぞ。」
「はい、一気に倒しましょう。」
戦いが始まった。だがＢＧＭが違った。
こうもりさんＡにおそわれた！
こうもりさんＢにおそわれた！
こうもりさんＣにおそわれた！
「これ、ＭＯＴＨＥＲの敵じゃないですかァァァァァ！」
ハヤテは叫んだ。だがこんな時でも戦いは開始された。
こうもりさんＡはたちばをかんがえた・・・
こうもりさんＡはへんになった！
こうもりさんＢはたちばをかんがえた・・・
こうもりさんＢはへんになった！
こうもりさんＣはたちばをかんがえた・・・
こうもりさんＣはへんになった！
「な・・・何ですかこのモンスター・・・自分から混乱しましたよ。」
「実際にこいつらは自分から混乱するんだ・・・。」
その後、戦いを終わらせたのであった。

「はぁ～、何でドラクエのモンスターが出てこなくてＭＯＴＨＥＲのモンスターが現れるんだ～？」
ナギはこう言った。
「作者がＭＯＴＨＥＲ厨ですからねー。」
「いいのか？」
そんな会話をしながら上へ上へ進んでいった。頂上付近から叫び声が聞こえた。
「ほあちゃあああああ！」
「この声は・・・」
「神楽！」

神楽の叫び声と激しい激突音が聞こえたのだ。
「先輩のクラスメイトですか？」
「ああ、まさか神楽もここに来てたとは・・・。」
澪は梓の質問に答えながら階段をのぼていた。
「神楽！大丈夫か！」
澪は神楽のいる場所についた。だがその時、モンスターの死体が澪の顔面にべっとりと付いた。
「ギャアアア

「とにかく早くガンタタを倒しに行きましょう。」
「おう！」
掛け声をあげてファイトを上げた。

というわけで彼らはガンタタと会話していた。
「しつこいぞ！ええーい！こうなったらたおしてしまえ！」
「アレ？ガンタタのセリフってこんなんでしたっけ？」
「分からない。」
てな感じでバトル画面に入った。
つむぎのこうげき！
ガンタタこぶんＡに９９９のダメージ！
ガンタタこぶんＡをやっつけた！
かぐらのこうげき！
ガンタタこぶんＢに４６のダメージ！
ゆいはヒャドをとなえた！
ガンタタこぶんＢに３９のダメージ！
ガンタタこぶんＢをやっつけた！
ハヤテとナギのちょうラブラブアタック！
ガンタタに６７４０２８５０４９５８２０４６８のダメージ！
ガンタタをやっつけた！
ガンタタたちをやっつけた！
「ちょっとまったぁ！何だよ超ラブラブアタックって！」
律はハヤテにこう聞いた。
「僕とお嬢様の合体必殺技です。」
「そんな変な技を出すなァァァァァ！」
律のシャウトが塔内に響いた。

一方新八は。
（誰かァァァァァァ！助けてェェェェェェ！）
こんな中、新八を見つめる少女が現れた。彼女は２Ｅの天使であ

った。
「・・・・・・・・・・」
（あっ、天使さん！助けてくださァァァァァァい！）
「・・・！麻婆豆腐の匂い！」
と言って宿の方へ行ってしまった。
（助けてくれぇエエエエエエエエ！）

次回！
ハヤテ達はピラミッドに来ていた。ここでも奴らは常識外れの大暴れを始める！そしてファミコンの霊が怒ってしまうのだが・・・。次回、混沌学院『冒険の書はたまに消えるからカセットは大事に扱え』どうぞご期待！
「おや、君が例の新人君かい？君も僕を見習って華麗に」
「エリック、上だ！」
「え？ギャアアアアアアアアアアア！」
「ゴッドイーターネタをやるな！分からねー人がいるだろうが！」

第４２話：（ドラクエ３編）ドラクエのモンスターの中にはどっからどう見てもバランスがいいパーティーが好まれるからね。

おまけコーナー

作者「どうでした今回の話？」

銀八「神楽すごくね？」

当麻「回復魔法持たない戦士ひとりっきりで進めるなんて・・・。」

作者「まーそうだね。ドラクエにかかわらずどのＲＰＧもバランス

初春「ハハハ・・・。」

作者「では次回お会いしましょう！」

第４３話：（ドラクエ３編）：冒険の書はたまに消えるからカセットは大事に扱

作者「この話に入る前に一つ訂正、ゲーム上でロマリアの次のイベントで発生するノアニールの話を書くのを忘れてしまいました。ドラクエ３をやっている方、もしくは知っている方、そしてその話を楽しみにしていた方、すみませんでした。」

銀八「間違いっつーのは誰にでもあるからな、あまり責めないでくれよ。」

バジーナ「では始まるでござる！」

第４３話：（ドラクエ３編）：冒険の書はたまに消えるからカセットは大事に扱

ガンタを倒し、ロマリア王に褒められた一行はイシス方面へ向かっていた。
「なー、次の目的地って何かあったっけ？」
「ああ。ピラミッドへ行き（ネタばれ注意！）を手に入れるんだ。」
「え～？そんな物の為に？」
「この先、こいつがないと先に進めないんだ。」
「そうか・・・。」
とまぁ、こんな会話をしながら砂漠にあるピラミッドへ来ていた。
「気をつけてください・・・。このダンジョンには罠が設置してあ」
「キャアアアアアアアアアアアアア！」
「ウワァァァァァァァァァァァァァァァ！」
唯と律の悲鳴が聞こえた。ハヤテがそこへ行ってみると二人は落とし穴に落ちてしまったようだった。
「はぁ・・・言わんこっちゃない。」
澪が呆れてこう言った。
「唯さん、律さーん。ここの地下は魔法が使えないので気をつけてください！」
「え！そうなのか！」
「りっちゃん！早く脱出しないと！」
二人はあわてて地上へ上がった。別の方では・・・。
「お！宝箱があるネ！」
「ラッキー♪」
神楽と紬が宝箱を発見し開けた。だが宝箱はモンスターである人食い箱であった。
「神楽！そいつかなり攻撃力が高いぞ！」
後ろでナギが叫んだが・・・。

つむぎのこうげき！
ひとぐいばこに９９９のダメージ！
ひとぐいばこをやっつけた！
「倒しました。」
「・・・そう言えば紬はチートが使えたんだっけ・・・。」
とまぁ、こんな感じで奴らはピラミッドの中を暴れまわっていた。強敵が出ても紬のチートであっさり粉砕。罠にかかっても神楽が力技でそれを玉砕する。敵がグループ集団で襲いかかってもハヤテとナギのラブラブアタックでまとめて倒して大喝采！まさに海馬が言う「粉砕！玉砕！大喝采！」みたいな事をやっていた。

「な・・・何という暴れようだ・・・。」
この様子はロイドの部屋に置いてあるテレビに映っていた。その様子を見ていた幸村は口を開けて驚いていた。その時、いきなりテレビの画面は砂嵐となり男が現れた。
『くっそ～、何やってんだあいつら～。ドラクエ３を台無しにする気か～？』
「知りませんよ。」
『クッ！ならば俺の方から邪魔をしてやる！』
男はそう叫んだ後、姿を消した。
「しまった！下手したらナギ達に被害が！」
伊澄はテレビに向かったがすでに画面は砂嵐になっていた。

一方ナギ達は未だにピラミッドの中を荒らしまくっていた。
「ふ～こうなるんだったら町や城で情報を集めればよかったですね～。」
「いや、そんなの必要ないですよ。」
紬はミイラ男の包帯をグルグル回しながらハヤテの質問に答えた。
「あの・・・皆さん、もう少し静かにしましょう。ここは一応王家の墓」

ハヤテがこう言っている時にいきなり戦闘画面に入った。
マミーたちがあらわれた！
「仕方ない・・・行きますよお嬢様！」
「おう！」
ハヤテとナギのラブラブアタック！
マミーのぐんだんに４８５７１０９３８１９５０４２１６７２０のダメージ！
まものののむれをやっつけた！
「いや、お前達の方こそ少し静かにしろ！」
律はこう言った。
「ほあちゃあああああ！」
神楽は近道をするため、壁を粉砕していた。
「何やってるんですか？」
「見ればわかるアル。壁を破壊して近道を探しているアル！」
「いいんですか？」
梓は少し戸惑った。そんな中、いきなり男の声が聞こえた。
『貴様ら！何ドラクエを台無しにしている！』
そう言うと男はハヤテの前に現れた。
「新しい敵アルか？」
「そうみたいね。」
『へ？ちょっと待て！俺の話を』
男が戸惑っている中戦いが始まった！

おとこがあらわれた！
ハヤテとナギのラブラブアタック！
おとこに８４５８９６２７０９６８１０４９６７１のダメージ！
つむぎのこうげき！
おとこに９９９のダメージ！
かぐらのこうげき！
かいしんのいちげき！

おとこに１０３のダメージ！

「ちょっと待てェェェ

「待てェェェェェェェェ！ちょっと待てェェェェェェェェ！」
男は再び大声を出した。
「待てやテメーらァァァァァァ！」
「待ちません♪」
ハヤテとナギのちょうウルトララブラブアタック！
ゆうれいおとこに９９９

「お願いします。」
「その」
「お願いします。」
「あの」
「お願いします。」
「だか」
「お願いします。」
「だから内容」
「お願いします。」
「あの」
「お願いします。」
紬はこう言った後、パンチでピラミッドの壁を開けた。
「分かりましたァァァァ！今すぐにバラモスの所まで送りますゥゥゥ！」
男は泣きながらルーラの暗唱を唱え紬達をバラモス城へ送った。

その一方棺桶になった新八は・・・。
（うっうっ・・・誰も来ない・・・動けない・・・誰か助けてェェェ！）
心の中で叫んだ後、宿の方から麻婆豆腐を持った天使が現れた。
（天使さん！・・・あなた・・・やっぱり僕を助けてくれるんですね！）
天使は微笑みながら新八の棺桶に近づいてくる。
（ありがとうございますゥゥ！アンタマジで天使だよ！救いの天使だよ！）
新八はお礼を言った。だが天使は棺桶を椅子代わりに座り麻婆豆腐を食べ始めた。
（・・・え？助けてくれるんじゃなかったの？）
「・・・おいしい・・・。」
天使はただひたすら皿に盛られた麻婆豆腐を食べているだけであ

った。

次回！

いきなりバラモス城へ突入した紬達！ここでも奴らはバラモスがかわいそうになるほど大暴れを始めてしまう！そしてアリアハンの運命は・・・新八のどうでもいい運命は！次回、混沌学院『ゲームのボス戦のＢＧＭはなぜか神曲が多い』どうぞご期待！

「やってやるです！」

「殺ってやるです！」

「犯ってやるです！」

「誰ですか！私のセリフを変に改造したのは！」

「作者ァァァァ！俺はどうしたァァァァ！俺の出番はまだかァァァァァァ！」

「銀さんは黙ってて下さい！」

第４３話：（ドラクエ３編）：冒険の書はたまに消えるからカセットは大事に扱

おまけコーナー

初春「・・・もうバラモスのところですか・・・。」

インデックス「物語が進むスピード早すぎない？」

作者「気にするな！」

イーノック「そうだ、多分問題ない。」

雷電「ていうか紬ってこういうキャラだっけ？」

作者「俺が思うには紬はいろいろと謎がありすぎ。けいおんの１巻で唯が汗だくで運んでいたアンプだっけ？それを汗かかずに運んでいたり４巻の梓との話でいつのまにか姿が消えていたり・・・謎ありすぎだよ。」

ルシフェル「まさに超人だな。」

作者「そうそう、実は陰でいろいろと」

ギラン！

作者「・・・何？今の？」

イーノック「さぁ？もしかして紬がここに来て超人的なあれで」

シュン！

バキィ！

作者「あれ？何今の？」

初春「・・・あ、イーノックさんは？」

イーノック「ギャアアア

第４４話：（ドラクエ３編）ゲームのボス戦のＢＧＭはなぜか神曲が多い（前書

作者「今回はバラモス戦のところを書きました。」

佐天「ドラクエ３しかやってない人にしか分からないね・・・」

イーノック「皆。ドラクエもいいがエルシャダイも」

作者「宣伝するな！」

第４４話：（ドラクエ３編）ゲームのボス戦のＢＧＭはなぜか神曲が多い

バラモス城、今彼らはここにいた。なぜなら紬がファミコンに乗り移っている霊を脅してここにきたのだ。
「さて、あと少しで終わるね。」
「でもいいんですか？僕たちまだレベル低いですよ。」
ハヤテが言うようにまだ彼らはレベルが低い。まだ２０もいっていない。
「大丈夫よ、何とかなるよ。」
紬はそういうとバラモス城へ入って行った。

一方銀時は・・・。
スライムのこうげき！
クリフトに７のダメージ！
「何スライム相手に苦戦したんだあのバカァァァ！」
クリフトのこうげき！
スライムに１のダメージ！
「オイ！オメーザラキ使えねーとまともに戦えねーのか！」
「うるさい！私だって真面目にやってます！」
クリフトは銀時に向かってこう叫んだ。
「・・・・・・って喋るんかいィィィィィィィィィィ！」
銀時がシャウトしたのだがその隙にたった一匹のスライムによって銀時達は全滅してしまった。

で、紬達は・・・。
つむぎのこうげき！
はぐれメタルに９９９のダメージ！
はぐれメタルをやっつけた！

ナギはレベルがあがった！
「よっしゃ！またレベルが上がったのだ！」
「やりましたね、お嬢様！」
ナギはレベルが上がるのを喜んでいたのだが考えて見るとレベルが上がっても結局はチート技でバラモスを倒すだろう・・・。そんな事を考えていた。
「はぁ・・・どこだよバラモスは？」
「かなりめんどい場所にいるわよ。」
彼らはこんな会話をしながら歩いていた。出てくるモンスターを倒しながら。
「しっかしここのダンジョンめんどくせーなー。」
「そりゃそうですよ、何だってボスがいるダンジョン何ですから。」
律の愚痴に幽霊男はこう答えた。確かに実際のバラモス城はめんどくさかったｂｙ作者。てな訳で彼らは道に迷いながら城内を進んでいた。
「はぁ・・・はぁ・・・歩き疲れたー。」
「休みたーい。」
唯と律が座り込んでしまった。
「おい、二人とも。何休んでんだよ。」
「澪先輩の言う通りです。ここに最後の敵がいるんですよ。」
そんな2人を見て澪と梓はこう言った。
「だってー、どうせハヤテ君とナギちゃんのラブラブアタックで倒しちゃうじゃーん。」
「あとむぎの超人的パワーで瞬殺じゃん。」
「・・・あ！そうだ！」
紬が何か提案し、その後ハヤテとナギの所に行って何か言った。
「いい？1，2，3で行くわよ。」
「おう！」
「分かりました！」
彼らは壁に向かって歩き出した。

「1」
「2の」
「「「3！」」」
つむぎのこうげき！
ハヤテとナギのラブラブアタック！
同時に彼らは必殺技を繰り出した。壁が轟音を立てながら崩れていった。
「な・・・何やってんだむぎ達はァァァァァァ！」
「お？なぁハヤテ、バリアに囲まれている階段がバラモスの所じゃないのか？」
「そうですね！早速行きましょう！」
と言って先に行ってしまった。
「待てェェェ！私の話を聞けェェェェェ！」
後を追いかけるように澪達も走って行った。
「オイィィィィィィィ！アンタら無茶やり過ぎなんだよォォォォォォ！」
幽霊男も後を追って行った。

階段を下り、彼らはついにバラモスの所までたどり着いた！
「あのカバ見たいのがバラモスか？」
「そうですね。」
「いやーでけー体だなー。」
律はたちはこう言った。
「おわ・・・あんな強そうなの相手にするのかよ・・・。」
幽霊男は少し驚いていた。
「よし、早速あいつと戦うぞ！」
「ハイ！」
そう言ってハヤテとナギはバラモスの所に走って行った。
「よくきたなゆうしゃナギよ。」
「何だ、私が勇者扱いか。」

とまぁ、長ったらしい話を聞いた後、戦闘が始まった。
「皆！俺にすごい戦いを見せてくれェェェ！」
幽霊男はこう言った。
「分かりました！」
「私達に任せておけ！」
ハヤテとナギはこう叫んだ。

バラモスがあらわれた！
あずさはイオラをとなえた！
バラモスに６９のダメージ！
みおはマヒャドをとなえた！
バラモスに７９のダメージ！
ゆいはメラゾーマをとなえた！
バラモスに１０２のダメージ！
バラモスのこうげき！
ハヤテに９７のダメージ！
バラモスのこうげき！
ハヤテに１０２のダメージ！

「ぐっ！」
「大丈夫かハヤテ！」
「意外と手ごわい・・・！」
「仕方ない！回復は私がやる、むぎと神楽、私達の代わりに攻撃をしてくれ！」
「「ラジャー！」」
そう言って神楽と紬はバラモスに立ち向かった！

かぐらのこうげき！
かいしんのいちげき！
バラモスに１５０のダメージ！

つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎのこうげき！
バラモスに１０２のダメージ！
つむぎはバラモスのはらわたをひっこぬいた！
バラモスをやっつけた！

「ちょっと待てェェェ

「ああ・・・で、これでアリアハンに戻って王様に報告だ。」
「ええ。」

その後、一同はアリアハンの城へ行った。
「いや～これでめでたくドラクエ３も終わりか～、いや～今こそ待ちに待ったエンディングだ！」
幽霊男は嬉しそうにこう言うがハヤテとナギは少し汗をかいていた。
「この人・・・知りませんね。」
「ああ。この後の展開・・・すごい事になるのに。」
「ん？この後何かあるの？」
「い・・・いやあ・・・えと・・・」
ハヤテは言うのをためらった。だがその後、階段の方で神楽の声が聞こえた。
「おーい！何やってるアルかー？早く来るアルー！」
「あ、分かりました！」
ハヤテとナギは急いでアリアハン王の元へ向かった・・・。

次回！
ついにバラモスを倒したハヤテ達、だが真の敵が彼らの前に現れる！彼らの運命はどうなる・・・！そして元の世界に戻れるのか！
次回混沌学院『エンディングまで泣くんじゃない』ドラクエ３編、クライマックス！
「ヅラではない！桂だァァ！そして作者ァァ！俺の出番はまだかァァァァ！」
「ちょっと待つですの！だったら私とお姉さまの出番はいつですの！」
「ミクの出番は？」
「ワタシノデバンハコナイノ？ハヤテクントナギガイレバソレデイイノサクシャサン？」
「おいヒナギク！病んでる病んでる！」

第４４話：（ドラクエ３編）ゲームのボス戦のＢＧＭはなぜか神曲が多い（後書

おまけコーナー

作者「というわけでドラクエ３編も次回でクライマックスです。」

ルシフェル「そういえば人気投票はどうなったんだ？」

作者「ま～一応入っています。今のところメインキャラが人気。ちなみに途中経過で言うと後書きメンバーで若干だけど数名票に入っている。」

イーノック「誰なんだ？」

作者「今ここで言ったらダメだろ。後のお楽しみだ。」

初春「何かドキドキします。」

インデックス「わかる。私もちゃんと票が入っているか気になる。」

雷電「大丈夫か俺？」

作者「人気投票はまだまだ応募します！どんどん応募してください！一人何回でもいいです！ここ重要！」

第４５話：（ドラクエ３編）エンディングまで泣くんじゃない（前書き）

作者「今回でドラクエ３編クライマックスです！」

当麻「ってかＭＯＴＨＥＲのキャッチフレーズ使っていいのかよ・・・」

作者「別によくね？」

銀八「いいわけあるかァァァァァァァ！」

第４５話：（ドラクエ３編）エンディングまで泣くんじゃない

アリアハンの王の間、今ここでハヤテ達は盛大な拍手を受けていた。何故ならバラモスをやっつけたからだ。
「いやー、なんか嬉しいですね。」
「ああ。」
「はうううう・・・皆見てるよ～、どうしよう律～。」
「離れろ離れろ。」
そんな中、壮大なセレモニーが始まった。だがその時、辺りが暗くなり雷が轟き、城の兵士達が次々と消されていった。
「な・・・何だこれ？」
「あの～・・・言いにくいんですけど・・・実はバラモスはラスボスじゃないんですよ。」
突然のイベントで驚いている幽霊男にハヤテはこう話した。
「え・・・マジで？あれでおしまいじゃないの？」
「はい。」
「エエエエ

「一応あいつがラスボスだからな。」
ハヤテとナギは幽霊男にこう答えた。
「で、あいつはどこにいるの？」
「アレフガルドの大陸です。」

アレフアルドって何？の人の為のコーナー。
アレフガルトとは初代ドラクエの舞台となった大陸の名前です。
後に続編であるドラクエ２とゲームボーイアドバンスで発売された
ドラクエモンスターズキャラバンハートという作品にも出てきます。
気になる人は携帯アプリでやるか中古ゲームやでゲームボーイ版買
うか何かしらしてください。

「ま・・・マジで！嘘だろ！ここでアレフガルドが出てくるなんて・
・・！」
「・・・後マニアックですけどガライも生きています。」
「マジでマジで！じゃあドムドーラの町は・・・。」
「普通にあります。」
「ウオォォォ

もらってレベルを一気に上げてくれた。
「ふ～結構戦いましたね～。」
「そうだな、というより一体どうすればいいんだ？」
ナギはこう言った。まだ一体どこに何があるのか分からず、分からないのだ。
「う～ん、一体どうやってゾーマの所に行こうか・・・。」
「あ！」
ここで紬は何か閃いた。
「だったら私に任せて！」
と言ってパーティーの先頭に立ち歩いて行った。

ゾーマの城のある島の近く。ここはあるアイテムがないと渡れないのだ。
「どうするんですか？ここって確か（ネタばれ注意！）がないと渡れませんよ。」
「へー、だけど。」
紬は道具袋から何かを取り出して・・・あれ？紬さん？何でこっちをみｔ

バキィ！

グシャア！

しばらくお待ちください

「よし！皆、橋が出来たわよ！」
一同の目の前に突然と橋ができた。
「オィィィィィィ！今作者に何かしましたよね！」
「え？何のこと？」
「とぼけないでください！」
「空白の中にバキィ！とかグシャア！とか音が出てたぞ！」
「気にしない気にしない♪」
そう言うと紬は鼻歌を歌いながらゾーマの城へ入って行った。
「むぎー、その前に宿で休んで言ったらどうだ？」
「りっちゃんの言う通りだね。私もどこかで休みたいよ。」
唯と律がこう言った。
「そうね、じゃあルーラでアリアハンの宿に行こう！」
その後、紬はルーラを唱えアリアハンへ向かった。そして、６話の最後の部分につながって行くのであった。

で、ゾーマの城でも奴らは問答無用で大暴れしていた。途中で（ネタばれ注意！）とかあったけどあまり気にしなかった。そしてずっとむぎのターンでゾーマの奴をブッ倒しました。

一方男子寮にて。
「あ！霊の力が収まってきます！」
「本当か！」
伊澄と正宗と幸村がテレビの前に集まった。その後、テレビの画

面が光り輝き中からハヤテ達が飛びだしてきた。
「ナギ！ハヤテ様！」
「あれ？伊澄さん？どうしてここに？」
「霊を徐霊しようとここへ来たんですけど・・・終わったようですね？」
「どういう意味だ？」
伊澄は天井の方を指差した。天井にはファミコン世界にいた幽霊男がいた。
『アンタら～、ドラクエ３を最後まで見せてくれてありがとよ～。』
幽霊男はこう言った後、成仏した。

「は～昨日は散々な目に会いましたね～。」
「そうか？私はよかったぞ、ドラクエ３の世界を冒険できて。」
翌日の２Ｚにて、彼らは昨日起きたドラクエ３騒動についていろいろ話していた。
「で・・・僕はいつ元に戻れるんですか？」
後ろで新八の声が聞こえた。新八の姿はまだ棺桶のままだった。
「まだ棺桶だったんですか？」
「ええ・・・かなり苦労してますよ。」
棺桶状態の新八は何事もなかったように椅子に座った。
「普通に過ごしてますね。」
「でも意外と苦労してますよ。」
「おーい、テメーら。席つけー。」
銀時の声が聞こえた。声が聞こえて皆席についた。で、扉を開き銀時が中に入った。そしてクラス全員は目が点となった。銀時の姿は棺桶だったのだ。そして同じ事を心の中で叫んだ。
（アンタ何があったんだァァァ

第４５話：（ドラクエ３編）エンディングまで泣くんじゃない（後書き）

おまけ劇場

～ある日の２Ｎ～

ヴィーダ「なぁ、いつになったら私たちが出るんだ？」

シグナム「分からない・・・」

ヴィーダ「それにしてもこの作者本当に適当だよな、なのはを最初に出したときアニメ見てなかったくせに。」

シグナム「それでようやく某動画サイトですべて見たんだよな、あの作者。」

ヴィーダ「この先フェイトとはやては少し出番があるみたいだけど・・・私たちはどうなんだ？」

シグナム「まだ先だろう、あの馬鹿（さくしゃ）の事だから他の小説やいろんな事で忙しいのだろう。」

リィン？「そうです！無駄に多くの作品を書くとこんなことになるのです！」

ヴィーダ「ああ・・・でもお前はいいな、まだ出てないのに人気投票に入って。」

シグナム「まったくだ。」

おしまい

おまけコーナー

銀八「何だ今の？」

作者「今回から不定期で始めるおまけ劇場です。」

インデックス「何でやるの？」

作者「混沌学院も結構いろんなキャラがいるからたまにはこういう場で少しでも活躍させないとな～と思って。」

雷電「なんだその理由・・・」

一方通行「お前らしいな、後先考えずに無駄にこういうことやって後でひどい目に」

作者「それを言うな。後次回から普通の話をやります。お楽しみに！」

第４６話：占いって運勢がいい時にだけ信じるよね（前書き）

作者「今回はナルトが活躍します。」

パラガス「いろいろなキャラが出ますな。」

作者「しょうがないじゃん、だって何でもありの小説だもん。今回のＯＰは『遥か彼方』でお願いします！」

第４６話：占いって運勢がいい時にだけ信じるよね

『結野アナのブラック星座占い～。』
休日の朝、テレビから人気女性アナである結野アナの声が聞こえた。彼女は星座別に今日の運勢を言っていった。
『今日ついてない人は・・・今朝食でラーメンを食べていて額当てを装備していてほっぺに狐みたいなヒゲが書かれている人。今日死にま～す。』
その後、彼は口にしているカップラーメンの麺を吹き出してしまった。彼と言うのは２Ｋのナルト。月詠先生の教え子である。
「エエエエエエエエ！」
『ラッキーアイテムは赤い物。赤い物を装備して血生臭い体をごまかしましょう。』
「何のラッキーアイテムってばよ！全然ラッキーじゃねぇぇぇぇぇぇ！」
『というわけで、素敵な休日をお過ごしください。また来週～。』
「素敵な休日なんて遅れるかァァァァァァ！」
ナルトはテレビに向けてこう叫んだ。
「はぁ～今の占い何だってばよ・・・こんなの、ただの鬱要素しかないってばよ・・・。」
ナルトは後ろを向き同じ寮に住んでいるシカマルとサイの方を見た。
「でも所詮占いだからあまり当たる訳がない」
「これ、去年福袋で当てた赤のマフラー。大丈夫、派手で使ってねーから。」
ナルトはシカマルから赤色のマフラーを受け取った。そしてシカマルは部屋から出て行った。
「・・・サイは占いを」
「ナルト君、これ去年の福袋で当てた赤のジャンバー。大丈夫、派

手で僕は使ってませんから。」
ナルトはサイから赤色のジャンバーを受け取った。そしてサイは部屋から出て行った。
「・・・何だよあの二人・・・不安にさせるんじゃねーってばよ。」
と言ったその直後、ナルトの携帯が鳴り響いた。
「ん？メールか？」
そう言いながらナルトは携帯を開いてメールをチェックした。相手は同じクラスのサクラとヒナタ。二人のメールをチェックしてナルトは絶句した。二人とも同じ内容だったからだ。内容はというと。
『今日どこかに出かけない？』

混沌学院から少し離れた商店街、今ここにナルトはいる。両サイドにはサクラとヒナタがいた。
「ねぇ、どこかデパートに行かない？」
「あ、いいですね。」
というわけでナルトは両手に花の状態で近くにあったデパートへ行くこととなりました。
「大丈夫かな俺・・・」
ナルトは今朝の占いを思いだしていた。今日自分は死ぬ・・・。
「大丈夫だよ俺、所詮占いってばよ。あんなもんただの暗示」
「ナルト、どうしたのぶつぶつ言って。」
「どこか調子が悪いの？」
「あ、大丈夫ってばよ！どこも悪くな」
ここでナルトの目の前に巨大な看板が降ってきた。
「・・・・・・・・・・！」
「だ・・・大丈夫ですか！」
「バカヤロー！オメー何とんでもないミスをしてんだ！下手したら人が死んでたじゃねーか！」
「ヒェェェェ！スミマセン親分！」
デパートの屋上で看板を付け替える仕事をしていた2人組が上か

らこう言った。
「ナルト大丈夫！」
「あ・・・平気ってばよ！」
その後、彼らはデパートに入って行った。だがその姿をある男が見ていた。
「・・・ありゃ、２Ｋのナルト・・・両手に花ってどんだけモテモテ何だよあのクソ野郎！」
こう言ったのはおなじみ２Ｚのエロコック、サンジである。サンジは携帯を取り出し電話をかけ始めた。

ナルト達は２階の服売り場にいた。ちなみに今のナルトの衣装は今朝シカマルとサイから貰った赤マフラーと赤ジャンバーである。
「へぇ～結構いろんな服があるんだな～。」
「そうね、私達もあまりここに来ないからね。」
そんな感じの会話をしながら彼らはデパート内を歩いていた。ナルト達は喋りながら楽しい時間を過ごしていたのだが・・・。
「くたばれクソヤロォォォォォォォォォォォォォ！」
突然サンジがナルト目がけ飛び蹴りを放ってきたのだ！
「おわァァァァァ！何してんだオメェェェェェェェェ！」
「何って・・・見れば分かるだろーが！」
サンジは指パッチンをした、そして合図を待ってたかのようにエアガンを持った家康（迷い猫の方）と風紀委員長のゴリｒ・・・じゃなかった近藤他、男子生徒が現れた。
「な・・・何だってばよお前ら！」
「俺達は・・・」
「リア充抹殺隊！」
リア充抹殺隊はこう叫ぶと一斉にエアガンを発射した。
「オワァァァァァァ！何してんだオメーらァァァァァァ！」
「ハッハッハー！リア充くたばれェェェェェェェェェェェェェ！」
ナルトはサクラとヒナタを連れ、何とか壁の所まで逃げのびた。

「はぁ・・・はぁ・・・何やってんだあのバカ達は？」
「とにかく今はナルトを狙っているみたいね。」
「どうするの？」
「仕方ない、戦うしかないってば」
「見つけたァ！」
ここでサンジの声が聞こえた。
「ウワ！しまった！」
「驚く暇があったら一気に決めるわよ！」
サクラは右手にチャクラをため、一気にサンジの腹に目がけて殴りかかった。
「しゃーンなろォォォォォォ！」
「おお、サクラちゃん！俺の胸ゴフェェェェェ！」
サンジはメロリン状態のままブッ飛ばされ、天井に張り付いた。
「り・・・リーダァァァァァァァァァ！」
リア充抹殺隊はブッ飛ばされたサンジの方へ駆け寄った。ナルト達はその隙に上の階へ逃げ始めた。
「お・・・俺の事はどうでもいい・・・早くリア充を抹殺してくれ。」
傷ついたサンジはリア充抹殺隊にこう言った。だが家康が前に進み出た。
「サンジ、リア充抹殺隊の掟を忘れたのか？」
「・・・『傷ついた仲間を見捨てるな』・・・だろ？」
「この掟を作ったのはオメーだろうが。」
「だけど」
「俺らは皆サンジ・・・いや、リーダーに色々と助けてもらった。そんなあんたを見捨ててこの先いけねぇ！」
後ろの方で涙ぐむ声がい超えた。そしてサンジの目に涙が浮かんだ。
「・・・悪い。もうこの先自己犠牲的な言い方はやめる。」
「リーダー・・・」

「いいか！俺達はリア充抹殺隊！何が何でもリア充を倒すぞ！」
「「「「「「「「はい！リーダー！」」」」」」」」
リア充抹殺隊はここでまた深い絆を作った。だが。
「すみません。」
声が聞こえたので後ろを見たらバイト中で黒い笑顔のなのはが立っていた。
「あの・・・」
「えと・・・」
サンジと家康はとまどい、近藤はただ辺りを見ているだけ。
「・・・頭、冷やそうか。」
その直後、服売り場にて漢達の叫び声が轟き、それと同時にリア充抹殺隊は壊滅した。

３階のゲームコーナーにて。何とか騒ぎを回避したナルト達はここで休んでいた。
「サクラちゃん、ヒナタ、ジュース買って来たってばよ。」
「「ありがとう。」」
近くにあったベンチに座りナルト達はジュースを飲み始めた。
「はぁ～まさかこんな展開になるって思ってねーってばよ。」
「ええ。まさかあのバカ達がここにいるとは・・・。」
少しリラックスしていた。だが後にものすごい声がゲームコーナーから聞こえた。
「な・・・何だ？」
「どうやら太鼓の達人の方からだわ。」
「いってみよう！」
そう言ってゲームコーナーの太鼓の達人の方へ行ってみた。で、絶句した。そこには目を血走らせてものすごい勢いで太鼓を叩いているヒナギクの姿があった。
「ヒャーハッハー！マダヨ！マダマダオワラナイワヨ！ハヤテクンハワタシノモノナンダカラァァァァァァ！アーハッハー！ヒャーハ

ッハァァァァァァァァァァァ！」
「すみませ～ん、早く変わってくだ」
「ダマレゲミンガ！」
絶叫しながら太鼓を叩いているヒナギク。その姿はまさに阿修羅そのものだった。
「・・・ここから離れましょう。」
「「うん。」」
と言ってナルト達は階段で上へ上がって行った。

上へ上がりしばらく店の中を見ていたナルト達。そこでナルトは本屋にてある人影を見つけた。
「ん？あれさーカカシ先生と銀さんじゃね？」
ナルトが指さす方向には小説コーナーで会話をしながら立ち読みをしている２Ｋの副担のカカシと銀時がいた。
「カカシせ」
「待ちなさいナルト。少し先生達の様子を見てかない？」
「うーん・・・面白そうだな。いいってばよ。」
ナルト達はばれない様に少し後ろから様子をうかがった。
「うーん・・・見当たらないな・・・」
「というか本当にデパートにおいてあるのか？あの小説。」
「いやだってかなり前にここで売ってたんだけど・・・。」
「そうかそうか・・・お！あったぞ！」
銀時が歓喜の声を上げた。ナルトはどんな本か気になったので遠くから本の表紙を覗いてみた。
「どう？ナルト？」
「うーん・・・後すこ・・・」
ナルトは本の表紙を見て思った。というかやっぱりって思った。本のタイトルには『イチャイチャパラダイスＺ』と書かれていたのだ。
「やっぱり・・・」

「よしじゃあ早くレジに行こう。」
「そうだな。この姿をナルト達に見せられないからな。」
と言いながらカカシと銀時はレジに向かって歩いて行った。
「・・・行くか・・・。」
「「うん。」」

しばらくデパートの中を歩き回り買い物を終わらせナルト達は帰路に就くこととなった。
「いや～あの占い結局はずしてるってばよ。」
「占い？」
ヒナタが首を傾げてこう言った。その後、ナルトは二人に今朝の占いの事を伝えた。
「ハハハ。ナルトもそんな面があったんだ。」
「でも外れてよかったてばよ。」
「そうだね。」
話をしていたらペアルックで腕組をしているハヤテとナギを見かけた。
「あれって・・・２Ｚのハヤテとナギだよね。」
「ああ・・・外でも学院の中でも相変わらずバカップルってばよ。」
そんな事を話ししていたら。ドス黒い気配を感じた。ナルトが後ろを振り向くとそこには完全に目が死んでいるヒナギクが妖刀紅桜を持って立っていた。
「ひ・・・ヒナギク！」
「ってかどこから持ってきたの？あの武器！」
「ミ～ツケタ・・・ク・・・ククク」
ヒナギクは軽く笑うと紅桜を構えハヤテとナギに向かって走って行った。その衝撃でナルトは尻もちをついた。
「おわァァァァァァァァ！」
「ナギ！コレデオシマイヨォォォォォォ！」
「またヒナギクか。」

「仕方ありません。あの技を使いましょう。」
ハヤテとナギは何かの構えをとりヒナギクに突っ込んでいった。
「「喰らえ！愛のラブラブアタック！」」
ハヤテとナギの拳から激しい衝撃波が生まれた。そしてヒナギクが持つ紅桜と衝突をし辺りに激しい風を起こした。
「キャアアア！」
「サクラちゃん！ヒナタ！」
ナルトはサクラとヒナタを何とか安全な所に避難させた。
「俺がハヤテ達を止めるからサクラちゃん達はこの戦いで傷ついた人を治してくれってばよ！」
「「了解！」」
ナルトはチャクラを解放しハヤテとナギとヒナギクの所へ向かった。
「お前ら！戦いを止めろってばよ！」
「ハヤテクンヲテニイレルマデタタカイハオワラセナイ！」
「オメーのカタカナ表記はかなり読みづらいってばよ！いい加減元に戻れってばよ！」
「ナルトさん！一緒にヒナギクさんを倒してください！」
「いいのかよ！クラスメイトじゃねーか！」
「僕はお嬢様がいればそれでいいです！」
「お前原作から本当にキャラが変わり過ぎってばよ！」
とまぁナルトは戦いを止めるため色々と頑張った。
「お嬢様！もう一発ラブラブアタックを使います！」
「おう！」
「クックック・・・ダッタラワタシモゼンリョクゼンカイデタチムカウワヨ！」
「へ？ちょっ・・・お前ら・・・もしかして！」
ナルトは察した。ハヤテとナギとヒナギクは全力全快で必殺技を出すと。
「お前ら！止めるってばよ！こんな所で派手な技を使ったら」

「「ラブラブアタック！」」
「マジンケン！」
彼らから必殺技が放たれた。
「くっ、仕方ねーってばよ！」
ナルトは影分身をできるだけ多くだしその後、螺旋丸を作りだした。
「うおおおおおおおおおおおお！超多段螺旋丸！」
無数の螺旋丸とラブラブアタックと魔神剣が同時に衝突し膨大な衝撃を産み、彼らを飲み込んだ。
「で？何でこーなるってばよ？」
数日後、ナルトは病院に入院していた。全治1ヵ月の大怪我である。
「それはそうですよ、あれだけ大きな戦いでしたから。ね、お嬢様。」
「そうだな、ハヤテ。」
同じベッドの上でイチャイチャしているハヤテとナギ。ヒナギクの方はなぜか精神科に入院することとなっている。
「ま・・・まー、あの占いが外れてよかったてばよ。」
ナルトはそう呟きベッドの上でまた横になったが・・・。
「ハヤテ君、ナギちゃん。これ、私からの差し入れよ。
そうお妙の声が聞こえた。差し入れとはもちろんあの暗黒物質。
「え・・・いや・・・その・・・今僕とお嬢様はお腹いっぱいで・・・。」
「そう・・・あ。」
ここでお妙はナルトの方を見た。
「ナルト君。これ私からの差し入れよ。」
「へ？」
「食べてってね。」
「これ何だってばよ？化学兵器か何か？」

ナルトは言ってはいけない事を言ってしまった。そして数分後、ナルトの悲鳴が轟いた。ちなみにその後ナルトはそこから数週間、生死の境をさまよった。

第４６話：占いって運勢がいい時にだけ信じるよね（後書き）

おまけ劇場

～変態ども～

黒子「お姉さまァァァァァァ！」

御坂「何してんのよ黒子ォォォォォォ！」

ドッコォォォォォォン！

黒子「ア～レ～」

御坂「ったく・・・油断も隙もありゃしないわ・・・」

黒子「あ、待って、お姉さま～～・・・ふぅ・・・またあとでお姉さまの後を追い・・・クヒヒヒヒ」

イカ娘「ヒヤァァァァァァ！」

早苗「イカちゃ～ん待って～」

イカ娘「しつこいでゲソ！ブー！」

早苗「あぁっ、イカちゃんのイカ墨が！」

イカ娘「・・・今のうちに逃げるゲソ！」

早苗「あぁ、待って～。」

黒子「あの、ハンカチ使います？」

早苗「ありがとうございます・・・あなたも・・・まさか・・・。」

黒子「そうですわよ・・・」

その後、二人は熱く手を握った・・・

おしまい

おまけコーナー

銀八「またやってんのかよあの劇場・・・」

作者「まぁそんなことはどうでもいいから。」

当麻「よくねーよ！」

ドナルド「今思ったんだけど人気投票の期間はいつまでなんだい？」

作者「大体次の長編『バレンタインデー編』が終了次第投票も打ち切る予定。」

雷電「じゃあまだ時間はあるのか？」

作者「ええ。まだバレンタインデー編書いてるから。他の長編と比

べて長くなりそう。まだ書いてる途中だし。」

銀八「そうか！オイ皆！俺に投票を」

作者「だからそれを言うのはやめーい！」

第４７話：野外授業って何かテンション上がる（前書き）

作者「というわけで４７話が始まりま～す。」

銀八「オイオイ、あと少しで５０話じゃねーかはえーなおい。」

作者「時というのは早く流れるものですね・・・」

闇「言ってる事ジジ臭いですよ。」

作者「・・・ＯＰは『野に咲く花のように』でお願いします！」

第４７話：野外授業って何かテンション上がる

気持ちのいいくらい青く澄み渡った青空。その青空にいくつか雲が気持ちよさそうに浮いている。いま２Ｚの連中は科学の授業で近くの山のふもとまで来ていた。
「ヒーハー！じゃあ今から観察用の植物を採取・・・しない！」
「しないのかよ！」
いつも通りのイワンコフ先生。その後奴らは観察用の植物を探すため辺りに散らばった。
「あ、あまり遠くに行くなッシブル！」
新八はイワンコフ先生の声を聞きながら最初いた地点をブラブラしていた。
「いいのかな・・・あいつらを野放しにして・・・。」
新八は心の奥で思った。また何か起こると。

早朝早弁組は新八がいる時点から少し離れた場所にいた。
「なぁ、この葉っぱって天ぷらにしたらうまそうだよな。」
「そうだな、一杯もぎ取って後でサンジに頼んで天ぷらにしてもらおう！」
「賛成アル！ソースをかけて腹いっぱい食べたいアル！」
そう言った後早朝早弁組は観察用ではなく天ぷら用として名前も分からない葉っぱをもぎ取って行った。

その頃風紀委員組は道端を歩いていた。
「なかなか面白そうな植物がないな～。」
「近藤さん、そんなもんは適当に探せばいいんじゃないか？観察用だし。」
「そうだな。」

会話を終了したのだが、土方はなぜか違和感を覚えた。袖を見て見るとオナモミの実がひっついていたのだ。
「あ、オナモミがひっついてら。」
「ハハハ。懐かしいな。俺も小さい頃はこの実で遊んだな。」
そう言う近藤も体から左がオナモミだらけだった。
「おい、目茶苦茶ひっついているぞ。」
「え？マジで！」
近藤は焦りながらオナモミをとり始めた。そんな中、後ろから殺気を感じ後ろを振り向いた。そこにはかなり巨大なオナモミの実を持って土方に向けて投げようとした沖田の姿があった。
「何してんだオメー。」
「・・・いや～かなり大きいオナモミを手に入れたからかなりテンション上がって・・・それで・・・。」
「俺にぶつけようとしたんだな。」
しばらくの間を開き沖田は頷いた。その直後、沖田は巨大なオナモミの実を土方に向けてブン投げた。
「おわぁ！テメーやりやがったなァァァァ！」
土方は近くにあったオナモミの実を一気にはぎ取り沖田に向かった投げた。
「ヤロー！やりやがったなァァァァ！」
「お返しだこのヤロォォォォォォ！」
土方と沖田の壮大なケンカが始まった。そのおかげでオナモミが辺りに散らばる散らばる。
「おらァァァァァァ！」
「くたばれェェェェェェ！」
土方と沖田が同時に投げたオナモミが丁度西沢と近くにいたヒナギクの髪に引っかかった。
「あ・・・ヤベ。」
「しまった・・・。」
ヒナギクは髪に引っかかったオナモミを取ろうとするがそのおか

げで髪がくちゃくちゃになってしまった。
「・・・土方さん、沖田さん。ちょっといいですか？」
ヒナギクは無理矢理その場で戸惑っている土方と沖田を連れ遠くに離れた。しばらくして土方と沖田の悲鳴が聞こえた。
「ねぇ？何があったの？ってかまだ後ろの方にオナモミひっついてるー？」
「・・・学ラン脱いで調べればいいんじゃないですか？」
まだオナモミと格闘していた近藤に向かって西沢はこう言った。

御坂はイワンコフから少し離れた場所で植物を調べていた。近くにはクラウドとミクとリンがいた。
「う～ん・・・どっちにしようか・・・。」
御坂は両手に持っている植物を比べていた。そんな中、リンの泣き声が響いた。
「ん？どうした？」
御坂と近くにいたクラウドがリンの所にやってきた。
「え～ん、気持ち悪い毛虫がうじゃうじゃいたよ～。」
クラウドはため息をついてこう言った。
「何だ・・・そんな事で」
「そんな事じゃないよ！本当に気持ち悪かったんだから！」
リンは涙目でクラウドに寄って行った。
「ハハハ・・・私は元の場所に戻るね。」
御坂はこう言って元の場所に戻った。で、そこに不自然に動く植物が目に入った。
「な・・・何かしら？」
御坂はその場所に寄って行った。で、絶句した。なぜならその正体は黒子だったのだ。
「あ、おねえ」
「オラァァァァァァァ！」
飛びついて来た黒子をいつものように回し蹴りで撃退した御坂で

した。
「う～ん・・・」
騒ぎの中、ミクが唸り声をあげていた。
「どうしたミク？」
「いや、何かネギっぽい植物がないな～って思って。」
ミクの話を聞きクラウドは呆れた。

一方、チョッパーとレンは新八の近くで植物を採取していた。
「お！かっこいい形の葉っぱ見っけ！」
「どれどれ？」
チョッパーとレンの声がしたので少し興味を持った新八は彼らの手元を見て見た。チョッパーが持っていたのはかなり形の整った葉っぱだった。
「よし！これを観察しよう！」
「新八も遅れるなよ！」
と言ってイワンコフの元へ戻って行った。
「・・・僕も早く観察用の葉っぱを見つけないとな。」
新八もそう言って葉っぱを探し始めた。
「おっしゃー！見つけたー！」
ここで桂の声が聞こえた。新八が近寄って桂が持っている葉っぱを見てビックリした。
「桂さん・・・それ・・・何ですか？」
桂が持っているのは葉っぱではなくカプセルみたいなものだった。
「これか？フッフッフ・・・これは何か分からないが俺が観察してその正体を暴いてやろう！心配するな、新八君にも教えてやるからな！」
桂は笑いながら去って行ったが新八は頭の中であのカプセルみたいなものを思い返していた。
「まさか・・・不発弾じゃ・・・！」
新八が呟いたその直後だった。桂が去って行った方向で爆発音が

聞こえたのだ。
「・・・やっぱり・・・・。」
新八は少し心配したがまぁ所詮ギャグ小説なので死なないだろうと思い無視した。

バカ達が変な事をやらかしている中、ハヤテとナギは原っぱの所で寝そべっていた。
「いい天気ですね~。」
「そうだな～。」
そんな事を言っていたら一匹のチョウがハヤテの頭に止まった。
「あ、チョウだ。」
「そうですね。・・・近くで見たら意外とかわいいですね。まぁ僕のお嬢様にはかないませんけど。」
「ハヤテったら・・・・」
「本当の事です。」
しばらく二人は見つめあった。
「ハヤテ・・・・。」
「お嬢様・・・・。」
「ハヤテ・・・・。」
「お嬢様・・・・。」
「ハヤテ・・・・。」
「お嬢様・・・・。」
「ハヤテ・・・・。」
「お嬢様・・・・。」
「ハヤテ・・・・。」
「お嬢様・・・・。」
「ハヤ」
「何こんな所で見つめあってんだ?」
ここでいつの間にか二人の近くにいたゾロが声を出した。
「そんな暇があったら葉っぱでも探してろ。」

ゾロは二人のムードを木端微塵にした後去って行った。

「皆ー！そろそろ戻ってくるッシブル！」

遠くの方でイワンコフ先生の声が聞こえた。それに合わせ何かかんだで行動不能になった人以外イワンコフ先生の元へ戻ってきた。

「じゃあ早速学院に戻って観察をしま」

「せ・・・先生！」

ここで新八が学院の方を指さした。

「どうしたの？新八ボー・・・」

イワンコフは学院を見て驚いた。なぜなら学院は半壊していたのだ。急いで学院へ戻ると半壊した建物の中心部にある宇宙船があった。

「ま・・・まさか！」

新八は嫌な予感がした。その予感は命中してしまった。宇宙船の中から出て来たのは・・・。

「アッハッハ～！スミマセ～ン、昆布学院ってここですか～？アッハッハ～！」

その宇宙船に乗っていたのはかなり久しぶりに登場した坂本辰馬先生だったのだ。２Ｚの面々はバカのバカ笑いをただ呆然としながら聞いていたのだった。

第４７話：野外授業って何かテンション上がる（後書き）

おまけ劇場

～続、変態ども～

御坂「珍しい日もあるわね・・・２Ｎの早苗さんから『体育館倉庫へ来てほしい』って手紙が来るなんて・・・。」

イカ娘「あ、２Ｚの御坂じゃなイカ。」

御坂「あんたは２Ｎのイカ娘。あんたも早苗さんに呼ばれたの？」

イカ娘「いいや、私はお前のとこの黒子に呼ばれたでゲソ。」

早苗「あ、御坂さん。お待たせしました。」

御坂「いいわよ。で、用があるんでしょ？」

早苗「うん。さぁ、中に入って入って。イカちゃんもどう？」

イカ娘「仕方ないでゲソ・・・私も黒子に呼ばれているから。」

体育館倉庫内

御坂「で、用って何？」

早苗「フフフ。」

ガシャン！

ガチャン！

御坂「え？」

イカ娘「何でゲソ！・・・・って扉が閉まってる！」

黒子「フッフッフ・・・罠に引っ掛かりましたわね。」

御坂「まさか・・・黒子、アンタ鍵を閉めて」

黒子「その通り♪」

早苗「今の状態・・・誰も助けに来ない・・・二人っきりの空間・・・♪」

御坂「なんかいやな予感が・・・」

イカ娘「あ・・・あ・・・」

黒子「お姉さまァァァァァァァん！」

早苗「イカちゃァァァァァァァァん！」

御坂・イカ娘「「イギャアアア

おまけコーナー

銀八「何だ今の？全然めでたくねェェェェェ！」

作者「でもなんかやりそうじゃんあいつらなら。」

梓「だからって書かないでくださいよ！」

作者「しゃーねーじゃん。面白そうだったから。」

一方通行「あんた・・・いつか自滅するぞ。いろんな意味で。」

ドナルド「そうなったら僕が洗脳」

一方通行「それは止めい！」

第４８話：好きな漫画やアニメの最終回とかは何度も見ると異様に切なくなる

銀時「オイコラ作者ァァァ

第４８話：好きな漫画やアニメの最終回とかは何度も見ると異様に切なくなる

『次回、星くず☆ういっちメルル最終回！さらばメルル、お前も強（と）敵（も）の一人だ！どうぞご期待！』

テレビからこのようなナレーションが響いた。この瞬間、桐乃の脳内が真っ白に染まった。

「あー・・・・・・」

翌日、桐乃の様子が完全におかしかった。目は完全に死んでいて生気どころか何も感じず、口から出るものはため息だけだった。

「どうしたんだろ・・・桐乃。」

「確かに様子がおかしい・・・。」

その様子を見ていた文乃とシャナがこう言った。その時、教室のドアが開き、完全に生気を失ったサンジと家康が教室に入って来た。

「おわ！どうしたんだオメーら！」

その様子を見たルフィが驚き彼らに話しかけた。

「る・・・ルフィか・・・う・・・うっ・・・うっうっ・・・」

「な・・・何があった。」

サンジは息を吸い、大声でこう叫んだ。

「メルルが終わっちまうんだよォォォ

「メルルの最終回は私にとってもかなり重大なのよ！昨日だって何度涙を流した事か・・・。」
「桐乃・・・分かってくれるか。」
近くにいた家康が桐乃の肩を叩いた。
「家康・・・。」
「俺とサンジはメルルを毎週楽しみにしていた、それが最終回となると・・・うう、今日はネガティブ状態で朝飯が食えなかったんだァァァァ！」
「だったら今、朝飯食えばいいじゃねーか。」
窓の方で早弁をしていた悟空が声をかけた。
「それによー、どうせ最終回っつっても新シリーズが始まるだろ？ZとかGTとかリメイク版の改とか。」
「それ、あなたに関係する事じゃないの。」
悟空のセリフに対してシャナがこう言い放った。
「桐乃、アンタDVD持ってるんだからそれを見ればいいじゃないの？」
文乃がこう言った。
「DVDとテレビは違うのよ！」
「そうだ！途中にあるCMも立派な番組のうちだァァァァ！」
桐乃と家康がこう叫んだ。その後は難かギャーギャーしてきたので咲夜は桐乃の一撃によって気絶した新八を連れて自分の席へ向かった。

「結局桐乃元気を出さなかったな。」
授業が終わり新八とロイドとジーニアスはこう会話をした。
「そうだったね・・・というよりあんな理由で元気がないって・・・。」
「でも気持ちは分かるよ。僕だって大好きな番組が終わる時って何か切なかったもん。」
「ああ、分かる。だけどあれほど元気をなくすって・・・。」

「それほど大好きだったんだよ、あの番組。」
「だけどどうすればいいんだ？もし最終回になったらかなり落ち込むんじゃないのか？」
「あ～、それも考えられるなー・・・」
新八達はため息をついた。そこへ。
「どうしたオメーら？さっさと帰宅するか部活行けよ、教室の鍵閉められねーじゃねーか。」
銀時がやって来たのだ。
「あ、先生。」
「つーより何桐乃の事喋ってんだ？」
「実は・・・。」
新八は教の桐乃の様子の事を話した。
「んだよ、そんなくだらねー事で元気がなかったのかよ。」
銀時は呆れたようにこう言った。
「でも最終回の後、本当にどうなるんだろう。」
新八はこう言った。

一週間後。
『これで終わりよ！皆！私に力をォォォォォォォォォォォォ！』
『バカな！この俺様がこんなチビガキ一人にぃ！』
『私は一人じゃない！皆が！皆が私を応援してくれた！』
『クソ・・・チックショォォォォォォォォォォォォ

『新番組、天才！アミバ様！アミバ様が色んな敵を相手に大暴れ！どうぞご期待！ちなみにこの話は１００話を予定しています。』
『俺は天才アミバ様だァァァァ！』
その後はアミバの話が流れていたが桐乃は真っ白に燃え尽きていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「やっぱりこうなったか。」
「ああ。」
ロイドと新八は真っ白に燃え尽きた桐乃を見てこう言った。誰もが桐乃を心配したが何を言っても完全に無反応だった。
「て・・・てめーら・・・席つけ～・・・・」
完全にやる気を失った銀時が教室に入って来た。
「どうしたんですか先生！」
「・・・・・・・・・・・・」
その後、銀時は教室の前にある日めくりカレンダーの所へ行きカレンダーを次々とめくり始めた。
「あ、そう言えば結野アナが結婚するって・・・・。」
「・・・銀さん結野アナの大ファンだからね。」
その日から銀時と桐乃は完全に目が死んでいた。

「混沌学院コスプレキング決定戦？」
新八は目の前にあるチラシを見てこう言った。
「何だこれは？」
下にあったチラシを取り内容を見て見た。
『〇月◆日にコスプレキング決定戦を始めます！変装とかに自信のある人はぜひご参加ください！』
「よくこんな変な事やるな・・・うちの学院は・・・・。」
だが新八はある事を思いついた。これを使えば桐乃と銀時が元気を取り戻すと。新八はクラス中に協力を求めるため自分の教室へ向か

った。

次回！

ついに開催されるコスプレキング決定戦、新八達は桐乃に（ついでに銀時）元気を取り戻せる事が出来るのか！次回混沌学院『コスプレをする時には勇気と度胸とか何か色々と必要だと思う』どうぞご期待！

「お前は今までに食べて来たパンの数を数えた事があるのか？」

「ＤＩＯかよ！」

第４８話：好きな漫画やアニメの最終回とかは何度も見ると異様に切なくなる

おまけコーナー

銀八「あれ？いつもの劇場は？」

作者「ネタがないため今回はお休みです。」

パラガス「そうですか・・・」

銀時「オイコラァ！俺の出番はいつだ！いつ俺が活躍するんだァァァァァァァァ！」

作者「オメーしつこい！」

銀時「たりめーだ！テメーから出番をもらうまでずっとしつこく」

作者「おーい、ドナルド。この人洗脳しちゃって。」

ドナルド「分かったよ。ランランルー。」

銀時「あ、ちょ、おま・・・ワカリマシタ、イマスグニモドリマス。」

作者「よし、これにて一件落着。」

一方通行「いいのかこれで？」

第４９話：コスプレをする時には勇気と度胸とか何か色々と必要だと思う（前書

一方通行「・・・あれ？コスプレキング決定戦って・・・文化祭の時に」

作者「今回のＯＰは『カートニアゴ』でお願いします。銀魂アニメ再開おめでとう！！初めっからあの話は」

一方通行「オイ！話聞けよ！」

第４９話：コスプレをする時には勇気と度胸とか何か色々と必要だと思う

てな訳でコスプレキング決定戦の日になりました。どこからか来たか分からないがたくさんのコスプレイヤーが来ていた。
「やっぱり凄いな・・・この大会。」
「ああ。」
新八とロイド達の周りには見た事のあるアニメや漫画やゲーム、更にはドラマのキャラのコスプレイヤーが来ていた。
「レインボーブリッジ・・・封鎖できません！」
「僕は死にましェェェん！」
「恥を知りなさい！」
というようなドラマのキャラやら。何か色々と聞いた事のある名台詞を言いまくっているのだ。
「すごいね、今年も。」
「うん。」
後ろの方でなのはとかなで、もとい天使の声がした。
「なのはさん、天使さん。」
「あ、新八君達。」
「なのは達も来てたんだ。」
「うん、今回も再現率とか高いね。」
なのはは辺りを見回した。辺りには全身初代仮面ライダーの衣装でベルトとかも完全に再現しているし、ダンボールで作っただろう、ガンダムもいる。
「あれは・・・ガンダムじゃない！」
刹那がこんなこと言っているが無視した。だが新八の方はあのキャラのコスプレがいるかどうか探していた。あのキャラと言うのはメルル。もし見つけたら桐乃に合わせたいのだ。
「あ、新八くーん！ロイドくーん！エミルくーん！」

どこかで女の子の声が聞こえた。振り向いたらメルルの格好をした放課後ティータイムが立っていた。
「み・・・皆さん・・・何やってるんですか？」
「何って、これで桐乃を元気付けようとしてるんだよ。」
「そ・・・そうなんだ。」
「ああ・・・だからって俺らも巻き込まないでほしいぜ・・・。」
そう言うのは土方、その姿はメルルだった。その後ろには同じくメルルの格好をした桂やクラウド、御坂などがいた。女の場合は良いけど男のメルルって・・・キモッ！と新八は思った。
「新八君、ロイド、エミル。君達もメルルの格好をするんだ！」
厚化粧をした桂がこう言った。その後、上からメルルの格好をしたハヤテとナギに捕まり強制的に連れてかれた。
「「「た・・・助けてくれェェェェェェェ！」」」
なのはと天使はこの状況をただ黙って見ているだけであった。

一方桐乃の友人である2Eのあやせはこの状況を見て驚いていた。何で学院のイベントでこんなのをやるのか訳が分からなかったのだ。さらに隣にいる桐乃は未だに元気がない。桐乃がオタであるという事は知っていたがこのイベントを見ても元気が出ないという事はよっぽどメルルの最終回が悲しかったんだろう。と思っていた。
「メ・・・ルル・・・メ・・・ルル・・・」
「桐乃・・・とにかく学院内に入ろう。」
「おっ！桐乃じゃねーか！」
そう声を出したのはメルルのコスプレをした悟空。隣には恥ずかしさのかけらもないルフィとチョッパーと神楽がいた。
「・・・メルル！」
桐乃は目を開けたが目の前の光景を見て再び元気を失った。
「き・・・桐乃！大丈夫？」
「おっかしーなー？メルルを見て元気になると思ったけどよー。」
「いや、ならないから、元気にならないから！」

首をかしげる悟空を見てあやせはこうツッコミをした。
新八達は恥ずかしかった。当たり前だ。今はメルルの格好何だから。
「いくら元気を取り戻すっても・・・」
「これはやり過ぎだよな・・・」
「ええ・・・」
完全にうなだれる新八達、そこに声が聞こえた。
「ハッハッハ！お似合いだな、その格好！」
「その声、２Ｎの海馬君？」
新八が顔をあげたらそこにはブルーアイズが立っていた。
「エエエエエエエ！何これェェェェェェ！」
「見れば分かるだろう！俺の嫁、ブルーアイズホワイトドラゴンだ！」
その後、笑い声を出しながら海馬の嫁、ブルーアイズホワイトドラゴンは去って行ったが・・・。
「あ、ブルーアイズだ！」
「だっせー！まだあのクズカード使ってる奴いるのかよー！」
「今はやっぱりスターダストだなー！」
近所の子供たちにこう言われたのだ。
「何がクズカードだァァァァァァァ！」
海馬が中から出てきた。当然子供達は驚いて去って行った。

一方桐乃の兄の京介は適当に辺りを歩いていた。
「何だよ・・・この学院。」
この大会を見て完全に呆れていた。そんな中、誰かと肩が当たった。
「あ、すみません。」
「あーいいよいいよ。」
声の主を見て京介は驚いた。声の主はルイージだったのだ。

「オエェェェ

「ど・・・どうかしましたか？」
誰かが声をかけて来たのだ。その声の主はメルルの格好をした新八だったのだ。
「め・・・メルル・・・男。」
京介はこう呟いたのであった。

次回！
妹、桐乃の為に兄、京介がついに動く！新八と共に２Ｚの面々を探しに行くがまたまた珍騒動に巻き込まれる？次回混沌学院『この話も何か長くなりそうだ・・・大長編にしようかな？ｂｙ作者』どうぞご期待！
「君が泣くまで殴るのをやめない！」
「ジョジョかよ！」
ジョジョだよ！

第４９話：コスプレをする時には勇気と度胸とか何か色々と必要だと思う（後書

おまけ劇場

～図書室のロビン先生～

混沌学院には図書室がある。どこの学校にもあるのだが。ここの担当はロビン先生。彼女がいるから図書室の平和は守られるのだ！おや？今図書室の方で大きな声を出す奴がいるようですね。

ブロリー「カカロットォォォォォォ！」

悟空「ブロリー！こんなところで暴れるなよ！」

ブロリー「カカロットォォォォォォ！」

ロビン「あら・・・うるさいわね・・・」

そこでロビン先生は目をつぶった。その後、ブロリーの背中から手が生えた。

ロビン「・・・クラッチ！」

ロビン先生が叫んだ。ブロリーの後ろから生えてるてがブロリーを拘束し背骨を折った。

ブロリー「ギャアアアアアアアアアアア！」

ブロリーを倒した。だがそんな中。

土方「何やってんだ沖田ァァァァァァァァァァァァ！」

沖田「くたばれ土方ァァァァァァァァァァァァ！」

ロビン「・・・はぁ・・・・」

ため息をついたその後、二人の背中からまた手が生えた。

ロビン「・・・クラッチ！」

土方・沖田「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！」」

二人は悲鳴を上げ倒れた。ブロリー達は背骨を折られ気絶してしまったが近くにシャマル先生がいる保健室がいるので2秒で治ります。てな風で図書室の日常はこんなんです。おしまい。

おまけコーナー

作者「いや～まさかこの後でブルーアイズのデッキを作るとはな～。」

梓「作ったんですか！」

作者「友達とな。レシピは次のようです。」

モンスター
青眼の白龍×3
白龍の聖騎士×3
マンジュ・ゴッド×3

ブラッド・ヴォルス×3
メタモルポッド
ザ・カリキュレーター
カオス・ソーサラー
オネスト

魔法
白龍降臨×3
サイクロン×2
思い出のブランコ×2
死者蘇生
ハリケーン
儀式の準備
ブラック・ホール
高等儀式術
未来融合―フューチャー・フュージョン
滅びの爆裂疾風弾
エネミーコントローラー
融合

罠
強制脱出装置×3
神の警告×2
聖なるバリア―ミラーフォース―
激流葬
リビングデッドの呼び声

エクストラ
青眼の究極龍

使い方

ただブルーアイズで殴る。融合で白龍の聖騎士を出して効果でブルーアイズ。隙あらば究極龍、そしてバーストストリーム！相手のシンクロ対策で緊急脱出装置、神の警告があります。ま～回れば強い。

作者「以上のようなデッキです。素材がある人は作ってみたら？では今回はこれで。」

第５０話：この話も何か長くなりそうだ・・・大長編にしようかな？ｂｙ作者

作者「いや～５０話到達しちゃったね～。」

初春「そうですね。」

銀八「結構頑張ったな。オメー。」

作者「ああ、あいさつは長くなるので後書きにて話ます。ＯＰは『めてお☆いんぱくと』でお願いします。」

第５０話：この話も何か長くなりそうだ・・・大長編にしようかな？ｂｙ作者

京介は２Ｚの面々を見て驚いていた。まず１つ、格好。男女問わず皆メルルのコスプレをしていたのだ。しかもドラゴンボールの悟空まで（ついでにヤムチャ）。そして２つ、その理由が妹である桐乃を元気付けるため。

「２Ｚの皆・・・」

「アンタが桐乃の兄か。」

メルル衣装の土方がこう言った。

「あ・・・ああ・・・。」

「どうですかぃ？これで桐乃は元気が出ますかね？」

沖田がこう言った。

「さ・・・さぁ？」

「とにかくこれでコンテストに出て見よう。」

張り切ったルフィがこう言った。

「コンテスト？」

「何だ、知らないのか？コスプレキング決定戦にはその名のとりコスプレキングを決める大会があるんだよ。」

「で、それに出るつもりなのか？」

「おう！」

ルフィ達は張り切っていた。だが京介は確信していた。これは駄目だと・・・。そんな中、チャイムが鳴った。

『コスプレコンテストに出演する生徒、または先生。そろそろ集合の時間です。ステージの方へ集まってください。』

「おっ、そろそろ時間だな！」

「桐乃によろしくな！」

そう言った２Ｚの面々は行ってしまった。

「・・・ありゃ無理だろ・・・」

京介はそう呟き妹を探しに出かけて行った。

一方あやせと行動している桐乃は未だにグロッキーモードだった。

「メ・・・ルル・・・メ・・・ルル・・・」

「桐乃・・・大丈夫？」

「メ・・・ルル・・・メ・・・ルル・・・」

「どうしよう・・・」

あやせはため息をついた。

「ここにいたのか。」

「あ・・・兄貴・・・？」

前から京介がやってきた。

「２Ｚの連中から聞いたぞ、お前・・・最近元気ないってな。」

「だから・・・何？」

京介は有無を言わず二人をステージに連れてった。

『レッディースエェェェェンドジェントルメン！今からァ、コスプレコンテストがァァァァはァァァァじィィィィまァァァァるゥゥゥゥよォォォォ！』

司会者の超ハイテンションの一言によってコンテストが始まった。

「な・・・何これ？」

「いいから見てろって・・・おい桐乃。」

「何？」

「お前、いいクラスメイト持ったな。」

「え？」

桐乃は京介が言った事が分からなかった。今は。しばらくして司会者がまたハイテンションで次の参加者を説明した。

『次はァァァ！なんと！クラス全員で参加だァァァァァァァ！ではお願いします！』

こう言うと前の方からメルル衣装の２Ｚが現れた。その瞬間、誰もが笑い始めたがルフィと悟空が前に出て何かの旗を広げた。その

瞬間、誰もが笑いを止めた。その旗にはこう書かれていた。
『桐乃！元気を出せよ！クラス一同より』
桐乃はこれを見て言葉を失った。
「桐乃、皆オメーの事を心配してたんだよ。クラス全員がな。」
「み・・・皆・・・。」
桐乃の目から涙が出てきた。
「桐乃ォォォォ！これ見て元気出せェェェェェ！」
ルフィの雄叫びが聞こえた。そしてクラス全員の声が桐乃の耳に入った。
「ありがとう・・・皆・・・ありがとう・・・」
桐乃は声を押し殺しながら泣き始めた。

コンテストは進み、色んなコスプレをした奴が現れた。
「私こそが・・・ガンダム！」
「貴様は歪んでいる！俺がガンダムだ！」
「いいや、おとめ座の私こそガンダムだ！」
「違う！俺達、ソレスタルビーイングこそガンダムだ！」
「違うなぁ、私こそガンダムだ！」
ガンダムのコスプレをしたグラハムと刹那のくだらないガンダム口論が始まったりしたが誰もが無視した。そんな中、２Ｚの面々が桐乃の所へ来た。
「どうだった？俺達のメルルコスは？」
「正直似てなかったけど・・・ありあと。あと・・・ごめんね、皆に心配かけて。」
「いいって、いいって！俺たち仲間じゃねーか！」
ルフィが肩を叩いた。京介とあやせは桐乃の顔を見て安堵した。なぜなら彼女の顔に笑みが戻ったからだ。
『では最後にスペシャルゲストを呼びたいと思います！』
この言葉を聞いて誰もがステージ前に注目した。そして何かのＢＧＭが流れた。

「こ・・・この音楽はッ・・・・！」
突然桐乃が声を上げた。それはメルル衣装のサンジと家康もそうだった。しばらくしてステージの上に一人の女性がメルル衣装で現れた。
「ウオオオ

」
「・・・・・こりゃ当分駄目だな。」
「・・・はい。」
銀時が元気になったのは数ヶ月後だという・・・。

第５０話：この話も何か長くなりそうだ・・・大長編にしようかな？ｂｙ作者

おまけコーナー特別編　作者より一言

今回の話で混沌学院は５０話を突破しました。ここまでくれたのは応援してくれている皆様方のお陰です。何か企画やろうかなと思いましたが只今人気投票中なのでできませんがいつかまたこういったものをやりたいと思います。人気帳票については５２話より始まる長編、バレンタインデー編が終了次第打ち切りたいと思います。バレンタインデー編は過去の長編と違っていろんなキャラが出てきます。どうか期待してください！では銀凪でした！

第５１話：掃除の時間はかなりだるい（前書き）

作者「いや～人気投票盛り上がってるね～。」

梓「そうですね。」

ブロリー「というよりいつ終わるんだ？」

作者「それは後書きにて書きます。ＯＰは『天体観測』でお願いします。」

パラガス「なぜ天体観測何だ・・・？」

第５１話：掃除の時間はかなりだるい

放課後、今２Ｚの連中は教室内にいた。まだ銀時が来てない為ワイワイガヤガヤとうるさかった。
「ギャーギャーギャーギャーうるせーんだよ、モンハンの最新作が出るんですかコノヤロー。」
気だるい声を出しながら銀時が入って来た。銀時はチョークを持ち、黒板に文字を書き始めた。黒板にはこう書かれていた。
『校内一斉大掃除』
この文字を見て誰もがブーイングを上げた。
「何で大掃除するんですかー！」
「たりめーだろ、そりゃ何日も掃除されてねーからだよ。」
「じゃあ先生、土方も掃除していいですか？」
「勝手にしろ。」
「じゃあ先生、沖田を掃除していいですか？」
「勝手にしろ。」
その後、教室の後ろで土方と沖田の喧嘩が始まった。
「後はお前らで適当に掃除場所を決めて掃除しろ。」
そう言って銀時は去って行った。

「あ～おにぎり食べたいな～。」
「太子先生！邪魔！」
「あ、ごめんごめんご」
「あ！先生気をつけて！水が入ったバケツがあるから！」
「オヒャア！」
２Ａの教室にて、完全に聖徳太子先生は邪魔者扱いにされていた。
「ヒ～、何で私だけこんな扱いなんだ～。」
「さぁ？」

泣きすがる太子にただ困惑するしかなかったネギであった。
「ネギ先生、そんな馬鹿はほっておいたら？」
生徒であるうさみちゃんがこう言った。
「誰が馬鹿だ～、私は摂政だ～。」
「こんな時代、摂政もくそもないわよ。」
「チクショ～。」
「まぁまぁ、二人とも。」
ネギが何とか二人を止めた。だが。
「アヒッ！何かつまずいだ！」
太子は下にあったバケツを足に引っ掛けこけてしまった。さらに。
「ファッ！」
木乃香の胸をもんでしまった。
「あ、ゴメン。」
「きィィィィィィィさァァァァァァまァァァァァァァァァァ！」
太子の後ろで阿修羅と化した刹那（ネギまの方）が刀を持って太子を睨んでいた。
「あ・・・あの～・・・すみませ～ん・・・」
「許さん！」
その後、刹那（ネギまの方）は太子を斬り刻んだ。
「しつれーしまーす。」
後ろの扉からクラウドと山崎が教室に入って来た。
「ネギ先生、スミマセンが雑巾余ってますか？銀さんがサボって雑巾を用意してこなかったんですよ。」
「そうですか、あの人・・・お登勢理事長の話聞いてなかったからな～。」
「ボロ雑巾ならありますけど。」
刹那（何度も言うけどネギまの方）は今さっき斬り刻んだ太子を渡した。
「・・・それ、アホの太子先生じゃ・・・」
「何ですか？それは。」

「・・・まぁいい、山崎、このボロ雑巾を借りよう。」
「エエエエエエエエエエエエエエエ！」
その後、クラウドと山崎はボロ雑巾を使って窓を拭いていたのだが・・・。
「これ・・・やけに重・・・い・・・」
「グググ・・・やっぱり雑巾を貸してもらった方が・・・」
ズルッ！
「あっ、ヤベ！落ちちまった！」
「ポピィィィィィィィィィィ！」
ボロ雑巾は
「誰がボロ雑巾だァァァァ！」
・・・太子は地面に落下していった。
「何で私がこんな目にィ～。」

早朝早弁の会の奴らは購買部へ来ていた。
「いや～助かるね～、これで賞味期限ぎりぎりのものが処分できるからね～。」
「何言ってるアルか！食べ物は腐りがけが一番うまいネ！」
「おう！何か食いもん関係で何かあったら言ってくれ！」
「オラ達が駆けつけてやるからよ！」
神楽、ルフィ、悟空はこう言った。
「助かるわぁ、後これもお願い。」
「「「おう！」」」
3人はただ余り物を食べ続けていた。
「あいつ等はいいな・・・楽で。」
「ああ。」
この様子を見ていた土方と近藤がこう呟いた。
「さて、俺らも水道を掃除しねーとな。」
「ああ、確か沖田のバカが先に行ってたが」
バシャアア！

土方の顔面に水が掛った。
「ありぃ？ゴミだと思ったら・・・ゴミの土方さんじゃありませんか。」
「・・・何の嫌がらせだ？アァン？」
「いや～ゴミかと思って水をかけようとして」
「・・・わざとだろ。」
沖田は少しの間をおいて軽く返事した。そしてダッシュで逃げて行った。
「あ！コラ、テメー待ちやがれェェェェェェ！」
土方もダッシュで沖田を追いかけて行った。
「ちっ、あのバカどこ行きやがった！」
土方は沖田を追って水道の近くへ来ていた。だが沖田の姿は見えなかった。辺りを見回すと突然後ろからバケツを持った沖田が土方を襲った。
「くたばれ土方ァァァァァァ！」
「させるかァァァァァァ！」
一瞬のすきを見て、土方は沖田の持つバケツを奪い取り、逆に水をぶっかけてやった。
「うぎゃあああ！」
「へっ、ざまーねーな。」
「なんてなァァァァァ！」
沖田は後ろに隠し持っていたバケツを持ち、土方に水をぶっかけた。
「おわぁぁぁぁぁぁ！」
「よっ、水も滴るウゼー男！」
「・・・こォんのォォォォォ！オメーは今ここでブッ倒してやるゥゥゥ！」
「とうとう正体を現したな！土方ァ！」
土方と沖田の水かけ合戦が始まった。だがこの合戦はすぐに終わった。

「「「きゃあ！」」」
「へ？」
女子の悲鳴が聞こえたので土方は悲鳴が聞こえた方を見るとそこにはびしょ濡れのなのはがいた。そして同じくびしょ濡れのフェイトとはやても。
「・・・沖田・・・謝れ。」
「今のは土方さんが悪いんじゃないんですかぃ？」
「いやいや、お前が悪いって。」
「土方さんが悪いんでィ。」
「だからお前だって。」
「だから土方さんだって。」
「お前だって。」
「今のは土方の罪で。」
「お前の罪だって。」
「お前のせいでさぁ。」
「違うってお前のせいだって。」
「俺は悪くありません、土方さんが悪いんでィ。」
土方と沖田の口喧嘩が始まってしまった。そんな中、なのははどす黒いオーラを発していた。
「フェイトちゃん、はやてちゃん！一気に行くよ！」
その後、巨大なビームと共に土方と沖田の悲鳴が轟いた。

一方２Ｚ教室ではサンジ、ヒナギク、御坂、九兵衛、東城、桐乃が掃除していた。
「よし、机を運ぼう。」
九兵衛が桐乃の机を動かそうとした。
「九ちゃん、待った！これは自分でやるからいいよ！」
「桐乃殿？・・・まぁいいか。」
桐乃はあわてて自分の机を動かしたがバランスを崩して机を倒してしまった。

「オイオイ大丈夫か？」
ジャンプ片手に銀時が教室へ入って来た。
「あ・・・あああ！」
「あん？」
銀時はその目で見た。桐乃が何かを隠すのを。
「おい、何隠した？」
「へ？何の事？」
「いいから、今お前の後ろに隠した奴、先生に見せろ。」
「私・・・分かりま」
「とぼけるなよ、今さっき見たんだから。」
桐乃は渋々後ろに隠したものを見せた。それは本で扉絵にメルルのイラストだが表紙に（ピーーーーー！）されているイラストがあった。
「何だこれ？」
「・・・メルルの同人誌です。」
銀時は桐乃の机を見回した。辺りにメルルの同人誌が散らかっていた。
「ったく、こんなもん学校に持ってきて・・・いいか？しばらくは先生が預かっておくから。」
銀時はこう言いながら同人本を開いて読み始めた。
「って、何読んでるんですか！」
「オイオイ、これヤバ過ぎだろ。何で（ピーーーーーー！）とか（ピーーーーーー！）とか（ピーーーーーー！）をやってんだ？エロ過ぎだろ。」
「先生、どんなもんですか？」
ここでエロコックのサンジもメルルの同人誌を読み始めた。この光景を見た御坂達は駄目だこりゃ！と思った。
「・・・さて、バカ共は置いといて机を」
「大丈夫です！私の机は自分で運びますから！」
東城が慌てて自分の机を運び始めたが慌てたため机をひっくり返

してしまった。そして中から九兵衛の写真が数枚、机の中から出て来たのだ。
「おい、これは何だ？」
九兵衛がドス黒いオーラを発して東城に聞いた。
「これはいずれ作る若のアルバム用の写真で」
「では何で入浴や着替えの写真があるんだ？」
「これも思い出の一つで」
九兵衛はバカを窓に向けてぶっ飛ばした。
「・・・あの・・・そんな馬鹿な事やってる暇があったら机を」
御坂は近くにあったヒナギクの机を運ぼうとしたが・・・。
「ああ！大丈夫！自分の机は私でやるから」
ヒナギクも自分の机を運ぼうとしたがバランスを崩して机を倒してしまった。そして机の中からハヤテの盗撮写真が出て来たのであった。
「・・・もう・・・どうにでもなれ。」
御坂はバカ共を無視して掃除を始めた。

「今日もいい天気ですね。お嬢様。」
「そうだな。ハヤテ。」
ハヤテとナギは外の庭で寝そべっていた。
「・・・む。」
「何ですか？」
「・・・甘えても・・・いいか？」
顔を赤くしてナギはこう言った。そしてハヤテは笑顔でこう言った。
「いいですよ。」
答えを聞いたナギはハヤテに抱きつき、ハヤテは優しくナギを抱きかかえるようにした。
「テメーらァァァァァァァァ！掃除をしろ掃除をォォォォォォォォ！」

この様子を見ていた新八が怒鳴った。
「ったく・・・何やってんだか。ゾロさんは道に迷うしヤムチャさんはなぜか爆発するし・・・はぁ。」
新八は大きなため息を出しながら草むしりを始めた。
「よー、頑張ってるなー。」
学院の方からスネーク先生と松平先生がやって来た。
「スネーク先生、松平先生。」
「何だ、新八だけか？」
「他の連中はなぜかいません。」
新八は後の連中の事について2人に話した。
「・・・予想はしてたけど・・・。」
「おいスネーク、奴らを何とかしておけ。俺が草むしりをやるから。」
「え？いいんですか？」
「おじさんをなめちゃあいけないよォ。」
松平は上着を脱ぎ、草むしりを始めた。
「ドンペリパワーを今ここで発揮してやブルァァァ

新八は思った。下手したらあのバカップルがヤバい意味で暴走して・・・この小説が１８禁になり・・・。
「何やってんだオメーらァァァ

音が響いた。誰もが墜落地点へ向かい、その現場についてびっくりした。そこには宇宙船があったからだ。
「この展開って・・・まさか。」
新八の一言により２Ｚの面々は後ろに下がった。そして宇宙船の持ち主が現れた。
「アッハッハ～。昆布学院ってここ」
「結局こんなオチかィィィィィィィィィィィィィィィ！」
２Ｚの面々は宇宙船の持ち主である辰馬に飛び蹴りを浴びせたのであった。

次回！
２月１４日、バレンタインデー、もちろん混沌学院でもこのイベントが近づくたび全ての男女が別々の意味でドキドキする。しかし、そのバレンタインデーを木端微塵にしようとするバカがいた！次回混沌学院バレンタインデー編に突入！『チョコレート幻想』どうぞご期待！
「ったく・・・やれやれだぜ。」
「第２部のセリフはどうしたんですか？」
・・・ジョジョで知ってるのは１部と３部と４部と５部だけです。
「オィィィィィィ！しっかりと読めよォォォォォ！」

第５１話：掃除の時間はかなりだるい（後書き）

おまけ劇場

～高杉～

２Ｅにはある人物がいる・・・高杉・・・そう。銀魂の高杉である。今宵は彼の学院生活の日常を見てみよう。

２Ｅ教室。高杉はＰＳＰの画面をずっと見ていた。彼のＰＳＰからにはあるビデオが流れていた。

高杉「・・・いつ見ても泣ける・・・うっ・・・」

彼が見ていたのはフランダースの犬の最終回で会った。

高杉・・・ここでは普通の生徒です。２Ｅの皆から頼りにされています。

おしまい

おまけコーナー

銀八「・・・あれ？高杉のキャラあんなんだっけ？」

作者「オメーさぁ、銀八先生リターンズ見た？高杉のキャラ意外だったぞ。まさか」

当麻「ネタバレになるから言うな！それよりいつまで何だ？人気投票？」

作者「えーっと、バレンタインデー編終了時にします。詳しい事はまたバレンタインデー編終了時にいいます。」

銀八「皆！そろそろクライマックスだ！俺に投票」

作者「ハイそんなこと言わなーい！」

第５２話：（バレンタインデー編）チョコレート幻想（前書き）

作者「いまさらですがバレンタインデー編が始まります！」

当麻「で、この長編が終わったら人気投票も終わるのか？」

作者「はい。それの話についてですが後書きにて話があります。この長編のＯＰは『ペガサス幻想』です！」

一方通行「・・・ＯＰ関係なく・・・あ・・・だからチョコレート幻想なんだ。」

第５２話：（バレンタインデー編）チョコレート幻想

２月１４日、作者が住んでいる地方ではコロコロコミックが発売する。関係ないか。この日は全国の男子女子が待ちに待った日、バレンタインデーである。だがこのバレンタインデーを快く思わない男子達がいた。

早朝、男子寮から一人の男子が学院の人目のつかない場所へ向かった。その男子とは２Ｚのサンジであった。サンジは辺りを警戒しながら移動した。そして何も変哲もないゴミ箱へ近づいた。

『合言葉は？』

「死ね！バレンタインデー！」

『入れ。』

ゴミ箱のふたが開き、サンジはゴミ箱へ入った。中にははしごがついていてサンジはそれを使って下に降りて行った。地下につき目の前の扉を開けた。

「来たか、我が同志よ。」

目の前には元校長が座っていた。その周りには家康、近藤、ハヤテが好きなガチ・・男、虎鉄など女性にもてなそうな男達が集まっていた。

「リーダー、いよいよあの計画を始めるのか？」

サンジが元校長に向かってこう言った。元校長はテーブルの上に置いてあったボタンを押した。その後、元校長の後ろのカーテンが開き、中から巨大なロボットが現れた。それを見た男子集はオォー！と歓声を上げた。

「これでバレンタインデーを・・・！」

「そうじゃい、このロボットでバレンタインデーを木端微塵にぶち壊してやるのじゃい！」

元校長の笑い声が地下に響いた。

朝、男子集はそわそわしていた。なぜならもし下駄箱にチョコとかあったらどうしようとか門の前からいきなり「先輩っ、こ・・・これ・・・バレンタインデーのチョコです！」とか「べ・・・別にアンタの為に作ったわけじゃないんだからねっ！」言われたらどうしようてなことを考えていた。
「ったく、どいつもこいつも浮かれてやがる。」
「そうだな。」
職員室にて銀時とスネークがこう会話していた。
「大体あいつ等、何で現実を見てねーンだよ。」
「理想と現実は違うからな。」
「あの・・・銀さん・・・スネークさん・・・なんですか？その衣装。」
会話の途中でネギが入って来た。ネギは銀時とスネークの衣装に疑問を持った。なぜなら二人の衣装はいつもの服ではなかった。銀時は皮ジャンを着ていて前にはエレキギターをぶら下げているしスネークの方はタキシード姿で胸ポケットに白いバラをさしている。
「何って・・・これが俺の真の姿だよ。」
「銀さんってギター弾けるんですか？」
「大体な。」
「スネーク先生は結婚式にでも出るんですか？」
「これが俺の本当の姿だ。本当の俺は紳士なんだよ。いい意味での。」
「そうですか。」
ネギはとりあえず自分の机に向かったのだが・・・。
「はぁ・・・今年もか。」
ネギの机の引き出しにはチョコがあふれかえっていた。
「ヒーハー！モテモテねーネギ先生！」
回転しながらイワンコフ先生がやって来た。
「そう言えば今日の7時ぐらいにたくさんの女生徒が職員室に来て

たッシブル！」
「・・・そうですか。」
ネギは近くにあったチョコの包み紙を取り出し中身を食べ始めた。
「・・・何であいつがモテモテなんだ？」
「アレじゃないのか？ネギ先生を見ると母性反応的なあれが。」
「ああ、あれか。あれね。」
とりあえず銀時は荷物を取りに行くため自分のロッカーへ向かった。ロッカーを開けたら中には巨大なプレゼントの箱があった。
「・・・何だこれ？」
ロッカーからプレゼントを取り出したプレゼントは人一人分が入る大きさで、持ってくるのに一苦労した。
「何ですかそれ？」
「しらねーよ、ロッカー開けたら入ってたんだから。」
銀時はプレゼントの中を開けた。そこには全身チョコまみれのさっちゃんが入っていた。銀時は有無も言わずにそれを外に向かって投げ捨てた。

２Ｚ教室。
「ハ・ヤ・テ。これ、バレンタインデーのチョコ♪」
「ありがとうございます。大切に食べます♪」
教室の後ろの方でバカップルであるハヤテとナギがイチャついていた。
「あの二人いつも通りだな。」
「ああ。」
その光景を見ていたロイドとクラウドがこう話した。
「あれ？新八はどうしたんだ？」
「そう言えば見かけないな。」
「皆おはよう。」
新八の姉である妙が教室に入って来た。
「あれ？新八君はどうしたの？」

近くにいた唯が聞いた。
「実は新ちゃんは今朝私のバレンタインデーのプレゼントを食べたらいきなり食あたりを起こして・・・それで今日はこれなくて。」
（それ・・・アンタのせいだろうがァァァァァァァァァァァァ！）
ロイドとクラウドの心の叫びが見事にシンクロした。
「じゃあツッコミ役はどうするの！ツッコミがいないとこの小説がグダグダになっちゃうよ！」
「うちがいるから大丈夫や。」
巨大ハリセンを持った咲夜がこう言った。
「大丈夫か？ほとんどのツッコミを新八の持っていかれてるのに。」
「ほっとけ！」
咲夜は巨大ハリセンをロイドの頭にぶつけた。

朝の予鈴が鳴り２Ｚの奴らは自分の席についた。しばらくして銀時が教室に入って来た。
「テメーら、今日がバレンタインデーだからって浮かれてんじゃねーぞ。で、今日いねー奴誰だ？」
銀時はそう言うと辺りを見回した。
「どうした？新八とサンジと家康と近藤がいねーじゃねーか。誰か知ってる奴いるか？」
「新八は食あたりで休むそうや。」
咲夜が手を挙げてこう言った。
「ったく、まさかあの姉の暗黒物質食わされて腹いた起こして」
妙はいきなり前に現れて手に持っている暗黒物質を銀時の口の中に放り込んだ。そして銀時は白目をむき、気絶した。

時は過ぎ休み時間になった。どの女子もチョコを渡すため移動していたが・・・。
『準備オッケイ。』
『バレンタイン撲滅ロボ『アンチバレンタイン君』発進！』

突然グラウンドをぶち抜いて一台の巨大なロボットが現れた。
「な・・・なんじゃありゃあああ！」
「この声って・・・サンジ！」
誰もが外を覗いた。ロボットの中にはサンジと家康と近藤と虎鉄と元校長などが乗っていた。
「何やってんだあいつら？」
「さぁ？」
『俺達は・・・』
『バレンタインデーに武力介入する！』
アンチバレンタイン君は右手のエアコンっぽい兵器を使って何かして来た。そこからは熱風が吹いて来た。
『この兵器でチョコレートを溶かしてやるのじゃーい！』
「そんな事・・・させるかァァァァァ！」
学院の方から女子の一団が襲いかかって来た。緋鞠だったりなのはだったりララだったり御坂だったりとにかくいろんなキャラが襲いかかった。
『エエエエエエエエ！何この一団！』
『駄目だ！俺は女の子に手を出せねェェェェェェェェ！』
『そんな事知らないのじゃい！この股間にある最終兵器・・・』
元校長は何かのボタンを押した。すると股間部分からあの卑猥兵器、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だったのだ！
『ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲・・・はっｓ』
発射しようとしたがその前に一斉攻撃をくらってあっさりと倒された。
『ギャアアア

軽く騒動があった、だがそんなこと気にせずに彼女たちの特別な一日が始まったのだった・・・。

次回！
ついに女子にとっては特別な日、バレンタインデーが開始する！もちろん小学部のくえす校長もその日は特別な日なのだ、そして優人をめぐる女たちの醜い戦いが始まる！次回、混沌学院『アレルギーなんてくそくらえ』どうぞご期待！
「汚物は消毒だァ！」
「これ名台詞じゃねーだろ！」

第５２話：（バレンタインデー編）チョコレート幻想（後書き）

おまけコーナー

作者「今回は人気投票について話があります。」

銀八「中間発表でもするのか？」

作者「しません。えーっと、前から言ってるようにバレンタインデー編が終了したときに人気投票もおしまいです。ですが・・・今回から何と！１人５票から１０票までとします！」

銀八「オオオオオオオ！」

作者「さて、あと少しで人気投票も終わりです！皆さんどんどん応募しまくってください！！」

第53話：（バレンタインデー編）アレルギーなんてくそくらえ（前書き）

作者「今回からバレンタインデー編が本格的に動きま～す。」

銀八「楽しみにしててくれや。」

第53話：（バレンタインデー編）アレルギーなんてくそくらえ

天河優人、２Ｅの生徒である。一応。はいそこ、ネタ切れとか言わない。彼の周りはいつも騒がしい。何故なら。

「ゆうちゃん！」

掃除用具が入っているロッカーの中から小学部の校長であるくえすが現れた。

「また現れたわね！この淫乱校長！」

そう叫んだのは優人の幼馴染の凛子である。彼女は専用の武器『凛子ちゃんの激愛』をもってくえすと戦い始めた。

「はぁ・・・また始まったか。」

「若殿、今日はバレンタインデーとかいう日だな。」

隣から緋鞠が顔を出した。彼女の手にはチョコが握られていた。

「なぁ緋鞠・・・これって・・・」

「そうだ。」

緋鞠はいきなり優人を押し倒した。

「おわぁ！」

「若殿、私からのバレンタインデーのプレゼントだ。受け取ってくれ。」

「そこのバカ猫ォ！」

「私のゆうちゃんに手を出すな！」

凛子とくえすは緋鞠と同じように優人に襲いかかった。

「オイィィィィィ！何で襲いかかってん・・・ギャアアアアアアアア！」

優人の悲鳴が教室中に響いた。

「騒がしいな。」

「そうだね～。」

「流石バレンタインデーだな。」

教室の後ろの方で生徒会三人娘がこう言った。
「ウギャアアアア！」
「このバカ猫！何どさくさにまぎれてキスしようとするの！」
「いいではないか！」
「ゆうちゃん！」
「何してんのこのヤンデレ女！」
「あなたに言われたくないわ！」
三人の戦いはヒートアップして来た。そこへ小学部５Ｚの静水久がどこからかあらわれた。
「何やってるのこの淫乱女ども・・・なの。」
「静水久、いつの間に！」
「「「誰が淫乱女よ！」」」
その後、優人をめぐる戦いは更にヒートアップした。そのヒートアップした戦いは教室を揺るがしていた。で、更には攻撃の波動が廊下へ出て近くにいたヤムチャを巻き込んだ。
「ゴフェ！何で俺ばっかりこんな目にあうんだァァァァァァァ！」
ヤムチャは何とか体を起こし２Ｅの教室を見た。ヤムチャの目に映ったのは緋鞠達がバトルロワイヤルを繰り広げている風景だった。
「何やってんだあいつら。この学校潰す気か？」
とにかくヤムチャは戦いを止めようと２Ｅの教室へ入った。
「おい止めろ！お前ら学校を潰す気かよ！」
「黙れ雑魚キャラ！」
「雑魚キャラはすっ込んでろ・・・なの。」
「雑魚はボンバーマンでもやってなさい！」
「邪魔よ雑魚！」
雑魚雑魚言われてヤムチャの堪忍袋の緒が切れた。
「誰が雑魚だァァァァァァァァァ！」
ヤムチャは両手から特大操気弾を作り出し暴れて行った。
「で、お前らは優人にチョコあげるためにこんなに暴れていたのか

？」
ボロボロになったヤムチャが再び聞いた。何故ボロボロになっているのかというと操気弾を作ったのはいいが結局緋鞠が刀で操気弾を真っ二つにしてしまったのだ。で、四人の淫乱女達に攻撃の対象とされフルボッコにされたのだ。
「それより大丈夫？かなりボロボロだよ？」
近くにいた泉がこうヤムチャに聞いた。
「大丈夫だ。何回も爆発に巻き込まれているから。それよりこっちの方だろ？」
ヤムチャは緋鞠達の方を見た。彼女らはいつの間にかバトルロワイヤルを再開していたのだ。
「はぁ・・・一体どうすればいいんだ？」
ヤムチャの後ろで優人がため息をついた。
「おい優人、お前はどうしたいんだ？」
「え？どうしたいって・・・。」
「お前は誰からチョコを貰いたいんだ？」
ヤムチャの一言を聞いて緋鞠達は戦いを止めた。
「え？」
「だからこの四人の中で誰からチョコを貰いたいんだ？」
「え・・・えっと・・・・・・。」
優人は戸惑った。彼女らは優人に好意を持っている。もちろん彼もその事は承知している。（まー原作でいろいろされているからね。）優人は少し考えた。一体誰から貰おうか。
「リア充は大変だな。」
「そうだね～。」
優人が考えている中、ヤムチャと泉はこんな会話をしていた。
「待って下さ～い！また私がいま～す！」
ロッカーの中からリズが現れた。彼女は一応ティーカップについている霊で（多分）、本体のティーカップが無事ならどこでもワープ的な何かができるのだ。

「リズ！いつの間に！」
「今日は優人さんの為に特別チョコレートを持ってきました！」
ヤムチャはリズの方を見た。彼女はチョコレートを持って来たと言っているのだがチョコレートが入っている箱は見当たらない。
「もしかして体全体がチョコレートまみれじゃねーだろーな？」
ヤムチャはこう言った。リズは軽くうなずいた後服を脱いで優人に抱きついた。
「何やってんだあいつ！この小説を１８禁にするつもりかよ！」
「くぅ・・・だったら私も！」
「負けませんわよ！」
その後、緋鞠達も脱いで優人に抱きついた。
「オメーら何してんだァァァァァァァ！本当にこの小説消されるぞォォォォォォ！」
２Ｅの教室の中心でヤムチャはこう叫んだ。

グラウンド。ヤムチャ達の目の前には巨大迷路が設置されていた。
「じゃあ今から『誰が先につくのかな？チョコレートプレゼント大作戦！』を開始する！」
ヤムチャは叫んだ。誰が先につくのかな？チョコレートプレゼント大作戦！とは・・・ゴールにいる優人の為に緋鞠達が迷路を突き進む！だが迷路の中には難敵が潜んでいる。
「用意はいいか？」
「「「「「はい！」」」」」
「じゃあ・・・スタート！」
ヤムチャの号令の後に緋鞠達は迷路の中に入って行った。
「これで白黒つけるな。」
ヤムチャが安堵した息を吐いた後だった。迷路の方から轟音が響いたのだ。
「・・・奴ら・・・無茶してるだろ。」
ヤムチャはこう呟いた。

「ウオオオオオオオオ！若殿はどこだァァァァァァァ！」
覚醒モードの緋鞠が刀を手に迷路を破壊しながら移動していた。
「チッ、ゴールはどこだ？」
ここで緋鞠は後ろの方から殺気を感じた。
「誰だ！」
緋鞠は刀を横に振った。姿は見えなかったが。かすかに着地した音が聞こえた。
「・・・姿を見せろ。」
「・・・ふん。」
バチバチバチと電子音が聞こえた。そして何もない空間から一人の男が現れた。
「・・・グレイ・フォックス先生・・・あなたが難解の一人ですか？」
「・・・そうだ。」
緋鞠とフォックスは互いに刀を持って構えをとった。一方凛子の方もくえすの方も静水久の方もリズの方も難敵と出会っていた。凛子の方は雷電、くえすの方は松平、静水久の方は服部、リズの方は小学部の保健室の先生の一人であるトキと対峙していた。
「・・・この先へ行くにはあなた方を倒せと？」
「そうだ。」
「・・・分かりやすい。」
シャキン
緋鞠は刀を構え直した。
「だったら私はあなたを倒す！」
「かかってこい！」
緋鞠はグレイ・フォックスに立ち向かって行った。そして凛子達もそれぞれの敵に立ち向かって行った。

次回！

ヤムチャが提案した『誰が先につくのかな？チョコレートプレゼント大作戦！』での戦いが始まる！誰が先に優人にチョコを渡すのか、ついに決着！次回、混沌学院『透明人間になりたいって誰もが思う』どうぞご期待！

ハヤテはナギの嫁

「オイィィィィィィ！何アンタの語録載せてんだァァァァァァァァ！」

駄目か～、じゃあこれはどうだ？ヒナではない！ヅラだァァァァ！あ、間違えた。桂だァァァァァ！

「これアウトじゃねーかァァァァァァァァァ！」

第53話：（バレンタインデー編）アレルギーなんてくそくらえ（後書き）

おまけ劇場

～高杉2～

体育明けの授業。眠くなって次の授業寝てしまったという経験はありますか？そんな経験は彼にもあります。そう・・・2Eの高杉の事です。

高杉「グ・・・ムム・・・Z～Z～・・・」

おやおや寝てしまったようです。

高杉「・・・オワァァァァ！」

銀時「ん？どうした高杉？」

高杉「はぁ・・・はぁ・・・悪い夢見ちまったぜ・・・」

銀時「どんな夢だ？」

高杉「しずかちゃんがヤンデレになった夢を見た。」

銀時「マジで！」

高杉「ドラえもんが分解されてた。」

銀時「マジで！」

そんな夢をたまに見ます。

おしまい

おまけコーナー

作者「あ～もう5月か・・・」

銀八「まだ4月中盤じゃねーか。」

作者「時の早さを甘く見るなよ。そんなこと思っていたらいつの間にか5月という展開があるかもしれねーだろうが。」

梓「で・・・何でそんな事を話してるんですか？」

闇「もしかしてネタ切れ・・・」

作者「・・・」

闇「何黙ってるんですか？」

第５４話：（バレンタインデー編）透明人間になりたいって誰もが思う（前書き

作者「いや～一夏の声って完全にグラハム」

銀八「お前何見てんの？」

作者「ＩＳ。」

梓「何で突然。」

作者「面白そうだったからみてるんじゃん。あと前はこれゾンみてた。」

黒猫「・・・こんな奴ですがよろしくお願いします。」

第５４話：（バレンタインデー編）透明人間になりたいって誰もが思う

バキィ！
刀同士がぶつかる音がした。そして緋鞠とフォックスは後ろへ下がった。
「なかなかやりますね。」
「当たり前だ。これでも原作（メタルギア）ではかなり腕の立つ傭兵だったんだ！」
「そうですか！」
緋鞠は刀を縦切りを放った。フォックスは刀でそれをガードした。
緋鞠の刀はフォックスの超電子ブレードで真っ二つになった。
「・・・普通の刀ではやはりかないませんか。」
緋鞠は自分の愛刀を取り出した。
「本気で行きますよ！」

凛子は凛子ちゃんの激愛を持って雷電と対峙していた。
「あなたが相手ですか、づ雷電先生。」
「『づ』はよけいだ！『づ』は！」
雷電が叫んでいる時に凛子はバットを振り回して来た。
「おわぁ！」
「ちっ、しくじったか。」
「何してんだ！当たったらどうする！」
「某撲殺天使が蘇らせるからいいんじゃないんですか？」
「それバットつながり？」
「さぁね！」
凛子はバットを横に振り雷電を襲った。だが雷電は上空へ飛んで攻撃を避けその隙にステルス迷彩を装備した。
「これで一気に勝負を決めてやる！」
「チッ！ややこしい！」
凛子は舌打ちをした後目をつぶった。

（何考えているんだ？）
雷電は凛子に近づいた。その瞬間、凛子のバットが雷電の動きを察知し襲いかかった。
（まさか・・・神経を集中させ俺の動きを読んでいる！）
雷電は戸惑った。凛子は確実に雷電の攻撃の動きを読んでかわし、その隙を狙って攻撃をしている。
「くっ・・・このままじゃあ・・・負ける！」
雷電はそう呟き動きを止め、凛子と睨め合いを始めた。

「ブルァァァァァァァ！」
「デスっちまえ！」
松平のバズーカの弾とくえすの技がぶつかり合い消失した。
「くっ、なかなかやりますわね！」
「おじさんをなめちゃあいけないよ。」
間合いを詰めくえすは何とか松平を吹き飛ばそうとしたが左手に冷たい何かが当たった。それは拳銃だった。
「ちょっと！あなた何持ってるんですか！」
「みれば分かるだろ。」
「分かりますけど拳銃なんて持ってていいんですか！」
「おじさんの前には法なんてただの文章よ。」
そんな事を言ったその瞬間に松平は拳銃をぶっ放した。
「あぶなっ！何やってるんですかアンタ！」
「勝つためには手段を選ばない・・・それがこの世という戦場で生き残るための手段の」
「んな事聞いてねェェェェェェェェ！」
くえすは衝撃波を放ち松平をぶっ飛ばした。

服部と戦っている静水久の方は。
「くっ、流石忍者・・・なの。」
「元お庭番の力、甘く見るなよ！」

服部はくないと手裏剣を雨嵐のように発射した。だが静水久は水で作られた盾でそれを防いだ。
「譲ちゃんもなかなかやるじゃねーか。」
「・・・お喋りな忍者・・・なの。」

バシュ！

服部の後ろの方で変な音がした。
「あん？」
音がした後尻に違和感を感じた。服部の尻には水で固められた棒が突き刺さっていた。ここで言うけど服部は痔持ちである。それが分かった瞬間、迷路の中で服部の悲鳴が轟いた。
「ククク・・・忍者も案外もろい・・・なの。」

一方リズの方はトキに苦戦していた。
「ハァァ！」
「ウァァ！」
トキの攻撃をギリギリにかわすリズ、なかなか反撃のチャンスが巡り来ないのだ。
「うう、卑怯です！流石ジョインジョイントキィですね！」
「その言い方・・・止めてくれないか？」
少し嫌な顔をしながらトキはそう言いながら華麗な動きで攻撃していた。
「うう・・・一体どうすればいいんですか？」
ただリズは攻撃をかわしながら反撃の方法を考えていた。そして一つの案が浮かんだ。
「仕方ありません！反撃行きます！」
「ナギッ！」
トキはひるんだ。だがリズは何もしてこない。トキがひるんでいる間にリズはトキの間合いに接近していた。

「しまった！」
「必殺、リズアッパー！」
リズは昇竜拳ばりのアッパーを放った。そしてそのまま上空へと飛びあがって行った。その様子を見ていたヤムチャはこう叫んだ。
「ゲーセン北斗の拳のバグかよ！」
「いや、知ってる奴しか知らないから。」
隣にいた美希はそう言った。

「うぐ・・・」
「どうした？もう終わりか？」
緋鞠は片膝をついて苦しんでいる。彼女の前にはグレイ・フォックスが立っている。
「ま・・・だ・・・まだまだ・・・若殿に・・・このチョコを渡すまでは！」
「・・・傷ついた戦士を苦しめる事はしたくない、もう降参しろ。」
傷ついた緋鞠に背を向けグレイ・フォックスが刀を鞘に入れたその時だった。
「・・・ククク・・・ククククククク。」
「何だ？」
緋鞠の周りにドス黒いオーラが発生した。
「ややこしい・・・ならば方法は！」
緋鞠は刀を持つ手を強く握った。グレイ・フォックスは彼女の威圧に押され、少し退いた。
「ハァァァァァァァ！」
「しまっ！」
緋鞠はグレイ・フォックスに向かって走り出した。だが彼女はグレイ・フォックスを無視して壁を破壊した。
「・・・へ？」
「こんな意味のない戦いは無駄だ！なら私は壁を破壊して移動する！」

「何それェェェ

一方緋鞠達の方もゴールへ近づくたびにこう考えていた。一体何て言ってチョコを渡そうか考えているのだ。緋鞠も凛子も静水久もくえすもリズも。そんなこんなでゴールへ着いた。しかも5人同時に。

「なっ・・・」

「5人同時！」

「何て事？」

ゴールの中は静まり返った。何故なら一体どうしたらいいか分からないからだ。静寂な空気の中優人はこう声を上げた。

「俺・・・皆のチョコを貰うよ！」

この声を聞いて皆驚いた。緋鞠達もそうだし何よりその様子を見ていたヤムチャ達も驚いた。

「若殿！」

「俺、皆からこうされるなんて思ってもなかった・・・まだ俺自身も誰と付き合うかまだ分からないし・・・。」

その言葉を聞いた緋鞠達は同時に優人の所へ集まってチョコを渡した。チョコを貰った時優人は笑顔だった。もちろんチョコを渡した緋鞠達も笑顔だった。

「何だ、結局緋鞠達からチョコを貰ったのかよ。」

「何か納得いかないな～。」

「そうだね～。」

生徒会3人娘がこう言った。だがヤムチャは立ち上がりこう言った。

「いいんじゃないか？本人達が良ければよ。これでよければ俺ら部外者はあまり口出ししないでおこう。」

ヤムチャはこう言った後微笑みを見せてテレビに映っている笑顔の緋鞠達を見つめた。ヤムチャの言葉を聞いた生徒会3人娘も微笑みを作りテレビを見ていた。

次回！
バレンタインデーは愛を伝える日ではない、絆を伝える日でもある。２Ｎのなのはは親友、フェイトとはやてに手作りチョコを渡すため奮闘する！次回、混沌学院。『魔王も人の子』どうぞご期待！
「頭・・・冷やそっか。」
「ヤベェ！魔王語録出た！」

第５４話：（バレンタインデー編）透明人間になりたいって誰もが思う（後書き

おまけ劇場

～５Ｚのバレンタインデー～

キャロ「エリオ君・・・これ・・・チョコ。」

エリオ「あ・・・ありがとう！」

その様子をルイージとカービィ達は見ていた。

ルイージ「青春だねぇ～」

クッパ「そうだねぇ～。」

カービィ「いいな～チョコ。僕も欲しいな～。」

沙都子「私のチョコ上げましょうか？」

ルイージ「俺はパス。何か入ってそうだから。」

クッパ「そうだな。去年はチョコの中にタバスコ入ってたからな～。」

沙都子「今年はそんなことありませんでしてよ！」

ルイージ「はいそうですか。」

ルイージは騒ぐ沙都子を無視して窓の方を見た。

首領パッチ「はいヤッ君♪パチ美からのチョコよ♪」

ルイージ「・・・何やってんだかあいつは・・・。」

クッパ「さぁ？」

そんな中、ボーボボが教室に入ってきた。

ボーボボ「体が滑ったァァァァァァァァァ！」

わざと転倒しヤッ君を木端微塵にした。

首領パッチ「や・・・ヤッくゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥん！」

おしまい

おまけコーナー

銀八「おい作者。」

作者「どうした？」

銀八「いい加減このコーナーの正式名決めようぜ。」

初春「そうです。このままじゃあ前にやってるおまけ劇場とかぶり

ますよ。」

作者「そうだな～・・・じゃあいつか考えておく。」

銀八「覚えてろよ、そのこと。」

第５５話：（バレンタインデー編）魔王も人の子（前書き）

銀八「やべぇ・・・ついにこの話か・・・」

当麻「おいどうするんだよ・・・」

作者「皆ァァァァァ！今すぐに逃げ」

なのは「何で逃げようとするの？」

作者「あ・・・」

なのは「・・・頭・・・冷やそっか。」

ドッコォォォォォォォォォン！

ブロリー「ま・・・魔王だ・・・」

なのは「魔王？違う・・・私はなのはなの。」

第５５話：（バレンタインデー編）魔王も人の子

バレンタインデー前日、混沌学院の近くのスーパーで買い物をしている生徒の姿があった彼女は高町なのは。彼女は親友であるフェイトとはやての為に手作りチョコを渡そうと考えているのだ。なのはは買い物メモ片手に色々なコーナーを見回っていた。

「えーっと・・・後は板チョコを数枚買って次に・・・ん？」

板チョコを取りにお菓子コーナーへ行ったらそこには同じクラスのベジータの姿があった。

「ベジータ君。どうしたの？」

「なっ・・・なのはか！貴様こそ何故ここに！」

「私はフェイトちゃんとはやてちゃんの為にチョコを作ろうと思って買い物に来たんだけど・・・何でベジータ君がここにいるの？」

「別にいいだろ。」

「もしかして明日のバレンタインデーでチョコがもらえるはずもないから自分でチョコを買って自己満足」

「あ・・・あ・・・あ・・・」

ベジータはうろたえた後走って帰って行った。

「図星だったのかな？」

今の事をすぐに頭から取り除き買い物を続けた。一通りの材料をそろえ、なのははレジへ向かった。

「お願いします。」

「あいよ。」

レジの店員が聞き覚えのある声だった。その声の主はマダオだった。

「あれ？マダオさん。今度はここでバイトですか？」

「ははは・・・譲ちゃんもマダオって呼ぶんだ・・・。」

「ええ。神楽ちゃん達がしょっちゅうあなたの事をそう言ってるので・・・つい。」

「いいんだ。もう慣れてるからね。」
そう言いながらマダオはレジ打ちを始めた。その後、なのはは自宅へ戻った。ここで知ってる人は知っていると思うけどなのはの家は喫茶店である。なのでなのは自身も結構料理が上手である。
「さて、作り始めるか。」
なのはは買い物袋から板チョコを取り出し溶かし始めた。チョコを溶かしている間にフレークの用意をした。
「ふぅ・・・あと少しで」
カランコロン♪
喫茶店のドアが開く音がした。ドアから同じクラスのイーノックとルシフェルが入って来たのだ。
「ふぅ・・・大丈夫かな・・・明日のバレンタインデー。」
「大丈夫だ、問題ない。」
「だよな・・・俺の気にし過ぎだ。だってバレンタインデーのチョコを食べ過ぎて鼻血をださないよな。」
その話を聞いていたなのはは完全に呆れた。そして心から誓った。ルシフェルにはチョコをやってたまるかと。

「よし！これで完成！」
なのはの前には手作りチョコ二つがあった。少し時間を使ったが自分なりに上手に作れたと思う。
「さて・・・明日が楽しみだな♪」
なのははチョコを大切に冷蔵庫に入れ親たちにその事を伝え自室へ向かった。

てな訳でバレンタインデー当日、休み時間に元校長とサンジ達がまたバカな事をしでかしたがすぐにブッ飛ばして教室へ向かった。2N教室にはまだフェイトとはやてはいない。
「まだ来てないのかな？」
「どうしたのなのは？」

首をかしげるなのはの所に遊戯がやって来た。
「あ、遊戯君。」
「誰か待ってるの？」
「フェイトちゃんとはやてちゃんだけど・・・あれ？アテム君の方は？」
「もう一人の僕は・・・」
遊戯はグラウンドの方をなのはに見せるよう促した。グラウンドにはアテムが傷ついて倒れていた。
「・・・ねぇ・・・何度こうなってるの？」
「実はもう一人の僕が・・・」

「ＡＩＢＯ、一体どうやったらバレンタインデーチョコを貰えるんだろうか？」
「だったら、この方法があるよ。カタパルトタートル召喚！」
遊戯は手札からカタパルトタートルを召喚した。
「カタパルトタートルの効果でもう一人の僕を生贄に捧げる！」
「え？」
カタパルトタートルの砲台の上にアテムが設置された。
「ＡＩＢＯ！まさか・・・まさか！」
「もう一人の僕！リア充になって来てね！」
「ＡＩＢＯ！今すぐにＹＡ☆ＭＥ☆ＲＯ！」
「ドゥヒン☆もう一人の僕、バイバーイ。」
「ＡＩＢＯーーーーーーーーーーーーーーーー！」
アテムは外にある女子更衣室に向かって発射された。
「まさか・・・ＡＩＢＯの奴、仕組んだ」
ドッコォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！
アテムはなすすべなく女子更衣室へ突入してしまい、フルボッコにあってしまった。
「という訳なんだ。」

「それ・・・酷いよね。」
「でもいつも頭を冷やす君よりまともだと思うけど。」
遊戯にこう言われなのはは返す言葉が見つからなかった。

少しして2Nのクラスメイト達が続々と教室に入って来た。ベジータがリィンから義理チョコもらってはしゃいでいたらブロリーにラリアットされ壁にめり込んだり海馬がチョコもらえなかったと言って遊星に向かってゴッドハンドクラッシュを放ったりルシフェルが『私にチョコをください』と書いてあるTシャツを着ていたりイカ娘がバレンタインと言ってクラス中に墨をはいたりしていた。だがその中にフェイトとはやての姿は無かった。
「今日お休みなのかな・・・？」
なのはがこうつぶやいたその瞬間だった。携帯電話のメールの着信音が鳴った。
「誰だろ？」
メールを見たら宛先人はフェイトだった。そして本文にはこう書かれていた。
『裏庭で待ってます。』
その後、メールで言われたようになのはは裏庭へ向かった。そこにはフェイトとはやてが待っていた。
「二人とも、どうしたの？」
「なのは、これ。」
フェイトは小さな包み紙をなのはに渡した。
「開けて見て。」
フェイトに言われなのはは包み紙を開けた。中にあったのはフェイトの手作りチョコだったのだ。
「フェイトちゃん・・・これ。」
「バレンタインデー、一般的に言うと友チョコかな？」
「・・・だったら私からも二人にあるんだ！」
なのはは自分の手作りチョコを二人に渡した。

「ありがとう！」
「私からもあるんや！」
その後、仲良し三人組は互いにチョコを渡しあった。そしてこの日は互いに絆を確認しあったのであった。

次回！
原作でもそうだがジーニアスはプレセアに恋をしている。なのでバレンタインデーはかなり期待している。そんなジーニアスに協力するためあのシャアが活躍するのかな？次回混沌学院『子供の恋というのはかなり純情』どうぞご期待！
「ギャルのパンティおくれー！」
「それここで言っていいのかよ！」

第５５話：（バレンタインデー編）魔王も人の子（後書き）

おまけコーナー

作者「え～ちょっと今回はあるキャラにお詫びを申し上げたいと思います。」

銀八「誰だよ？」

作者「淫獣（ユーノ）にです。実はオチでなのはが淫獣（ユーノ）にチョコ渡すシーンを考えていました・・・だけど忘れてしまいあのようないい感じのオチで終わってしまったんです。」

梓「いいんじゃないんですか？」

黒猫「結構いい感じで終わってたし。」

作者「だよね～。俺も後々考えたんだけどやっぱ淫獣（ユーノ）出さなくて正解だった」

淫獣（ユーノ）「あの・・・何でこんな扱い何だ僕？しかも名前のところおかしいし・・・。」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

第５６話：（バレンタインデー編）子供の恋というのはかなり純情（前書き）

作者「さて今回も頑張ってまいりましょう！」

銀八「まぁよろしく頼むわ。」

第５６話：（バレンタインデー編）子供の恋というのはかなり純情

この日、ジーニアスは期待していた。何故なら２Ｔのプレセアからチョコを貰えるかどうか楽しみなのだ。期待に胸を膨らませながら教室へ向かっていた。で、当のプレセアはというと。

「バレンタ・・・インデー？」

全く知らなかったようだ。そこへ話し相手のしいなが呆れてこう言った。

「アンタ・・・バレンタインデー知らないんかい？」

「ええ、始めて聞きました。」

とまぁこんな感じだった。

そんな中ジーニアスは期待しながら男子寮を出た。

「あら、どうしたのそんなニコニコした顔をして。」

そこへジーニアスの姉であるリフィルがやって来た。

「あ、姉さん。別にニコニコなんてしてないと思うけど。」

「鏡見たら？結構にやけてるわよ。」

そんな会話をしていたらジーニアスはリフィルが何かを持っているという事に気付いた。

「あれ？姉さんも誰かにチョコを渡すの？」

ジーニアスは震えながら聞いた。

「内緒よ。一つ余ってるからジーニアスも一つどう？」

「ぼ・・・僕は止めとくよ。」

ジーニアスは知っている。リフィルがかなり料理が下手だと・・・その腕は同じクラスの妙と同じくらい。二人でもし料理を作ったとならばそれは化学兵器・・・いや、ある意味最終兵器と言ってもおかしくない。そのくらい破壊力があるのだ。

「そうなの・・・まあいいわ。実は今日同じ保健室のシャマル先生とあなたと同じクラスのお妙さんとチョコを作る約束をしてるのよ。

」
　その言葉を聞いたジーニアスの顔の色は真っ青となった。何故ならあの三人が料理を作る・・・それは地上最強の化学兵器を作るようなものなのだ！
「じゃ・・・じゃあその手に持ってるチョコは誰にあげるの？」
「フフフッ、実は本日最初に保健室に来た子にこのチョコを上げようかと考えてるの。」
　止めておいた方がいい、悪化するから。とジーニアスは言おうとしたが止めた。何故なら悲惨な目にあうからだ。
「じゃ・・・じゃあ僕は学校に行くから。」
「そう、また後で保健室に来てね。」
　そう言ってリフィル生えがを作り保健室へ向かった。ジーニアスは心の中でこう思った。絶対に保健室に行きたくなァァァァァァァァァい！

　まぁあんな事があったけどジーニアスは期待しながら２Ｚの教室へ向かっていた。
「君は２Ｚのジーニアスではないか、どうしたんだそんなにやけた顔をして。」
　そう声をかけて来たのは２Ｇの赤い彗星、シャアであった。
「え？そう？別ににやけてなんか」
「・・・まァ別にいいが。君は何に期待しているんだ？」
「あ・・・その・・・実は・・・２Ｔのプレセアという子からチョコを貰えるかどうか・・・」
「そうか・・・今日はバレンタインデーか・・・私もララァから貰えるからどうか少しドキドキして」
「あなたの事は別にいいです。」
　ジーニアスとシャアが会話をしていたら刹那（ガンダムの方）がやって来た。
「何を話しているんだ？」

「刹那か、実はバレンタインデーの話をしていたんだ。」
「ば・・・バレンタインデー・・・」
刹那はこう言ってガンダム専用の駐車スペースへ向かった。
「・・・奴の事はほおっておこう。」
「そうですね。」
「じゃ、私も君がチョコを貰えるよう願っているよ。」
「ありがとうございます！」
その後、二人はそれぞれの教室へ向かって行った。

一方妙の暗黒物質を無理矢理食わされて気絶した銀時は保健室へ運ばれていった。
「あ・・・あ～・・・朝からヒデー目にあった・・・」
「大丈夫ですか？銀時先生。」
シャマル先生が気絶から目覚めた銀時の様子を聞いた。
「ああ、何とか大丈夫だ。」
「そう、よかったわ。」
笑顔でシャマルはこう言った。その後、シャマルはリフィルの元へ向かった。
「銀時先生。」
「これ、バレンタインデーの企画で私達と妙さんが作ったチョコよ。今持ってくる。」
裏の方から声が聞こえた。その声を聞いた銀時の顔面は青に染まった。逃げだそうとしたが手足が動かなかった。異変を感じた銀時は布団の中を見て見た。それはいつの間にかシャマルの魔法で銀時の体は拘束されていた。
「マジでか・・・」
「お待たせ～。」
リフィルの声が聞こえた。今彼女らが持っているのはチョコ・・・らしい。そのチョコらしい物は何故かうねうねした物が入っていて、時折そこから「イギャアアアアアス！」と声が響いたり・・・と

にかく文字に表せないくらいの物だった。
「それチョコじゃねーだろォォォォォ！」
「まぁそんな事言わずに。」
「食べて見て下さい、銀時先生。」
二人は手に持っているチョコらしい物を段々と銀時に近づけて行った。
「止めてくれ！そんなん食ったら余計に・・・ウプ！何この匂い！臭いのか甘い匂いなのかハッキリとしない！」
「ドルラットウゥラァ！」
「何今の声！その変な物体の方から聞こえたんだけど」
「「それェェェェェェ！」」
彼女らの声と共にチョコらしいものは銀時の口の中へ入ってしまった。
「オボボボボボ！何これ？訳わかんない！あれ？何か手みたいなものが歯に当た・・・」
ゴックン。
「どう？おいしかった？」
リフィルがこう聞いたが銀時はそれどころじゃなかった。数分後、学院中に銀時の泣き叫ぶような悲鳴が轟き渡った。その声を聞いたジーニアスは心の中でお経を唱えていた。

二時間目の休み時間、シャアは飲み物を購入するため自動販売機がある売店の方へ向かっていた。ジュースを買い教室へ戻る途中売店の方でチョコパンを購入するプレセアの姿を見かけた。
（まさか・・・ジーニアス君に・・・。）
シャアはこの事をジーニアスに伝えようかどうか考えた、しかしもし勘違いだったらジーニアスの心を傷つけてしまうと思いながら教室へ向かった。
（あのチョコがジーニアス君へのプレゼントだといいがな・・・。）
心で呟きながらシャアは歩いて行った。

昼休み。２Ｚの教室では誰もが昼食を食べていた。
「ロイド、これバレンタインデーのチョコ。」
「ありがとうコレット。」
「いいよいい・・・あわわ！」
教室の後ろの方でコレットがロイドにチョコを渡そうとしたがコレットがこけてしまいその反動でコレットが持っているチョコが見事ロイドの顔面に命中したのだ。他にも。
「うぎゃあああああああ！」
「ど・・・どうしたんだ！」
教室の廊下で近藤の悲鳴が聞こえた。悲鳴を聞いた九兵衛とクラウド、土方と沖田が急いで廊下へ向かった。廊下には焦っている妙と白目をむいて倒れている近藤の姿があった。
「どうした！一体何があった！」
「大丈夫か妙ちゃん！まさか暴漢にでも！」
「あの・・・実はこの人がチョコくれチョコくれってかなりしつこくて・・・で面倒だから持ってるチョコ全部上げたの。そしてこの人全部食べて・・・飲み込んだ後倒れたの。」
妙から事情聴取をした土方はこう思った。それお前のせいじゃねーかァァァァァァ！
「くっ・・・羨ましいな・・・妙ちゃんのチョコを食べられるなんて。」
「止めとけ九兵衛・・・自殺行為に近いから。」
クラウドは悔しがる九兵衛の肩を叩いた。で、教室内、黒板前では。
「ハヤテ、おいしいか？」
「おいしいです。お嬢様が食べさせてくれるからその分おいしいです♪」
「んもう、お世辞がうまいんだから♪」
新婚気分のハヤテとナギが昼食を食べていた。その幸せオーラは

見る者を少しイライラさせた。
「はぁ・・・ハヤテ君もうナギちゃんにメロメロだね・・・」
「私はエミルにメロメロだけど♪」
西沢とマルタがこんな会話をしていた。
「マルタはいいな～エミル君と付き合ってるし・・・私もこういう出会いが欲しいよ～。」
「ハハハ・・・でもヒナギクはどうなんだろう・・・。」
マルタはヒナギクの方を見た。ヒナギクは眠っているらしく寝言で「あぁ・・・駄目よハヤテ君・・・こんな所で・・・」とか「いいわ・・・あなたの前だけは女の子でいてあげる・・・」とか「甘えさせてよ・・・ハヤテ君」とか言っている。その様子を見ていた西沢とマルタは同情と共に哀れみも覚えた。そんな中、ジーニアスはいつも通りだなと思いながら見ていた。騒ぎの中、ジーニアスは時計を見た。時計の針は十二時四十分、あと少しで昼休みが終わる。彼は心の中で期待していた。プレセアからチョコがもらえるかどうかを。
「おーいジーニアス、お前呼ばれてるぞ！」
悟空がジーニアスを呼ぶ声が聞こえた。
「え？誰？」
「２Ｔのプレセアだよ。」
その声を聞いたジーニアス。その瞬間心臓が激しくなった。まさか・・・え？マジで？嘘じゃないよね？そんな事を思いながらジーニアスは自分のほっぺをつねったり殴ったりしていた。
「オメー大丈夫か？」
その様子を見ていた悟空はそう呟いた。で、少ししてプレセアの元へ向かった。
「ぷ・・・プレセア・・・どうしたの？」
「これ。」
プレセアが手にしているのはチョコパン。
「あげます・・・。」

「い・・・いいの？」
ジーニアスがこう聞いた。プレセアは笑顔でうつむいた。
「あ・・・ありがとう！」
「いいえ。」
後ろの方でシャアがその様子を見ていた。

数分前。教室でシャアがアムロ、ドモン、キラとガンダムｖｓガンダムネクストプラスで勝負している時プレセアがシャアを呼んだのだ。
「どうしたんだい？」
「実はバレンタインデーについて皆さんに色々聞いてますけど・・・」
プレセアは手に持っているチョコパンをシャアに見せた。
「ジーニアス・・・これで喜んでくれるでしょうか？」
その言葉を聞いたシャア、彼の頭にはジーニアスの喜ぶ顔が浮かんでいた。
「大丈夫だ。」
「そうですか？」
「ああ、君が気持ちを込めて贈るんだ。相手も喜ぶはずだ。」
「そうですか・・・」
「ああ。きっと大丈夫さ。自信を持って渡せ、ジーニアス君も喜ぶ。」
シャアにこう言われプレセアは２Ｚへ向かって行った。
「大佐、たまにはいい事言いますのね。」
後ろの方でララァの声が聞こえた。彼女の手には赤い包み紙が握られていた。
「何だそれは？」
「これはバレンタインデーのチョコです。大佐用として買ってきました。」
「すまないな・・・そしてありがとう。」

シャアはそう言ってララァからチョコを貰ったのであった。

一方刹那は。

「ガンダム・・・俺に・・・俺にバレンタインデーのチョコを！」

目の前のガンダムダブルオーライザーに向かってこう叫んでいた。

次回！

２Ｅの学級委員である古手川唯は同じクラスのリトが気になっている。チョコを渡そうと手作りチョコを作り始めるが・・・次回、混沌学院『ツンデレの略はツンツンヘアーのデレデレ野郎って意味じゃないから』どうぞご期待！

「巧の事、大嫌い！大嫌い大嫌い！大好き！」

「作者ァァァァァ！何書いてんのよォォォォォ！」

いいじゃん別にお前が巧に告った台詞ぐらいのせても

「二回死ねーーーーーーーーーーーー！」

ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

第５６話：（バレンタインデー編）子供の恋というのはかなり純情（後書き）

おまけ劇場

～迷い猫どものバレンタインデー～

文乃（ど・・・どうしよう・・・巧用のチョコ持ってきたのはいいけれど・・・どうやって渡そうか・・・）

千世（どうしましょう・・・どうやって巧にチョコ渡そうかしら・・・悩む・・・）

二人が悩んでる中、希は普通に巧にチョコを渡した。

希「巧・・・これ・・・チョコ。」

巧「あ・・・ありがとう。」

にやける巧を見て二人の理性のリミットが外れた。

文乃「巧っ！これチョコ！せっかくだから貰いなさいよ！」

千世「あー！芹沢文乃！この私より巧にチョコを渡そうなんて生意気よ！巧っ！私のチョコ受け取りなさいよ！」

巧「オワァァァァァァ！いきなり突進してくるなよ・・・ギャアアアアアアア！」

そんな光景を見てゾロが一言。

ゾロ「大変だな、あいつも。」

おしまい

おまけコーナー

作者「ここでお知らせがあります。」

銀八「んだよオイ。」

作者「バレンタインデー編の話ですけど新たな作品を数作品加えます！」

闇「またですか・・・」

イーノック「本編で俺たちが出てきたばかりなのに・・・」

作者「まぁその時になったらどんな作品といいますんでそんときはよろしく！」

第57話：（バレンタインデー編）ツンデレの略はツンツンヘアーのデレデレ野郎

作者「ブレイブルーやってみてェェェェェェ！」

梓「勝手にやればいいじゃないですか。」

闇「そうです。」

第57話：（バレンタインデー編）ツンデレの略はツンツンヘアーのデレデレ野郎

バレンタインデー前日、廊下にいる女子達はワイワイ話していた。
その様子を古手川唯は聞いていた。
「ねぇ、今年は誰にチョコをあげる？」
「私はネギ先生にあげようと思ってるんだ。」
「ふーん、私は綾崎先輩にあげようと思ってるけどね。」
「やめといた方がいいよ。三千院先輩とかなりラブラブだし。」
「そうだね、そのせいでヒナギク先輩が病んでるんでしょ？」
「そうそう。」
「じゃあ銀さんにあげようかな。」
「そうした方がいいよ。」
てな会話が聞こえたのだ。
「バレンタインデーか・・・」
誰に上げようか考えていたらリトの顔が頭に浮かんだ。自分でも何故？と思いすぐにその考えを消そうとしたが無理だった。

2E、居間教室内の男子は翌日のバレンタインデーの話で持ちきりだった。
「なぁリト、明日のバレンタインデーのチョコはもらえそうか？」
「まぁ・・・ララ辺りから貰えそうだな。」
教室の後ろの方でリトと彼の友人の猿山の会話が聞こえた。彼らの会話を古手川は耳をすませた。
「いいな～お前は。」
「そうでもないぜ。去年はララから貰ったチョコ・・・かなり辛かったもんな～。」
「ああ。あん時のお前すごい火を吹いていたからな。」
「あの後はたらこ唇になって大変だったな・・・。」
「そうだったな～、一時限定だけどお前のあだ名たらこっちだった

もんな～。」
「ああ・・・。」
「でもさ、やっぱ女の子からチョコを貰えると義理だろうが何だろうがうれしいよな。」
「そうだなー。」
「だけどオメーはいいよな・・・」
「へ？何で。」
「少なくともララちゃんと美柑ちゃんから貰えるだろうがァァァァ！あと俺知ってるぞ！毎日お前の下駄箱にラブレターやら何かがたくさん入ってるって！」
という会話を聞いていた。
（・・・な・・・何で私が結城君の会話が気になるの！何で何でなのよォォォォォ！）
古手川は心の中でこう叫んだ。

そんでもって放課後の古手川家、キッチンにはエプロン姿の古手川がいた。彼女の目の前には近くのスーパーで購入したチョコの材料が置かれていた。
「う～ん・・・意外と難しいわね・・・」
料理本片手に古手川は悩んでいた。
「よー、唯。がんばってんな。」
後ろから彼女の兄の遊がこう言った。
「お・・・お兄ちゃん！な・・・何か用！」
「母さんからお前がチョコを作ってるって聞いて少し見に来たんだ。で、そのチョコはアレか？例の結城とやらにあげるのか？」
リトの名前が出て来たので古手川は少し赤くなった。
「何勘違いしてるのよっ！何で私が結城君にチョコを渡さないといけないのよ！」
「でもそのチョコは」
「義理よ！義理義理！試しに作ってるんだから！」

かなり分かりやすい反応だったので彼は心の中で分かりやすいと呟いた。
「もう！邪魔だから向こう行ってよ！」
「あ・・・ああ。」
妹にこう言われ彼はキッチンを出ようとした。
「あ、俺から一つ言っておくぜ。義理でも貰った奴・・・きっと喜ぶと思うから。頑張れよ。」
遊はこう言ってキッチンを出て行った。

数時間後、古手川お手製のチョコが完成した。
「ふう・・・やっとできた・・・さて、どうやって渡そうか・・・」
ここで彼女は気付いた。一体どうやってリトにチョコを渡そうか考えてなかった。もし教室で渡せば超堅物学級委員の名がポキッと折れる。外で渡しても色んな噂が広がる。
（どうしよう・・・本当にどうしよう・・・）
心の中でこう呟いていた古手川であった。

翌日の２Ｅクラス。今日の一部の男子どもは目がギラギラしていた。だって今日はバレンタインデーだから。古手川もリトにチョコを渡すため手作りチョコを持って来たのだがどうやって渡そうか考えてなかった。そんな中、リトが猿山と共に教室に入って来た。
「しっかし今日はすごいな、緋鞠達がもう張り切ってたよ。」
「ああ、優人も大変だな。」
「そうか？俺は羨ましいけどな。」
そんな事を話していたのだ。古手川はリトの方を見ると彼はいくつかチョコを抱えていた。
「オメーも羨ましいよ。学校についてすぐにチョコをゲットだもんな～。」
「ま・・・まぁ嬉しいのは嬉しいんだけどな。」
古手川の視界にリトの笑顔が映った。その笑顔は脳裏に焼けつい

た。
「そういやー美柑ちゃんとか貰ったか？チョコ。」
「美柑は後で渡してくれるんだけど・・・朝っぱらからモモが全裸でチョコの生クリームをつけて寝ている俺の上に座っているって事があったな・・・」
「食ったのか！」
「食う訳ねーだろ！」
その後、奏がリトと猿山の元へ近づいて行った。
「これ・・・私の手作りチョコ・・・皆にわけてるの。」
「え？いいの？ありがとう！」
「ありがとう奏ちゃん！君はやっぱり天使だよ！」
リトと猿山は笑顔でこう言った。その後、奏が作ったチョコを食べてみたら・・・。
「「からァァァァァァァァ！」」
「どう？麻婆味のチョコは？」
奏がこう言ったが二人は火を吹いていてそれどころじゃなかった。

チョコを渡せず六時間目に入ってしまった。この学院は六時間目で一日が終わるのである。この時は現代国語だったが担当教師である銀時が色々あって意識不明の為代理としてさわ子が来ていた。
キーンコーンカーンコーン
終わりのチャイムが鳴った。
「では今日はこれでおしまいです。この時間にやったプリントは後日銀時先生に渡しますのでしっかりと名前とクラスを書いて提出して下さい。」
その後、提出されたプリントを持ってさわ子は教室から戻って行った。その後、担当である雷電が帰りのホームルームして本日の授業が終わった。
「リト、後で裏庭に来て。」
ララがリトに近づいてこう言った。その後、古手川は何をするの

か気になり様子を見に行った。でもって裏庭。ここにはララとリトの想い人である春菜が待っていた。少ししてリトがやって来た。
「はいこれ、私と春菜が作ったスペシャルチョコだよ。」
「わぁ、サンキュ！」
「昨日春菜んちで二人で一緒に作ったんだ♪」
「へ～、出かけたと思ったらそんな事やってたんだ。」
「うん！」
「ありがとう！ララ、西連寺！」
リトが礼を言った。その後、二人にも笑顔が見えた。その様子を古手川はしっかりと見ていた。そして昨日、兄が言った言葉が頭によぎった。

教室内。リトは鞄を忘れた為教室へ戻っていた。そこへ。
「結城君！」
古手川の声が聞こえた。
「どうした？古手川？」
「・・・これ・・・あげる。」
彼女の手には包み紙があった。
「え・・・もしかしてチョコ！古手川が俺に！」
こう言われたのでドキッとした。その後、顔を赤くしてこう言った。
「い・・・言っとくけど義理だからね！本当に義理チョコ何だから！」
「あ・・・ありがとう！まさか古手川から貰えるなんて思っても無かったよ！本当にありがとう！」
リトは笑顔でこう言った。その笑顔を見て古手川はこう思った。
（チョコ・・・渡して本当に良かった。）

次回！
１Ｚの梓は唯達にチョコを渡そうと考える。しかし彼女は料理を

まともにした事がない、そこで唯の妹の憂と共にチョコづくりを始める。次回混沌学院『チャレンジ精神は大切』どうぞご期待！

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねぇか。」

「あれ・・・何で銀さんが？」

最近出番がないから。

「俺気にしてんだから！バレンタインデー編でもロクに出てないじゃん俺！」

気にするな！

「だから気にしてるんだって！」

第57話：（バレンタインデー編）ツンデレの略はツンツンヘアーのデレデレ野郎

エルシャダイ発売特別企画！イーノックの人生相談！

イーノック「何でも俺が解決しよう。」

P．N恋するゴリラ「私は恋をしています。だがその恋は実る気配がありません。どうしたらいいのでしょうか。」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

P．Nですです！「私の部活の先輩のスキンシップが激しすぎます。どうしたらいいのでしょう。」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

P．N侵略者「私のクラスのある女子が私に質コツ付きまとってくるゲソ。一体どうしたらいイカ？」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

P．N恋桜「コノサクヒンノワタシノアツカイガヒドスギマス、ナンデデショウ？」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

P．N暴れ猫「私は幼馴染の少年に恋をしています。だけどその少年はかなり鈍感で、しかも私以外の女の子もその少年に恋をしています。一体どうしたらいいのでしょうか？」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

P．N介入好き「何故俺はガンダムじゃないんだ！」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

P．Nミスター・ブシドー「何故私はガンダムではないんだ！」

イーノック「大丈夫だ、問題ない。」

銀八「なんにも解決してねぇェェェ

第５８話：（バレンタインデー編）チャレンジ精神は大切（前書き）

作者「おーい、今回はあずにゃんが主役だぞ。」

梓「う～緊張します～。」

銀八「あの・・・銀時は・・・？」

第５８話：（バレンタインデー編）チャレンジ精神は大切

バレンタインデー前日、何？何回もバレンタインデー前日って最初の方で書いてある？何、気にする事は無い。１Ｚの梓の耳にバレンタインデーの会話が聞こえた。

（バレンタインデーか・・・澪先輩にあげたら喜ぶかな？）

そんな事を考えていた。

「何真剣に考えてるの？」

丁度前にいた唯の妹の憂が話しかけて来た。

「べ・・・別にバレンタインデーの事何か考えてないんだからねっ！」

梓はこう言ったが周囲にバレンタインデーの事を考えているという事を自分からばらしてしまった。

「ははは・・・」

「そう言えば憂はバレンタインデーどうするの？」

「私はお姉ちゃんに渡すの。」

「唯先輩に？」

「うん。梓ちゃんはどうするの？」

「あ・・・えと・・・」

梓はここでどういえば分からなかった。だがすぐにこう言った。

「実は軽音部の先輩達にチョコを渡そうと思って・・・。」

（という事にしておこう。）

と話した。心の中でこう思っているが。

「そうなの・・・頑張ってね梓ちゃん。」

「うん、でもみんなには内緒ね！」

誰にも言わない様憂にこう言ったが・・・。

「梓！」

後ろの方から恋次の声がした。

「バレンタインデーのチョコ頑張れよ。」

「え・・・」
「梓ちゃん、頑張ってね！」
「応援してるよ。」
織姫とスバルがこう言った。
「しまったァァァァァァァァァァァ！」
１Ｚの教室に梓の声が響いた。

そんでもって放課後、梓は材料を買おうと思い学院の近くにあるスーパーに来ていた。
「あれ？憂。」
「あ、梓ちゃん。」
スーパーに入ろうとしたら買い物帰りの憂にあったのだ。彼女の両手には買い物袋がぶら下がっていた。
「ねぇ、それってもしかしてバレンタインの材料？」
「そだよ。」
買い物袋にはとんでもない量の材料が入れてあったのだ。
「憂、一体何人にあげるの？」
梓は憂にこう聞いてい見た。答えはすぐに帰って来た。
「お姉ちゃんだけだよ。」
「これで一人分！」
梓は思った。とんでもないシスコンだと。
「梓ちゃんも今から買うの？」
「うん・・・」
ここで梓は思った。一対材料って何を買えばいいのか分からなかったのだ。梓はまず憂に何を買ったのか聞いてみた。
「憂は何買ったの？」
「えーっとね、卵でしょ、グラニュー糖でしょ、薄力粉でしょ、後今回は少しお酒入れようと思ってラム酒も買ったんだ。後トッピング用にカラーチョコとかシュガーパウダーとか」
憂はこのように行っているのだが梓には何を言っているのかちん

ぷんかんぷんだった。
「・・・・・・家で一緒に作る？」
「よろしくお願いします！」
頭を下げながら梓はこう言った。

そんでもって平沢家。今ここにエプロン姿の梓と憂がいた。
「よーし！バレンタインのお菓子を作るぞー！」
「おー！」
というように張り切っていたのはいいが・・・。
「何を作るのー？」
突然にょきっと唯が現れたのだ。
「うわあっ！」
梓は驚いたのだが後にそうか・・・唯先輩もいるんだ・・・と理解したのであった。しかしここでバレンタインのお菓子を作っているってばれたら何もかもがおしまいである。戸惑う梓の横で憂がこう言った。
「今日はケーキだよ。」
「そうか～楽しみにしてるね～♪」
と言って唯は去って行った。
「いつもお菓子作っているから大丈夫、ばれないよ！」
「それじゃあバレンタインの意味無いよね・・・。」
二人は小さい声でこんな会話をしていた。

で、バレンタインデー当日の放課後、梓は皆にばれないように部室へ来ていた。
「あ、あずにゃん。やっほー。」
「こ、こんにちは。」
と軽い挨拶を交わした。その横で律が紬にこう声をかけた。
「あれ？ムギ、今日はお菓子用意してないの？」
その後、紬は梓の所へ行ってこう言った。

「ごめんなさい、今日は用意してないけど・・・変わりに梓ちゃんが用意してくれたみたいだよ。」
「にゃっ！」
梓は驚いた。当たり前だ、秘密でバレンタインデーのお菓子を作って来たのが紬にばればれだったのだから。でまぁその後は梓は持ってきた箱の中から昨日憂と作ったチョコのケーキを取り出した。
「えっと、今日は日ごろの感謝をこめてチョコケーキを作ってきました。」
「わー！すごーい！」
「結構本格的だな。」
唯達は手元に運ばれて来た梓の作ったケーキを食べ始めた。
「わ、おいしい。」
「おいしー！あずにゃん天才！」
というように誰もが絶賛の声を上げていた。そんな中、唯が梓の所へ来た。
「あずにゃん、お返しにこれを上げよう！」
唯の手には小さい包み紙があった。
「何ですかこれ？」
「アメちゃん！ホワイトデーのお返しね！」
「早ッ！」
「安ッ！」
誰もが唯の行動にツッコミを入れた。
「ありがとう梓。すっごくおいしかったよ。」
澪が笑顔でこういた。その後は誰もが感謝の言葉を言っていた。

帰り道。
（すっごくおいしかったよ。）
梓の脳裏には澪が言った言葉と笑顔が映っていた。それを思い出しながら梓は少しにやけていた。不意にポケットに手を入れたら何かが入っていた。

「ん？何だろ・・・」
手にとって見て見るとそれは唯から貰った飴だった。
（あずにゃん天才！）
梓の脳裏に唯の言葉が浮かんだ。その後、包み紙を取って飴を取り出し口の中に入れた。
「・・・甘い。」
口の中で飴をコロコロしながら梓は帰って行った。

次回！
２Ｚの苦労人御坂、彼女もまたバレンタインデーのプレゼントを当麻に渡そうとする。しかし黒子がまたまた現れてしまう・・・どうする御坂！次回、混沌学院『渡す物はしっかりと渡せ』どうぞご期待！
「その手で・・・触んじゃねぇ。そのうす汚ねェ手で、その女に触んじゃねェ。」
俺の思い違いかもしれませんがジャンプ掲載版だと「その女」ってところが「俺の女」に代わってました。かなり前の話でしたので記憶があいまいです。誰か詳しい情報を下さい。
「ちょっと！アンタ何言ってるんですか！」
「んな事ツイッターで呟け！」

第５８話：（バレンタインデー編）チャレンジ精神は大切（後書き）

おまけ劇場

～シャナのバレンタインデー～

シャナ「悠二、これ受け取りなさいよ！」

吉田「悠二君！これ・・・バレンタインデーのチョコ！」

悠二「あ・・・ありがとう・・・二人とも・・・」

シャナ「ねぇ・・・先に私が渡したいんだけど。」

吉田「私が先よ！」

その後、二人はギャーギャー騒いでいた。その様子を見ていたクラウドはこうつぶやいた。

クラウド「ヒロインが2人でも騒がしいんだな。」

おしまい。

おまけコーナー

作者「ここでお知らせがありまーす。」

銀八「何だよお知らせって？」

作者「只今オリジナル小説と新しい話の銀魂×ハヤテの作品を書いていまーす。」

梓「何やってるんですか。」

ドナルド「ただでさえ連載作品が多いのに・・・」

作者「大丈夫。もう少し後で発表するから。お楽しみに～。」

第５９話：（バレンタインデー編）渡す物はしっかりと渡せ（前書き）

作者「もう五月か・・・」

ドナルド「それより大丈夫なの？」

ブロリー「五月なのにまだバレンタインデーの話・・・」

作者「・・・・・・・・・・」

第59話：（バレンタインデー編）渡す物はしっかりと渡せ

バレンタインデーの前の日の事だった。混沌学院女子寮内にある生徒用キッチン、今ここでは女子達が手作りチョコを作っていた。２Ｚの苦労人、御坂もここでチョコを作っていた。そう、２Ｎの当麻に渡すチョコを。その様子を陰から見ていた人物がいた。そう、変態の黒子であった。

「お姉さま・・・まさかあのツンツン頭のあいつにチョコを・・・」

そう思うと腹の奥底から怒りがわき出てくる。

「お姉さまには私という者がありながら・・・く～～～～～！」

くやしいですわ！と叫びそうになったが何とかこらえた。何でこらえたかというとある事を思いついたからだ。

てな訳で翌日。御坂は何か重いものを感じ目を覚ました。そこには黒子がいた。

「お姉さま、バレンタインデーのプレゼントで黒子を」

「何やってんのよアンタはァァァァァァァァァァァァァ！」

御坂は叫びながら黒子にレールガンをぶっ放した。

「ア～～～～～レ～～～～～！」

叫びながら黒子は窓から落ちて行った。

「ったく・・・油断も隙も無い！」

「ファ～～～また黒子が出たの？」

大きな欠伸をしながらナミがこう話しかけて来た。

「ええ、そうよ。」

「あいつも懲りないわね～これで何度目よ。」

「わからない・・・起こしてごめんね。」

「いいのいいの気にしないで、あと少しでアラームが鳴るところだったから。」

その後は下のキッチンへ向かい朝食を取り、部屋に戻って学院へ

向かう支度を始めた。御坂はバックの中に当麻用のチョコを入れた事を確認し、出かけて行った。

２Ｚ教室。御坂は悩んでいた。そう、一体どうやって当麻にチョコを渡そうかと考えていたのだ。呼びだして渡そうと考えたが黒子に邪魔されそうだし、直接２Ｎへ行って渡そうとも考えたが黒子に邪魔されそうだし・・・そう考えるとテレポートの能力を持つ黒子がかなり厄介なのだ。

「どうしましょ・・・」

「何悩んでんだ？」

そう声をかけて来たのはゾロであった。

「はぁ・・・良いわね、アンタは悩みがなさそうで。」

「まぁな、それよりどうした？黒子の奴と喧嘩したのか？」

「違うわ、ある人に渡し物があるけど・・・黒子が邪魔しそうで・・・。」

「そうか、２Ｎの当麻にチョコを渡したいんだけど黒子が邪魔しそうなんだな。」

ゾロがこう言ったら御坂は机に思いっきり顔面をぶつけた。

「何で知ってんのよ！」

「皆知ってるぞ。お前が当麻の事好きだって。」

「皆知ってるの！」

「ああ。」

御坂は赤くなった。何故自分が当麻に好意を向けているって知っているの？と心の奥底から思った。

「しっかしお前すごいな、自分からデート申し込んだりとかしてたもんな。原作で。」

「それは別の話じゃないの！」

ゾロに向かってこう叫んだ。

「御坂。しっかりとチョコ渡せよ。」

悟空がこう言って肩を叩いた。その後、彼女の周りには「しっか

りとチョコ渡せよ！」という声が響き渡った。その様子を見ていた少女が一人いた。ってかその少女って黒子の事なんだけどね。

休み時間。またバカをやらかしたサンジ達を倒した後、御坂は２Ｎの教室へ向かった。

「あ、２Ｚの御坂さん。どうしたの？」

近くにいたなのはが話しかけて来た。

「実はあの上条に用があって・・・」

「当麻君に？ちょっと待ってて。」

なのはは２Ｎの教室へ入って行った。だがすぐに御坂の元へ来た。

「今教室にいないみたいだけど。」

「そう。」

「おかしいな・・・一時間目はちゃんと教室にいたのに・・・。」

その時だった。御坂の形態のバイブレータが鳴り響いたのだ。

「あ、ゴメン。・・・何かしら？」

携帯を開いてみたらメールが来ていた。宛先は不明。

「誰かしら？」

メールの中を見て見ると御坂は驚いた。

「どうしたの？」

なのはがこう聞いた。御坂が携帯を見せてくれた。そこには当麻らしき人物が庭内で捕まっている画像だった。

御坂となのはは急いで庭へ行った。

「まさかこんなことが起こるなんて・・・」

「早くしよう、当麻君の身に何かあったら大変だよ！」

二人は急いで画像の場所へ向かった。

「ここ辺りね・・・」

「うん。」

画像の場所らしき所へ来た二人。辺りを見回すが当麻の姿は見当たらない。

「どこかしら・・・」
御坂がこう言った瞬間だった。彼女の目に当麻らしき人物が映ったのだ。
「あ、あれ！」
「見つけた！」
急いで当麻の元へ向かったのだが・・・。
「大丈夫！返事をして！」
なのははこう叫んだが当麻は返事をしなかった。だがなのはは異変を感じ当麻を調べて見た。
「・・・何これ？」
「え？」
「これ・・・ただの人形だよ。」
「に・・・人形？」
呆気にとられた御坂が当麻人形の所へ近づき調べてみた。調べ終わった後御坂の目は点となった。
「よく出来てる人形だね～。」
「ええ・・・。でも一体誰がこんな事。」
「お姉さまァァァァァァァァァァ！」
すると突然黒子がいきなり現れ御坂に抱きついた。
「黒子！離れなさいよ！」
「黒子を！黒子を受け取ってェェェェェェ！」
「グ・・・グググ・・・もしかしてアンタがあの人形を・・・」
「そうですのよ、お姉さまに黒子を渡そうと・・・」
「シャオラァァァァァァ！」
御坂は何とか力を振り絞って黒子に電撃を浴びさせた。
「ビギャアアアアアアアアアア！」
「ったく・・・とんだ無駄足だったわね・・・なのは・・・こんな茶番に突き合わせてごめんね・・・。」
「あ・・・うん・・・。」
二人は感電して喘ぎ声を出している黒子をほっといて中へ戻って

行った。

その後、御坂は当麻を探しに学院内を回っていた。

「一体どこかしら・・・」

そんな事を呟いていたら当麻と一方通行の話声が聞こえた。御坂は「来た！」と心の中で叫び廊下の影を隠れた。段々と話声が近づいてくる。そして・・・

「ちょ・・・ちょっと待って！」

心臓をバクバクさせながら御坂は当麻の前に出た。

「こ・・・これ受け取りなさいよ！」

と後ろに隠し持っているチョコを前に出した。しかし。

「ジンオウガって一部鬼畜だよな～。」

「ああ、あいつの尻尾やけに固いもんな。」

当麻は御坂に気付かずモンハン３ｒｄの話をしていた。

ブチッ！

御坂の堪忍袋の緒が切れる音がした。

「ちょっと待てやァァァ

「・・・オイ・・・大丈夫か？」
一方通行は隣にいるチョコまみれの当麻にこう聞いた。
「・・・息苦しい。」
口の中にチョコがつまっているのだろう、当麻の声は少し濁っていた。

「私のバカァァァァァァァァァァァァァァァ！」
学院の庭にある大木の前。御坂はここで自分の頭を大木に叩きつけていた。
「何であんなことするの！私バカ？バカだよね、手作りチョコを相手の顔面に叩きつけるバカいないよね？私だけだよね？何やってるの私？本当にバカみたい！あーもう！私のバカバカバカバカバカバカバカ！」
額が血だらけになっても御坂は頭を叩きつけるのを止めなかった。その後ろから・・・。
「お姉さま～黒子の愛を受け取ってくd」
黒子が現れたのだが今度は彼女を捕まえ、黒子を大木に叩きつけ始めた。
「アァン、これがお姉さまの愛なのね！ゴフ！黒子はその愛をこの体の全身にゲフ！染みわたらせますわゲフォ！ああ、お姉さまグフ！もっと、もっと黒子に愛を！黒子に愛をゲファ！黒子に愛をォォォォォォォォォォォォォォォォ！」
青空のもと、大木に叩きつける音と御坂の叫び声と黒子の喘ぎ声が無数に響き渡ったという。

次回！
２Ｚの影のツッコミ役、咲夜。新八が休みのため彼女がツッコミ役となっているが何故か切れが悪い。そんな彼女の脳裏には新八の影があった・・・そして彼女の秘めたる思いがついに明らかとなる！次回、混沌学院『恋というのは気付くのが遅い』・・・ついに他

作品同士のキャラ同士のカップリングが・・・！
「何で俺がモテねーの知ってんだァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
「ああ、パンツゥゥゥ！」

第59話：（バレンタインデー編）渡す物はしっかりと渡せ（後書き）

おまけトーク

銀八「あれ？おまけコーナーの名前が・・・」

作者「変えました。」

梓「まぁその通りですね。」

ブロリー「くだらない話しかしてないからな。」

闇「その通りです。」

作者「・・・・・・・・・・」

第６０話：（バレンタインデー編）恋というのは気付くのが遅い（前書き）

作者「さ～て、そろそろバレンタインデー編もクライマックスに近づいてきました！」

銀八「まさかあいつに彼女ができるのか！？」

闇「見ていってください。」

第６０話：（バレンタインデー編）恋というのは気付くのが遅い

２Ｚは少し絶体絶命の事態に追い込まれていた。何故絶体絶命なのかというとツッコミ役の不在である。そう、眼鏡・・・違った。新八というブレーキ役の不在である。しかし同じツッコミ役の咲夜がいるため何とかなっているのだが・・・。

『桂さん・・・これ・・・バレンタインデーのチョコよ、受け取って。』

教室内に桂のペットのエリザベスが女装して桂にチョコを渡してた。

「いいのかエリ子さん・・・こんな俺にチョコなんて・・・」

『いいのよ、受け取ってください。』

「え・・・エリ子さァァァァァん！」

「何朝っぱらから気持ち悪い芸をしてんねェェェェェん！」

咲夜のハリセンが桂の頭上に命中した。

「何をする咲夜殿！これはれっきとしたバレンタインデーの」

「何がバレンタインデーねん！こっちから見たらただの気持ち悪い芸ねん！」

こうツッコミを入れたが桂は少し笑った。

「な・・・何がおかしいんや？」

「甘いな・・・新八君だったらもう少しハイテンションでツッコミを入れる・・・さらにボケとの会話のキャッチボールを始める！」

桂がこう言った。確かに新八のツッコミはその後もボケ役との会話をしていてしっかりと言葉を返している。

「う・・・うちはうちでツッコミの仕方があるし・・・あいつはあいつなりのツッコミなんや、あまり言わんといてくれ。」

「そうか・・・しかし今日はボケづらいな。やっぱりツッコミ役は新八君じゃないとしっかりとしないな・・・。」

「お前のボケはどうでもいい！」

咲夜はもう一回桂をハリセンで叩いた。

一方新八はというと・・・。

「あ・・・あー・・・朝から酷い目にあった・・・。」

姉の暗黒物質を口にして今まで気絶していたのだ。体を動かそうとしたがメチャクチャだるく思うように動かせない。そのくらい暗黒物質の攻撃力が高いのだ。

「今日は休んだ方がいいな・・・せっかくのバレンタインデーって言ってもどうせチョコもらえないと思うだろうな・・・。」

そう呟いた後布団にもぐりこんだ。

新八・・・その言葉を聞くとなぜかもやもやする。最近の咲夜は何故かそうなのだ。いつも先にツッコミをされるのだがまぁそればそれでおいといて。以前こんなことが起きたのだ・・・。

ある日咲夜は暇つぶしにゲーセンへ行ったのだ。しかしガラの悪い兄ちゃん連中に捕まってしまったのだ。

「おい譲ちゃん俺達と遊んでかないか？楽しい事しようよ。」

というような台詞を棒読みで兄ちゃんAがこう言った。

「俺達がとても楽しい場所連れてくからよーついて来いよー。」

と同じく棒読みで兄ちゃんBがこういった。他にもCとDとEもいたが同じようなセリフを棒読みで言っていたのだ。ウザったいと思いすぐにその場から離れようとしたが腕を掴まれたのだ。

「俺達が誘ってるのに帰ろうとするのかい？」

「うちに触るな！」

すぐにその手を払ったがすぐに捕まり動かなくなってしまったのだ。

「よし、このまま俺の車につれてこうぜ！」

「あ、止めろ！」

その後はその兄ちゃん連中ともみ合いをしていた。その途中クレーンゲームの機械に当たった。当たった力が強かったのかそのクレ

ーンゲームはしばらく揺れていた。
「だ・・・誰か助けて・・・」
「無駄無駄、どうせ肝が小さい奴は助けに来ないんだっての。」
「無駄なあがきだ。やめときな。」
「誰かァァァ！助けてェェェェェ！」
咲夜がこう叫んだ時だった。
「オイゴラァァァ！」
「なんd」

ドゴォォォォォォン！

振り向いた兄ちゃんAが宙に浮いた。その後、その人物は兄ちゃんAを兄ちゃんBに向かってブン投げた。
「どうしてくれんだ・・・」
その人物は息を吐きながら兄ちゃん連中に迫って行った。
「テメーらが騒いだおかげであと少しでとれそうだったお通ちゃん特製グッズが・・・あと少しギリギリの手前で落ちただろうがァァァァァァァァァァァ！」
そう叫ぶのは新八であった。ブチ切れた新八は両手で兄ちゃんCとDに鼻フックデストロイヤーを仕掛け、悶絶させた。その後、Eに向かってこう話した。
「どうしてくれんだ？ここまで来るのに六百円はかかったんだよ？どうしてくれんだアァン？」
「しゅ・・・しゅみましぇんでした・・・」
「今すぐお前ら協力してここのゲーセンのクレーンゲームにあるお通ちゃんグッズ、すべて回収して俺に渡せぇェェェェェ

りの四分の一は少し呆れていたが。それからなのだ。新八の事を見るとなぜかもやもやするのは。

「何やろ・・・この気持ち・・・」

しばらく考えていたがすぐに考えるのを止めバックの中にある漫画でも読もうと思いバックの中をあさっていた。すると少し硬いものに当たった。それは近くのコンビニで買ったバレンタインデー用のチョコだったのだ。

（そーいや折角だから誰かにあげようと思って買ったんやった・・・）

「お、それ誰用のチョコだ？」

横からルフィの声がした。

「にゃあああ！いつの間にいるんや！」

「お前が新八の事を考えている時からだよ。」

「何でその事を・・・」

「考えただ漏れだったよ咲夜ちゃーん。」

後ろの方でゼロスがこう言った。

「丁度いいじゃん。そのチョコ、帰りに新八に渡せば？」

「な・・・何でうちがあんな奴に。」

「そのついでに告白しちゃえば？」

ゼロスがこう茶化したので自分の席から思いっきり飛んでゼロスに飛び蹴りを喰らわせた。

「アホアホしい！」

そう言って教室から出て行った。

「いててて・・・」

「大丈夫かゼロス？」

「ま・・・まぁな・・・それにしても・・・やっぱりそうだな。」

「何がだ？」

ルフィが首をかしげてこう言った。

「んだよお前すごい鈍感だな～。誰でも分かると思うけど・・・」

「いやだから何がだ？もったいぶらずに教えてくれよ。」
ルフィがこう言うのでゼロスは小さい声でこう言った。
「俺様の勘だけどよ・・・咲夜ちゃん・・・多分新八の事好きだぜ。」
「何ィィィィィィ！咲夜が新八の事好きだってェェェェェェェェェェェェェェ！」
大声でルフィが叫んでしまった。
「おい！大声でしゃべるなよ！皆にばれる」
「ゼロス、その話本当？」
後ろにいたコレットがこう聞いてきた。
「あ・・・いや・・・あくまで俺様の勘だけど・・・」
「マジで！あの新八君に恋してるって・・・マジでかァァァァァァァ！」
黒板の方ではいつの間にか保健室から戻って来た近藤が勝手に一人で盛り上がる。
「ははは・・・新八君よかったね。」
「まさかあの眼鏡が恋されるなんて・・・。」
「多分知らないと思うよ。」
悠二とシャナと吉田がこう会話した。
「はー・・・また俺の出番か？」
緋鞠達のバレンタインデーイベントから帰って来たヤムチャがこう言った。
「フフフ♪どうなるか楽しみだわ。」
紬が笑顔でこう言った。
「・・・ばれちゃったな・・・皆に。」
「ああ。」
ゼロスとルフィはこう呟いた。その後、ゼロスは皆にその事を隠してくれと言った。もしばれたら大変な事になると思うからだ。
時は流れて帰りの時刻。

「あ、ゼロス。丁度良かった。」
教室から出ようと思ったゼロスにスネークが話しかけて来た。
「何すか先生？」
「実はこのプリントを新八の家に届けてほしいのだが。」
「妙ちゃんに渡せばいいんじゃねーの？」
「実は新八の容体が気になると言ってすぐに帰ってしまったんだ。」
「そうか・・・」
この時だった。ゼロスにいい案が浮かんだのだ。
「分かりました。届けてきます！」
「おお、すまないな！」
「いいえ。どうってことないですよ！」
スネークからプリントを受け取った後ゼロスは咲夜の元へ向かった。その途中携帯でクラスメイト達・・・そして新八の友人のタカチンに連絡を取った。

一方ベランダにいる咲夜の方は・・・。
「うち・・・何で新八の事を考えるともやもやするんだろう・・・」
まだその事を悩んでいた・・・やはり自分は新八の事が好きなのだろうか・・・と思っていた。・・・好き・・・？その言葉を考えるともやもやが晴れるような気がしている。強く思えば思う程もやもやは晴れて行く・・・そしてようやく彼女は自分の気持ちに気付き顔を上げた。
「うち・・・新八（やつ）の事・・・好きなんや・・・。」

次回！
ついに気付いた咲夜の気持ち！彼女の気持ちは眼鏡（しんぱち）に届くのか？そんな彼女のためにクラスメイトが活躍する！次回混沌学院『チョコの味は初恋と同じく少し苦いがとても甘い味だと思う』バレンタインデー編、クライマックス！
「恋はいつでもハリケーンなのじゃ！」

第６０話：（バレンタインデー編）恋というのは気付くのが遅い（後書き）

おまけトーク

銀八「おい、お前前に人気投票についていろいろ言ってたな。」

作者「はい。実はバレンタインデー編が終了次第そっちの方も打ち切ります。で、その後は結果発表と特別編をお送りします。」

ドナルド「特別編って？」

作者「そん時言う。お楽しみに～。」

第６１話：（バレンタインデー編）チョコの味は初恋と同じく少し苦いがとても

作者「さーて、今回でバレンタインデー編のクライマックスです！」

銀八「あと人気投票についても話あるんだろ？」

作者「それは後書きにて言います。」

第61話：（バレンタインデー編）チョコの味は初恋と同じく少し苦いがとても

自分の想いに気付いた咲夜は一体どうしようかと悩んだ。このチョコ・・・どうやって新八に渡そうかと。新八の家は分からないし・・・もし新八と仲のいいロイドや神楽やエミルにこの事を伝えたら思いがばれてしまう・・・そんな時だった。

「あ！いたいた咲夜ちゃん！」

後ろの方からゼロスの声が聞こえたのだ。

「あ、アホ神子。」

「いや～丁度良かった～。実は今から新八の家に行ってプリントを渡そうとしたんだけど・・・用事を思い出してさ～。悪いんだけど変わりにプリントを届けてくれない？」

この言葉を聞いて咲夜はビクッとした。

「う・・・うちが！」

「そう。というより新八の家分かる？」

「い・・・いや。行ったことないし・・・。」

「じゃあ俺様が軽く案内」

ゼロスがこう言った後ポケットの方から携帯のバイブレータの音が響いた。

「あ、ゴメン・・・もしもし俺様だけど・・・ああ、分かった。」

そう言って携帯のスイッチを消した後また咲夜に話しかけた。

「悪い！俺様用が出来て・・・」

「あ、ちょ！案内はどうすんねん！」

「今から軽く地図を書くから大丈夫だって！」

その後、ゼロスは自分のカバンから白紙の紙を取り出し軽く新八の家の周辺の地図を描いた。そしてその下には自分の携帯番号。

「もし分からなくなったら俺様んとこに連絡すればいいから。じゃ！」

と言ってゼロスは去ってしまった。

「・・・しゃーない・・・行くしかないか。」
咲夜はこう言って学院を出て行った。

数分後、近くの商店街に咲夜は来ていた。ゼロスが書いた地図によるとこの商店街を通って少し歩いた所に新八の家があるのだが・・・。

「あれ？一体どこ曲がればいいんや？」
この商店街はやけに曲がる所が多い。迷っている中どこかで聞いた事のある声が響いた。
「そこの譲ちゃん。何かお困りかな？」
そう声をかけて来たのは海賊のコスプレをした桂だった。
「・・・何してんねん・・・ヅラ？」
「ヅラではない、俺は宇宙キャプテンカツーラだ。」
咲夜はこのバカを無視して歩き始めた。
「ちょっとォォォォォォ！何無視してんのォォォォォ！」
「うちに喋らないで、知り合いかと思われたら恥ずかしいやろ。」
「いや？俺は別にそうは」
「お前の事じゃないねん！」
その後、咲夜は桂を人目のつかない場所へ移動させて話を始めた。
「で、何の用や？新八の家に案内させてくれるのか？」
「フフフ・・・それはどうだろうかな？」
バカがかっこよくこう言ったので少しイラッときた。
「何も用がないならうちはもう行くで。少し用があるから」
「あれ？いいの？」
「いいんや、どうにかな――――」
その時だった。いきなり咲夜の体が宙に舞ったのだ。
「エエエエエエエエエエエエエエエエ！何やこれ！」
「フハハハハハハハ！このかわいらしい少女はこの俺『怪盗ゴリパン』が貰って行くー！」
そう声を上げたのはル〇ン三世っぽいコスプレをした近藤であっ

た。そしてその横には次○のコスプレをしたクラウドと五○衛門のコスプレをしたゾロの姿があった。
「何やってんねん！そんな完成度の低いコスプレをして！」
「コスプレ？何言ってんだいさ～くやちゃ～ん！」
「そんな『ふ～○こちゃ～ん』みたいに言わないでいいから！」
「ゴリパ～ン！」
下から声が聞こえたので見て見たらそこには自転車のペダルをこぎまくってこちらを負っている銭○風の服を着たルフィがいた。
「ま～て～！ゴリパ～ン！貴様を逮捕する～！」
「あっはっは！あ～ばよ～！とっつあ～ん！」
とゴリラが高笑いをしていたところだった。どこからかいきなりバズーカ砲らしきものが発射されゴリラに命中したのだ。
「「ゴリパン！」」
中に飛ばされてしまった咲夜だったが誰かに助けられた。
「あ・・・ありがと・・・」
「いいってことよ。気にするなマヨ。」
声の主はマヨネーズのキャラクターの着ぐるみを着た人物・・・というより土方だった。
「・・・何してんのホンマに？」
「いいから黙ってこの先の曲がり角を右に曲がって逃げろ。」
「・・・だから何してんの？」
「いいから黙ってこの先の曲がり角を右に曲がって逃げろ！いいな！」
「あ・・・ああ。というより・・・土方」
「土方？俺はそんな名前じゃないぜ。」
そのマヨネーズ（ひじかた）は腕に抱かえている咲夜を地面に下ろし、右腕のバズーカ砲を構え直してこう言った。
「俺は・・・惑星マヨから来た愛の戦士・・・『マヨラ１３』だ。」
そう言った後、マヨラ１３（ひじかた）は目の前にいる次○のコスプレをしたクラウドと五○衛門のコスプレをしたゾロに向かって

行った。
「・・・あいつら普通に道案内できへんのかい・・・。」
そう呟いた後、土方の言われた通りこの先の曲がり角を右に曲がった。

一方その頃、新八の方は・・・。
（ああ・・・何て今日はついてないんだ？朝から姉上の暗黒物質を口にして腹を壊すし・・・それに今回の長編だって全くと言っていいほど出番がなかった・・・ついてないな・・・今年のバレンタインデー・・・って言ってもどうせチョコ貰えるはずないか。）
そんな事を心の中で呟いていた。で、腹に痛みが襲ったのでトイレへ向かって行った。

何とか商店街の道を通り抜けた咲夜。今彼女のよこの道には川が流れている。ゼロスが書いた地図にこの川らしき所が書かれていたので土方が言っていた案内はあっていたのだろう。
「うーん・・・多分この道だと思うけど・・・ここやけに住宅が多いな～。」
咲夜は辺りを見回した。多分このどれかに新八の家があるのだが分かりにくい。ゼロスの言っていた情報によると新八の家は剣道道場ですぐに分かるというのだが全く分からなかった。
「外回りにないとしたら・・・中の方やな・・・。」
そう言ってどこか中の路地に入れそうなところを探したのだが。
『そっちではない・・・もう少し前に行った所で左の路地に曲がるのだ・・・』
と誰かの裏声が聞こえて来たのだ。
「・・・誰や？」
辺りを見回しても誰もいない。かといって不審なものは何一つ見つからない。
『そんな暇があったら・・・先に行け・・・』

「誰やアンタ？」
『私は・・・神の声・・・迷う子ヒツジの為に降臨したのだ・・・アル』
「・・・後で高級酢昆布を」
『マジでか！』
『オイ神楽、地声になってるぞ！』
『いや、悟空も地声になってるから。』
『チョッパーも地声ネ。』
神の声は自ら正体をばらした。そう、神楽と悟空とチョッパーがどこかで隠れて声を出していたのだ。
「・・・案内ありがとな。」
そう言って神楽達の言われた通りの道を歩いて行った。

で、新八は布団で寝ていた。少し寝たら大分楽になった。
「はぁ・・・少し楽になったな・・・」
「新ちゃん？体良くなった？」
ふすまの方から妙の声が聞こえた。
「姉上。大丈夫です。寝たら少し良くなりました。」
「そう。よかったわ。」
妙は笑顔でこう言った。
「災難だったわね。まさか腹痛を起こすなんて・・・。」
ここでアンタのせいじゃねーか！と新八は叫びたいのだが叫んだらまた腹を壊しそうなのであえてツッコミをするのを止めてこう言った。
「ぐ・・・偶然ですよ。明日になったらちゃんと治ってますって。」
「そうね。今日が悪い日だったもの、明日はきっといい日よね。」
「はい。きっとそうです。」
そう会話を交わし妙は居間の方へ向かって行った。
「新ちゃんったら・・・この後いい事起こるって知らないのね。」
妙は笑顔でこう呟いた。彼女も咲夜が新八に想いを寄せている事

を知っていたのだ。その後、家のチャイムが鳴った。
「はいは～い。誰ですか？」
「あ・・・お邪魔します・・・。」
玄関の前には少しもじもじしている咲夜の姿があった。

「お！ようやく新八の家についたらしいな！」
「そうね、後はあの子の頑張り次第ね！」
新八の家の倉庫の中、今ここでゼロスとナミとジーニアスが妙の持っている隠しカメラを通じて映っている画面を見ながらこう言った。
「そろそろロイド達に連絡した方がいいかな？」
「まだよ。というよりあの手段はいざという時の最終手段だから。」
「そうだぜ、ここでどうなるか少し楽しみだな～。」
テレビを見ながらゼロスはにやにやしていた。
『せっかくだから新ちゃんの様子見て行く？きっと喜ぶわよ。』
『え・・・そうか・・・なら一目会ってくわ。』
妙は咲夜を家に入れた。
「お！ここでどうなるか！」
「ホント、気になるわね～。」
コソコソ声で彼らは会話をつづけていたのであった。

新八の部屋、今彼はベッドの上で暇を持て余していた。そんな中。
「し・・・新八？」
「あれ？咲夜さん？」
咲夜の声がしたのだ。彼女は少し焦っているのかどうか分からないが途切れ途切れにこう言った。
「少し・・・部屋に入っても・・・いいか？」
「え・・・ええ。お通ちゃんグッズで一杯ですけど・・・それでも問題ないなら。」
「わ・・・わかった。邪魔するで。」

と言って咲夜は部屋に入って行った。
「うわ・・・マジですごいな・・・」
「ええ。ロイド君やエミル君が始めて来た時もそう言ってました。」
咲夜は部屋中にあるお通ちゃんグッズを見て驚いていた。こんな調子で自分の想いが新八に伝わるか少し心配になって来た。
「で、今日はどうしたんです？」
「あ・・・ああ。実はプリントを届けに来たんや・・・。」
鞄の中から学校で配られたプリントを新八に渡した。
「ありがとうございます。わざわざうちに来てくれて。」
「いいんや、・・・それに・・・お前にいたい事と渡したい物がうちの方からあるし・・・。」
顔を赤く染めて咲夜はこう言った。

「オオオオオ！このパターン、咲夜ちゃんの方から言っちゃうの！」
「何かすごい展開になって来たわね！」
「僕もプレセアとこのぐらい話せたらな～。」
「いいじゃん、ジーニアスさ～お前プレセアちゃんから貰ったんだろ～？」
「ま・・・まぁ・・・」
倉庫の中でゼロス達はこんな会話をしていた。だがしかし、その後の咲夜はもじもじしていたため展開が先へ進まなかったのだ。
「ったく、告るならさっさと告りなさいよ！」
「まー待てナミちゃん、きっとドキドキして言えないんだと思うよ。」
「そう？私だったらさっさと言っちゃうけど。」
「世の中ナミちゃんみたいな性格の人ばかりじゃないからね～。」
展開の遅さにいらつくナミに対しゼロスはこう言った。だが数分立っても咲夜と新八の展開は進まない。
「・・・仕方ない。最終手段を使うぞ。」
「・・・ええ。」

その後、ゼロスは携帯電話を取り出し誰かと連絡を取り始めた。
一方咲夜は心臓をバクバク言わせながら新八の部屋に座っていた。
（あかん・・・どうしよう・・・チョコを渡したいけど・・・恥ずかしさのあまり体が・・・！）
「どうしたんですか？」
新八が咲夜にこう聞いてきた。で、彼は見てしまった。バックの中にある物を。
「これなんですk」
と聞こうとしたその時だった。
「がんばれ～！咲夜～！」
突然と下の方からクラスメイト達の声が聞こえて来たのだ。一体何だと思い新八と咲夜は窓を開けた。そこには咲夜の応援のために駆けつけたクラスメイトと新八率いる『寺門通親衛隊』の皆さんが来ていたのだ。
「み・・・皆・・・」
「え？何これ？何なのこの状況？」
「何とぼけてんだ新八ィィィィィ！気付けよ咲夜の気持ちをォォォォォ！」
「え・・・それって・・・」
新八は咲夜の方を振り向こうとしたが何かに当たった。それは咲夜が買った新八用のチョコレートだったのだ。
「こ・・・これって・・・まさか・・・まさか！」
「そ・・・そうや・・・」
そう言った後咲夜はチョコレートを新八に押しつけながらこう言った。
「これで・・・うちの・・・うちの想い・・・届いたやろ！」
顔を真っ赤にして咲夜はこう言った。そして新八は笑みを作りこう言った。
「ええ。しっかりと届きましたよ。」

赤い夕陽の中、二人の影が優しく照らされていた・・・。そんな空気の中、色々と慌ただしかったバレンタインデーが終わった。

その日から寺門通親衛隊に初の女性メンバーが加入したそして・・・

新八と咲夜はカップルになった。

「・・・今回の長編・・・本当に俺の出番なかったな・・・」

夜。完全に忘れ去られて保健室に残されていた銀時がこう呟いていた。

第61話：（バレンタインデー編）チョコの味は初恋と同じく少し苦いがとても

おまけ劇場

～バレンタインデー編のその後～

咲夜「新八、弁当作ってきたで。」

新八「ありがとうございます。」

咲夜「いいって、いいって。」

新八「それにしても咲夜さんって本当に料理上手ですね。」

神楽「モグモグ・・・本当にうまいある！」

ルフィ「ガツガツ・・・結構いけるなこれ。」

悟空「ムシャムシャ・・・お！神楽の言うとおりだ！うめ～！」

新八「何であんたらが咲夜さんが作ってきた弁当を食べてんだ？」

神楽「まぁ細かい事は気にしないアル。」

咲夜「ハハハ・・・（笑うしかね～）」

銀時「うらやましいぞオメー、彼女できやがって。俺より先にゴールインするんじゃねーっつーの。そもそもオメー原作じゃー俺よりもててねーのによー。まったくだコノヤロー、オイ！この卵焼きも

う少し甘くしてくれ！」

新八「あんたもですか・・・」

咲夜「ていうか本当に教師のやる事か？」

おしまい

お知らせ

え～実は人気投票についてお知らせがあります。約一ヶ月にわたって繰り広げてきた人気投票は本日の昼十二時を持って締め切らせていただきます。もし投票するならば十二時前に感想欄に書いて応募してください。なお、十二時過ぎの投票は無効としますのでご注意ください。後一つだけ（右〇風に）次の話で特別編を行います。その時は前書きにて詳細を言います。そして人気投票の結果発表もしばらくして行いますのでお楽しみに！では次回お会いしましょう！

特別編：色んな道具を扱う時はまず説明書を熟読しろ（前書き）

作者「今回は特別編でーす。」

一方通行「一体何やるんだ？」

作者「コラボです。コラボ先はのらねこさんの『銀魂～ＴＨＥ　ＧＵＮ　ＯＦ　ＤＩＳ～』という作品です。一応本編にも紹介しています。」

梓「というよりこんな話でいいのでしょうか？」

作者「ま・・・まぁ楽しんでください！！」

特別編：色んな道具を扱う時はまず説明書を熟読しろ

グラウンド、今２Ｚの連中はエアガンを持って立っていた。奴らの目の前には松平と銀時が立っている。
「先生、なんですか？この始まりかた？」
「仕方ねーだろ？だって今回は特別編だぜ？」
「誰かゲストでも来ますのか？」
新八の後ろにいたハヤテが聞いた。
「ああ。おーい、出てこーい。」
銀時がこう叫んだ。そして一人の女性が現れた。
「誰ですかこの人。」
「俺はクォヴレー・ゴードンだ。」
「特別ゲストだ、今回はのらねこさんが書いている銀魂～ＴＨＥＧＵＮ　ＯＦ　ＤＩＳ～から出演中の黒ヴレーゴードンさんだ。ちなみにクラスは２Ｏな。」
紹介の後、色んな声が上がった。
「綺麗な人ですね。」
「この作者もついにコラボか・・・」
「大丈夫か？作者？」
「お～めっちゃ綺麗じゃん！」
「すげ～美人。」
「死ね土方。」
「おい、特別編でそんな事言うな、オメーが死ね沖田。」
というような声が上がった。
「じゃあ今回の体育も特別ってことでチームに分かれてサバゲーだ。チーム分けはテメ―らで考えろ。俺はそこでドンペリ飲んでるから。」
無責任な事を言った後、松平は近くのベンチに座ってドンペリを飲み始めた。

「・・・いいのかあんな先生で？」
「いつもああいう風です。」
呆れているクォヴレーの質問に新八がこう答えた。

そんなこんなでチーム分けをした。クォヴレーは新八と咲夜、ハヤナギがいるチームに加わった。
「なぁハヤテ、私の装備これで大丈夫かな？」
「大丈夫です、お嬢様は何があっても守りとおします。」
ハヤテとナギは装備を確認しながらイチャついていた。そんな中、クォヴレーは冷静にエアガンのメンテナンスをしていた。
「ふぅ・・・これでコイツのメンテナンスは終了・・・と。」
「へぇ、結構メンテナンスの腕いいな。」
そこに声をかけて来たのは沖田であった。
「まぁな、これでも原作では・・・」
ここで彼女は元の世界の事を思い出した。
「おい？どうしてんでぃ？」
「いやいや、何でもない。」
そう言った後メンテナンスを続けた。

で、ついにゲーム開始の時間となった。
「え～勝利条件は２つだ。
・相手チームを全滅させる
・相手チームの旗を入手する
以上。なお時間内に決着がつかなかった場合は生き残っている人数で決める。それでも決まらなかったらドローだ、いいな？」
銀時の説明の後、両チーム陣地について試合が始まった。
「皆、ここは相手を待ち伏せして反撃しよう。」
「そうですね。」
「いいで。」
クォヴレーと班を組んでいた新八と咲夜は近くの茂みに隠れた。

しばらくして自分のチームに突撃してくる近藤と桂の姿が見えた。
「今だ！」
茂みから立ち上がりクォヴレー達は一斉にエアガンのトリガーを引いた。
「しまった！」
「こんな所にいたのかよ！」
彼らの攻撃によって近藤と桂は一旦引いて行った。
「よし、効果ありだな。」
その直後、クォヴレーは後ろを振り向いてＢＢ弾を発砲した。
「なかなかやるじゃねーか。」
声の主はヤムチャだった。どうやらクォヴレー達の隙を狙って攻撃するところだったのだ。
「殺気を感じたからな、まだまだ甘いな。」
「だが戦いの方はｄ」
ヤムチャのセリフが途切れる前に誰かがヤムチャに向かって発砲した。その正体はマシンガン型エアガンを持ったハヤテとナギのバカップルであった。
「大丈夫ですか？」
「ああ、問題ない。」
「そうですか、なら」
「ハヤテクゥゥゥゥゥゥゥン！」
ここで上空から二丁の小型マシンガンを装備したヤンデレモードのヒナギクが襲いかかって来た。
「ヒナギクさんか・・・厄介な相手が出てきましたね。」
「ここは私達に任せろ！何とか相手の旗を奪いに行くのだ！まだ相手は油断している！」
「そうか、分かった。」
「ハヤテさん達もご無事で！」
そう言ってクォヴレー達は相手の陣地へ向かって行った。

相手チームの様子はかなり普通だった。まだゲーム序盤だろうかところどころ隙があった。
「今がチャンスですね。」
「もう少し待った方がいいんとちゃう？まだうち達だけじゃ・・・」
「大丈夫だ。相手はまだ俺達が来ると思っていない、奇襲をかけた方がいい。」
「まぁ、いきなり現れたら驚くわな。」
「そうですね。」
「よし、ここは俺に任せろ。」
「え？クォヴレーさんが？」
「こう言う事は俺に任せろ。二人はそのうちに仲間を呼んでくれ。」
「・・・分かりました。頑張ってください。」
そう言った後、クォヴレーは単身で相手チームに殴りこみに言った。
「て・・・敵！」
「甘い！」
素早く腰のエアガンを取り出し驚いた見張り役の家康に向けて発砲した。ＢＢ弾は見事家康に命中した。その後、腰からもう一つのエアガンを取り出し二丁拳銃で戦い始めた。
「相手は一人だ！落ち着いて戦え！」
指令室にいる相手のサブリーダーの土方はこう叫んだが手にしているのは指令用マイクではなくマヨネーズだった。
「土方さんが落ち着いてください！」
隣にいた西沢がツッコミを入れた。そんな中でもクォヴレーは華麗に戦っていた。彼女の攻撃により段々と相手チームの数が減らされていったのであった。
『土方さん！こちらは巧班！班はほぼ全滅状た・・・しまった！当たった！』
『こっちはクラウド班、ただいま悠二班と合流！どちらも全滅状態！帰還し・・・スマン！全滅した！』

『りっちゃん班！澪がビビって行動できましぇん！あ！唯と紬がやれれ・・・』
『りぃぃぃつぅぅぅ！』
『おい！抱きついてくるな！動けないだろうイタッ！やられたー！』
『キャアアアア！撃たないでェェェ！降参するからァァァァァ！』
土方の前にあるスピーカーからは仲間の声が聞こえた、しかし彼らは全員やられていった。
「くっ！強すぎる！」
「ど・・・どうすればいいのかな？どうすればいいのかな？」
「おとなしく旗を渡したらどうだ？」
土方の後ろに声が聞こえた。自室の監視カメラの映像を見たらそこにはクォヴレーが映っていた。
「い・・・いつの間に・・・」
「どこにあるんだ？旗は？」
エアガンの銃口を向けながらクォヴレーは再び聞いた。
「・・・喋らねーぜ・・・絶対に・・・」
「・・・仕方ない・・・だったら」
「ちょっと待ちな、そのバカをやるのは俺だ！」
「な！」
後ろから沖田が奇襲をしてきた。襲った理由はどうであれ土方と西沢は間一髪助かったのだ。
「オラァァァァァ！」
バズーカ型エアガンを沖田はぶっ放した。それによって部屋中に大量のＢＢ弾がばらまかれる。
「くっ！」
「まだまだ序の口だ！続いては沖田特製対土方用ぶっ飛ばしランチャー型エアガン」
「どんな装備だそれェェェェェェェ！」
クォヴレーの後ろから新八のツッコミの声が聞こえた。そして後ろからＢＢ弾が発射され沖田に命中した。

「よう、無事みたいだな。」
「オメー結構やるなぁ。」
「カッコいいアル！」
後ろから悟空、ルフィ、神楽がやって来た。そしてその後ろには新八と咲夜の姿があった。
「援護か・・・すまない。」
「ヒッヒッヒ、いいってことよ。」
「オメーすごいな、たった一人で敵の三分の一は倒すもんな～。」
「まぁな。」
「それより旗の場所が分かりました。」
「本当か！」
新八がそう言うとクォヴレーは後ろに振り向いた。
「場所はもう少し奥にあるそうです。」
「その情報をどこで。」
「実は・・・」
新八は数分前に起きた事を話した。

味方陣地の門の前、今だハヤナギとヒナギクは激しい戦いを繰り広げていた。そんな中、ハヤテはある事を思いつきこう喋った。
「ヒナギクさん、あなた方の旗はどこにあるのですか？」
「あ・・・」
ハヤテに話しかけられヒナギクはその時だけ乙女心を取り戻した。
「じ・・・実は私達の旗は千世が守ってるらしいの。でも周りにはゼロスやシャナ、一美、希も守ってるから結構難しい所にあるの・・・」
「重要な情報をありがとうございます！」
「・・・そんな事があっていいのか？」
「さぁ？まぁとりあえずここにいる皆で相手の旗を取りに行きましょう！」

そしてクォヴレー達は合流して相手の旗のある所へ向かって行った。

「土方達が全滅したようね。」

「という事は悠二も・・・」

旗のある所、今ここにシャナ達がこの場所を守っていた。そして彼女らの後ろには巨大な影がそびえ立っていた。

数分後、クォヴレー達は旗のある所に到着した。目の前にはシャナ、吉田、希、文乃、そして彼女らを前にはサンジとゼロスが立っていた。

「・・・ややこしい面子が残っていたか・・・」

「悠二を倒したらしいわね・・・。」

「巧の仇！」

シャナと文乃は戦う気満々だったがゼロスが何とか彼女らの気を沈めた。

「ここは俺に任せてもらおう。」

そう言ってサンジが前に出た。

「シャナちゃん達の気持ち・・・よく分かるぜ・・・この俺、サンジがお前らを」

サンジがまだこう言っているが神楽はＢＢ弾を発射した。

「イテ！おい！まだ俺のセリフが終わってないだろ！」

「んな事言ってる場合か？」

「そんな事、戦場では言ってられないぞ。」

「じゃあ何でスパロボで」

サンジが抗議をしようとしたがクォヴレー達の一斉射撃によりあえなく倒されていった。

「・・・皆、ここは一旦引こうぜ。」

「何でよ。」

「いやよく見ろよ。」

不満げのシャナに向かってゼロスは前を見るよう促せた。後ろには段々とロイドやナミ、桐乃達が援軍に駆け付けていたのだ。
「数的にこっちの方が不利だって。」
「そうね・・・ここは一旦引くわよ！」
そう言ってゼロス達は旗の所へ下がって行った。
「あ！逃げるのか！」
ルフィが挑発をしたその直後だった。突然上から巨大ロボットが現れたのだ。
『ニョホホホホ！この梅ノ宮家特製サバゲーロボ、『サバズシ君』がお相手するわよォォ！』
「な・・・何だありゃあ！」
「ロボってありかよォォォ！」
「すごく・・・大きいです。」
というような声が上がった。
「仕方ねェ！悟空、俺らでブッ飛ばすぞ！」
「おう！」
そう言うとルフィと悟空は上空に上がった。
「ゴ～～～ム～～～ゴ～～～ム～～～のォ～～～！」
「か～～～め～～～は～～～め～～～！」
「バズーカァァァァァァァ！」
「波ァァァァァァァァァ！」
ルフィの技と悟空の技がサバズシ君に命中した。だがしかし、あまり効果は無かったようだ。
『ニョホホホ！そんな技が通用すると思って！』
「俺に任せろ。」
クォヴレーはそう言うと前に立った。そして高く飛びあがった。
「ニョホホホ！何をする気なのかしら！」
「ねぇ！何あれ！」
文乃が指さす方向には巨大なロボットが空に浮いていた。そしてそのロボットはサバズシ君に攻撃し、あっさりと撃破した。

「何今のォォォォォォォォォォォォ！」
そう泣き叫びながら千世は落ちて行った。

「よし！旗を取ったぞ！」
相手の陣地の旗を取り、クォヴレーはそれを仲間に見せるよう高く上にあげた。それを見た新八達は歓喜の声を上げたのであった。・・・そう。クォヴレー達がこの戦いに勝利したのだ！

しばらくして授業が終わるチャイムが鳴り響いた。それを聞いた生徒達は松平と銀時の元へ戻って言ったのだが・・・。
「ま・・・松平先生・・・銀さん・・・？」
「ｚｚｚ・・・もう飲めねぇよ・・・」
「ｚｚｚ・・・クソ作者～結局今回も俺の出番なかったじゃねーか～・・・ｚｚｚ。」
何故か眠っていた。周りには空き瓶がいくつも転がっていた。
「・・・どっちの世界の銀時も・・・やはり同じような性格だな。」
その光景を見ていたクォヴレーはこう呟いた。

特別編：色んな道具を扱う時はまず説明書を熟読しろ（後書き）

おまけトーク

銀八「ついにお前もコラボか・・・」

作者「少しドキドキしています。こんな話でよかったのでしょうか？」

闇「さぁ？」

作者「でもまぁたまにはいいかなと思います。またコラボする機会があったらやってみたいなと思います。」

銀八「大丈夫かよオイ・・・」

第１回混沌学院人気投票結果発表！！

作者「レデースエーンドジェントルメン！今から第１回混沌学院人気投票結果発表を行います！」

銀時「うおっしゃー！」

神楽「ついに始まるアル！」

新八「どうせ僕なんか・・・」

ハヤテ「あの・・・もう少しネガティブな人がいるんですけど・・・」

作者「ほっとけ、まず最初にベストテンから発表！１０位はこの人です！名台詞と共にどうぞ！」

ごめ～ん、まった～？

無視すんなって言ってるでしょうが無視すんなやゴルァァァァァァ！

第１０位　とある魔術の禁書目録（とある科学の超電磁砲）より

御坂美琴　２３票

御坂「うそ！私！」

作者「御坂さん、１０位に入った感想は？」

御坂「え・・・えと・・・余り出番なかったと思ったんだけど・・・まぁいいか・・・と・・・とてもうれしいです！皆さんありがとうございます！」

作者「じゃあ次行きます。今大ブームなあの人です！」

海賊王に俺はなる！

生きたいと言えェェェェェェ！

第９位　ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥより

モンキー・Ｄ・ルフィ　２７票

ルフィ「この肉うんめ～！」

作者「あの・・・インタビューしたのですが・・・」

ルフィ「いいよ！今肉食ってるんだし！」

作者「・・・・・・では次行ってみましょう！俺もビックリしたこの方です！」

ハンバーガー４個分くらいかな

いくよ、ランランルー

第８位　マクドナルドのマスコットキャラ

ドナルド・マクドナルド　２７票

銀時「マジかよ！後書きに出てくる奴だろ？」

作者「そうです。まさか俺もこうなるとは思ってもませんでした。ではドナルドさん。今のお気持ちは？」

ドナルド「ドナルドに票を入れてくれる人がいるなんて嬉しいなぁ。これからもがんばるよ。ランランルー！」

作者「とても機嫌がいいみたいですね。という事で第７位を発表したいと思います！」

お腹いっぱいご飯をくれるとうれしいな

シェイク♪シェイク♪シェイクが三つ♪

第７位　とある魔術の禁書目録より

インデックス　３４票

御坂「うそ！私負けたの！」

作者「みたいですね。という訳でインデックスさんは・・・あれ？」

ナギ「ルフィと一緒に周りの食べ物を食いつくしてるぞ。」

作者「・・・・・・じゃ・・・・じゃあ第６位の発表に入りたいと思います！どうぞ！」

私は生徒会長

・・・マーボー豆腐・・・

第６位　Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！より

立花奏（天使）　３６票

作者「いや～初登場時から結構評判がありました。流石に天使ちゃんマジ天使ですね。」

奏「・・・どうも・・・」

作者「今の気持ちはどうですか？」

奏「・・・マーボー豆腐・・・食べたい。」

作者「・・・・・・え・・・えーっと・・・じゃあベスト５に移りたいと思いますがここでベストテンを逃した人の発表をしたいと思います。ちなみに全員５票以上の方々です。」

神楽「誰アルか？運が悪い奴は？」

作者「じゃあこのコーナーは名台詞無しで行きます。あと一部名前を略した所があります。そのキャラのファンの方々、ご了承ください。すみません・・・。」

銀魂より　神楽　１３票

ファイナルファンタジー？より　クラウド　１６票

魔法少女リリカルなのはシリーズより　高町なのは　１８票

とある魔術の禁書目録（とある科学の超電磁砲）より　白井黒子　１３票
テイルズオブシンフォニアより　ジーニアス　８票
テイルズオブシンフォニアより　ゼロス　７票
エルシャダイより　イーノック　６票
エルシャダイより　ルシフェル　５票
機動戦士ガンダムＳＥＥＤシリーズより　キラ・ヤマト　５票
機動戦士ガンダムＳＥＥＤシリーズより　シン・アスカ　９票
俺の妹がこんなに可愛いわけがないより　高坂桐乃　１０票
俺の妹がこんなに可愛いわけがないより　高坂京介　９票
絶体絶命でんぢゃらすじーさんより　最強さん　８票
とある魔術の禁書目録より　一方通行　１５票
とある科学の超電磁砲より　初春　７票
とある科学の超電磁砲より　佐点　７票
おまもりひまりより　くえす　１０票
侵略！イカ娘より　イカ娘　６票
侵略！イカ娘より　早苗　６票
けいおん！より　平沢唯　１９票
けいおん！より　平沢憂　１４票
ドラゴンボールより　孫悟空　９票
テイルズオブグレイセスより　アスベル　５票
魔法少女リリカルなのはシリーズより　フェイト　６票
テイルズオブジアビスより　ルーク　７票
けいおん！より　紬のたくあん　７票
けいおん！より　紬　６票
ＴｏＬＯＶＥるより　ララ　９票
ハヤテのごとく！より　桂ヒナギク　８票
おまもりひまりより　緋鞠　８票
魔法少女リリカルなのはシリーズより　エリオ　１２票
魔法少女リリカルなのはシリーズより　キャロ　１２票

ハヤテのごとく！より　愛沢咲夜　１２票
ＯＮＥＰＩＥＣＥより　ハンコック　５票
機動戦士ガンダムＯＯより　刹那　８票
灼眼のシャナより　シャナ　１３票
ＮＡＲＵＲＯより　うずまきナルト　８票

作者「以上の方々でーす。」

神楽「のわァァァァァァ！マジでかァァァァァァァァァァ！」

作者「マジです。」

唯「ま・・・まさか・・・あずにゃんがベスト５に」

作者「あずにゃんは・・・３票です。」

銀時「よかった～俺入ってなかった・・・。」

咲夜「うちここの扱いなんや・・・」

作者「お前はいい方だよ、だってバレンタインデー編のラストの方で急に票が上がったんだもん。それまで票が入ってなかったぜ。」

咲夜「そうか・・・」

ナルト「しかたねー・・・次を期待するか！」

作者「まぁ第２回人気投票はいつやるか分からないけど・・・」

黒子「今すぐにやりなさい！今度こそ私とお姉さまのワンツーフィ

ニッシュで・・・」

ヒナギク「アナタガキャラホウカイヲサセナケレバコンナコトニナラナカッタノヨ、ソウスレバワタシハベストテンイリダッタノニ。」

作者「ギャアアアアアアア！来ないでェェェェェェ！」

銀時「オイ！そんな事してる暇があったらベスト5を紹介しろ！」

作者「助けてェェェェェェェ！」

悟空「ルフィ、ヒナギクを止めるぞ！」

ナルト「分かったってばよ！」

作者「はぁ・・・はぁ・・・たすかった・・・じゃあこれよりベスト5を発表します！第5位は！」

ギャーギャーギャーギャーうるせーんだよ、発情期ですかコノヤロー？

糖分が足りないんだけどォォォォォォォ！

第5位　銀魂より

坂田銀時　57票

銀時「うっしゃー！俺来たァァァァァァァ！やっぱ俺主役だから？」

作者「混沌学院に主役は存在しねーよ、じゃあ第4位を発表します。

」

どんだけー！

眼鏡を変えたんだなぁ

第４位　銀魂より

志村新八　６０票

銀時「どんだけェェェ

新八「うそ・・・うそでしょ・・・僕が・・・僕が！」

作者「これは本当です。本当に銀さんが新八に負けました。」

銀時「な・・・何で・・・何でなの・・・？」

作者「これも咲夜と同じようにバレンタインデー編で人気がドドンと上がりました。その結果、銀さんの票を超えたわけです。」

銀時「は・・・ははは・・・ははははは・・・チクショォォォ

新八「・・・泣きながら帰って行った・・・」

神楽「新八ィ！テメー何私より票取ってんだァァ

新八「ギャアアア

どんな危険な事もするから！僕の命くらいいくらでもあげるから！大事な人なんです！失うわけにはいかない人なんです！

三千院ナギお嬢様の――――執事だ！

第２位　ハヤテのごとく！より

三千院ナギ　７４票

第１位　ハヤテのごとく！より

綾崎ハヤテ　８７票

ハヤテ「僕が１位・・・」

ナギ「私とハヤテがワンツーフィニッシュ・・・」

作者「ハヤテさん、ナギさん、今のお気持ちはどうですか？」

ハヤテ「み・・・皆さん・・・応援ありがとうございます・・・」

ナギ「まさかハヤテと一緒に頂点に立てたなんて・・・本当にありがとうなのだ！」

作者「ではこれから今回の人気投票の結果をまとめて表示します！」

１票　新八の眼鏡、スネークのダンボール、雷電、リィンフォース

?、アスラン・ザラ、ゲベ、元校長、じーさん、さわ子、小泉ジュンイチロー、ベジータ、サンジ、西沢、ナミ、ロビン、フランキー、ウッドロウ、打ち止め、山崎、シグナム、マルタ、カイル、リアラ、ヴィーダ、チョッパー、文乃、プレセア、リフィル、シング、コハク、和、巧、雪路

2票　マリア、オセロット、ネギ、イワンコフ、黒崎一護、リオン、朽木ルキア、コレット、ティア、ジェイド、銀八、ケンシロウ、エミル、エリザベス、古手川、リト

3票　リン、レン、ミク、梓、沖田、澪、律、ゾロ、土方、松平、ボーボボ、沙都子、桂、ドモン、屁怒絽

4票　伊澄、ロイド、正宗、幸村、慶次、はやて

作者「以上のような結果です。」

神楽「はぁ・・・はぁ・・・次回こそリベンジしてやるネ！」

作者「頑張れよ。」

ハヤテ「お嬢様！今度も頑張りましょう！」

ナギ「そうだな！Ｖ２を狙おう！」

作者「と、いう訳で混沌学院第１回人気投票結果発表はこれにて閉幕します。それでは第２回あったら会いましょう！そして、これからも応援をよろしくお願いします！以上、銀凪でした。」

近藤「俺に・・・票が入ってない・・・」

千世「はぁ・・・私もよ・・・」

希「・・・・・・にゃあ・・・・・」

悠二「一応灼眼のシャナの準主役なのに・・・」

吉田「私も別のヒロインなのに・・・」

全員「はぁ・・・銀凪のクソ野郎・・・出番もっと増やせ・・・」

第1回混沌学院人気投票結果発表！！（後書き）

作者「え～数ヶ月の激しい戦いでした。皆さん！投票してくださりありがとうございました！！またやるかもしれませんがそん時はまたよろしく！！」

銀八「またやるのかよ！！」

第６２話：テストの答案には芸人もビックリするような答えが書かれている（前

作者「今回からまたいろいろな話をやります。」

銀八「・・・たった2票・・・たった2票・・・」

梓「3票・・・たった3票・・・」

ルシフェル「おやおや、かなり精神的にまいってるようだね。」

イーノック「だが、大丈夫だ、問題ない。」

作者「ＯＰは『悪ノ召使』で脳内再生してください。では始まりまーす。」

第６２話：テストの答案には芸人もビックリするような答えが書かれている

この日、２Ｚの連中は少しドキドキしていた。何故ドキドキしているかというと今日・・・帰って来るのだ・・・テストが。混沌学院では少し前に定期テストを行っていた、なので生徒達は少しドキドキしているのだろう。しばらくしてチャイムと共に銀時が教室に入って来た。

「はいじゃあ今日は待ちに待ったテスト返却を行う。」

その一言で多少ブーイングが起きたが気にしなかった。

「あー待て待て、今日は普通のテスト返却だとつまらないから・・・」

そう言って廊下へ出て行った。そして教室に巨大なモニターを持ってきたのだ。

「な・・・何ですかそれ！」

新八にこう聞かれたので銀時は髪をかきながらこう言った。

「何って・・・モニターだよ。今からテメーらの珍回答を発表する！」

エエエエエエエエ！と声がしたのだが銀時は気にしなかった。

「だがその前にテストを返す。ちなみに満点の奴が数名いるから発表していきたい！」

テスト返却をしながら銀時は満点の人の名前を言い始めた。

「まずハヤテ。お前すごいな。いきなり成績アップだな。」

「はい！」

「そしてナギ。お前も満点だ。って言うよりお前はこのクラスでの才女だからな。」

「フフン、当然なのだ！」

「ええ。僕もお嬢様のレクチャーがなければ満点ではなかったですよ。」

「んもう♪ハヤテったら。」

「いいえ、僕が満点なのはお嬢様・・・全て愛するあなたのおかげです。」
「ハヤテ・・・」
「お嬢様・・・」
その後二人は見つめ合い互いに抱き合った。
「おい、そんないきなりラブラブシーンは止めてくれ。ただでさえあの新八にも彼女が出来て少しイラッと来てんだ。何か俺だけ取り残されてるみたいで！」
「そんなんでイラッとするなよ・・・」
「しかたない・・・」
呆れる新八の肩を彼女である咲夜が軽く叩いた。
「えーっと・・・後はシャナと桐乃とコレットとジーニアスと希と千世と澪。テメーらは満点だ。」
そう言った後満点者に拍手が送られた。
「さて・・・じゃあここからメインタイムの珍回答を発表していきたい！」
「先生、それってやる事がめちゃいk――――」
「ハイじゃあまずこの問題から。」
「聞いてねェェェェェェェェェェェェ！」
新八のシャウトを聞き流して銀時は珍回答のコーナーを始めたのであった。

1　問3　次の漢字をふりがなにしなさい。

1　欠伸

2　屈伸

3　五月蠅い

「はいじゃあまずこれから。少し難しい漢字の書き取りだ。ちなみに答えはこのようになっている。」
銀時は黒板に答えを書き始めた。ちなみに答えの内容はこれである。

1：あくび

2：くっしん

3：うるさい

「えーっと・・・悟空！」
「オラか？」
少しボーっとしていた悟空が声を上げた。
「お前・・・気持ちが分かるがこれは無いだろ。」
「え～？あれが答えじゃないのかよ？」
「だから黒板に書いてあるだろ・・・。お前の場合はこれだ。」
合図とともに悟空の答えがモニターに映し出された。その答えの内容とは。

1：けっしん

2：ほるしん

3：ごがつはえ

「まぁ間違えそうだな。でも気持ちは分かる。」
「ボーナス点は？」
「ねーに決まってんだろ。次、ルフィ！」
「俺！」

ルフィは驚いて声を上げた。
「お前の答えは色々と違っている！」
「そうか？」
「違ってなかったら珍回答に載せねーだろ・・・お前の場合はこれだ。」
銀時がモニターに次の会頭を移すよう指示した。そして画面にルフィの答えが映った。

1：にく

2：にく

3：にく

「オメー全部『にく』ってないだろ。」
「仕方ねーじゃん。腹減ってたんだから。」
「そんな言い訳が通用するか。まぁここはこれだけだから。次行くぞ。」
その後、モニターは次の問題の文を映した。

2　問2　文にある単語の逆さ言葉を書きなさい。

1　大きい

2　堅い

3　太い

4　黒い

「えーこの問題は小学生でもわかる問題だ。だがしかしここでバカをしでかした奴が数名いる・・・唯！」
銀時にこう言われ唯は驚いた。
「わ・・・私ですか！」
「そうだよ。お前の答案見て驚いたわ。じゃあ映すぞ。」
モニターに唯の答えが映った。その答えとは・・・。

1：いきおお

2：いたか

3：いとふ

4：いろく

「逆さの意味が違う。俺が言ってたのは意味が逆ってことだ。」
「そうなんですか～。」
「そうだよ。後これまえにも言ってた通り小学生レベルの問題な・・・あと東城！」
名前を言われ東城は驚いた。
「わ・・・私ですか！」
「オメーだよ。というよりオメーの場合は最悪だ！」
その後その最低な答えがモニターに映った。

1：男の（ピーーー！）

2：男の（ピーーー！）

3：男の（ピーーー！）

４：松〇し〇る

「ハイ下ネタでスミマセン。オメー何書いてんだ本当に？大丈夫か？頭の中。」

「大丈夫です！いつも若とロフトとカーテンのシャーの事を考えています！」

「全然大丈夫じゃねーな。後何で最後の問題だけ松〇し〇るが出てくるんだよ。」

「焼けて黒いですから。」

「確かにあの人あんな感じだよね。」

ため息をついた後銀時は次の問題へ移した。

「この次は小説を元とした問題だ。ちなみにミク、リン、レンはこの部分全問正解だった。」

「あたりまえです。」

「僕達はしっかりと理解しているからね！」

「いざという時はやるんだから！」

「当たり前だよな。だって元とした話が悪ノ娘だもんな。」

「それ関係あるか？」

「「「さぁ？」」」

咲夜の質問にボーカロイド達はこう答えた。

「まず始めの問題だ。」

問３　次の問いに答えなさい

１　リリアンヌは何故悪ノ娘と呼ばれていたのか？

「答えはしっかりと呼んでいれば分かる。ちなみに答えは・・・」

１：平民達に重い税を与えたり自分に逆らう者は誰であろうと処刑にさせたから

「これは一例だ。だけどリリアンヌの悪行がしっかりと書かれていればよしとした。」
「あの・・・悪行とか言わないでください・・・。」
リンがこう言った。だが銀時は気にせず次に進めた。
「この珍回答というのは・・・神楽。」
「はい！」
神楽は元気よく声を上げた。
「お前・・・テスト前に北斗の拳でも読んだか？何だよこの答え。」
神楽の書いた答えとはこのような内容だった。

１：天を握る事を考え荒野の荒くれどもを従い各地を襲った。

「どこの拳王だ？もしこんなんだったらタイトル変わってるじゃねーか！」
「悪ノ拳王アルか？」
「・・・はぁ・・・次は・・・ヅラ！」
混沌王、ヅラ・・・誰もがこの答えを心配した。
「お前・・・何考えてんだ？」
「俺はありのままの事を書きました。」
「それがこれか？」
その後、モニターにヅラの答えが映った。

１：彼女は私利私欲のために平民を奴隷のように扱い誰であろうと我に逆らう者を殺して行った。しかしそんな彼女の前に拳王、ラオウが現れる。そう・・・この悪ノ娘はリリアンヌではなかった・・・そう！今ここにいる悪ノ娘はラオウなのだ！
「んな訳あるかァァァァァァァァァ！あの拳王がかわいいドレス着て女装してんのか？想像しただけで気持ち悪いわァァァァァァァァ

！後何でお前も北斗の拳ネタ何だよ！」
「くっ・・・まさかリーダーと被るとは・・・」
「んな事どうでもいいわ！」
シャウトの後銀時は次の問題に移った。

２　悪ノ召使、アレンは誰に一目惚れをした？

「これは考えればすぐに分かる。だが・・・ゴリラ！」
「え？俺ですか？」
目を天にしながら近藤は答えた。
「お前だよ、これは無いだろ。」
そういうとゴリラの答えを映した。その内容は・・・。

２：お妙さん

「これお前事だろ？」
「いや～もしかしたらあの少年も俺と同じようにお妙さんと脳内であんな事やこ―――」
ここで近藤の後頭部からものすごい量の血が流れた。もちろんこれは妙の仕業である。
「・・・次は土方。お前だ。」
「俺すか！」
土方は驚きのあまり席を立った。
「お前もゴリラと同じような事書いてらー、これは無いだろ。」
土方の答えとは・・・

２：マヨネーズ

「人ですらねーよ。何考えてんだ？お前の脳みそはマヨネーズで出来てんのか？」

「違いますよ！」
「そこは否定するんだ。」
一息入れた後銀時は珍回答の発表を続けた。
「次はロイド！お前だ！」
「俺かよ・・・」
ロイドは残念そうに下を向いた。そんな彼の答えとは・・・。

2：ユリア

「お前も北斗の拳かい！」
「仕方ありませんよ！だってテスト前日にアニメ見ちゃったんだし・・・。」
「テスト前にそんなことするな！・・・次は・・・ゾロ！」
「俺かよ。」
軽く舌打ちをしてゾロは返事をした。そんな彼の答えとは・・・。

2：青いつなぎのいい男

「何考えてんだオメー？もしこうなったら最悪の展開になるからな、悪ノ娘。」
「いや・・・実は何色の娘か忘れて・・・思い出したのが青で・・・青つながりでまさかだと思い」
「全然違うからな！・・・はいじゃあ次の問題に行くぞ！」
半ばカオスを生み出しながら珍回答はづついて行った。

その後も馬鹿馬鹿しい回答が続いて行った。有名人の写真にサングラスの落書きをして答案に『タ〇リ』と書いたり復活の呪文を書いたり格ゲーのコマンドを書いたりする奴が多々いたのだ。そんな中で段々とカオスな空気は膨れ上がって行った。そんな中、次の問題である悪ノ娘の最後の部分に移った。

３　処刑されそうになっている悪ノ娘の本当の正体は誰？

「これも呼んでればすぐに分かる・・・だがしかし、ここでもバカな奴がいた！」

「誰アルか？」

「オメーだよオメー！」

銀時は神楽に向かって指をさした。そんな神楽の答えは・・・

３：ラオウ

「何でこいつが処刑されるんだよ！悪ノ娘の代わりに！」

「哀れだと思ったんじゃないアルか？」

「お前の中で悪ノ娘と北斗の拳を一緒にするな！あと沖田！お前の答えは何だ！」

銀時は怒声を上げながら沖田の答えを映した。その答えとは。

３：土方のクソ野郎

「沖田、何だこの答えは？」

「俺が考えた末導き出した答えです。」

「そんな答えあるかァァァァァァァ！」

その後、教室の後ろで沖田と土方の喧嘩が始まった。

「次の珍回答は・・・ヒナギク！オメーだ！」

「私ですか！」

ヒナギクは驚いて席を立った。そんな彼女の答えとは・・・。

３：ナギ

「お前どんだけ病んでるんだよ！」

「私病んでません。ただ私の脳内でこの答えが」
「見て見たいわ、お前の頭の中！」
そんな中、暇を持て余しているハヤテとナギの危ないカップルがイチャつき始めた。
「ク・・・ククククク・・・。」
「待てヒナギク！落ち着け！落ち着くんだァァァァァァ！」
ルフィがこう叫んだ。だがそんな中でも珍回答コーナーは続いていた。
「ハイ次は・・・お妙・・・」
自分の名前が呼ばれたにもかかわらず、お妙は笑顔を崩さなかった。お妙の答えとは。

3：クソゴリラ

「これって・・・俺の事だよね。」
多少涙声の近藤がこう言った。
「あなた以外誰がいるんですか？」
笑みを崩さずお妙がこう言った。
「・・・次はレン・・・お前だ。」
「え？僕！ここの部分は全問正解のはずじゃあ・・・」
「お前の答えにより緊急の職員会議が開かれたんだよ。」
「どんだけですか！」
「で、どんな答えだったんですか？」
もう半分疲れきっている新八がこう聞いた。その後、モニターにレンの答えを映した。

3：僕

「確かにあってるが・・・これはねーだろ・・・。」
「でもあってますよね！」

「そうだ・・・はぁ・・・もう時間ねーから最後の問題に移るぞ。」
そう言ってラストの問題に移った。

４　悪ノ娘が最期に言った言葉と最期に思った言葉は何？

言った言葉

思った言葉

「ここの所も酷かった！神楽！」
「ホイ、来た！」
まるで自分の出番を待ってたかのように神楽は元気よく声を上げた。その神楽の答えとは。

言った言葉：我が生涯に一片の悔いなし！

思った言葉：このラオウ、天へ逝くのに人の手は借りぬ！

「しつけーよ！北斗の拳ネタ！結局何がしたいんだオメーらはそろいにそろって！」
「昨日５Ｚのケンシロウと話してたネ。」
「・・・はぁ・・・もういいや・・・次、ゾロ！」
「また俺かよ。」
そう言ってゾロはモニターを見つめた。その答えとは。

言った言葉：ダッフンダ！

思った言葉：あ・・・駄目だこりゃの方が良かったか。

「ド〇フかァァァァァァァァ！何最後の最後でこんな事言わそうと

してんだァァァァァ！」
「先生、大丈夫です。最後の最後で首に落ちてくるのはギロチンじゃなくて・・・実はタライじゃあ」
「どこの大爆笑と全員集合だァァァァァァァァァァ！そんなオチな訳あるかァァァァァァァァァァ！」
息を吐きながら銀時は呼吸をしていた。
「ハァ・・・次は・・・ロイド！」
「俺？」
「そうだよ、お前・・・何書いてんだよ・・・」
銀時も呆れたその答えとは。

言った言葉：助けてください、助けてくださァァァァァァァい！

思った言葉：ヒョ～ロエ～バ～ひ～とみ～をと～じて～チャ～ラ～ララ～ララ～ララ～♪

「何だこれェェェェェェ！何か色々と通り過ごして呆れちゃったよ俺！」
「いいじゃないですか。」
「よくねぇぇぇぇぇぇ！」

という訳で珍回答コーナーは終わった。
「えーっと・・・残念ながらこのクラスで0点が2名出た！」
「誰ですか！」
桂が手を挙げて質問をした。
「オメーとヒナギクだよ。」
まさかの展開、ヒナギクが0点だなんて誰もが思ってもいなかった。ヅラは予想してたけど。
「ヒナギク・・・オメーさぁ・・・マジで病んでる。」
その後、モニターにヒナギクの答案を写した・・・そして誰もが

絶句した。彼女の答えの部分には一部を除く全てに『ハヤテ君』と書かれていたのだ。

「・・・ソレダケワタシハハヤテクンヲアイシテイマス。」

ヒナギクがヤンデレモードでこう言ったと同時に終了のチャイムが鳴り響いた。

第６２話：テストの答案には芸人もビックリするような答えが書かれている（後

おまけ劇場

～便利な奴～

日番谷「はぁ・・・今日も疲れるな・・・」

スバル「日番谷、悪いけど氷出してくれない？」

日番谷「ったく・・・仕方ねぇ・・・氷輪丸！」

スバル「うわー、ありがとう。今日熱くて熱くて大変なのよね～。」

日番谷「俺は氷製造機じゃねーぞ。」

神楽「日番谷ー！かき氷作ってくれアルー！」

ルフィ「ちょうど腹へって仕方ないんだよー！」

悟空「オラはメロンで頼むぞー！」

銀時「俺は宇治金時で！」

日番谷「何で先生も来るんだよ・・・無駄な霊力使うじゃねーか・・・夏の間は・・・。」

夏のくそ暑いとき、１Ｚの日番谷はかなり役に立ちます。

おしまい

おまけトーク

銀八「おい作者！また人気投票するのか！」

作者「この前やったばっかじゃねーか・・・」

梓「私もあの結果じゃ納得しません！」

闇「私もです。」

作者「はいはい、もう少したってからやると思うよ。その時までテメーらはおとなしく待ってろ！！」

第６３話：レッテルというのは着いたらなかなか剥がれない（前書き）

作者「今回は久しぶりにあの変態が登場します。」

銀八「２話目に出てきて・・・それから・・・」

初春「今回の脳内ＯＰは『ｍｏｏｎ（確かミクの曲だよね）』でお願いします。」

第63話：レッテルというのは着いたらなかなか剥がれない

ある満月の夜。住宅街の人気のない場所で怪しい影が2つ、屋根から屋根へ飛んでいる姿があった。長身の姿とクマらしい姿の二人組だった。その二つの影は高く飛びあがりその姿を満月はハッキリと映していた。その二人組は背中に風呂敷を背負っていた。

翌朝。銀時は職員寮のキッチンで朝食を食べながらテレビを見ていた。

『次のニュースです。昨日未明。○○刑務所からふんどし仮面とクマ吉容疑者が脱走しました。警察はすぐに行方を追っているようです。』

「はー・・・何やってんだかあいつらは。」

半ば呆れながら銀時は焼き魚を口に運んでいた。

「はぁ・・・まさかあの人が脱走なんて・・・。」

そうため息をつくのはネギであった。そう、クマ吉とは元は2Aの生徒だったが2話であんな馬鹿な事をしでかして逮捕&退学されたのだ。

「ああ・・・まさかあんなことするなんて・・・」

「しかもふんどし仮面って・・・前に騒ぎになった下着の窃盗犯ですよね。」

「そうだ。」

ふんどし仮面・・・、彼は以前巷で下着の窃盗で騒ぎになりしかもその下着をモテない男性に配ることからかなり悪質とみなされた。

「あん時はこの学院でも騒ぎになったな～。」

「ええ。銀さんの所にも下着が来て怒ってましたね『誰がモテない男じゃァァァァァ！』って。」

「・・・でも捕まってよかったな。」

「でも脱走したんですよね？大丈夫でしょうか？」

「さぁ？」
というような会話をしながら朝食を取っていた。
数日後。新八の家にて。
「おーい、新八ー、迎えに来たでー。」
咲夜が新八を迎えに来たのだが返事が来ない。
「ん？どうしたんや？」
そう言いながら家のチャイムを鳴らした。するとチャイムの方から轟音が響いた。
『ギャアアアアアアアア！』
『オラオラオラァァァァァァァ！』
『あ・・・姉上！落ち着いてェェェェェェェ！』
『これが落ち着いていられるかァァァァァァァァ！』
その後、玄関を破壊して薙刀を持った妙と逃げている新八が現れた。
「おわァァァァァァァ！」
「あ・・・さ・・・咲夜さん！た・・・たs」
「シャラオラァァァァァァァァ！」
「「ギャアアアアアアアアアアアアア！」」
そんな鬼神と化したお妙から二人は逃げまくっていた。

「あん？下着を盗まれた？」
２Ｚ教室。お妙は今日の出来事を銀時に伝えていた。
「ええ。いつの間にか庭に干していた下着が数枚盗まれたんです。」
「だからそれであんなに怒ってたんや。・・・同情するわ。」
腕組をしてウンウンと咲夜は頷いた。
「で？犯人の目星はついてるのか？」
「それがまった・・・」
「お妙さ～～～ん！」
ここで近藤のバカでかい声が会話を妨げた、そして彼らの脳裏に

ある事が浮かんだ。
「フフフ、近藤さん？ちょっといいかしら？」
「え？何ですか？」
「廊下へ来て下さい♪」
その後、お妙は近藤を廊下へ連れて行った。その後、廊下から激しい打撃音とゴリラの悲鳴が轟いた。しばらくしてお妙とボロボロになったゴリラが教室に入って来た。
「無理だったわ・・・この人じゃないらしいわ。」
「姉上・・・いくらストーキングされてるからって勝手に犯人にされちゃあ酷いんじゃありません？」
「そうや・・・いくらこのストーキングゴリラでもそんな犯罪行為はしないんじゃないんか？」
「ありがとう・・・二人と・・・も・・・ガク・・・」
ゴリラはそう言って完全に気絶した。
「んだよこのゴリラが犯人じゃなかったのかよ。」
「アンタも生徒を疑ってたのかよ！」
薄情な銀時に新八はこう叫んだ。その時だった。
「ハギャアアアアアア！」
ヒナギクのヤンデレボイスが響き渡ったのだ。
「ど・・・どうした！」
銀時が声が聞こえた方を見るとそこには紅桜と正宗の両手剣を装備して大暴れしているヒナギクの姿があった。しかも彼女が攻撃するたびに辺りに刃の衝撃波が舞って触る者皆真っ二つにして言った。
「どどどどど・・・どうしたんだよオイ！」
「私の・・・ワタシノハヤテクンノシシュウイリノシタギガトラレタノヨォォォ！」
その言葉を聞いた銀時は地面にずっこけた。
「ど・・・どんな下着何だよオイ！」
「というよりどんだけハヤテＬＯＶＥ何ですかアンタ！」
「いい加減諦めろ！」

銀時達は完全に呆れていた。ヒナギクのヤンデレに。

その日の放課後。緊急の風紀委員と生徒会の集会があった。部屋の中心のテーブルに傷だらけのゴリラと生徒会長のルークが座っていた。

「・・・何でアンタ傷だらけなんだ？」

「気にしないでくれ。」

「ああ・・・」

「ルーク、それより集会を始めましょう。」

ティアに促されルークと近藤は集会を始めた。

「本日集まってもらったのはほかでもない。今日は下着ドロの件についてだ。」

近藤が静かにこう言って集会が始まった。

「やっぱりこの事か。」

近藤の隣に座っている土方がこう言った。

「この下着ドロは我が女生徒も被害を受けている。仮に俺の2Zの生徒も被害を受けている。そう・・・お妙さんもだ！」

声を高く上げて近藤はこう言った。

「あの・・・近くで大声を上げないでくれよ・・・」

ルークが耳を防いでこう言った。

「ま・・・まぁ誰かいい案はあるか？」

「はい！」

ルークの質問に沖田が手を挙げた。

「何だ沖田？いい案でもあるのか？」

「ええ。実はこの俺の作ったこの装置で・・・」

という沖田だが彼が持っているのは昔の拷問道具だった。

「お前何持って来てんだよ！」

「いや～対土方ように毎日持ってきてるんですけどねェ・・・なかなか使えなくて・・・」

「オイゴラァァァ、対俺用って何だコラ？殺す気かァァン？」

「はい。いつも・・・狙ってまさぁ！」
沖田はいつの間にバズーカを装備して土方目がけて発射した。
「「オワァァァァァァ！」」
何とかよけきれた土方と騒動に巻き込まれたルーク。
「お前何してんだァァァァァァ！」
土方も仕返しにマヨネーズバズーカを発射した。その後、土方と沖田の喧嘩が激しくなっていった。
「オイィィィィィィ！静かにしろォォォォォォ！」
ルークは腹の奥底から声を上げた。
「何やってんだアンタら！何のための集会だよ！この作者もさ～この作品が長期連載になって忘れかけてたんだよ！風紀委員と生徒会の存在を！なのに何でこんな事になるんだァァァァァァァァァァ！」
「ルーク・・・落ち着いて。」
騒いで裏話を話してしまったルークをティアが静にさせた。
「大体俺らも久しぶりに出てきて張り切ってたのに・・・なのに何でこんな事に！」
「ちょっと待ったァァァァァァァァァァ！」
生徒会室のドアの方から声が響いた。その声の主は神楽で彼女は悟空、ルフィと共に扉をけ破って入って来た。
「ちょ・・・何だいきなり！」
「この事についてはもう私達２Ｚが動いてるネ！」
「オメー達は家に帰ってＷｉｉでもしてろ！」
この言葉を聞いたルークは呆れて顔を手にやった。
「いいのかよ・・・アンタらが勝手に動いて・・・。担任の銀時先生は」
「それはもう許可済みだ。」
「それならいいんだろ？」
廊下の方から銀時とスネークの声が聞こえた。
「ぎ・・・銀時先生・・・スネーク先生。」
「俺らが許可したんならいいんだろ？この件に首突っ込んでも。」

「あ・・・ああ。」
ルークのこの言葉を聞いて神楽達は張り切った。
「でもその時は俺らも同行してもらう。それでもいいか？」
「別にいいアル！」
その後、風紀委員＆生徒会のＯＫサインをもらい彼らは作戦会議をする約束を交わした。

２Ｚ教室。今ここにルークとティアがいる。彼らは戸惑っている。変な空気に。
「はい！じゃあ何かいい案アルか？」
「はい！」
ここで混沌王桂小太郎が手を上げてしまった。
「ヅラ！何かいい案あるのか？」
「おう！」
桂はどこからか巨大な袋を取り出した。
「何入ってんだそれ？」
「フッフッフ！」
笑いながらヅラは袋を開けた。それは小さい子供の人形だが何か嫌な顔をした人形だった。
「何それ？何か気持ち悪いんだけど！」
「ルーク殿、このマーカス君人形を甘く見るな！」
その後、マーカス君人形の後ろにあるボタンを桂は押した。その後、マーカス君人形の体はブルブル動き出していきなり目が光りだした。そしてこう喋った。
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
「何だこの台詞ゥゥゥゥゥ！」
ルークはシャウトの後マーカス君人形を蹴り飛ばした。
「何これェェェェ！何で気色悪い台詞が流れるんだァァァァァァ！」

「仕方ないだろ！これしかセリフがないんだから！」
「他の言葉も考えろよォォォォォォ！ってかこれ誰考えたんだァァァァァァァ！」
「エリザベスが考えたんだ！」
「あのペンギンかァァァァァァァァァァァ！」
「はい。」
続いて一応被害者の一人であるヒナギクが手を挙げた。
「ハイ！言ってくれ！」
ルフィがこう言った後ヒナギクは一息入れてこう喋った。
「まず色々してバカを捕まえて・・・ソノアトコノバカノハラヲカキキッテナイゾウトショクドウトカイロイロヲハギトッテ」
「何考えてんだオメェェェ
「ああ。」
その後もカオスな出来事が辺りを包み込んだ。

「ああもういい加減にしろォォォォォ！」
限界突破した新八がこう叫んだ。
「もうさー囮作戦でおびき寄せてそこで罠にはめて捕まえる・・・
という事でいいでしょうがァァァァァァァァ！」
「・・・眼鏡にしてはいい案アルな！」
神楽がこう賛成の言葉を発したので誰もが賛成した。

その夜。あのバカ共を誘い込むため誰もが新八の家に集まった。
そう、罠を張っておびき寄せて捕まえようという作戦なのだ。
「フフフ・・・サァ・・・ワタシノシタギヲヌスンダヤツヲ・・・
ツカマエテ・・・クヒヒヒヒヒ！」
ヒナギクの黒い発言により誰もがヒナギクの周りから引いた。そ
んな中、部屋に入って来た者がいた。千世である。
「皆、こっちは準備ＯＫよ！」
「そうか・・・成功すればいいのだが・・・。」
ルークが少し不安そうにこう言った。そこからしばらくして侵入
察知レーザーに異変があった。何者かが侵入したのだ。
「誰か来たぞ！」
画面に映っているのは罠があるとは知らずに侵入してきた二つの
影・・・そう、こいつらこそが怪盗ふんどし仮面と変態紳士クマ吉
である！
「クヒヒヒ・・・今宵の獲物はこの家から・・・」
「再びやってくるとは思っても無いだろう・・・」
「「グヒヒヒヒ！」」
塀を乗り越え庭に着地しようとしたその瞬間だった！
「今よ！スイッチオン！」

ポチ♪

ドッカァァァァァァァァァァァァン！

突然だった、いきなり地面が爆発を起こしたのだ。もちろんふんどし仮面とクマ吉はこの爆発に巻き込まれた。
「ニョホホホホホ！この梅ノ森家特製スイッチボムにわかなわない様ね！」
「べ・・・便利な装置だな～。」
「というよりそんなアイテムボンバーマンであったような気がしたけど・・・」
モニターの前で高笑いする千世を見ながらルークとティアはこう呟いた。
「まだまだよ！お仕置きタイムはこれからなんだから！」

その後、何とか爆発ゾーンを抜けふんどし仮面とクマ吉は庭に到着した。
「ぜぇ・・・ぜぇ・・・何だったんだこれ？」
「さ・・・さぁ？今はとにかく生きていた事を喜ぼう・・・」
傷だらけの体を引きずりながら目の前につるされている下着を手にしようとした・・・その時だった。

ガタン！

「へ？」
「何これ・・・」
「「ウワァァァァァァァァァァァァ！」」
二人は突然現れた空間に落ちて行った。

「フフフフフ・・・ついにこのお仕置きゾーンに入ったわね・・・」
「マジでか！」
千世がこう言った後誰もがモニターの所へ集まった。
「ついに始まるわよ・・・最高のパーティーが。」

志村家地下、この日の為に梅ノ森家と三千院家が共同して志村家を改造し地下室を造ったのだ。もちろんここに２Ｚの面子が潜んでいるのだ。
「タタタタ・・・」
「まさかこんな罠があったとは・・・」
腰をさすりながら辺りを見渡してみた。だが真っ暗で何も見えなかった。
「全然分からんな・・・」
ふんどし仮面がこう呟いたその時だった。

シュゥゥゥゥゥ・・・チッ・・・ゥゥゥゥゥ

何かを引きずる音がかすかに聞こえたのだ。
「あれ？何この音？」
「知らないよ。」

シュゥゥゥゥゥゥ・・・チッ・・・シュゥゥゥゥゥゥ

「クケケケケケ」

「何か変な笑い声が聞こえたような・・・」
「し・・・ししし知らないよ！」
戸惑っている中、その音の主が現れた。
「ミィィィィィツケタァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
音の主は両手に紅桜を装備したヤンデレモードのヒナギクだった！

次回！
無駄に長くなったこの話、二人の変態に２Ｚのお仕置きの牙が問答無用で襲う！しかもあの人が関係ないのに巻き込まれる！次回、

混沌学院『お仕置きする時は度を超えるな』どうぞご期待！
「俺は悪くない・・・俺は悪くない・・・俺は」
「ガイ様華麗に参上。」
「名台詞を台無しにしたァァァァァァァァ！」

第６３話：レッテルというのは着いたらなかなか剥がれない（後書き）

おまけトーク

銀八「あれ？クマ吉って退学にされたの？」

作者「はい。その設定で行ってます。」

梓「それより何で小学部があるのに高校生なんですか？」

作者「・・・小学部については・・・これ後付け設定なのよ。」

闇「裏話していいんですか？」

作者「のちにこいつらを主役として話書くから。」

ブロリー「大変だなぁ。」

第６４話：お仕置きする時は度を超えるな（前書き）

作者「さて、今回は変態どもが酷い目に会います。」

銀八「ざまーねーな。」

当麻「ＯＰは・・・『必殺仕事人のテーマ』？ふざけすぎだろ。」

第６４話：お仕置きする時は度を超えるな

騒動が始まっている最中、一人の男性が新八の家の前にいた。
「ったく・・・あのババア、用もねーくせに呼びよせんじゃねーよったく。」
声の主は銀時であった。頭をかきながら彼は新八の家の玄関へ向かって行った。

「ヒャッハァァァァァァァ！」
「「ギャアアアアアア！」」
ヒナギクの攻撃を間一髪でよけるふんどし仮面とクマ吉。だが彼女は二刀流の為次の攻撃が迫っていた。
「シネェェ！」
「「ギャアアアアアア！」」
ヒナギクの攻撃を間一髪でよけるふんどし仮面とクマ吉。だが彼女は二刀流の為次の攻撃が迫っていた。
「シネェェ！」
攻撃を避けながらクマ吉は気付いた。そう、出口らしき所から光が射していたのだ。
「で・・・出口」
「危ない！」
よそ見をしていたら後ろからふんどし仮面の声が響いた。慌ててしゃがむと自分の頭上をヒナギクの紅桜が通過した。
「ヒ・・・ヒィィィィィィ！」
「チッ、シクジッタカ！・・・マァイイ。」
ヒナギクは舌打ちをした後、その場に留まり力をため始めた。
「あ・・・あれって・・・」
「もしかして・・・」
「・・・・・・ヒッサツ！クビギリノマイ！」

ヒナギクはそう叫ぶといきなり回転を始めた。
「オイィィィィィ！あれまずいんじゃねーのォォォォォォォ！」
「確かに！」
「クビキッテシネェェ
　ふんどし仮面の視界に映るのは壁いっぱいに飾られたマーカス君人形。しかもどれもスイッチが入れられていた。
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
無数にこの声が耳の中で響き渡る。耳を防いでも脳内で再生される。
「な・・・何だよこれ・・・何だよこれ・・・」
　震えながらふんどし仮面はこう呟いた。その時だった！
「クヒ・・・クヒヒヒヒ♪ミィ～ツケタ♪」
そう・・・後ろからヒナギクが迫っていたのだ！

　一方そんな事は知らずに銀時は玄関の前で困っていた。何回チャイムを鳴らしても誰も出ないのだ。窓の方を見ても真っ暗で誰もいないようなのだ。
「んだよ、もう寝ちまったのか？昼間あんなに張り切ってたのに・・・
だが出口の先は・・・。
「な・・・何だこれは！」
　ふんどし仮面の視界に映るのは壁いっぱいに飾られたマーカス君人形。しかもどれもスイッチが入れられていた。
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
『クヒヒヒヒ、ねえねえお兄ちゃん。お兄ちゃんの残りの寿命ってあとどのくらいなの？クヒヒヒヒ♪』
無数にこの声が耳の中で響き渡る。耳を防いでも脳内で再生される。
「な・・・何だよこれ・・・何だよこれ・・・」
　震えながらふんどし仮面はこう呟いた。その時だった！
「クヒ・・・クヒヒヒヒ♪ミィ～ツケタ♪」
そう・・・後ろからヒナギクが迫っていたのだ！

　一方そんな事は知らずに銀時は玄関の前で困っていた。何回チャイムを鳴らしても誰も出ないのだ。窓の方を見ても真っ暗で誰もいないようなのだ。
「んだよ、もう寝ちまったのか？昼間あんなに張り切ってたのに・・・

・。」
一体どうしようか悩んでいる時だった。裏庭に誰かいると思いそっちの方へ行ってみようとしたのだ。
「見張りぐらいいるだろう・・・」
そう呟きながら庭へ向かった。

銀時が庭へ向かったと同時に侵入察知レーダーが鳴り響いた。
「え？何！」
「まさか三人目の変態が！」
「そんなん聞いてないで！」
新八達はあわてながらモニターの方へ向かった。で、キョトンとした。何故なら画面に映っているのは自分達の担任だったからだ。
「・・・あれ・・・銀さんだよね。」
「誰か先生にこの作戦の事言ったか？」
「いや。」
その後、沈黙の空気が辺りを包み込んだ。
「ねぇ・・・何かまずくないですか？」
「ああ・・・そやな。」
「でもセンサーに反応あったらすぐに爆発しろってプログラム入力しちゃったからし・・・。」
「・・・どうしよう・・・。」
新八は心配そうにこう呟いた。

「お～い！新八～！妙～！オメーらどこだコラ～！」
新八達の名前を叫びながら銀時は庭を歩いていた。
「んだよ、反応なしか。」
ピッ
「ん？」
謎の音に気がついて銀時がその方を見たその瞬間だった。突然地面が大爆発を起こしたのだ。

「ギャアアアアアアアア！何これェェェ

「ま・・・また何か変なのが・・・」
ビビりながらクマ吉がこう呟いたその瞬間だった！彼らの後ろから何者かがこう叫んだのだ！
「マヨネーズが足りないんだけどォォォォォォォ！」
「「イギャアアア

目の前のドラキュラの格好をした人物はこう話しかけて来た。もちろんこのドラキュラの正体は悟空である。
「・・・何それ？」
「今だ皆！隙を見せたぞ！」
「へ？」
後ろを振り向いたら突然と神楽達が襲いかかったのだ。
「ギャアアア

何とか出口の扉を開け彼らは脱出しようとした・・・だが・・・
扉の先には・・・

「え・・・」
「ちょ・・・」

鬼神と化した妙が仁王立ちで立っていた。

「・・・・・・くたばれェェェ

ルークが思い出したようにこう言った。

で、地下室に落下した銀時の方は。

「てて・・・んだよ・・・あいつんち地下あったのかよ。」

痛そうに腰をさすりながら銀時は立ち上がった。

「・・・何だこりゃ！」

視界に映っているのはヒナギクによって破壊されたマーカス君人形の残骸。銀時が恐る恐るさわってみたら突然と人形の頭部部分が反応し動き始めた。

『オニイチャン・・・ジュミョウアトイク・・・ヒヒヒヒヒ！ンャチニオイジュンミョ・・・ヒヒヒヒク！ケケケ・・・ガガッガガッピー・・・テヤル・・・コロシテヤルコロシテヤル・・・オレヲコンナフウニシタヤツヲコロヒヒヒヒヒ！シテヤルコロシクケケケケ！テヤル・・・！オニイチャン、ジュミョウコロシテヤル！イクツ？コロシテヤル！クヒヒヒヒヒヒ！コロシテヒヒヒヒヒヒ！』

突然とこんな声を出したのだ。辺りは暗闇、人形の目は怪しく光る。その光景はまさしく恐怖だった。

「イ・・・イ・・・イギャアアア

第６４話：お仕置きする時は度を超えるな（後書き）

おまけトーク

作者「う～～～ん・・・」

銀八「おい何悩んでんだ？」

作者「いやさー、ユーチューブとかでたまに銀魂の動画見るけど・・・なんか沖神の動画が多いな～って思ってさ～。」

ブロリー「だからってこの小説でも・・・」

作者「考え中。次の銀魂×ハヤテシリーズでそうするつもりだけど・・・」

一方通行「やるつもりなんかい！」

作者「ここでやるかは考え中だけど・・・」

第６５話：健康診断って何かドキドキする（前書き）

作者「今回と次回で新キャラが出てきまーす。」

銀八「急だなオイ！」

闇「誰ですか？」

作者「見ればわかる。脳内ＯＰは『魔・カ・セ・テＴｏｎｉｇｈｔ』でよろしくお願いします。」

第６５話：健康診断って何かドキドキする

健康診断。どの学校にもどの会社にもある・・・と思う。もちろん混沌学院でも一年に一回ほど健康診断を行うのだ。誰もが身長伸びたかな～とか体重増えたかな～とか思っている。そんな中、変な事を考えるバカ共がいた。・・・そう・・・２Ｚのエロコック、サンジである。

「え～今日は健康診断だからまぁ適当にやってろ。という訳で朝のホームルーム終了。」

と朝っぱらから気だるい銀時の声が耳に響く。その後は健康診断の会場となる体育館や保健室へ移動となった。

「・・・よし・・・いいな皆？」

「おう。」

サンジは仲間・・・同志である近藤、東城、家康を呼び教室の隅の方で集まった。

「いいか？作戦は覚えてるな？」

「ああ、何とか男子組から別れ女子組が行う胸囲検査を覗き見る作戦だろ？」

「そう。」

軽く返事をした後、サンジは教室を見回した。丁度いいタイミングなのか教室には自分達しかいない。

「今がチャンスだろう、何とか教室から外へ出て保健室の窓辺へ行こう！」

「「「おう！」」」

その後、バカ共は教室の鍵を閉め、何とか外へ出て保健室近くの庭へ向かった。その後ろには謎の影が見えていた。

その頃、２Ｚ男子達は体育館へ向かっていた。

「はぁ・・・お嬢様大丈夫かな・・・一人ぼっちで寂しくは無いのだろうか・・・」
ハヤテがこう呟きため息をついた。
「大丈夫だろ。どんだけ心配性だよ。」
近くにいたゾロがこう反応した。
「だって！もしお嬢様が裸にされ何かされて・・・ああもうこう考えただけで頭が」
「うっせーよ大丈夫だよ心配するなロリコン執事。」
「あなたには分からないんですよ！僕がどれだけお嬢様を愛してるか」
「誰でも知ってるわ！一日中あんなにイチャイチャしてたらよー！」
ゾロが呆れながらこう叫んだ。
「・・・ハヤテさん・・・キャラ完全に変わってますね。」
「ああ・・・。」
この光景を見ていた新八とロイドは完全に呆れていた。
「ん～僕身長伸びたかな～？」
ジーニアスが頭を触りながら自分の身長を確認していた。
「あんま変わんねーと思うけどよ～。」
そこへ近くにいたゼロスがこう言った。
「ゼロスには分からないんだよ！こう見えて毎日しっかり努力してるんだから！牛乳飲んだりとか軽く運動したりとか！」
「そ・・・そうなんだ・・・」
目をギラギラさせながら喋るジーニアスを見ながらゼロスはこう言ったのであった。
「ん？そーいやーサンジ達はどこ行ったんだ？」
「あれ？そう言えば見かけねーなー。」
悟空とルフィがサンジ達の不在に気付いた。
「ほっとけ、どうせバカな事しようとしてんだろ？」
「そうだな、ほっとこ。」
ゾロにこう言われルフィは気にするのを止めた。

「・・・あの人達・・・まさかまたバカな事をしでかすんじゃ・・・・」
「ああ・・・死ななければいいけど・・・」
ため息をつきながら新八とロイドはこんな会話をしていた。

で、バカ共は何をしているのかというと。
「準備オッケー。」
「そうか、こっちもいいぞ。」
バカ共は保健室の近くの庭から生えている巨大な木の上にいた。
そう、胸囲検査を覗こうとしているのだ。ちなみにこれは完全な犯罪行為である・・・と思う。
「ここなら誰にも気付かれずに・・・」
「完全に性欲を持て余す事が出来る・・・」
「クヒヒヒヒ・・・お妙さんの・・・考えただけで鼻血が・・・」
「何を言ってるんですか。私は若の方がいいと思いますが。」
バカ共が鼻を伸ばしながらこう言っているその時だった。
「何をしているんだお前ら？」
「なっ！」
突然後ろから声がしたのだ。サンジが後ろを振り向くとそこにはナルトの師匠である自来也、そして２Ｔの現代国語の教師のレイヴンがいたのだ。
「な・・・何でここに・・・」
「後をつけて来たのよ。ったく何考えてるのだか・・・。」
そう言うレイヴンだが腰には望遠鏡が装備されていた。
「・・・もしかして先生方も・・・」
「ワシはただイチャイチャパラダイスの新刊のネタ集めに来ただけじゃ。」
「俺はただ見張りに来ただけよ。」
「そんな事言ってますけど本当は・・・。」
「「覗き。」」

その後、バカ教師を加えたバカ共は覗きを始めたのであった・・・
あ～どうしようもないなこいつら。

バカ共に気付かず保健室にいるリフィルとシャマルは胸囲検査を始めた。最初は2Eからである。
「はいじゃあ最初はララさんお願いします。」
「分かりました！」
そう言うと服を脱ぎ始めたのであった。
「ララちゃんはどうだ？」
「あれは・・・エレベストよりの富士山だな。」
「俺もサンジに同感だ。」
バカ共はこんな事を隠れて行っていた。
「あ、次は奏ちゃんらしいぜ。」
「奏ちゃんは・・・サハラ砂漠だな。」
「そうだな・・・次はゆりっぺだ。ゆりっぺは・・・ちょい鳥取砂丘だ。」
「そうだな。俺もそんな風に見える。」
「今度はハルナちゃんだ。」
「へ～結構胸ありますね。」
「でも大体鳥取砂漠よりのサハラ砂漠だな。」
え～ここでバカ共がエレベストとか富士山とか鳥取砂丘とかサハラ砂漠とか言ってますけど・・・訳が分からなくてすみません・・・訳が分かっても・・・心の中にしまっといてください。
「次はユーちゃんだ。」
「アレは完全にサハラ砂漠。」
「でしょうね。」
「フフフ・・・やはりここは特等席だな～。」
「だよな。」
「「「グフフフフフ」」」
気の上でバカ共のいやらしい笑い声が響いた。

そんな中、バカ共のいない事に気付いた２Ｚは普通に検査を受けていた。
「ったく、何してんだかあいつらは？」
「またバカでもしてんじゃねーの？」
というような声が上がっていた。そんな中、ハヤテは一人下向いてぶつぶつ呟いていた。
「まさかな・・・でもあいつらなら・・・まさか・・・いや・・・でも・・・」
「あの・・・何呟いてるんですか？」
隣にいた新八が恐る恐る聞いてみた。するとハヤテはいきなり顔を上げた。
「あ、新八さん、僕はお嬢様を助けに行きます！」
「た・・・助けにって・・・」
「あんな馬鹿野郎どもにお嬢様の裸を見せられません！」
「アンタ何言ってるの！」
「止めるのは止めてください！愛するお嬢様の裸体を見れるのは僕だけなんだ！」
「オイィィィィィィ！この子の頭の中おかしいんですけどォォォォォォォォォォ！誰か止めてくれェェェェェェ！」
暴れるハヤテを羽交い絞めにしながら新八はこう叫んだ。
「待ってろ新八、今ハヤテを沈めるからな！」
そう言いながらルフィはいきなりハヤテの脳天目がけてゴムゴムの斧を放った。この一撃によりハヤテは倒れ静かになった。
「ふう・・・やっと静かになった・・・。」
「かと思ったら大間違いですよ！」
突然倒れてるハヤテがこう叫んだ。その後彼はブリッジを行い、そのままの状態で走り出した。
「エエエエ

「お嬢様！今助けに行きまァァァァァァァァァァァァァァァァァァす！」
逃げ出したハヤテを追うため新八達は後を追ったのだが意外と速いので差が段々と広がる。
「はぁ・・・はぁ・・・何だよあれ、意外と速い・・・」
息を切らせながら新八は走っていた。そんな中、前には胸囲検査を終えたハルナが歩いていた。
「あれ？お前ら何やってんだ？」
「丁度いい所に！このバカを止めてくれェェェ！」
新八にこう言われた後ハルナは自分の魔装錬器『ミストルティン』を装備してハヤテに襲いかかった。
「おォォォォォォらァァァァァァァァァ！」
「ギャァァァァァァァァァァァァァ！」
ミストルティンの攻撃は見事ハヤテに命中した。その後、ハヤテはその場で撃沈した。
「あ～やっと止まったよこのロリコン執事（バカ）・・・。」
「お前も大変だな～。」
気絶したハヤテを背負って新八は元の場所へ戻って行った。

で、バカ共は未だに鼻の下を伸ばして覗きを続けていた・・・。
「おい、次は俺達のクラスと2Nみたいだぜ！」
「おおお！ついにお妙さんの・・・グフフフ♪」
彼らがいるとも気がつかず、胸囲検査を始めてしまった。
「最初はヒナちゃんみたいだ」
「「「「サハラ砂漠」」」」
「だよね～次は・・・なのはちゃん。」
「おっ、これは富士山だな～。」
「俺も同感。次はフェイトちゃん。」
「これは・・・エレベストだな。」
てな風にちょっとどころじゃない危ないトークをしていったので

あった。
「いや～今日は楽しいね～。」
「そうじゃのう、これでイチャイチャパラダイスの新刊のネタがどんどん浮かんでくるわい。」
「自来也先生、新刊出来たら見せてください。」
「いいぞ！」
そんなこんなをしていたら紬の番となった。
「・・・ん？あの木・・・何か違和感が・・・。」
紬はある一本の木を見つめていた。そこから怪しく光る物体があったのだ。紬はそれがたびたび動いたりしているのをずっと見ていた。
「・・・あ、また動いた・・・。」
ずっとその光を不思議そうに見ていた。

「なぁ・・・さっきから紬ちゃんがずっとこっちを見てるんだが・・・」
望遠鏡を手にしたサンジがこう言った。
「マジでか！」
「そうだな・・・そろそろ引き上げた方がいいな・・・。」
「ああ・・・少し心惜しいが・・・仕方ない。」
「そうだ」

ヒュン！

ザクッ！

いきなり何かが刺さる音がした。
「何だ今のお・・・」
後ろを振り向いたサンジは絶句した。彼の視界には額にたくあんを刺されて倒れているレイヴンの姿があったのだ。

「先生！レイヴン先生！・・・・駄目だ・・・完全に気を失ってやがる！」
「ま・・・まさかまた紬が・・・・」

ヒュン！

ザクッ！

ここで二発目の音が響いた。今度の被害者は近藤。
「ま・・・まさか・・・」
サンジは冷や汗をかきながら少し慌てていた。

「うん、手応えあり、またあの人達変な事をしてたわ。」
保健室にいる紬は笑顔でこう言った。
「さぁ、皆。他の人達にも伝えて。」
「何をだ？」
紬の前にいたナギがこう聞いたので紬は一息入れて笑いながらこう言った。
「おしおきの時間よ♪」

そんな中、サンジ達は戦闘不能になった者達を背負いながら遠くへ逃げていた。
「急げ！急がないと俺らも酷い目に遭うぞ！」
「出来るだけ何人かでレイヴン先生と近藤を運ぶぞ！」
「ってかこんな少人数でいいのかよ！」
「知るか！」
そんな事を話しながら走っていた。だが！
「スターライトブレイカー！」
後ろからあの声がした。それと同時にものすごい勢いでビームが迫って来た。

「イギャアアアアアアアア！」
バカ共は何とかギリギリで避けたのだが目の前には両手には紅桜を装備して完全に目が病んでいたヒナギクが立っていた。
「ヒヒヒヒヒヒ・・・ミィ～ツケタァ！」
怪しくこう喋った後ヒナギクは両手の紅桜から衝撃波を放った。
「オワァァァァァァァ！」
「ク、タ、バ、レェェ
「ゼヒュー・・・ゼヒュー・・・ヤバい・・・本気で俺ら殺される・・・」
自分達がやったことの反省はせずにバカの一人のサンジが息を切らせながらこう言った。そんな中。目の前からユーがやって来た。
「あ・・・」
「ユーちゃん・・・」
ユーはゆっくり自分の口を開けていった。そして。
「パンツ一丁でエレベストで遭難しろ。」
と呟いたのだ。その瞬間、バカ共の姿が消えた。
「おーい！根暗マンサー！」
後ろの方からハルナの声がした。どうやら彼女もこの騒動を知ったようだ。
「おい、あのバカ共はどうなった！」
そう聞かれたので手に持っていたメモ帳を取り出し、何かをかいてハルナに渡した。そこにはこう書かれていた。
『大丈夫、今頃エレベストにいるから。』
「そうか！よくやった！」

ハルナは笑顔でこう言った。そうしてバカ共によるバカ騒動は終わった。

数日後、エレベスト山頂にてパンツ一丁のサンジ達が凍死寸前で発見されたと一時期ニュース等で騒がれていたがすぐに収まった。

第６５話：健康診断って何かドキドキする（後書き）

おまけ劇場

～卵焼き～

２Ｚ教室内

ハルナ「たのもー！」

銀時「あ～？何の用だこのやろ～？」

ハルナ「このクラスにとてもうまい卵焼きが作れるやつがいると聞いて来た！誰だ一体！」

妙「それ私の事だわ。」

銀時「あ～何自分で卵焼きがうまいって言ってるんだよ。バカじゃねーの？」

ハルナ「さっそく私と勝負しろ！」

妙「分かったわ。」

数分後。銀時の目の前にはハルナの卵焼きと妙の可哀想な卵焼き。

妙・ハルナ「「さぁ、食べてください！」」

銀時「じゃーまずハルナから・・・うまっ！なにこれ！めっちゃう

まいんだけど！」

ハルナ「よっしゃー！」

妙「じゃあ私のはどうです？」

銀時「食わなくても分かるよ。どーせまずいんだろ？」

その直後、銀時の口の中に可哀想な卵焼きが入れられた。そして、銀時はここから翌日の昼まで意識を失っていた。

めでたし、めでたし。

おまけトーク

銀八「何だあの話！全然めでたくねェェェ

第６６話：大人の事情はどんな世界でも一応通ると思う（前書き）

作者「はい、というわけで前々から言ってるように今回から新キャラたちがやってきまーす。」

銀八「ホント、何でもありだなこの話。」

作者「そうですね。あと話変わりますけど新作の連載を始めました。タイトルは『銀魂×ハヤテ！悪ノ娘物語』です。見ていってください！」

梓「今回の脳内ＯＰは『だだだ』でよろしくお願いします。」

第６６話：大人の事情はどんな世界でも一応通ると思う

ヤンキー、どの学校にもいそうな輩である。もちろん混沌学院にもヤンキーは存在・・・した。いや、していた。

理事長室。今ここに２Ｄクラスの男鹿辰巳、古市貴之、邦枝葵、ヒルダ、東条英虎、神埼一、姫川竜也、高須竜児、逢坂大河がお登勢の前で座っていた。

「悪いね・・・呼びだしてね・・・。」

「は・・・はい・・・。」

冷や汗をかきながら古市はこう言った。彼は心の中でこう考えている。まさかまた自分たちのクラスが問題をやらかしたのではないかと・・・２Ｄはヤンキーの巣みたいなものである。今さらこんな設定言うのもあれだけど。

「で？用って何？」

危機感の欠片も無い大河が腕組をしながらこう言った。

「ば・・・バカ！そんな事言うな！」

横にいる竜児が大河を叱った。

「・・・話を言うよ・・・」

その瞬間、古市と竜児はごくりと音を立てながらつばを飲んだ・・・何がどうなるんだ分からないからだ・・・

「・・・アンタら明日から２Ｚの生徒だから。」

数分の沈黙の後、古市は叫んだ。

「エエエエエエエエエエ！何でですかァァァァァァァァ！」

「実はね・・・」

こっから回想シーンに入りまーす。

今日の昼休み。２Ｄのヤンキー共が購買で騒いでいた。だが。

ドッコォォォォォォォォォォン！

「すみません。邪魔なので一掃しました～。」
「じゃあ行くか、ハヤテ♪」
「そうですね、お嬢様♪」
２Ｚが誇る（多分誰も誇ってない）最強のバカップル、ハヤテとナギによってあっさりと一掃され、全員病院送りにされたのだ。

「てなことがあって２Ｄがほぼ壊滅状態だから・・・という訳で明日から２Ｚの生徒ね。」
「オイちょっと待てよ。」
ここで男鹿が異議を唱えた。
「全員病院送りにされたんだろ？だったら退院して」
「ああ、実は全員恐怖を覚えて退学したんだよ。」
「そんだけでかよ！」
古市が叫びが理事長室に響いた。

その夜。とある家の庭で謎の影が何かやっていた。
「ホンジャラゲ～ゴンジャラゲ～マサラジャゲ～・・・ミヨカノロセコギナ！」
謎の影がこう叫んだ後、足元の魔法陣が光出した。

で、翌日。古市と竜児は困っていた。２Ｚ、話には聞いた事がある。とんでもなく目茶苦茶なクラスだと。教室の前で困っていたら声をかけられた。
「何してるんですか？」
驚き、後ろを振り向いてみた。そこには新八と咲夜が立っていた。
「なぁ、アンタらってもしかして２Ｄの人か？」
「え・・・ええ。」
「何だ、だったらもう何人か来てるよ。」

「え？」
そう言われ、古市は教室を見て見た。
「う～ん、うんめぇぇぇぇぇ！」
「うまいアル！こんなおいしいたこ焼き食べたことないアル！」
「そうか？だったらたくさん食べろ！今日は特別だ！」
東条が教室の後ろの方でたこ焼きを焼いていてそれを早朝早弁組に与えていた。その一方では。
「うわ！また一回休みかよ！」
「フフフ、じゃあ俺は先へ行かせてもらうぜ！」
姫川と神崎はゾロとゼロスと桃鉄で勝負していた。で、邦枝の方は。
「なぁ、唯と葵の声って似てないか？」
「そう？」
「私は別に変わらないと思うけど・・・」
軽音部の連中と話していた。
「普通に話してるじゃん・・・」
「まぁ・・・いいか。」
そんな中、激しい音が響いた。
「ふぅ・・・こんなもんか？」
「ありがとう。これであのエロコックも落ち着くと思うわ。」
「ったく・・・私に抱きつこうなどバカな事をするバカがいるものだな・・・。」
男鹿がエロコックのサンジをブッ倒したのだ。で、その後ろには笑顔の妙とあきれ顔のヒルダ。そして歓喜の声を上げるベル坊がいた。
「ああ・・・またあのバカが変なことしたんかい・・・」
「な・・・何だあの人！」
「サンジさん、ただの変態です。」
呆れながら新八と咲夜はこう答えた。
「よー古市、竜児、それ誰だ？」

「ああ、２Ｚの人。えと・・・名前は・・・」
「僕は新八です。志村新八。」
「私は愛沢咲夜や。よろしく。」
「ああ。」
「よろしくな。」
てな風で軽く挨拶を交わした。

朝のホームルーム。ジャンプを手にした銀時が教室に入って来た。
「え～、昨日から言ってる通り２Ｄの男鹿、古市、ヒルダ、邦枝、神埼、姫川、東条、高須、逢坂が大人の事情でこっちで勉強する事となった。」
「先生、大人の事情って何ですか？」
ここで混沌王、桂が手を挙げた。
「テメーみたいなバカはそんなこと気にするな。」
「気になります！ま・・・まさか・・・あんな事やそんな事」
「変な事妄想するなヅラ。」
「ヅラじゃありません。桂です。」
「オメーさぁ、一度頭ん中見て見たいわ。もしかしてそんなかに入ってるの脳みそじゃなくてプリンじゃねーのか？」
「そうです。だけど俺の場合はしわしわのプリンです。」
「まずそうだな。」
そう言ってヅラとの会話を止めた。
「あーあともう一つ連絡あるからなー。おーい、入ってこい。」
銀時は廊下の方に向けて声を出した。その後、桃色で長い髪の少女と背中に剣を背負った少年が入って来た。
「え～、こいつら転校生です。」
「エエエエエエエエエエエエ！」
２Ｚの教室に驚きの声が上がった。
「えー自己紹介頼む。」
銀時に促されて彼らは自己紹介を始めた。

「え・・・えーっと・・・俺は平賀才人です・・・で、この剣はデルフリンガーって言います。」
「よろしく頼む。」
その後、拍手が舞った。
「じゃあ次頼む。」
そう言われサイトの隣の少女が自己紹介を始めた。
「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ラヴァリールよ。よろしく。」
「はい！」
ここでルフィが手を挙げた。
「悪いけどもう一回名前言ってくれねーか？少し分からない所があってよー。」
「仕方ないわね。もう一回言うわ。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ラヴァリールよ。」
「え・・・えーっと・・・ルイズ・フランスソース・ブランド・ドラヴァレール？・・・か？」
「全然違うわよ！私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ラヴァリーズよ！」
「えーっと・・・ルイズ・フランスソーズ・ルルラン・ドラクエリール？」
「全然違う！アンタバカじゃないの！」
「バカじゃねーよ！お前の名前が異様に長いんだよ！」
「ルフィ、落ち着けよ！」
立ち上がったルフィをチョッパーが止めた。
「ホント悪いな、えーっと・・・ルイズ・フランスソース・ルブラン・ドラクエヴァリーズ。」
「アンタも間違ってるわよ！」
ルイズは鬼の形相でルフィとチョッパーを睨めつけた。
「えーじゃあ今日からこの二人も２Ｚの生徒だから。よろしくな。じゃあサイトと・・・えーっと・・・フランスソースにはく」

「だから名前違うわよ！誰がフランスソースよォォォォォォ！」
ルイズは手にした魔法の杖を振って銀時の足元を爆発させた。

その後、誰もが２Ｄの連中やフランスソース
「誰がフランスソースよ！」
スミマセン、ルイズとサイトの所で話していた。
「しっかし、すごい偶然だな。今日のうちでこんなにクラスメイトが増えるなんて。」
「そうだな～。」
ロイドとエミルがこう会話していた。
「でもまァいいんじゃねーか？どうせ前から騒がしかったし。」
「ええ。でも一人減る事になるんですけどね！」
隣にいた沖田が土方目がけてバズーカを放った。
「オギャアアアアアアアア！」
土方は避けようとしたがバズーカの弾が早すぎて反応できなかったのだ。だが。
「はぁぁぁぁ！」
邦枝が木刀を振ってバズーカの弾を真っ二つにしたのだ。
「え・・・何今の・・・」
「今のはうちから代々伝わる秘技よ。」
「すげー！」
近くにいた神楽が目を煌かせて邦枝の所へ向かって行った。そんな中。
「ねぇ、何飲んでるのそれ？」
神崎が飲んでいるヨーグルッチに興味を持ったルイズがこう聞いた。
「あん？お前しらねーのか？ヨーグルッチ。」
「全然。私この世界について全く分からないのよ。」
「この世界？どーいうこった？」
「それは私が説明するわ。」

ここでヒナギクが声を上げた。で、その後教室の前の方へ行きサイトとルイズを呼んで話し始めた。
「実はこの二人はこの世界の住人ではありません。」
「マジでか！」
一番に反応したのは神楽であった。
「実は昨晩、ナギを呪い殺そうと黒魔術を試みたのですけど間違えて異世界のこの二人を召喚してしまったのです。」
「「「何じゃそりゃァァァァァァァァァァァァァ！」」」
大声を出したのは新八、咲夜、古市であった。
「アンタ何してんだよ！ってか涼しい顔して何言ってんだアンタ！」
「ってかどれだけ病んでるねん！」
「この人完全にキャラ崩壊してるよね！」
「仕方ないじゃない・・・だって・・・ダッテワタシモハヤテクンヲアイシテルカラ」
「止めェェェェェェぇぃ！これ以上あんたが止んだらこの作品がｎｉｃｅｂｏａｔってなるゥゥゥゥ！」
教室中に新八のシャウトが響いた。

てなことがあって一時間目の体育、今ここに新しい仲間が加わった２Ｚの連中は体育館へ集まっていた。並んでいる彼らの前にはスネーク先生がいた。
「あれ？松平先生は？」
「実は松平先生は昨晩キャバクラでドンペリを飲み過ぎて倒れたそうだ・・・で今日は俺が変わりだ。」
「ほ・・・本当に先生がやる事かよ・・・」
サイトが汗を垂らしながらこう呟いた。
「えー今日はチームに分かれてバスケットを行う！チームは各自で決めてくれ！」
でその後はチームに分かれてバスケットが始まった。
「あ、男鹿さん。同じチームですね。」

「えーっと・・・新八か。よろしくな。」
「んだよ男鹿も同じチームかよ。」
そういうのは神崎。だがまァすぐに彼も自分のポジションの場所へ着いた。
「そう言えばベル君はどうしたんですか？」
「ベル坊か？あいつはあっちだ。」
男鹿が指さす方向にはステージの上に座って応援しているベル坊の姿があった。
「流石にベル坊背負ってバスケは出来ねーからよー。」
「でしょうね。」
そんな会話をしていたらスネークの笛が鳴った。試合が始まったのだ。
「うぉぉぉぉ！届け！俺の右手ェェェェェ！」
「安西先生！俺に力をォォォォォ！」
ヅラとゴリラがどうやらジャンプボールをしていた。ちなみに新八のチームメイトはゴリラ、神楽、咲夜、ヒナギク、ルフィ、チョッパー、黒子、ロイド、桐乃などである。ゴリラが飛ばしたボールは見事神楽の手に渡った。
「ウオオオオオオオ！いっけぇぇぇぇぇぇぇ！」
神楽は叫びながらボールを投げた、そのボールは見事サンジのタマに当たった。
「グギョォォォォォ

（くぅ・・・ガードが激しい・・・！）
周りの仲間は全て敵方が妨害している。なかなか難しい状況なのだ。迷っている中、エミルはある光景を見た。
「いくよ！」
そして、エミルはその方へボールを投げた。
「なっ！」
エミルの近くで妨害していた近藤は油断してボールを追ったが無駄だった。マルタがそのボールをキャッチしていたのだ。
「渡さないよ！」
相手をかわしながら華麗なドリブルをして移動するマルタ。だが目の前にランブルを使って変形したチョッパーと桐乃が現れた。
「しまった・・・というとでも思った？」
マルタはそう言うと後ろを向きボールを投げた。そこにはシャナがいてものすごいスピードでゴール下へ迫ったのだ。
「しまった！」
「まだ終わってない！」
シャナのスピードに唯一反応したチョッパーはシャナの後を追った。だがシャナのスピードが上だった。
「皆！ゴールを守ってくれ！」
チョッパーにこう言われ神崎、神楽がゴール下へ向かった。
「入れさせるかァァァァァァァ！」
「行かせるかよ。」
「なっ！」
走って向かっている神崎の前に姫川が現れた。彼は神崎を守りに行かせまいと思いやって来たのだ。
「ちっ、神楽！あとは頼む！」
「おう！」
神楽はシャナへ向かって行った。
「来たわね！」
「私と勝負するアル！」

神楽が迫って来たのでシャナは走るスピードを下げ、神楽の後ろを向いた。今は一対一、何とかできる状況なのだが神楽は強い。
「どうしたら・・・」
そこへ何かを感じた。そう、いつの間にかルイズとサイトがシャナの援護へ来たのだ。
「俺達に任せろ！」
「あとはお願い！」
シャナからパスを受け取ったサイトはゴール下へ向かって行った。
「そんな事させるかァァァ！」
目の前に土方とゾロが現れた。だがサイトはそんな事は気にせずにボールをゴールに向けて高く上げた。
「何するつもりだ！」
「今だルイズ！」
「わかってるわよ！」
ルイズの声が響いた。すると突然上の方でルイズが現れた！
「何！」
「スラム・ダンク！」
空中でボールを取り、ゴールに向けて叩きこんだ。
「すげェェェェェ！」
「敵ながらあっぱれ！」
「桜木の再来か！」
「安西先生・・・バスケが・・・バスケがしたいです・・・。」
「くたばれ土方ァァァァァァ！」
「何言ってんだ沖田ァァァァァァァ！ってか久しぶりだなこのネタ！」
というような声が見方からも相手からも上がった。
その後の展開はどうなったかというと。竜児が気合でゴール下へ向かいゴールを決めたり。大河が素早い移動でゴール下へ向かってゴールを決めたり、神楽が新八の眼鏡を破壊したり、土方と沖田が

喧嘩し始めたり、ルイズがサイトを蹴り始めたり、神崎が「根性シュート！」と言ってゴールを決めたり、神楽が投げたボールがまたまたサンジのタマに当たったりしていた。まぁそんな中、ステージで座っているベル坊は退屈でしかたがなかった。そこでベル坊はステージから降りようとし始めたのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・あ！オイ男鹿！あれまずいんじゃねーのか！」

息を切らせながら古市はステージの方を指差した。

「え？は！おい止めろベル坊！」

急いでステージ側へ向かう男鹿。だが間に合わず、ベル坊はステージから落ちる前に転倒してしまった。

「ア・・・ダ・・・」

「まずい！」

「アギャアアア

第６６話：大人の事情はどんな世界でも一応通ると思う（後書き）

おまけトーク

一方通行「何かすごい事になってきてるな・・・」

当麻「ああ。」

銀八「作者も何考えてんだか。」

梓「そうですね。」

ブロリー「大丈夫なのか？」

パラガス「そんなに連載を抱えて。」

作者「ひ～ん、混沌学院も書かないといけないし恋物語も狩物語もかかねーと・・・やべー！ネタが浮かばねぇぇぇぇぇ！浮かぶのは混沌学院のネタだけだァァァァァ！！」

第６７話：規則は破るためにあるって言うけど少しは守れ（前書き）

作者「今回は作者による悪ふざけがあります。」

一方通行「いくら原作でやったからって・・・」

銀八「これはねーだろ・・・」

梓「脳内ＯＰは『千の風になって』・・・いいんですか？関係ないのに・・・」

第67話：規則は破るためにあるって言うけど少しは守れ

俳句。五七五とか季語とかそんなん入れてやる奴である。2Zの現代国語の時間、銀時は彼らに俳句を作るよう言っていた。
「いいか？誰でもいいからすぐに浮かんだら発表しろ。」
「先生！」
ここで悟空が手を挙げた。
「俳句って何だ？」
「そっからかよ。」
そう言われたが銀時は答えるのに少し苦しんだ。
「あー・・・あれだ。五七五の奴で・・・えと・・・昔の詩人がやってたような奴。」
「わかった！」
そう言って悟空は席に座った。
「これで伝わったか・・・？」
「はい！」
大きな声を出してルフィが手を挙げた。
「ルフィか。俳句が浮かんだのか？」
「おう！聞いてくれよな！

あいうえお　あいうえういあ　あいうえお

どうだ！」
「何じゃそりゃアアアアアアアア！」
ルフィのちんちくりんな俳句を聞いた銀時はシャウトした。
「何って俳句だよ。ちゃんと五七五じゃねーか。」
「五七五だったら何でもいいってわけじゃねーよ！」
「んだよチェ～。」
そう言いながらルフィは席に座った。続いて次の生徒が手を挙げ

た。
「はい！」
「あん？神楽か・・・お前も俳句できたのか？」
「そうアル！聞いてびっくりするがいいアル！

ああああああ　ああああああああ　ああああああ

どうアルか！」
「別の意味でびっくりしたわァァァァァァァァァ！！！ただあが並んでるだけじゃねーかァァァァ！！！季語とか入れろォォォォォォ！」
「先生。」
「アァァァァァン！？」
ここで神崎が手を挙げた。
「先生が望んでる俳句ってこんなんですよね。

我が頬に　そっと触れるは　春の風」

「そうそう！そんな感じの奴だよ！」
「わかりました！」
ここで近藤が手を挙げた。
「神崎の言うようにすればいいんですね！一句思い浮かびました！

我がナニに　そっと触れるは　おた」

「誰がゴリラのナニにそっと触れるだァァァァァァァァ！！」
発表の途中だがお妙が突然ゴリラの襟を持って、ジャイアントスイングをした後窓に向けてブン投げ、ゴリラは悲鳴を上げながら外へブッ飛ばされた。
「はぁ・・・いつも通りの展開となったか・・・。」
「はい。」

とまたここで東城が手を挙げた。
「んだよオメーかロフトバカ。」
「先生、私の華麗な句で酔いしれてください。
我がナニに　そっと触れるは　若」
「だから下ネタ止めェェェ

「そんなわけありません！しっかりと聞いてください！
攘夷がＪＯＹ♪　やるならいましか　ねーＺＵＲＡＲＡ♪」
「じょォォォォォォォォォい！」
銀時は叫びながらヅラに飛び蹴りを入れた。
「結局オメーのわけかんねーラップを五七五っぽくしただけじゃねーかァァァァ！」
「ラップじゃありません！カツラップだＹＯ！」
桂ショックから何とか立ち上がり銀時は再び黒板の前に立った。
「で・・・次誰か・・・」
銀時がこう言った後、ハヤテが静かに手を挙げた。。
「オメーかよ・・・どうせナギのこと書いたんだろ？」
「分かりませんよ？」
「はぁ・・・いいから発表しろ。」
「分かりました。

桜より　とても美しい　お嬢様」

「結局ナギの事じゃねーかァァァァァ！」
「まだありますよ！
紅葉（もみじ）より　とてもきれいな　お嬢様」

「止めろォォォォ！それ以上言うなァァァァ！むかつくからァァァァァ！」
ロリコンバカの暴走を止め話を続けた。
「誰かいねーか？」
「はい。」
手を挙げたのは山崎だった。

「山崎か・・・発表しろ。」
「はい。」
山崎はそう言った後軽く息を吸い句を発表し始めた。
「あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」
「どうした？」
様子が変な山崎を銀時はどうかした聞いてみた。
「ん・・・ぱん。」
「へ？」
変な言葉が聞こえた。
「ど・・・どうしたんだよ。」
明らかに様子がおかしい山崎。目はどこか向いていて、口元で何かブツブツ呟いている。
「どうした・・・マジでどうした？」
その後、山崎は銀時に話した。
「すみません、ちょっと準備をしていたので・・・じゃあ発表します。

あんぱんあんぱんあんぱんあ

ぱんあんぱんあんぱんあん

ぱんあんぱんあんぱんあん

「だ・・・誰か～・・・・まともな奴を頼む～。」
「はい。」
ここで新八が手を挙げた。
「何だよオメーかよ、俺より先に彼女できやがって。ぶっ飛ばすぞ。」
「あの・・・それ酷くないですか？」
「はぁ・・・さっさと言え。」
「分かりました。

空高く　夜空が彩る　白色に」

「普通だな。流石新八。」
「あの・・・それ・・・褒め言葉ですか？」
「気にするな。次誰か発表してくれ。」
「はい。」
ここでヒナギクが手を挙げた。
「ヒナギクか・・・まぁいいか。発表してくれ。」
「分かりました。」
多少不安だがヒナギクならまともな句を発表できるだろう。銀時は心の中でそう思っていた。だが。
「じゃあ発表頼むぜ。」
「分かりました。

ハヤテ君ハヤテ君ハヤテ君

テ君ハヤテ君ハヤテ君ハヤテ

テ君ハヤテ君ハヤテ君ハヤテ

「え・・・えーっと・・・えーっと・・・」
「どうしたんですか？さっさと発表してくれよ！」
銀時がせかしたが芭蕉は困っていた。何故なら今・・・芭蕉先生は・・・スランプ中だからだ。

（ヒ～ン、いい句が思い浮かばないよ～いくつか出てるけどな～。）
芭蕉が考えている句とは！

苦しいよ　夜中にスポンジ　食べちゃった

五月雨（さみだれ）は　ごがつあめじゃ　ないんだよ

食べたいな　駅前ケーキを　腹いっぱい

パ～～～ティ～～～シ～～～エ～～～

昨日から　ノリに乗ってる　こつばん

この五つであった。
（ど～しよ～どれにしようかな～。あ、もう一つ思い浮かんだ。）

曾良君の　アホバカ間抜け　○○○○が

（これだ！いい句が浮かんだぞ！これを発表しよう！）
そう思いながら意気揚々と黒板の前に立った。そして今出来上がった最高の句を発表し始めた。
「では今出来た最高の句を発表します！
曾良君の　アホバカ間抜け　○○○○が。」
「誰がアホバカ間抜けで○○○○なんですか？」
「そりゃー曾良のバカの事・・・」

後ろを見た芭蕉は絶句した。何故なら後ろに曾良君が立っていたのだ。
「あ・・・あの・・・その・・・」
「一句出来ました。
紅葉(こうよう)を　芭蕉の血で　染めましょう」
そう言うと曾良は芭蕉を捕まえて去って行った。その後、学院中に芭蕉の悲鳴が轟き渡った。

第６７話：規則は破るためにあるって言うけど少しは守れ（後書き）

おまけコーナー

銀八「オイィィィィィ！何やってんだおめェェェェェ！！！」

梓「本当に度が過ぎると本当に人気下がりますよ！」

作者「・・・その辺は多少反省してます・・・」

当麻「え・・・えーっと・・・こんな馬鹿だけど今後ともよろしく～。」

第６８話：料理は愛情だけどそれ以外にも必要な物がある（前書き）

作者「さーて、今回の混沌学院はー？」

銀八「何？そのサザエさん的なノリ？」

梓「の・・・脳内ＯＰは『お料理行進曲』でお願いします。」

ブロリー「今回の話に合っているな。」

第６８話：料理は愛情だけどそれ以外にも必要な物がある

「ギャアアア

「おはよう大河ちゃん。で、この料理コンテストっていつやるの？」
「え？ああ・・・えーっと・・・来月らしいな。」
「来月ね！」
妙はそう言いながら意気込んでいた。その様子を見ていた竜児は恐る恐る聞いてみた。
「も・・・もしかして・・・妙も・・・」
「私も参加するわ！」
この言葉を聞いたその瞬間。竜児と大河は思った。・・・料理コンテストが地獄と化す！

でもって料理コンテストの日となってしまった。会場には参加者が数名いた。その中には竜児と妙、そして同じクラスの土方とハヤテとロイドがいた。別のクラスからは２Ｔのフレンがいた。
「うわ～結構強豪ぞろいだな・・・」
「竜児！負けたら承知しないわよ！」
後ろの方で大河が叫んだ。
「だ・・・大丈夫かな・・・審査員の人・・・」
横で新八がこう呟いた。そんな中、隣に誰か座った。
「ホント・・・大丈夫かよオイ・・・。」
「あ、ユーリさん。」
隣に座ったのは２Ｔのユーリであった。彼はフレンの友人でもある。
「あいつが作る料理・・・一件まともに見えるけどな・・・」
「それって・・・フレンさんが作ってる料理ですか？」
「ああ。」
「それだったらナタリアもちょっと危ないぜ。」
そう言うのはルークであった。隣にはティアとミュウがいた。
「な・・・ナタリアさんも出てるんですか？」
「ええ、今は裏の方で料理本読んでたけど・・・」
「ちょっと危ないですの。」

「ちょっとどころじゃねーよかなりヤバいぞ・・・」
「それより・・・審査員って・・・あの人かしら？」
ティアがそう言った。前の方にある審査員の席には先生代表として銀時と一般代表としてマダオが座っていた。
「みたいですね・・・長谷川さんいつからいたんだ？」
少し汗を垂らしながら新八はこう言った。だが彼の隣には空席があった。
「誰が座るんだろ？」
呟いたその直後だった。ついにコンテストが始まってしまったのだ。それに合わせて参戦者も次々と自分のキッチンへ向かって行った。その中には妙の姿もあった。
「レデースエーンデジェントルメン！今から混沌学院、料理コンテストがはーじまーるよォォォ！」
司会者のゼロスのハイテンションな声がこう叫んだ。次にゼロスは審査員の紹介を始めた。
「審査員は3名！先生代表の銀時先生と一般代表の長谷川さん！そしてもう一人はまさかの大物！」
そう言った直後、ステージの中心にある門らしき所にスポットライトが当たった。
「さぁ出てきてください！」
声に合わせて門が開いた。門の中にいた人物の姿を見て新八達は驚いた。何故ならその人物の正体は・・・。
「将軍家は代々、朝食はご飯派だ。」
「将軍かよォォォ

奴らが作る地獄料理の匂いが辺りに充満している。中には気分が悪くなり倒れる人も出て来た。
「や・・・やめさせて・・・」
「息が・・・苦しい・・・」
新八の周りでもルークとユーリが苦しそうにしていた。
「換気しろ！今すぐに窓を全て開けて喚起しろォォォ！」
ゼロスが窓の近くにいる人に向かってこう叫んだ。その後、急いで窓が開かれた。
「ぜぇ・・・ぜぇ・・・死ぬかと思った・・・皆さん大丈夫ですか！」
観客に向かって叫ぶゼロス、彼は一通り観客席を見渡してみた。数名倒れていて大惨事となっていたのだ。
「ヤバい・・・すぐに中止し」
「何言ってますの？」
近くにいたナタリアが声を上げた。
「私達、頑張ってるんです。邪魔しないでください。」
不機嫌そうに妙が鬼のオーラを出しながらこう言った。
「ひ・・・ヒィ！試合続行！」
てな訳でコンテストは続いた。

数分後、料理タイムが終了した。
「さて、参加者の皆さん！自分の料理を発表して下さい！」
ゼロスがこう言ったので参加者達は自分が作った料理を審査員の前に持って行った。
「先生！まずは俺の料理から食ってみてくれよ！」
最初はロイドの料理、炒飯だ。見た目は普通だが味に工夫がされていてとてもおいしかった。
「うめーなオイ！やっぱお前の料理うまいよ！」
「ありがとよ！」
「・・・こんなうまい飯食べるの・・・何日ぶりだろ・・・」

隣で長谷川が涙を流しながら炒飯を食べていた。で、続いては竜児の生姜焼き。
「まぁ食べてみてくれ。」
竜児が銀時の前に生姜焼きを盛った皿を置いた。おいしい匂いが辺りに散乱した。
「いや～これもうまそうだな～。」
「・・・肉なんて食べるの何日ぶりだろう・・・」
「うまそうだな。」
色んな感想を上げながら一切れの肉を口に入れた。これもまたとてもおいしかった。
「ふ～もう優勝候補が決まりそうだな～。」
「先生、俺の自信作を食べてください！」
こう言ったのは土方であった。彼の前にはマヨネーズがあった。
「・・・何これ？」
「俺の自信作！マヨネーズのマヨネーズ盛りです！食べて見てくだ」
「食えるかァァァァァァァァァ！何マヨネーズをマヨネーズで盛ってんだァァァァァ！意味無いだろうがァァァァァァァァ！」
「いや！意味ありますよ！上のマヨは○○社製で下のマヨは××社製のマヨで」
「意味あんのかァァァァァ！」
とりあえずこのマヨバカを即刻失格として次の料理を持ってくるようにギントキは促した。次はハヤテの料理だった。
「先生、僕が作ったのはパフェです。」
その言葉を聞いて銀時が反応した。
「マジでか！見してくれ！」
ハヤテが持っているパフェを見た銀時は次の瞬間言葉を失った。パフェ事態は普通の物だったがパフェの上に飾ってあるチョコの造形がハヤテとナギが（ピーーーー！）な姿で（バキューーーン！）まがいな事をやっていたのだ。
「何作ってんだお前ェェェェェェェェェェェェェ！」

「何って、僕特製のハヤナギパフェですよ。」
「いるかァァァァァァァ！こんな気持ち悪いパフェ！食えるわけねーだろうがァァァァァァァァァ！」
「でも長谷川さんと将軍は気にせず食べてますよ。」
そう言われたので隣を見て見るとチョコの造形を気にしないでパフェをがつがつ食べている長谷川と将軍の姿があった。
「うんうん！これうまいよ！チョコはアレだけど。」
「結構いけるな。チョコはいけないけど。」
意外と好評だった。チョコ以外は。まぁ銀時もその後食べて意外といけると声を出したのだ。

数分後、彼らの腹は満足に満たされていた・・・だが彼らは気付かなかった。この後が地獄であると。
「先生方、次は僕の料理です。」
そう言うのは２Ｔのフレンだった。
「や・・・やな予感がする・・・」
新八の近くに座っているユーリが冷や汗を垂らしながらこう呟いた。ちなみにフレンの料理は卵焼きであった。
「んだよ、結構うまそうじゃねーか。」
そう言いながら銀時は卵焼きを箸で少し切り取り、そこの部分を箸でつかんで口に入れた。
「・・・・・・グゲェ！何だこの味！」
「実は隠し味でプロティンやらビタミン錠剤やら色々入れました。」
フレンが自慢そうにこう言っているのだが銀時達は聞いていなかった。
「オボワ！」
「ちょ！将軍が倒れた！俺保健室に連れて行くからちょっと席外すよ！」
そう言って長谷川は将軍を背負って保健室へ向かって行った。
「え！ちょ・・・ちょっと待って！あとの面子の料理俺が食えって

か！」
「みたいですね。」
銀時の質問にゼロスはこう答えた。
「じゃあ次は・・・・・・」
ここまで言ってゼロスは口を閉じた。
「あん？どうした？次誰だよ？」
不審に思った銀時はゼロスが持っている参加者リストを覗いた。
で、顔を真っ青にした。次の発表者はナタリア・・・そして・・・・・・妙だったのだ。
「先生。」
後ろからリフィルとシャマルの声が聞こえた。
「な・・・何だオメーら・・・まさか俺が倒れたらそのまま保健室」
「違いますよ。」
「実は皆に内緒で飛び入り参加をしたのです。」
この瞬間、銀時の顔は青に染まった。
「・・・ちょっと将軍の様子を見に行ってく」
ドタン！
いきなり体の自由が効かなくなった。
「何だ！何で腕とか足が・・・」
体を見たらシャマルの魔術で体が拘束されていたのだ。
「先生。」
モザイクがかかりそうな料理を持ってナタリアが前に迫った。
「私達の料理を。」
たくさんの暗黒物質を盛った皿を持った妙が後ろに現れた。
「「食べてくださいね。」」
自主規制がかかりそうな料理を持ってリフィルとシャマルが横に現れた。
「皆ァァァァァァァ！助けてくれ・・・」
周りの人に助けを求めようとしたがいつの間にか観客と参加者とゼロスの姿が見えなかった。

「あの薄情共がァァァァァァ！」
この叫びの後、銀時の口の中に彼女らの料理が入れられた。

一方、小学部の保健室にて。担当のトキが日誌を書いていた。ベッドには急患でやって来た将軍とそれを看病する長谷川の姿があった。一息入れようとトキは立ち上がり、紅茶を入れようと保健室の簡易キッチンへ向かった。その時、空に一つの星が光っているのに気付いた。
「あれは・・・死兆星・・・もしや誰かの頭上に落ちたのか・・・」
しばらく思い老けていたがこの小説が学園コメディと思いだしたのでまぁいいかと思い席に座って紅茶を飲み始めた。

第６８話：料理は愛情だけどそれ以外にも必要な物がある（後書き）

おまけ劇場

～あとの連中の俳句～

ルイズ：わが犬よ　そんなに巨乳が　好きなのか

サイト：わが主よ　鞭で叩くの　やめてくれ

土方：マヨネーズ　マヨマヨマヨマヨ　マヨネーズ

沖田：頼むから　さっさと死ねよ　土方さん

悠二、吉田、シャナ、巧、文乃、千世、希、ロイド、コレット、ジーニアス、ゼロス、エミル、マルタ、クラウド、御坂、黒子

糞作者　さっさと出番を　よこしやがれ

これらの句を見て銀時は声高らかにこう叫んだ。

銀時「あいつら・・・ちったぁルールを守れェェェェェェェェェェェェェェ！！」

おしまい

おまけトーク

銀八「おーい、いつ長編やるんだ？」

作者「もう少し後でやります。」

梓「どんな話ですか？」

作者「ボーカロイドキャラが絡んできます。」

一方通行「あいつらが主役かよ・・・」

作者「一応２Ｚ以外にも２Ｂと５Ｚも出す予定です。」

ブロリー「２Ｎは？」

作者「多分出さない。」

パラガス「出さないのですか・・・」

作者「まー度々一話完結系の話でやるだろ。」

ドナルド「そうだったらいいけど。」

作者「じゃ、というわけで楽しみにしていてください。」

第６９話：腹から声を出すのは難しい（前書き）

作者「今回は歌に関する話です。」

銀八「お前カラオケ好きだもんな。」

作者「ああ。ちなみに今回の脳内ＯＰはありません。理由は途中で変え歌があるから。それを脳内で再生してください！」

第６９話：腹から声を出すのは難しい

音楽室、今２Ｚの連中はここで音楽の授業を行っていた。
「はい、じゃあ本日は課題曲のテストを行います。」
担当のさわ子がピアノの前でこう言った。
「え～めんどくさいアル～。」
「何の歌だよ？」
「キャラソンでいいですか？」
「お通ちゃんの歌でいいですか？」
「眠いから寝ていいですか？」
「土方を倒していいですか？」
「沖田を倒していいですか？」
「お妙さんと添い遂げて」
ズシャアアア！
「ギャアアア

しばらくして最初のテストが始まった。最初の人は神楽。
「一番、神楽！私は『北酒場』歌うアル！」
「う・・・うう・・・生徒の前じゃおしとやかキャラで行くと決めたのに・・・」
落ち込んでいるさわ子を無視して神楽は手にしたラジカセの再生ボタンを押した。
「オイちょっと、演歌って分かりにくい奴いるんじゃねーか？」
丁度音楽が鳴り始めた所で神崎が手を挙げてこう言った。
「何でアルか！有名アルよ『北酒場』！アニソンとか○Ｚばっか聞いてるこの作者（バカ）でもウォークマンに入れてるアル！」
「いや、銀凪の事はどうでもいいからよ。せめて・・・明るい曲とかそんなんでいいから。」
「むー、仕方ないアル。」
渋々神楽はラジカセからカセットテープを取りだした。
「今時カセットかよ・・・」
新八のこの声が聞こえたが無視して別のカセットを入れて再生をした。ラジカセからこのような声が聞こえた。
『こ・・・この・・・バカ犬ーーーーーー！！』
「ちょっと神楽！何流してるのよ！」
声を出したのはルイズである。
「別にいいんじゃねーの？声優同じだし。」
「いいわけないでしょ！」
「じゃあだったら・・・カラコイでも」
「それは駄目だ！」
「それは駄目です！」
ハヤテとナギが同時に叫んだ。
「僕とお嬢様のデュエットソングは誰にも譲りません！」
「たとえ神楽であっても！」
「む～じゃあ何を歌えばいいアルか？」

「男と女のラブゲームは私と悠二が歌う事になっているから駄目よ。」
近くで座っているシャナがこういった。
「ちょっと！僕その歌の名前は知ってるけど歌詞の内容全然知らないよ！」
「だったら私とエミルが歌う！」
「ちょっと！僕も知らないよ！」
「じゃあ皆でプレパレードを」
「その歌は私と竜児で歌うんだから！」
その後は神楽とルイズとナギとシャナとマルタと大河がいろんな曲のタイトルなどを言っていた。
「オイィィィィィィ！！いい加減にしろォォォォォォォォ！！このクラスを釘宮病ウイルスで蔓延させるつもりかァァァァァァァ！」
ここでようやく新八が叫んだ。
「はぁ・・・はぁ・・・何だよこのクラス・・・今思ったけど釘宮キャラいすぎじゃねーか！」
「仕方ない・・・この作者・・・アレだからな。」
咲夜がこう言った。そして釘宮キャラ達も静かになった。
「おい、だったら俺から先に歌っていいか？」
こう声を出したのは男鹿だった。
「男鹿、お前何か歌えるのか？」
近くにいた古市がこう聞いた。
「まぁな。これでも毎晩ベル坊の為に子守唄とか歌ってんだよ。」
前にあるいて男鹿は歌を歌い始めた。曲は・・・蝋人形の館だった。
「何・・・それが子守唄？蝋人形の館が？」
古市の呆れた声が聞こえた。
「仕方ねーだろ、この曲がベル坊のお気に入り何だから。」
「ってかお前は赤ん坊に何聞かせてんだよ！」
「だから仕方ねーだろ、銀凪だってウォークマンに聖○○？の曲を」

「「「この作者の事はどうでもいいんじゃァァァァァァァァァァァ！！！」」」
２Ｚのツッコミ三人組（新八、咲夜、古市）の声が響いた。
しばらくの間カオスな歌のテスト・・・もといカラオケ大会が始まった。
「おい！次誰歌うんだ！」
「俺のカツラップ」
「歌うな！」
「仕方ねェ、じゃあ俺の作詞作曲した『マヨネーズ～愛の歌～』を」
「どんな歌だよ！」
「じゃ俺の自作の歌『土方殺戮ブルーズ～マヨネーズは死の香り～』を」
「だからどんな歌だよ！」
「沖田、テメーぶっ殺すぞ！」
とまぁこんな風にワイワイ騒いでいた。
「・・・あら・・・何か騒がしいわね・・・。」
「次！りっちゃん歌います！」
「オー！どんどんやれェェェェェェェ！」
騒がしい中、さわ子は再び我に戻った。
「何やってるのあなたたちィィィィィィィ！」
律が一期けいおんのＥＤを気持ちよく歌っていると後ろから怒ったさわ子が怒鳴り声をあげた。
「今日はテストでしょ！何カラオケまがいの事をしているの！」
「暇で暇でしょうがなかったんだよ～。」
反省の色ゼロの悟空が笑顔でこう言った。
「ったくも～あなた達は～。」
「さわちゃんも何か歌う？」
唯の声と共にマイクが現れた。
「一応カラオケ機械持って来たぜ！」

どこから持って来たのか分からないが簡易のカラオケ機械を手にしている東条がこういった。
「・・・ふっ」
軽く笑った後、さわ子はマイクを手にとった。そしてしばらくした後『ラヴ』が流れた。
「テメーらァァァァァァァァァ！本物って奴を見させてやるよォォォォォォォォォ！！」
「うるせーよ隣ィィィィィ！落ち着いてジャンプ読めねーだろうがァァァァァァ！！」
ここで隣のクラスでサボっていた銀時が入って来た。
「何やってんだこいつら？」
「カラオケです。」
「何か流れでこうなりました。」
銀時の質問に近くにいた新八と咲夜が答えた。
「ったく・・・何やってんだか・・・」
「銀ちゃんも歌うアルか？」
マイクを持った神楽が現れた。
「歌うわけねーだろ。」
「何だ何だ騒がしい。」
ここでまた近くのダンボールからスネークが現れた。
「おわ！いつの間に！」
「ここでダンボールの中で仮眠していたのだ・・・で、今このカラオケ大会に参加しようと思っている！」
どこからか出したのか分からないがスネークはマイマイクを取りだした。
「何この人！歌う気マンマンじゃねーか！」
「曲は『蛇、無音、ダンボールにて』でお願い！」
「しかもあの歌かいィィィィィ！」
「ちょっと皆！しっかり授業やってよ！」
ここでお真面目キャラモードのヒナギクが声を上げた。

「先生方も何やってるんです！何でテストがいつの間にカラオケ大会になってるんです！真面目にやってください！」
だが当のさわ子は男鹿と言い争っていた。
「男鹿ァァァァァァ！聖○○？の曲は私が歌うのよォォォ！」
「何を言ってんだ！俺はほとんどの聖○○？の曲が歌えるんだ！俺の聖○○？メドレーの邪魔をするな！」
「聞いてない！」
ヒナギクが呆れているその一方でスネークは熱唱している。
「ゲリラの逆襲、メリルを助けろ、どこまでしつこい発狂大佐♪」
「スネーク先生も！」
頼りの綱と思いヒナギクは銀時の元を見たのだが・・・。
「ったくもー一曲だけだぞ。」
「さっすが銀さん！」
「話が分かりやすいネ！」
ルフィと神楽の根気に負け、『千の風になって』を歌いだした。
「駄目だこの学校・・・」
ヒナギクがこう呟いたその時だった。彼女はとんでもない光景を見てしまった。
「ハヤテ～暇だ～。」
「お嬢様、くすぐったいですよ♪」
「そうか・・・だったらここはどうだ♪」
「アアン、お嬢様、反撃しますよ～♪」
「ア・・・アアン！やるな～ハヤテ～！」
暇を持て余しているハヤナギがイチャつき始めたのだ。それの光景を見たヒナギクはヤンデレモードになった。
「キシャアアア

た。結局、テストはできないままで終わったのだ。

第６９話：腹から声を出すのは難しい（後書き）

おまけトーク

作者「オイ、次誰歌う！？」

銀八「俺歌う！曲は」

梓「私が歌うです！！」

ブロリー「次は俺だぁ！！」

パラガス「私も一曲歌」

ドナルド「フン！！」

パラガス「おわぁ！！」

当麻「俺は・・・俺のキャラソンで。」

一方通行「じゃー俺はＤＭＣで。」

初春「Ｃａｇａｙａｋｅ！ＧＡＩＬＳで。」

佐天「私はメタメリズムで！」

銀八「だーかーらー！！次は俺だっつってんだろうがァァァァァ！！」

一方通行「俺にも歌わせろ！！」

ブロリー「次は俺だァァァ！！」

ワーワー！！　ギャーギャー！！

作者「・・・皆もカラオケするときは順番守れよ！！」

第７０話：今も昔もタイトルに魔法〇〇ってつく奴が多い（前書き）

作者「今回は悪ふざけシーンが滅茶苦茶あります。」

銀八「覚悟があるやつは読んでくれ。」

梓「脳内ＯＰは『ＥＴＥＲＮＡＬ　ＢＬＡＺＥ』でお願いします。」

第７０話：今も昔もタイトルに魔法〇〇ってつく奴が多い

ある日、新八と咲夜は伊澄の家に遊びに来ていた。
「お！新八殿も来たのか！」
「よー新八。」
「あれ、幸村さん、正宗さん。」
「何だ、アンタらも来てたのか。」
「まーな。」
正宗が少しため息をつきながらこう言い始めた。
「実はうちの近くで迷子になっている伊澄を見かけて俺らがここまで案内したんだよ。」
「また迷子になったんかい・・・。」
咲夜が呆れたようにこう言った。
「で、その伊澄さんは？」
「あり？そういいやどこ・・・」
ここで全員が気付いた。また伊澄が迷子になったと。
「嘘だろォォォォォォ！」
「また迷子になったでござるか！」
「仕方ねェ、手分けして探すぞ！」
「何をですか？」
「だから伊澄を・・・・・・」
少しの間、沈黙が流れた。
「ってここにいるんかいィィィ

新八の頭に？マークが浮かんだ。

その頃、本屋の（ここでは言えない）コーナーでサンジが（混沌学院は全年齢対象の学園コメディです）本を読んでいた。

「グヒヒヒヒ♪今回もすげーな。」

気持ち悪い笑い声を出しながらサンジは（何度も言うけど混沌学院は全年齢対象です！）本を読んでいた。そんな彼の背後に黒めく影が彼を襲った。

「欲望丸出しにする霊？」

伊澄の家の居間にて新八がこう声を上げた。

「はい。実は私が前に封印した霊が封印を弱まる時を待ってたらしくその時をねらって脱出したのです。その霊がとても厄介で人の奥底にある欲望を丸出しにするという厄介な霊です。」

「Ｗｈｙ？何が厄介なんだ？俺らが体を乗っ取られた奴を倒せば」

「そこが問題です。皆さん、ここが一番大事なのでよく聞いてください。」

間をおいて伊澄が一言一言丁寧にこう言った。

「この霊は体を乗っ取った人の欲望の力を武器に戦います・・・つまりその人の欲望が強ければ強いほど・・・」

「強いってことですね。」

新八の問いかけに伊澄は返事をした。

「ええ。」

「じゃあオメーんとこのサンジみたいな奴の体が乗っ取られたらヤバい事になりそうだな。」

「そうでござるな。」

「そうですね、猫ヒナ編みたいな事が起こらなければいいけれど・・・」

ここで新八の携帯の着メロが流れた。

「メールだ。誰だろ・・・銀さん？」

「どうしたんや？」
「銀さんからメールが来た・・・ちょっと待ってて・・・」
銀時からのメールを見た新八はギョッとした。その内容はサンジが学院内に入って暴れているという内容だった。
「まさか・・・俺の予感が・・・」
「それより早く学院に向かいましょう！」
と伊澄は言っているが向いてる方向が玄関とまるっきり逆だったのだ。
「・・・俺が連れていく、幸村達は先に行ってくれ。」
「ああ。」
そう言って新八達は学院へ向かって行った。

「おらァァァァァァ！」
「ギャッハァァァァァァ！」
銀時の木刀とサンジの蹴りが相殺し、辺りに砂煙が舞った。
「ったく、何やってんだオメーは！」
「オ・・・オンナ・・・オンナァァァァァァァァ！」
サンジはこう叫ぶと体の周りにオーラを発生させた。
「ま・・・まさかお前も覇気使えるのか！」
「違います、どうやらサンジさんは体を乗っ取られています。」
後ろから伊澄の声がした。
「体を乗っ取られてるって・・・」
「そのままのとおりです、あのサンジさんは操られているんです！」
そう言ったのを銀時は確認すると再び木刀を構え直した。
「そうか・・・だったら俺が何とか」
「オトコハイラネェェェ

「てて・・・油断した・・・大丈夫だ、サンジは俺が助ける！」
「私達も協力します！」
校舎の方から声がした。次の瞬間、ドでかいビームがサンジを包んだ。
「その声・・・なのはさん！」
声の主はなのはだった。隣にはフェイトがバルティッシュを構えていた。
「はやてちゃん、援護はヨロシク！」
「わかった！」
屋上にははやてが宙に浮かんでいた。周りにはシグナムとヴィーダもいる。
「なのは！他の生徒の事は任せろ、避難が終わり次第そっちに向かう！」
「分かった！」
「オォォォォォォンンンンンンナァァァァァァァァァァ！！！！！！」
サンジが変な声を上げながらなのはとフェイトに迫って来た。
「うわ！気持ち悪い！」
「なのは、危ない！」
フェイトのバルティッシュがサンジが放つオーラを切断した。
「ふぅ・・・ありがとう。」
「いいわ・・・それより早くサンジの動きを止めないと。」
「二人とも！後ろ！」
はやての叫ぶような声が聞こえた。後ろを振り向くとそこには巨大なオーラが彼女らを包もうとしていた。
「「キャアアアアアアアアアア！！」」
「なのはさん！フェイトさん！」
絶体絶命、一瞬の隙でなのはとフェイトは捕まってしまった。
「二人を・・・離せェェェェェェェェェェェェェェェェ！！」
はやては黒の書からものすごい数の魔法弾を放ったがオーラの威圧によってすべて消されていった。

「ウォォォォォ！二人を離せェェェェェェ！！」
武器を構えた新八と幸村はサンジに向かって行ったが地面からのオーラの反撃により倒されていった。
「まだだァァァァァ！」
叫びながら銀時はサンジに向かって行った。途中オーラの攻撃が彼を襲ったが難なくかわして行ってついにサンジの元へ着いた。
「元に戻りやがれぇェェェェェ！！」
「ヒャッハー！」
だがサンジの反撃により銀時は再び壁に向かってブッ飛ばされた。
「く・・・くぅ・・・誰か・・・た・・・助け・・・て・・・」
なのはの苦しそうな声が聞こえる。そんな中、彼女らのデバイスが手からこぼれおちてオーラによって校舎の方へ飛ばされた。今の状況、まさに絶体絶命だった。だが。
「ん？何やってんだあいつら？」
「マタ変ナ遊ビシテンジャナイデスカ？」
理事長のお登勢と教頭のキャサリンが外へ来たのだ。で、こいつらの足元になのはとフェイトのデバイスがコロコロと転がって来た。
「何だいこれ？」
「アレデスヨ、ナノハトフェイトガ変身スル道具ミタイナノデスヨ。」
「へ～これで変身するんだ。で、今何やってんだあいつら？ヤバい状況だよね。苦しそうだし。」
「ソウデスネ。」
「これで変身できるんだろ？」
「ミタイデスネ、ヤッテミマス？」
「そうだね。」
そう言ってお登勢とキャサリンはデバイスを持って力を入れた。・・・そして誰もが想像もしなかった最悪の事態が起きてしまった。デバイスは二人に反応するかのように光を放ち・・・そしてアニメにしたら最悪な変身シーンが始まったのだ。

「オエエエエエエエエ！おい・・・まさか・・・」
「ウソでしょ・・・ウソでしょ！」
誰もが動揺した。そして見てはいけない光景が生まれた。
「魔法熟女！リリカルおとせ！」
「「「「「オエエエエエエエエ

「やり方が分からないんだよ！」
『あの・・・やり方なら我々が・・・』
レイジングハートがこう言ったが全く伝わらなかった。
「このまま殴りハメで行くぞォォォォォォ！」
「案外チョロイモンデシタネ！」
最悪なコスプレをしたお登勢がこう言った瞬間だった。
「待てぇい！真の主役は遅れてやってくーる！」
「え？」
はやては後ろを見た。そこにはいつの間にか２Ｚのカオスキング、桂小太郎が立っていた。
「い・・・いつの間に！」
「理事長、魔法を使わない魔法少女がこの世の中、どこにいるんですか！」
「言ってくれるじゃねーかァァァァァ！」
「オ前ミタイナ電波野郎ニ言ワレタクネーヨ！」
「・・・貴様らに見せてやろう！」
そう言うと桂は屋上から飛び降りた。
「あ！ちょ！何やってんねん！」
飛び落ちた桂に向かってはやてはこう叫んだが次の瞬間、桂の体の周りが白く光り始めた。
「も・・・もしかしてこいつも・・・」
冷や汗を垂らしながら銀時はこう呟いた。そう、銀時の嫌な予感は当たっていたのだ。白い光が消えた後、その中には気持ち悪い格好をした桂が立っていた。
「魔法少女！かつらヅラコ！」
「「「お前もかいィィィ

「・・・実は・・・」
幸村にこう言われた後、桂はあの時の事を思い出した。
昨日。
「さて、蕎麦でも食べに行くか。」
桂はそう言いながら近所を歩いていた。すると一人の少女に問い詰める変な白い物体がいた。
「貴様、こんな所で何をやっている。」
「何だい君は？」
「通りすがりの侍とでも答えておこう。君、この不審な奴から今のうちに逃げろ。」
「あ・・・ありがとうございます。」
そう言ってその女の子は逃げて行った。
「どうしてくれるんだ！このままじゃ・・・僕は・・・僕は・・・」
「何だ、悩みがあるのか。だったら俺が聞こう。」
桂がそう言った。そしてその白い物体は次のように喋った。
「もう誰でもいいや・・・僕と契約して魔法少女になってよ。」

「という事があった」
「何やってんだお前ェェ

た。
「・・・へ？」
「一斉射撃！」
桂の合図とともにサンジに向かって一斉射撃が行われた。
「・・・お前も魔法使って攻撃してねーじゃねーかよォォォ

を覚えた。
「・・・全力全開！」
「どーせ魔法撃てねーんだろ？そんな事やったって無駄無駄」
「スターライトブレイカー！」
次の瞬間、お登勢が持つライジングハートからスターライトブレイカーが放たれ、銀時を飲み込んだ。

第７０話：今も昔もタイトルに魔法〇〇ってつく奴が多い（後書き）

おまけトーク

銀八「・・・・・・これいくら何でもやりすぎだろ！」

作者「ちょっと前から考えてた話なんです。」

ブロリー「だからって・・・」

一方通行「吐き気がしてきた・・・」

当麻「か・・・帰っていい？」

銀八「ほら、もう被害が後書きにも回ってんじゃねーかー！！」

なのは「作者はどこ？」

銀八「・・・いつの間に。」

なのは「作者はどこなの？」

作者「・・・言うなよ、俺が隠れてるって」

梓「ここにいますよ。」

作者「あ！ちょ！おま」

なのは「頭・・・冷やそっか。」

作者「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

第７１話：子供達で出掛けるのは危険だから帰りは遅くならない様に（前書き）

作者「さて、今回の混沌学院は５Ｚの話をします。」

銀八「脳内ＯＰって・・・いるか？」

梓「さぁ？」

一方通行「それよりいつの間にかＥＤないよな。」

当麻「やめとけ、どうせあのバカに言っても『ワンピースも朝放送になってからＥＤないじゃん』って言うぜ、絶対。」

作者「・・・脳内ＯＰは『桃源郷エイリアン』でお願いします！！」

第７１話：子供達で出掛けるのは危険だから帰りは遅くならない様に

休み時間。５Ｚのエリオとキャロはこんな話をしていた。
「エリオ君・・・次の休日・・・一緒にデパート行かない？」
「い・・・いいよ！」
「じゃあ十一時に○○街の土下座銅像前に待ち合わせでいい？」
「いいよ！」
その様子を見ていたルイージとクッパはこう呟いた。
「青春だね～。」
「そうだね～。」
「俺もガキの頃はディジーと一緒にデパート行ったな～。」
「ワシもそうじゃの～。」
「何の話をしているんですの？」
そこに沙都子と梨花がやって来た。
「ああ、あいつ等の事。」
「エリオとキャロの事ですか？」
「あいつらこの歳でデートだとさ。」
「青春ですね。」
「ああ。」
「あいつと比べればいいんじゃね？」
ルイージは教室の隅にいる首領パッチの方を見た。彼はヤッ君人形を手にこんな事をしていた。
「ねぇヤッ君、次の休日どこに行きたい？デパート？偶然！パチ美も丁度デパートに行きたかったのよ～。」
「・・・あんな事して何が楽しいのやら・・・」
「本人がいいならそれでいいんじゃないですか？」
「そうだな。」
梨花にこう言われたので首領パッチの話は止めた。しばらくしてボーボボが教室に入って来て首領パッチの所へ向かった。そして。

「鼻毛が勝手にィィィィィィィ！」
わざと鼻毛真拳を使いヤッ君を木端微塵にしたのだ。
「ヤ・・・ヤッくぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅん！！」

その様子を陰で見ていた者がいた。その者はエリオとキャロの笑顔を見た後姿を消した。
「・・・スミマセン、ちょっと用を思い出したのでちょっと離脱します。」
そう言って梨花は教室を出て行った。
小学部校舎近くの庭。今ここにエリオとキャロの様子を見ていた怪しい影がここを隠れるように走っていた。
「早くリーダーにこの事を伝えなければ・・・」
「何をしているのです？」
声がしたので顔を上げるとそこには梨花が立っていた。
「あなたは・・・高校部の方ですね。」
「チッ！５Ｚにいた子か！」
その者は逃げようとしたのだが後ろから羽入が奇襲をかけて来たのだ。
「逃がさないのです！」
「しまった！」
「何やってんだ、いい年こいて？」
目の前からルイージがやって来た。
「あ・・・ああ。」
「何でうちのクラスを覗いたんだ？」
「・・・・・・」
「はぁ・・・仕方ない。理事長と校長のとこ行くか。ついて来い。」
その言葉を聞いたその人物は恐ろしさの余り全てを話した。
「じ・・・実は我々リア充抹殺隊があなたのクラスのエリオとキャロがデートするという噂を聞いたので・・・それで確かめに・・・」
「それで俺らのクラスを覗いてたのか。」

「もしあの二人がデートをすると分かったらどうするんですか？」
その後、その陰の主は黙秘を続けた。
「・・・仕方ねー。やっぱりくえす校長と最強理事長の所に連れてくか。」
「そうですね。」
そう言った後ルイージはその影の男の襟の所を掴み理事長室へ向かって行った。

その一方、混沌学院の誰も使っていない教室で何者かの声が聞こえた。
「おい、返事をしろ！スパイA！返事をしろォォォ！」
声の主はサンジだった。あの影の主を裏で操っていたのはコイツだったのだ。
「くっ・・・だがしかし・・・あの年でリア充のエリオがデートすることが分かった。これだけでもいい・・・スパイA、仇は俺らがとるからな！」
そう言ってサンジは携帯を取りだしメールを打ち始めた。メールの内容はこのような内容だった。
『作戦会議を始める全員集合。』

数分後、沙都子はエリオ、キャロ以外の５Ｚメンバーを体育館裏に集めた。
「いい？どうやらリア充抹殺隊というバカ達がエリオとキャロのデートを壊そうとしているわ。」
「それを俺達が何とかするんだろ？」
遠くの方で座っていたケンシロウがこう言った。
「ええ。でも私達だけじゃどうにもならないわ。どうやら話によるとリア充抹殺隊のリーダーはあの２Ｚのエロコックみたいですからね。」
この声を聞いて子供達は「あいつかよ。」「ってかナルトの占い

の話でリア充抹殺隊壊滅しないっけ？」「だからモテないんだよあいつ。」って声が上がった。
「皆さん静かに、だから私は強力な助っ人を使いたいと思います。」
そう言う沙都子の目はキラーンと光っていた。

放課後。
「ふ～、やっと終わった～。」
ルイージが背伸びしながら学校の外を歩いていた。
「帰ったら晩飯の支度しねーとなー。」
そんな事を呟いたその時だった。学院の方で悲鳴が聞こえたのだ。
「何だ！」
急いで声のした方向へ向かったルイージ。声がした所へ着いたがそこには何もなかった。
「・・・空耳か？」
振り迎えって帰路に戻ろうとしたその時だった。突然足場が崩れたのだ。
「オワァァァァァァァァ！」
「トラップに引っかかりましたわよ！ケンさんレイさんお願いします！」
「「わかった。」」
上の方から沙都子とケンシロウとレイの声が聞こえた。
「おい！何やってんだオメーら！何でこんな事」
「先生、スミマセン。」
ケンシロウがこう言いながらルイージの背中をついた。
「ひでぶ！」
ルイージはそう言って気絶した。

その頃、銀時は欠伸をしながら帰路についていた。
「ふぁ～ねみ～。・・・あん？」
銀時は道の上に何かあるのに気付いた。そこへ行ってみるとそれ

はジャンプだったのだ。
「おい、何でこんな所にジャンプあるんだ？しかも赤マルだし。」
赤マルジャンプを手にした瞬間上から巨大なたらいが降って来た。
「ええ！何これ！何なのこれェェェェェェェ！」
「捕まえたのです！さぁ、皆の所へ連れてくのです！」
外から羽入の声が聞こえた。
「おい！オメー５Ｚの羽入だろ！何でこんな事」
叫んだが頭上から小さいたらいが降って来た。

で、次の日の休日。○○街の土下座銅像前ここでエリオとキャロは待ち合わせしていてその後近くのデパートへ向かった。その様子をリア充抹殺隊の一人がこっそりと見ていた。
「リーダー、ターゲットエリオ、デパートに向かいました。」
『了解、準備ができ次第追撃する。お前も人目を避けてＡ班と合流しろ。』
「了か」
「行かせませんわよ。」
目の前に誰かが現れた。その瞬間目の前が暗くなった。
『おい！どうした！返事をしろ！今の音は何だ！』
下の通信機からサンジの声がした。それを確認した後、その人物は通信機を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた通信機はちょうど通りかかった猫によって持ってかれた。
『おい！何だ今のは！もしもーし！もしもぉぉぉぉぉぉし！』

デパート内。今ここのユ○○ロでエリオとキャロはここで服の買い物をしていた。そん中でもリア充抹殺隊のバカ共は変装して彼らを見張っていた。
「くっそ～仲良くユ○○ロでお買い物ってかコノヤロ～！」
小声で家康（出すの久しぶりだから言っとくけど迷い猫の方）がこう言った。

「俺が直々に天誅を下して」
「そうはさせるか。」
後ろから声がした。振り向こうとしたが首の後ろに激痛が走り、その場に倒れた。
「済まぬ・・・」
その者はそう言って去って行った。

混沌学院の寮内。サンジは困っていた。手に持っているトランシーバーからドンドン仲間の声が消えて行くのだ。
「くっ！まさか俺らの計画がばれたのか・・・」
「そうらしいな。」
近くにいた近藤がこう言った。
「もしかして５Ｚの子供達が」
「そんなわけはない、あれでもただの子供だ。こんな真似は」
「するかもしれないだろ、話に聞いたが結束力は俺ら２Ｚと同じくらいだって。」
その後、サンジは席を立って自室を出ようとした。
「こうなれば俺が行く。近藤は連絡を受けてくれ。」

しばらくしてエリオとキャロは何事もなかったかのようにデパートを出た。
「結構買ったね。」
「うん。」
てな風の会話をしていた。だが周りに黒装束の集団に囲まれた。
「だ・・・誰だ！」
「貴様らの質問には答えないでおこう・・・」
実はこの黒装束の集団の正体はリア充抹殺隊である。
「仕方ない・・・」
「戦うしかないよね。」
エリオとキャロはデバイスを構えたが前の男がエアガンを発射し

た。それは二人のデバイスに当たり弾き飛ばされた。
「俺らの狙いは・・・エリオ！貴様だけだ！」
「エリオ君・・・キャ！」
キャロの背後から集団の一人が彼女を羽交い絞めにした。
「だれか・・・誰か助けてェェェェェェェェ！！」
キャロの助けを呼ぶ声が響いた。そしてエリオがリア充抹殺隊に襲われようとしていた・・・その時だった！
「待ちなさい！」
「誰だ！」
遠くの方で声がした。集団の一人がその方を見ると五つの謎の影が立っていた。
「子供を集団で襲うなど何をしているんですの？」
「そんな事、僕達がさせないペポ！」
「貴様らをやっつけてやるピカ！」
そう言うと影は自分の正体を明かした
「トラップ大好き、エンジェルレッド！」
「光る雷鳴、エンジェルイエロー！」
「食べる事大好き、エンジェルピンク！」
「何やかんだで巻き込まれたグリーン。」
「同じくシルバー。」
「「「我ら！エンジェルレンジャー！」」」
ドォォォォォォン！
彼らは紹介をし終えた後、決めポーズを決めた。グリーンとシルバー以外は。
「ちょっとルイージ先生、銀時先生、言われた通り決めポーズをしてくださいよ！」
「ヤダよ、馬鹿馬鹿しい。」
「何でペポ！皆で考えたポーズなのに。」
「だからって俺らを巻き込むんじゃねーよ。俺は帰る。」
そう言って銀時はスーツを脱ぎ捨て帰ろうとした。同じくルイー

ジもスーツを脱ぎ捨てその場を去ろうとした。
「帰らないでくださいよ！先生達が帰ったら五人そろわないじゃないピカ！」
「別にいいだろう五人にしなくても。オメーしらねーのか？ハリケンジャーだっけ？あいつら最初三人だったぞ。」
「それは例外です！とにかく戦隊ものは五人そろわないといけませんですの！」
「別にいだろが、お前らだけでもあのリア充抹殺隊は倒せるだろうが。」
「だから五人そろわないと気分が乗りませんですの！」
「しらねーよ！とにかく俺は帰る！」
「帰らせないペポ！」
そう言った後カービィは銀時とルイージを吸いこもうとした。
「オワァァァァァァァ！！」
「わーったわーった！やってやるよ！やればいいんだろ！」
「やっぱりルイージ先生、ノリがいいです。」
渋々銀時とルイージはカービィの横に立った。
「おい、いつの間にオメーら復活したんだ？なのはによって壊滅されたんじゃねーのかよ？」
「我々リア充抹殺隊はリア充カップルがいる限り蘇る！」
「何度でも」
まだ話しているのにエンジェルレンジャーは攻撃を開始した。
「何ィィィィィ！！」
「いきなり不意打ちとは卑怯な！」
「うるせェェェェェェ！！」
「長話しているあなた方が悪いんですよ！」
「いや、長話した覚えは・・・ギャアアアアアアア！！」
不意打ちで先手を取ったエンジェルレンジャー彼らはとにかく暴れていた。
「オイ、何この後ろのマント？邪魔で攻撃しにくいんだけど。」

「ってかこの馬鹿馬鹿し衣装考えたの誰だ？」
エンジェルレンジャーの衣装は少し派手で後ろにはマントがついている。
「この衣装は１Ｚの石田さんが考えてくれました。」
「「何か色々間違っているゥゥゥゥゥ！！！」」
そう叫びながら攻撃を続けた。
「おい！リーダーに連絡を！」
「何て言えばいい！」
「ボス助けてでいいだろうが！」
「援護は来させませんわよ！」
後ろから沙都子の声がした。彼女はロケットランチャーを持っていた。
「オイィィィィィ！！何あの子？何で兵器持ってるのォォォォォォ！？」
「知るかよ！早く連絡を！」
「は・・・はい！」
「ロケットランチャー、発射！」
沙都子はそう言った後、ロケランをぶっ放した。
「ギャアアアアアアアアアアア！！」
「連絡できまし・・・ギャアアアアアアアアアアア！！」
壮大な爆発音とともに辺りは滅茶苦茶となって来ていた。

一方その頃、サンジは走って街へ向かっていた。そんな中、携帯が鳴り響いた。
「メールか・・・誰だ？」
メールを見て見ると本文にこう書かれていた。
『ボスけて』
一瞬訳が分からなかった。だが冷静に考えこの言葉の本当の意味

を探り始めた。

ボスけて
何かの暗号？
いや、何かの略か？
ボスライトケッター
何それ？
ボスキャットケイテルス
だから何それ？カタカナでカッコいい単語作りたいの俺？
ボス助けて
これかも・・・
ボス助けて・・・助けて・・・

ここまで思考が巡りついたサンジは答えにたどり着いた。
「まさか・・・誰だ、俺の仲間を傷つける奴は！ゆるさねェ！」
その後、携帯でとある場所に連絡を入れた後、街へ急いだ。

数分後、リア充抹殺隊はほぼ壊滅状態だった。彼らはエンジェルレンジャーによって倒されたのだ。
「ふぅ～後でテメーら、反省文書いとけよ。」
銀時がこう言ったが彼らは何故か笑っていた。
「何がそんなにおかしいんだよ。」
「まだ勝負は終わってない・・・」
「これからだ・・・地獄は・・・」
「これからだって・・・」
「テメーら！無事か！」
ここでリーダーのサンジが到着した。で、目の前に倒れている仲間達を見て絶句した。
「・・・・・・嘘だろ・・・皆・・・嘘だろ！」
「リ・・・リーダー・・・す・・・すみません・・・全滅しました・

・・・」
「・・・もう声を出すな・・・ここからは俺に任せろ。」
「リ・・・リーダー・・・」
そう言って一人の隊員は気絶した。
「テメーら・・・よくも俺の仲間を・・・テメーらは秘密兵器でブッ倒してやる！」
「秘密兵器だァ？」
ルイージがこう言った後サンジは上に飛び上がった。上空には巨大なロボットが浮いていた。
「な・・・何じゃありゃ！」
「リア充抹殺隊秘密兵器！『アンチリア充君』だ！これでテメーらをブッ倒す！」
アンチリア充君は変形して言って人型になった。
「オイィィィィィィ！何これ！聞いてねーよこんな展開！」
「・・・予想どおりですわね。」
「へ？」
沙都子は携帯を取り出し電話をした。
「私が電話をしている間、先生方は援護して下さい！」
「援護って・・・」
「ホアタァ！」
遠くの方でケンシロウの声が聞こえた。その方を見て見るとケンシロウがアンチリア充君を捕まえてジャイアントスイングしていたのだ。
「南斗水鳥拳に斬れぬもの無し！」
上空でレイがアンチリア充君を南斗水鳥拳で斬り刻んでいた。他にも。
「オヤシロビーム！」
「天地創世（ビギニング・オブ・コスモス）！」
という風に5Z生徒が大暴れしていたのだ。
「オイィィィィ！何これ！聞いてねーぞ！」

コクピットの中にいるサンジは慌てていた。まさかこんな目に遭うとは思っても無かった。
「オ～ホッホ！私達の力を甘く見ていたようね！」
高笑いしながら沙都子はこの様子を見ていた。そんな中、またロボットが現れたのだ。
「おい・・・あれって・・・メタルギアじゃねーか！」
そのロボットとはメタルギアだったのだ。しかもカラフルに色塗られている。
『待たせたな！で、今回の目標は何だ！』
「スネーク！オメー何してんだァァァァァァァ！」
銀時にこう言われたのでメタルギアの中にいるスネークはこう答えた。
『ダンボール百箱で手を組んだのだ！』
「どんだけダンボール好きなんだよォォォォォ！」
銀時の叫び声が響いた。その後、メタルギアはレールガン兵器をチャージし始め５Ｚの総攻撃によってボロボロになったアンチリア充君に標準を向けた。
「おい・・・まさか・・・」
『レールガン！発射！』
レールガンが発射され、アンチリア充君に命中した。
「ウオォォォォォォォ！チクショォォォォォォォォォォ！」
サンジの叫び声と共にアンチリア充君は大爆発を起こした。
「・・・今日もまた・・・一組のカップルを救ったわ・・・」
「沙都子！何してんだ！」
エリオがこう聞いてきたが銀時、ルイージを除くエンジェルレンジャーは夕日をバックにその場を去ろうとしていた。
「・・・何これ？あいつら戦隊物の見過ぎじゃね？」
「そうだな。」
彼らの背中を見ながら銀時とルイージはこう呟いた。

第７１話：子供達で出掛けるのは危険だから帰りは遅くならない様に（後書き）

おまけ劇場

～常識～

悟空「サイト、マリカー勝負すっか！？」

サイト「いいぜ、相手になってやる！」

ルイズ「ねぇ、何それ？」

悟空「何って・・・ＤＳだよ。」

サイト「あ、そーか。お前ゲームとかしらねーっけな。」

ルイズ「げーむ？何それ？ここの世界の娯楽の一つ？」

悟空「まぁそんなもんだな。」

ルイズ「サイト、ちょっと貸しなさい。」

サイト「ああ・・・俺が教えるからお前はその通りに操作しろ。」

ルイズ「わかったわよ！・・・えーっと・・・なんかボタンが多いわね～。」

サイト「ああ、で次は下の画面のマリオカートと書かれたところをタッチするかＡで決定して起動。」

ルイズ「・・・？わっ！？なんか動いた！！すごいわね！」

悟空「よし、じゃあオラと対戦すっか！」

ルイズ「私初めてだけど」

悟空「最初は手加減すっからいいよ！！」

そして数日後

ルイズ「さぁ、誰か私とマリカー勝負しない！？」

神楽「私が相手するアル！！」

ヤムチャ「俺もやるぜ！！」

サイト「・・・まさかこんな展開になるとはな・・・」

悟空「ああ・・・すぐに操作をマスターしてオラ達を倒すとは・・・」

サイト・悟空「恐るべし・・・」

おしまい

おまけトーク

銀八「オイ、ツイッターとか感想欄で知ったけどお前・・・まさか『〇S』と『〇っ〇〇〇〇太郎』入れるのか？」

作者「はい、長編の後そいつらが出てくる話を考えています。」

ブロリー「『〇S』は分かるけど『〇っ〇〇〇〇太郎』はないんじゃないかぁ？」

作者「いいじゃん、かなりカオスになるし。」

銀八「いいのかよそれで・・・」

第７２話：サザエさん方式の世界だと同じ様な季節ネタが何回もできるのがメリ

作者「今回はプールの話です。」

銀八「そういやー、最近プール行ってないな。」

作者「そうだなー。」

黒猫「今回の脳内ＯＰは『あー夏休み』・・・今は６月よ？何考えてるのかしらこの作者？」

第72話：サザエさん方式の世界だと同じ様な季節ネタが何回もできるのがメリ

真夏のクソ熱い日、今2Zの奴らはプールにいた。彼らは今から体育で水泳の授業なのだ。

「はい、じゃあ整列したな、ならとっとと準備運動して」

「先生！何でまたプール何ですか！かなり前にやりましたよねってか何でまた夏になってるんですか！」

新八が松平に向かってこう叫んだ。

「仕方ないだろ？だってこの作品はサザエさん方式で進んでくんだから。」

「いいのかそれェェェェェェ！」

最初っから新八のシャウトが響いた。

一方男鹿の横にいる古市はちょっとドキドキしていた。水着姿のかわいいクラスメイト達が拝めるからちょっと嬉しかったのだ。・・・本当にどうしようもないですね。

「オイ、何鼻の下伸ばしてんだ？気持ち悪いぞ。」

「そうか？だけど・・・やっぱり・・・プール万歳！」

そう言いながら古市は周りを見回した。邦枝やヒルダが学校指定の水着を着ているのだ。

「古市・・・お前も・・・一人前の紳士だな。」

後ろからサンジがこう言いながら肩を叩いた。

「アンタと一緒にしないでくれ。でも気持ちは分かるな～。」

「そうだろ。よく見とけよ。」

「そうだな～。」

「ちょっとあんた達！何でヒルダとかナミとかボインの奴しか見てないのよ！私達の水着姿の感想は無いの！」

そう言ったのは千世であった。その次にサンジはこう言った。

「別に胸なし連中の水着姿には興味ない。」

その直後、サンジは２Ｚの胸なし女子＋ハヤテにプールに落とされた。
「プハァ！何すんだよ！特にハヤテ！」
「お嬢様に対する暴言を言ったバカは悪・即・斬の勢いで罰を与えます！」
「どこのるろうにだよ！」
「ハヤテ・・・私の胸・・・そんなに小さいか・・・」
下をうつむいているナギにハヤテは近づいてこう言った。
「大丈夫ですよ。たとえお嬢様の胸が小さかろうと大きかろうと僕はあなただけを愛します。」
「ハヤテ・・・」
そう言って彼らは抱き合ってキスをした。
「オイ、こんな所で何やってんだよ。ラブコメじゃねーんだぞこの小説。」
呆れながら男鹿はこう言った。
「おーい、そんな事より準備運動しろよ。」
松平の声が聞こえたので彼らは準備運動を始めた。
「１，２，３，４」
「５、オラ！６、オラ！７、オラ！８、オラ！」
「せんせーい、沖田が準備運動をしながら俺を抹殺しようとしてまーす。」
手を挙げて土方がこう言った。隣にいる沖田が運動中に手に持った日本刀で土方を斬ろうとしていたのだ。
「オイオイオイ、何やってんだ沖田？プールサイドを血に染めるんじゃないよ。マヨネーズ臭くなるだろうが。」
「何でそこでマヨネーズが出てくるんですか！」
「だってお前いつもマヨネーズ食べてるからもう全身マヨネーズ男になったかと思って。」
「そんな訳あるかァァァァァァァァ！」
「シャウトはいいからさっさと準備運動しろや。」

無責任な松平はそう言って自分が立っていた場所へ戻った。
「誰だァァァァァァ！こんな奴を教師にした奴ゥゥゥゥゥ！」
土方の叫びが青空の中で響いた。
その一方でサイトは鼻の下を長くしていた。何故なら運動中のナミやさっちゃんの姿を見ていたのだ。
「ちょっとサイト、アンタどこ見てんのよ。」
後ろからルイズの声が聞こえた。
「げ！」
「あんた、何鼻の下を伸ばしてんの？」
「の・・・伸ばして・・・たかな～？」
「の・ば・し・て・た・わ・よ！大体何で胸の大きい子しか見てないのよ！」
「いや・・・ちょ・・・それは・・・」
「おしおきよ！バカ犬ー！」
ルイズはそう叫びながらサイトを蹴り倒し、そのまま上に乗って殴り始めた。
「おいルイズ。ＳＭやるんならこれ使え。」
後ろで沖田が棘の鞭とロウソクを持ってきた。
「アンタそんなもんどこから持って来たんだ！」
新八はこう叫んだがルイズは沖田からＳＭグッズを受け取りサイトに攻撃し始めた。
「ちょっと！ＳＭするなら私も混ぜなさいよ！」
「しないわよそんな事！」
変な事を言ったさっちゃんに向かってルイズはこう叫んだ。
「何？あなたは放置プレイもしたいの？サイトだけ叩いて私は放置？何て新手の」
「お前は何考えてんだァァァァァ！」
ここで銀時がさっちゃんに向かって飛び蹴りを放った。
「銀さん！どうしてここへ？」
「仕方ねーだろ。ある人が泳ぎたいっつってここに来たから・・・

俺とスネーク先生が護衛のためここに来たんだよ。」
「銀さん！来たのね、ああ、こんな水着じゃあの人の目を奪えない！だったら脱ぐしか」
「ルイズ、ＳＭ中に悪いがあの豚をこんがり焼いてくれ。」
「分かりました。」
その後、Ｍ豚をこんがり焼いた後スネークがやって来た。で、後ろにはある人が来ていた。その人物とは・・・
「ここへ来るのは二度目だな。」
どんな時でもブリーフ派、凛々しい髷をはやした・・・
（将軍かよォォォ

「期待してるで。」
新八の背中に乗っている咲夜はこう言った。
「そんじゃあ、騎馬戦始めるよォォォォォ！」
松平の声が聞こえた。そして生徒達は戦いを始めたのであった！
「よーし、今度こそ女子のポロリを拝むぞー。」
「オイ、何か変な言葉が出て来たぞ。」
「それホンマに先生の言う言葉か？」
「いいからさっさとバトルを始めろや。」
ポロっと失言をした松平に向かって新八と咲夜はこう言ったが松平は気にしなかった。

松平や銀時はポロリを期待していた。その他にもポロリを期待しているバカはいる。もうおわかりだろう。エロ、変態でお馴染みサンジである。あとは近藤、東条、家康も期待していた。
「いいか、今回は俺達がこの戦いの場を天国にするんだ！」
「ああ・・・！」
そう言ってどうしようもない男達は戦いの場へ向かって行った・・・だがその時だった！

「その勝負！待ったァァァァァァ！」

突然の事だった。上空から声が聞こえ、その後で謎の影が上空からやって来たのだ。
「だ・・・誰だ！」
声を聞いたサンジが上を向いた。影の数は四つ、その影はサンジ達の所に振って来た。
「な・・・！」
「お・・・お前達は！」
サンジと家康がうろたえたような声を上げた。彼らの正体とは・・・

「トミー！」
「イリー！」
「クラウド！」
「そして・・・我が名はＫ！」
あだ名で言っているので分からないと思うがトミーは混沌学院の写真部の顧問の富竹先生、イリーは保健室の入江先生、クラウドは体育教師の蔵人先生、そしてＫは２Ｎの前原圭一であった。
「な・・・何だオメーら！いきなり上から」
「フッフッフ・・・お前も俺と同じ類ならこの言葉は知っているな？」
「いきなり何だ！突然現れてべらべらしゃべりやがって」
「魂兄弟（ソウルブラザー）・・・知っているな？」
魂兄弟（ソウルブラザー）、この言葉を聞いたサンジは黙ってしまった。
「オイ、どうしたんだサンジ？」
近くにいたルフィが聞いてきた。それに答えるようにサンジは喋りだした。
「聞いた事がある・・・萌えに魂をこめ、結束が強い義兄弟がいるという・・・その名が・・・魂兄弟（ソウルブラザー）・・・」
「その伝説の兄弟が・・・目の前に・・・」
動揺を隠せないサンジと家康。
「で、何でオメーらがここにいるんだ？」
変な物を見るような目で銀時はこう質問をした。
「俺達は・・・この戦いに・・・武力介入を行う！」
圭一が声を高く上げた。
「あ、そう。勝手にやれ。」
「何が武力介入だよ。」
「バッカみてー。」
そんな声が上がった。だがサンジは圭一を睨めつけた。
「・・・上等だ！俺がお前らの伝説を崩して新たなる伝説を作ってやるぜ！」

サンジの叫びを聞いた後、圭一は笑いながらこう言った。
「勝てるかな？俺達の結束に！」
互いに睨め合う二人の間に稲妻が走った！真夏の中・・・一つのどうでもいい戦いが始まろうとしていたのだ。

次回！
ついに始まるサンジ対魂兄弟（ソウルブラザー）、こいつらのどうしようもない戦いがプールサイドに手始まろうとしている・・・女子のサービスシーンを拝むのはどっちだ？勝利の女神がほほ笑むのはどのどうしようもない男なのか！次回、混沌学院『人というのはどうしようもない事で無駄に熱くなる』どうぞご期待！
「最高にハイって奴だ！」

第72話：サザエさん方式の世界だと同じ様な季節ネタが何回もできるのがメリ

おまけトーク

黒猫「ホント、男ってバカよね。」

銀八「仕方ねーだろ？そーいう生き物なんだよ。」

ブロリー「じゃあ京介もバカなのか？」

黒猫「・・・・・・・・・・・」

パラガス「黙ってしまったな。」

ドナルド「はっはっは、最新刊を見ないと分からないネタだね。」

第７３話：人というのはどうしようもない事で無駄に熱くなる（前書き）

作者「突然ですがあともう少しで長編やります。」

銀八「マジでか？」

作者「もう原稿は出来上がっています。お楽しみに！！」

闇「脳内ＯＰは『夏祭り』でお願いします。また夏じゃないですが。」

第73話：人というのはどうしようもない事で無駄に熱くなる

真夏の空、混沌学院のプールにて一つのどうでもいい戦いが始まろうとしていた。
「さぁ、さっさと勝負を始めようぜ！」
「俺達の結束力、見せてやる！」
互いに睨め合ってサンジと圭一はこう言った。彼らの後ろには近藤、東条、家康、富竹、入江、蔵人がいる。
「で？結局どんな勝負するんだ？」
その様子を見ていた銀時がこう言った。質問を受けたサンジと圭一はしばらく黙った。
「もしかして何も考えてねーのか？」
「・・・はい。」
「バカじゃねーの？」
呆れながら銀時はバカ共に向かってこう言った。
「チッ、他の奴らはプールからあがっちまったし・・・」
「一体どうすれば・・・」
サンジは辺りを見回した。しばらくしてパンツ一丁の将軍を見つけた。
「オイ、勝負内容はあのおっさんのパンツを先に脱がした方が勝ちってルールにしないか？」
「何考えてんだあいつ？仮にでも将軍だぞ？」
サンジが言ったとんでもない事は銀時の耳に届いていた。
「ああ、いいぜ！」
「いや、よくねーから。何考えてんの？」
銀時のセリフを無視してサンジ達は将軍の元へ向かって行った。
「オッサン・・・悪いけど・・・ポロリの為だ！」
そう言ってサンジは将軍のブリーフに手を出そうとした。だがその手を富竹が邪魔した。

「何！」
「そうはさせないよ！」
「く・・・クソ！」
「ナイス、トミー！」
サンジが妨害されたのを見た圭一はいち早く将軍の元へ向かって行った。
「させるか！」
「よくもサンジを！」
突然目の前に東条と近藤が現れたのだ。
「くっ！お前らか！」
「お妙さんのポロリはお前にはおが目させない！」
「若は・・・私が守る！」
「何言ってんだあいつら？」
「それより・・・何かかってに優勝賞品が女子のポロリになってますけど・・・」
「見せるわけねーだろ。」
銀時、新八、咲夜はこんな会話をしていた。
「え？見せてくれないの？」
「・・・そんな・・・」
その言葉を聞いて松平とスネークはガッカリした。
男達(バカ)は熱くなっていた。女子のポロリを拝めると信じて、だが結局は見れないのだがそれは知らなかった。マジで哀れなり。
「ウォォォォォ！邪魔だァァァァァァ！」
富竹に妨害されていたサンジはついに本気の力を出して富竹をふっ飛ばした。
「ウワァァァァァァァァァ！」
「トミィィィィィィィィィィィィ！」
（K・・・ごめん・・・僕はここまでのようだ・・・僕の敗北を胸に・・・この戦いに勝ってくれ！）

そんな事を心の中で叫びながら富竹はプールの外へ吹っ飛ばされて行った。
「ウワァァァァァァ！トミィィィィィィィ！」
「今だサンジ、今のうちに将軍のパンツを！」
「分かった！」
バタフライでサンジは一気に将軍との距離を詰めようとした、しかし。
「燃えろ！俺の萌え魂ィィィィィィィ

ものすごい速さで泳ぎ始める圭一、だが目の前に東条が現れた。
「な・・・何ィ！」
「先へは行かせません！」
「こ・・・コイツ・・・まさか自分を犠牲にして・・・」

バシャアアアアアアアアアアアアアアアン！

圭一と東城は正面衝突して互いに宙に舞った。
「東条！」
サンジはただ宙に舞う東城を見ているしかなかった。だが当の東城は目でサンジにこう語りかけた。
（今のうちです、進んでください）
「・・・ああ・・・お前の頑張り・・・無駄にしないぜ！」
サンジは何とか蔵人の妨害を潜り抜け前へ進んでいった。
「圭一さん・・・スミマセン・・・」
「大丈夫だ、俺とクラウドで何とかしよう！」
前にいた圭一はそう言うとサンジに向かって泳ぎ始めた。
「クッ！挟み撃ちか！」
「ハッハッハ！さてどうするんですか！」
しばらくサンジは黙り込んだ。
「・・・その程度で俺が倒せると思っているのかァァァァァァァァ！」
声を高らかに上げてこう叫んだ。次の瞬間、サンジの周りのプールの水が突然波を作ったのだ。
「まさかこんな荒業を・・・うォォォォォォ！」
波によって蔵人はプールサイドにブッ飛ばされていった。
「クラウドォォォォォォォォォォォォ！」
（圭一さん・・・私はどうやらここまでのようです。私は信じています、私達魂兄弟（ソウルブラザー）がこの戦いに勝利すると！）
そんな事を心の中で呟いて蔵人は倒れた。
「グワァァァァァァァァ！」

「おわァァァァァァ！」
「「なッ！」」
そんな中、入江と家康の叫び声が聞こえた。どうやら彼らの戦いは引き分けに終わったみたいだ。
「・・・残ったのは俺らだけみたいだな。」
「ああ。」
短い会話を交わした後、サンジと圭一は将軍の元へ泳いで行った。
「うォォォォォ！ポロリは俺のものだァァァァァァァァ！」
「ちがァァァァァう！俺達、魂兄弟（ソウルブラザー）のものだァァァァァァァ！」
将軍の元へ着き同時に将軍の下着を手に取った。
「手を離せ！」
「お前が話せ！」
「いや、お前だ！」
「お前だから！」
そんな言い合いをしながら将軍のパンツをめぐって二人の男（バカ）は戦っていた。バカ共がパンツを取りあうせいで将軍の体は回っていた。
「さっさと離せ！」
「いいや、お前が離せ！」
「オメーがな！」
「オメーだろ！」
「・・・そろそろ時間だな。」
「「あん？」」
将軍はそう言うと体を回転させながらプールサイドに体を向けた。
「・・・必殺！将軍スピンスラッシュ！」
一瞬の出来事だった。将軍が必殺技を使った次の瞬間、サンジと圭一の体は宙に舞っていた。その上海水パンツもビリッビリに敗れ散って行ったのだ。
（まさか・・・）
（俺が・・・）
（（やられるなんて・・・））

彼らは心の中でこう思っていた。そしてサンジはプールの外の雑木林へ、圭一はプールサイドの堅い所に降って来た。
「・・・やはり、ここでも私を倒せる猛者がいなかったか・・・」
将軍はそう呟き、スピンスラッシュの状態で上空へ舞いあがり、去って行った。

「・・・何なんだ・・・今回の話？バカじゃねーの？」
「ええ・・・本当にバカバカしかったですね・・・。」
この様子を見ていた銀時と新八はこう呟いた。しばらくして授業終了のチャイムが鳴ったので馬鹿どもを除く２Ｚの面子は帰って行った。

「ち・・・畜生・・・魂兄弟（ソウルブラザー）が一丸になっても・・・倒せなかったとは・・・世の中は・・・広い・・・」
プールサイドに残された圭一は傷だらけの体を何とか起こして立ち上がっていた。
「圭一くーん、いきなり授業を抜け出したからさわ子先生が怒ってるよー。」
プール入口の方でレナの声が聞こえた。
「レ・・・レナ！」
声を聞いた圭一はビックリした。何故なら今自分は（お前は今までに食べていたパンの数を数えた事があるのか？）が丸出しだったのだ。
「何やってるの？圭一・・・」
レナがプールサイドにやって来てしまった。で、今の状態の圭一を見てこう言った。
「はぅぅ～、圭一君のおっとせいさんかぁいい～よぉ～！」
お持ち帰りモードとなってしまったんだ。
「ちょ！レナ！止めるんだ！そんな所でこんな事を！や・・・止めてくれ！無理にそんな！ああ！ああああああ！ああああああああ

あ！」

イヤアアア

第73話：人というのはどうしようもない事で無駄に熱くなる（後書き）

おまけトーク

銀八「ああ・・・今回の話は・・・」

当麻「あぁ・・・男しか分からない痛みだ。」

黒猫「何変なとこ抑えてるの？気持ち悪いわよ。」

ブロリー「女にはわからないのだ。」

第７４話：手先が器用だとマジで便利（前書き）

作者「あ～もう少しで１００話だよ・・・」

銀八「で、何かやんのか？」

作者「コラボ辺りしよっかなって考え中。後第二回人気投票もやる予定だから。」

銀八「マジで！？」

作者「はい。」

梓「次こそ・・・！」

作者「脳内ＯＰは『聖少女領域』でお願いしまーす。あと新作品のキャラも出てくるから。」

第７４話：手先が器用だとマジで便利

ここは１Ｚ教室。窓際の机で石田は一人でのんびりとしていた。
「平和だな・・・」
そう呟き水筒のお茶をすすっていた。だが。
「いーーーーーーーーやーーーーーーーーなーーーーーーーーのーーーーーーー！」
教室に女の子の大声が響いた。
「一体何だ！」
席から立って声がした方を見て見た。そこには・・・。
「くんくんはヒナのものー！」
「駄目よ！くんくんは私の僕なのよ！」
後ろの方で真紅と雛苺がぬいぐるみの奪いあいしていた。
「ったく・・・またか・・・オイジュン！何とかならないのか！」
石田は真紅達の近くにいるジュンに向かってこう言った。
「無駄だよ、僕が何度言ったってこいつら話を聞かないから。」
ため息交じりにこう言った。
「はぁ・・・上の教室とあまり変わらないじゃないか。」
そう言って石田は自分のバックから本を取り出し読み始めた。ちなみに上の教室とは２Ｚの事です。
「は～～～な～～～し～～～な～～～さ～～～い～～～！」
「い～～～や～～～な～～～の～～～！」
真紅と雛苺のくんくん争奪戦はしばらくの間続いていた。だが意外な結果で争奪戦は終了した。
バツン！
何かがはじける音が聞こえた。真紅と雛苺の手にはくんくんの耳が握られていた。そう、互いに耳を引っ張ったせいで耳が取れてしまったのだ。しばらくの間静寂が流れていたが彼女らの鳴き声が教室中に響いたのはその数秒後だった。

「ああもう！ちょっとそれ借りるぞ！」
石田はそう言うとくんくんを取り、バックから裁縫道具を取り出してすぐにくんくんの耳を直した。
「ほら、もう奪い合いするんじゃないぞ。」
「ありがとう、あなたもジュンと同じように裁縫が上手なのね。」
石田に向かってそう言って真紅は窓の方へ向かった。
「ジュン、家に帰ったら紅茶お願いね。」
真紅はこう言って帰って行った。その後を雛苺が追って行った。
「・・・あいつら何のためにここに来たんだ？」
ジュンが首をかしげてこう言った。

数日後、下駄箱にこんなポスターが貼られていた。
『混沌学院、裁縫コンテスト開催！針と糸があれば何でも作れるという生徒&先生募集中！優勝者には豪華な賞品を用意しています！』
「な・・・何だこのコンテストは・・・」
「真紅達が聞いたら真っ先に参加しろと言われそうだ。」
ポスターを見た石田とジュンがこう言った。その後、教室へ向かうと真っ先にすばるがやって来た。
「おはよう、二人とも！」
「ああ・・・おはよう・・・」
「どうしたんだ？やけに笑顔じゃん。」
何故か笑顔のスバル、続いて後ろから一護がやって来た。
「石田・・・桜田・・・実はよ・・・うちのクラスの連中が勝手にお前らを裁縫コンテストに応募しちまったんだよ。」
「「ハァ！」」
二人同時に声を出した。
「ちょっと待てよ黒崎！何で勝手に」
「俺がやったんじゃねーよ！一部のバカが勝手にお前らをあのコンテストに参加させて優勝させる気なんだよ！」
「ったく・・・何考えてんだか・・・」

石田はそう言うとバックから裁縫道具を取りだした。
「え？何をするんだ？」
「コンテストはいつだ？」
「・・・確か来週の金曜だったけど・・・」
「来週・・・針のメンテナンスには間に合う！」
「い・・・石田・・・まさかお前・・・」
石田は眼鏡を光らせてジュンに向かってこう言った。
「やるしかない、こうなったら優勝狙いだ！」
「・・・だよな・・・実は僕も・・・参加する気満々だったんだよね。」
「実は僕もそうだったんだ。」
会話を交わした後、それぞれの席について針の調整を始めた。
「もう本番モードだな・・・」
近くにいた日番谷はそう言った。
「・・・ああ。」

あっという間に翌週の金曜日、ステージの中で裁縫コンテストが始まった。
「レディースエーンドジェントルメン！今から裁縫コンテストが始まるよォォォ！」
「司会は私ジェイドと」
「毎度おなじみゼロスでお送りしまーす！」
司会役のゼロスのあいさつでコンテストが始まった。石田とジュンは別々で参加している。わけは互いの力を競うためだ。
「ルールは一時間以内に質の高い作品を作る事です、ちなみにミシンは使用不可です、もし使用した場合は即刻失格といたしますのでご注意を！」
「では、始めてください！」
ジェイドの声をきっかけとしてコンテストが始まった。
「ついに始まったな。」

「そうだな。」
一護と日番谷は戦いの様子を見ていた。一護は他の参加者を見ようと辺りを見回した。で、とんでもない光景があった。
「ではこれより、解剖を始めるネ。」
「「分かりました。」」
その光景とは手術服を着た神楽と悟空とルフィ、そして台の上で何故か爆睡している銀時の姿があった。
「おい・・・まさかあいつ・・・」
「裁縫と解剖を間違えてるゥゥゥゥゥゥゥゥ!!」
一護の叫びがちょっと響いた。だが神楽はそんなこと気にせずに銀時の解剖を始めた。
「・・・ハッ!俺こんな所で何をしてんだ?確か神楽に殴られて」
「オイ、起きたぞ!」
「もう一回眠らせろ!」
「って何じゃこりゃー!俺何でこんな所で」
「あ!暴れちゃまずいアル!」
「なっ!」
ズブッ!
「へ?」
腹の方から変な音がしたので見て見ると・・・腹にはメスが突き刺さっていた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
その後、銀時は気絶した。
「今のうちアル、カーテン閉めて解剖を進めるネ。」
神楽がそう言った直後、カーテンが閉められた。それからはカーテンに赤いシミが飛びまくっていた。
「・・・いいのかよ・・・」
「さぁ?」
一護と日番谷は冷や汗を垂らしながらこう会話していた。そんな中。

「見てください！私のサイホーン！」
ステージの方でコレットの声がした。彼女の手にはゲームボーイがあった。
「あ、カメラさん、もっと寄ってください。」
コレットにこう言われたのでカメラは彼女の持っているゲームボーイの画面に近づけていった。そこには初代ポケモンのゲーム画面が映っていた。画面はサイホーンのステータス画面だった。
「どう？すごいでしょ！レベル１００にするの大変だったんだから！」
「「それ裁縫じゃなくてサイホーン！」」
またもや勘違いをしている輩が現れた。他にも。
「あれ？あれって松平先生だよな？」
「何やってんだあの人？」
ステージの前で松平とさわ子が現れた。松平はマイクを持って喋り始めた。
「えー・・・実は・・・俺はこの女と再婚することになった。」
「「それ裁縫じゃなくて再婚！」」
またまた勘違いしているバカが現れた。しばらくして涙を流している雪路がステージ横から現れた。
「酷い！私とは遊びだったのね！」
「たりめーよ、お前と遊ぶのはもう疲れたんだよ。」
「だから・・・他の女と浮気ってわけ！」
「そうだ、じゃあな。過去の女。」
そう言って松平はさわ子と一緒にステージ横へ出て行った。しばらくしてステージからスネークが現れた。
「雪路さん・・・一体どうしたんですか！」
「うっ・・・うっ・・・私・・・捨てられたのよ・・・あの男に・・・」
「・・・来い。」
両手を広げてスネークはこう言った。

「お前の悲しみ、全て俺が受け止めてやる。」
「す・・・スネークさん！」
雪路は泣きながらスネークの胸に抱きついた。そしていつからセットしてあったのか分からないが幕が降りて来た。
「・・・何がしたかったんだあの人達？」
「さぁ？」
一護と日番谷がこんな会話をしたその直後だった。
「おい、どうだ？これで再婚コンテストで優勝できそうか？」
「そうっすかねー？」
「やっぱりどんな物語か説明が必要だったんじゃない？」
「だよねー。いきなり物語のラスト見せるってわけわかんないじゃない？」
「そうだよなー、もう少し時間かけてストーリー考えればよかった。」
幕の後ろでこんな会話が聞こえて来た。で、神楽の方で動きがあった。
「おーい、なんか血まみれのウィンナーが出てきたアル。」
「こっちは何か変な形したやつだぞ。」
「これ見て見ろよ、何か動いてるぞ！おもしれ～！」
血まみれカーテンの中からこんな声が聞こえた。
「今すぐに止めろォォォォォォォォォォォォォ！！審判、今すぐあいつらを失格にして銀時先生を助けろォォォォォォォォォ！！」
一護がゼロスに向かってこう叫んだ。しばらくして銀時の命は救われた。で、その一方では。
「コレット！最初っからミュウツー出すなよ！」
「え～？駄目なの～？」
コレットといつの間にかステージにいたロイドが初代ポケモンで戦っていた。
「お前らは何やってんだァァァァァァァ！！」
「見れば分かるだろ。」

「ポケモンバトルだよ～。」
完全に呆れた一護、その一方では。
「で、また何かの劇するか？」
「そうしましょ。」
「そうした方が優勝率上がると思うし。」
「じゃあ私が考える！」
幕の後ろからこんな声が聞こえて来た。
「オイィィィィ！あいつら今回のコンテストの趣旨完全に分かってねェェェェェェェェ！！」
一護の叫びがステージ内にこだました。

てな訳があって実際の裁縫コンテストは石田とジュンの一騎打ちになった。二人は互いに裁縫の腕を知っている、だからこそ負けられないのだ。どちらも自分がうまいと思っているから。作業をしている最中、石田はジュンの方を見た。ジュンが作っているのは物すごくかわいい小さなワンピースの服だったのだ。
（くそっ・・・まさかあんな物を作るなんて・・・真紅にでもやるつもりなのか・・・だったら僕も負けてられない！）
心の中でそう思い針を縫うスピードを上げた。で、ジュンの方も石田の裁縫の作業を見ていた。石田が作っているのは派手な衣装（マント付き）の物だった。
（な・・・何て奴だ・・・こんな所で自分の趣味を出すとは・・・僕の場合は昨日真紅に「明日のコンテストで私の服を作って頂戴。」何て言われたんだよ！しかも「もしも負けた場合はものすごい罰を与えるから。」って目を光らせて言うんだよ！異様に怖いんだよ！だから負けられないんだよ！）
そんな事を思いながら針を操っていた。そして数分後、競技は終了した。
「しゅーりょー！じゃあ参加者の・・・ってか二人に減っちゃったんだけど・・・作った作品を見せてください！」

ゼロスにこう言われたので石田とジュンは互いの作品を取りだした。
「えーっと、ジュンは何作ったの？」
「真紅に新しい服をここで作れと脅されたので真紅の新服という事にしといてください。」
「そ・・・そうですか・・・じゃあ石田は？」
「フッフッフ・・・これはな・・・」
少しの間をおいて石田は語りだした。
「僕が考えたＮＥＷヒーロー『カラクライダーΩ』の衣装だ！聞いてくれ、このマントにはあらゆる機能を付け加えた最高のマントなんだ！まず空を飛ぶ、続いてはマントを翻すと何と！相手の飛び攻撃を跳ね返されるのだ！」
声を高く上げて自分の作った設定を話す石田、これを聞いていたゼロスは半ばあきれ顔でその話を聞き流していた。
「じゃ・・・じゃあこれより投票を行います！気に行った作品に」
ドっゴォォォォォォォォォォォォン！
突然だった、いきなり爆発音がしたのだ。
「待てやコラァァァァァァ！！」
「オラ達が失格って何でだよォォォォォォ！！」
「ちゃんと訳を話せェェェェェェェェェェェェ！！」
後ろの方で神楽達が暴れ始めたのだ。今さっきの爆発はこいつらのせいだったのだ。
「おらァァァァァァ！！静かにしろやァァァァァァァァ！！物語が浮かばないだろうがァァァァァァァァァァ！！！！」
続いてバズーカ砲を持った松平が乱入してきた。
「スネーク、メタルギア呼んで来い！」
「エエエエエエ！！無茶ですよそんな」
慌てるスネークから無理矢理無線機を奪い取り、松平は外に出て行った。
「皆ァァァァァァ！！今のうちに外へ逃げろォォォォォォォォ！！」

スネークは大声でこう叫んだ。石田もジュンも作品を持って逃げて行った。
「おい・・・まさかこの次の展開は・・・」
「目に見えてるな・・・。」
一護と日番谷は走りながらこう話していた。しばらくしてステージの上からメタルギアが降って来た。
『こんなコンテスト俺がぶち壊してやらァァァァァァァァァ！！』
「「何かすごい事言ってるよこの人ォォォォォォォォォォォ！！！！！」」
その後、松平が乗るメタルギアによってコンテストは滅茶苦茶になってしまった。
「・・・そーいやー優勝賞品って何だ？」
「さぁ？」
何とか逃げのびた一護の上に小さな箱が降って来た。その箱には優勝賞品と書かれていた。
「何か降って来たけど・・・」
「どうする？」
「・・・見て見るか？」
「・・・ああ、どうせコンテストも台無しになったし。」
そう言って箱のふたを開けて中を見て見た。そこには・・・・・・魔法熟女リリカルおとせのプロマイドが数枚あった。
「・・・卍解！天鎖斬月！」
一護はプロマイドを上に放り投げ月牙天衝でプロマイドを完全に消し去った。

その夜。
「あら、ジュンにしてはいいセンスじゃない。」
真紅はジュンが作った服を見て上機嫌だった。

次回！

ある日、ミクが持つネギがいきなり枯れた、ミクのネギ以外にも他の野菜が枯れ始めている。だがそれはその後に起こる激しい戦いの序章に過ぎなかった！次回混沌学院『好き嫌いは駄目』ネギ編開始！

「僕は悪にでもなってやる。」

「悪ノ召使関係ないですよね。」

第７４話：手先が器用だとマジで便利（後書き）

おまけトーク

ブロリー「人気投票・・・」

パラガス「フハハ～今度こそは私が」

ベジータ「いや、今度こそ俺がＮｏ１だ！！」

ブロリー「黙れ脇役！！」

ベジータ「フォッ！！」

ヒュ～～～

ドゴォォォン！！

銀八「皆、俺に票を分けてくれェェェェェェェェ！！」

作者「黙れテメーら！！まだやらないって！１００話になったらやるから！その時にはまた詳しいルールも入れますのでよろしく！！」

第７５話：（ネギ編）好き嫌いは駄目（前書き）

作者「さて！今回から長編に入りまーす！！」

銀八「テンションたけーな・・・」

闇「ネギ編の脳内ＯＰは『碧羅の天へ誘えど』・・・理由は・・・後に分かります。」

第７５話：（ネギ編）好き嫌いは駄目

ある朝、ミクは何かを感じ布団から飛び起きた。急いで手元にあるネギを見た。ネギはすこし枯れていた。
「まさか・・・」
続いてミクは部屋の窓を覗いた。外の天気は曇り、だが異様に雲の様子が違っていたのだ。
「ミク、起きたの？」
部屋の外から巡音ルカの声が聞こえた。
「ルカ姉さん・・・実はネギが」
「知ってる。冷蔵庫の野菜も全部枯れてたのよ。それでもしかしたらって思って。」
話を聞いた後、こう呟いた。
「復活したのね・・・あいつが・・・」

職員寮、今ここで銀時は朝のニュースを見ていた。
『今朝のニュースは突然起こった野菜の異常です。今日未明から突然全種の野菜が枯れるという事態が発生しました、理由はまだ分かっていません。警察も一種の愉快犯の可能性とみて調査していますが今のところ何も分かっていません。』
こんなニュースが流れていた。
「誰だよこんなバカなことするの？子供か？」
「あの・・・子供は確かに野菜の好き嫌いが多いですけどこんな事は・・・」
隣にいたネギがこう言った。
「だから今日の朝飯野菜ねーのかよ。」
今日の朝の献立は野菜無しカレーと野菜無し野菜炒めと普通のご飯だったのだ。
「ったく、野菜無し野菜炒めとかふざけてんのか？ただの炒め物だ

ろうが。」
「そうですね。」
そう言いながら炒め物を食べていた。

今日の野菜騒動は２Ｚにも波紋が広がっていた。
「チクショー！誰アルかー！野菜を台無しにした奴はァァァァァァァァ！」
「オラ今日野菜無し野菜炒めを食べたんだぞォォォォォォォ！」
教室の中で神楽と悟空が暴れていた。その一方では。
「今日はマリアが大変だったな。」
「そうでしたね、野菜が全部枯れていたから料理が作れないって言ってましたね。」
ハヤテとナギがどこからか持って来たのかは知らないがベッドの上でこんな話をしていた。
「アンタら何持って来てんだ！」
「そして何してんねん！」
その様子を見ていた新八と咲夜は同時に叫んだ。
「何って・・・アレですよアレ。」
「男と女、そしてベッドとなればやる事は」
「だからってこんな所でやるなァァァァァ！」
新八はそう叫びながらハヤナギが寝ているベッドを窓に向けてブン投げた。
「ふ～今日は朝からついてないぜ・・・マヨ用の野菜が全部枯れるなんざ思ってもなかったぜ。」
土方がマヨネーズをすすりながら投稿してきた。で、その後ろには沖田が襲いかかろうとしていた。
「死ねェェェェェ！土方ァァァァァァァァ！」
「そう何度も不意打ちを食らうかァァァァァァァ！」
後ろを振り向きながらポケットに隠し持っていたマヨネーズを沖田に向かって発射させた。

「ふぅ・・・野菜がこんなになっちゃあベジタブルケーキも作れないわね・・・」
「にゃあ・・・」
「そうだな、果物系は大丈夫みたいだからフルーツケーキをメインにするか。」
巧達がこんな会話をしていた。続いてやけに荒れ気味の大河が教室に入って来た。
「う～～～野菜～～～、野菜を食わせろ～～～。」
「おい大河！少しは落ち着け！」
荒れている大河を落ち着かせようと竜児が何とかしているがほぼ無駄に近かった。
「何か大変だな。」
「そうですね。」
新八と咲夜がこんな会話をしているその時だった。
「カカロットォォォォォォォ！」
いきなり後ろの壁からブロリーがやって来たのだ。
「オワァァァァ！どうしたんですかァァァァァァ！」
「ビタミンが足りぬのだァァァァァァ！」
「ブロリー、いくら野菜が足りないからって暴れんじゃねーよ。それを止めるオラの身にもなってくれよ。」
「そうだなぁ、じゃあ俺は教室に戻る。」
何とか気を沈めたブロリーは自分が壊した壁から2N教室へ戻って行った。
「ったく・・・本当に困りましたね。」
「ああ。」
しばらくして銀時が教室に入って来た。
「はーいテメーら、席つけー。朝のホームルーム始めんぞー。」
そう言いながら黒板の前に立った。
「でー、いねーのは・・・ミクだけか？」
「先生、ミク姉はちょっと用があってしばらく学校休みまーす。」

リンが席を立ってこう言った。
「用？何かめんどくせー用があるのか？それともまた曲作ってんのか？」
「いえ・・・別の用です。」
「わかった。じゃあプリントとかオメーら双子がミクに渡しとけよー。」
銀時はこう言っていた。新八も「へー、そうなんだ。」と思っていた。だがこれは後に大きな戦いの序章に過ぎなかったのだ。

その日の放課後。
「なぁ、ミクの所に寄ってくか？」
新八は神楽にこんな事を言われたのだ。
「様子を見に行くの？」
「そうアル！少し気になるアル！」
「そうだぜ、俺も気になるよ！」
神楽の隣にいたルフィがこう声を上げた。
「う～ん・・・どうしよっかな・・・」
「うちは行くで、何か気になるし。」
「僕もそうですが・・・まぁ僕も行くよ。」
「決定アル！他にも西沢やシャナ達も来るみたいアルから！」
そう言って神楽達は教室を出て行った。
という訳でミクの家の前、今ここに新八、昨夜、神楽、ルフィ、悟空、西沢、シャナが来ていた。
「あれ？悠二君は？」
「悠二は何か買ってくるみたい。先に行ってろって言われたの。」
「それよりここがミクちゃんの家なのね・・・」
彼らの目の前の家は何か大きいのだ、ナギや咲夜の家にはかなわないが一般家庭より大きいのだ。
「誰、あなた方？」
横の方で女性の声が聞こえた。新八がその方を見ると桃色の髪の

女性が立っていた。
「あ、あの、僕はこの家に住んでるミクさんのクラスメイトで・・・」
「今日休んだから様子を見に来たアル！」
新八と神楽が事情を説明した。
「そう、あなた方がミクのクラスメイトなのね。」
「え？まぁそうですけど。」
「まぁ上がってって。少し話したい事もあるから。」
そう言ってその女性は新八達を家に入れた。

「あ、皆！」
「よっ、レン！」
玄関前でレンと会った。その後はレンも加わってミクがいる部屋に向かって行った。
「そう言えば自己紹介がまだね、私は巡音ルカ、ミクのお姉さんみたいなものね。」
「ん？ミクにお姉さんは」
「私とミクは従兄関係みたいなものよ。」
その後は自己紹介をかわしながらミクの部屋へ向かって行った。
「ここよ、ここにミクがいるわ。」
「そうですか。」
「案内ありがとな！」
そう言って部屋の扉を開いた。そこには巫女服のミクが何かの儀式を行っていた。
「な・・・何これ」
「静かにして。」
新八の背後からルカが口を押さえた。
「今ミクは重大な事をしているのよ。」
「重大な事？」
咲夜が疑問そうにこう言った。

「そう、あなた達、今朝の野菜の騒動は知ってるよね？」
「ええ・・・まさかそれに関係が・・・」
新八の質問にルカはこう答えた。
「そうよ。この騒動の原因は・・・私達の祖先が封印した化け物のせいだわ。」
そう言ってルカは新八達を別の部屋に移動させて昔の話を語り始めた。

昔々、ある都に野菜類を腐らせてしまう化け物が存在していた。
この都は野菜を主に食べていたため人々は飢餓で死に絶えていた。
しかしある旅人が現れ化け物を倒し、決して壊れる事のない壺に封印した。
旅人はある武器で化け物を倒したのだ。
それは剣でもなく槍でもなく火縄銃でもない。
化け物を倒した武器・・・それは一本のネギだった。

「そのネギが今のミクが持っているネギなの。」
「そ・・・そんなにすごい武器だったんですか！」
「ええ。でも今はこの野菜騒動を受けて・・・枯れていたのよ。」
「そうか。で、今ミクがやってる儀式は何だ？」
悟空がルカにこう聞いた。
「今ミクがやってる儀式はあのネギを復活させる儀式よ。」
「それだけで・・・」
「そうしないとあの化け物を倒せないのよ。」
ルカはこう言った。新八は今さっきルカが言ったセリフを頭の中で再生していた。そしてある結論にたどり着いた。
「も・・・もしかして・・・化け物の封印が・・・解けた？」
おそるおそる新八はルカに質問をした。しばらく間を開けてルカはこう言った。
「新八君の言う通りよ、あの化け物が・・・蘇ったのよ。」

次回！
ミクの祖先が封印した化け物が蘇った！この事実を知った新八達はその化け物の情報を探しに出かける。さらに５Ｚの首領パッチもこの事件を受けてあるダメージを受けていた。次回、混沌学院『探し物は意外と近くにある』どうぞご期待！
「俺の出番いつ！」
銀さん、アンタの活躍はもうチョイ後。

第７５話：（ネギ編）好き嫌いは駄目（後書き）

おまけトーク

銀八「おい作者、しっかりと話書いてるか？」

作者「まぁね、今のところ８３話の話考えてる。」

梓「よくよく考えたら結構続きましたね。」

ブロリー「限界までやるつもりかぁ？」

作者「もち！！終わらせる気はないから！！」

銀八「まぁがんばれや。」

第７６話：（ネギ編）探し物は意外と近くにある（前書き）

本編に入る前に

感想欄でちょっといろいろありました。だけど俺、銀凪はいつも通り作品を書いていきます。というわけでこれからも応援よろしく！！

第７６話：（ネギ編）探し物は意外と近くにある

ルカから話を聞いた新八達は外に出て化け物を探していた。新八達は一旦別々に分かれて化け物を探し始めた。
「・・・そう言えばどんな姿の化け物か聞いてくれれば良かった！」
新八は走っている最中にこう思いミクの家へ戻ろうとした。
「おーい、何してんだオメー？」
「え？」
後ろから声が聞こえたので振り返ってみるとそこには銀時がたっていた。
「先生！」
「どうした新八、ってか何急いでんだお前？」
何も知らない銀時は新八に質問をしてきた。返事を返すのがめんどくさいので新八はミクの家に行くように伝えた。
「それより・・・どんな姿の化け物」
「ミツケタァァァァァァァ！！」
上から声が聞こえた。しばらくして上から妖刀紅桜が雨のように降って来た。
「ギャアアアアアアアアア！何でェェェェェェェ！？」
「チッ、スベテヨケヤガッタカ・・・ってあら、ナギかと思ったら新八君じゃない。」
そう声を出したのはヒナギクだった。どうやらナギと新八を間違えたのだ。
「何でだァァァァァァ！何で僕とナギちゃんを間違えるんだァァァァァァ！！！」
「ごめんごめん、ちょっと最近周りの人がナギに見えてきて・・・」
「アンタ病院行けェェェェェェェェェ！！」
ヒナギクに向かって新八はこう言った。その後化け物を探しに出かけた。

「あれ？そう言えば新八君は何を探してるの？」
「え、ああ。実は・・・」
その後、銀時と同じようにヒナギクに事の説明を始めた。
「そう・・・そいつのせいで野菜達があんな目に・・・」
「はい、今は僕とシャナちゃん、悟空さん、ルフィさんが別々に分かれて探しています。」
「分かったわ。私も協力する。何かあったら連絡するね。」
そう言ってヒナギクも化け物探しにその場を離れて行った。新八も先を急いで走り出した。

一方ルフィは。
「ば～けもの～！！ど～こだ～！！ぶっ飛ばしてやる～！！！」
奪取しながら化け物を探していた。そこに。
「あれ？何やってんだルフィ？」
後ろから声がした。後ろを振り向くと男鹿と古市がいた。
「よーオメーら！」
「何走ってんだ？」
「化け物探してんだ！」
男鹿と古市の頭に？マークが浮かんだ。
「詳しい事情はミクんち言って聞いてくれ！」
「あ・・・ああ・・・」
「ってかミクの家どこだ？俺行ったことねーよ。」
「しゃーねーな、俺が教える！」
そう言ってルフィは男鹿と古市を連れてミクの家に向かった。

その頃、シャナはメロンパンを片手に電柱の上から化け物の姿を探していた。
「ん～、化け物って言ったからどんだけ大きいと思ったけど・・・なかなか見当たらないわね。」
そう言って電柱の上から降りた。そこに。

「おわ！何だいきなり！？」
誰かの驚く声が聞こえた。
「ん？何だ、ロイドじゃない。」
地面には驚いて座っているロイドの姿があった。
「何だじゃねーよ、いきなり出てきて驚いたじゃねーか。」
「そんなの知らないわよ。」
「ってかミクの家に行ったんじゃなかったのか？何でこんな所に。」
「実は――――」
そしてシャナもまたロイドに訳を話した。
「何かえらい事になってるな。」
「そうよ、あなたも探してくれる？」
「分かった。コレット達も呼んで協力する！」
そう言ってロイドは携帯で連絡をした後、シャナとまたミクの家で会おうと言って化け物を探しに行った。

「ＩＹＡＡＡ

「ど・・・どうすればいいんだよォォォォォォォォ！！」
「しらねーよ。」
ルイージは首領パッチに向かってこう言った。そして窓を覗くとある光景が目に映った。
「あぁぁ～誰だ～！野菜をこんな目にあわせた奴は！！！」
それはある体育教師がグラウンドを整理しながらこんな愚痴を喋っていたのだ。
「はぁ・・・そーいやー、食いしん坊のあいつにとってもこの問題はかなりヤベーか。」
その様子を見ながらルイージはこう呟いた。

一方悠二は買い物袋を手に歩いていた。袋の中にはデザートとかが入っていた。
「ふぅ、お見舞いの品はこれでいいかな？」
そんな事を呟いていた。その時だった。黒い何かが彼の目の前に現れたのだ。
「な・・・何だ！」
「・・・ケケケケケ・・・」
黒い何かはそのまま悠二に襲いかかった。彼は今武器を持っていない、つまり大ピンチだった。
「ウワァァァァァァァァ！！」
「ハァァァァァァァァ！」
突然上から声が聞こえた。その声の主は黒い何かを一閃した。
「大丈夫でござるか！」
「あなたは・・・幸村さん！」
幸村は一旦後ろへ下がり、悠二に話しかけた。
「悠二殿！お主は早くミク殿の家に向かってくだされ！」
「え？何でそれを――――」
「あなたは知らないんですね・・・あの化け物の事を。」
幸村の後ろから声がした。声の主は伊澄だった。

「化け物って・・・」
「とにかくここは幸村さんに任せて私をミクさんの家に連れてって下さい。」
「あ・・・ああ。でも」
「拙者の事はいい、無事に戻ってきます！」
「分かりました。・・・怪我しないでください。」
「おう！」
そして悠二は伊澄を連れミクの家に向かい、幸村は目の前の化け物と戦い始めた。

「あれ？悠二！」
シャナは化け物を探している途中で悠二と伊澄にあった。
「何やってたの？で、何で伊澄と一緒に」
「シャナ！今はそれどころじゃないんだ！」
「それどころじゃないって」
「変な化け物が現れたんだよ！」
それを聞いてシャナは顔色を変えた。
「今どこにいるの！」
「今は幸村さんが戦ってる！」
「２Ｂの・・・」
「うん、それより何かどうなのか教えて！」
「・・・幸村が相手なら大丈夫ね。一旦ミクの家に向かうわよ！」
シャナはそう言うと悠二と伊澄をミクの家に連れて行った。

同時刻、新八達に言われ銀時達がルカの話を聞いていた。
「マジかよ・・・そんなスゲーネギだったのかよ・・・」
銀時は驚きのあまりこう言った。男鹿も古市もヒナギクもロイド達も驚いて絶句していた。
「そうよ、天パの人。」
「天パの人って言うの止めてくれない？」

「・・・先生が言っていた通りあの子の持っているネギはすごい力を持っているの。だから・・・もし化け物と遭遇したら・・・戦っちゃだめ。」
「何でだ？」
近くにいた男鹿がこう言った。ルカは少しの間を取りこう言った。
「あいつは・・・あの子が持っているネギしか倒せないの。」
「という事はミクのネギが完全復活しないと・・・」
「無理なの。」
話が終わった後、銀時はすぐに立ち上がり後ろの部屋へ向かって行った。
「ミクはこっちか？」
「ええ・・・どうしたんですか？」
「あいつ・・・結構無理してるだろ。」
「え・・・ええ。」
ルカは知っている。ミクは今日から何も食わずでネギの復活の儀式をやっている。
「だからよー、先公としてあいつを助けに行ってくるわ。」
そう言って部屋を出て行った。しばらくしてロイド達もミクの元へ向かって行った。しばらくしてルカはこう呟いた。
「あの子・・・本当にいいクラスメイトと先生を持ったわね・・・」

次回！
ついに訪れる戦いの時、銀時ら2Zの面々が化け物に挑む！そして心強い援軍達も彼らを助けるためにやって来た！次回、混沌学院『まさかのあいつが援軍が来ると物語はヒートアップする』どうぞご期待！
「安西先生・・・バスケが・・・バスケがしたいです・・・」
「あれ？スラムダンク出てきませんよね。」
中の人ネタ。
「まさかルイージ先生が言ってたのって・・・」

第７６話：（ネギ編）探し物は意外と近くにある（後書き）

おまけトーク

銀凪「突然ですが新作品が次回登場します。」

当麻「誰だよ？」

銀凪「あの食いしん坊と蒼の物語に出てくる熱血忍者です。」

銀八「・・・本当に何でもありだな。」

第77話：（ネギ編）まさかのあいつが援軍が来ると物語はヒートアップする

作者「さぁ、今回からバトル展開になります！！」

銀八「俺らの活躍を見て――――」

インデックス「いや、あなたは出てないから。」

第77話：（ネギ編）まさかのあいつが援軍が来ると物語はヒートアップする

「ハァァァァァァァ！」
「ケーケッケー！」
幸村の攻撃と化け物の攻撃が互いにぶつかり合う、その衝撃で両者は後ろに後退りした。
「ハァ・・・ハァ・・・くっ！なかなかやるな！」
「キシャアアアアア！」
目の前に化け物は再び幸村に襲いかかった。彼の脳裏には少し前に伊澄が放った言葉が脳内で再生されていた。
「いいですか？あの化け物はあなたの武器では倒せません。」
伊澄はこの騒動をあの化け物のせいと知っていた。彼女も幽霊やその辺に関するエキスパートだ、この事はBクラス全員が知っている。ではなぜ幸村は勝てない相手と戦っているのか？それは化け物の足止めを彼が引き受けたのだ。
「ウォォォォォォ！この熱き槍、受けてみろォォォォォォ！」
雄叫びの後、幸村は両手に持った槍を化け物に向かって突き始めた。素早い突きは何度も何度も化け物に命中している。だがダメージを与えている気配はない。
「これでも駄目か・・・」
「キシャシャーーーー！」
化け物が攻撃の隙を見て幸村を攻撃しようとした。だがその時だった。
ズシャァァァァ！
斬撃の音が響いた。しばらくして近くの方で化け物の腕が落下した。化け物の腕は何者かによって切断されたのだ。
「何か面白そうなパーリーやってんじゃねーか・・・俺も混ぜろよ。

」
声の主は正宗だった。
「正宗殿！」
「丁度近くを通りかかったんだ。で、お前がその化け物相手に戦ってる所見たんだ。」
「ヒ・・・ヒヒヒ・・・シャアアアアアアアアア！」
突然化け物が雄叫びをあげた。それに合わせるように切断された腕部分が再生されたのだ。
「何だ・・・コイツ・・・」
「再生するとは！」
二人は動揺した、だがすぐに武器を構え化け物に向かって行った。

一方新八達は一旦ミクの家に戻る事にした。理由は伊澄からこんなメールが来たのだ。
『皆さん、幸村さんが化け物と戦っています。ミクさんの家に戻って合流した後その場にいる全員で化け物の所に向かって下さい。』
という文章だった。しばらく走っていると銀時達と会った。彼らは皆戦闘モードだったのだ。
「先生・・・それに皆！」
「新八、わけはシャナから聞いたぜ。」
「俺はルフィから。」
「そうなんだ・・・それよりまさかこれから・・・」
「たりめーよ、あの化け物を退治しに出かけるんだよ。」
「そうですが・・・ミクさんは」
新八がこう言いかけた瞬間だった。ミクの家の方から強い光が放たれたのだ。
「オワァァァァァァァ！何だ何だ！」
「しらねーよ！ってか咲夜はどうした？」
「え？ああ・・・そう言えばミクさんの所へ・・・」
ここで新八は気付いた。あの光の所に咲夜が・・・そして新八は

急いで光が発する所へ向かった。
「オイ、新八！新八ィィィィィィィィ！」
銀時の叫びを無視して新八は咲夜の所へ向かった。

で、咲夜はどうなっているかというと・・・
「どどどどど・・・どうすればいいんや！いきなり光が・・・あわわわ・・・」
突然の出来事なので慌てていた。
「どうしたの！」
後ろの方でルカが走って来た。
「な・・・何かいきなり光って・・・それで・・・」
「まさか！」
ルカはミクがいる扉を開いた。扉の先の光景はミクが持つネギからとても眩い光が発してられた。ルカがミクに近づこうとしたが光の衝撃で跳ね飛ばされてしまう。
「咲夜さん！ルカさん！何か光ってますが大丈夫ですか！」
ここで新八の声が聞こえた。彼はすぐに光が発している所へ向かった。
「なっ・・・何ですかこれェェェェェェェェ！」
「どうやら・・・あの子のネギが暴走してるらしいわ。」
「暴走って」
「どうやらあの子、ネギの真の力を出したらしいのよ。それでうまく扱えないからネギが暴走を・・・」
焦りながらルカはこう言った。話を聞いてすぐに新八はミクの元へ向かった。
「ちょ！新八！お前まさか」
「そうです、助けに行くんです！」
そう言いながら前に進む新八、だが光の衝撃で弾き飛ばされた。
しかし彼は再びたち狩り前に進み始めた。
「一人で無茶するな、私も行く！」

咲夜もそう言って新八と共にミクの元へ向かった。衝撃で何度もブッ飛ばされてもまた立ち上がりミクの元へ進んでいく。そして何回か同じような事をやっていたらついにミクの所までたどり着いた。
「ミクさん！」
「何一人で無茶やってるねん！」
「くぅ・・・新八君・・・咲夜ちゃん？」
二人はミクの隣に行き、ネギを持った。
「え！二人とも・・・そんなことしちゃ体が」
「何を言ってるんですか！」
「お前一人苦しい事させるわけにはいかん！」
ネギから激しい音が聞こえ、皮膚に電撃が走るような感覚がした。だがそれでも新八と咲夜はネギを持ち続けた。
「ふ・・・二人とも・・・」
ミクは瞳に涙を浮かべていた。

一方その頃、幸村と正宗は片膝をついていた。何度斬っても化け物は異様な早さで傷を再生してしまうのだ。
「チッ・・・どうなってんだあいつの体・・・」
「グゥゥ・・・」
二人が片膝をついている中、化け物は爪を立てて走って来たがその時だった！
「ホアチャアアアアア！」
何者かが化け物の爪を叩き折った。そして。
「波ァァァァァァァァァ！」
上空から光線が化け物目がけて降って来た。光線にのまれ、化け物は少しバランスを崩した。続いて。
「ハァァァァァァァ！」
ズバァァァ！
斬撃音が響いた。化け物の横腹部分が斬られていた。化け物は後ろへ下がり距離を取ろうと思ったのだが。

ズブッ！
腹に何かが貫通した。それは巨大な刀だった。
「ォォォォォォォォォォォォォォォォ！」
上空からまた声が聞こえた。しばらくして巨大な何かが化け物の脳天に命中した。
「ゴムゴムの斧！」
「ぎ・・・銀時先生！」
「それにテメーらも！」
援軍の主は銀時達だった。銀時達は今さっきの襲撃で倒れていた化け物が再び立ち上がるのを確認した後、また武器や戦闘隊形を整えた。
「いいか、ミクの力が復活するまで俺達で何とかするぞ！」
「「「「おう！」」」」
声を出した後、化け物が銀時目がけて突進してきた。
「先生、避けて！」
後ろから声がした。後ろではエミルが武器を構えて力を溜めていた。
「くらえ！アイン・ソフ・アウル！」
エミルが持つ剣から巨大な衝撃波が放たれた。衝撃波は化け物を飲み込み、爆発を起こした。
「キャ～～～！エミルかっこい～～～！」
エミルの後ろでマルタがこんな声を上げた。だがその攻撃でも化け物は無傷だった。
「くっ！やっぱり強いな・・・こいつ！」
「だったら俺様に任せな！」
ゼロスが飛びだし化け物を斬りつけた。何回か切りつけたがすぐに化け物はその傷を再生してしまう。それを確認したゼロスは一旦後ろへ下がった。
「何かややこしいな、いくら攻撃してもすぐ回復だ。」
「だったら完全に体を粉々にしてみたらどうだ？」

「オオ！ロイドにしてはいい案じゃねーか。」
「早速それをやろうぜ！」
そう言ってルフィが化け物に向かって攻撃を仕掛けた。
「ウオォォォォォォ！ゴムゴムの～～～ガトリング～～～～～～！」
ルフィの両手から無数のパンチが化け物を襲う、続いてロイドが上空から奇襲を始めた。
「俺も行くぜ！」
ロイドは両手の剣を一つになるように重ねた。重なった剣は光を放ち、一本の剣を生み出した。
「行くぞ、エターナルソード！」
エターナルソードを作り出し、ロイドは化け物を斬り始めた。後ろではコレットが術の暗唱をしていた。
「援護するよ！ホーリーソング！」
ロイドとルフィの下から魔法陣が生まれ、二人はパワーアップした。
「ありがとう、コレット！」
「一気に行くぜ！」
そこから彼らは一気に化け物に攻撃を仕掛けた。
「二人とも、大丈夫？」
マルタは幸村と正宗の所へ向かい、回復術を使用した。
「悪いな・・・」
「いいよ別に！」
「本当にありがとうでござる！」
「オイ、まだ戦えるか？」
近くにいた銀時が二人に聞いてきた。すぐに幸村と正宗は武器を持って立ち上がった。
「さーて、遅れた分を取り返すぞ！」
「合点承知！」
武器を構え、二人は走って行った。だがその直後だった。
「ウギャアアアアアアアアアアアアアアアア！」

突然化け物は雄叫びをあげた。そして化け物の体が巨大化し始めたのだ。
「お・・・オイオイオイオイ、これってありかよ！」
銀時が声を上げた。化け物は銀時を見つけた後巨大な拳で銀時を殴ろうとした。
「ま・・・マジかよォォォォォォォ！！」

次回！
絶体絶命に陥った銀時、だが駆けつけた援軍は２Ｚだけではなかった！そして、あの男の拳がうなりにうなる！次回、混沌学院『どんな時でも俺はサプライズを忘れない』どうぞご期待！
という訳で新しい作品のキャラがでま～す。お楽しみに！

第77話：（ネギ編）まさかのあいつが援軍が来ると物語はヒートアップする

おまけトーク

銀凪「はい、というわけで次回からあいつらが出てきます。」

銀八「オイ、だったら早く出せよ！」

銀凪「はいはい、近いうちにまた更新します！！」

第78話：（ネギ編）どんな時でも俺はサプライズを忘れない（前書き）

作者「さて、今回から新作品が登場します！！」

銀八「ってか感想欄で度々出てきたよな。」

闇「そうですよね。」

インデックス「何で今さら。」

当麻「さぁ？」

第78話：（ネギ編）どんな時でも俺はサプライズを忘れない

銀時達が激しいバトルを繰り広げている中、新八達はミクの家で倒れていた。咲夜とミクが持つネギを支えていたら膨大な光が彼らを襲い、その間で気を失ったのだ。新八が立ち上がって辺りを見回してみた。いつの間にか光は止んでいた。隣には咲夜とミクが倒れていた。

「な・・・何があったんだ・・・」

新八が小さく呟いた。

「う・・・ん・・・」

「うう～ん・・・何やったんだ今の？」

しばらくして咲夜とミクが起きた。

「あ、二人とも。」

「新八・・・何が起こったんや？」

「それが僕にも・・・」

「やった！」

新八と咲夜が話している最中ミクが歓喜の声を上げた。何事かと思い新八と咲夜はミクの方を見て驚いた。何故かというとミクが持つネギが光り輝いていたのだ。

「これで・・・あの化け物を倒せるよ！」

一方銀時はどうなったかというと。

「銀時先生、遅れながら援軍に来たぜ！」

「あ・・・アンタは・・・」

もう一つの援軍、それはルイージ率いる5Z軍団だった。

「アンタらも来たのかよ。」

「まーな、他にも援軍はいるぜ。」

「誰だよ？」

「俺達だ。」

後ろから声がした。声の主は土方であり、後ろには残りの２Ｚメンバーであった。
「先生、こんな祭りをやるなら俺達も誘ってくださいよ。」
「わりーな。まさかこんな事になる何と思ってもなかったからよ。」
軽く謝った後、銀時は再び体制を整えた。
「よし、一気に行くぜ！」
大声を上げて意気込んだその直後だった。
「あいつか？野菜を台無しにさせたのは？」
誰かの声がした。
「やっぱり来たか。・・・トリコ先生。」
ルイージがこう言った。しばらくしてルイージの後ろからトリコが現れた。
「ふぅ、アンタが来るってまぁ確信はしてたけど・・・すぐに駆けつけるとはね～。」
「当たり前だろ？こいつを倒さないと野菜が食えないんだからよ。」
トリコはそう言って、化け物に向かってジャンプをした。
「喰らえェェェェェ！１３連釘パンチ！」
トリコが放った拳が化け物の胴体に命中した。攻撃をした後、トリコは地上に着地した、それと同時に化け物の体に１３回の衝撃が襲った。
「チッ、これでも倒れねーのかよ！」
「下がっていてください！」
後ろから御坂の声がした。彼女はポケットからゲーセンのコインを取りだし、指に乗せた。
「いっけェェェェェェェェ！」
御坂は指のコインに電撃を加えた。そしてそのコインを化け物に向かって発射した。放たれたコインは超電磁砲になって化け物の体を貫いた。
「おお！すっげー！」
御坂の超電磁砲を間近で見たトリコは少しはしゃいでいたがすぐ

に真面目モードに戻った。化け物の体はすぐに再生を始めていたのだ。だがその足元では。
「三刀流奥義！三千世界！」
「ムートンショット！」
ゾロとサンジが暴れていた。その近くでは土方達が刀を持って化け物の足を斬っていた。
「くっ！なかなか倒れねーなこいつ！」
「下がってくれ！」
後ろから悟空の声が聞こえた。彼はヤムチャと共にかめはめ波の構えを取っていた。
「いいか？同時に気を放つぞ！」
「おう！」
そう言って二人は気を溜め始めた。
「か～」
「め～」
「は～」
「め～」
「「波ァァァァァァァァァ！！」」
同時にかめはめ波が放たれた。二つに重なり巨大になったかめはめ波は化け物の足に見事命中した。
「グギャアアアアアアアアア！」
化け物は轟音を響かせてこの場に倒れた。
「よし！今のうちだ！」
ルイージがそう言って化け物に向かって飛び始めたと同時だった。
「一番乗り貰い！」
「あ！コタロー！」
前に現れたのはルイージの教え子の小太郎だった。ちなみに彼はネギの親友でもある。
「私達も忘れないでよ！」
誰かがルイージを踏んで飛び始めた。

「イテッ！何すんだアーニャ！」
ルイージを踏み台にしたのはネギの幼馴染、アーニャである。彼女はルイージを使って高く飛んだ後、魔法を唱え始めた。呪文を言い終わると同時に彼女の足に炎が纏われた。
「必殺、アーニャ・フレイム・バスターキーック！」
アーニャはそう言うと倒れている化け物に向かって飛び蹴りを放った。丁度化け物はその時に起き上がろうとしていた。だがアーニャの飛び蹴りで再び倒れた。
「ナイスタイミングだな～。」
「そんな事言ってる場合じゃないで！俺らも暴れないと！」
小太郎はそう言うと巨大な犬に変化した。
「そうだな。」
小さく呟き、ルイージは両手に緑色の炎を纏わせた。
「コタロー、俺は腹の所に行く。お前は両肩の動きを止めろ。」
「了解！」
返事をした小太郎は化け物の片方の肩の所へ行き、鋭い爪で片方の肩を切断した。続いてとんでもない速さでもう片方の肩の所へ行き、同じように切断した。
「動き封じたで！」
「よくやった！」
化け物の腹の所に到着したルイージは両手の炎を一つに合わせた。
「行くぜ・・・零距離ファイアーボール！」
そう言ってルイージは両手を化け物の腹に当て、炎を発した。その様子を見ていた銀時は口を開けて驚いていた。
「つ・・・つえ～。」
「俺達も負けてられねー！」
ルフィがそう声を上げた。声を上げた後ルフィはその場にしゃがんだ。
「ギア・・・2！」
小さく呟いた後、ルフィの足がポンプみたいに伸び縮みし始め、

ルフィの皮膚の色が少し赤く染まった。
「一気に行くぞ！」
その瞬間、ルフィの姿が消えた。ルフィは化け物の間近まで移動していた。
「ゴムゴムの・・・ＪＥＴガトリングゥゥゥゥゥ！！」
ルフィの両手から何発も何発もパンチが繰り出される。何度もやっているうちに倒れている化け物は悲鳴を上げた。
「ルフィ、どいて！」
上空からシャナの声がした。シャナの髪は赤く染まっていた。それは戦闘モードのシャナだった。
「ハァァァァァァ！！」
シャナはそのまま飛び上がり、上空から化け物の腹目がけて刀を突き刺した。だがダメージは少なかった。化け物の両腕が再生し始め、足を使って立ち上がろうとしていたのだ。しかし。
ズシャッ！
ドカァァァァァァン！
斬撃音と爆発音が響いた。化け物の両腕は再び何者かによって切断されたのだ。
「俺達を甘く見るな！」
「何度再生しようと虚無で消し去る！」
両サイドにはルイズとサイトがいた。続いて。
「超めり込みパーンチ！」
男鹿が化け物の横腹を殴っていた。その横には神崎や姫川、東条が男鹿と同じように横腹を殴っていた。
「りっちゃんパーンチ！」
近くにいた律も化け物を殴り始めたがあまり意味無かった。
「おい律！何やってんだ！早く逃げ」
律の隣にいた澪が何とか逃げさせようとしたのだが、彼女の近くでサイトが斬った化け物の腕が降って来た。
「イヤァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

斬り落とされた腕を見て恐怖を覚えた澪は律を連れてすぐに逃げて行った。少し離れている所では。
「お前・・・お前のせいで・・・野菜が・・・野菜がァァァァァァァァ！！」
大河が力を込めて化け物の横腹を木刀で突いているのだ。
「おい大河！余りむやみに攻撃するなよ、起きあがったらどうする！」
「そうよ！そうなったら助けにこれないわよ！」
遠くの方で見ていた竜児と文乃がこう叫んだ。文乃の隣にいる千世はこの光景を見て興奮していた。
「すごい！今まではアニメや漫画の世界でしか見られなかった巨人との戦いがついに」
「何言ってるのよこんな時に！今はそれどころじゃないでしょ！」
千世の頭に文乃のゲンコツが命中した。
「何すんのよ芹沢文乃！」
「アンタの目を覚ましてあげたんでしょうが！」
「余計なお世話よ！」
二人の喧嘩が始まってしまった。横にいた竜児は何とか止めようとしていたが無駄だった。
「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
突然だった、化け物が雄叫びをあげて立ち上がったのだ。
「う・・・嘘！」
足元にいた大河はまさかの展開に驚きその場で腰を抜かしてしまった。化け物は大河を見つけ踏みつぶそうとした。
「大河ァァァァァァァァァァァァァァ！！」
竜児の叫びが響いた。次に地響きが響いた。
「・・・・・・・・・あれ？私無事なの？」
「大丈夫でござるか！」
目をつぶっていた大河は目を開けて絶句した。自分は今空を飛んでいるからだ。

「まさか・・・踏みつぶされて天国へ――――」
「違うでござる！」
「ば・・・バング先生！」
下にいたルイージが声を上げた。大河を助けたのは小学部の体育教師のバングだったのだ。
「アンタも来てたのか。」
「おう！この一大事に拙者が動かねばあの化け物は」
「いや、俺らだけでも何とかなってるし」
「コラー！そこの二人サボってんじゃねー！」
2人に向かって怒声が響いた。声の主はプラチナだった。ちなみに彼女もルイージの教え子である。
「お前が言うなよ！俺だってあいつの腹に目がけてファイアーボールをぶち当てたんだよ！」
「それだけじゃーん。」
「だったらお前も働けェェェ！！」
ルイージにこう言われプラチナは渋い顔をした。その一方で。
「ウオォォォォォォ！休んではおらぬゥゥゥゥゥ！俺も頑張らぬとオォォォォォォ！！」
「やられてばっかりじゃ駄目だ、俺のプライドがゆるさねェェェェェェ！」
幸村と正宗が復活したのだ。彼らは化け物の所まで走って行き、同時に斬りかかった。斬撃から赤と青の衝撃が生まれ、一つに重なって化け物の体を下から上へ移動しながらダメージを与えて行った。
「はぁ・・・はぁ・・・どうだ？」
「駄目みたいだ・・・すぐに再生しやがる。」
二人の合体技でも化け物はすぐに再生するのだ。だがここで上空から無数の紅桜が降って来た。
「これでどう？」
上空にはヒナギクが舞空術を使って宙に浮いていて、両手には紅桜が握られていた。化け物が油断している間、何かの衝撃が襲った。

腹にはハート型の穴があいていた。
「これでどうですか？」
「私とハヤテのラブラブアタックで倒れろ！」
化け物の近くにハヤテとナギがいた。だがチート技でもすぐに再生し始めたのだ。そこに。
「オラオラオラオラオラオラオラオラァァァァァァァァァ！！」
首領パッチが拳を振りながら現れたのだ。無数のパンチは化け物の足に命中していく。そこに。
「オイ、俺を忘れんじゃねーぞ。」
「ボーボボ先生！」
ボーボボが現れたのだ。
「アフロオープン！」
そう言うとボーボボのアフロが開いた。そこには田楽マンがテレビを見ていた。
「ん？何？」
「必殺、田楽シュート！」
「のらァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
ボーボボは田楽マンを掴んで化け物に向かって放り投げた。
「続いて・・・」
しばらく間を開けた後、ボーボボはある本を取りだした。
「これは天の助が書いてあるポエム集――」
「それ読んじゃらめェェ

「いいじゃねーの？それより早くあの化け物倒してー。」
「無理に決まってるだろうが！あんなのに踏みつぶされたら俺もお前も」
ドーン！
会話の途中で天の助とボーボボは化け物に踏みつぶされてしまった。
「・・・よっしゃ！主役は貰ったー！」
「いや、今それいう時じゃねーだろうがァァァァァァァ！！」
首領パッチのセリフに対して銀時はこう叫んだ。

次回！
ついに覚醒したミクのネギ、ミクは新八、咲夜、そしてリンレンと共に化け物の所へ向かう！次回混沌学院『人は失敗すると覚える生き物だけど例外があるケースもある』ネギ編、クライマックス！
「テメーは俺を怒らせた・・・」
「本当にジョジョネタ多いな。」

第７８話：（ネギ編）どんな時でも俺はサプライズを忘れない（後書き）

おまけトーク

ラグナ「おい作者ぁ！！俺の出番はどうしたァァァ！！」

作者「おわ！何だ一体！！」

ラグナ「何でブレイブルーの主役が先に登場しないんだよ！！」

作者「別にいーじゃん。」

プラチナ「そーだそーだこのロリコン賞金首！！」

第７９話：（ネギ編）人は失敗すると覚える生き物だけど例外があるケースもあ

作者「今回でネギ編クライマックスです！！」

一方通行「張り切ってるな～。」

当麻「まぁ今回でクライマックスだもんな。」

オセロット「しかも今日作者の誕生日だもんな。」

グレイ・フォックス「それ関係あるか？」

第79話：（ネギ編）人は失敗すると覚える生き物だけど例外があるケースもあ

ミクの家、ミクは新八と咲夜とともに外に出ていた。手には光り輝くネギを持っている。
「早く銀さんの所へ行かないと！」
新八が辺りを見回したらある物が目に入った。
「な・・・何じゃありゃァァァァァァァ！」
それは銀時達と戦っている巨大な化け物の姿だった。
「あ・・・あんなのと戦うのか？」
「うん・・・覚悟はできている。」
「・・・そうか。」
「あいつを倒すのは私しかできないから・・・頑張る！」
やる気を声に表したミク。新八も咲夜も彼女の気持ちに同情した。
「それよりどうやって行こうか？」
「それやな、ダッシュで行っても間に合うかどうか」
「ミク姉！」
遠くの方でリンの声が聞こえた。しばらくしてリンレンが乗るロードローラーが現れた。
「リン、レン！」
「事情は知ってる、早く乗って！」
「新八さんと咲夜さんも早く！」
その後、リンレンのロードローラーに乗り込んだ新八達、彼らが乗ったのを確認したレンは運転席に座った。
「皆、ちゃんとどこかに捕まっていて！ブースト全開で行くから！」
「え・・・それって・・・まさか！」
「スイッチオン！」
レンがスイッチを押した後、ロードローラーの両脇に巨大なブースターが装着され、轟音と共に発射した。
「イギャァァァァァァァ

ァ！」
目茶苦茶な速さなため、新八は声を出して悲鳴を上げた。
一方その頃、銀時達は未だに激しい戦いを繰り広げていた。
「おらァァァ！」
「くらェェェ！」
「ゴムゴムのバスーカァ！」
「ファイアーボール！」
「シシガミ流奥義、風林火山！」
「死ねぇ土方ァァァァァ！」
「お前が死ね沖田ァァァァァ！」
「ハヤテクン、アイシテルゥゥゥゥゥ！」
そんな声が響いていた。
「はぁ・・・はぁ・・・ミクはまだかよ・・・。」
「まだみたいだな・・・」
息を吐きながら銀時とルイージはこんな会話をしていた。
「はぁ、はぁ・・・ヤベー、疲れが限界に達してきやがった・・・足がもう笑ってロクに動けねェ・・・」
「俺もだ、木刀持ってる感覚がねーよ。」
そんな中、化け物の一撃が彼らに迫っていた。
「逃げられるか？」
「何とか。」
そう言って二人同時に横に飛んだ。
「銀さん、アンタ意外と動けるじゃねーか。」
「何とか動けた。だけどもうヤバい、体が動かねー。ってかルイージもさ、足が笑ってるんじゃねーのか？」
「一瞬だけ笑うのが収まった。今はまた笑いだしたけど。」
そんな会話をしていた。しばらくして上空から何かの影が現れた。
「な・・・何だあれ？」
「「アアアア

アアアアアアアア！」」
耳に新八と咲夜の悲鳴が響いた。その直後、化け物の真上にロードローラーが現れた。
「し・・・新八、咲夜！・・・それにミク！リンレン！」
ロードローラーの中から現れた新八達を見て銀時は驚いた。
「何だよオメーら、いきなり現れやがって。」
「それより先生、お願いがあります！」
ミクが銀時に向かってこう言った。
「私を・・・あの化け物まで近づけさせてください！」
「・・・手があるのか？」
「あります。あいつを倒すために来たのですから。」
話を聞いた後、銀時はこう呟いた。
「テメーを信じる。」
そう言って傷ついた体を無理矢理起こした。
「銀さん、大丈夫ですか？その傷で。」
「後でパフェ食ったら治る。それよりあいつを倒せるんだ。」
新八にこう話した後、銀時は立ち上がった。
「皆、ミクを守れェェェェェェ！」
「「「「「オオオオオオ！」」」」」
戦場に声が響いた。

ミクは化け物に向かって走っていた。隣には新八と銀時がいる。
「余所見すんなよ、障害物が出たら俺がたたっ斬る。」
「ありがとう。」
そう言ってる中、化け物の腕が目の前に現れた、だが。
「「おらァァァァ！」」
正宗と幸村が目の前の腕を滅多斬りにした。
「ミク殿ォォォ！援護は任せろォォォ！」
「あと少しだ、それまで俺と幸村が何とか守りとおす！」
「・・・二人とも・・・ありがとう。」

小さな声でミクは感謝の言葉を言った。

そして、ミク達は化け物の所にたどり着いた。
「ついにたどり着いたけど・・・」
「けどどうしたんですか？」
新八がこう聞いた。
「あいつを倒すのは、弱点の額をネギで刺す事なんだ・・・でもどうやって――」
「決まってんだろ！」
ここで銀時がミクを背負って化け物の体を走りだした。
「ウォォォォォォォォォォォォ！」
「せ・・・先生！」
「俺も一応先公だ！生徒の為ならこの体、たとえ朽ち果てようが助けてやらァァァァァァ！」
ミクを背負って走っていると目の前に化け物の腕が現れた。
「ヤベッ！」
「釘パァァァァァンチ！」
だがトリコが現れ、腕をふっ飛ばした。続いてもう片方の腕が現れたがバングとルイージが同時に蹴り飛ばした。
「今のうちだ！早く行け！」
「悪い！」
銀時はそう言いながら走り続けた。そして化け物の顔付近についた。
「先生、今です！私をあいつの顔に向かって投げてください！」
「・・・わかった！」
そう言って銀時は持てるすべての力を込めてミクを化け物の顔に向かってブン投げた。
「ハァァァァァァァ！」
ミクは上空へ飛び、ネギを構え、化け物の額にネギを突き刺した。
「ガ・・・ガ・・・ガ・・・」

額にネギを刺された化け物は苦しそうに呻き声をあげた。――――そして。

「ガギャアアア

彼にこう言った。
「も・・・もしかしてさ、少し前に変な壺とか何か開けなかった？」
「あ～そう言えば数日前・・・。」

数日前。
「ヒ～ン、三度目の正直と思って法隆寺に行ったけど結局できてなかったよチクショ～！」
太子が泣きながら走っていた。
「ヒ～ン、妹子に『法隆寺出来たからお土産持ってこい』って言っちゃったのに～。チクショ～！どこかいい小屋無いかな～いい小屋いい小屋・・・お！」
彼が目に付けたのはミクの自宅の近くにある小さな小屋。ちなみにこのバカはここがミクの家だとは知りません。バカは小屋の中に不法侵入した。
「狭いし臭いな～。何か焦げた炭の臭いが充満している。」
そんな事を呟いていると変な壺を見つけた。
「お？これはもしかしてお宝か？」
足元にある壺を取り出して蓋を開けた。だがそこから彼の記憶は途切れていた。

「それ以降全く覚えてないんだよな～。起きたらその小屋の中にいたし、しかも野菜がどーだかって騒ぎになってるし・・・。」
「先生。もしかしてその壺ってこれじゃないですか？」
リンがロードローラーから小さな壺を取りだした。
「ああ、それそれ。」
「・・・なぁミク・・・もしかして・・・。」
「・・・ええ。」
この場にいた全員は気付いた。今回の騒動はこのバカのせいだと。
「え？あれ？何で皆殺意がこもった目で見てるの？ねぇねぇ、教えて。」

銀時は何とか立ち上がり、腹の底からこう叫んだ。
「こォォォォォォォォんの大馬鹿野郎がァァァ

第７９話：（ネギ編）人は失敗すると覚える生き物だけど例外があるケースもあるイカ？

おまけ劇場！

ウッドロウ王のお悩み相談コーナー

１

Ｑ：同じクラスの女の子がとってもしつこいでゲソ。何とかならないイカ？

Ａ：何、気にすることはない

２

Ｑ：隠していたエロ本が消えたのですが。

Ａ：何、気にすることはない

３

Ｑ：俺の扱いひどすぎね？

Ａ：何、気にすることはない

銀時「なんにも解決してねぇェェェェェェェェ！！」

おまけトーク

銀八「はい、二十歳の誕生日おめでとさん。」

梓「おめでとうございます。」

オセロット「俺のリロードはレボリュージョンだ！！」

ブロリー「ああ、腹減った。」

パラガス「オニギリでもいかがかな？」

作者「・・・俺の扱いひどくね？」

第８０話：小さな生き物でも集まればスイミー的な方法で逆襲できる（前書き）

作者「今回はあの作品が登場します。」

銀八「これいいのかよ！？」

作者「俺が良ければいいんじゃね？」

黒猫「ＯＰは・・・『とっとこハム太郎のうた』・・・これでもう何が出るか分かったわよね。」

第８０話：小さな生き物でも集まればスイミー的な方法で逆襲できる

混沌学院では一部の教室で生き物を飼っている。だがそれは小さな生き物限定なのだ。一時期どっかのクラスがガララワニとかリーガルマンモスを飼っていたがすぐに却下された。今回は２Ｚが飼っているペットを主点とした物語である。

はむはー！パソコンの前、もしくは携帯電話の画面の前の皆さん初めましてなのだ！僕はハム太郎。２Ｚで飼われているハムスターなのだ！

「おう！おはよう、ハム太郎！」

今声をかけたのは悟空さん、いつも元気いっぱいなのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ヤ・・・ヤムチャ！お前一体どうしたんだ！」

「また爆発に巻き込まれた・・・」

爆発に巻き込まれたのはヤムチャさん。いつもそんな目に会っているのだ。

「皆おはよー。」

「ファ・・・ファァァ・・・」

「よっ！文乃、希、巧！」

「お前寝むそうだな、ちゃんと寝てんのか？」

「今日も早く起きてケーキを作ってたよ・・・あとは姉さんがちゃんと店にいるかどうか・・・」

「巧・・・無茶しすぎ。」

「希のいう通りよ。アンタ無茶しすぎ！」

「希・・・文乃・・・ありがとな、気を使ってくれて。」

「べ・・・別にアンタの体なんて気を使ってないわよ！アンタなんか体を使いすぎて死んじゃえばいいのよ！」

「は・・・ははは。」

悟空さん達と会話をしているのは文乃さん、巧さん、希さんなのだ。この人達は小さなケーキ屋を営んでいるのだ。本当に立派な人達なのだ。
「うーす。」
「おう、東条！」
「よっ悟空。それにハム太郎！」
へけっ。
僕に挨拶したのは東条さん。とても大きい人だけどとってもいい人なのだ！僕にいつもヒマワリの種やらいろいろくれるのだ。
「おーーーーす！皆ァァァァァ！」
元気良く教室に入って来たのはルフィさんなのだ。いつも悟空さんや神楽さんと早弁しているのだ。
「相変わらず大きい声ね～。」
後ろで呆れているのはナミさん。とってもお金が好きな人なのだ。
「よ～、皆～。」
続いて教室に入って来たのはチョッパーさん。唯一僕達ハムスターのいう事が分かる人・・・というかトナカイなのだ。
「よ、ハム太郎。元気か？」
「いつも元気いっぱいなのだ！」
「そうか、ならよかった。」
「いいな～、チョッパーは。ハム太郎とか動物とかと話せて。」
東条がチョッパーを見てこう言った。はい、というわけでここからはいつも通り俺のナレーションで行きます。

ハム太郎が何か色々と説明した後、どんどん2Zの面子が集まって来て、そこからまたしばらくして銀時が教室に入って来た。
「はーい、テメーら。今日は諸事情によって午後の授業はカットな。」
その言葉を聞いた奴らは驚き、喜んだ。
「どうしてですか？突然午後の授業を短縮するなんて。」

「実はよ、今日は珍しくあのバーさんがおごってくれるっつーから教師総出で飲みつくそうって話なんだよ！」
「何だよそれ！だったら授業やれよ！」
「新八・・・俺らはな・・・授業より飲み会の方が対大事なんだよ！」
「アンタそれでも教師か！」
新八のツッコミが教室に響いた。数時間後、本当に午前だけで授業は終わってしまった。その後は寮暮らしの連中がハム太郎を寮に連れて行った。

その日の夕方。ハム太郎は土方達の部屋にいた。隙を見てハム太郎はケースから出て、外に出た。外に出た理由は仲間のハムちゃんズに会うためだった。
「あ、ハム太郎さん！」
「こうし君！はむはー！」
こうしくんとはハム太郎の親友でハム太郎よりちょっと大きいハムスターだ。
「今から地下ハウス行くんですか？」
「そうなのだ。」
「じゃあ一緒に行きましょう！」
「うん！」
そう言ってこうしと共に地下ハウスへ向かった。

地下ハウス。ハム太郎の友人のタイショー君が作ったハムスター達の秘密基地である。今ここには数匹のハムスターがいた。
「おう！ハム太郎にこうしじゃねーか！」
「タイショー君、はむはー！」
「あ、ハム太郎君！」
後ろからリボンちゃんの声がした。軽く挨拶を交わした後、ハム太郎は仲間の元へ向かって行った。

しばらくハム太郎は仲間達をワイワイ話していた。だが地上の方では・・・
「ウエッヘェェェイ、酔っ払っちまったぜぇ～い。」
完全に酔い潰れた銀時が地下ハウス入り口近くの穴でうろついていた。
「あ、銀さんの声なのだ。」
「銀さんってハム太郎君の教室の先生でしょ？」
「そろそろ帰った方がよくね？」
「じゃあ僕はこれで――――」
この時だった。入口の方から地響きが轟いたのだ。
「うわ！」
「何だ何だ！」
この場にいたハムスター全員が入口の方へ行った見たらそこには銀時の親指が挟まっていた。どうやら銀時は酔っ払って靴をはくのを忘れ素足の状態で帰路についていたのだがどうやら間違って地下ハウスの入り口に親指を入れてしまったらしい。
「ふにゃ？あれ～？足が動かね～。」
「な・・・何だあれは！」
「オバケだ！新手のオバケだ！」
段々と辺りの空気を恐怖が包んでいった。ハム太郎達は入口に挟まっているのが銀時の親指を知らなかったのだ。
「皆！」
タイショーがここで声を上げた。
「ここでビビっちゃ何にも出来ない、だったら俺達で地下ハウスを守ろう！」
そう言ったので誰もが声を上げた。
で、銀時の方は何とか親指を穴から外そうと色々やっていたが酔っている為何にも出来なかった。

「ヤベーよどうすっかな・・・もしかしてこのまま？じょーだんじゃねー！」
その時だった。親指からいたみを感じた。
「イデデデデ！何だ何だオイ！」
突如の痛みに銀時は驚いた。一刻も早く親指を何とかしようと銀時は思った。

一方ハムスター達は銀時の親指に一斉攻撃をしていた。ハム太郎は親指を噛み始め、こうしも近くにあった多少大きな小石で爪を叩き始め、めがね君もまいど君と協力して爪と肉の間に集中攻撃をしていた。
「皆どけェェェェ！」
後ろからタイショーの声がした。彼は全力で走って親指に近づいた後、思いっきり爪を叩いた。その攻撃によって爪に多少のひびが入った。
「おお！」
「さすがタイショー君なのだ！」
「まだだ！皆で割れた所に一斉攻撃だ！」
「「「「「「おう！」」」」」」
そう言ってハムスター達は銀時の詰め向かって飛び、攻撃し始めた。

「アギャァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
銀時は泣き叫んだ。前から爪に痛みを感じ、そこからまた激しい痛みが彼を襲ったのだ。
「イタタタタタタタタタ、イタタタタタタタタタ！何？俺なんかした？」
痛みのあまり銀時はその場を転げ回った。そして――――
グキッ！
何か折れる音がした。

その一方猛攻撃を仕掛けているハムスター達は。
「ん？何か音がしたのだ。」
そう言うとハム太郎は一旦後ろに下がった。しばらくして他のハムスター達も後ろに下がって親指の様子を見始めた。今さっきまでは暴れていた親指が動かなくなったのだ。
「おお！これって・・・」
「やったぜ！倒したんだ！」
その後、ハム太郎達の完成が響き渡った。そしてハム太郎達は入り口をふさいでいる親指を何とかどけて外に出た。
「あ、銀さ・・・」
途中、ハム太郎は何故か白目をむいて気絶している銀時を見つけた。足を見て見ると右足の親指が折れていた。
「あ・・・もしかして・・・」
ハム太郎はもしかして今さっき攻撃していたのは銀時の親指だったんだ・・・と思ったが言うと何かややこしい事になりそうなので土方達の部屋に戻って行った。

翌日。いつも通り２Ｚは騒がしかった。だが今日は共通の理由で騒いでいた。しばらくしてスネークが教室に入って来た。
「スネーク先生！銀ちゃんが入院するってマジアルか？」
手を上げて神楽がこう言った。
「ああ、そうだ。朝のＨＲで言おうとしたのだが・・・皆、席についてくれ。」
スネークがそう言った後、２Ｚの連中は席についた。
「え～、今さっき神楽が言った通り銀さんは右足の親指を骨折した為しばらく入院することになった。」
次の瞬間、「ええ～っ！」とか「な・・・何だってー！」とか「・・・何・・・だと」てな声が上がった。その話を聞いていたハム太郎は心の中でこう呟いた。
（銀さん・・・本当にごめんなさいなのだ。）

第８０話：小さな生き物でも集まればスイミー的な方法で逆襲できる（後書き）

おまけトーク

オセロット「・・・いいのかよ・・・あの作品出して。」

雷電「本当に知らないぞ。」

インデックス「何か・・・懐かしい。」

佐天「本当に懐かしい。」

闇「またやってるみたいだけど。」

作者「いや、何かまたやってるっぽいけど詳しい事は知らん。」

第８１話：主人公と結ばれるのは一部例外を除いてメインヒロイン（前書き）

作者「さてね、今回も新作品が登場しますよ。」

ハム太郎「もう出るの？」

作者「はい。さて今回は――――」

モッピー「モッピー知ってるよ！今回の新作品はＩＳだって！！」

銀八「何かおるゥゥゥゥゥゥ！！」

梓「今回の脳内ＯＰは『ＳＵＰＥＲ∞ＳＴＲＥＡＭ』でお願いします。」

第８１話：主人公と結ばれるのは一部例外を除いてメインヒロイン

１Ｚ教室。ここには一護や唯の妹の憂やあずにゃんがいる。で、別のキャラというと。

「一夏！今日も剣道の特訓だ！」

「おわァァァ！だからって教室で木刀を振りまわすなァァァァァァ！！」

教室の後ろの方で一夏と箒が剣の特訓？をしている。続いて。

「一夏さーん！私の特別サンドイッチ食べてくださーい！」

後ろの扉からセシリアがサンドイッチを持って現れた。

「アァァァァァァ！どいてくれェェェ！！」

「一夏ァァァァァァァァ！！」

廊下の方から鈴音が現れた。

「箒、また一夏に無理して剣道をさせようとしてんだね！」

「当たり前だ！一夏みたいな軟弱な男には剣が必要だ！」

「いらないと思うけどね！」

そう言うと二人は同時にＩＳを起動させ、戦い始めた。

「一夏おはよーってまた何かあったの！」

一夏の後ろでシャルロットが挨拶をした。だが目の前で箒と鈴音が戦っている光景を見て驚いた。

「はぁ・・・どうすっかな～。」

「いや、止めるしかないよね！被害が出る前に何とか――――」

「ギャアアア

ついた。
「おわ！いきなりかよ！」
「当たり前だ！お前は私の嫁だからな！」
「だから何で俺が嫁何だよ！？」
その様子を見ていた梓はこう思った。
（一夏さんのウェディングドレス？）
一瞬変な光景が頭に浮かんだのですぐに消した。しばらくして少女達のＩＳバトルの被害は広がって行った。
「何だ何だこの騒ぎは――――ってオワァァァァァァァァァァ！！」
騒ぎを聞きつけ１Ｚ近くまでやって来たヤムチャが爆発に巻き込まれた。
「せ・・・先輩！大丈夫ですか！？」
「ゲホッ！ゲホッ！ああ・・・何とかな。」
あのポーズから立ち上がったヤムチャは事情を聞いた。
「はぁ・・・どんだけだよ。お前をめぐってこんなバトルが繰り広げられるなんて。」
「俺が原因？」
「ああ、気にするな。それより――――」
話を言ったん止めた後、ヤムチャはこう言った。
「お前の本命は誰だ？」
この言葉を聞いた箒達は戦いを止めた。近くにいたシャルロットとラウラも一夏の方を注目した。
「え・・・えと・・・誰だ？俺だけにでも言ってみ――――」
その瞬間、ＩＳヒロイン達の攻撃を受け、ヤムチャは窓に向かってブッ飛ばされた。まぁ原作のＩＳと同じようにＩＳヒロインのほとんどは一夏に惚れている。まぁその事を隠してはいるが大抵ばれているのだ。
「だ・・・大丈夫ですか？」
丁度近くにいた梓が壁にめり込んでいるヤムチャにこう聞いた。
「ああ。」

しばらくヤムチャは黙った。
「あの・・・どうかしたんですか？」
「・・・アレをやるしかないな。」
そう言うヤムチャの目は光っていた。

数日後、グラウンドには巨大迷路が作られていた。
「レディースエーンドジェントルメン！今から第一回『一夏の嫁は誰でしょね？大会』を始め間ァァァァァァァす！」
スピーカーからゼロスの声が響き渡った。そう、今から誰が一夏と付き合うのにふさわしいかの大会を始めるのだ。
「司会は私、ゼロスと。」
「私、２Ｔのジェイドと。」
「この大会の提案者のヤムチャでお送りしたいと思います。」
「おーい！自己紹介はどうでもいいからさっさと大会を始めろー！」
観客席で座っているルフィがこう叫んだ。
「えー、まず始めにルールを教えます。内容はいたって簡単、一夏に惚れている五人の少女、誰が先にこの巨大迷路から一夏がいるゴールに辿りつくかを競います！」
「しかし、道中には行き先を遮る妨害キャラがいます。」
「ルール上彼らに倒されたらそこで失格です！」
「ルールは分かった！」
スタート地点にいる箒が声を出した。
「貴様らのどうでもいいおしゃべりはどうでもいい！さっさと始めろ！」
「どうでもいいって・・・二回言わなくてもいいじゃん！」
「まぁ、とりあえず・・・スタート！」
ジェイドの合図とともに一夏争奪戦が始まった。
「あ、一つ言い忘れてました。時間内に一夏の所にたどり着けなかったら・・・。」
ここで頭上にある巨大モニターから殺意の波動が解放されている

リア充抹殺隊の連中が映った。ちなみにその中に銀時が混じっている。
「何ですかこれはァァァァァァァ！？」
新八がこう叫んだ。
「え～、時間内にゴールできなかったらこの猛獣(バカ)どもを放ちます。」
「何やってんだオイィィィィィィィ！」
新八の叫びが響いた。

戦いが始まって数分後、箒の方で最初の妨害キャラが現れた。箒の目の前には小さな小屋がある。
「この中にいるのか！」
ＩＳを取り出し、勢いよく扉を開いた。そしてその中にいた人物とは！
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・あ。」
その人物は服部全蔵だった。ちなみに今彼はケツ丸出しであり、手にはポラギノールがあった。
「・・・・・・何をしているのだ？」
「いや・・・実は急に持病の時痔が痛くなって・・・それでしょうがないからここでポラギノールを入れようと思って。」
全蔵の話を聞いた後、箒は小屋の中を見渡した。そして丁度いい所に先が尖った木の棒が置いてあった。それを見つけ、箒は木の棒を手に取った。
「え・・・まさか・・・ウソでしょねェ。」
「・・・ハァァァァァァァ！」
箒の叫び声が聞こえた。そして木の棒は全蔵のケツの穴に命中した。
「ギャアアア

アアアア

で、鈴音の方は。
「あなた・・・一体誰！」
彼女の目の前には黒いフードの男が立っていた。
「・・・力づくで聞かせてみな！」
男はそう言って背中にあった剣を取り出し、鈴音に襲いかかった。
だが。
「そうはさせない！」
反撃しようと鈴音はＩＳを起動し、反撃した。
「グオッ！」
攻撃を食らい、男のフードが地面に落ちた。男の正体は・・・
「アンタだったのね！ラグナ！」
その正体は同じ１Ｚのラグナ・ザ・ブラットエッジだった。
「しまった！」
そう言うとラグナはまた黒フードを手にとって頭に装備した。
「俺の正体・・・力づくで―――」
「だからもうばれてるって言ってるのよー！」
鈴音の一撃がラグナを包み込んだ。その後、激しい衝撃音が響いた後、ラグナが空に向かってブッ飛ばされた。
「初登場でこんな扱いかよォォォォォォォ！！」
ラグナはこう叫びながら星となった。

辺りで激しい戦い？が繰り広げている中、シャルロットもまた妨害ゾーンについた。
「何が入ってるんだろ？」
静かに扉を開けて見た。中にはある光景があった。
『かかってこんかーい！』
小さな声が聞こえた。下を見るとウサギのぬいぐるみがあった。
どうやらその声はウサギから流れていた。
『いいからかかってこんかい雑魚がー！』
数秒後、ウサギのぬいぐるみは横になっていた、そこにはシャル

ロットの姿は無かった。しばらくしてウサギからこんな声が流れた。
『やられたー。』

一方ラウラの方は・・・。
「この中に妨害という奴がいるのか。」
何も危機感を持たずにドアを蹴り破った。中にいたのは。
「よぉ、待ってたぜ。」
ダンボールを見に包んだマダオだった。
「何をしているんだ？」
「いや～、実はこの小屋に住んでいいって言われたからね～。」
この台詞を聞いたラウラはなぜか異様に切なくなった。
「・・・出口はどこだ？」
「ああ、勝手口の方。戦いが終わったらまた寄れよ。」
帰り際、マダオはそう言っていたがラウラは寄る気がしなかった。

戦いが始まって数分後、彼女らは何故か合流していた。
「何で合流するんですかね～？」
「知らん、設計者のミスだろ。」
「単純なミスだね。」
そんな会話をした後、彼女らは目の前にある巨大な小屋の中に入って行った。
「前の小屋とは偉い違いだな・・・」
「まさかとんでもなく強い奴がいるんじゃない？」
「ハヤナギとか？」
「裏を見てヤンデレモードのヒナギク先輩だったりして。」
そんな会話をしていたらまた扉があった。扉を開いた先にあったものとは・・・・・・
「ようこそ♪夢を希望の国、マヨネーズ王国へ♪」

王子様っぽい格好をした土方が満面の笑顔で立っていた。
「「「「「「何か変な王国作ったよこの人ォォォォォォォォ！！！」」」」」」
同時にこんな声を上げた。
「さぁ、君達にこの帽子をあげよう。」
土方から受け取ったのはマヨネーズ色の帽子だった。
「「「「「いらねェェェェェェェェ！！！」」」」」
「更にこれもあげよう。」
そう言って受け取ったのはマヨネーズが付いた杖。
「これはこの国が産んだ武器、マヨネーズロッドだ。君達のＩＳに装着するといい。」
「「「「「しねーよ！！！」」」」」
そう言ってマヨネーズ王国から出ようとしたのだが・・・。
バキュン！
「なっ！？」
突然銃声が鳴ったのだ。箒が銃声のした方を見ると、そこにはカブトムシの着ぐるみを着た沖田がライフルを構えていた姿があった。
「何やっているのだあいつは！」
「チッ、しくじったか。」
「またお前か！」
そう言うと土方は近くにあったマヨネーズ型のランチャーで沖田に狙いを定め、ランチャーをぶっ放した。
「キャァァァァァァァァ！」
沖田の急襲で始まった土方と沖田の喧嘩は辺りをカオスに陥れた。
「オイ、あいつらがバカやってるうちに逃げた方がいいのでは？」
「そうだな！早く逃げよう！」
彼女らがマヨネーズ王国から逃げ出したと同時に、マヨネーズ王国は崩壊した。
何とかマヨネーズ王国から脱出した箒達はまた迷路に挑んでいた。

走っているなかそんな声が聞こえた。
『あっとー！そろそろ時間が無くなって来たぞー！』
『何かやばくなってきましたよー！』
ゼロスとジェイドの声が聞こえた。上のモニターを見るとリア充抹殺隊のバカ共＋銀時が段々と一夏に近づいて来ていたのだ。
「一夏！」
『皆ァァァァァァ！何とかしてくれェェェェェェ！！』
「くっ！ならば！」
『あ、ＩＳで迷路を破壊して移動は禁止ですから。』
笑顔でジェイドはこう言った。
『でもー、この迷路の中にあるお助けアイテムをゲットしたらー。』
『そのお助けキャラが一夏さんを助けに来ますよー。』
その言葉を聞いて誰もがやけになってアイテムを探した。数分後。
「あったよ！」
シャルロットの声が聞こえた。
『シャルちゃーん！そのアイテムってカプセルだよねー？』
「そうですけど。」
『じゃあそのカプセルを開いて中に書いてある紙を取ってくれー！』
そう言われてシャルロットは中にあった紙を見た。それには文字が書かれていた。その文字とは・・・

その一方で観客席にいるなのははある物を探していた。
「なのは、何探してんだ？」
近くにいたヴィータが聞いてきた。
「実は自室にあったデバイスが消えてたの。それでもしかして誰かが持ってるかなーって思って。」
「そうか、ってか近くに何か無かったか？」
「そう言えば近くのメモ帳に『使い終わったら返す』って書いてあったけど。」
その時だった。なのはの背筋に悪寒が走り回った。

「もしかして・・・・・・。」

シャルロットは紙に書かれていた文を見た。

『さぁ！何て書いてあるか言って下さい！』

ゼロスがこういうがシャルロットは言っていいか迷っていた。

「シャルロット！何をやっているんだ！早くその紙に書かれている文字を・・・」

やって来たラウラがシャルロットが持っている紙を見て絶句した。

続いて箒やセシリア、鈴音も来て紙を見たが誰もが絶句した。

「・・・これ・・・言ってもいいのかな？」

「ヤバいんじゃないか？」

「でも一夏もヤバい状態だよ。」

「だけど・・・」

「背に腹は代えられんぞ。」

「・・・一夏の為・・・皆ゴメン！」

そう言ってシャルロットは紙書かれた文章を読み始めた。

「助けて！リリカルおとせ！」

シャルロットがこう言ったその瞬間だった。リア充抹殺隊のバカ共の所に向かって一筋の光が降って来たのだ。

「おい・・・まさか・・・まさか！」

銀時でさえうろたえる。その光の正体とは・・・

「魔法熟女！リリカルおとせ！」

「やっぱりお前かよォォォ

「ウプッ！気持ち悪っ！」
手で口を押さえながらヴィータはこう言った。周りの観客も手で口を押さえていた。中には吐きだす者もいた。まさに阿鼻叫喚の状態だった。

「ギャアアアアアアアアアア！！！」
「オワァァァァァァァァァァ！！！！」
「目がァァァ、目がァァァァァァ！！！！」
「オボロワァァァァァァァァァァ！！！！」
「ギョヘェェェェェェェェェェェェ！！！！」
リリカルおとせを見てリア充抹殺隊のバカ共は約四分の三ほど力尽きて倒れた。
「オエ・・・オイババア・・・その衣装・・・早く何とかしろ・・・・」
「覚悟しな！バカ共！」
そう言うとリリカルおとせは杖を銀時達の方に向けた。
「ま・・・まさか・・・」
「くらえェェェェェェェェェェェェ！」
その直後、スターライトブレイカーが放たれた。

「どう？私の活躍？」
リリカルおとせは笑顔で周りを見たが周りは余りの気持ち悪さで全員全滅していた。
「・・・一夏は？」
一夏の方も白目をむいて気絶していた。一方箒達も気絶していた。
「皆・・・ゴメン。」
そう言ってシャルロットも気絶した。これは大惨事として後に語られる大事件となったのだ。

第８１話：主人公と結ばれるのは一部例外を除いてメインヒロイン（後書き）

おまけトーク

ラグナ「オイゴラァァァァァァァ！！何だあの扱いはァァァァァァァ！！バングのおっさんやプラチナの扱いと逆じゃねーかァァァァァァァ！！」

銀八「オイオイ、何か来たんだけど。」

ハム太郎「何か銀さんと声が同じなのだ。」

黒猫「仕方ないわよ。だって中の人が同じだもん。」

作者「え～、ラグナさんは・・・大体次の長編で大活躍する予定です！！只今話を考え中です！！期待していてくれよ！！」

第８２話：新聞は世の中の出来事を伝える情報手段（前書き）

銀凪「あ～、考えてみればもう８０話か。」

銀八「何かはえーなおい。」

梓「確かこの小説を書き始めたのが９月でしたよね。」

ドナルド「そろそろ一周年だなぁ。」

銀凪「ああ・・・長く歩いたな～。」

闇「何を言ってるんですか、脳内ＯＰは『ぽいぽいぽいぽいぽぽいぽぴー』でお願いします。・・・こんなのでいいのでしょうか？」

第８２話：新聞は世の中の出来事を伝える情報手段

混沌学院新聞部。彼らは混沌学院内であった事件や情報を伝えるために日頃新聞を作っている。
「ネタがな～い～！」
こう声を上げたのは部長のイリア。彼女は部長の机に座って軽く背伸びをした。
「今戻ったよ～。」
扉の向こうからルカ（テイルズの方ね）とスパーダがやって来た。
「やっと来た～。で、どうなの～。」
「収穫なし。」
「お前がおもしろそうな話は無かったぜ～。」
そう言うと二人は近くにあったソファーに座った。しばらくしてしいなもやって来た。
「何かあった～？」
「全然。」
「めっずらしいわね～、毎日毎日アレだけ騒がしいのに今日は事件が無いなんて。」
「というより無い方がいいよね。」
「俺もルカに同感だ。」
ルカとスパーダがこう言った。
「何かないかね～。」
イリアが欠伸交じりにこう言ったその時だった。
「ハヤテ～、明日はお泊りデートに行こうよ～♪」
「いいですね～♪」
廊下の方からバカップルの声がした。

翌日。
「いい？あいつ等は学院内でも最強の一角を誇るバカップルよ、油

断したらすぐに死ぬわよ！」
副部長のゆりがこう言った。彼女とイリアの手にはハンドガンが握られていた。
「そ・・・そこまでなのかな～？」
「そうじゃね～の？」
呆れたルカとスパーダガこう言った。だがその時、ハヤテとナギがいる方向から何かが飛んできた。それは鋭くとがった木の枝だった。しばらくしてスパーダの携帯にハヤテの電話がかかって来た。
『スパーダさん、無駄に尾行とかしない方がいいですよ♪』
その電話を聞いたスパーダの額には冷や汗が出ていた。
「イリア！今すぐに止めた方が――――」
「ウッヒッヒ～！あいつ等のバカップルの様子を激写してやるわよ～！」
「腕が鳴るわね～♪」
イリアとゆりは完全に本気モードだった。そんな中、顧問のスネーク先生が現れた。
「皆、ちょっと近くのアフロレストランに来てくれ。」
「何でですか？」
「ちょっと話があるんだ。」
そう言った後、イリア達は近くのアフロレストランへ来ていた。そこには銀時達がいた。
「銀時先生、どうかしたんですか？」
「スネーク先生からテメーらがうちのバカップルを尾行しているっつー話を聞いてよ。協力してやろうかと思って。」
「別にいいです。邪魔なだけだし。」
ゆりがあっさりとそう言った。だが銀時は続けてこう言った。
「テメーら・・・あいつの存在を忘れてねーか？」
「あいつって？」
少し間をおいて銀時はこう言った。
「ヒナギクだよ。」

一方、混沌学院の方では。男鹿、神埼、姫川、東条がある生徒の体を見動きが出来ない様にロープで縛っていた。その生徒というのは怒りのあまり暴走しているヒナギクである。
「ハナシナサイヨォォォォォ！ハヤクシナイトハヤテクンガァァァァァァァァァ！！」
「イテ！爪でひっかくなよ！」
「キシャァァァァァァァァァァァァ！」
「オワッ！こいつに牙なんてあったっけか？」
「何かバイオに出てくる敵みたいになってるな～。」
「それよりもう少し縄を持ってこい！コイツ縄を噛みちぎって脱出するつもりだ！」
そんな騒ぎが起こっていたのだ。

で、イリア達はこっそりとハヤナギの後を追っていた。
「だ・・・大丈夫かな？」
「大丈夫だと思うが・・・男鹿達がヒナギクを何とか抑えているが・・・。」
「それより古市とかはどこにいるんだ？」
スパーダがそう言うとこっそりと辺りを見回した。近くのビルの陰に古市の影があった。
「先生、こっちに来て下さい。」
「了解。」
古市が呼んだのでこの場にいた全員は古市の元へ向かった。
「何だ、イリア達もいるのかよ。」
「あいつ等のデートを記事にするのよ！」
「・・・面白いか？その記事。」
「私達が面白半分で書くからいいのよ！」
古市はイリアとゆりとそんな話をしていた。

時間がたつ度にこの場にいる全員のイライラが上がって行った。古市の近くにいるイリアとゆりと銀時は怒りのあまり古市の足のすね部分を蹴り始めていた。で、暇を持て余しているルカとスパーダはＤＳでマリカーで遊んでいた。
「痛いな！止めてくれよ！」
「うるせーよサンドバック。」
「人をサンドバック扱いにしないでください！」
「黙りなさいよ。サンドバック。」
「静かにしなさい。」
そんな中、誰がの声が聞こえた。
「何やってるんですか？」
誰もが声のした方を振り返った。そこには新八と咲夜が立っていた。
「お前こそ何やってんだ？」
銀時が質問してきたので新八はこう答えた。
「いや、咲夜さんとデートですけど。」
答えを聞いた銀時は黙ってしまった。
「・・・え？何何？もう一回言って。」
「だからデートだって。」
「もう一回言って。」
「デートだって。」
「聞こえなかった、もう一回言って。」
「デート中――――」
「ごめん、もう一回言って。」
「しつこいですね。今デート中――――」
ここで銀時の堪忍袋の緒が切れた。
「何デートしてんだこの眼鏡ェェ

「先生！こんな所で暴れるのは止めてください！」
「うっせい！このバカを倒すのが俺の役目――――」
「今はそれどころじゃないでしょうが！」
古市は銀時の頭を思いっきり叩いた。
「ったく、仕方ねー。オイ新八！オメーも付いて来い！」
「いやです。」
「アンタらが勝手にやれば？」
そう言って新八と咲夜は去って行った。

一方男鹿達の方は。
「ゼェ・・・ゼェ・・・やっと静まったよ。」
男鹿は額の汗を拭きながらこう言った。目の前には落ち着いているヒナギクの姿があった。
「・・・男鹿君。」
「あん？」
「ちょっと喉乾いたから私の水筒を取ってくれない？」
「水筒？」
頭をかきながら男鹿は辺りを見回した。
「おい。もしかしてこれの事じゃね？」
そう言う神崎が持っているのは薄ピンク色の水筒だった。
「これの事か？」
「そう。こっちに渡して。」
その後、神崎から水筒を受け取ってヒナギクは中に入っていた飲み物を飲み始めた。
「さて、俺達はどうする？」
「先生のとこ向かうか？」
男鹿達はこんな会話をしていた。その時だった。
「ク・・・ククククク。」
ヒナギクの笑い声が聞こえた。それと同時にロープの切れる音が響いた。

「何だ何だ？」
後ろを振り迎えった先には・・・
「な・・・何じゃこりゃアアア

「そんな事言わずにお願いします！」
「おごるかよ。」
「それよりあの二人の後を追いましょう。」
「そうだな。」
古市が何とか会話を遮ってくれたのでホテル代をおごるという話は消えたのだが・・・。
「あいつらどこだ？どこのホテルに泊まるんだ？」
「あ！いましたよ！」
「マジで！？」
銀時の視界には腕組をするハヤテとナギの姿があった。その姿を確認した後、彼らは後ろの塀に隠れた。
「何つー名前のホテルだ？」
ホテルの名前が気になったので銀時はホテルの看板を見て見た。
そこには――――

『ガンダーラ・ブホテル』

と書かれていた。それを見た瞬間、銀時は絶句した。
「何であのラブホがあるんだよォォォ

「・・・・・・・」
「おい！その前にあの二人を止めねーとこの小説が１８禁コーナーに移されるぞ！」
「ああ！そうです――――」
ここで古市の携帯が鳴った。相手は男鹿からだった。
「男鹿？一体何だ？」
『古市か！お前今どこだ！？』
「今？ハヤテとナギを追ってるけど。」
『今すぐに逃げろ！あいつが・・・あいつが！』
男鹿が話している途中で電源は切れた。
「男鹿！もしもし？もしもーし！・・・何だったんだろう？」
「しらねーよ。」
その時だった。
突然と空気が重く感じたのだ。
「な・・・何だ何だ！」
「クックック・・・ク～クック。」
誰かの笑い声が聞こえた。古市が声のした方向を見るとそこには――――

「ドォォォォォォォォォォォォピングコンソメスゥゥゥ

！」
「ハヤテの千年帝国って何だァァァァァァァァァ！？」
「キシャァァァァァァァァァ！」
雄叫びをあげながらヒナギクは襲いかかって来た。
「オワァァァァァァ！」
「シネェェェェェェ！」
「ギャアアアアアアアアアアアアアア！」
悲鳴を上げながら銀時はヒナギクの攻撃を避けていた。その様子を目を輝かせてイリアとゆりはメモを取っていた。
「オイィィィィィ！オメーらそんな暇があるなら助けてぇェェェェェェェ！！」
「それより記事の方が大切よ！」
「何じゃそりゃァァァァァァァァァ！！」
「ヒャッハァァァァァァァァァ！！」
後ろからヒナギクが銀時を捕まえようと猛ダッシュを始めた。
「おわ！オワァァァァァァァァァ！！」
姿勢を低くして攻撃を避けようとした。だが。
「はァァァァァァ！」
ルカの大剣がヒナギクの腹に命中した。だが異様に硬い為、ダメージは通らなかった。
「何だ今のは？」
「ぜ・・・全然効いてない。」
「ムゥゥゥン！」
大声と共にヒナギクは腕を横に振った。その腕から衝撃波が生まれ、ルカをブッ飛ばした。
「ルカ！」
「他人の心配をしている暇があったら――――」
突然スパーダの目の前にいたヒナギクの姿が消えた。
「自分の心配をしなさい。」
ヒナギクの言葉と共にスパーダの背中に痛みが襲った。そして地

面に叩きつけられた。
「・・・さて、ハヤテ君でも探すか。」
そう言ってガンダーラ・ブホテルの方へ向かったのだが銀時に邪魔された。
「おい！早く元に戻れよ！」
「無駄だぁ！」
ヒナギクは体から衝撃波を放った。それによりヒナギクの周りにあった物が全てブッ飛ばされた。
「ど・・・どうすればいいんだァァァァァァァァァァァ！？」
頭をかかて古市は叫んだ。
「キシャァァァァァァァァァ！」
古市に気付いたヒナギクは彼に襲いかかった、だが。

バシィィィン！

激しい打撃音が響いた。それと同時にヒナギクが倒れた。近くにはタオルを腰に巻いたハヤテとバスタオルを羽織ったナギが立っていた。
「すみません。本当にうるさいですよ。」
「うるさくて集中できないではないか。」
「じゃ、部屋に戻りますか。」
「そうだな。」
そう言った後、ハヤテとナギは瞬間移動でガンダーラ・ブホテルへ向かった。この様子をしっかりと見ていたイリアとゆりは真剣にメモをかいていた。
「よし！これで次の新聞のネタが完成するわ！」
「早く寮に帰りましょう！」
そう言って彼女らは混沌学院の寮へ戻って行った。

翌週。イリアとゆりは理事長室に来ていた。何らかの理由でお登

勢に呼ばれたのだ。お登勢の机にはハヤテとナギの事が書かれている新聞が置いてあった。
「ふぅ・・・あんたら、何書いたんだい？」
間をおいてお登勢は続けてこう言った。
「新聞部、しばらく活動休止ね。」

第８２話：新聞は世の中の出来事を伝える情報手段（後書き）

おまけトーク特別編

銀凪「さて、今回のおまけトークは特別編といたしまして影が薄くなった２Ｚのやつらに来ていただいとります。」

西沢「ども・・・出演していた時はハムスターとかそんなこと言われていた西沢です。」

吉田「ネギ編の時はシャナちゃんも悠二君も出演していたのに私だけ出られなかった吉田です。」

クラウド「次のＲＰＧ編で活躍する予定のクラウドだ。」

西沢「・・・え、クラウドくん次の長編出るの？」

クラウド「ああ。」

吉田「いいな～、私なんてロクに出てないのに～。」

銀凪「仕方ねーよ、俺まだシャナ途中までしか見てないもん。」

吉田「・・・・・・・」

西沢「私はどうなるのかな？」

銀凪「２Ｚのマスコット枠はハム太郎で十分。」

西沢「・・・泣いていい？」

銀凪「勝手にしろ、ちなみに今回の企画をやったからって吉田と西沢の出番は・・・変わらないと思います。」

西沢・吉田「「！？」」

銀凪「また何か理由をつけて空気となったキャラはまた出すと思います。ではまた～。」

第８３話：学園ドラマの青春と言ったら大半が部活の話（前書き）

銀凪「さて、今回もまた新作品が登場します。」

ハマー「ＹＯ！一体誰だＹＯ！？」

銀八「ちょ、こいつの額マジくせぇ。」

闇「今回の脳内ＯＰは『ロマンス』でお願いします。」

第８３話：学園ドラマの青春と言ったら大半が部活の話

咲夜の家。今新八と咲夜はベランダでのんびりしていた。
「いや～平和ですね～。」
「そうだな～。」
紅茶をすすりながらこのカップルはのほほんとしていた。
「そうだ。」
ここで何かに気付いたように咲夜は新八にこう話しかけた。
「混沌学院に部活ってあったっけ？」
その質問を聞いて新八はこう言った。
「さぁ？」
「さぁって・・・うちより長くあの学校にいるんとちゃう？」
「そうですけど。」
新八は少し間をおいて考え始め、こう言った。
「そもそもこの作品、学園モノなのに部活シーンあまりないですよね。」
「考えて見たら・・・そうやな！これ本当に学園モノか！？」
しばらくはこの作品の部活について二人は話し合った
「「ってかアンタが考えてなかっただけじゃねーかァァァァァァァァァ！！」」
・・・・・・気にするな！

というわけで翌日。二人は興味本位でこの学校の部活について調べ始めた。
「えっと・・・いたって普通の部活ばっかですね。」
「そやな。サッカー部だったり野球部だったり・・・何か珍しいの無いかな～。」
二人は銀時から貰った部活紹介の髪を見ながら歩いていた。そんな中、新八はある部活を見つけた。その部活とは・・・

『マヨネーズ部』

「・・・これ土方さんが作りましたよね。絶対に。」
「ああ。ってかホンマに何してんのこいつ？」
そんな事を言いながら部活内容を見て見た。

マヨネーズ部
マヨを愛する者求む！一緒にマヨについて語り合おう！

「・・・本当にしょうもない。」
「でも何か作りそうやな。土方が。」
「ってかこれ作ったの土方さんですよね。どうせ部長の名前も土方さんの名前が――――」
そう言って部長紹介の欄を見たのだがその部長の名前が『魔世画隙打（まよがすきだ）』になっていた。もちろんこれは土方の変装であり、その土方の衣装はマヨネーズをモチーフとしたかなりダサい鎧っぽい衣装だった。
「・・・次は何でしょうか。」
「そやな～。」
とにかく二人は今のを見なかった事にした。
「他にも何か・・・あ。」
新八はとある記事を見て絶句した。その記事とは・・・。

『ひじ・・・H暗殺部』

「これって。」
「半分以上は予想できています。」
そう言って二人は部活紹介を見るのを続けた。そんな二人の後ろに何者かが近付いてきた。

「やぁ君達！」
「ん？」
後ろを振り向いて見たらそこには黒装束の男が立っていた。
「君達はＨＩＰＨＯＰに興味はあるのかＹＯ！」
あまりにもウザそうなので二人はその男から離れて行った。
「ちょっと待ってＹＯ！興味は――――」
「ねーよ。」
「あと額から変なにおいするで。気持ち悪い。」
そう言って二人は去ろうとしたがうざい男はついてくる。
「ねー頼むＹＯ！頼むからＨＩＰＨＯＰ部に――――」
「ソォォォイ！！」
前から声が聞こえた。その直後、リコーダーの先端が飛んで来て、後ろのウザ男に命中した。
「オイ大丈夫かお前ら？」
前からオレンジ色の髪の男性が現れた。
「あ、はい。ありがとうございます。」
「そうか・・・それより。」
男は少し間をおいて二人にこう言い放った。
「笛部に入らないか？」
（ええ～～～～～っ！）
何か効果音でガビ～ン！とか聞こえてきそうだった。
「俺はジャガー。笛部の顧問だ！」
「そ・・・そうなんですか。」
「それよりとっとと笛部に入れ！生徒が一人も来ないんだよ！お願いだから入って！」
二人はそんな事をジャガーにせがまれた。
「オイ待てぇい！」
そんな中、声がした。後ろを見ると随分久しぶりに出演する星の姿があった。
「お前ら、んな事してたら新八達が困るだろうが。」

「仕方ないだろ～、だって部員はいんないんだも～ん。」
「はぁ、じゃあ二人とも。俺の部に――――」
「結局アンタも部活の勧誘かい！」
その後、ジャガーと星の間で勧誘合戦が始まった。だが始まって数秒して次の勢力が入って来た。
「だったら二人とも～～～～！キタキタ部はいかがですかな～～～～～！？」
腰ミノをつけた変なおっさんが乱入してきた。このおっさんはキタキタおやじと呼ばれているおっさんだ。
「おい！あの二人は俺の笛部に入部するんだ！邪魔をするな！」
「あぁん？俺はなぁ、あの二人には隠れた才能があるって感づいてんだよ！」
「それだったら私もあの二人にはキタキタ踊りを完全にマスター出来るという才能が鎚昨日――――」
「いい加減にしろアンタらァァァァァァァァァァ！！」
ついに新八の怒りが頂点に達した。
「僕らはアンタらの部活には入ったりしねーよ！」
「そやそや！人間性が崩れるわ！」
叫んだ後、二人はこのバカ共から去るように走って行った。
「チッ、またカモを逃したぜ！」
舌打ちと共に星はこう言った。
「はぁ・・・キタキタ踊りの伝承者はいつ現れるのやら。」
「あ～どうすっかな～ってん？」
ジャガーは壁の方を見るとあるポスターを見つけた。そのポスターには部活紹介に関するイベントの事が書かれていた。
「・・・閃いたぜ！」
それを見たジャガーにいい案が浮かんだのであった。

数日後。新八と咲夜は銀時と話をしていた。
「あ、そーだ。オメーら今度やる部活紹介出るか？」

「部活紹介？」
「まぁ色んな部活が帰宅部どもに部活を紹介するっていうありきたりなイベントだ」
「帰宅部って・・・。」
「まぁほんまのことやし・・・。」
「明日辺りやるみてーだから参加しとけよ。」
「は、はい。」
そう軽く新八は返事をした。

てな訳で翌日。学院のステージに新八を含む帰宅部どもが集まった。
「で、何やるんだろうな？」
「何かの紹介やろ？」
そう言って咲夜はステージの前を見た。そんでもって絶句した。
ステージの幕から唯が顔を出していたのだ。
「な・・・何をやってるんだ？」
「え？あ、唯さん。」
「中の様子を見ているのか？」
「みたいですね。」
その後、唯の隣に律が追加された。
「律さんまで。」
「本当に気になっているんやな。」
しばらくして澪の手によって二人は幕の中へ引き込まれていった。
数分後、ステージの中心に松平が現れた。
「はい、という訳でぇ～、部活もろくにやらないで帰宅している連中の為に今日はそんなお前らの為に部活紹介を始める。」
「何かちょっとむかつくんだけど。」
「うん。」
額に怒りマークをつけながら新八と咲夜は松平の話を聞き流していた。

「じゃあまず最初の一組目から。放火魔ティータイムどうぞ！」
「放火魔ではありません！放課後です！」
突然現れた梓が松平に向かって飛び蹴りを放った。

とまぁこんな感じで色んな部活の紹介がやって行った。中にはマヨネーズの衣装を着た土方に向かって沖田が飛び蹴りを放ったりしていたが誰もそんな事は気にしなかった。
「そんじゃあ次はジャガー先生の部活、笛部の紹介をする。」
松平がこう言った後、幕が上がった。そして中央には両手に笛を持ったジャガーがいた。そして彼はリズムに合わせてカッカカンカッカカンとリコーダーをたたいて音を出した。
「ワオ！」
大声でこう言った後、リコーダーを叩きながら左右に踊りながら移動していた。途中で「オールラーイ！」とか「イヤッホーウ！」などと声を出した。そして元の場所に戻り、両膝をつき、両手のリコーダーを上にあげてこう言った。
「ママァンドゥネフ・・・。」
その後、猛スピードで幕が下りた。
「え～、今のは無かった事にしてくれ。」
マイクを持った松平がこう言った。
「そんじゃあ次は―――」
「ＹＯ！次は俺の出番だＹＯ！」
「何を？次は私のキタキタ踊りですぞォォォォォォ！」
幕の後ろからうるさい声が響いてきた。その後。
「おいマサル、何とかしてくれ。」
「おう！ウォォォォォォ！ラヴ・ミー・ドゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」
「「ギャアアア

その後は他の生徒も同様に帰って行った。

第８３話：学園ドラマの青春と言ったら大半が部活の話（後書き）

おまけ！！

銀凪「ついに混沌学院の校歌が完成しました。まぁ歌詞だけだけど！！見て行ってください！！」

混沌学院校歌

1

桜舞う校舎に風吹く何か

スカートの下が見えると期待はするな

どうせ見えたってアレは見えない

期待はするなこの話はラブコメじゃないぜ

ああ～我ら～の～混沌学院

（学園じゃないよ！！）

2

夏は暑くて嫌嫌だぜ

教室にクーラーねーしマジで汗臭い

学校内でクーラーあるのは職員室か保健室

保健室はいいとしても何故職員室にはあるんだよ！？教室にもつけろや！！

ああ～我ら～の～混沌学院
（ただの愚痴じゃねーか！！）

3
○○○と○○○○と○○○○と
○○と○○○○と○○○～
○○○○○○○○○○は～
○○○○○○○○○でいつも○○○○○○○○○
ああ～我ら～の～混沌学院
（○○ばかりで何ってるか分からねぇェェェェェェェ！！）

4
ゆうて　いみや　おうきむ
こうほ　りいゆ　うじとり
やまあ　きらぺ　ぺぺぺぺ
ぺぺぺ　ぺぺぺ　ぺぺぺぺ
ぺぺぺ　ぺぺぺ　ぺぺぺぺ　ぺぺ

（これも校歌じゃなくて復活の呪文じゃねーかァァァァァァ！！）

銀八「いや、こんな歌詞でいいのかよ！？」

闇「でもこの学院っぽいですね。」

歌詞について
７月３０日までに歌詞に関する重要な規定がされたため３番の歌詞、
そして（）内のセリフを変えました。

第８４話：ツンデレキャラのデートというのは見てる方が色んな意味で何か楽しい

銀凪「む～、なかなか長編を書くのが進まない・・・」

銀八「お、苦戦してるのか？」

銀凪「ああ、次のＲＰＧ編はもう最初から最後のオチまで考えてあるけどその途中の話がな～。」

闇「というわけで今回から更新が遅れるかもしれません。今回の脳内ＯＰは『ｎｏ　ｂｕｔｓ！』でお願いします。」

第８４話：ツンデレキャラのデートというのは見てる方が色んな意味で何か楽しと・・・。

ある休日の日、ある男女が歩いていた。
「で、どこ行くのよ？」
「しらねーよ・・・。」
その男女とは御坂と当麻であった。で、その後ろには黒子とインデックスとおまけの銀時が尾行していた。何でこうなったかというと・・・。

数日前。
「ねぇ、美琴ちゃんってやっぱり２Ｎの当麻君の事が好きなの？」
食事中、突然唯にこんな事言われたのだ。
「ちょ！い・・・行きなりなんて事言うのよ！？」
「いや～ちょっと気になって。」
「す・・・好きじゃないけど・・・ちょっと気になると言うか何というか・・・。」
「それを好きだというんじゃねーのか？」
隣にいた律がこう言った。
「イヤイヤイヤイヤ！そんな訳じゃ――――」
「俺がどうかしたかビリビリ？」
突然後ろから奴の声がした。振り迎えって見ると当麻が立っていた。
「なっ・・・何でアンタがここの教室にいるのよっ！？」
「いや、ただ銀さんに用があるだけだけど。」
「そう・・・。」
御坂は顔を真っ赤にして下をうつむいた。その様子を見ている唯と律は面白そうに見ていた。
「どうしたー？顔真っ赤じゃねーか。熱でもあるのか？」
当麻はそう言いながら自分の額を御坂の額にくっつけた。

「ニャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！何すんのよォォォォォォォォォォォォォォォォ！？」
近づいてきた当麻の腕を掴み、そのまま窓の外に放り出した。
「不幸だァァァ

黒子が現れて銀時の首を締め始めた。
「ガガガガガガ、離せ！く・・・苦しい・・・。」
「あ・・・すみません。」
軽く謝罪した後黒子は前を見た。
「お姉さま達、どうやらあそこのクレープを買うみたいですわね。」
「クレープ！！」
目を光らせてインデックスは前を見た。
「先生！おごってください！」
「んな金ねーよ。もう俺金欠なんだよ。」
その時だった。怒ったインデックスが銀時の頭に噛みついたのだ。
「あ！あの二人天下り公園に向かって歩いてますわ！早く私達も行かないと！」
「それよりインデックスさんを頭から外してくれませんか？」
頭にインデックスが噛みついたまま銀時は天下り公園の近くまで移動された。

天下り公園。今ここで御坂と当麻は同じベンチに座っていた。
「キィィィィ！あのエセモンキィィィィィィィィィィィィィィィィ！お姉さまの隣に座るなんてェェェ

はその場に倒れた。
御坂と当麻はゲーセンのガンシューティングで遊んでいた。その様子を自動販売機のアイスを食べながら銀時達はこっそり見ていた。
「あれ？何やってんだお前ら。」
後ろから声がした。銀時が降り迎えって見るとそこには一方通行と打ち止めが立っていた。
「何やってんだ一方通行（ロリコン）。ロリとデートか？」
「うるせェよ。」
「ミサカはミサカはゲーセンに行ってみたいと駄々をこねたので！」
「そうかそうか。」
そう言って銀時は再び前を向いた。
「先生は何やってンだ？」
「御坂のデートの尾行。」
「あいつのデート？」
一方通行は銀時達が向いている方を見ると少し笑ってしまった。
「ププッ、あいつがデートかよ。」
「あ、お姉さま――」
「ちょっと待つですの！」
御坂の名前を呼ぼうとした打ち止めの口を黒子が押さえた。
「お姉さまにばれたら色んな意味で危険ですの！あまり大声で喋ったらアウトですわ！」
「お前も大声でしゃべってたじゃねーか。」
銀時の愚痴を黒子は軽く流した。
「あ、どうやら終わってどこかに向かうらしいぜ。」
「よし、私達はとうまの後を追うけど一方通行達はどうするの？」
「どうすっかな・・・何か面白そうだし俺らも付いて行くわ。」
という訳で一方通行と打ち止めも仲間に加わった。
その後、銀時達はビルの影とかに身をひそめながら御坂達の後を

追っていた。
「おい、いつまでこんなことするつもりだよ？」
「デートが終わるまでです！」
その言葉を聞いた銀時は少し呆れた。だが少しして当麻の声が聞こえた。
「ん？何かあったようだぜ。」
「どれどれ・・・。」
銀時と一方通行が外を見ると当麻の服が汚れていた。どうやら道端の水たまりの所を車が通り、泥が服に当たったようだ。だがそんな事銀時達は知らなかった。
「何かあったみたいだな。」
「そうみたいだな。」
「でも何があったんだ？」
「さぁ？」
何とか見ようとするが全然分からなかった。

一方御坂達の方は。
「うわ～、びしょびしょじゃねーか・・・。」
「困ったわね、どこかに服を乾かす所があるかしら・・・あ。」
御坂の目にある建物が映った。
「ちょっと、あそこに行って服を乾かすわよ。」
「おい、あの店でいいのか？」
「仕方ないじゃない、風邪ひくわよ。」
「誤解されると思うが・・・。」
「そうだけど風邪ひくよりましでしょ。」
そう言って彼らはその建物の所に向かって行った。

「お、移動し始めたぞ。」
その様子を見ていた銀時が声を上げた。
「どこに移動するンだ？」

銀時と一方通行はどの場所に移動するか見ていた。そして絶句した。御坂と当麻が向かった先にあった看板にはこう書かれていた。

『ガンダーラ・ブホテル』

「またこのホテルネタかいィィィィィィィィィィィ！！」
銀時が大声を上げてこう言った。
「ちょ！あそこラブホなのかよ！」
「そうだよ！ややこしいけどな！」
「「ラブホ！？」」
後ろにいた黒子とインデックスが声を上げた。
「ま・・・ままままままさか・・・。」
「ととと・・・とうまが・・・まさか・・・。」
二人はかなり動揺していた。まぁ当然だろう。
「ラブホって何？ってミサカは聞いてみたり。」
「お前にはまだ早い！いや、早すぎる！」
「・・・お姉さまの（ピーーーーー！）は、私が守るゥゥゥゥゥゥ！！」
奇声を上げながら黒子はガンダーラ・ブホテルに向かって行った。
「あ！ちょま！ちょ待てよ！」
銀時が止めようとしたが結局は無駄に終わった。
「先生！俺らもいかねェとヤバいンじゃないか！？」
「そうだな、あいつらを第二のハヤナギにさせちゃあまずい！色んな意味で！」
「だったら止めよう！とミサカは張り切ってみたり！」
「とうまァァァァァ！今行くからァァァァァァ！！！」

そう言って銀時達もガンダーラ・ブホテルへ向かって行った。

という訳でホテル内。

「ああ、そのお客様なら服を乾かすために来ましたよ。」

銀時は御坂達がここに来た理由を初めて知った。

「んだよ、ややこしいな～。」

「はぁ、何か拍子抜けだぜ。」

「でもよかったねってミサカは言ってみたり。」

安堵した銀時は黒子達に向かってこう言い始めた。

「オイ、じゃあ俺らはさっさと店の外に行こうぜ。ここにいるとあいつ等に尾行が――」

ここまで言いかけて銀時は絶句した。黒子は人の話を全然効いてなかった。

「お・ね・え・さ・ま～～～

「ここから右の道に行ったぞ。」
「そうか、ありがとよ！」
例を言って銀時達は右の道に行こうとしたが、銀時はある事に気づいて立ち止った。
「オイ、悪いけどお前ら先に行ってろ。」
「あ・・・ああ。」
一方通行と打ち止めを先に行かせた後、銀時は再びハヤテにこう聞いた。
「ちょっと質問だが・・・何でオメーらがラブホにいるんだよ？」
「え？だって・・・先生、男女でラブホに来るなんてやる事は一つに決まってるじゃないですか。」
笑顔でハヤテはこう言った。
「待て待て待て待て待て待て待てェェェ

斬撃音が響いた。その後、その声の主はこう言った。
「私のストレス発散の試し斬りになってくださいね♪」

一方黒子はある事を考えていた。
「そうだ！私が突然テレポートして二人の営みを邪魔しましょう！」
「そんな事で斬るの？」
「フッフッフ、テレポート使いを甘く見ないでほしいですわ！」
そう言って黒子はテレポートした。

その頃、当麻の方は。
「うわ～、泥がめっちゃくっついてる・・・」
部屋の洗濯機の前に立っていた。泥で汚れた服を洗濯機の中に入れ、洗っているのだ。
「どう？汚れ落ちた？」
「まだ、これから洗う。」
「そう。」
御坂と短い会話を交わした後、洗濯機の電源スイッチを押して服を洗い始めた。その時だった！
「お姉さまァァァァァァァァァァ！！！！！！！」
突然目の前に黒子があ割られたのだ。

「あ！こえがした！」
廊下にいるインデックスは黒子の声を聞き、声の下部屋の前まで走って行った。
「お！インデックス！」
丁度走っていた一方通行と打ち止めもここまで来た。
「ここまで追って来たの？」
「ああ、ってか中で何が起きンだ？」
その後、彼らの脳内に（ピーーーーー！）な想像が浮かんだ。

「これはまずい！」
「早く中に！」
そう言って部屋の中に入った。
「ちょ！アンタら何でここに！」
驚いた声を上げたのは御坂、彼女はベッドの上で雑誌を呼んでいた。
「お姉さま、全裸じゃないってミサカは言ってみたり。」
「ってか当麻はどうした？」
「あいつなら洗濯機の所よ、途中で車がはねた泥が服についたから選択しないと思ってここへ来たの。」
真相を聞いた一方通行達はその場に座り込んだ。
「ンだよ、こんな理由でかよ。」
「本当にびっくりした・・・。」
だがその時だった。
「オワギャアアアアアアアアアアアア！！」
洗濯機のある部屋から当麻の悲鳴が聞こえた。そして中から半裸の当麻と黒子が現れた。
「あ、お姉さま！このバカ野郎は黒子が無事に始末―――」
「くゥゥゥゥゥろォォォォォォこォォォォォォ！！！」
御坂は怒りのオーラを発していた。
「あの、お姉さま？」
「アンタはバカかァァァ

「・・・ま、いいか。」
しばらくは悩んだが一方通行も考える事を止めた。

第８４話：ツンデレキャラのデートというのは見てる方が色んな意味で何か楽し

ここで宣伝

この場を借りてちょっと宣伝します。今ボッスンさんがこの混沌学院の外伝を書いてくださっています。話によるとちょっとシリアスシーンが多いという話です。最後にボッスンさん、勝手に宣伝してすみません。これからも応援します。

第８５話：命の危機になると人は火事場のクソ力を発揮する（前書き）

銀凪「今回はエルシャダイをネタにした悪ふざけがあります」

ルシフェル「悪ふざけＯＫという人なら見て行ってくれ」

イーノック「今回のＯＰは『乾いた叫び』だ」

第８５話：命の危機になると人は火事場のクソ力を発揮する

やあ、パソコン及び携帯電話の画面の前の子猫ちゃん達（男を除く）。２Ｚの古市です。
「オイ古市！お前何やってんだ！早く逃げろよ！」
今声を出したのは神崎さんです。え？何でこうなってるかって？実は・・・。

数分前。２Ｚの面子は２Ｎの面子と共にいた。
「今日は２Ｚ対２Ｎでサバゲーをやってもらう。」
体育教師の松平がこう言った。
「何でサバゲーアルか？」
手を上げて神楽がこう聞いた。
「なんとなくだ。」
「そんな理由でかよ！」
その言葉に対して新八はこう叫んだ。
「まぁさっさと準備をしてさっさとサバゲーしろや。」
そう言って松平はその場に座って酒を飲み始めた。

という訳でサバゲーが始まったのだが・・・考えてほしい、２Ｚの面子と２Ｎの面子が真面目にサバゲーをやると思うか？答えはノー、最初っからこんなことになっている。
「カカロット！今日こそを貴様を倒―――」
「カカロットォォォォォォォォ！！」
「フォッ！？」
いきなりブロリーがベジータにラリアットを仕掛けたり。
「さぁ行くぜ！この虫野郎！」
「誰が虫野郎じゃァァァァァァァァァァァァ！！」
久しぶりに登場した王様が妙に喧嘩売って再起不能になったり。

「キャッホーイ！これはすげーアル！」
「う～ん、やっぱりロードローラーの方がいいな。」
「オワァァァァァァァ！助けてくれェェェェェェェ！！」
遊星のＤーホイールを神楽とリンがパクって乗りまわしていたりしていた。そんな中、バカをやらかしたバカがいた。そのバカとは。
「皆！気をつけて行こうね！」
「うん！」
なのはがフェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、リィン？とともに移動をし始めたのだが。
「・・・・・・・ギャフン！」
なのはの足元から変な声がした。もう一回踏んでみるとまた声がした。
「・・・・・・・・まさか。」
そう言って下の地面を調べるとそこからサンジが現れた。しかも彼はカメラを持っている。ちなみい今のなのは達の衣装は返信している時の姿。もちろんスカートをはいている。
「・・・・・・・・頭・・・冷そっか。」
そんな事があった為なのはは魔王モードになってしまった。で、近くにいた古市＆神崎もその攻撃に巻き込まれようとしていたのだ。
「オワァァァァァァァ！何やってんだあのバカコックはァァァァァァァ！？」
「俺、気持ちが分かるけど。」
「しらねーよそんな事！」
走りながら神崎と古市は会話していた。そんな中、上から何かが降って来た。上から降って来た何かは着地と同時にドヤ顔を決めた。そう、イーノックである。
「邪魔だァァァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアアア！！」
神崎は手にした電動エアガンをイーノックに向けて発射し――――

ドォン！

神は言っている・・・ここで死ぬ運命（さだめ）ではないと・・・

銀凪「今回はエルシャダイをネタにした悪ふざけがあります」

ルシフェル「悪ふざけＯＫという人なら見て行ってくれ」

イーノック「今回のＯＰは『乾いた叫び』だ」

第８５話：命の危機になると人は火事場のクソ力を発揮する

やあ、パソコン及び携帯電話の画面の前の子猫ちゃん達（男を除く）。２Ｚの古市です。
「オイ古市！お前何やってんだ！早く逃げろよ！」
今声を出したのは神崎さんです。え？何でこうなってるかって？実は・・・。

数分前。２Ｚの面子は２Ｎの面子と共にいた。
「今日は２Ｚ対２Ｎでサバゲーをやってもらう。」
体育教師の松平がこう言った。
「何でサバゲーアルか？」
手を上げて神楽がこう聞いた。
「なんとなくだ。」
「そんな理由でかよ！」
その言葉に対して新八はこう叫んだ。
「まぁさっさと準備をしてさっさとサバゲーしろや。」
そう言って松平はその場に座って酒を飲み始めた。

という訳でサバゲーが始まったのだが・・・考えてほしい、２Ｚの面子と２Ｎの面子が真面目にサバゲーをやると思うか？答えはノー、最初っからこんなことになっている。
「カカロット！今日こそを貴様を倒―――」
「カカロットォォォォォォォォ！！」
「フォッ！？」
いきなりブロリーがベジータにラリアットを仕掛けたり。
「さぁ行くぜ！この虫野郎！」
「誰が虫野郎じゃァァァァァァァァァァァァァ！！」
久しぶりに登場した王様が妙に喧嘩売って再起不能になったり。
「キャッホーイ！これはすげーアル！」

「う～ん、やっぱりロードローラーの方がいいな。」
「オワァァァァァァァ！助けてくれェェェェェェ！！」
遊星のＤーホイールを神楽とリンがパクって乗りまわしていたりしていた。そんな中、バカをやらかしたバカがいた。そのバカとは。
「皆！気をつけて行こうね！」
「うん！」
なのはがフェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、リィン？とともに移動をし始めたのだが。
「・・・・・・・ギャフン！」
なのはの足元から変な声がした。もう一回踏んでみるとまた声がした。
「・・・・・・・・まさか。」
そう言って下の地面を調べるとそこからサンジが現れた。しかも彼はカメラを持っている。ちなみい今のなのは達の衣装は返信している時の姿。もちろんスカートをはいている。
「・・・・・・・・頭・・・冷そっか。」
そんな事があった為なのはは魔王モードになってしまった。で、近くにいた古市＆神崎もその攻撃に巻き込まれようとしていたのだ。

「オワァァァァァァァ！何やってんだあのバカコックはァァァァァァァ！？」
「俺、気持ちが分かるけど。」
「しらねーよそんな事！」
走りながら神崎と古市は会話していた。そんな中、上から何かが降って来た。上から降って来た何かは着地と同時にドヤ顔を決めた。
そう、イーノックである。
「邪魔だァァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアアア！！」
神崎は手にした電動エアガンをイーノックに向けて発射し――――

ドォン！

神は言っている・・・ここで死ぬ運命（さだめ）ではな―――

「何やってんだお前はァァァァァァァァァァァ！？」

古市は叫びながら近くに潜んでいたルシフェルの後頭部に向けてエアガンを発射した。

「何前書きまで戻してんだよアンタ！何が何でもここまでやる必要ねーだろ！」

「スマン、戻し過ぎた。」

そう言ってルシフェルは軽く謝った。だが古市の後ろには魔王と化したなのはが立っていた。

「オワァァァァァ！！」

「早く逃げねーとォォォォォォォォォ！！」

そう言って全速力で古市達は逃げて行った。

一方新八は咲夜と共にどこかに隠れていた。

「ったく、あの人も何考えているんだ。」

「さぁ？」

「うちのクラスと２Ｎの合同授業なんてカオスを産むだけなのに。」

「そやな～。」

小さな声でそんな会話をしていた。少しして声が聞こえた。

「待てェェェェェェェェ！このエテモンキー！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

黒子が巨大エアガンを持って当麻の後を追っていた。

「・・・何やってるんだ黒子さんは・・・。」

「さぁ？」

次にまた声が聞こえた。

「うォォォォォォォォ！すげーアル！カードのイラストが飛びだした

ネ！」
「勝手に俺のデュエルディスクに触れるなァァァァァァァァ！！！」
「ブルーアイズ、あのうるさい腐った玉ねぎみたいな髪型した奴に攻撃アル！」
「待てブルーアイズ！俺だ！海馬だ！お前の主の――ギャアアア

絶体絶命。だが奇蹟が起った。
「ブルーアイズで攻撃！」
「「「キャアアア

敵の数は不明、だが二人以上入るとフェイトは確信した。
「こうなれば・・・。」
フェイトは銃を構え、弾が発射された方へ向かって連射した。
「おわ！」
「きゃあ！」
男女の声がした。だがその後でまた弾が発射された。命中していなかったようだ。
「くそ、ばれたらしいな。」
「そうみたいだね。」
「この声は・・・ロイドとコレットね。」
フェイトはこう言った後、両手に銃を持って弾をぶっ放した。
「オワッ！正体ばれたのか！」
近くの茂みからロイドが現れた。彼の片手にはハンドガンがあった。
「これでもくらえ！」
彼のハンドガンから弾が発射される。弾の軌道を見てフェイトは横に避けたのだが。
「甘いよ！」
「しまった！」
近くにコレットが現れたのだ。彼女もまたハンドガンを装備していた。コレットは手にしているハンドガンのトリガーを引こうとしたのだが・・・。
「あれ？えいっ、えいっ！」
「どうしたコレット？」
「トリガーが動かないの。」
「マジで？」
ロイドはコレットに近づき、ハンドガンを手にしてみた。
「どうなってんだ？」
ロイドもまたトリガーを引いてみた。だがその直後、ハンドガンは破裂して辺りにＢＢ弾が散らばった。周りにいたロイド、コレッ

ト、フェイトの体にバチバチと弾が当たっていった。
その頃、神楽が強奪したブルーアイズの背中に乗っている新八達は上空から戦いの様子を見ていた。
「うわ・・・もうグラウンドがめちゃめちゃだよ。」
「あ、ヤムチャがまたあのポーズで倒れているわ。」
「二人とも、何をゴチャゴチャ言っているネ。」
ブルーアイズの頭の上に座っている神楽が喋り始めた。
「このまま私達があいつ等の旗を奪い取るネ！」
「「エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！」」
新八と咲夜は驚いたが神楽はそんな事を気にせず２Ｎの旗の元へ向かって行った。

「おい、デュエルしろよ。」
「今そんな事言ってる場合じゃないＺＥ。」
２Ｎの旗の近く、ここでお妙にボコボコにされてここまで逃げてきたアテムと蟹・・・じゃねーや遊星が旗を守っていた。
「相手は２Ｚ何だＺＥ、油断しているとすぐに倒される。」
「そんなの関係ない、俺とスターダストが何とかする。」
その時だった。突然上空から神楽が乗るブルーアイズが奇襲を仕掛けて来たのだ。
「オワァァァァァァァ！」
「何ィ！」
「フハハハハハー！おとなしく旗を渡すネ！」
高笑いをしながら神楽はこう言った。
「神楽ちゃん！これやり過ぎじゃない！」
「そうや！いくらなんでも戦闘能力もないあいつ等にもう攻撃なんてしたらホンマに死んでしまうで！」
咲夜の言ったセリフにアテムと遊星の額に怒りマークが浮かんだ。

（もう一人の僕！）
ここで遊戯がアテムの心の語りかけた。
「ＡＩＢＯ！」
（どうするんだい？向こうは海馬君のブルーアイズを奪って来たんだ。反撃しても無駄だと思うけど。）
「・・・悪いなＡＩＢＯ！俺達は・・・。」
「あいつらをここで止めてこの作品のヒーローとなる！」
そう言うとアテムはブラックマジシャンのカードを、遊星はスターダストドラゴンのカードをデュエルディスクに入れた。
「行くＺＥ！ブラックマジシャン！」
「光さす道となれ！スターダストドラゴン！」
その後、まばゆい光と共にブラックマジシャンとスターダストドラゴンが現れた、だが。
「そんな攻撃力たった２５００のモンスター、粉砕してやるネ！」
神楽がそう言った後、ブルーアイズから滅びのバーストストリームが発射され、二人の切り札をあっさりと撃破した。
「オイィィィィィ！いいの？こんな事して！」
「いいある、所詮遊戯王では主役だけどこの作品ではただのわき役ネ。」
「ファンがブチ切れるで！」
ブルーアイズの上でギャーギャーやっているその時だった。
「おーい！新八ー！」
「無事だったかー！」
下から古市と神崎の声が聞こえた。
「古市さん！神崎さん！」
「お前ら何やってんだ！ブルーアイズなんかに乗って！」
「神楽ちゃんが強奪したんです、それより古市さん達も何でここに？」
「何か逃げてたらここに来た！」
「で、ここに何かあるのか？」

神崎がこう聞いてきた。
「ここに２Ｎの旗があるんです。」
「これを取れば私達の勝ちアル！」
「よし！じゃあこの戦いは俺達の――――」
ドォン！
神は言っている・・・２Ｎはここで――――
「うるせェェェ

第８５話：命の危機になると人は火事場のクソ力を発揮する（後書き）

おまけトーク

梓「作者さん、少しは反省してください」

銀凪「・・・はい」

銀八「たまにはやりすぎじゃね？とか考えろ」

銀凪「・・・はい」

第８６話：戦隊物は最初は五人だけど後で仲間が増える絶対にな！（前書き）

銀凪「ヤバい・・・ＲＰＧ編書く暇がない！！」

銀八「オイオイ・・・」

梓「頑張ってくださいね」

黒猫「脳内ＯＰは『＊～アスタリスク～』でお願いね」

第８６話：戦隊物は最初は五人だけど後で仲間が増える絶対にな！

５Ｚ教室、仲良さそうにエリオとキャロが話していた。当たり前だろう、こいつらカップルだから。
「あいつらいつも仲良さそうに話しているな～。」
教師机に座っているルイージがこう呟いた。
「そうだな～。ホント、いつもいつもそうだな～。」
隣にいたクッパがこう言った。
「でもまたリア充抹殺隊のバカ共が騒ぎを起こさなければいいのですがね～。」
これまた隣にいた沙都子がこう言った。だが彼女の予感は当たってしまった。５Ｚの窓にはリア充抹殺隊の一人がエリオとキャロの会話を聞いていた。
「これは・・・またリーダーに――――」
「何がリーダーですか？」
下から声が聞こえた。下には梨花と羽入が立っていた。
「あ・・・。」
「フフフ♪」
その後、会話を聞いていたリア充抹殺隊の男はお仕置きされた。

数分後、リア充抹殺隊のリーダーであるサンジはメンバーを全員集め、会議室にいた。
「今日皆に集まってもらったのは他でもない、この学院全体のリア充のクソ野郎の事だ。」
こう一言言った後、サンジは具体的に話を進めた。
「この学院の全体をよく見るとリア充が多すぎる。今日もまた５Ｚに偵察しに言って来た勇者がいたが５Ｚに捕まり、やられたそうだ。」
「まだエリキャロはイチャついてるのか？」

前にいる隊員が手を挙げ、こう言った。
「ああ。あと俺のクラス、２Ｚにも猛者がいる。ハヤテとナギ、ロイドとコレット、エミルとマルタ、そして新八と咲夜。こいつらは手を出しちゃいけないが・・・まだ子供のエリオとキャロは何とかすれば勝てる！方法は何でもいい！若くてもいい！俺達がリア充の夢を壊すんだ！」
「「「「オオオオオ！！！」」」」
話の後で一致団結したバカ共でした。

数日後、エリオとキャロは下校していた。だがその後ろを怪しい影が尾行をしていた。
「・・・誰ですか？僕達の後を追っているのは！」
デバイスを握り、二人は降り迎えった。後ろにいた影は五人。五人とも黒いローブを羽織っていた。
「・・・俺達は・・・。」
中央にいた男がローブを脱ぎ、正体を現した。そして残りのメンバーも同じようにローブを脱ぎ、同時にこう叫んだ。
「「「「「リア充撲滅戦隊！ソウカイジャー！！」」」」」
その正体とは今やっている（この話を書いていた七月現在）戦隊物をパロったような衣装を着たサンジ、近藤、東城、家康、元校長だった。
「・・・何やってんですかアンタら？」
「決まってるだろ！お前らのようなリア充を撲滅するために俺達は生まれたんだ！」
「生まれたって・・・ただゴーカイジャーパクっただけじゃないですか。」
「問答無用！死ねェェェェェェ！！」
ソウカイジャーがエリオとキャロに襲いかかったと思ったがその時だった！
「オーッホッホッホ！また懲りずに現れたのですね～、おバカさん

達が！」
　その後、エンジェルレンジャーが再びこの作品に現れたのだ！
「トラップ大好き、エンジェルレッド！」
「光る雷鳴、エンジェルイエロー！」
「食べる事大好き、エンジェルピンク！」
「何やかんだで巻き込まれたオレンジ。」
「同じくホワイト。」
「「「我ら！エンジェルレンジャー！！」」」
　ドォォォォォン！
　エンジェルレンジャーの隊員である沙都子、ピカチュウ、カービィはポーズを決めたがオレンジ、ホワイトはポーズを取らなかった。
「ちょっと！黒崎先輩！日番谷先輩！ちゃんとポーズを取ってくださいよ！」
「何がポーズだ！俺らをトラップにはめて勝手にその訳わかんないメンバーに加えやがって！」
「俺達はもう帰るからな！」
　そう言って一護と日番谷は衣装を脱ごうとしたが脱げなかった。
「フッフッフ、実は石田先輩に頼んで敵を倒さないと脱げない様に細工しました♪」
「何やってんだあいつぅぅぅぅぅぅぅ！！」
　日番谷が空に向かってこうシャウトしたその時だった。
「し・・・シロちゃん？」
「なっ！」
　近くで雛森の声がした。日番谷が声がした方向を見ると変な物を見るような目でこちらを見つめている３Ｚの雛森の姿があった。
「なっ・・・雛森！どうして・・・？」
「お買い物に来ただけだけど・・・シロちゃんこそ何やってるの？」
「い・・・いや、これはあのガキどもにはめられてこんな姿にされたんだよ！」
「・・・そう。そういう趣味かと勘違いしちゃった。」

「そんな趣味ねーよ！」
「後俺もな！」
誤解されそうだったので一護と日番谷は何とか誤解を直した。そんでもってその後で今の状況を伝えた。
「はぁ・・・話には聞いたことがあるけど・・・本当にどうしようもない人達だね。」
「何だその変な物を見るような目は！」
雛森の目を見たサンジがこう言った。
「はぁ、ちょっと黙ってて下さい。」
誰もが呆れたその時だった。
「な！霊圧！」
一護が何者かの霊圧を感じたのだ。隣にいた日番谷も武器を構えた。
「誰だ！出て来い！」
こう叫んだ後、ある人物が現れた。それは・・・
「ども～、黒崎さ～ん。」
一護の知り合いの浦原だった。
「う・・・浦腹さん！何やってるんですか！？」
「いや～、この子達にあるものを作ってくれって言われたので。で、今ようやく完成したので黒崎さんと日番谷さんに渡そうかと思いまして～。」
そう言う彼の手には卍のマークが描かれた鍵だった。
「黒崎さん、日番谷さん。ベルトの中心に鍵穴がありますよね。」
「鍵穴？ああ、これか。」
「その鍵穴の所にその鍵をさして回して下さい。」
その後、二人は浦原に言われた通りに鍵をベルトの中心部に刺して回した。すると二人の武器が卍解時の武器となったのだ。
「なっ！」
「何だこれ！」
「実はこれ、私が開発した卍解キーです。これをあなた方が装着し

ているベルト専用の鍵でこれをさして回すと卍解出来ます。」
「いいのかよこれ！」
「多分いいと思います。」
そう言って浦原は去って行った。
「・・・まぁいい、とにかくあのバカ共を一掃―――」
「「「「「ギャアアア

た。
「オイ！何か手はあるのか！？」
「フッフッフ、甘く見てもらっては困りますわ！」
日番谷に何かあると聞かれた後、沙都子は携帯を取り出しある人物へ連絡をした。
「さ～て、ここからは巨大ロボ同士の戦いでしてよ！」
「巨大ロボ同士って――――」
『待たせたな！』
突然スネークの声が響いた。辺りを見回すとメタルギアがこちらに向かって走って来ていた。
「おわァァァァァァ！何やってんだスネーク先生はァァァァァァ！！」
『とりあえず一護達も乗れ！』
こう言われたので一護と日番谷もメタルギアに乗り込んだ。

「キャロ、今のうちに逃げよう！」
「うん！」
巨大ロボ同士が激しいバトルを繰り広げている間、エリオとキャロは逃げていた。
「ったく、何やってるだろうね、サンジさんは。」
「そうだね、ホント高校生のやる事じゃないよ。」
そう愚痴をもらしながら走っていた。だが。
『ヤベッ！ダメージ受けてロボのバランスがァァァァァァァ！』
ソウカイガレオンがダメージを受けてバランスを崩してエリオの真上に転倒してきた。
「ウワァァァァァァァァァァァ！！」
突然のことだったのでエリオはソウカイガレオン下敷きになってしまった。
「エリオくゥゥゥ

になって怒りが爆発した。
「ヴォルテェェェェェェェェル！！」
キャロの叫び声に合わせて使い魔のヴォルテールが巨大化した。
その大きさは大体ソウカイガレオンと同じだった。
「な・・・何じゃこりゃァァァァァァ！？」
突然の出来事だったのでソウカイガレオンの操縦席に座っているサンジは驚いた。
「あの変な形したロボットを宇宙の果てまでブッ飛ばして！」
キャロがそう言ったのでヴォルテールは渾身の力を込めてソウカイガレオンをブン殴った。そして空に向かってぶっ飛び、星となった。
「エリオ君！エリオ君！」
その後、キャロは気づついたエリオの元へ向かった。この様子を見ていた一護はこう呟いた。
「俺らは一体何のために来たんだよ？」

一方その頃、宇宙空間では。
「パパ、あれが地球という星だよ。」
「ほう、とても青いな。」
「あの星がもうすぐ僕達の物になるんだ。」
宇宙船の中でフリーザ親子がこんな会話をしていた。だが目の前にソウカイガレオンがやって来た。そして宇宙船と正面衝突をして大爆発を起こした。かくしてサンジ達は地球制服をしようとしたフリーザ達をやっつけたのであった。めでたしめでた――――
「全然めでたくねェェェェェェェ！！」

次回！
またバカをやらかした太子先生！このバカのおかげで混沌学院はRPG世界になってしまった！新八達の世界を元に戻す冒険が今始まる！次回混沌学院『ゲームの序盤でそのゲームの評価が変わるん

じゃねーの？』次回、長編ＲＰＧ編開始！
「勝った！第３部完ッ！」
「いや！次回から長編始まるから！」

第８６話：戦隊物は最初は五人だけど後で仲間が増える絶対にな！（後書き）

おまけトーク

ほむら「・・・なぜ私がこんなところにいるの？」

銀凪「まどかマギカも出すから。その代表で」

銀八「まどかも出すのかよ！？」

パラガス「今ブームですからね」

銀凪「まどか達はＲＰＧ編が終わった後に出す予定です。あと今まだＲＰＧ編を書いているので今回から更新が遅くなります。本当にすみません。俺も今頑張っています」

ほむら「あなたのどうでもいいあいさつは置いておいてまどかは！？まどかは！？」

第８７話：（ＲＰＧ編）ゲームの序盤でそのゲームの評価が変わるんじゃねーの

銀凪「はい、ではＲＰＧ編に行きましょう」

銀八「どうなるんだろうな？」

梓「でも終わった少しあとにまたヒナギクさんの最後のヤンデレの物語が・・・」

銀凪「・・・そちらの方も頑張ります。頭の中で一応話は出来上がっています」

黒猫「というわけで今回の長編のＯＰは『カルマ』でお願いね」

第87話：（RPG編）ゲームの序盤でそのゲームの評価が変わるんじゃねーの

混沌学院地下倉庫、今ここに一人のバカがいる。そう、ほとんどの長編で騒ぎを引き起こしている太子先生がここにいたのだ。
「ひぇ～、お登勢理事長に罰としてここの掃除しろって言われたけどこんなに広いなんて聞いてないよ～」
彼は手に持ったモップを振りまわしながら辺りを歩いていた。そんな中、足元に小さな箱がある事に気付き、それを開けた。
「何が入っているのかな～」
そしてその箱を開けてしまった。その後、箱からまばゆい光が学院中に放たれた。

暗闇の中、彼はここで目が覚めた。
「ここは・・・どこだ？」
起きあがって辺りを見て見る。そこは彼がいた教室ではなかった。
「んん・・・あれ？ここどや？」
隣で女の子の声が聞こえた。
「あ、新八。お前もいたんか」
そう、この少年と少女は新八と咲夜の事だった。彼らが目を覚ますとそこは2Z教室ではなく活気な町だった。
「な・・・何だここ？」
「とりあえず話を聞こう」
二人は近くにいた街の人に話を聞いた。
「すみません、ここはどこですか？」
「ここはジャスラミのまちだよ」
「そうですか、ありがとうございます」
話を聞いた後新八は昨夜の元へ向かった。
「何かここの街はジャスラミという名前らしいです」
「そうか。分かった」

その後、二人は適当にジャスラミの街を歩いて行った。だが外に出ようとした瞬間、街の人に止められた。
「ちょっとあんたら！そうびももたないでそとにでるきかい？そとにはモンスターがうじゃうじゃいるよ！」
「は・・・はぁ・・・ん？」
ここで新八はある事に気付いた。
「ねぇ、何かこの街の人達って話し方がおかしくないですか？」
「そやな、何かひらがなとカタカナで喋ってるし」
「何かまるでＲＰＧの世界に迷い込んだみたいですね」
「本当に迷い込んだんだよ～」
どこからか太子の声が聞こえた。二人が辺りを見回すとそこには小さな姿で宙を舞っている太子の姿があった。
「た・・・太子先生！一体どうしたんですか？」
「・・・実は～」
そう言って太子は話し始めた。
「実は私が地下で掃除をしている時に何か変な小さな箱があったんだよ。で、開けて見たら何か魔王とか名乗る男が現れてこの学院をＲＰＧの世界にしてやるとか言って辺りを光らせてどっか言っちゃったんだ。で、気付いたらこんなに小さくなってたわけ」
太子の話を聞いた後、新八と咲夜は声を合わせてこう言った。
「「結局アンタのせいかぃィィィィィィィィィィ！！」」
同時に二人は太子に向かって飛び蹴りを放った。

その後、新八達は街の酒場へ向かった。
「・・・一体どうすればいいんでしょう？」
「さぁ？」
「私にもさっぱりだ」
誰もがこの先どうしたらいいのか分からなかった。魔王という人物を倒せば何とかなると考えてはいるのだがその人物がどこにいるのか分からなかったのだ。そんな中、こんな話が聞こえた。

「しってるか？このまちのおうさまがまおうをたおすためになんにんかゆうしゃをよんだらしいぜ」
「マジで？またかよ」
そんな話が聞こえたのだ。その話を聞いた新八はこう話した。
「何かここの王様が魔王を倒すために勇者を集めているらしいですね」
「そのようやな。うちらも行ってみるか？」
「そうしましょう」
話を終えた後、三人は王様の所へ向かった。門の前の兵士に来た理由を言ったらあっさりと通してくれたので何とかなるんじゃね？と思っていた。
「よくきたな、わかものたちよ」
「このオッサンも平仮名かよ」
咲夜の口からこんな愚痴がこぼれたがしっかりと追う様の話を聞いた。まぁ話の内容は王道ＲＰＧでよくある展開、魔王が現れて姫がさらわれたという話。話を聞いた後、新八と咲夜は隣の部屋に呼ばれた。
「何でしょうかね？」
「さぁ？」
しばらくして部屋にいた人が二人に話しかけて来た」
「ではいまからあなたがたのジョブをきめたいとおもいます」
「ジョブ？」
「何だそれ？」
「まぁけんしとかまほうつかいとかそういのです」
てな事があった。そして二人のジョブが決まった。咲夜は・・・。
「な・・・何やこの姿はァァァァァァァ！？」
何故かきわどい踊り子の衣装となった。
「さくやさんはおどりこのようですね。おどりこはおどりでみかたをサポートします。ちなみにせっきんせんでもおどりをくししたわざでこうげきができます」

「平仮名ばっかで分からないけど何かすごそうやな」
咲夜はちょっと喜んでいるのだが新八のクラスは・・・。
「どうやらしんぱちさんのジョブはめがねのようですね」
「ジョブが眼鏡って何じゃァァァァァ！？」
全身タイツになった新八がこう叫んだ。
「じゃあまおうたいじ、がんばってくださ～い♪」
「こんなジョブで魔王を倒せるかァァァァァァァ！！」
新八がこう叫んだその時だった。
「あ、新八さんもいたんですか」
扉の方で声がしたのだ。その方を見るとハヤテとナギ、そしてラグナとノエルがいたのだ。
「ハヤテさん達もここに来たんですか」
「ああ。何かえらい事になったな」
「そうですね～、それより今からハヤテさん達もジョブを決めに？」
「はい、いや～何かドキドキしますね～」
「それよりお前のジョブは何だ？」
ラグナがこう聞いてきたので新八は小声でこう言った。
「・・・ガネ・・・」
「んだぁ？もうちょっとはっきり言えよ」
「・・・メ・・・ガネ・・・」
「ん？」
「眼鏡ですよ眼鏡！」
その事を聞いたラグナは鼻で笑った。
「め・・・眼鏡って・・・プククク・・・どんだけだよププッー！！」
「殴りてぇ、思いっきり力を込めてコイツ殴りてェェェェェェ！！」
「ちょ！落ち着いてください！！」
「そうや！一旦冷静になれ！！」
咲夜とノエルが新八の気を沈めた。
「さぁ、俺のジョブは何かな？」

そう言ってラグナも自分のジョブを調べた・・・結果は・・・
「な・・・何で制服？」
制服だった。
「オイ、これ何のジョブだ？」
「このじょぶはちゅうにびょうです。とくせいとしてとてもいたいこです」
「何じゃそりゃァァァァァァァァ！？」
「とくぎとしてみぎてのいようなちからがかいほうしててきをたおせる、みかたのピンチじにへんなことばをいってパワーアップ、などというちゅうにびょうどくとくのアビリティが――――」
「本当に中二病じゃねーかァァァァァァァ！！」
「そうですね・・・プククク」
「お前も笑ってんじゃねー！」
その時のラグナは少し涙目だった。その後はノエル、ハヤテ、ナギもジョブを決められていった。ノエルはガンナー、ハヤテとナギは魔法剣士だった。ジョブを決めた後、城の兵士たちなどに話を聞き、彼らは次の場所へと旅立った。
「えーっと、これまでの情報をまとめると・・・まず次の街へ行くにはこの辺にある『シチマガリの抜け穴』を通らなければならない」
「で、次の街にはちょっとした事件が発生しているっつー話だな」
「じゃあまず最初はその抜け穴に行ってみましょう」
「そうですね。じゃ！旅を始めましょう！」
「「「「おう！」」」」
そう言って新八達はシチマガリの抜け穴に向かって歩き始めた。

次回！
新八達はシチマガリの抜け穴へ向かった。で、次の街へ着いたのだがちょっとした事件に巻き込まれたバカがいた！次回、混沌学院『大体ロマサガで剣を使う主人公が覚えている技は大抵パリィ』どうぞご期待！

「ねんがんのアイスソードをてにいれたぞー！」
「死亡フラグ立ったァァァァァァァァァァ！」
あなたならどうする？

第87話：（RPG編）ゲームの序盤でそのゲームの評価が変わるんじゃねーの

おまけトーク

銀凪「え～ここで俺から一言、RPG編ではひらがな文字が多くなります。それはファミコンのドラクエ、FF、MOTHER等をネタにしています。ひらがなだらけで文字が分かりにくいと思いますが本当にすみません。」

第８８話：（ＲＰＧ編）大体ロマサガで剣を使う主人公が覚えている技は大抵パ

黒猫「なに・・・今回のサブタイ、ロマサガ知らないと分からないわよ」

銀凪「・・・どうでしょうかね～？」

第８８話：（ＲＰＧ編）大体ロマサガで剣を使う主人公が覚えている技は大抵パ

シチマガリの抜け穴、今ここの入り口に新八達はいた。
「さて、今から個の抜け穴を今から通りましょう」
「そうだな。じゃ、さっさと抜けるか」
そう言ってラグナは先に歩いて行った。
「あ！待って下さい！」
「仕方ない。僕達も行きましょう」
新八達もラグナの後を追って歩いて行った。しばらく抜け穴を歩いていたが中はとても暗く、目が慣れるまで少し時間がかかった。
「しっかし、僕始めてですよ。こんな洞窟入るの」
「そうですか。僕は毎日冒険してますよ・・・といっても冒険しているのは僕の下の息子の方で・・・」
「いつも私という名の洞窟を冒険しているんだよな」
ハヤテとナギがこう言った。
「ちょ、それわざとそうやって言ってるけどそれって卑猥な事じゃねーか！何言ってんだアンタら！この作品を本当に１８禁にするつもりか！」
「え～、別にいいじゃないですか～」
「ってかアンタら本当にツーショットで出るなァァァァァァァァァ！！」
洞窟内で新八の声が響いた。その直後、何者かが彼らを襲った。
「な！何だ何だ！」
「下がってください！」
ノエルがこう叫び、手に銃を構えて黒い影に向かって銃を放った。
ズドン！
「ピギャアアア！！」

銃弾が命中する音と共に聞き覚えのない悲鳴が響いた。新八が声のした方を見ると緑色の液体がそこにあった。そしてその隣には同じように緑色の物体がうねうねとゼリー状の体を動かしていた。
「何だこれ？」
「これってスライムじゃないですか？よくＲＰＧの序盤だと最初の所で出てくる」
「じゃあさっさと倒しましょう！」
ハヤテとナギは剣を手にしてスライムに斬りかかった。彼らがスライムを斬る度にスライムから緑色の液体が飛び散る。それと同時にスライムが動かなくなっていった。
「ふ～、何とか倒したようですね」
「この前のドラクエ騒動とは別でウィンドウとかは出ないらしいな」
「そうですね、でもスライムの死体が消えてお金になりましたよ」
ハヤテはスライムの死体の後に残ったお金を取った。
「まぁ地道に雑魚敵を倒してお金をためて次の街で武器を買いましょう」
という訳で一同は洞窟を歩いていた。道中スライムや他のモンスターに襲われたのだがあまり気にしなかった。だって出たらすぐに不意打ちで倒すから。
「いいんですかね？」
「さぁ？」
道中新八と咲夜はこんな会話をしていた。

というわけであっという間に次の街の『ドンガガマ』についた。
「さて、まず最初に情報を集めないと」
「あと武器も見とこうぜ」
「そうですね、これから先どんな敵が出るか分かりませんからね」
その後、新八達は情報収集と武器を見に行った。そして武器屋の店の中。彼らは集めた情報を話していた。
「まずこの辺の近くの村で凶暴なモンスターが暴れている」

「それにその村に行くのに大きな川があって通れない」
「それにはアイスソードという剣が必要」
「という事でここに売ってるのか？そのアイスソードってのが？」
このラグナの一言で誰もが気付いた。ここでアイスソードを買えば何とかなるんじゃね？って思っていた。
「よし、買いに行くぞ」
ラグナはそう言って店の主人の所に向かった。
「あ、アイスソードはもううってないんだよ」
「な・・・何ィ！」
まさかの展開に新八達は驚いた。
「じゃ・・・じゃあどうすればいいんですか？」
「とりあえず宿屋に向かいましょう。話はそこについてからでも」
「そうですね」
という訳で新八達は宿屋に向かおうとした。だが店を出てすぐにある事件は起きた。
「ねんがんのアイスソードをてにいれたぞ！」
そんな声が聞こえた。
「・・・これって・・・」
「いやな予感しかしない」
その直後だった。
「どうするアルか？」
「これはやっぱり・・・」
聞いた事のある声がした。そして・・・
「なにをするきさまらー！」
男の悲鳴が聞こえた。
「よっしゃー！アイスソードを手に入れたアル！」
「「何やってんだアンタァァァァァ！」」
新八と咲夜は同時にこう叫んだ。そう、アイスソードを殺してまでも奪い取ったのは神楽と紬であった。
「神楽！それにムギもここにいたのか！」

「あ、ナギ。それに新八達もいたアルか」
「皆無事だったのね～」
笑いながら紬はこう言った。
「いや、ってかアンタら何人殺してんの！いくらなんでもまずいでしょ！」
「大丈夫アル。実はアイスソードの他にも武器は手に入れたから」
「他の武器だァ？」
ラグナが神楽の持っているもう一つの武器を見た。それは・・・
「現地点で最強装備、ガラハドソード！！」
「それ人じゃねーかァァァァ！！」
大声でラグナはシャウトした。
「まぁいいじゃないですか、最強装備ですから」
「よくねーよ！」
とまぁそんなわけで神楽と紬が仲間に加わったのでした。

一方その頃、とある城にて。
「・・・あれ？何ここ？どうなってんの？」
ある人物が目を覚ました。
「・・・ん？何だここは？そして何だこの衣装は！」
もう一人の人物も目を覚まし、今の現状を驚いていた。
「「どうなってんだァァァァァァ！？」」

新八達は宿屋に泊まり、疲れを癒していた。で、翌日。新八達は荷物を整え度を再開した。この先にあった大きな川もアイスソードの力を使って凍らせ、何とか通れた。この先に襲って来たモンスターも多少は強かったが神楽のガラハドソードと紬のたくあんでなんとか出来た。ラグナも何とか頑張ろうとしたがあまり活躍できなかった。
「チクショー！ブレイブルーを使えたら俺だって！」
「ラグナ・・・ちょっと痛いですよ」

そばにいたノエルが変な目でラグナを見ていた。歩き始めて数時間後、ついに次の村へたどり着いたのであった。

次回！

次の目的地であるドンガガマについた一行。この村の村長が新八達に生贄の洞窟から出てくる化け物を退治してくれと願う。それに答えた一行だがその洞窟で何かが起こる！次回混沌学院『ＲＰＧの洞窟って無駄に分かれ道が多い』どうぞご期待！

「もし殴るなら右手で思いっきりやってくれ」

「ＮＯ！ＮＯ！ＮＯ！」

「も・・・もしかして左手ですかァーッ？」

「ＮＯ！ＮＯ！ＮＯ！」

「も・・・もしかして両手ですかァーッ！！」

「ＹＥＳ！ＹＥＳ！ＹＥＳ！」

「もしかしてオラオラですかァーッ！！！」

「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！」

「・・・最近ジョジョ見始めたんですよ・・・この作者」

第８８話：（ＲＰＧ編）大体ロマサガで剣を使う主人公が覚えている技は大抵パ

銀凪から一言

え～、次回で大事件に巻き込まれるとか言っていましたが・・・そんなことはありませんでした。完全に俺のミスです。本当にすみません。

銀八「アホだな～」

梓「しっかり計画性持ってください！！」

ベル坊「アーダッ！！」

第８９話：（ＲＰＧ編）ＲＰＧの洞窟って無駄に分かれ道が多い（前書き）

銀凪「最近マジで熱い・・・」

銀八「読者のみんなも熱中症にならねーように気ぃつけろよ」

第８９話：（ＲＰＧ編）ＲＰＧの洞窟って無駄に分かれ道が多い

ドンガガマ、そこは森に囲まれた小さな村だった。新八達は事件の事を教えてもらおうと村長の元へ向かった。
「おお、そなたらがあのいけにえのどうくつのまものをたおしてくれるのか？」
「ええ、はい」
「私達があの洞窟の化け物をブッ潰してやるネ！」
「そうかそうか、ならわたしがあんないしよう」
「オイオイ、いいのかよ」
「いいんじゃないんですか？どうせ大したイベントが今ないんだし」
新八の後ろでラグナとノエルはこんな会話をしていた。

という訳で生贄の洞窟。中に入った新八達だったが・・・
「うわ～、結構暗いなオイ」
「そうですね～」

ドドドドッ！！

「な・・・何だ何だ！」
突然後ろの出口から音がしたのだ。村長が入口を閉じ込めてしまったらしい。
「クソッ！あの野郎、俺達を閉じ込めやがった！」
「どどどどどうしましょう！」
「仕方ありません、別の出口を探しましょう！」
「それしかないな、皆行くで！」
その後、軽く話しあった新八達は別の出口を探し始めた。洞窟の中で出て来たモンスターは今まで戦って来たモンスターとは違い見たことのない種類のものが多く出た。だがそれにもかかわらずハヤ

ナギのラブラブパワー、神楽の馬鹿力、紬のたくあん、ラグナの蒼の力で何とか先に進んでいった。しばらくして彼らの目の前に二つの分かれ道が現れた。
「うわ、これ厄介なパターンですよ」
「どうしよう・・・」
「本当にどうしようかな～」
ここで彼らは気付いた。太子の存在を。
「あ、いたんですか」
「いたんですかじゃないよ、ずっといたよ。喋らなかったけど」
「・・・太子先生、攻撃されたら・・・体力減ります？」
「さぁ？今まで戦いの中で攻撃に当たりそうになった事があったけど無傷だったからな～」
話を聞いた後、彼らは右の道を、そして太子に左の道に行くように指示した。
「・・・何で一人？」
「だって太子先生攻撃されても無事なんでしょ？」
「だったらもう一方の道で何かあったら連絡して下さい♪」
そう言って彼らは先へ進んでいった。
「ポピー、誰か一人はついて行ってよォ～！」
太子はそう叫んだが誰も聞いていなかった。

太子と別れた後、新八達は奥へ奥へ進んでいった。奥に行く連れ段々と息苦しくなってきている。
「何か・・・息苦しくねーか？」
「そう言えば・・・」
「通路が狭くなってきているんです。そのせいで息苦しくなっているんでしょう」
「どうする？太子先生の所に戻るか？」
「そうした方がいいアル、私も少し疲れて・・・ヒャァッ！」
神楽が声を上げた。

「どうかしたか？」
「何か足首の所に変な物が・・・」
「足首の所って・・・オワッ！！」
続いてラグナも変な声を上げた。その後、新八達の体に異変が現れた。
「か・・・体がくすぐったい！」
「何これ？何だこれェェェェェ！？」
新八が服の中を調べると、指先に何かの感触を感じた。
「な・・・何だ？」
指先に触れたものは新八の服の中を走り回っている。何とか捕まえて新八はその正体を見た。
「これは・・・ネズミ！」
新八が手にしているのは普通のネズミより少し大きいネズミだった。他に変わっている所は大きな牙が生えていた。
「もしかして・・・こいつらがあの村を脅かしているんじゃあ」
「ソウダ・・・ヨクキヅイタナコゾウ」
ネズミからこう声がした。
「コイツ・・・喋るのか！」
「アア、オレタチハマリョクヲモッタネズミ。キサマラヲココデクッテヤル！」
「そうはさせない！皆、戦闘準備を！」
その後、新八達とネズミ達の戦いが始まった。ラグナが剣をふるって攻撃をしてもネズミ達はそれを避け、噛みつき攻撃を仕掛ける。
「くっ！こいつらすばしっこいぞ！」
「ラグナ、動かないで！」
「え？」

バキュン！！

ボスッ！！

「ギャアアアアアアア！！」
ノエルのはなった銃弾がラグナの近くにいたネズミの体を貫いた。
「あ・・・ありがとよ」
「いいです。それより皆の方は・・・」
「おらァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアアアア！！」
「フフ、逃がしませんよ」
「ヒャアアアアアアアアア！！」
「「ラブラブアターック！！」」
「グギャアアアアアアアアア！！」
神楽、紬、ハヤナギは完全に暴れまくっていた。その度にネズミ達は泣き叫ぶ。
「・・・大丈夫のようですね」
「ああ」
ラグナとノエルはこう呟いた。
「それよりこっちを助けてくださァァァァァい！」
「アァン！ちょ！どこに入ってんねんこのエロネズミ！」
その頃、新八と咲夜は苦戦していたのであった。

同時刻。
「ポピィィィィィィ！誰か助けてェェェェェェェ！！」
別の道を歩いていた太子はモンスターに追われていた。

数分後、ネズミを退治した新八達は何とか出口を見つけ、洞窟を脱出して村長の元に向かった。
「よし！あのクソジジイ！私達を閉じ込めたからたっぷりとお礼を貰ってやるアル！」
「僕も同感です、ちょっとあの事はむかつきました」
そして村長に話しかけたのだが・・・。

「オイ！さっさとお礼を渡しやがれ！」
「わたしがそんちょうです」
「そんなんいいですから何か――――」
「わたしがそんちょうです」
「オイ、何であんなことしたんだオッサン？」
「わたしがそんちょうです」
「スミマセン、それより何であんな事を言ったのか教えてください」
「わたしがそんちょうです」
「オイジジイ！そんなんばっか言ってないで――――」
「わたしがそんちょうです」
「・・・ねぇ、さっきからこの人――――」
「わたしがそんちょうです」
「しか言ってませんよね」
「わたしがそんちょうです」
「しつこい・・・いい加減腹が立って来たわ」
「わたしがそんちょうです」
「また言ってる」
「わたしがそんちょうです」
「本当にしつこいなオイ」
「わたしがそんちょうです」
「このネタ確かロマサガ3ですよね」
「わたしがそんちょうです」
「・・・・本当に腹が立ってきた」
「わたしがそんちょうです」
この場にいる全員の怒りが段々と増えて来た。そして・・・
「くたばれクソジジイ！」
「わたしがそんちょうで――――」

ドカドカドカドカッ！！

バキィ！！

メタタァ！！

「よし！もう一つの武器、村長ソードを手に入れましたね！」
「そうですね！これで旅が楽になります！」
「村長、ありがとうアル！」
そう言って彼らは村長の家から出て行った。ちなみに村長ソードは・・・村長を武器にしただけである。

次回！
超展開で魔王の城に攻め込んだ新八達、そして魔王に戦いを挑み姫を救出しようとしたのだがその人物がまさかの人物だった！次回混沌学院『こんな超展開でスミマセン』どうぞご期待！
「私って・・・ホントバカ」
「「「「「そーですね！！！」」」」」
「いいともかよ！」

第８９話：（ＲＰＧ編）ＲＰＧの洞窟って無駄に分かれ道が多い（後書き）

俺からお知らせ。

いつも応援ありがとうございます。感想欄ですが明日明後日、ちょっと用で家にいません。いつも感想の返信をする際パソコンを使っているため、感想の返信ができません。なので返信する時間が遅れます。早くて明後日の夜ぐらいになります。なのでその辺を頭に入れておいてください。もし明後日に感想が来たらその事を頭から外してください。というわけで銀凪でした。

第９０話（ＲＰＧ編）：こんな超展開でスミマセン（前書き）

黒猫「何なの？今回のサブタイ？」

ブロリー「最初っから謝ってるな…」

銀凪「本当にこんな超展開ですみません――――」

銀八「というよりネタがなかったんだろ？」

銀凪「……」

第９０話（ＲＰＧ編）：こんな超展開でスミマセン

その後、彼らの旅は順調に進んでいった。かなり順調だったのであっ！という間に魔王の城についた。
「何かあっさり進んでしまいましたね」
「初代ＤＱみたいだったな」
「作者に言えよそれ」
てな風な会話を交わしていた。そして、城内に入って行った。城内は少し暗く、あまりよく分からなかった。
「意外と暗いですね、別れ離れにならないようにしましょう」
「そやな、離れたらややこしくなるからな」
「そうだな」
「ヒ～ン、暗くて何かでそうだよ～」
離れ離れにならない様に会話を交わしながら新八達は城の中を進んでいった。

しばらく城内を進んでいると宝箱がたくさん置いてある部屋についた。
「よっしゃ！貰い！」
「ラスボスの城みたいだからレアなアイテムたくさんゲットね♪」
「いいんですかね・・・こんな事して？」
「さぁ？」
そんなやり取りをしていた。そんな中、紬があるものを見つけた。
「ん？何かしらこれ？」
「どれですか・・・何これ？」
紬が手にしているのは、小さな鍵だった。
「どこかのカギでしょうか」
「見たいだな」
手に入れたカギをバックに入れ、再び先へと進んでいった。

鍵を手に入れた後、新八達はモンスター達に襲われていったがここまで来るのに新八達は以上にレベルアップしていた。なので、簡単に倒せた。しばらく進んだ後、彼らは何もない壁の所についた。
「んだよ、行き止まりじゃねーか」
そう言って、ラグナが壁に手を触れた。だがその時だった。突然壁が動いて地下への階段が現れたのだ。
「か・・・隠し階段！」
「何かすごいなこの城！」
「と・・・とにかく先に進みましょう」
という訳で目の前の階段を下りて行った。

「・・・何か察知した、そろそろ来るな」
「そう・・・」
城の地下、謎の影がこう言った。
「・・・早くしてくれ・・・早くこの世界を・・・元に戻してくれ」
大きな影がこう言った。

「オワァァァァ！！」
「何か意外と強いぞこいつ！」
「オイ、援護魔法を頼む！」
「怖いよ～ハヤテェ～」
「大丈夫です、僕が全力であなたをお守りします！」
「いや、イチャついてないで援護しろォォォォォォ！！」
「ラグナ、しゃがんでください！」
ドォォォォォォン！
「オボワァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアア！！」
「だからしゃがんでって言ったのに・・・」
新八達は次々と襲いかかって来るモンスターと戦っていた。地下

へ下りるたびに、モンスターの強さが増してくる。いつもはあらゆる者を一撃で葬る紬のたくあんも一撃では倒れない、そのくらいモンスターが強いのだ。
「はぁ・・・はぁ・・・つ・・・強すぎる・・・」
「こんなんじゃラスボスの前にやられっちまう！」
「ＭＰもそろそろ尽きそうです」
「戦いの前に何か回復ゾーン的なアレがあるだろ！」
そんな中、彼らは突き進んで行った。しばらくして、巨大な扉の前についた。
「・・・もしかしてこの先に・・・」
「ああ、そんな感じだな」
そう言って、新八達は息を合わせて扉を蹴り飛ばした。
「魔王！とっとと姿現すヨロシ！」
「私のたくあんでお仕置きするわよ♪」
「あんたら・・・何怖い事言ってるんですか・・・」
冷や汗を垂らしながら、新八はこう言った。
「やっと来たか・・・待ちくたびれたぜコノヤロー」
暗闇の先から、聞き覚えのある声がした。その声はひらがなではなく、普通の人の声だった。
「・・・まさか・・・魔王って・・・」
新八はある人物がまさか魔王だと思った。その人物とは・・・
「銀さん！」
「そうだよ、俺だよ！」
その人物とは変な格好をした銀時だった。
「チクショー！何だよこの扱い！？」
「それより姫って誰だ？」
「・・・姫は・・・」
ラグナにこう聞かれ、銀時は隣を指さした。その先には・・・
「にーさァァァァァァァん！！！助けに来てくれたんだァァァァァァァァ！！！！！」

きれいなドレスを着たジンが、上に吊られていた。
「お前かよォォォォォォォォォォ！！」
「おい、それより早く戦いを始めようぜ。そうしねーと世界が元に戻らねーぞ」
「そうアルね、じゃあ早速」
そう言って、神楽は銀時の腹に拳を沈めた。
「グフォェ！何すんだいきな―――」
痛さのあまり、顔を下に向けていた銀時が顔を上げるとそこには・・・紬のたくあんが大量に飛んできたのだ。
「オワァァァァァァァ！！」
突然の出来事だった為、大量のたくあんを避けられず、何個か体に刺さってしまった。
「オブッ・・・」
小さな悲鳴を上げた後、銀時は気絶した。
「弱いアルな～」
「それでも本当に魔王？」
神楽と紬は、こんな愚痴を言った。
「アンタら本当にひどいなオイ」
小さく新八はこう言った。

その一方ではラグナとノエルがジンを助けていた。
「オイ、大丈夫か？」
「にーさァァァァァァァァァァん！！」
「オラ」
「オブッ！」
突然前に現れたジンを足で蹴り飛ばし、ラグナは頭をかきながらこう言った。
「これで終わりなんだろ？あとは一体どうすりゃいいんだよ？」
「さぁ？」
そんな中、新八と咲夜は気絶した銀時の方へ向かって行った。

「銀さん、大丈夫ですか？しっかりして下さい」
「傷は浅いで、しっかりしい」
そう声をかけた・・・その時だった。
「やっと体を動かせるか」
「え？」
その時だった、新八と咲夜の体が突然とブッ飛ばされたのだ。
「・・・まだまだか・・・だがこの程度、普通に動ける」
「せ・・・先生？」
体を起こしながら、新八は銀時の名を言った。
「先生？・・・この体の持ち主か、だが今はいない。我がこの体を乗っ取ったのだ」
「乗っ取ったって・・・じゃあ銀さんは！」
「いないと言っておるのだろうが。分からないのか？バカが！」
叫んだ後、新八の体が宙に浮かんだ。
「な・・・何だこれ・・・ガッ！ガァァァァ！！」
「新八！」
咲夜が宙に浮かんだ新八を下ろそうとしたのだが何故か中から下に降りない、どんなに力を込めて下におろそうとしても無駄だった。
「ハッハッハ、我に逆らうバカめ、さっさと死ぬがよい！」
「ガァァァァァ！！」
「どいてろ！」
後ろからラグナの声がした。ラグナが走って銀時の横腹にパンチを放ったが、謎の力で壁に向かってブッ飛ばされた。
「ゴファッ！！」
「兄さん！貴様！」
ジンも刀を持って、銀時に向かって行ったのだが、彼もまた謎の力により、動きを封じられてしまい、その場に倒れた。
「が・・・ガァァァァァ！！」
「無駄な事を、貴様らはさっさと死ね！」
「・・・誰や・・・」

「何だ？」
咲夜は大きな声でこう叫んだ。
「アンタ誰や！？この偽野郎！！」
しばらく間をおいて、偽銀時はこう言った。
「我は・・・真の魔王だ」

次回！
まさか本物の魔王が登場！魔王により絶体絶命の新八、だがある人物の一撃が彼を救う・・・そして変なジョブ、眼鏡の真の力がついに発揮される！次回混沌学院『ジョブの中には使えなさそうで使える奴がある』ＲＰＧ編、ついにクライマックス！
「ハヤテはナギの嫁」
「いや・・・何ここでも言ってるんですか、ツイッターでも散々言ってるくせに」
「まどかは私の――――」
「アンタも何言ってるんですか！」
「お妙さんは俺の――――」
ドシャ！
「ギャアアアアアアアアアア！」

第９０話（ＲＰＧ編）：こんな超展開でスミマセン（後書き）

おまけトーク

銀八「イヤイヤイヤ何この展開！？本当に超展開なんだけど！！」

梓「作者さん、本当に起承転結を――」

銀凪「さーて、グラセフでもやろっかな～」

梓「話を聞いてください！！」

第９１話：（ＲＰＧ編）ジョブの中には使えなさそうで使える奴がある（前書き

銀凪「さて、今回でＲＰＧ編ラストです」

銀八「でもまた短編やって長編やるんだろ？ヒナギク最後のヤンデレって」

銀凪「はい、シリアスな作りにすると思います。期待していください」

第９１話：（ＲＰＧ編）ジョブの中には使えなさそうで使える奴がある

銀時魔王を倒して一件落着かと思ったら、まさかの展開、銀時に乗り移った本物の魔王が現れて新八達を襲ったのだ。
「ガァァァッ・・・アアアア・・・」
魔王の攻撃により、苦しそうに声を上げる新八。それを何とか助けようとする咲夜。だが咲夜の助けもむなしく、新八は段々と弱って来た。
「新八！」
「今私達が――――」
神楽と紬が魔王に向かって攻撃を仕掛けようとしたが、その体は何故か止まり、神楽と紬はその場に倒れた。
「な・・・何これ・・・」
「動かないアル・・・」
「貴様らは後々始末する。今は・・・あの眼鏡のうるさいガキを始末しよう」
そう言うと魔王は、右手をグッと握った。
「ガッ！ガアアアアアアアアアアア！！」
右手が握られたと同時に、新八の苦しい声が大きく響いた。
「新八！新八ィィィィィィィ！！」
目の前の新八に抱きつく咲夜、もう何をしたらいいのか彼女は分からないのだ。
「フッフッフ、これで貴様らはおしまいだ・・・この地で骨を沈めるがいい！」
大声で魔王がそう言った。もう駄目なのか・・・誰がそう思った。
だが、その時だった！
「チクショォォォォォォォォォォォ！！止めろよこのヤロォォォォォォォォ

ォォォォォォ！！！」
　太子が魔王に殴りかかったのだ。殴られた魔王は、近くの地面に叩きつけられてその場に倒れた。
「た・・・太子先生！」
「大丈夫？もう堪忍袋の緒が切れた！この魔王とかいう奴は私に任せろォォォォォ！！」
　そう言った後、倒れている魔王に上乗りし、太子は殴り始めた。
「喰らえェェェェェ！必殺、摂政ダイナミックマシンガンパンチ！」
　太子の両手から無数のパンチが魔王の顔面に命中する。
「グハッ！クソ・・・こんな奴がいるとは・・・グフ！」
「ウオォォォォォォォォォォォォォ！！」
「クソがァァァァァァァァァァ！！」
　魔王はオーラを放って、太子をふっ飛ばした。
「ポピィィィィィィ！！」
　太子は悲鳴を上げながらブッ飛ばされた。それを察知した魔王は太子の足を掴んだ。
「貴様・・・よくこんなふざけた真似を・・・まず貴様から殺してやる！」
　怒った魔王は左手から魔力の塊を生み出した。
「こ・・・殺されるゥゥゥゥゥ！！」
　何着ながら太子はこう叫んだ。

「ゲホッ！はぁ・・・はぁ・・・助かった」
「新八、大丈夫か！」
　その一方、魔王の攻撃が解け、新八は助かった。だが、彼は太子が絶体絶命という事に気付いた。
「太子先生！あわわ、何とかしないと――――」
　その時だった。突然新八の眼鏡が光出したのだ。
「オワァァァァァァ！何これ？何これェェェェェェェェェェ！？」

突然の事に驚いた新八がそう言ったその時だった。
『レアジョブ、眼鏡を持つ者よ・・・』
「な・・・何やこの声？」
「咲夜さんも聞こえるんですか、この声？」
「ああ」
その後、新八と咲夜は突然の出来事に驚いていたが、声は話を続けた。
『レアジョブ、眼鏡を持つ者よ、そなたの眼鏡で覆われた闇を払え』
「・・・何かえらい事になっていますが」
『信じて、あなたの仲間と、恋人と・・・眼鏡を』
声の主はそう言った後、二度と声を出さなかった。
「・・・と・・・とりあえず僕の眼鏡が魔王を倒すカギですか？」
「みたいだな」
その後、新八は魔王の元に向かって行った。
「やい、魔王！僕の眼鏡で貴様を倒してやる！」
新八に気付いた魔王が新八を見て驚いた。
「・・・闇を払う力か・・・ややこしい力を持っているな」
太子をその場に置いた後、彼は闇を剣を作り出し、新八に向かって襲いかかった。
「しまった！僕武器を―――」
「必殺！ガラハド&村長ソード！」
両手のガラハド&村長ソードを手にした神楽が魔王に向かって斬りかかった。
「グッ！ややこしい！」
「ガラハドと村長の力、思い知るがヨロシ！」
ガラハドと村長の力を思い知った魔王、彼はその場に倒れてしまった。
「オイコラ！俺らも忘れんじゃねーよ！」
後ろからラグナ達が走って来た。ラグナとジンが魔王に斬りつけ、後ろにいるノエルが魔王に向かって拳銃をぶっ放した。

「グハッ！く・・・クソ！」
「今アル！眼鏡の力を使うアル！」
「大丈夫！新八君ならできるよ！」
「自信を持てェェェェ！！」
「今ならいけるぞ！」
「頑張ってください！」
神楽達に励まされた新八、後ろには咲夜がいる。皆の為、混沌学院の為、新八はメガネの力を使った！
「ウオォォォ

一方その頃。
「・・・何で俺こんな扱い？」
混沌学院の池の中。びしょ濡れの銀時がこう言った。
「ホント・・・最近俺の扱い酷いよな、何でだろ？」
そう呟いた後、銀時はまた池の中に潜った。

第９１話：（ＲＰＧ編）ジョブの中には使えなさそうで使える奴がある（後書き

おまけ劇場

ニケ「…活躍できなかったな」

ククリ「作者さん、忘れてたんだって」

ニケ「何だよその理由…」

キタキタ親父「ニケ殿～ククリ殿～一緒に踊りませんか～？」

ククリ「…勇者様、グルグル――――」

ニケ「ああ、使え」

その後、親父の悲鳴が青空の中でとどろいた

おしまい

おまけトーク

梓「ＲＰＧ編終わったんですけど…」

黒猫「またあるのよね、長編」

作者「はい…前書きにも書いたように多少シリアスにします。期待していてね！！」

第９２話：回転寿司はたまに寿司以外のものが回っている（前書き）

銀凪「はぁ～、どうせまた長編やるんだよな～」

まどか「何でテンション低いんですか？」

銀八「希望してた会社、落ちたらしいぜ」

まどか「……」

銀凪「今日は『コネクト』でお願いします。じゃ、ごゆっくり」

第９２話：回転寿司はたまに寿司以外のものが回っている

夕方の時刻、混沌学院の近くの回転寿司屋。今ここに１Ｚのまどか、ほむら、さやか、杏子、２Ｎのマミがバイトに来ていた。
「うわ～、私バイトなんて初めてだよ」
「大丈夫よ、何とかなるわ」
まどか達は、そんな会話をしていた。そんな中、バイトの先輩であるマダオと店長がやって来た。
「じゃあ君達は皿洗いをお願いね」
「「「「「分かりました！！」」」」」
そして、まどか達のバイトが始まった。

バイトが始まって数分後。最初は混んでなかったが段々と混んで来た。それに伴い皿洗いも忙しくなってきた。
「うわ～、忙しくなってきたよ～」
「うわ！危な、お皿割るところだった～」
まどか達も皿洗いに奮闘していた。
「まどか、大丈夫？泡で手がかゆくならない？」
「ほむらちゃん・・・そこまで・・・大丈夫だよ」
「ほむらさん・・・過保護すぎね」
仕事の中、彼女らはこんな会話をしていた。
「店長！マグロとイカをお願いします！」
「よっしゃ！任せとけ！」
マダオと店長は協力して寿司製造マシーンで寿司を作っていた。

数時間後。客は多少いるが、混雑時よりはだいぶ減った。なのでまどか達の皿洗いも少しは楽になった。
「はぁ～やっとゆっくりできる～」
「でもまだ仕事はあるけどね」

仕事の合間にこんな会話をしていた。だが、その時だった。

ドカン！

突然、寿司製造マシーンから爆発音が響いた。
「どうかしたんですか！」
「い・・・いや・・・何か使いすぎて故障をしたんだ」
店長が冷や汗をかきながらこう言った。
「え・・・ど・・・どうすればいいの！」
少し慌ててたまどかがこう言った。
「仕方ない・・・俺達で寿司を握ろう！」
「それしかないですね」
店長とマダオはこう言ったがまどか達は戸惑っていた。何しろ寿司なんて握ったことないのだ。

「じゃあ今から寿司を作るのを君達に教えるから」
キッチンにて、店長がまどか達に寿司の作り方を教える教室が開かれた。
「意外と難しいから気をつけてね」
店長はそう言いながら、桶の中のシャリを手に取り、寿司を握り始めた。
「シャリは空気を握るように。そして握った後、そのシャリの上にネタを乗せる」
そう言って、店長は出来上がった寿司をまどか達に見せた。
「うわ～」
「意外と難しそうね」
そんな感想を漏らして行った。
「じゃあ実戦、やってみよう」
その後、まどか達は寿司を握り始めた。
「よし、じゃあまず私がやってみるよ」

そう声を上げたのは杏子、彼女は店長がやったとおりに寿司を握り始めた。
「おお、結構うまいね」
「へっへ～」
そして、彼女が作り上げた寿司は・・・
「出来た！」
「どれどれ・・・」
杏子が作った寿司はポッ○ーだった。
「何作ってんの君！何で魚の切り身と酢飯でポッ○ーが出来るんだよ！？」
「食うかい？」
「食わねーよ！そんな暇あったら寿司作れ！！」
「あ、店長。このポッ○ー何か某カップラーメンのシーフード味っぽいっすよ」
「マジで！？」
驚いた後、店長は杏子が持っているポッ○ーを一本食べた。
「・・・シーフードだ・・・」
こう呟いたが、すぐに気を取り直してまどか達にこう言った。
「頼むから真面目にやって！こっちもいろいろとやばいから！」
「分かったわ。私がやるわ」
そう言ったのはマミ。彼女も杏子と同じように寿司を作り始めた。
「出来たわ」
「早ッ！！」
店長がマミの寿司の完成時間に驚いた。だがその出来は・・・
「紅茶じゃねーかァァァァァァァ！！」
真美が手にしているのは紅茶だった。
「いや、喉が乾いちゃったから」
「だから何でそんなのが出来るんだよ！ってか何で米と魚から紅茶が出来るんだよ！？」
「さぁ？私にもよく・・・」

「じゃあ次は私がやるね！」
と言ったのは、まどかだった。まどかも同じように寿司を作ったのだが・・・
「あれ？マグロを握っていたのに・・・」
まどかは疑問そうに店長に質問をした。
「どうしたの？」
「マグロを握っていたのにかっぱ巻きができちゃったよ」
「何でエェェェ

「俺は今から狩りに出かける。君達は留守番を頼む」
「・・・行くんですか・・・店長」
「ああ」
しばらくした後、マダオの体が光り包まれ、光が鎮まった後、そこには黄金のダンボールを纏ったマダオの姿があった。
「俺も行きます」
「・・・死ぬのは俺一人でいい」
「何言ってるんですか？一人より二人の方が手際いいでしょうが」
「・・・・・・そうだな」
「行きましょう。魔の海、デスシーサイドへ」
そう言って、マダオと店長はどこかに行ってしまった。
「・・・私達はどうなるんだろう？」
「さぁ？」
残されたまどか達はどうしようもなかった。

まぁその後は大した事件もなく、客はもう混雑のピークを過ぎたため、店の中はガラーンとしていた。
「そろそろ閉店の時間だね」
「店を閉めて帰ろう。私もう眠いよ～」
そんな会話をしていた。だが、客が来た。
「ふぃ～、ここ寄ってこ～ぜ～！」
「寿司屋か・・・たまにはいいな」
「・・・この声・・・もしかして」
聞いた事のある声だった為、まどかはキッチンからこっそりと声の主の姿を見た。声の主は・・・
「・・・銀時先生だ。スネーク先生と小学部のルイージ先生とクッパ先生もいる」
「マジで！」
まさかの事態。銀時達が店に来店したのだ。
「ど・・・どうしよう・・・」

「どうしようもなにも取りあえず出来る限りお寿司を作りましょう」
「そうだね」
しばらくして銀時から注文が来た。彼はまだまどか達がここでバイトしているという事は知らない。
「おーい、とりあえずタコ一丁」
「俺はカレイの縁側で」
「俺はまだいいが・・・クッパ先生はどうするんだ？」
「ワシもまだいい。どれを食べようかまだ悩んでいるんだ」
という訳で注文は銀時のタコとルイージのカレイの縁側になったのだが・・・
「縁側って何？」
「わからないよ、あまりお寿司に詳しくないよ」
「どうしよう、タコがもうないわ」
材料等がない為、絶体絶命だった。だがその時だった。
「じゃあ魔法少女になるかい？」
後ろから声がした。
「キュウべぇ！」
そう、そのクソ野郎はQBだったのだ。
「・・・僕の扱い酷くないかな？」
「ん？どうしたの？」
「い・・・いや・・・それより何かお困りかい？」
「・・・は！」
その時、ほむらは気付いた。
「インキュベーター、あなた、寿司のネタになりなさい」
「・・・は？」
突然、ほむらがこんな事を言ったので皆目が点になった。
「どうせあなた達種族って死んだ仲間の死体を食べるでしょ」
「そ・・・そうだったかな？」
「丁度いい、先生方も満足できるし、まどかにまとわりつくお邪魔虫も削除できるし、一石二鳥ね」

「いやいや」
「というわけで・・・死になさい」
「・・・訳が分からないよ！まどか！助け――――」
「ほむらちゃん、やっちゃって♪」
「なっ！」
「ウィヒヒヒ♪」
その後、キッチンから悲鳴が上がった。だが銀時達は気付かなかった。
「カレイの縁側は何とかなったけど・・・タコはどうするの？」
マミがこう言った。だがほむらは余裕の笑みを浮かべた。
「大丈夫よ。私にいい考えがある」

銀時とルイージが注文を出した数分後。やっとネタが回って来た。
「ようやく来たか」
「早くしないかな～って・・・」
彼らは絶句した。回っているのは歌舞伎の蛸蔵だったのだ。
「オイ、何で歌舞伎の蛸蔵がいるんだよ？」
「しらねーよ」
「うわ、何かこっち睨んでるぞ。しかも片目めっちゃ赤いし」
「やべーよ、マジでヤベーよ。騒動の後だろ？」
「ああ、だから八雲みてーになってるんだよ」
「幽霊見えたりして」
「んな事ぁない」
その後、蛸蔵は彼らの所まで来たが、彼らは無視した。
「いいのかオイ？無視して？」
「さぁ？」
「それよりあれ・・・もしかしてルイージが頼んだ」
「いや違う。俺が頼んだのはタコだ。蛸蔵じゃない」
「うわ、まだこっち睨んでるよ」
「オイオイ、何かじょーだんじゃねーぞ」

蛸蔵を無視した後、別のネタが回って来た。それは何かグロテスクな物だった。そして、その近くの紙には『カレイの縁側』と書かれていた。
「・・・何あれ？」
「カレイの縁側らしいな」
「どっからどう見ても違うだろ。だって文じゃわからないけどモザイクがつきそうだよアレ」
「そうだな」
「ってか何だよこの寿司屋。変な物出してばっかで」
「帰るか」
「ああ」
そう言って席から立ったその時だった。蛸蔵がカレイの縁側？を持って銀時達の所に走って行ったのだ！
「オイ！蛸蔵がカレイの縁側っぽいの持ってこっちに走って来るぞ！」
「逃げよう！何か怖い！」
「それでもまだ俺らの方睨んでるし！」
「言ってる場合か！早く逃げないと―――」

「「「「ギャアアア

店長はそう言うと、持っている刀を構えた。
『・・・クルガイイ！キサマラノムリョクサ、トクトカンジルガヨイ！』
「行くぞ！長谷川！」
「はい、店長！」
その後、二人の男は果敢に戦いを始めたのであった・・・。

第９２話：回転寿司はたまに寿司以外のものが回っている（後書き）

おまけ劇場

その後

寿司屋の騒動の後、天下り公園に新たなる住人がやってきた。彼の名は店長。名前の由来は元寿司屋の店長だったからだ。

まどか「……何か悪いことしちゃったね」

さやか「……うん」

段ボールを身に包んでいる店長とマダオの姿を見た後、まどかとさやかはこの場から離れて行った。

完

おまけトーク

銀凪「さて、次の会社探すか」

銀八「大変だなお前も」

銀凪「ああ、何で不景気になったんだ？」

ブロリー「さぁ？」

梓「いきなりこんな悲しくて難しい話をしないでください」

第９３話：何でも見れる、というとエロい奴は馬鹿なこととしか考えない（前書き

銀凪「今回は本当にバカバカしい話です」

一方通行「ああ」

佐天「本当にそうだね、よくこんな変な話考えたね」

銀凪「面白ければよくね？」

ブロリー「さぁ？」

パラガス「脳内ＯＰは『ロマンティックあげるよ』でお送りしてください」

第９３話：何でも見れる、というとエロい奴は馬鹿なことしか考えない

久しぶりの授業の時間、彼らはいつもどおり騒いでいた。たとえ授業時間に入っても。
「皆ー！授業始めるッシブル！」
教室にイワンコフ先生が実験道具を持ってやって来た。
「先生、何ですかそれ？」
「いい質問ね新八ボーイ！これはね、私の知り合いから貰ったスーパーレントゲンよ！これさえあれば人の体内の中を見れるのよ！」
「マジでか！？」
横から神楽が現れた。そして、イワンコフ先生が持っている眼鏡らしき物を取り出し、顔にかけた。
「ん～、これでどうしたらいいアルか？」
「ああ、次は右の方にあるレバーを動かすと・・・」
イワンコフ先生に言われた通りに神楽はレバーを動かした。
「おお！すげーアル！新八の骨とか内臓とかが丸見えアル！」
「ど・・・どんだけだよ！」
その後、神楽の周りに生徒達が集まって来た。
「どんぐらい丸見え何だ？」
「脳みそ見れる？」
「どんな質問してんだオイ！」
「肝臓も丸見え？」
「それより早く昼飯になってくれないかな～？」
「Ｚ～Ｚ～」
「ゾロ、お前眠ってんじゃねーよ」
「土方死ねやコノヤロー！！」
「お前が死ねやってこのネタ懐かしいなオイ！」
「うんたん♪うんたん♪」
「おい唯、カスタネットどこから持ってきた？」

そんな会話が２Ｚを包んだ。だが、その様子を見ているバカが数名いた。そう、エロ男子のバカ共であった。

授業終了後。サンジはこっそりとイワンコフの後を追い、スーパーレントゲンの置き場を探った。目的はもちろん、エロい事をするためである。本当にどうしようもないバカだな本当に。

「よし、スーパーレントゲンの位置、確認完了」

『了解。情報を教えてくれ

無線で近藤と会話をしていた。だが、近くで人の気配を感じた。

「なっ！誰だ！」

隣を見たら、そこには黒子と早苗がいた。

「・・・何でお前らが・・・はっ！」

ここでサンジは気付いた。こいつらもスーパーレントゲンを目的にしていると。

「・・・あの眼鏡は俺らのもんだァァァァァァァ！！」

サンジはそう叫んだ後、イワンコフがいた部屋に向かって走って行った。だが。

「そうはさせない！」

早苗がサンジのズボンのすそを掴んだのだ。バランスを崩したサンジは顔面から床に倒れて行った。

「ホゲェェェ！！」

「黒子さん、今のうちに！」

「分かりましたわ！」

そう言うと、黒子はテレポートで移動した。

「あ！そうはさせるか！」

鼻を押さえながらサンジは部屋に向かった。

「そうはさせないよ！」

早苗は再びサンジのズボンのすそを掴んだ。

「同じ手は二度も通じねーよ！」

サンジは、ズボンを脱ぎ、トランクス姿となって部屋に向かった。

「なっ！」
「エロの為なら、俺は命をかけてやる！」
「す・・・すごい！すごい変態だよ！」
目の前にいる変態（サンジ）に向かって変態（さなえ）はこう言った。

部屋内、意外と暗く、何があるのかよく分からない。
「あれ・・・どこにあるんだ？」
とりあえず、辺りを探りながらサンジはスーパーレントゲンを探して行った。
「ここって色んな物があるからな～、どこに何があるか分からね・・・」
呟きながら移動していたその時だった。手に、眼鏡らしき物が当たったのだ。
「あ、もしかして・・・もしかしてもしかして！」
サンジはその眼鏡らしき物を手に取った。そして、その眼鏡をかけ、右の方にあるレバーを動かした。すると、部屋内にあるものの内部が全て透けて見えた。
「フッフッフ・・・ゲットだぜ！」
眼鏡をかけたサンジは、こう言った。

眼鏡をかけたサンジは、そこら中を歩き回っていた。透ける眼鏡をかけている為、もちろん色んなところが丸見えなのである。なのでエロい表情していると、ばれてしまう為、何とか表情を崩さない様に頑張っていた。
「一夏！休み時間の間だけでも剣の修業をするぞ！」
「もういいだろ、時間ないし」
「甘ったれるな！」
目の前に一夏と箒がこんな会話をしている。サンジは一夏を無視して、箒の方を見た。
「・・・意外と大きいな」

そう独り言を漏らした。その次に、ハルナとなのはが会話をしながら移動しているのを見た。
「何かうちらの出番少なくない？」
「仕方ないよ・・・基本的に２Ｚメインで進んでるから」
そんな事を話していた。もちろん、サンジは二人の方を見た。
「・・・なかなかいい組み合わせじゃねーか」
またまたそんな事を呟いていた。で、目の前にはまたまた誰かやって来た。
「ゲッソゲソ～♪」
イカ娘がこんな変な歌を歌いながら歩いてきた。
「イカちゃんか・・・」
サンジはイカ娘の方を見ようとしたが・・・
「イカちゃんは守る！」
「グヘェ！？」
サンジの後ろから声がし、サンジの首を絞めた。
「黒子さん、今です！」
「わかりましたわ！」
その後、サンジの目の前に黒子が現れ、サンジが装備しているスーパーレントゲンを奪った。
「よし・・・これでお姉さまの・・・クヒヒヒヒ」
変な笑い声を洩らした後、黒子は姿を消した。
「あ！ちょ！待ちやがれ！」
「黒子さん！頑張って逃げて！」
「早苗ちゃん、首を離しグゲェェェェェェ！！」
早苗に首を絞められているサンジは、苦しそうに呻いた。

一方、イワンコフはスーパーレントゲンがない事に気付いた。
「あれ？どこに行ったのかしら？」
その後、スーパーレントゲンが置いてある場所が荒らされている事に気付いた。

「まさか・・・誰かが・・・盗んだ奴、絶対にゆるさな～～～い！」
「どうかしたんですか？」
外の方で、アンパンを持った山崎が聞いてきた。
「あら？あなたは２Ｚの山崎ボーイ。実はね、あなた達の授業に使ったスーパーレントゲンがないッシブル」
「そうですか・・・こっちもこっちで今大変なんですよ。サンジのエロ野郎と黒子の変態がいきなり消えて今探しているんですよ・・・」
ここで二人は気付いた。もし、あのバカ共がスーパーレントゲンを盗んでバカな事を・・・
「よし、何とか協力してあの二人を捕まえてお仕置きを・・・しなーい！」
「しないのかよ！！」
山崎のツッコミが教室内に響いた。

「チクショォォォォォォォ！！黒子の野郎、どこに行きやがったァァァァァァ！！」
サンジは廊下を全速疾走で走っていた。その光景を見ていた生徒達は驚いて引いていた。
「クソ！一体どこに行きやがった！」
「お姉さまァァァァァァァァん！待ってて下さいねぇェェェェェェェ♪」
すぐ近くで、黒子の声がした。その声を聞いたサンジは、すぐに黒子の声がした所に向かった。
「まァァァァてェェェェェェェェ！！黒子ォォォォォォォォ！！」
「サンジさん！あなたのような下品な人にお姉さまの全裸は見せません！」
「テメーに下品って言われたくねェェェェェェェェ！！ってか別に俺は御坂ちゃんの裸体はどうでもいいんだよ！ナミさんみたいなボンキュッボーンが見たいんだよ！」

「何ィ！お姉さまがボンキュッボーンではないと申しますの！」
「当たり前だ！」
「お姉さまを侮辱する奴は・・・許しません！」
黒子が叫んだ後、いきなり姿が消えた。
「何だと！」
「くたばれェェェェェェ！！」
「なっ！」
サンジの頭上から黒子が現れた。黒子はテレポートして、サンジを奇襲しようと思っていたのだ。だが、その攻撃は避けられてしまった。
「甘いな。そんな攻撃、俺には通じない」
「フッフッフ・・・どうでしょうか？」
黒子が軽く笑った。そして、サンジの後ろから声がした。
「えいやァァァァァァァァ！！」
「オワァァァァァァ！？」
サンジの目の前には、彼に向かって飛び蹴りを放った早苗がいた。早苗の飛び蹴りは、見事サンジの腹に命中した。
「クソ・・・油断してたぜ」
「よし！スーパーレントゲンゲットだぜ！」
早苗はサンジが装備しているスーパーレントゲンを奪い取ると、黒子の元に走って向かって行った。
「ハッハッハ！これでお姉さまのあられな姿を・・・グフフ」
「イカちゃん・・・グヒヒヒヒ」
そう気持ち悪い笑い声をした後、二人はテレポートでこの場から離れた。

テレポートした後、二人は御坂とイカ娘を探す為そこら辺を歩いていた。
「お姉さま、一体どこに？」
「イカちゃ～ん、どこ～？」

その時だった。後ろから何者かが襲撃を仕掛けたのだ。
「おらァァァァ！！」
「キャッ！誰ですの！」
「俺だよ！」
その人物とは、近藤だった。
「サンジから連絡があった、そのスーパーレントゲンは俺らがもらった！」
そう言って、彼は黒子が装備しているスーパーレントゲンを奪った。
「あっ！しまった！」
「ハッハッハー！これで夢のムラムラ――――」
「イカちゃんの（ピーーー！）は見せない！」
「ゴフェッ！」
後ろから、早苗がタックルを仕掛けたのだ。で、その衝撃でスーパーレントゲンが近藤の顔から離れ、どっかに飛ばされて行ったのだ。
「「「ああっ！！」」」
三人は手を伸ばそうとしたが無駄だった。すでに誰かが眼鏡を拾ったからだ。その人物とは。
「ん？何だこの眼鏡は？」
その人物とは、桂だった。
「見ろエリザベス、この眼鏡似合か？」
スーパーレントゲンを装備して、桂は隣にいるエリザベスの方を見た。
『あ、意外とかっこいいっすよ』
「そうかそうか、アッハッハ！ん？何だこのレバーは？」
右の方にあるレバーを動かし、エリザベスの方を見た。
「ハッハッハ、エリザベス、今のうちに写メにこの姿を・・・・・・」
しばらくの間、桂の体は止まった。

「エリザベスゥゥゥ

「あ、さやか――――」
杏子は見てしまった、スーパーレントゲンを装備したままさやかの方を。さやかの方を見た数秒後、杏子の鼻からとんでもない量の鼻血が流れた。
「エエエエエエエエエエ！？杏子ちゃん？何で？何で杏子ちゃんも？」
まさかの出来事で、まどかは戸惑っていた。そんな中、近藤はこっそりスーパーレントゲンを回収した。

「よし、こっちまで持ってこれたな」
「ああ、ほむらや杏子達が何かやらかしたおかげで回収できた」
校舎の裏側、ここでサンジと近藤は交流していた。
「ひひひ・・・これで今日から俺の視界は・・・やべ、鼻血が」
「たまには貸してよな」
そんな会話をしていた。
「あら、何をしているんですか？」
近くで声が聞こえた。その方を見るとマミが立っていた。
「何？そのへんちくりんな眼鏡？」
「あ、いや・・・それは・・・」
「・・・やはりスーパーレントゲンですね」
「なっ！何でその事を！」
会話の後、マミは片手をあげた。その直後、サンジの頭上にビームが降った。
「くっ、ちょっと外した！」
「次は私の番だ！」
なのはとハルナの声がした、そして、ハルナがサンジに向かって襲いかかった。
「オワァァァァァ！！」
「逃げるなァァァァ！！」
「何でこんな事に！」

「エクセリオンバスター！」
「ギャアアアアアアア！！」
なのはとハルナはサンジと近藤を襲っていた。
「予想どおりですね」
「当たり前ッシブル！乙女なら自分の裸を見られて激怒するッシブル！」
後ろから山崎とイワンコフの声がした。
「山崎！イワ先生！アンタらの仕業か！」
「当たり前ッシブル！早くそのレントゲンを返すッシブル！」
「いやだね！これさえあれば毎日が――――」
「死ねェェェェ！！」
「ギャアアアアアアア！！」
なのは&ハルナの襲撃を逃げのびたサンジ&近藤、だが、彼らを襲うのは裸を見られた女性たちではなかった。
「イカちゃんの裸体は私が守る！」
「お姉さまの全てを見せはしません！」
早苗&黒子が襲いかかって来ているのだ。
「何ィ！嘘だろ！」
「驚いてる暇はねェ！早く逃げないと――――」
その時だった。突然近くで爆発音がしたのだ。その後、爆発地点からハヤテとナギが現れた。彼らはとてつもない怒りのオーラを放っていた。
「貴様ら・・・まさかお嬢様の裸を見たんじゃねーんだろうな？」
声を荒くして、ハヤテはこう言った。
「い・・・イヤイヤ！俺が望んでいるのはナミさんやなのはちゃんやマミさんみたいにボンキュッボーンで・・・ナギちゃんみたいな貧乳には興味ねーよ！」
その言葉を聞いたハヤテの怒りケージがついに爆発した。
「貴様・・・ブッ潰す！」
「ハヤテ、一気に叩きつぶすぞ！」

「ハヤテ君、ナギちゃん。私達も協力するよ」
ハヤテとナギの後ろにいるなのはが黒いオーラを出しながらこう言った。サンジと近藤は逃げようとしたが、マミが魔法少女となってサンジ達の後ろにいた。
「・・・じゃあ皆さんで攻撃しましょう」
その後、ハヤテ達の猛攻撃が始まった。
「スターライトブレイカー！」
「ティロ・フィナーレ！」
「「オラオラオラオ

「ジャンプヒーローの無駄使い！」

第93話：何でも見れる、というとエロい奴は馬鹿なことしか考えない（後書き

おまけトーク

銀八「へ？また長編やんの？」

銀凪「はい。前々から言われたとおり、ヒナさんのヤンデレに関する長編です」

梓「あ、やめるんですか、ヤンデレ」

銀凪「ええ。もう長編後の話も脳内で考えています」

ブロリー「先読みすぎだ」

銀凪「まぁいいじゃね？というわけで次回からまた長編です。ちょっとシリアス？になりますが、期待していてください！！」

第９４話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）長編の後の長編って異様に疲れる（前

銀凪「さぁ！！ついにヒナギクのラストヤンデレ編が始まります！！」

梓「脳内ＯＰは『僕達は天使だった』でお願いします」

ブロリー「ちなみにＤＢＺのエンディングな」

第９４話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）長編の後の長編って異様に疲れる

「先生サヨナラ～！」
放課後の混沌学院、生徒達の声が響いた。だが、誰もいなくなった２Ｚの教室内、一つの人影があった。
「……誰もいなくなった、やるなら今のうちだわ」
その人物はそう言った後、周囲の机をどかし、謎の魔法陣を描き始めた。

翌日。
「ふぁ～あ、いい朝だな～」
新八が欠伸をしながら歩道を歩いていた。そんな調子で混沌学院に向かっていた――――のだが。
「な……何じゃこりゃ！」
混沌学院について一言、新八はそう言った。混沌学院の周囲は謎のオーラに包まれていて、そのオーラの中に、謎の文字が浮かんでいるのだ。
「あ、新八！」
「咲夜さん！これ一体どういう事ですか！？」
「うちが知るわけないやろ！」
「他の皆さんは――――」
新八が辺りを見回した。
「新八！」
「お前も驚いたか！」
近くから声がした。その方を見たら悟空とルフィがいた。
「悟空さん、ルフィさん！」
「何かえらい事になってるな！」
「ええ、それより何かあったんですか？」
「しらねーよ、今日の朝からそうなってたんだ！」

「朝から……」
その後、混沌学院の連中が外に集まり、学院の様子を見ていた。
「何だよこれ？」
「何がどうなってんだ？」
「ついに封鎖されたか」
「オイ誰か、警察呼んで来い」
「もう来てるっつーの！」
「土方死ねや！！」
「今それ言ってる場合じゃねーだろ死ね沖田！」
「こんな時に喧嘩するなよ！」
そんな声が聞こえて来た。
「オイオイ、一体何だこりゃ？」
職員寮の方から銀時が頭をかきながら、現れた。
「あ、先生！混沌学院がヤバい事になってます！」
「見りゃわかる。で、俺らのクラスの連中はどうだ？いるか？」
そう言われたので新八は辺りを見回した。最近ロクに出演していない奴も含め、ほとんどがいたのだが、何か足りなかった。
「ひ……ヒナギクさんは？ヒナギクさんいませんよね！」
「あ、そうじゃん！ヒナギクいねーじゃん！」
誰もが気付いた。ヒナギクがこの場にいないという事を。
「まさか……校舎の中にいるんじゃないんですか！」
「そうだな」
銀時は短くそう言い、腰の木刀を手にして、校舎の方へ向かった。
「先生、まさかヒナギクさんを助けに？」
「たりめーだ。あんなヤンデレでも俺の生徒だからな」
新八に向かって銀時はこういった。
「僕達も行きます。あんなヤンデレでも僕達のクラスメイトですから」
「そうや。うちらも行くで」
「うし！２Ｚ総出でヒナギクを助けるぞ！」

その後、２Ｚの連中が一期団結し、校舎の方へ向かったのだが。
「オガァァァァァァ！！」
突然、目の前に謎の怪物が現れた。
「ギャアアアアアアアアアア！！一体何だァァァ！？」
「新八！」
新八の前に、ロイドが剣を持ってやって来た。手に持った剣で怪物を斬った。
「何だこいつは……まるでモンスターじゃないか」
「オイ、何か段々と増えてるぞこいつら！」
「何！」
前の方を見ると、同じような怪物がうじゃうじゃと現れているのだ。
「くっ、皆は無事か？」
「ああ。だって見て見ろ」
ヤムチャが後ろを指さした。後ろには怪物に目がけて気弾を放っているベジータとブロリー、怪物を斬りまくっているさやか、そして、蒼の力で怪物を消し去っているラグナの姿があった。
「大丈夫だな。よし、俺らはヒナギクを探しに行こう」
「そうだな。あんなヤンデレでも心配だ」
「皆、怪我するなよ」
「当たり前アル！」
「ヒナちゃん、待ってろよ！」
そう言うと、２Ｚの連中は校舎内へ走って行った。

校舎内は見た事のない怪物が無双並みにうろついていた。だけど、ルフィや悟空達戦闘メンバーがすぐに秒殺してくれて、難なく進めた。
「この調子だったらすぐにヒナギクを救えるネ！」
「余裕余裕！」
神楽達はこんな事を言っていた。だが、新八は隣にいる銀時が何

故かシリアスモードという事に気づいていた。
「なぁ、何か銀さんの様子おかしくないか？」
隣にいる咲夜が新八にこう言った。
「うん……一体どうしたんだろう」
新八と咲夜は、こんな話をしていた。

その頃、校舎の外では一部の連中が集まって話していた。
「オイ、まさかこのままシリアス展開か？」
「見たいだな、この小説、コメディなのに」
「無駄にシリアスやったら人気下がるんじゃねーか？」
「そうだそうだ！」
「だったらどうする？」
「俺らが無理矢理ギャグ路線に戻す！」
「そうだな、よし！俺らも校舎に向かうぞ！」
集団はそう言った後、校舎へ向かって行った。

次回！
俺がせっかくシリアスにしようとしたのにその事が気に食わないバカが数名いた！せっかくシリアスにしようとしたのに（重要だから二回言いました）あいつらが現れて空気を台無しにする！次回混沌学院『シリアスの中のギャグも多分必要』どうぞご期待！
「食うかい？」
「何を？」

第９４話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）長編の後の長編って異様に疲れる（後

おまけトーク

銀八「おい次、ギャグじゃねーか」

ブロリー「シリアスはどうした？」

パラガス「まさか……忘れたとでも」

銀凪「ドナルド、久しぶりにあれを」

ドナルド「分かったよ。ランランルー！！」

銀八「ギャアアアアアアアア！！何でおれだけェェェェェェェェ！？」

銀凪「次はギャグですが、その後はほとんどシリアスです」

第９５話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）シリアスの中のギャグも多分必要（前

闇「あれ、もう続きですか？」

銀凪「はい、あと後書きにて重要な話があります」

第９５話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）シリアスの中のギャグも多分必要

２Ｚの連中が校内に入って数分後、彼らは目の前の怪物を倒しまくったのだが、敵の数が多すぎてなかなか前に進まないのだ。
「チクショー！数が多すぎて先に進めないアル！」
目の前の怪物を蹴り倒しながら、神楽はこう言った。
「クソッ！俺らだけじゃ無理なのかよ！」
息を切らせながら、神埼はこう言った。場所はまだ一階、多すぎる怪物のせいで戦闘は長引き、誰もが体力を無駄に使用していたのだ。
「ハァ…ハァ…こりゃまずいぜ」
「ああ、オラ達の力が無くなるぜこりゃ」
誰もがちょっとこれヤバいんじゃね？と思っていたその時だった。
「混沌学院！シリアス化はんたーい！」
「「「はんたーい！」」」
後ろから声がしたのだ。しばらくして、首領パッチを先頭に、ギャグマンガキャラクター達が乱入してきたのだ。
「オイィィィィ！！何でアンタらここにいるのォォォォォ！？」
「俺らの目的は――――今回の長編をぶち壊す事だ！」
「シリアスメイン？わしらはいきなりギャグからシリアスになる事を反対しているのじゃ！」
「いきなりギャグマンガからシリアスなバトルマンガに変わったマンガを俺らは知っている！」
「そんな悲劇を起こさないため、俺らは集まったんだ！」
ギャグマンガの連中が話していると、奴らの後ろにいた怪物が奴らを襲った。
「不意打ちか？そんなの効かん！喰らえ、ところてんマグナム！」
「ギャアアアアアアアア！！いきなりかよォォォォォォォ！！」
後ろにいたボーボボが天の助を殴り、怪物を攻撃した。

「フッフッフ、拙者の忍術を見るがいい！」
いきなりハマーが前に現れ、何かの印を結んだ。
「必殺忍法！『ハマーがいっぱい！』」
次の瞬間、ハマーが大量に現れた。
「うわ！キモッ！！」
新八の近くにいた咲夜が、正直な反応をした。
「「「ハッハッハ！俺の力、思い知れェェェェェェ！！」」」
大量のハマーがこう言った。だが数秒後、その数が一気に減少した。分身が消え、その中心にいたハマーが息を切らせながらこう言った。
「スンマセン、もう限界です」
「じゃあお前何のためにやったんじゃァァァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアアアアアアア！！」
ボーボボがハマーを蹴り飛ばし、怪物の所へブッ飛ばした。
「仕方ねェ、久しぶりにあの技やるか！」
その後、ボーボボの鼻から鼻毛が現れた。
「鼻毛真拳究極奥義！『鼻毛横丁』」
ボーボボの鼻から大量の鼻毛が現れ、周囲の怪物と首領パッチと天の助と田楽マンとハマーを攻撃していった。
「「「「ギャアアアアアアアアアアアアア！！ボーボボ後でぶっ殺す！！！」」」」
攻撃の巻き添えを食らった四人はボーボボに向かってこう言った。だが、その後でボーボボはその四人を窓に向かって投げ捨てた。
「いや、何で捨てるの！」
ボーボボの奇行に対して新八はこう言った。
「フッフッフ、こうなったらワガハイの出番じゃい」
元校長が不敵な笑いをしながらこう言った。
「喰らうがいい！必殺、バイオレンスマグナムストレート――――」
その時、後ろにいたゲベが口から巨大な火炎玉を怪物に向かって放った。その巨大な火炎玉は元校長も巻き込んで、爆発した。

「アアアアアアアアア！元校長せんせーい！！」
新八が黒く染まった元校長に向かって叫んだ。その後、元校長の体から、魂が抜けて行った。
「死んだァァァァァァァァァ！！」
「「そぉい！」」
だが、マサルとジャガーが魂を掴み、その辺にあった怪物の死体に向かってブン投げた。
「何してんのアンタら！」
「いや、面白そうだったから」
「何だよその理由！」
マサルとジャガーに向かって咲夜はツッコミをした。その後、その怪物の死体が動き出した。
「あ、元校長先生」
「なんじゃい！この姿はァァァァァァ！？」
元校長は、自分の体を見て嘆いた。だが。
「おらァァァァァァァ！くたばるがヨロシィィィィィ！！」
事情を知らない神楽が、元校長の魂が入った怪物を殴り始めた。
「ボーボボォォォォォ！！テメーブッ倒す！！」
その時だった。下に落とされた首領パッチ達がやって来たのだ。
「あれ？生きてたの？」
「たりめーだ！この小説の主人公がそう簡単に死んでたまるかよ！」
「お前主人公じゃねーから！」
自称、主人公の首領パッチがこう言った後、後ろからジャガーの乗ったトラックが彼をひき飛ばした。
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
「あ、ひいちゃった？メンゴメンゴ♪」
「アンタわざとだろ！」
新八が声を高く上げ、こう叫んだ。
「皆！ところてんを食べろォォォォォォォォォォォォ！！」
後ろから天の助が滑りながらやって来た。だが、新八達は彼を無

視した。その結果、彼は敵がうじゃうじゃいる所まで滑ってしまった。
「……こうなれば……必殺！ぷるぷる真拳奥義！『私をた・べ・て♪』」
天の助は体を張り、自分を魚の盛り合わせみたいにところてんを盛り合わせた。だが、そんな彼の努力むなしく、怪物は天の助の体をゴナゴナにした。
「天の助ェェェェェェ！！野郎、許さねェ！必殺！田楽シュート！！」
天の助がやられ、怒り心頭のボーボボ、彼は丁度近くにいた田楽マンを掴み、敵の方へブン投げた。
「ノラァァァァァァァァァァ！！」
だが、田楽マンの体を張った？攻撃は無駄に終わった。怪物たちが、田楽マンを窓に向かってブッ飛ばしたのだ。
「……よくも俺の仲間を！俺の仲間をォォォォォォォォォォ！！」
「いや、アンタが自分の仲間を傷つけたんでしょうがァァァァァァァァァァ！！」
仲間を傷つけられ、ついにブチ切れたボーボボ。だけどどこかデジャヴを感じる新八はボーボボに向かって叫んだのであった。
「いくぜじーさん！あの技をやるぞ！」
「そうじゃな！」
その後、じーさんとボーボボは背中合わせになり、回り始めた。
「「くらえ！鼻毛合体真拳究極奥義！『とある鼻毛ととあるひげの豪華目録（コラボレーション）』」」
ジーさんとボーボボの合体技により、周囲の怪物と首領パッチ、天の助、田楽マン、元校長、ハマーを攻撃していった。
「マサル、俺らも行くぜ！」
「おう！」
マサルとジャガーも合体技を出すために、準備を始めた。
「行くぜ！セクシー合体コマンドー！『笛と私と時々トルネード』」

マサルがジャガーの両足を持って、回転し始め、ジャガーは笛を吹いていた。しばらくすると、ジャガーの笛から巨大なトルネードが発生し、じーさんとボーボボの合体技と同じように、周囲の怪物と首領パッチ、天の助、田楽マン、元校長、ハマーを攻撃した。
「「「「「「ギャアアア

どんなに求愛をしようがあいつはお前の方に振り向かない。あいつはナギの方しか見てないんだよ」
銀時が静かにこう言った。だが、ヒナギクも声を高くし、こう言った。
「だったら！ナギを殺せば！ナギを殺して私がハヤテ君を――――」
「そんな事をしたら、ハヤテが復讐すると思うぜ。それでもいいのか？」
銀時がこう反論したら、ヒナギクは少し黙った。だが、その後でこう言った。
「ハヤテ君に殺されるなら、それはそれでいいわ」
ヒナギクの言葉を聞いた後、銀時は大きなため息をついた。
「仕方ねェ、ちょっとばかし、あいつの目を覚ます為に……ゲンコツ……必要だな」
「出来るかしら？あなたみたいな人が？」
その後、銀時は腰の木刀を握りしめた。

次回！
ついに、銀時対ヒナギクの戦いが始まる！ヒナギクの病んだ精神を銀時は無事、元に戻せるか？そして、勝利の女神はどちらに微笑むのか！次回混沌学院『屋上で戦う時は転落しないように注意しろ』どうぞご期待！
「皆ー！今日はところてんの日だからところてんを――――」
「変な嘘をつくなァァァァァァァ！！」

第９５話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）シリアスの中のギャグも多分必要（後

おまけトーク

銀八「で、重要な話って何だ？」

銀凪「え～、今ワードで混沌学院を書いていますが……何と！何と何と！！只今１００話目を執筆中でございます！！」

梓「え～～～！？」

一方通行「１００話！？」

ブロリー「へぁっ！？」

ドナルド「すごいなぁ」

銀凪「それを記念して、第２回混沌学院人気キャラクターランキングを始めます！！」

銀八「うおっしゃァァァァァァァァァ！！」

銀凪「ではルールを説明します」

1．一回の投票で十票までお願いします。

2．投票するときは感想欄に書いてください。

例　銀時

ルフィ
悟空
男鹿
ロイド
ハヤテ
大河
シャナ
ルイズ
ナギ

のように書いていってくださいあと次の例のように

例　新八×５
　　咲夜×５

という風にやると5票入ります。

3．ここ重要です。もし１０票をオーバーしていた場合、それは無効票となって無効となります。例えば

例　新八×１０
　　銀時

の場合は無効となり、新八に9票、銀時に1票入ります。

以上のルールをしっかり守って投票してください！！あと例に前回の1位～１０位までのランキングを載せます

１０位　御坂美琴

9位　ルフィ
8位　ドナルド
7位　インデックス
6位　奏
5位　銀時
4位　新八
3位　当麻
2位　ナギ
1位　ハヤテ
です。皆さん、投票してね！！

第９６話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）屋上で戦う時は転落しないように注意

銀凪「さて！！今回からシリアスです！！」

梓「前回は完全に悪ふざけでしたよね……」

第９６話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）屋上で戦う時は転落しないように注意

屋上、今ここで銀時とヒナギクは睨めあっていた。銀時の腰にはいつもの洞爺湖と書かれた木刀がある。だが、ヒナギクはどんな所でも妖刀、紅桜を出せるのだ。迂闊に攻め込んだら、紅桜の餌食となってしまう。一体どうしようか、銀時は考えていた。

「先生、私のハヤテ君の愛の為に死んで、シンデクダサイ」

先手を打ったのはヒナギクだった。彼女は両手に紅桜を装備し、銀時を襲いかかった。

「動きが遅い」

銀時はヒナギクの攻撃を上空に飛んでかわした後、背後にまわり、ヒナギクを羽交い絞めにした。

「グ！ガガガガガ！！」

「さっさと諦めな！俺とお前じゃあ差が違いすぎるんだよ！」

「チィ！」

ヒナギクは、銀時の後ろに紅桜を召喚し、銀時の背中を突き刺そうとしたのだが。

「いいのか？あれだけ刃が長いもんを俺に突き刺したら……お前の体も突き刺さるぜ」

「……ヨクカンガエテルワネ」

その後、銀時は羽交い絞めにしている腕の力を強めた。だが。

「グゥッ！」

「ヤベッ！」

ヒナギクが後ろに倒れたのだ。後ろにいた銀時もヒナギクの転倒に巻き込まれ、腕を離してしまった。

「ケイセイギャクテンネ」

銀時の上に、紅桜を構えたヒナギクの姿があった。

「甘いんだよ」

銀時は、自分の両足を開き、ヒナギクの両足に軽く命中させてヒ

ナギクのバランスを崩させた。
「シマッ――――」
「オラァ！」
バランスを崩したヒナギクの隙を奪い、銀時はヒナギクに一撃を与えた。その一撃はヒナギクをブッ飛ばした。ヒナギクと距離が開き、銀時は追撃の構えを取った。
「行くぞおらァァァァァ！！」
銀時はヒナギクに反撃の隙を与えぬよう、連続して攻撃を放った。彼の連続攻撃は早く、反撃の隙なんてなかった。
「キャアアアアアアアアアア！！」
攻撃を受け続け、ついにヒナギクは倒れた。ヒナギクが倒れた後、銀時はヒナギクに向け、木刀を突きつけた。
「これで分かったろ、お前の力はこんなもんだって」
「ジョウダンジャナイワヨ！」
木刀を突きつけられている中、ヒナギクは銀時の木刀の先端を叩き折り、立ち上がった。
「なっ！」
「スキヲミセマシタネ」
ヒナギクがこう言った次の瞬間、銀時の周囲に無数の紅桜が現れた。

その一方、新八達はヒナギクを探すため、混沌学院中の教室を探していた。
「くそ～、一体どこにいるんだ？」
「ここか？」
新八と共に行動をしていた咲夜が近くにあったロッカーを開いた。中には。
「小野……イナフ」
フイッシュ竹中さんがいた。その後、新八と咲夜の手によってフイッシュ竹中さんは窓の外に投げられた。

「お～い、新八～！」
悟空の声が聞こえ、新八はその方向を見た。
「ヒナギクいたか？」
「いや、こっちはいません」
「そうか、いると思ったのによ～」
「あとはどこや？」
「あとって……屋上か？」
「よし！屋上に行きましょう！」
その後、２Ｚの連中が集まり、屋上へ向かって行った。
「あれ？銀さんはどこ行ったの？」
屋上へ向かう途中、新八はそう言った。
「さぁ？どこかでサボってるんじゃないアルか？」
近くにいた神楽がこう言った。
「……そうだね」
小さく新八は呟いた。だが、彼の心の中に嫌な予感が走っていた。

という訳で屋上付近、ここでルフィは何かに気付いた。
「オイ……なんか鉄くさくねーか？」
「確かに、血の匂いが少しするな……」
チョッパーが臭いをかいでそう言った。
「よし、先に行こう！」
ヤムチャがそう言った後、屋上の扉を開いた。そして、彼らは絶句した。彼らの目の前には、無数の紅桜に刺され、血まみれの銀時がいた。
「ぎ……銀さァァァァァァァァァァァァァん！！」
あまりにも突然過ぎた。一体何があったのか彼らは知らなかった。
「アラ、ミンナモチマミレニナリニキタノ？」
前の方からヒナギクの声が聞こえた。彼女は、血がついた紅桜を持って、新八の方を見ていた。
「……まさか……あなたが――――」

「ソウヨ、ワタシガギンサンヲタオシタノヨ」
「何で、何でこんな事を……」
ここで新八は気付いた。銀時は今回の騒動の犯人がヒナギクだと知り、たった一人でヒナギクの元へ向かい、戦い、敗れたのだ。
「銀さん……何で一人でこんな無茶を……」
「新八、今はそれどころじゃねぇ、オラ達でヒナギクを何とかしよう！」
悟空が新八に語りかけた後、超サイヤ人になり、ヒナギクの方へ向かった。その後、ルフィ、ロイド、男鹿、シャナ、サイト、大河ら前線メンバーがヒナギクの方へ向かって行った。
「くらえ！か～～～め～～～は～～～め～～～」
ヒナギクの前の方で、悟空はかめはめ波の構えを取った。だが、ヒナギクは横に移動し始めた。
「ソンナノ、イドウシテイレバアタラ――――」
その時だった、悟空の姿が消えたのだ。
「ナニ！」
「波ァァァァァァァァァァァァ！！」
後ろから悟空の声がした、振り向こうとしたのだが時すでに遅し、巨大なかめはめ波がヒナギクを包み込んだのだ。
「よし！これでヒナギクを――――」
「タオシタ、トデモイイタイノ？」
悟空の後ろから声がした、振り向こうとしたのだが、ヒナギクの紅桜が悟空を切り裂いた。
「グワァァァ！！」
「悟空！よくも！」
ヤムチャは操気弾を作り出し、ヒナギクに向けてはなった。だがしかし、ヒナギクはそれを叩き落とし、ヤムチャに反撃をくらわした。
「くそ！」
「ヤムチャ！そこどいてろ！」

後ろからルフィの声がした。ルフィはヒナギクに向けてゴムゴムの銃を放った、しかし、ヒナギクは紅桜を何本か体の周囲に集わせ、身を守った。
「ワタシニコンナワザハキカナイワヨ！」
そんな中、男鹿がヒナギクに殴りかかった。
「くらえ！めり込みパンチ！」
「ソンナヘンナパンチクラウトオモウ？」
男鹿の拳に、紅桜の先端が突き刺さった。
「グッ！」
「ブットビナサイ！」
ヒナギクの反撃により、男鹿は遠くの方の壁にブッ飛ばされた。
「男鹿！」
ロイドはエターナルソードを手に取り、ヒナギクに向かって走って行ったのだが、無数の紅桜によって妨害された。
「チィッ！畜生！」
その後、この場にいる戦闘メンバー全員がヒナギクに向かって走って行った。だが、全員ヒナギクの元にたどり着く前に、紅桜によって邪魔されていったのだ。
「皆さん！」
「くっ……ヤバいでこれ」
咲夜は周囲を見渡した。２Ｚの戦闘メンバーは全員、ヒナギクによって妨害されている。
「コレデ、コレデワタシノヤボウガカナウトキガキタノヨ！」
声を高く上げ、ヒナギクは笑い始めた。だが、ある男の一撃でヒナギクの体は空高くぶっ飛んだ。
「ダ……ダレ！」
ヒナギクは驚いた、まさか自分がブッ飛ばされるとは思ってもいなかったからだ。
「来いよヒナギク……」
ヒナギクをブッ飛ばした人物、それは今さっき倒した銀時だった

のだ。彼はチョッパーとマルタの手当てを受け、何とか回復したのだ。木刀を構え、銀時はこう言った。

「見せてやるよ……本当の外道ってやつを」

次回、再び対決する銀時とヒナギク。ヒナギクを元に戻すため、マジでシリアスな戦いが幕を開ける。次回混沌学院『辺りがシリアスになる程空気が重くなる』どうぞご期待！

第９６話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）屋上で戦う時は転落しないように注意

おまけトーク

銀凪「すみません、人気投票ついて一言言うの忘れてました」

闇「早く言ってください」

銀凪「ルール上今回まで出演していないキャラに投票した場合、その票は無効となります。ここのところを気をつけてください！！」

第97話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）辺りがシリアスになる程空気が重くなる

銀凪「さて！！最後のヤンデレ編も人気投票もヒートアップしてこうぜェェェ！！」

梓「熱すぎて倒れないでくださいね」

第97話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）辺りがシリアスになる程空気が重くなる

銀時復活。彼は今再び、ヒナギクと睨めあっていた。
「センセイ、ソンナケガシタカラダデワタシヲタオセルトオモッテイルンデスカ？マタクシザシニシマスヨ」
「はん、次はそうはいかねーよ」
銀時はそう言うと、右手を空に上げ、こう言った。
「来い！木刀正宗！」
次の瞬間、地上の方から木刀、正宗が飛んで来て、銀時の右手に装備された。
「ナ……ナンデ？」
「伊澄から借りたんだよ。テメーを倒す為に」
そして、右手に正宗、左手に自分の木刀装備した銀時。彼はヒナギクに向かって走り出した。
「センセイ……ソンナニコロサレタイノネ！」
ヒナギクはそう言うと、何十本ものの紅桜を召喚し、銀時に襲わせた。だが、銀時は全ての紅桜を叩き折った。
「ナニ！」
「おい、後ろに注意した方がいいぜ」
背後から銀時の声がした。ヒナギクは背後を見ると、そこには攻撃の構えの銀時がいた。防御をしようとしたのだが、銀時の攻撃の方が早く、銀時が繰り出した斬撃はヒナギクに命中した。
「グハァ！」
「まだだ」
ぶっ飛んだヒナギクを追い、銀時は追撃を放った。
「コンナコウゲキ、ガードシテレバ――――」
銀時の攻撃を腕でガードしたヒナギク。だが、銀時の攻撃は重く、ヒナギクの腕ははじかれた。
「シマッ――――」

「喰らえェェェェェェ！！」
ガードが外れたのを見て、銀時はヒナギクの頭に頭突きを放った。
「カアッ…アア」
「へへっ、どうだ」
目の前で崩れ倒れるヒナギクを見て銀時はこう言った。
「チ……チグショォォォォォォァァァァァァァ！！」
大声でヒナギクはこう叫び、銀時に向かって紅桜を飛ばしてきた。
「そんなの、通用しねーよ」
両手の木刀を使い、目の前に飛んできた紅桜を叩き折った。
「もう観念するんだな」
銀時はそう言った。もう何の手段を持っていないヒナギクは、自分が書いた魔法陣の所へ向かい、何かの呪文を唱え始めた。
「何をするつもりだ？」
「アナタヲタオスタメ、ワタシノチカラヲサイダイゲンマデタカメル！」
その後、魔法陣から黒い光が放たれ、ヒナギクによって吸収されていった。
「ヤミノチカラデキサマヲコロス！」
「オイオイ、闇とか……マジかよ」
その様子を見ていた銀時は少し驚いた。ヒナギクは段々と黒に染まっていき、しばらくして全身黒に染まった。
「フハハハハハ！コレデキサマヲケシズミニシテヤル！」
真黒になったヒナギクは、右手に暗黒の塊を作り、銀時に向かってブン投げた。その塊は、ものすごく燃えていて、黒い炎を纏っていた。
「おわ！」
間一髪、銀時はその黒い塊を避けたのだが、その時に教師用の白衣が少し焦げてしまった。
「……マジかよ」
「ドウダ？シヌキニナッタカ？」

前の方ではヒナギクが笑いながらこう言った。だが、銀時も両手の木刀を構えて、こう言った。
「死んでたまるかよ！」
「ダッタラ……キサマヲコロス！」
会話の後、銀時とヒナギクは同時に走っていた。
「ウオォォォォォォォォォォォォ！！」
「ヒャッハァァァァァァァァ！！」

ガシィィィィィィ！！！

二人の雄叫びの後、剣と剣のぶつかり合いの音が響き渡った。その後、無数の斬撃音が辺りに響き渡った。
「オラオラオラァァァァァァ！！」
「ハァァァァァァァァァァァァ！！」
二人とも、雄叫びをあげながら斬撃を繰り出して行く。そんな展開が数分続いたのだ。
「はぁっはぁっ……こりゃまずいな」
戦いの中、銀時はこう言った。ただでさえヒナギクの無数の紅桜の攻撃を受けた銀時、マルタとチョッパーの医療が優秀であろうと、傷の痛みはまだ完全には収まっていなかった。ヒナギクの方は、暗黒やら何か変な力を使ってパワーアップ。形勢的には銀時の方が危ないのだ。
「チッ、仕方ねーなこりゃ」
そう言うと、銀時は一旦後ろに下がり、居合いの構えを取った。
「イアイギリカ……ソンナモノデワタシヲタオセルトオモウノカ？」
「やってみねーと分かんねーだろ」
その後、ヒナギクも後ろに下がり、銀時の攻撃に耐えるよう守りの構えを取った。
「オラァァァァァァァ！！」
両手の木刀を構え、銀時は走り出しだした。

「コイ！ワタシニチカヅイタトキガキサマノサイゴダ！」
ヒナギクの方も、銀時が来るのを察知し、攻撃の構えを取った。
そして、辺りに激しい衝撃音が響き渡った。

新八達は心配していた、この戦いがどうなるかを。
「ぐっ……銀さん……」
銀時とヒナギクの攻撃で辺りが砂煙が発生し、誰もが戦いの様子を見れはしなかった。
「あ！あれ！」
新八の後ろにいた神楽が声を上げた。
「何があったの？」
「あれ、見るネ！」
神楽が指をさした所を新八達は一斉に見た。
「ぎ……銀さん！」
新八が歓喜の声を上げた。彼らの目の前には傷だらけだが、その場で立っている銀時の姿があった。

次回
戦いは終わった、銀時の勝利によって。しかし、闇の力が暴走し、更にヤバい譲行になってしまう。だが、２Ｚの連中が戦いを始めて行った。そして、ヒナギクもある事に気付いた。次回混沌学院『終わりからの始まりって何かカッコいい響き』どうぞご期待！
「はぁ……ようやくヒナギク最後のヤンデレか」
「で、次どうするんですか？」
「一応考えています」
「頑張るアルね！」
「あと少しで百話達成、マジで頑張ります！」
「俺の活躍をガンガン書いてくれ！」
「さぁ？」
「あの……後書きトークに行きましょう」

第97話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）辺りがシリアスになる程空気が重くなる

おまけトーク

梓「次でこの長編も終わりですか」

闇「一部を除いて本当にシリアスでしたね」

ブロリー「ギャグがなくて微妙だった」

銀八「おい、この後でまた何かギャグやるのか？」

銀凪「そうです。99話は久しぶりにギャグをやります。お楽しみに～」

第９８話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）終わりからの始まりって何かカッコい

銀凪「さて、ついにラストヤンデレ編のラストです！！」

銀八「見て行ってくれ～」

第９８話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）終わりからの始まりって何かカッコいい

ヒナギクを倒した銀時、彼は生徒達の元へ向かった。
「やりましたね、銀さん」
「ああ。ったく、体中がマジで痛い」
銀時は体をさすりながらその場に座った。
「あとヒナギクをどうするんだ？」
ロイドが銀時の方に来てこう言った。
「そうだな……一旦チョッパーかマルタん所に――――」
その時だった。ヒナギクの体から黒い変な物体が突然現れたのだ。
「な、何だありゃ！」
「オイオイオイ、何かやばくねーかオイ！」
その後、その黒い物体は形を作り出し、人の形になった。
『ハヤテクンハヤテクンハヤテクゥゥゥゥゥゥン！！』
その黒い物体はそう叫んだ後、銀時達に襲いかかった。
「アレ、これ、俺ヤバクね？」
銀時は今さっきの戦いでダメージが大きく、体を動かせない。
『ハヤテクゥゥゥゥゥゥン！！』
「おわァァァァァァァ！！」
「先生、危ない！」
新八が前に出て、手にした木刀でその黒い物体をブッ飛ばした。
その後、その黒い物体は分裂した。
「先生、ここは俺らに任せろ！」
「皆！あいつらをブッ飛ばすぞ！」
しばらくの間、２Ｚの連中と黒い物体の戦いが始まった。

ヒナギクは倒れたまま、空を眺めていた。自分のせいでこんなに大騒動になってしまった事、皆に迷惑をかけてしまった事。そう考えると今までのヤンデレ行為が馬鹿馬鹿しく思った。

「本当に……バカみたい」
そう言うと、ヒナギクは立ち上がり、近くの魔法陣を消した。
『ハヤテクンハヤテク……アアアア

その人物とは、ハヤテであった。その後、ヒナギクは足元を滑らせ、落下してしまうのだが、ハヤテが彼女を救ったのだ。それからである。ヒナギクがハヤテに想いを寄せるようになったのは。

だが、今は違う。ハヤテはナギの方しか見ていない。自分がこんな騒ぎを起こしても、ハヤテはナギの方しか見ていない。認めたくなかったのだ、自分の失恋が。だからヤンデレになり、騒ぎを起こして行ったのだ。それも今日で終わり、彼女は自分の死で今までの騒ぎをチャラにしようと考えていたのだ。

（せめて……最期に一目、ハヤテ君の姿を見たかった———）

心の中でヒナギクはそう思った。そして、地面が近くなっていった。

「何やってるんですか本当に」

突然声がした。まさかここが天国なのか、ヒナギクはそう思っていた。しかし、視界に入っているのは混沌学院。自分は救われたのだ。何者かによって。

「ったく、一体何かあったんですか？」

その人物とは、山崎だった。彼はお姫様だっこを使い、落ちて来たヒナギクを支えたのだ。

「や……山崎君？」

「ええ、一体何かあったんですか？傷だらけだし」

「い……いや、何も」

「じゃあいいや、そのまま保健室行きます？」

「大丈夫よ、体頑丈だから」
そう言って、ヒナギクは去っていった。

その後、学院に平和が戻り、誰もが平和な時間を過ごしていた。
「あ～、昨日は疲れたな……」
「ああ」
新八と咲夜はこんな話をしていた。
「皆さん、おはようございます～」
「あ、ハヤテさん、ナギちゃ……」
ハヤテとナギが教室に入って来た。で、新八は驚いた。何故なら二人とも、真っ黒に日焼けしていたのだ。
「何で日焼けしてるんですか？」
「実は昨日、二人でハワイに行って来たんです」
「まさかハワイにもガンダーラ・ブホテルがあったなんてな～」
二人は笑いながらこう言った。そして、ハヤテと咲夜はこの二人に軽い殺意を発動した。
「アンタら……」
「昨日あんだけ苦労したっつーのに……」
新八と咲夜はハヤテとナギを掴み、窓の所まで言った。
「「何遊んでるんじゃァァァ

ヒナギクは、紅桜を数本召喚してサンジを窓から外にブッ飛ばした。あの戦いの後、彼女の性格は元に戻ったのだが、ヤンデレ時の力は残ったようであった。

第９８話：（ヒナギク最後のヤンデレ編）終わりからの始まりって何かカッコいい

おまけトーク

梓「……こんな重要なときに何やってるんですかあのバカップルは」

ブロリー「バカか？」

パラガス「バカというより大バカだな」

イーノック「でもこれで終わったんだな、これでヒナギクのキャラは元に戻る。問題ないな」

銀凪「それでうまい事言ったつもりかよ」

ルシフェル「で、その後はどうするんだ？」

銀凪「またコメディに戻す。あと次回は2話連続更新する予定です。お楽しみに～」

第９９話：復讐とかバカな事は考えない方がいい（前書き）

黒猫「１００話前にこんなバカな話を……」

ブロリー「アホだな本当に」

銀凪「あ～、早くドラクエ１２３やりて～」

銀八「作者……」

第９９話：復讐とかバカな事は考えない方がいい

混沌学院のあまり目立たない所、今ここに集まっている連中がいた。
「皆いるか？」
「はい」
「よし、じゃあ早速リア充抹殺隊、緊急会議を行う」
この連中というのはサンジ率いるリア充抹殺隊のバカ共であった。何故バカ共がこんな所にいるのかというと、何かの理由で緊急会議を行うからであった。
「リーダー、何故緊急会議を行うんだ？」
近くにいた近藤がこう言った。質問を聞いた後、サンジは静かにこう言った。
「最近の俺らの活動について色々と話がある」
「最近の活動……まさか」
「ああ、エンジェルレンジャーについてだ」
エンジェルレンジャー、それは５Ｚの沙都子、ピカチュウ、カービィ＋α二名で作られている戦隊物である。彼らは何回かリア充抹殺隊の邪魔をしているのだ。
「俺は考えた、所詮あいつ等は小学生、俺らが本気を出せばあんな連中秒殺できる！」
「じゃあ、俺らがあいつらを倒して……」
「そうだ！俺ら、リア充抹殺隊に平和の光が差し込むんだ！」
その後、リア充抹殺隊が掛け声をあげた。

数日後、リア充圧殺隊はどこかの空き地に来ていた。理由は一つ、エンジェルレンジャーを潰すため。
「おーほっほ！何の用ですか？バカのリア充抹殺隊の皆様方？」
沙都子が大声で笑いながらこう言った。

「今日はいつもの俺らと違う、リア充を倒す為ではない、貴様らを倒す為だ！」
そう言うと、サンジ達はポケットから変なカギを取り出した。
「行くぜ！皆！」
そう言うと、彼らはその変なカギを変な鍵穴に刺して、回した。
『オォォォォォレンジャァァァァァァァ！！』
『カァァァァァクレンジャァァァァァァァ！！』
『ダァァァァァイレンジャァァァァァァァ！！』
『シィィィィィンケンジャァァァァァァァ！！』
『タカ！トラ！バッタ！タ、ト、バ！タトバタ、ト、バ！』
その後、それぞれオーレンジャー、カクレンジャー、ダイレンジャー、シンケンジャー、仮面ライダーオーズに変身した。
「ちょっと待てェェェェェェェェェい！何か変なの混じってるゥゥゥゥゥ！！」
ここで、エンジェルレンジャーの後ろから新八が現れた。
「アンタら、何やってんねん！ってかそんなのどこで手に入れた！」
新八の隣にいた咲夜がこう言った。ちなみに彼らもエンジェルレンジャーの格好をしていた。
「あ、新八、その事を聞きたいのかってか何でお前らがここに？」
「沙都子ちゃんに頼まれたんです」
「ちなみに新八さんはエンジェル眼鏡、咲夜さんはエンジェルブラッドですわ！」
「オィィィィィ！！何か酷くね？」
「何でうちは血の色やねん？」
「気分ですわ！」
「あーもう！それより、サンジさん、アンタそんなのどこで手に入れたんですか！」
「これか？それは……」
サンジは空を見上げて、こう言った。
「異世界に行って盗んできた」

「何してんだオイィィィィィィ！！」
新八はサンジに向かって飛び蹴りを放った。だが、その飛び蹴りはガードされた。
「なっ！」
「忘れたのか？俺らは今戦隊物のヒーローなんだよ！」
「アンタらみたいなヒーロー、子供泣くで」
咲夜が冷たい一言を言い放った。
「さぁ、そんな暇があったら戦いを始めるぞ！」
とまぁ、そんなわけで戦いが始まった。戦いは、エンジェルレンジャーが完全に押していた。理由は単純、エンジェルレンジャーがあまりにも強すぎるから。ピカチュウの十万ボルトで感電させたり、カービィが吸い込んだり、沙都子のトラップではめられたり、新八の飛び蹴りでぶっ飛んだり、咲夜のハリセンで頭をぶつけられたりしていたのだ。
「チクショォォォ！！ならば、これしか手は無い！いでよ、ソウカイガレオン！」
『ソォォォォォォォカイチェェェ
ェェェ
ェェェ
ェェェェェェェェェェェェェェェェェ！！
！』
空間を引き裂いて、海賊船が現れた。
「あ……あれって」
「まさか」
新八と咲夜は驚いた。そう、もうおわかりだろう。現れた人物とは。
「海賊戦隊！ゴウカイジャー！」
何と、本物のゴウカイジャーが現れたのだ。

「「本物来ちゃったァァァァァァァァァァァァァァァ！！」」
「オイ！お前らか、俺達のレンジャーキーを盗んだの？」
「そうだ！それが悪いか！」
サンジがゴウカイガレオンに向かってこう言った。
「海賊から物を盗むなんて度胸のある奴だな」
「それがどうした！」
威張りながらサンジがこう言った後、ゴウカイガレオンがソウカイガレオンに攻撃を仕掛けて来た。
「オワァァァァァァ！？何しやがるんだテメェェェェェェェェ！！」
「お前らを倒してやる！」
「チクショー！仕方ないから全員、ソウカイガレオンから脱出！」
その後、サンジ達はソウカイガレオンから脱出し、うまく地面に着地した。
「仕方ねェ、オイ！エンジェルレンジャー！今回は引き分けにしといてやるからここ――」
その時だった。突然空間を引き裂いて、電車が走って来たのだ。サンジはそれにはねられ、近くの壁に吹っ飛んだ。
「イデデデ……今度は何だよオイ！」
頭をさすりながら、サンジは立ち上がった。その後、その電車から何か現れた。
「俺、参上！」
「電王来ちゃったァァァァァァァァァァァァァ！！！」
その人物とは仮面ライダー電王だった。で、その後ろからまた一人やって来た。
「貴様、オーメダルを返せ！」
後ろからやって来たアンクがこう言った。
「ヤベェ！何か今回すごいゲストが来てるんだけど！」
「百話前か？百話前だからか？」
新八と咲夜は後ろで様子を見ていた。その後、電王&アンクとゴウカイジャーがリア充抹殺隊と戦い始めた。もちろん、リア充抹殺

隊はボコボコにされた。
「ギャアアアアアアア！！」
「助けてェェェェェ！！」
「盗んでごめんなさァァァァァい！！」
「お妙さァァァァァん！！」
「若ァァァァァ！！」
彼らはそれぞれ色んな悲鳴を上げていた。
「ゴウカイジャー！今のうちに奴らに総攻撃を！」
「了解！」
しばらくした後、アンクと電王とゴウカイジャーの協力攻撃がリア充抹殺隊に命中した。
「「「「「ギャアアアアアア

第９９話：復讐とかバカな事は考えない方がいい（後書き）

銀凪「何と今回は９９話と１００話の２本立てです。では混沌学院の１００話目を続けてお楽しみください～」

第１００話：まさかこんなにこの話が続くとは思ってもいなかった（前書き）

銀凪「１００話目いったどォォォォォォォォォォォォ！！」

銀八「うおっしゃァァァァァァァァァァ！！」

梓「なんかテンションあがってきましたね」

ブロリー「そうだなぁ」

銀八「じゃ、１００話の始まりです！！」

第１００話：まさかこんなにこの話が続くとは思ってもいなかった

２Ｚ教室、今は休み時間なので皆騒いでいた。しばらくしてチャイムが鳴り、銀時が教室に入って来た。
「ハイテメーら、席につけ、今回の授業は少し重要な話があるからな」
「重要な話？何アルか？」
「それは後で話すからな」
生徒達が席についた後、銀時は一息入れた後、こう言った。
「混沌学院、１００話超えちゃった」
少しの間、沈黙が空気を支配した。そして、誰もが大声を上げた。
「マジでか！」
「いつの間にこんなに続いてたんだよオイ！」
「頑張ったな、作者」
「１００話記念に死ねや土方！」
「お前が死ね総悟！」
そんな声が上がっていった。
「あー待て待て、今回はちょっと話がある」
「何ですか、話って」
新八がこう聞いた後、銀時はこう言った。
「今回の話っつーのは、これからどうしようっつー話だ」
その後、銀時は黒板に『その後の展開』という文字を書いた。そして、生徒達にこう言った。
「じゃあこれからの混沌学院をどうしていくか、テメーらで決めろ」
銀時がこう言った後、生徒達は自由に話し合った。
「ハイ！」
ここで声を上げたのは神楽であった。
「神楽、お前何か言い案あるのか？」
「そうネ！私の案を聞いてびっくりするがヨロシ！」

そう言って、神楽は自分の案を語り始めた。

時は戦国、武将達が天下一を目指し、戦をする時代。そんな中、釘宮国の姫、神楽は城を抜け出した。そんな時、姫はごろつきに捕まってしまったのだが、ある人物が彼女を救った。

「大丈夫か？」

その人物とは、池眼祖国の侍、池手瑠であった。彼らは段々と仲良くなり、ともに添い遂げるようになった。だが、池眼祖国が釘宮国に攻撃、戦が始まってしまったのだ。もちろん池手瑠も兵士として戦場へ出されて行った。彼は悩んだ、彼女の国とは戦えない。その後、二人はひそかに再会、ともに駆け落ちの約束をするのだが。

今世紀多分史上初の長編歴史恋愛物語が今始まる。

『混沌学院～桜と共に魂は散る～』

決して結ばれる事が出来ない二人の切ない愛を……見届けよ。

「どうアルか？」

「学園モノじゃねーじゃん、むしろ歴史小説になってるじゃねーか！」

銀時の叫びの後、神楽は渋々席についた。

「おい、次はねーか次？」

「「はい！！」」

ハヤテとナギが威勢よく手を挙げた。

「他！！」

「「何でですか！？」」

二人が同時に銀時に問い詰めた。

「テメーらが何か発表するたびこの小説が１８禁臭くなるんだよ！いいか？今回は百話目なんだよ！頼むからそう言うオーラを出さないでくれ！」

銀時が嘆くようにこう言った。だが、ハヤテとナギは軽く笑って

いた。
「大丈夫ですよ」
「今回は私達も真面目に考えた」
そう言って、二人の案が始まった。

ある日の夜、全裸の―――

「真面目に考えた結果がこれかよォォォォォォォォ！！」
銀時は二人の頭に制裁チョップを与えた。
「いたァ！何するんですか先生！」
「それはこっちのセリフだ！何だよあの一行、アレだけで何かやばい事が起こりそうじゃねーかァァァァァァァ！！俺はもうオメーらを信じねー！」
そう言って、銀時は再び黒板の前に進んだ。
「で、他に誰かいないか？」
「ハイ！」
次に手を挙げたのはルフィだった。
「お、ルフィか。何か良い案あるのか？」
「おう！じゃあ早速聞いてくれ！」
その後、ルフィの案の物語が始まった。

ある街のラーメン屋、今ここに一人へんちくりんな衣装の男が座っていた。
「お客さん、なににいたしやしょう？」
少し間を開けた後、男はこう答えた。
「この店のチャレンジメニューを出してもらおう」
この言葉を聞いた店員は、後ろに下がった。
「分かりました……でも、後悔はしないでくださいよね」
「後悔をするのは貴様の方だ」
数分後、男の前にかなり大きいラーメンの器が出された。

「制限時間は三十分。それまでに食べきれない場合はお勘定、一万円をいただきます。なお、食べきった場合は一ヶ月分だけ、無料になるスペシャルチケットを差し上げます」
「分かった」
「では、始め！」
店員の掛け声とともに、その男はラーメンを食べ始めた。そして十分後。
「ゴチ！」
男はラーメンを完食した。
「お……おめでとうございます。これがチケットです」
「うむ」
男はチケットを手に入れた後、店から出て行った。
「さて、次の店に行くか」

今、世界中のグルメを食いまくる！
『混沌学院～ルフィの世界食いつくし大冒険～』
トリコに続くグルメ物語が今、幕を開ける。

「わけねーだろうがァァァァァァァァァァ！！」
「駄目か？」
「当たり前だ！そんなにグルメ漫画やりたかったらミスター味っ子の世界に行きやがれ！」
ルフィの話を終えた後、また誰かが手を挙げた。
「にゃあ」
「の……希か。珍しいな、お前から手を上げるなんて。何かいい案でもあるのか？」
「うん」
その後、希は立ち上がり、自分の案を話した。

とある森の奥深く、一人の少女がある生物に話していた。

「ねぇ、あなたペドロでしょ！」
「ペドロっちゃあペドロだけど、それが何？」
そんな会話を交わしていたその頃、どっかの温泉街で二人の少年少女が手をつないで空から落下していた。その一方でスネーク先生っぽい人がある人物に向かってこう言った。
「お前、飛行機の操縦上手だな」
その後、その人物はそう言った。
「飛ばないマヨラーは、ただのマヨラーだ」
その頃、どこかの街でなのはが昔の箒に乗って飛んでいた。
「あ！魔女子さーん！」
途中で、自転車をこいでいたウソップがやって来た。
「私は魔女子さんじゃないよ」
自分を魔女子さんと呼んだウソップに対してなのははこう言った。
その頃、どこかの崖の上では、ハヤテとナギが話し合っていた。
「私、ハヤテの事が好きだぞ！」
「僕もお嬢様の事が好きです！」
そんな話をしていた。一方で近藤が緑色のジャケットを着てどこかの城の頂上を走ったり飛んだりしていた。
「お妙さァァァァァァん！！」
彼の目的は一つ、妙に会うため。だがそのお妙は別の緑色のジャケットを着た人物と会っていた。
「あ、おじさま、あいつです！しつこいストーカーというのは」
「そうか、だったらおじさんに任せなさい」
近藤が妙の所に近づいたその時だった。謎の人物が現れ、彼を斬り落とした。
「またつまらぬ物を斬ってしまった」
そんな事が起きているその頃、空の上にある城では、七三分けの銀時と、小さな石を握っている希と巧が対峙していた。
「時間だ、答えを聞こう」
「答えは……一つだけ」

しばらくの間を開けた後、二人は同時にこう言った。
「「プゥアルフ！」」
その後、彼らの後ろにある巨大な石から光が放たれ、銀時を包み込んだ。
「ギャアアアアア！！目が、目があれなんだけどォォォォォォ！！目が！目がァァァァァ！！！」
目を覆って、銀時はあちらこちらを歩いていた。
「目が、目が、目が……アアアアア

「沖田殺すぞゴラァ！」
「私達軽音部の活躍を…」
「うるせーよ！そんなネタで長編が作れるか！」
「私と悠二君の…」
「作者がラブコメかけると思うかァァァァァァァ！！」
「いや、僕とお嬢様のラブコメ書いてましたよね！」
「あれ、ほとんどギャグだったぞ」
しばらくして、誰もがギャーギャー騒ぎ始めた。だが！

『ったく、うるせーなーギャーギャーギャーギャー』
桂の後ろにいたエリザベスからこんな声が聞こえたのだ。
「エリザベス？一体どうしたのだ？」
『今日はオメーのペットのエリザベスじゃねーんだよ』
謎の人物の声の後、皆ザワザワし始めた。
『ったく、百話達成したからこんなネタ始めたけど、やっぱりグダグダな展開になったな。テメーらが考えた話を俺が作ると思うか？バカが』
この声を聞いた新八は、ガタガタしながらこう言った。
「まさか……さくｓ…」
『読者の皆さんすみません、こんな作品で。でもこんな作品でも皆さんの応援等あった為、長く続けられました。これからも混沌学院を続けて行きたいと思います。では、これからもこのバカ共を温かく見守っていてください』
エリザベスの中の人物はこう言った後、ロッカーへ入り、帰っていった。
「……結局、いつも通りの話で終わってしまいましたね」
新八がこう言った後、授業終了のチャイムが鳴り響いた。

第１００話：まさかこんなにこの話が続くとは思ってもいなかった（後書き）

おまけトーク

銀八「さて、本当に１００話を超えてしまいました」

梓「お疲れ様です」

闇「本当に頑張りましたね」

バジーナ「いや～、本当にすごいでござる」

黒猫「でもいろいろとあったわね」

銀凪「まぁいろいろとあると思うよ、この先もさ。でも何とか頑張って２００話目指して頑張ります！！読者のみなさん、今後とも応援よろしく！！」

第１０１話：読書感想文は何枚まで書けって言われてるからやる気が起きない

銀凪「さて、１０１話始めましょう」

梓「これからも頑張りましょう！！」

銀凪「今回の脳内ＯＰは『銀色の空』でお願いします。ちなみに９９話の脳内ＯＰは『修羅』１００話の脳内ＯＰは『バクチ・ダンサー』でお願いします！！」

銀八「書き忘れたからって今書くなよ」

第１０１話：読書感想文は何枚まで書けって言われてるからやる気が起きない

ある日の現代国語の時間、２Ｚの連中は何かの紙を机に置いていた。その紙は、どうやら作文用紙であった。しばらくして銀時が教室に入って来た。

「はーい、今から課題の読書感想文の発表を始めるー」

「「先生！！」」

銀時が教室に入って今さっきの事を言った後、ハヤテとナギが同時に手を上げてこう言った。

「僕達、そんな事聞かされていませんけど！！」

「何でだ？何で私達をのけものにするんだ！？」

「たりめーだろ、オメーらが読書感想文を書くと１８禁オーラが発生するだろうが。この前の作文発表会だって、オメーらが（ピーーーー！）をネタにして作文書いたから皆引いてたろうが」

「だからって、それはあんまりです！」

「また作文の話が出たらまた書こうねってハヤテと話したのに！」

「またやるつもりだったんかい！！」

完全にヤバい世界に入ってしまったハヤテとナギに向かって銀時はこう言った。

「はぁ、じゃあ始めるぞ。まず誰から発表―――」

「うす」

ここで、ゾロが手を挙げた。

「ゾロ、珍しいな。お前が手を上げるなんて」

「厄介事はすぐに済ませたいからな」

そう言って、ゾロは立ち上がった。

「よし、準備が出来たら発表してくれ」

「分かりました」

その後、ゾロの発表が始まった。

「じゃ、始めます。

見渡す限りの青空を見た感想

ロロノア・ゾロ

良かった点

物語の起承転結がはっきりしていた。ネタバレになってしまうのであまり触れないが、エンディングもいい感じでよかった。主人公とヒロインの関係も面白く、実際に脳内で流れたような感じがした。

悪かった点

やたらとこの作品に関する専門用語が多く、理解が分からない単語もあった。作品の世界観やキャラクターがとてもよかったのに、この点だけが少し残念だった。

総評

キャラも世界観もあっていて、とてもよかった。ただ、前にも言った通りこの作品しか出てこない専門用語が多々あり、見ていて少し理解が出来なかった。その点を改善して次回作を作ってほしい。

以上です」

「どこのファ◯通だァァァァァァ！！」

「そうっすよ、それを元に感想をかきました」

「そうやって感想を書くなよ！」

銀時はそう叫んだ後、再び前を向いた。

「で、他に誰かいねーか？」

「ハイ」

次に手を挙げたのは九兵衛であった。

「九兵衛か、真面目そうだからいいな。じゃあ発表をしてくれ」

「分かりました」

そう言って、手元にあった作文用紙を取り出し、九兵衛は発表を始めた」

「フランダースの犬を読んだ感想

柳生　九兵衛

私は今年の夏、フランダースの犬を読みました。前にフランダースの犬のアニメを見て、最終回に大泣きしたので本を読みたいと思い、購入して読みました。内容は少年ネロと愛犬パトラッシュの絆の物語です。実際私にも寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビチグソ丸という名の猿を飼っています。とても私になつき、家にいるときはこの寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビチグソ丸と一緒にいます。

物語は終盤とても暗く、涙なしでは見られません。私もアニメで泣いたのに本を見て泣きました。そんな私の横で寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビ

チグソ丸が優しく私の肩を叩いてくれました。まるで寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビチグソ丸が泣くんじゃないと言ってるようで、この時の寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビチグソ丸がかなりカッコよく見えました。

私はフランダースの犬を見て、とても切ないと思いました。もし、私と寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビチグソ丸がこのような目にあったらとたまに考え、少し恐ろしくなりますが、私の相棒、寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク＝フェザリオンアイザック＝シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさっきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺビチグ

ソ丸――――」
「待てェェェ

ナミ

私は必勝！上手に金を儲ける方法を読み――――」
「ちょっと待てェェェェェ！！何だその本はァァァァァァァァ！？」
「私が中古本屋で見つけた本です。またすぐにオークションで売りとばしたけど」
「売ったんかいィィィィィィィ！！」
「結構高かったわよ～」
「もういいわその話！」
ナミとの会話をすぐに止め、銀時はすぐに前を見た。
「オイ、もう時間ないから、なるべく全員に発表させたいから、頼むからまともにやった奴は発表して！」
「はい！」
いい声を出したのはおなじみエロい話とかで無駄に活躍するサンジであった。
「……いいか、今からお真面目で頼むぞ。エロネタをやったらその場で即終了だからな！」
「分かりました。じゃあ俺の作文を聞いてくれ」
真面目なオーラを出して、サンジは作文を読み始めた。
「危険なお夜食を見た感想

サンジ

私はこの作品を読み、とても感動しました。まず主人公の為にヒロインの女の子が色んな事をやってくれます。主人公は格闘家で、とても強く、そして優しい性格の男の子です。そしてそんな彼に惚れているヒロインの女の子、そんな彼女が主人公の為にお夜食を作ったり自分の体をお夜食にして主人公と（ピーーーー！）したり、しまいには主人公が（ピーーーー！）で（ピーーーー！）してヒロ

インが（ピーーーー！）――――」
「何ピー音流してんじゃお前はァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
「ギャアアア

第１０１話：読書感想文は何枚まで書けって言われてるからやる気が起きない

おまけトーク

イーノック「さて、今回からまた２００話目指して頑張るんだな」

銀凪「そうです」

ルシフェル「君もいろいろとあるが頑張ってくれ」

銀凪「おう！！」

第１０２話：映画とかでリメイクする場合はタイトルの所に新とか帰って来たの

銀凪「今回は2話の七不思議のリメイク版です」

黒猫「そう、ついにネタが――――」

銀凪「ちゃんとあるから安心して！！」

梓「ＯＰは『蝋人形の館』でお願いします」

第１０２話：映画とかでリメイクする場合はタイトルの所に新とか帰って来たの

昼休み、１Ｚの教室で一部の生徒がこんな話をしていた。
「おい、知ってるか一護？」
「何がだよ」
話かけて来た恋次に対し、一語はこう言った。
「実はよ、この学院にもあるんだよ……七不思議が」
「それ知ってる」
一護がそう言うと、恋次がため息をついた。
「お前が言いてーのは前に２Ｚの連中が解き明かした七不思議だろ？」
「ああ」
「だがな、今回は……『新』七不思議だそうだ」
「新？何だその映画のリメイクみたいな仕様は？」
ため息交じりに一護はこう言った。
「内容はよー、前回とあまり変わってないんだが……だが！今回は何と、目撃者が多数いるらしい！」
「あっそう」
恋次の話を一護は聞き流していたのだが、本気になって聞いていた人物がいた。
「それ本当！」
「おう！俺の知り合いが実際に行ったんだ！詳しく聞きたいか？織姫？」
その後、織姫は恋次から新混沌学院七不思議の話を聞いた。
「面白そうだね！今夜あたり皆で行く？」
「おっ！面白そうだな！いいな！」
「私も数人誘うから、その後で話しよ！」
「オッケー！という訳で一護！あとで俺んとこに来いよ！」
笑顔で恋次はこう言った。そして、一護は小さくこう呟いた。

「俺も頭数に入ってるのかよ」

その日の夜、１Ｚメンバーが夜の校舎に集合していた。メンバーは一護、織姫、ルキア、恋次、ノエル、ツバキ、マコト、箒、一夏、シャルロットそして無理矢理連れてこられたラグナであった。

「オイ、何で俺まで巻き添え食らうんだよ？」

「さぁ？」

体を縄で縛られたラグナは近くにいたシャルにこう言った。

「で、一体どうやって中に入るのだ？この中に」

腕組をした箒がこう言ったのだが、恋次は少し笑っていた。

「なーに、こうすれば簡単だよ！」

恋次は高く飛び、校門の後ろに着地して、鍵を開けた。

「おー！流石原作だと死神！」

「ねぇ、それって犯罪じゃ――――」

「細かい事は気にしない！さ！早くいこ！」

ツバキが無断侵入についてちょっと疑問を持ったが、無事に全員校舎に侵入できた。という訳で２Ｚ教室前、何故彼らがここにいるかというと、新七不思議の一つに『２Ｚ教室から響いてくる謎のギシギシ音と喘ぎ声』というのがあるのだ。

「……何だよその話、嫌な予感がするんだけど」

冷や汗をかきながら一護はこう言った。

「オイオイ何かやべーよ、その音聞いたら俺らどうなるんだよオイ」

少し震えながらラグナがこう言った。

「……フッ、それよりどんな音か早く聞きに行きましょう」

「おいノエル、お前今笑ったろ、少し笑ったろ！」

「フッ」

「ハッ」

「プッ」

「クスッ」

「オォォォォォォォイ！！今度は別の奴も聞こえたぞおい！マコ

ト、ツバキ、シャルロット、織姫！オメーら後で覚えとけよ！」
後ろでラグナはこう叫んでいた。

数分後、彼らは２Ｚ教室前に来ていた。織姫、ノエル達女子メンバーは少しドキドキしていたのだが、ラグナは後ろに立っていた。
「オーイ、何か聞こえたか？」
「いや、全然」
何分たっても音と声は聞こえない。ただ、静寂が空気を支配していた。
「オイ、早く帰ろうぜ。何か変な予感がするし、それに変な感じも――」
ラグナが後ろでこう言っているその時だった。
ドン！
「「ギャアアア

と咲夜を呼んで一緒に取りに来たんだよ」
「一人で来ればいいじゃないですか」
「……なんとなくだよ、決して怖いからっつー理由じゃないから！」
「はいはい」
ノエルが冷ややかな目で銀時を見たその瞬間だった。
ガタ、ガタガタガタ。
２Ｚ教室からこんな音がしたのだ。
「…風が吹いてんのか？」
「今日はそれほど風は吹いていませんよ」
「じゃあ今さっきの風は何だよオイ？」
「知りませんよ」
「何か怪談的な雰囲気になってきたな～」
彼らはざわつき始めた。当たり前だ。真っ暗な２Ｚの教室から変な音が聞こえているから。
「見に行った方がよくねーか？」
小さな声で恋次が言った。
「冗談じゃねーよ！誰があんな怖い所に行くか！」
「そうだそうだ！こえーよ！何があっても俺はしらねーぞ！」
ラグナと銀時が大きな声でこう叫んだ……その時だった。教室から誰かが現れたのだ。
「誰ですか！」
「お……お前は……ハヤテ！」
その正体はハヤテであった。
「オメー何でこんな所にいるんだよ？」
「銀さん？銀さんがいるのか？」
教室の中からナギの声がし、彼女もまた姿を現した。この状況を見て、銀時の脳裏にある事が浮かんだ。
「オメーら……まさか夜中に学校に忍び込んでやらかしてたんじゃねーんだろうな？」
「そうですけど何か？」

素顔でこう言ったハヤテ。その直後、銀時のドロップキックが雄叫びと共にハヤテの腹部に命中した。
「教室で何やってんだオメーらァァァァァァァァァァァァァ！！」
「銀さん！これには訳がある！」
そう言って、ナギが語り始めた。
「実は毎晩屋敷で（ピーーー！）をしているのがマリアにばれて……それで仕方なく夜、学校に忍び込んでハヤテと二人で――――」
「そんだけでやるなボケェェェェェェェェェェェェ！！」
その後、銀時は新八達と協力して、ハヤナギを窓から外へブン投げた。
「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」」
「ったく、こいつらがいるだけでこの作品が１８禁臭くなる！」
「ですよねー」
そんな会話をして、教室から去って行った。

数分後、彼らは家庭科室へ来ていた。
「で？何で俺らが家庭科室にいるんだよ？」
「実はよ、次の七不思議が『家庭科室から漂う異様な臭い』って言うんだよ」
「臭い？全然変な臭いがしないのだが」
辺りを見渡しながら箒はこう言った。だが、その数分後。
「……ん？何だこの臭いは？」
突然、何かの臭いがしてきたのだ。
「オイ、何これ？」
「しらねーよ」
「誰かが毒を――――」
「それだったら皆苦しむはずです」
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア

その後、新八がその臭いの原因を見つけた。
「どうやらここから臭いが出てるみたいです」
「調べて見るか？」
咲夜の問いに新八は軽くうなずいた。
「止めろ新八！お前はそんな子じゃないはずだ！！」
「止めろ！俺らはまだ死にたくねェェェェェェ！！」
新八の後ろで銀時とラグナがこう騒いでいたのだが、彼は無視して調べ始めた。そして、その臭いの元を発見した！
「……何やってるんですか？友紀さん？」
「あ！新八！」
新八は友紀達吸血忍者（これゾンのキャラね）が豚骨ラーメンを作っている現場を目撃した。
「うわ！これ全部ラーメンか？」
「そうだ。一応表社会じゃあラーメン屋として活動してるからな。その為、設備が整ってるこの学院を使ってラーメンを作ってるんだ！」
「オイ、ラーメンおかわり！」
「坦々麺はねーのか？」
「すみません、麺は少なめでお願いします」
「餃子はないのー？」
会話をしている新八達の後ろで、銀時達が豚骨ラーメンを食いあさっていた。
「うわあああああああああああ！何やってんだオメーらァァァァァァァァ！！」
「いや、腹減ってよ～」
「だからって売り物を食うよ！」
「お登勢のバーさんのツケで頼む。じゃ、俺らはこれで」
そう言って、銀時達は去って行った。
「何なんだあいつらァァァァァァァ！！」
無断でラーメンを食いあさって行った銀時達の後ろ姿を見て、友

紀はこう叫んだ。
「ごめんな、うちらで何とかするから」
怒っている友紀の肩を、ポンと咲夜は叩いた。

続いて、彼らは職員室の近くにある職員休憩室という場所に向かった。
「ねぇ恋次、次の怪奇現象は何？」
シャルロットがこう聞いてきた。恋次は少し頭を使った後、こう言った。
「え～と……確か休憩室から聞こえてくる何かの釘を打つ音……だったような……」
恋次がこう言ったその瞬間だった。休憩室からトン、トンと音が聞こえて来たのだ。
「けっ、どーせまた誰かがバカやってんだろ？」
後ろでラグナがこう言った。そんなラグナに向かって新八はこう言った。
「じゃあアンタがこの先の扉開けろよ」
「わーったよ、やってやるよ」
そう言ってラグナは扉を開けた。中にいたのは。
「イ～ヒッヒ～、俳句の神よ～、我に逆らうアホ弟子の曾良に死の裁きを～」
「死ねや土方死ねや土方死ねや土方死ねや土方死ねや土方……」
そこにいたのは壁にある藁人形に目がけて釘を打っている芭蕉と沖田の姿があった。
「……もうほっとこう」
「ああ」
そう言って、恋次達は先へ進んで行った。

この後、彼らは新七不思議の馬鹿馬鹿しい光景を目の当たりにして言った。毎晩、飼育小屋にやって来る幽霊はマダオと前にまどか

達がバイトしていた寿司屋の店長だったし、音楽室から響いてくる謎のワルツは桂とエリザベスがピアノを弾いていただけだったし、体育館から響く謎の音と言うのはベジータ達がスラムダンクのコスプレをしてバスケをしていただけだった。
「んだよこれ！結局どれも七不思議じゃねーじゃん！」
「そうですね、時間の無駄でした」
愚痴をもらしながら彼らは校舎の外に出ていた。
「あ、悪い。ちょっと便所に行ってくる。待ってろよ、お願いだから待ってろよ！」
そう言って、銀時は再び校舎へ戻って行った。
「……銀さんって本当に怖がりだな～」
新八は小さく呟いた。
「あれ？でもなんかおかしくないですか？」
ラグナの横にいるノエルがこう言った。
「何がおかしいの？」
「私達が調べて来たのって七不思議でしょ？でも調べたのは……全部で六つだよね？」
「あ！」
何かに気付いたように、恋次が声を上げた。
「どうしたんですか？」
「実はよー、最後の七不思議の事を思い出したんだよ」
そう言って、恋次はその最期の七不思議を語り始めた。
「最後の七不思議っつーのがよ……まず最初に学院のスピーカーから何か流れるんだよ」

一方、学院に戻った銀時は用を足し、戻っていた。
「ふ～、さっさと戻ろ、こんな怖い場所に長時間いられるかっての」
そう言いながら廊下を歩いていた。だがその時だった。
『ごめんねシェリー』
「あん？何だいきなり？」

「いきなり何かの物語が流れ出すんだよ。最初はいい感じなんだけど……」

『「どこに！どこにシェリーがいるって言うわけ！」私はそう怒鳴るように言いました。私の近くにいた老人は少し間を開け、こう言いました。「いるさ、シェリーは」と。私は不意に後ろを見て見ました。そこには……

「お前の後ろにだァァァ

「それだけか？」
「ああ」
「それだけなんだ」
話を聞き終えた後、織姫が時計を見た。時計の針は二時を指していた。
「もう遅いね、早く帰って寝よ」
「そうだな、俺も親父たちに迷惑かけられねーし」
「じゃ、また明日な！」
「ああ」
「またね～」
「もうこんな思いは嫌だ……」
その後、彼らは帰路について行った。

翌日、生徒の一人が廊下で失神している銀時を発見した。この時の銀時の様子は、白目をむいていて、途切れ途切れに「手が……手が襲ってくる……手が……」と呟いていた。何故、彼が倒れていたのかは誰も知らなかった。後日、新聞部のイリアとゆりが彼に何があったのかと取材をしたのだが、その時の彼の記憶は完全に失われていた。そうして、新たなる不思議が増えて行ったのであった。

第１０２話：映画とかでリメイクする場合はタイトルの所に新とか帰って来たの

おまけトーク

銀凪「え～、ここで次回について話があります」

銀八「何だ何だオイ？」

ブロリー「いつもドラクエ１２３ばっかやってるくせに」

黒猫「何の用なの？」

銀凪「次回、新たなカップルができます」

黒猫「ものすごいネタばれね」

プラチナ（ルナ）「どーなるんだか？」

ラグナ「さぁ？」

第１０３話：告白する時は場所を選んだほうがいい。下手したらトラウマになる

銀凪「今回は長いです。多分長いです」

梓「どんだけですか……」

銀凪「ちょっと重要かもしれない話なので。今回の脳内ＯＰは『本日満開ワタシ色！』でお願いします！！」

第１０３話：告白する時は場所を選んだほうがいい。下手したらトラウマになる

あの激しい戦いから数日がたった。ヒナギクはあの戦いから元に戻り、ヤンデレになる前の状態となっていた。だが、それ以降気になる男子が現れたのである。その男子というのがまさかの。

「山崎～、お前またあんぱん食ってるのか～？」

「ああ、ルフィも食うか？」

山崎であった。

何でヒナギクみたいなスーパーウーマンがあんぱん山崎を気にしているのかというと…あの戦いの後、ヒナギクは責任を取ろうと思い、屋上から落ちたのである。だが、そんな彼女を救ったのが山崎であった。

「はぁ。何だろ、この気持ち」

「どうした？」

ヒナギクがため息をついていると、ゾロが声をかけて来た。

「ああ、ゾロ君……別に何でもないわよ、ただのため息」

「そうか、最後のヤンデレ編の最後で山崎の奴に助けられてそっから奴の事が気になってんのか」

ヒナギクの心の中をあっさりと解き明かしたゾロ。まさかの展開でヒナギクはずっこけた。

「な……何でその事を――――」

「だってオメーの表情から見て分かるっての。山崎以外の皆知ってるぞ。お前が山崎の事を――――」

「ニャアアアアアアアアアア！！」

「ジョセフ！！」

叫びながらヒナギクはゾロの腹部目がけて拳を沈めた。その後、顔を真っ赤にしてヒナギクは教室を出て行った。

「テテテ……ったく、あいつも素直じゃねーなー」

「いや、今のはちょっとゾロにも責任はあるんじゃねーの？」

その様子を見ていたゼロスがゾロに向かってこう言った。
「だけど……ヒナちゃん、まさかあの様子じゃあ……」
「ああ、確定とは言わないが……多分あいつに惚れてるな」
ゼロスとヤムチャはこう言う会話を交わした。
「え？誰が誰に惚れてるの？」
そこに山崎がやっていた。
「いや、何にも～」
「ふ～ん…まぁいいか」
そう言って山崎はあんぱんを買いに購買へ行った。
「ったく、あいつも鈍感だよな～」
「フラグが立ってるって気付いてないもんな」
二人は山崎の後ろ姿を見ながらこう言った。

放課後、ヒナギクはネットカフェに来ていた。以前西沢から聞いた事がある。恋愛に関して色々と聞いてくれる人がチャット世界に何名かいる事を。
「さて、いろいろ話を聞いてみよ」
そう言ってヒナギクはチャットルームにログインした。ハンドルネームを『桃色侍』にし、悩みを書いた。

桃色侍『今、悩み事があります。その悩みというのが同じクラスの男子が最近気になっています。何故でしょうか？いつもその男子の顔が離れません。これって一体何ですか？』

と、文章を書いた。そして数秒後、返信が届いた。

フルーツポンチ侍G『悩み？そんな事でいちいち気にするな！そんな事ばかり気にしていたらまともに生活が出来なくなるぞ！そんなんだったら俺と一緒にラッパーにならないか？』

マジでダンディなおじさん『そんな事よりいい就職教えてくれよ』

電柱柱子『最近出番がない……』

カスタネットのうんたん『私も最近出番がない……』

きりりん『私もよ』

雲『俺もだ……』

空気王『何、気にする事は無い』

銀侍『それよりこの辺にいい泌尿器科ない？』

マジでダンディなおじさん『ああ、それなら〇〇町の××ってとこがお勧めだよ。看護婦さん美人だよ～』

銀侍『マジでか！オイオイ、俺のマジでダンディなお稲荷さんが悪化するじゃねーか』

というような返事が届いた。

「何これ……ロクな人いないじゃない」

思わず呟いたヒナギク、その時だった。

峰峰子『あらあなた、その悩みは恋の悩みよ♪』

いきなりこんな事を言われたのだ。その文章を見たヒナギクは、顔が真っ赤になった。ヒナギクはその後、こう返事を返した。

桃色侍『ええ！？恋って……そんな訳じゃあ』

峰峰子『フフッ、その慌てよう。どうやらその男子に恋をしているようね』

桃色侍『え…あう……』

峰峰子と名乗る人物により、ヒナギクは少し戸惑った。確かにあの時、山崎に救われた時にハヤテと助けられた後と同じような気持ちになったのだ。

峰峰子『少しだけアドバイスしておくわ。どんな恋でも攻めの心を持った方がいいわ。それにあなたの恋の相手が奥手だったらなおさらだわ。とりあえず自分の恋に自信を持って、ぶつかってみてごらん』

桃色侍『……はぁ』

銀侍『そこの電話番号教えて！』

まるでダンディなおじさん『〇〇〇〇－××－△△△△だったと思う』

銀侍『よっしゃー！これで毎晩の悩みが解消するぜ！』

フルーツポンチ侍G『やるしかねーZURA今しかねーZURA』

一部バカが紛れてしまったが、ヒナギクはとりあえず自信を持て、という事に気付いた。

桃色侍『悩みを聞いてくれてありがとうございます。峰峰子さん』

峰峰子『いいわよ、あなたの恋が実るといいわね♪』

マジでダンディなおじさん『あーあとあそこの病院、美人でボンキュッボーンの子もいるぜ』

銀侍『オイオイ、俺のお稲荷さんが悪化しちまうじゃねーか。それでも行くけど』

フルーツポンチ侍G『そこの病院に人妻の看護婦はいますか？』

その後、ヒナギクはログアウトし、ネットカフェから出て行った。で、その後のチャット世界では。

峰峰子『ここで話に割り込んできた3バカに話があります。明日の午前0時までに2Zの巧さんと文乃さんは毎晩体育館倉庫の裏で（うっふん）や（あっはん）をしているというメールを混沌学院中の生徒に送ってください。なお、もしやらなかった場合は一週間以内に○○県の△△湾の中央でお魚の餌になってもらいます。私の友人の知り合いのヤンキーがこの記事を見た後、行方不明になりました』

「「「マジでかァァァァァァァァァァァァ！？」」」

この話を信じてしまった銀時（銀侍）と長谷川（マジでダンディなおじさん）と桂（フルーツポンチ侍G）は大急ぎでこう文章をうった。

マジでダンディなおじさん『ヤバいよ！！どうする！？』

銀侍『どうするも何も、とりあえず一回会って話し合おうぜ！！』

フルーツポンチ侍G『場所はどうする？』

銀侍『仕方ねー、混沌学院の近くにある天下り公園の『天下りに失敗して何もかもどうにもよくなった哀れな政治家の像』の近くで集合でいいか？』

マジでダンディなおじさん『分かった！今俺その近くにいるから！』

フルーツポンチ侍Ｇ『了解！俺も今向かう！』

銀侍『じゃあまた後でな！』

その後、彼らは頭を抱えてこう叫んだ。

「「「何てこったァァァァァァァ！！」」」

ちなみに、この峰峰子の正体は１００話ぶりに登場した３Ｚの夏帆であった。

「ふふっ、これでどうなるか楽しみですわ」

ログアウトし、夏帆は笑顔でこう言った。

その後、ヒナギクは買い物をするため近くの商店街へ寄って行った。

「はいこれ」

「何ですこれ？」

「今ね、商店街の企画で遊園地が当たるくじの企画をやってるのよ。で、それが引換券。一度やってみて」

と、スーパーのおばちゃんに言われたので、ヒナギクはくじの会場へ向かった。

（ま、どうせ遊園地行きのチケット何て当たらないか）

ヒナギクはそう思いながらくじを引いた。で、そのくじには『超当たり』と書かれていた。

「……何これ？」

「おめでとうございます！超当たりです！」
「ちょっと！超当たりって何？」
「おめでとうございます。超当たりは二名まで使用できる遊園地チケットでございます！」
その後、くじの開催者から遊園地のチケットを二枚渡された。
「本当におめでとうございます。遊園地で夢の時間を楽しんでください！」
「だから超当たりって何？そこは大当たりじゃないのォォォォォォ！？」
ヒナギクのシャウトが空高く響いた。

翌日の放課後。授業が終わり、山崎は購買へあんぱんを買うために帰宅の準備をしていた。
「山崎君、ちょっといい？」
「ん？何ですかヒナギクさん？」
ヒナギクは山崎を呼び、遊園地のチケットを渡した。
「実は商店街のくじで当てたの。一枚余ってるから…一緒にどうかなって」
「あ、いいっすよ～」
その後、ヒナギクはチケットを山崎に渡した後、去って行った。
その様子をゼロスとヤムチャ、それと他の生徒達がしっかりと目撃していた。
「おい見たか今の？」
「おう」
「まさか新たなるカップルがまた？」
「何かドキドキするね～」
「にゃあ……」
「一体どうなるんだ？」
「このクラスは恋愛だけで盛り上がるわね～」
「そうだな」

「とりあえず俺は土方さんが死んでくれればそれだけで盛り上がるぜぃ」
「おい、オメーをこの場で屍にしてやろうか？」
ざわつきが２Ｚの教室で生まれた。
「さて、ヤムチャさん、どうしますか？」
「あなたはどうしたいんだ？ゼロスさん？」
教室の前の方でヤムチャとゼロスが話し始めた。そこへ唯がやって来た。
「何話してるの？」
「いや～、実はあの二人の恋の行方を見守ろうかと考え中なんだ」
「ほお！面白そうですな！」
「だろ？だったらクラス皆で協力して……」
「悪い、用を思い出したから帰る」
サンジが声を上げてこう言い、教室から去って行った。
「……そういやーあいつ等の事を忘れていたぜ」
「ああ、あいつ等の対策も考えとかないとな」
「あ～、サンジ君たちなら考えそうだね～」
彼らはそう言った。そう、サンジ達リア充抹殺隊がまたバカな事を考えていると察したのだ。

誰も使われていない教室。今この教室は中からカーテンが敷かれていて、様子がうかがえなかったが、中ではリア充抹殺隊が会議を開いていた。
「で、どうする？山崎とヒナちゃんのデート」
中央にいるサンジがこう声を上げた。その後、隊員達の口から「え？あの山崎が？」「山崎って誰？」「あの地味が！嘘だろ！」とかそんな声があがった。
「で、ここからどうするかだ。お前らも知ってる通りヒナちゃんは以前ヤンデレだった。だがヤンデレが治ったからって言ってもその力はまだある。下手に動いたらデッドエンドだ」

「ああ。そうだな」
しばらくの間、バカ共は作戦会議を開いていたのだが。
「フフフ、聞きましたよ」
「まーたこんなバカな事を考えてたアルか」
廊下の方から紬と神楽の声が聞こえた。
「ヤベ！」
「ばれた？ばれたのかオイ！」
バカ共は騒いだが、少しして落ち着いた。
「よくよく考えてみればこの教室鍵がかかってたんだよな」
「ああ、なら安心だ」
「「あっはっは」」
彼らは安心だと思っていた……。だが。
「ほあちゃァァァァァァァ！！」
神楽が扉を蹴り飛ばした。その扉がサンジに命中した。
「ギャアアアアア！！」
「よし、ナイスよ神楽ちゃん。私達でこのバカを仕留めましょう」
その後、教室からバカ共の悲鳴が轟き渡った。

数日後。山崎とヒナギクは遊園地にいた。その周囲には２Ｚの生徒達がいた。
「いいか皆？なるべく二人に気付かない様に尾行するんだ」
「ＯＫ、わが命に代えても」
「了解！」
返事の後、彼らは跡をついて行ったのであった。
「最初どこ行く？」
「そうだな～、じゃあゴーカートはどう？」
「え！そんなのあるの？行きたい！」
「じゃあ行きましょう」
会話を交わした後、二人はゴーカートへ向かった。
「おい、ゴーカートへ向かうらしいぜ」

「そのようだな」
「私達も向かうネ！」
という訳で２Ｚの連中もゴーカートへ向かって行った。
『みなさーん！ゴーカートへ来てくれてありがとうございます！今日は楽しんでね！』
ナレーションの後、レースが始まった。
「私が案内するわ。山崎君、運転お願い！」
「分かった！」
二人は協力してレースを始めた。
「あ、山崎さん達が発進しました」
「よし、うちらも……」
新八と咲夜が山崎達の後を追おうとしたのだが。
「オラオラオラ！邪魔アル！どけェェェェェェ！！」
「イヤッホー！これすんげェェェェェェ！！」
「助けてェェェェェ！！アクセル深く押し過ぎたァァァァァァ！！」
「あっはは～、これ面白～い！」
もはや尾行する気ゼロのバカ共が騒いでいた。だが何故か山崎とヒナギクは気付いていなかった。
「アレで気付いていないって……」
「良いんじゃないのか？」
新八と咲夜はこんな会話をしていた。

その後、山崎とヒナギクはジェットコースターへ向かっていた。この遊園地のジェットコースターは何かすごいと有名で、結構人気があるのだ。
「うわ～、結構並んでますね～」
「そうね、そのくらい楽しいかしら」
という訳で彼らはジェットコースターの行列に並んだ。
「次はジェットコースターみたいですね」

「面白そうだなオイ！」
「よし、少し間を取って列に並ぶぞ」
新八達も、山崎達の後を追って列に並んだ。数分後。やっとの思いでコースターの所についた。
「では列ごとで乗り物に乗って下さ～い」
アナウンスに言われた通り、山崎とヒナギクはコースターに乗りみ、その後ろで新八、昨夜、唯、ヤムチャの順に乗り込んだ。
「うわ～、楽しみ～」
「何か……緊張してきました」
「眼鏡が飛ばない様に気をつけるんや」
「ええ」
数秒後、コースターの発射を知らせるチャイムが鳴り響いた。
「では皆さん、ジェットコースターの旅を楽しんで行って下さい！」
その後、ゆっくりとコースターが動き出した。
「ねぇ、これ上に上がってるよね……」
「だって、最初は上に上がる……」
山崎のセリフの途中で、ヒナギクは山崎に抱きついた。
「え？ちょ？え？え？ヒナギクさん？ちょ、何ですかいきなり？」
「……」
「あ、そう言えば……ヒナさんは高い所が……」
「言わないで、それ以上は……お願いだから」
「はい、分かり……」
ここで、コースターは猛スピードで落ち始めた。
「イィィィィィィィィィギャァァァ

エェェ！！！」
「無理！これ僕でも……」
ここでコースターは宙返りの部分に入った。
「「アアアア

案内の人にこう言われたので、二人は観覧車に入って行った。
観覧車内部。今山崎とヒナギクは寄り添って座っていた。理由は一つ。高所恐怖症のヒナギクが観覧車からの高さに怖がってしまい、山崎にくっついているだけだった。
「うう～」
「大丈夫ですよ。何度も言うけど俺がついてますって」
山崎は窓から景色を眺めていたのだが、ヒナギクは山崎から離れなかった。まぁそんなこんなで数分が立った時だった！
ガタン！
突如、音が響き、観覧車が止まったのだ。
「え？嘘？」
「死ぬのかな……私達、ここで死ぬのかな？」
涙を流しながら、ヒナギクはこう呟いていた。
「死ぬわけないじゃないですか。楽しい事でも考えましょう」
「……そうね」
しばらくの間、二人は寄り添って座っていた。
「最近どうですか？ヤンデレの呪縛から解き放たれて」
「え……ええ」
ヒナギクは言えなかった。山崎のおかげで命が助かり、更にヤンデレの呪縛が解かれたなんて何か恥ずかしくて言えないのだ。
「何か、色々と吹っ切れたわ。おかげで、新しい恋にも出会えたし」
（バカァァァァ！！何言ってるの私ィィィィィ！？）
ヒナギクは、新しい恋と言ってしまい、後悔した。
「よかったじゃないですか。誰なんですか？相手は？」
何食わぬ顔で山崎はこう言った。ヒナギクは言えない。目の前の相手に恋をしているなんて言えるわけがない。
「言えるわけ……ないじゃないの」
「ですよね。スミマセン。こんな話題してしまって」
「別にいいわ」

しばらくの間、彼らは観覧車が動くのを待っていた。だが、いくら待っても観覧車は動く気配はしない。
「……本当に大丈夫なの？」
震えながらヒナギクはこう言った。
「ええ。言ったじゃないですか、俺がついているって」
「…ええ」
その後、ヒナギクは山崎の手を握った。今この時、彼女は決心したのだ。山崎に告白しようと。急に勇気がわいたのだ。今の山崎の一言を聞いて。
「今の質問に答えるわ」
「……ああ、新しい恋の相手の事ですか」
「そう……その相手は……」
しばらく間を開け、ヒナギクはこう言った。
「私の目の前にいるわ」
その後、ヒナギクは山崎に抱きついた。
「……ヒナギクさん」
そう言って山崎もヒナギクを優しく抱きしめた。

「うおォォォォォォォォォォォォ！！カップル成立だァァァァァァァァァ！！」
「え？マジで！！マジでか！？」
「おお！ホントにか！」
「バァァァブゥゥゥゥゥ！！」
「ギャァァァァァァァァァ！！ベル坊！周りのテンション合わせて電撃を放つなァァァァァァァァ！！」
下の所で２Ｚの連中は望遠鏡で二人の様子を見ていた。
「よっしゃー！俺が腕をふるって赤飯作るぜ！」
「いや～、めでたいね」
「そうですねぃ。これで土方さんが死ねばハッピーエンドですけどね」

「何がハッピーエンドだ？俺にとってはデッドエンドだこのヤロー！」
「でもよかったな～」
「そうですね～」
そうワイワイガヤガヤ２Ｚ連中は騒いでいたのであった。その時であった。

ヒュ～～～……

ドドーン！

花火が上がったのだ。この遊園地は夜のパレードを行っており、その時に花火を打ち上げる事になっているのだ。観覧車にいる山崎とヒナギク、そして２Ｚ連中はその花火を見て、こう思っていた。
「綺麗ね……」
「そうですね」
観覧車から花火を見ていた山崎とヒナギクは、小さくこう言ったのであった。

第１０３話：告白する時は場所を選んだほうがいい。下手したらトラウマになる

久しぶりのおまけ劇場

～それから翌日の朝の事です～

新八「いや～、良かったですね～」

咲夜「そうやな」

ゼロス「まぁこれでヒナちゃんの騒動は完全に終わったな」

ヤムチャ「めでたしめでたしだな」

新八「ええ……あれ？メールが来てる」

咲夜「うちもや」

ゼロス「誰からだ？」

・

・

・

この場にいる全員「「マジでかァァァァァァァァァ！？」」

千世「ちょっと！文乃！！このメールに書いてある事本当なの！？」

文乃「はぁ？そんなわけないじゃない！！」

希「……巧……」

巧「やってないって！そんな目でにらむなよ！！」

新八「これ、非通知になってるけど……一体誰が？」

咲夜「そういやー、昨日銀さんとヅラが来てなかったな」

新八「……」

高杉「おーい、ちょっと誰か来てくれー」

新八「高杉さん？どうかしたんですか？」

高杉「ヅラが突然倒れてよー……こっちはこっちでエリザベスと協力して連れて来たんだ」

ヅラ「ぬ～、ぬ～」

新八「……この人寝てるのか？」

銀時「て……テメーら……せきつ……Z～Z～」

新八「……」

なお、この騒動の後、銀時が文乃によってブッ飛ばされたのだが、それはまた別のお話である。

めでたしめでたし？

おまけトーク

黒猫「久しぶりね、おまけ劇場」

作者「ハハハ……」

イーノック「で、次回は？」

作者「あの探偵どもが参戦します。お楽しみに～」

第１０４話：探偵がいる所にはかなり高い確率で大きな事件が起きる（前書き）

銀凪「今回から新作品が登場します」

黒猫「あなたみたいな馬鹿でも探偵キャラは出すのね」

銀凪「馬鹿は余計だ。今回の脳内ＯＰは『正解はひとつ！じゃない！！』でお願いします」

第１０４話：探偵がいる所にはかなり高い確率で大きな事件が起きる

ある曇りの朝、新八は恐ろしい物を見てしまった。それは教室の真ん中にあった……いや、倒れていた。
「う……嘘ですよね……」
小さく、新八はこう言った。だが、それは答えない。彼が今目にしているのは、近藤の死体だったからだ。
「近藤さん……あなたが亡くなっても……混沌学院、僕達で頑張ります！」
「いや、死んでないからァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアアアア！ゾンビィィィィィィィィ！！」
「ゾンビでもないからァァァァァァァァァァ！！」
朝からこんな声が響いたのであった。

その後、クラスの皆が徐々に集まり、当然この騒ぎの話となった。
「新八、朝から酷いもん見てしまったな～」
「ええ、まさかこんな事になるなんて……」
「ああ、俺自身もまさかこうなるなんて思ってもいなかった」
新八と咲夜の会話中に、近藤がやって来た。
「大丈夫ですか？」
「少し頭痛がするが大丈夫だ」
「昨日何かあったん？」
「いや、それが何も思い出せないんだ」
「そうですか」
その直後、銀時とスネークが教室に入って来た。
「う～い、さっさと席つけ～。朝のＨＲ始めんぞ～」
「ん？何か変な空気だな……何かあったのか？」
「ええ、実は……」
新八は今さっきの出来事を銀時とスネークに話した。

「へー、ゴリラが襲われたんだ」
「そうか。皆、とりあえず席につけ。ホームルームを始めるぞ」
何も興味もなさそうに、銀時はこう言った。
「いや！ちょっと待って下さいよ！探さないんですか？犯人を！」
「犯人つったってよ～、お前生きてるじゃん。探す必要ないじゃん」
「いや！でも俺襲われてるんですよ！」
「うるせーゴリラだなー。さっさと授業始めねーとこっちが困るんよ。じゃ、授業の前にＨＲを――」
その時だった。
「事件ね！」
「私達に任せるのです！」
「私に任せなさい！」
ある生徒達が乱入してきたのだ。その生徒達とは２Ａのうさみちゃん。２Ｅのアリア、キンジ。そして１Ｎのシャロ、ネロ、エルキュール、コーデリアであった。
「何だ何だオイ」
「事件が発生したんでしょ？なら私の出番よ！」
アリアが無い胸を張ってこう言った。
「作者、無い胸って何？」
スンマセン。銃で撃たないでください。と言う訳で彼らは銀時とスネークに有無を言わずに調査を始めた。
「おいテメーら、こっちはこれから授業やるんだよ。テメーらの探偵ごっこにつきあう暇は無いんだよ。こっちだって作者がロクに授業ネタをやらねーからこう言う時にしねーと後でババアに色々言われんだよ」
近くにいるシャロに向かって銀時はこう言った。
「でも、皆さん犯人が分からないと不安でしょ？」
「不安も何も、このクラス化物並みの強さの奴が何人かいるから別に不安も何もねーよ」
「先生！授業よりこっちの方が面白いと思います！」

神楽が手を上げてこう言った。
「そうだそうだ！どうせ先生の授業もバカが変なネタして時間がつぶれるだけじゃん！」
「ついでに土方が死ねばいいと思いますぜぃ」
「沖田、どさくさにまぎれて何言ってやがる」
「アーダ！！」
「ベル坊もこっちの方がいいってさ」
教室のあちこちからこんな声が響いた。
「なんなら探偵さん達でどっちが早く解決するか競ってみたら？」
コレットがこう言った。その後、うさみ、アリア、ミルキィホームズから火花が放たれた。
「ここは私一人でやるから、アンタらは授業に戻っていたら？」
「おいアリア、ちょっと落ち着け！」
「ミルキィホームズの力、見せてやるです！」
「あうう……皆見てる」
「通報だけは私に任せて」
「何で通報？」
探偵達からこんな声が上がった。
「じゃあ私の合図で始めるアル！じゃあ始め！」
「よし！」
「行きます！」
「携帯の充電は……よし！」
そして、探偵達による捜査バトルが始まった。

まず最初。聞きこみ。探偵達は近藤の所に集まっていた。
「昨日何があったんですか？」
「いや～、それがまったく記憶にないんだ」
「記憶が無いんですか！」
「ああ」
「ねぇ、何か違和感的な何かが見当たらなかった？」

「違和感……そうだ。起きた時少し頭痛がしたな」
「頭痛……」
コーデリアはその後、近藤の頭を調べた。頭には、少し大きなタンコブが出来ていた。そこで色々と考えた。昨日何者かが教室に入り、丁度そこにいた近藤と鉢合わせしてしまい、やむを得ず近藤を襲った。
「もしそうだと考えると……でも何でこの教室に入ったのかしら」
一人でブツブツ言いながら考えていた。
「キンジ、何か分かった？」
「アリア、お前も何か調べろよ」
「いい？アンタは私の———」
「はいはい。分かりましたよ」
「それと後でももまん。おごってね」
「自分で買え！」
アリアにどつかれながらギンジは調査を進めた。
「ったく、あいつが何かを察したっつーのに……何で武偵がこんなことするんだ？」
武偵———それは武装を許された探偵の事である。混沌学院の一部の生徒が武偵を育成するためのクラスに属しているのだ。アリアとキンジもそのクラスの一人なのだ。ちなみに武装探偵の略で武偵であって決して———
ぶ：ぶって！この醜い私の体をぶって！
て：テメーがそう望むならやってやるよ！さぁ覚悟しな！
い：イヤ！アッアッ、イタ！アッア～～～～～ン！！
の略ではない。決して。
「今何か変な言葉が———」

「喋ってないでしっかりやる！」
「へーへー」
またアリアから怒声を食らった為、キンジは仕方なく調査を続行した。その時であった。
「ウワァァァァァァァァァ！！」
ハヤテの悲鳴が響いたのだ。
「どうした！」
キンジやうさみがハヤテの所に行った。
「何があったの？」
「僕の……僕の……」
「何かあったのか？」
「僕の大切なお嬢様の写真が消えてる！」
その一言は、辺りの生徒をずっこけさせた。
「イテテ……そんな事で叫ぶなバカ！写真何かまた撮ればいいだろうが！」
「駄目です！それでも駄目なんです！」
「オイ！誰かこのロリコンバカを病院に連れてってくれ！」
キンジは腹の奥からこう叫んだ。

うさみは教室の周りを調べていた。もし、昨日のうちに何者かがこの教室に入ってきたら何かがあるはずなのだ。どんな優秀な侵入者でも、必ず証拠がある。
「う～ん、何か変な物は無いかしら？」
そう言いながら辺りを調べていた。その時だった！
「ウワァァァァァァァァ！！」
「今度はナギ？」
ナギの悲鳴が轟いたのだ。
「どうしたの？どうせハヤテの写真がなくなったんでしょ？」
「……そうだ」
ここでうさみは謎を見つけた。何故犯人はハヤテとナギの写真を

盗んだのか？その謎を解決するため、うさみはナギの机の中を調べた。特に何も変わった所は無い。普通に教科書とハヤテの写真が数枚入っていただけだった。
「特に変わっていないわね」
その後、うさみは考え始めた。

「ったく、変な奴らのせいで授業が目茶苦茶だぜ」
「まぁいいじゃないの？」
黒板の前で銀時とスネークはこう言う会話を交わしていた。
「はぁ、どうせ暇だから俺隠してあるお菓子でも食いながらこの様子を見てる」
「隠してるお菓子って……」
銀時は教室の隅にある教員用の机に向かったのだが……そこには無残に散らかったお菓子の袋があったのだ。
「……誰だァァァァァァァァァァ！！俺の隠していたチョコやポテチを食った奴はァァァァァァァァァァ！？」
「ごちそうさまでした」
銀時の横でネロがこう言った。ネロの口の周りには、ポテトチップスの油やら、チョコなどのお菓子の小さいカスがついていた。
「お前かァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
雄叫びをあげながら、銀時はネロを捕まえた。
「何の事？僕何も食べてないよ」
「嘘言うなボケ。じゃあお前の口の周りについているお菓子の残骸は何だあァァん？」
「それはお菓子が勝手に僕の口に入ったんだよ」
「そんなめる変な話があるわけねーだろ。正直に言え。今なら４分の３殺しでチャラにしてやる」
「４分の３殺しって何？」
「まだとぼけるつもりかこの野郎、今すぐにあの世を送ってやろうか？」

「銀さん、とりあえず落ち着け。チョコぐらいおごるから」
「スネーク、手ェ出すな。これは俺の戦いだ」
「こんなショボイ戦いを繰り広げるな。情けないだけだ、大人として」
この時だった。銀時とネロの喧嘩を見ていたシャロがやって来たのだ。
「あの〜、どうします？」
「とりあえず何とかしてくれ。トイズ発動してもいいから」
「分かりました！」
その後、シャロのトイズが発動され、銀時がいきなり浮かびあがり、天井に頭を突っ込んだ。
「あわわわわ！ちょっと勢いが強すぎました！」
「銀さん！無事か！」
「無事なわけねーだろうが」
天井から銀時の声が聞こえた。その様子を見ていた新八がこう呟いた。
「銀さんがマミった……」
「ふぅ、お菓子も食べたし、僕もトイズを発動するか！」
そう言ってネロはトイズを発動したのだが……その時だった。
「ウワァァァァァァ！！」
突然ネロは顔を真っ赤にして叫んだのだ。
「どうしたの？」
丁度近くにいたヒナギクと山崎が様子を聞いた。
「あのクルリン眉毛の人、変なサイト見てる！」
ネロが指をさした方向はサンジの席だった。
「俺は別に変なサイト見てねーぞ」
「ちょっと、見せなさい」
ヒナギクがサンジの所に来て、携帯を没収した。
「……ちょっと！こんな時に何見てるのよ！」
「あいつ何見てたんですか？」

「……はい」
ヒナギクはサンジの携帯を山崎に見せた。山崎は呆れた顔をした。
「サンジさん、こんな時にエロサイト見ないでくださいよ」
「仕方ねーだろ。だって暇なんだもん」
「だからって、そんなサイトは自分の部屋で見てください」
「へーへー」
そう言うとサンジは再びエロサイトを見始めた。

数分後。探偵達が活躍した結果、このような謎が発見された。
1：何の目的で犯人がこの教室に忍び込んだのか？
2：何故、ハヤテとナギの写真を盗んだのか？

以上の二つである。この謎を解決するため、色々と考えてみたものの、なかなか真実までにたどり着けなかった。
「ん～、意外と難しい」
「早く通報したい」
「何であのバカップルの写真を……？」
それぞれ色んな事を考えては止めていたりしていた。このまま迷宮入りとなってしまうのか？と誰もがそう思ったその時だった。
「まだ謎はあるよ」
子供の声が聞こえたのだ。
「あん？また誰か来たのかよ」
銀時がそう言うと、教室に子供が入って来た。
「お兄さん達、まだ見落としている所があるんじゃないかな？もうちょっとこの教室の外を調べたりとかさ、何で被害者が制服じゃなくて体操着とかさ」
こう言った後、誰もがそう思った。探偵達は中しか調べていなかったし、被害者の近藤も、何故体操着なのか疑問も持っていなかった。

「だ……誰だよオメー」
銀時がこう聞いた後、その子供はこう答えた。
「江戸川コナン、探偵さ」

次回！
まさかまさかのコナンが参戦！探偵達はコナンと協力し、この謎を解けるのか？そして、この事件の犯人は一体誰なのか？それは次回、明らかとなる！次回混沌学院『ハンガーを投げつけただけで怒る人もいるから人との付き合いはうまくやれ』どうぞご期待！

ネークストコントンガクインズヒーント！
『太陽』

銀時「何これ？コナン出したからってネクストコナンズヒント出しやがったよこの作者！」

新八「ていうかこのやり取りもコナンの番組終了時にやる奴とそっくりじゃないですか？」

咲夜「ホンマにパロディのやり過ぎやで、この作者！」

第１０４話：探偵がいる所にはかなり高い確率で大きな事件が起きる（後書き）

おまけトーク

パラガス「コナン……」

イーノック「まさか出るとは」

ルシフェル「本当に、君はネタが尽きるといろんな策を練るな」

銀凪「そういうなよ」

梓「ハハハ……」

第１０５話：ハンガーを投げつけただけで怒る人もいるから人との付き合いはう

銀凪「さて、今回は前回の事件の真相がわかります」

ブロリー「変な予感しかしない」

梓「今回の脳内ＯＰは『恋はスリル、ショック、サスペンス』でお願いします」

銀八「あのパラパラを脳内で再生してくれ！！」

第１０５話：ハンガーを投げつけただけで怒る人もいるから人との付き合いはう

次回までのあらすじ。
２Ｚに在学している近藤勲が何者かに襲われた。幸い怪我は無かったものの、襲われた時の記憶が失われていた。それに対して、うさみちゃん、アリアとギンジ、ミルキィホームズがこの謎に挑むものの、犯人は見つからなかった。そして、ついにあの少年探偵が現れた！
「江戸川コナン、探偵さ」

「オーイ、コナンが出たからって何もあらすじやらなくてもいいんじゃねーの？どうせ基本的にコメディだし、必要ないと思うけど？」
コナンに向かって銀時がこう言った。
「それにさ、急に新キャラ新作品を出したって、読者が困惑するだろー？まさかあのコナンが出るなんて思ってもしなかっただろーよー」
長話を言った後、銀時はコナンに向かってこう言った。
「オイ、お前がこの謎を解いてくれるんだろうな？」
「そうだよ」
「そうかい、じゃあさっさと解決してくれ」
「分かった！」
その時だった。コナンの腕時計と蝶ネクタイが神楽とルフィと悟空によって強奪されたのだ。
「あああああ！！ちょっと！！」
「銀ちゃん、ちょっと実験につきあってくれアル！」
「実験だァ？何を――――」
神楽は銀時に向かって麻酔針を発射した。針が命中した銀時は、その場に座り込んで寝てしまった。
「よし、あとはこれで……」

神楽は蝶ネクタイを装備して、こう叫んだ。
「マリアの三十路メイドさーん！！（銀時声）」
「おお！すげー！銀さんの声だ！！」
ルフィは神楽から蝶ネクタイを借りた後、続けてこう言った。
「マリアは三十七歳でメイド服のコスプレが大好きなんだぞー！！（銀時声）」
「今度はオラに貸してくれ！」
ルフィから蝶ネクタイを借りた後、悟空はこう言った。
「マリアが何で学校に来る時メイド服かって言うと、実はあれ趣味なんだぜー！！（銀時声）」
「アンタら、殺されるぞ！」
神楽達に向かって新八はこう叫んだ。
「……それよりこの謎を解決しないと」
コナンはそう言った後、周囲を調べた。
（どうやら被害者と争った形跡はない。それに、もし外から侵入したとしても窓の所には足跡らしき物がない。そして、何故犯人はハヤナギの写真を盗んだのか？それが一番分からない）
周囲を調べ終えた後、コナンは考え始めた。
（一体、犯人は何が目的なんだ！）
心の中でこう叫んだ後、コナンの後ろから何者かがやって来た。
「何やってんだオメー！」
「アダッ！！」
声の主はルイージであった。
「先生！どうしてここに？」
「授業を中断させてオメーを連れ戻しに来たんだよ。さっさと戻るぞ」
「ちょっと待ってよ！せめてこの事件を解決させて！」
「いいだろそんなの！このクラスは化物並みに強い奴がいるから犯人が襲っても犯人がボロボロになるだけだ！」
ルイージはコナンに向かってこう言っていた。

「あーもう！お願いだから捜査をさせてください！」
「駄目だ！今月に入って十件目だろうが、オメー成績いいけど授業態度が悪いぞ！お前が住んでるあのねーちゃん……蘭だっけ？その蘭っつーねーちゃんに言いつけるぞ！」
「それだけはやめて！お願いします！だからせめて捜査だけは――」
「駄目だ！さっさと戻るぞ！」
「まァ待てよ。こっちもこっちでちょっと捜査に行き詰ってるから、その子がいたら少しは助かるのだが」
スネークがルイージにこう言った。
「はぁ、仕方ねーか。オイコナン、これを解決したら今回の事は無しにしてやるから」
「ありがとう！」
と言う訳でコナンの捜査は再開した。

「ほー、そんな事があったのか」
ルイージは丁度近くにいたシャーロットから話を全て聞いた。
「まぁ被害者が生きてるっつーのはよかったんだけど……まさか記憶がな～」
「そうです、これで私達も行き詰ってるのです」
「ま、アンタみたいな小学部の先生がこんなの解けるわけが――――」
「オイ！外に何か見つかったみたいだぞ！」
土方の声が響いた。誰もが土方の方を見た。
「何が見つかったんだ？」
「これだよ」
土方が手にしているのはくしゃくしゃになった紙らしき物。
「ちょっと貸してくれ！」
ルイージがそう言うと、土方はその紙をルイージに渡した。
「どれどれ……何か写真みたいだな……」
そう呟き、紙を広げて見た。そして、ハヤテの声が響いた。

「これは僕の写真……と言う事はこれはお嬢様の物！」
「何でハヤテの写真が……こんな目に……」
哀れな姿となったハヤテの写真を見て、ナギは涙を流し始めた。
「オイオイ、こんな事で涙なんか―――」
ここでルイージの口を山崎とヒナギクがふさいだ。
「先生！ちょっとそれ以上言うと命にかかわります！！（山崎小声）」
「そうよ、死にたくなかったらあの二人の事を余り悪く言わない方が身のためよ！たとえルイージ先生が強くてもあの二人の強さは次元を超えてます！！（ヒナギク小声）」
「そうか……分かった」
話を聞いた後、ルイージは写真を観察し始めた。彼の後ろには探偵達が立って見ていた。
「何も変わった所はなさそうね……」
「そう？ちょっと汚れてない？」
「汚れ？……あ！」
ここでネロが声を上げた。
「何かこの汚れ、足跡みたいじゃない？」
「足跡……そう言われると……これ何か上履きの足跡みたいだなオイ！」
写真の汚れを見たルイージがこう言った。そして、誰もが推理を始めた。
（一体何で足跡が……）
（犯人が写真を踏んで、証拠隠滅のために捨てたのか？）
（なら、もう一枚のナギの写真はどこに……？）
誰もが新たなる謎にぶつかっていた。そして、その謎が解けない

まま、授業終了のチャイムが鳴り響いた。
「……無理だったみたいだな」
小さくスネークがこう言った。
「残念です……」
「そうだね」
「武偵の力を見せたかったのに……」
誰もが残念風にこう言った。
「さ、皆次の授業の支度をしろよ、２Ｚは……体育か。早くしとけよ」
「はーい」
と言って誰もが返事をした……その時だった。
「あら？私のスクール水着が無いわ」
妙がこう声を上げたのだ。
「どうしたかアルか？」
「私のスク水が無いのよ。昨日ここに置いておいたはずなのに」
「何だ、次は妙のスク水盗難か？」
「みたいですね」
その後、誰もが近藤の方を見た。
「ええ？何で俺になるわけ？」
「いや、妙のストーカーって言ったらお前しかないし……」
「イヤイヤイヤイヤ！何でそうなるの！仮にも俺被害者ですよ！」
「そう言えば……何で近藤さん体操着何ですか？」
「そうやな……今まで気付かなかったけど、何で制服じゃないんや？」
誰もが近藤へ不信感を持った、その時だった。
「あ、太陽」
「お、ようやく晴れ間が出て来たか」
曇っている雲から太陽の光がさしたのだ。そして、その太陽が近藤を照らし、絶句した。近藤の体操着の下が何故か薄い黒だったの

だ。
「……おい、ちょっと近藤。体操着の上を脱げ」
「え？」
「いいから脱げ」
「スネーク先生、まさか男子にも……知ってるんですか？この作者BLが嫌いで―――」
「……皆、やれ！！」
スネークの掛け声を合図に、この場にいた一部の生徒が近藤に襲いかかった。そして。
「体操着取ったネ！」
神楽の声が聞こえた。で、近藤はどうなったかと言うと……彼の上半身は、スクール水着だった。しかもしっかりと名札がついていて、そこには『志村妙』と書かれていたのだ。
「……何だこれは？」
「え？その、えと、分かりません。記憶が無いので……」
その時であった、探偵達がこう言い始めたのだ。
「今回の騒動の犯人はアンタね」
「理由は単純、お妙さんのスク水を盗むため」
「で、教室に侵入し、お妙さんのスク水を着て最高にハイになってハヤテさんとナギさんの机に当たり、その衝撃で写真が床に落ちた」
「それに気付かなかった近藤さんは一回ナギさんの写真を踏んで滑ったんです」
「だけどその時はまだ記憶が残っていた。証拠隠滅のためにその写真を丸めて、外に投げた」
「しかし、もう一枚落ちていると気付かず、近藤さんは今度はハヤテさんの写真を踏み、再び滑って転倒した」
「ここで言うけど何故体操着なのかと言うと、侵入しやすい衣装を選んだ。もし夜道に不審者だと気付かれても混沌学院の生徒で、忘れ物を取りに来たと言い訳をすればいいってわけで、体操着だった」
探偵達がこう言った後、近藤が反論した。

「じゃあそのハヤテの写真はどこだよ、それに足跡があれば―――」
「残念ですが……」
ゴミ箱近くにいた山崎が声を上げた。そして、手にした物をクラス中に見せた。
「アリアさん達の言っている事は、あってます」
彼が手にしているのは、足跡がついたナギが映っている写真だった。
「どうやら、委員長が踏んで滑らせた衝撃でここまで飛んで来たんでしょう」
全ての謎がつながった。どうやら今回の事件の犯人は近藤だったようだ。
「え……え～っと……」
冷や汗をかきながら近藤は辺りを見回した。明らかにハヤテ、ナギ、妙が殺意のオーラを放っている。
「……い、いや～、皆ありがとう！これで失われた記憶が元に戻ったよ！ささ、早くプールに行こう！とっつあんが怒るぞ！」
「怒ってるのは僕達の方です」
殺意のオーラを放っているハヤテが近藤の肩を掴み、スタントを召喚した。
「……もしかしておしおきですか～？」
「「「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！」」」
「右手で殴るんですかァ～？」
「「「ＮＯ！！ＮＯ！！ＮＯ！！」」」
「ひっ……左手で殴るんですかァ～？」
「「「ＮＯ！！ＮＯ！！ＮＯ！！」」」
「りょ…両手で殴るんですかァ～？」
「「「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！」」」
「もしかしてオラオラですかァ～？」
「「「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＯＨＭＹＧＯＤ！」」」
「帰るぞコナン」

「はい」
その後、ルイージとコナンは教室を去って行った。彼らの背後から近藤の悲鳴が聞こえて来た。

数時間後。
「あ…ん、あれ？何で俺寝てたんだ？」
麻酔針で眠らされていた銀時が目を覚ました。
「ふぁ……ふぁ～あ、結局どうなったんだあの事件、あいつらもういねーし……それに何かゴリラがボロボロになってんじゃねーか。どうなってんだオイ」
とりあえず銀時は外に出て誰か探そうと思い、廊下に出た。そこへ。
「あ、銀時先生。丁度良かったですわ」
マリアがやって来たのだ。
「あれ、どうしたんだ？」
「実は朝の事で話があるんです」
「朝の事？事件の事か？」
「いいえ、違います」
マリアは間を少し開けた後、こう言った。
「聞こえたのですよ。『マリアの三十路メイドさーん！！』とか『マリアは三十七歳でメイド服のコスプレが大好きなんだぞー！！』やら『マリアが何で学校に来る時メイド服かって言うと、実はあれ趣味なんだぜー！！』と」
ここで銀時は思い出した。神楽が麻酔針を放って眠らされ、いつの間にやらこんな事を言っていたようだ。
「あれはどういう事なんでしょう？」
優しい口調でマリアはこう言っているが、明らかに怒りのオーラを放っている。
「イヤイヤイヤイヤ！！アレは俺が言ってたわけじゃねーよ！心の中でそう思っても口では……」

「そう、心の中じゃあそう思っているんですね」
マリアの怒りのオーラがさらに激しくなった。その後、銀時はこう言い始めた。
「……もしかしておしおきですか～？」
「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！」
「右手で殴るんですかァ～？」
「ＮＯ！！ＮＯ！！ＮＯ！！」
「ひっ……左手で殴るんですかァ～？」
「ＮＯ！！ＮＯ！！ＮＯ！！」
「りょ…両手で殴るんですかァ～？」
「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！」
「もしかしてオラオラですかァ～？」
「ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＹＥＳ！！ＯＨＭＹＧＯＤ！」
その後、学院中に銀時の悲鳴が轟いた。

第１０５話：ハンガーを投げつけただけで怒る人もいるから人との付き合いはう

質問コーナー

ブロリー「何だいきなり」

銀凪「今回はちょっとアリアとシャロについて指摘があったため、今回のコーナーを設けました」

黒猫「そう」

銀凪「え～、原作アリア、ミルキィホームズの設定だと、アリアとシャロはシャーロック・ホームズの一族という設定です。緋弾のアリア、ミルキィホームズは完全に無関係なのですが、ホームズ関係の設定で見事にかぶっていました。小説を書いているときは気がつかなかったけど、指摘され気づきました」

黒猫「バカね」

闇「本当です」

銀凪「……で、答えを考えました。混沌学院の設定上、アリアとシャロは遠い親戚という事でお願いします」

銀八「何だ、結局こんな設定かよ」

ブロリー「思ってた通りのと違う」

イーノック「問題だったな」

第１０６話：学生の身分でアパートなんか借りれない（前書き）

銀凪「こんなときに言うのもあれだけど今回の話は自分で書いていて『うわ、微妙』と思ってしまいました」

梓「じゃあ何で作ったんですか」

銀凪「今回出てくるある建物を後々話のネタとしますので。脳内ＯＰは『カラコイ』でお願いします」

第１０６話：学生の身分でアパートなんか借りれない

「はぁ？ハヤテとナギが自立したいって言ってる？」
ある日の職員室。銀時がこう言った。
「ええ、ちょっと色々とありまして……」
そう言うのはマリア。銀時は何故、ハヤナギが自立したいと言っているのか疑問を持ち、マリアにこう言った。
「何であのバカップルがそう言ったんだ？」
「実は……あの子達、私の隙を見計らって……あの、言いにくいのですが、あんな事はそんな事をしているらしいんです」
「んな事誰も知ってるよ。あいつら、オメーにばれないように夜に２Ｚに忍びこんであんなことやこんな事をしているんだよ」
「嘘！そんな事をしているんですか！？」
「そうだよ」
「銀さん、マリアさん、あんなことやそんな事って何ですか？」
丁度話を聞いていたネギが聞いてきた。で、二人は同時にこう言った。
「「子供にはまだ早い！！」」

放課後、銀時はハヤテとナギを教室に残し、話を始めた。
「お前ら、マリアから話は聞いたぜ。自立したいんだってな」
「はい」
「私とハヤテなら、この歳で自立しても大丈夫だ。二人で何とか生きていける」
「そうだな。お前らに敵う人間はこの世に存在しないからな」
こう言って、銀時は一息入れた。
「で、どうするんだ？家とか金とかその辺の問題は？」
「資金の方は三千院家の方で何とかなるのだが……」
「問題は家の方で……」

ハヤテはうつむいてこう言った。その後、銀時がこう言った。
「じゃあ問題と言うのはオメーらが愛をはぐくむ巣が無いってことか」
「はい」
「家を見つけないと安心してハヤテとやれない」
「軽く問題発言したけど……仕方ねー。オメーらみてーな奴でも困ってるとならば俺が何とかしてやる」
そう言い、銀時は立ち上がった。
「とりあえず俺の方で家は探してみる。アパートみてーなのでいいか？」
「「はい」」
「わかった。とりあえず俺の方で探してみる。また後で連絡するぜ」
ハヤテとナギにこう言って、銀時は教室を出て行った。

しばらくして、銀時は辺りを歩いていた。ハヤテとナギが住めるようなアパートを探していたのだが。
「あのバカップルの事だ。どこでもいいだろ。おとなしく（ピーー！）が出来れば」
と銀時はそう思っていた。
「あ、先生。何やってるんですか？」
ここで山崎とヒナギクがやって来た。
「オメーらか。丁度いい、この辺にアパートの空き部屋の情報とかないか？」
「アパート？どうしてそんな事を……まさか先生」
「寮から追い出されたとか？」
「ちげーよ。ハヤテとナギがあの屋敷から出てって自立するっつーから俺があいつ等の為にアパートを探してんだよ」
山崎とヒナギクはその話を聞いて、少し呆れた顔をした。
「あの二人なら自立してもいいかもしれない」
「ええ。もし襲われてもその人が逆に半殺しにされそうね」

「それよりいい空き部屋の情報はねーか？」
「空き部屋……あ、そうだ。俺の親の知り合いの人が不動産屋をしていて色々とこの辺の空き部屋の情報を知ってるって言ってましたよ」
「マジで？じゃあ今連絡できるか？」
「待ってて下さい」
山崎は携帯を取り出し、親に連絡をした。
「先生、何とか連絡して明日辺りに空き部屋関連の情報が乗った資料を持ってきます」
「わりィな。恩にきるぜ」
そう言って銀時は去って行った。

翌日。銀時は山崎から資料を受け取り、ハヤテとナギと一緒に空き部屋の情報を見始めた。
「どうだ？良い部屋はあったか？」
「う～ん……分かりませんね」
「実際に行ってみないと分からないもんだ」
「そうだよな～……この部屋はどうだ？」
「微妙だな。ならこの部屋がいいと思うぞ」
「どれだ？」
銀時はナギが指さした部屋の情報を見た。それは、とても豪華な部屋で、滅茶苦茶高い部屋だった。
「止めとけ止めとけ！オメーらみてーな学生がこんな金払えるわけねーだろうが！」
「三千院家の力にかかればこんなのは大丈夫だ」
「……あ、そうだ」
ある事を思い出し、銀時は二人にこう話しかけた。
「この事をマリア先生に話したか？」
「……いや」
「話しとけよ。俺と協力してアパート探してるってよ」

と言うわけで、銀時達はマリアの所へ行った。

「え？アパートを探してる？」

職員室にいたマリアはこう言った。

「ああ。何やかんだで俺より長く生きてそうなマリア先生に――――」

「ちょっと？誰が長く生きてそうだって？」

「いやだってさ～、実は吸血鬼何でしょ？実は三十七年どころか軽く千年」

「そう、そんなに死にたいのね」

そう言い、マリアは怪しいオーラを放った。

「すみません。悪ふざけの度を過ぎました。それよりさ～、何か良いアパートねーか？」

「アパートですか……あ」

「どうした？」

「実は紫子様から聞いた事があるのです。小さい頃にお屋敷を貰ったんだけど、面倒だからそのままになっているって」

「それって……もしかしてアパート？」

「みたいです」

「よっしゃ、ありがとな！」

礼を言って、銀時は職員室から出ようとしたのだが、ある事が気になり、マリアの所へ戻った。

「誰だ？その紫子って？知り合いか？」

「ナギの母親です……あの子が生まれてすぐに亡くなりましたけど……」

その言葉を聞き、銀時は言葉を失った。

「銀さん、そんなにしんみりしなくてもいいですよ」

「ああ、そうだな。じゃ、俺はナギの所に行ってくるわ」

そう言い、再び銀時は職員室から出て行った。

数日後。銀時はハヤテ、ナギ、マリアと共に紫子が残したアパー

トへ来ていた。そのアパートは少しボロボロだったが、何とか人が住めそうな雰囲気だった。
「おお！これが母のアパートか！」
「でも結構古いですね」
「まぁいい、掃除すればいいんだ！さて、探検に行くぞハヤテ！」
「分かりました！」
その後、ハヤナギはアパートの中に入って行った。
「ふぅ、これでいいのか？」
「みたいですね」
銀時とマリアはこう言った。
「ま、とりあえずあいつらが住む場所見つかってよかったな」
「ええ」
「じゃ、俺は帰るわ。またな～」
銀時はそう言いながら、混沌学院の寮へ帰って行った。

第１０６話：学生の身分でアパートなんか借りれない（後書き）

お知らせ

銀八「何だ何だオイ」

銀凪「え～、第２回人気投票についてお知らせです。第２回混沌学院人気投票は１０月１５日の夜中０時に締め切らせていただきます」

梓「え？もう終わるんですか？」

銀凪「結構票が来たんだよ。後で集計もしたいし、それに今回の人気投票でネタ作るから」

銀八「で、結果はいつ発表だ？」

銀凪「集計が終わり次第発表します。大体１０月末か１１月の初めには発表します。お楽しみに～」

第１０７話：こんな寒い時にこんな話でごめんね。だって考えてた時が夏だった

銀凪「この話は夏の時に考えた話です」

梓「うわ、季節外れ」

闇「今年のバレンタインデー編と同じような事をしましたね」

黒猫「ああ、あの５月なのにバレンタインデーやった話でしょ」

銀凪「……今回の脳内ＯＰは『はっぴぃにゅうにゃあ』でお願いします」

第１０７話：こんな寒い時にこんな話でごめんね。だって考えてた時が夏だった

ある夏の休みの日、新八と咲夜、そして妙とストーキングしている近藤は海へ来ていた。
「うわ～、結構人いますね～」
「そうやな、知り合いいたりして」
「ありえるわね。それ」
「いやほんと、ありえますねその話」
近藤がこう声を上げた時、妙はそのゴリラを地面に沈めた。
「あ、新八たちじゃなイカ」
近くで聞いた事のある声がした。
「あら、イカちゃんじゃない」
その声の主は２Ｎのイカ娘だった。近くには栄子や千鶴もいる。
「そうだ、イカさんは確かこの近くの海の家でバイトしているんだった」
「そうでゲソ、まずはこの海岸から征服を―――」
「まだそんなこと考えてんのか？」
後ろから現れた栄子によって、イカ娘は海の家に戻されて行った。だが途中で栄子はこう言った。
「もし何かあったらうちの海の家に来てよ。色々あるから」
「わかりました」
と新八は返事をした。

数分後、段々と人の数が増え、賑わって来た。
「結構人増えてきましたね」
「何か知り合いと会いそうな気がするんだけど……」
咲夜がこう言ったその時だった。どこかで聞いた事のある声が響いた。
「ホ～ホッホ！たまにはいいでしょ？皆で海に遊びに来るのも！」

「にゃあ……」
「……あの声は」
「千世と希やな」
そう言いながら後ろを見ると、お嬢様らしく笑う千世と、きょろきょろしている希、それに文乃と巧がいた。
「巧さん達だ……」
「何や、あいつらも来てたんかい」
「あ、新八と咲夜、アンタ達もここにいたのね！」
新八達に気付いたらしく、千世が新八の所へ近づいてきた。
「どうしたんですか？珍しく出演してますけど」
「今日はストレイキャッツのメンバーで海水浴に来たのよ！」
と、いいながら千世は偉そうにこう言った。
「はぁ、そうですか」
「じゃ、そう言う事で」
新八と咲夜はそう言って、別の方へ行こうとしたのだが。
「キャッホーイ！」
「まそっぷ！」
誰かが新八に目がけて奪取パンチを放ったのだ。
「わりーわりー、まさか新八達もいたなんてよ～」
笑いながらそう言うのは悟空であった。
「悟空さん！悟空さんも来てたんですか？」
「おう、岸の方で神楽とルフィとベジータとブロリーがスイカ割りしてるぜ」
悟空が指をさす方向には、ブロリーがスイカを割ろうとしたのだが、誤ってベジータを殴ってしまい、爆笑している光景があった。
「あっはは。ブロリーの奴、またベジータを殴ったのかよ」
「いや、笑い事じゃないですよね！」
悟空に向かって新八はこう言った。
その後、新八達は一旦岸に上がり、海の家れもんへ行った。

「イテテテテテ……傷がまだ痛む」
「大丈夫ですか？」
ブロリーに殴られた傷を押さえながら、ベジータはこう言った。
「あらあら、本当に災難ね」
奥の方から救急箱を持った千鶴がベジータの傷の手当てをした。
「すまないな」
「気にしないで、一応怪我をした人に対しての対応もしてるから」
「ああ。で、イカ娘は相変わらずここで働いているのか」
ベジータは視線をイカ娘の方に移した。イカ娘は触手を利用して、客が頼んだメニューを手際よく運んでいる。
「あいつの触手も便利なんだな」
「ええ。結構役に立つわ」
笑いながら千鶴はこう言った。この時、ベジータはほんのちょっとだけ、恐ろしさを覚えた。
（何なんだ？今の恐怖心は？）
「お～い、店員さんメニューお願いしまーす」
ここで聞いた事のある声が響いた。店の中で咲夜と会話していた新八がその声のした方を見ると、そこには銀時とスネーク、それに松平、ルイージ、クッパ、バング、トリコ達、教師がいた。
「銀さん！それにスネーク先生達も」
「どうしたアルか？」
「まさかお登勢のばあちゃんに寮を追いだされたのか？」
「んな訳あるか。夏の日に生徒が怪我とかしねーか見張りに来たんだよ」
「そうですか」
新八が小さくこう言った。その一方、トリコは席に座ってこう言った。
「オ～イ！とりあえず焼きそばとラーメンとたこ焼きとカレーを頼む！」
「お前はいきなり飯を頼むのかよ！」

トリコに向かって銀時はこう言った。
「銀さん、とりあえず俺とクッパとバングは海の方で見張ってるから」
「おう。頼んだぜ」
「陸の方は銀時殿達に任せるでござる！」
「銀さんもいろいろと気をつけろよ」
そう言ってルイージ達はサーフィンボードを持って海の方へ行った。
「あの人達、遊びに来たんですか？」
「いや、ボードに乗って見張るんだそうだ」
ルイージ達を見ながら銀時はこう言った。

数時間後。大した事件も起きず、新八達は海水浴を楽しんでいた。だが！
「もう！いい加減にしなイカ！」
「研究所に行くくらい別にいいじゃない！」
陸の方でイカ娘と外国人らしき女性が言い争っていた。
「どうしたんだ？」
「さぁ？」
海の方で泳いでいた巧と文乃が気付いた。
「何があったんですか？」
丁度同時に新八と咲夜がイカ娘の所につき、話しかけた。
「新八！助けてでゲソ！」
「あら、イカ星人の仲間？丁度いいわ！」
「い……イカ星人？」
外国人女性の放った言葉に新八達は戸惑った。
「な……何なんですか？この人？」
新八がその外国人女性に向かってこう言った。
「オー、自己紹介がまだでしたね」
外国人女性は新八達の方を向き、自己紹介を始めた。

「私はアメリカ地球外生命体対策調査研究所の一員のシンディーよ」
丁寧な日本語でシンディーは自己紹介をした。
「で、シンディーさんは何でイカ娘さん何かを研究しようとしてるんですか？」
「確かにあいつは研究が必要だけど」
そう言いながら、咲夜はイカ娘の方を見た。
「あなた方は分からないの？あの自由自在に動く触手、口から出せる謎の液体」
「それはイカスミでゲソ！」
「……まぁ人並みに外れた能力がある。そして本人は海から来たといている。まさにエイリアン！」
「だから違うでゲソ！私はエイリアンじゃないでゲソ！」
イカ娘はこう叫んだ。その時だった！
「イカちゃん危なーい！」
早苗が突然現れ、イカ娘の前に仁王立ちした。
「早苗さん！何でいきなり！」
「当然よ！何故ならいつも監視カメラでイカちゃんを見守ってるからね！」
「それ犯罪じゃねーかァァァァァァァ！！」
「大丈夫！犯罪ギリギリよ！」
「ギリギリじゃねーよ、ギリギリを軽く越してるっつーの！」
変態娘、早苗に向かって新八、昨夜はこう叫んだ。その様子を見ていた巧と文乃はこう言った。
「うわ、何か変なのが……」
「気にしない、気にしない」
「っていうかあの早苗っていう子と文乃の声、何か似てるような……」
「気のせいよ、気のせい」
しばらくの間、少し騒がしかった。
「んだよ、うるさくて静かにかき氷食えねーだろうが」

スプーンをくわえた銀時がれもんから現れた。
「銀さん、あの……見張りは？」
「知るか。それより何があった？」
「シンディーっつーねーちゃんと早苗がイカ娘の事で言い争いをしているんや」
「んだよ、そんなくだらねー事でか」
「何だ。イカ娘外にいたのか」
その後、栄子は外にいたイカ娘を連れてれもんに戻った。
「あ！イカちゃん！」
「イカ星人！」
その後を追って早苗とシンディーはれもんへ行った。
「はぁ、何だ今回。変人が多過ぎだろ」
「仕方ない」
早苗とシンディーがれもんの中で騒いでいる中、奇妙な三人組がやって来た。
「いやー暑いデスネー」
「自然光はキツイデス……」
「君らは白すぎるから少し焼いた方がイイんじゃない？」
「あ、３バカトリオ」
栄子がその３人に向かってこう言った。ちなみにこの３バカと言うのはシンディーと同じくアメリカ地球外生命体対策調査研究所の一員であり、栄子には３バカの称号を与えられてしまったのだが、それでも優秀な発明家でもあるのだ。一応言っておくね。
「何、あなた達も来たのね」
「たまには外に出ないといけないからネ」
「で、また変なの持って来たのか？」
栄子はそう言った。何故ならその３バカの後ろにはいかにも怪しい道具がずらりと置いてあったのだ。
「オーウ、よく気付きましたネ」
そう言って、３バカの一人、クラークが後ろの道具を取りだした。

「何ですかコレ？」
「これはつい昨日発明した『ハイパージェットウキワ』デース」
「うわ、何ですかそれ」
　そのハイパージェットウキワには、ただ浮き輪にどでかいジェットをつけただけの物だった。
「これは誰もが使った事のある浮き輪を私流に改造したものデース。とりあえず乗ってみてくだサーイ……と言うわけでそこのお二人さん、お願いシマス！乗ってみてクダサーイ！！」
　クラークは巧と文乃に向けて、土下座した。
「……何で私たちなの？」
「なんとなくデース」
「どうする？」
「どうするって言ったって……」
　まぁ、その後は仕方ないから二人はそのハイパージェットウキワに乗った。
「で、どうするんですか？」
「次はこの発射ボタンを押してください」
「これ？」
　巧は手元にあったボタンを押した。そして、ジェットからとんでもない爆音が響き、轟音を響かせながら飛んで行った。
「「ギャアアア

「何よそれ！それで巧達を見つけるっての！」
「この弾は、成長を促進する弾、姿を消す弾、超サイヤ人になれる弾などデース」
「ロクなのねェェェェェェェェ！！」
青空の中、新八の叫びがシャウトしたのであった。

「あ～、暇だな～」
数時間した今、銀時は暇を持て余していた。ルイージ達は完全にサーフィンしてるし、新八達はビーチバレーして遊んでいるし、スネークは日焼けしてるし、トリコはまだ食べている。
「あ、先生。スイカ割りやります？」
「スイカ割りだァ？」
銀時がだらしない声でこう言った。
「何？スイカ食えるの？」
「はい。やります？」
「やるやる！おっしゃー！スイカー！」
張り切った声を出して、銀時は新八の元へ向かった。そこには、イカ娘とシンディー、早苗もいた。
「何だ、オメーらも参加するのか？」
「ええ」
「イカちゃーん♪」
「止めるでゲソ、抱きつくなでゲソ」
「……まぁいいか。で、誰が最初にやるんだ？」
「それはじゃんけんで決めます」
と言うわけで、じゃんけんが始まった。
「よし！俺がスイカを叩く役か！」
スイカを叩くのは銀時に決まったのであった。その後、目隠しをし、銀時の体を回転させた。
「うわ、これ結構目回るな……」
「始めますよ！」

その後、スタート位置に立ち、スイカ割りが始まった。
「銀さん！このまま真っ直ぐです！」
「ああ！危ないでゲソ！」
「右よ右！」
「まっすぐ行ってそのまま左！」
銀時の耳に色んな声が聞こえて来た。右だったり左だったりまっすぐ行けだったりとか。
（な……どれが正解でどれが嘘なんだ！）
銀時はほぼ、半信半疑になっていた。それはそうだ。皆色んな事を言っているのでどれが嘘なのか、どれが真なのか分からないのだ。
（畜生……どれ、一体正解はどれ何だ！）
半信半疑になっている銀時、そんな中でも声は聞こえてくる。
（どれ、一体どれ何だ！）
悩みに悩んだ末、銀時は一つの答えを見つけた。
「よし！せっかくだから……俺はそのまま真っ直ぐ行くぜ！」
そう叫び、銀時は走り出した。
「あ、ちょ！銀さん！」
「あーっはっは！上から来るぞ～、気をつけろ～！あーはっはー！」
「ヤバい！銀さんが壊れた！」
完全に最高にハイになった銀時。彼はそのまま持っている棒をそのまま振り下ろした。
「あっ……」
「……」
「ヤバいでゲソ……」
銀時が棒を振り下ろした時、誰もが冷や汗をかいた。何故なら……
「手応えあり。さて、スイカは……」
銀時が棒でたたいたものは……
「あら……何か用ですか……？」
千鶴だった。彼女の頭には、銀時の一撃によってタンコブが出来ていた。

「あ……あの……スミマセン。マジでスミマセン。本当にスミマセン。いや、本当にスミマセン！靴舐めますんで！」
「……ちょっと、お話しましょう」
そう言うと、千鶴は銀時に向けて手を伸ばした。
「お……オギャアアアア！」
銀時はその場から離れようとしたのだが、突然体の自由が利かなくなった。
「え……何これ？嘘？体が？何で？」
「捕まえた♪」
後ろから千鶴が銀時の肩を捕まえた。
「……」
「さて、お話しましょうか♪」
千鶴は目を開けてこう言うと、銀時を連れてどこかに瞬間移動した。
「え？いきなり消えた！」
「何やあの人！」
その瞬間だった。銀時の悲鳴が空高く響いた。

時は流れ、もう夕方になった。
「ふ～、結構面白かったですね～」
「ああ。大した事件もなくてよかったわ」
「久しぶりの海は面白かったわ～」
新八達は帰路に就こうとした。だが、ある事を忘れていた。
「あれ、何やってるんですか千世さん？」
新八は千世が何かをしているという事に気付いた。
「……忘れたの？巧と文乃が変な浮き輪に乗って地平線の彼方に行った事を……」
その言葉で思い出した。３バカが来ている時、巧と文乃はクラークの発明品である『ハイパージェットウキワ』に乗って、地平線の彼方まで行ってしまった事を。

「あ……忘れてた」

次回！

とんでもない事に巻き込まれた巧と文乃。彼と彼女がたどり着いたのはまさかまさかの無人島！二人っきりのサバイバル生活が今、幕を開けてしまう！次回混沌学院『無人島に着いたら濱〇のつもりでこの先を生き抜け』どうぞご期待！

イカ娘「いつかこの作品も侵略してやるでゲソ！」

新八「いや、この作者がもう侵略されてるから」

早苗「何！この作者がイカちゃんに侵略されてるって、それどういう事？イカちゃんは私の物なのよ！」

新八「うるさいのが来たよ……」

早苗「作者！いつもツイッターで『ハヤテはナギの嫁』って呟いているの知っているんだから！だから『イカちゃんは早苗の嫁』って呟きなさいよ！」

銀凪「俺はＢＬもＧＬも好まん！」

第１０７話：こんな寒い時にこんな話でごめんね。だって考えてた時が夏だった

おまけトーク

銀凪「え～、ここでお知らせ。今日、アーケードゲーム『ドラゴンボールＺＥＮＫＡＩバトルロワイヤル』というゲームを本格的に始めました。もちろんそれ用のカードも買いました。もし、全国対戦やっていてセルを使っていて、名前が『ハヤテ＆ナギ』、そして県が静岡だったら……俺です」

梓「名前……」

銀八「ほっておけ」

銀凪「もし、俺と対戦するときになったら普通に戦いましょう。けど俺、まだ初心者です」

銀八「まだ初心者かよ」

梓「頑張ってください」

第１０８話：無人島に着いたら濱〇のつもりでこの先を生き抜け（前書き）

銀凪「今回は前回の続きです」

黒猫「ああ、もう１０月も半ば」

梓「なのにまだ夏の話」

銀凪「……脳内ＯＰは前回と同じでよろしく。あーあと人気投票についてお知らせもあります」

第１０８話：無人島に着いたら濱〇のつもりでこの先を生き抜け

ザザーン……

ザザーン……

耳元で波が打ちつける音が聞こえる。気がつくと、そこは浜辺のようだった。どうやら彼はどこかで気を失っていたようだ。

「あ……あれ？どこだここ？」

彼は辺りを見回した。木が大量に生えていて、まるでジャングルのようだった。

「……そうだ！文乃！文乃！」

彼―――巧は一緒にいたはずの文乃の名を叫んだ。彼らは３バカから渡されたハイパージェットウキワを使ってしまい、変な島についてしまったのだ。

「文乃！文乃ォォォォォォ！！」

「巧！ここよ！」

少し離れた所で文乃の声が聞こえた。二人は再開し、この周辺を調べて見た。

「どこだここ？」

「知らないわよ。何か目印的な物ないの？」

「さぁ？……あ。何か看板がある」

二人はその看板の所につき、何が書いてあるか調べた。で、その看板にはこう書かれていた。

『ようこそ！愛と希望の島、無人島へ！』

「「……愛と希望もねェェェ

一方その頃、新八は携帯でニュースを見ていた。
「へ〜、将軍がスイスでスノボーやっててそのまま空の彼方まで飛んで行って行方不明ですって」
「そんなのどうでもいいわよ！あのブリーフ将軍の事は！！」
「今はそれより……巧と文乃」
彼らは、海の彼方へ消えて行った巧と文乃の行方を捜していた。
だが、栄子や千鶴、神楽と悟空とルフィが一生懸命情報を探しても、イカ娘が潜って探しても見つからないのだ。
「オイ栄子。来てやったぞ」
「よっ、二人とも」
「あ、ベジータさんとブロリーさん」
探している時、ベジータとブロリーがやって来た。
「どうしたんだ二人とも？」
「私が呼んだんだよ。あの二人の気を察知する力で見つけられると思ってさ」
「フッ、俺に任しておけ」
「お願いします」
その後、ベジータは目を閉じ、気を察知し始めた。
「ふむ……この辺にはいないようだな」
「だったらもう少し範囲広げなさいよ！」
「……ベジータなら出来る」
「仕方あるまい、俺は海の方で気を探知してくる」
「頑張ってください！」
ベジータはそう言うと、海の方へ飛んで行った。
「さて、僕達も僕達でやれる事をしましょう」
「ええ！」
「分かった」
「了解！」
彼らは、巧と文乃を探すため色々と手を尽くし始めた。

一方無人島に流れ着いた巧と文乃はどうしてるかと言うと。
「俺はこれから住処になれそうな所を探すよ」
「ちょっと待ってよ！こんな訳の分からない所で一人なんて……私いやよ！」
「じゃあ一緒に行くか？」
「……そうする」
話した後、二人は森の中へ進んで行った。森の中の道は普通の山道とあまり変わらなかった。
「何かさ、こういう道歩くと小さい頃思い出すよな」
「そうね。いつもこうやって山道歩いていたわね」
小さい頃の思い出に多少浸りながら山道を歩いていた。その時に人が住めるような小屋を見つけた。
「あ、何かの小屋じゃないあれ？」
「行ってみよう」
二人はその小屋へ行き、中に入った。
「普通の小屋みたいだね……」
「ん、何？あの布？」
文乃が布が何かにかぶさっているのに気付き、その布を取った。そして、二人は悲鳴を上げた。
「「ギャアアア

『二日目。ヤベー、何か変な音がする。でも俺、武器持ってるから（笑）何かあってもこれ使えば何とかなるっしょ』
『三日目。流石に腹減った。この日まで何も食わずだと意外とキツイ。だからこの小屋にあったキノコを食った。その後で何か変なの映るようになったけどまぁいいか』
『四日目。具合がおかしい。マジで変。目の前に川が映ってるし、それにこの前死んだペットの金魚がいたし。でも何とか意識があるから大丈夫大丈夫』
『五日目。ヤバいヤバい。何か変な声が聞こえる。俺、死ぬんじゃね？』
『六日目。あれ？俺まさか死ぬんじゃね？……』
文はここで途切れていた。
「……まぁ色々とツッコミどころはあるけど……」
「とりあえずこの小屋を中心にしてこの島を探索してみる？」
「そうだな。どうする、今行くか？」
「え……二人で？」
顔を赤くして、文乃はこう返事をした。
「そうだよ。途中ではぐれたら困るだろ」
「そうだけど……私はここで待っててて……」
「不安じゃないのか？何が出るのか分からないし」
「そ……そうね」
「よし、じゃあ周りだけでも探索してみるか」
その後、二人は小屋の周辺を探索しに出かけた。

で、一週間の時が流れた。
「クソ！あいつ等はどこに行ったんだ！」
気を察知するため、ベジータが上空で気を出していたのだが、結局は無駄だった。
「駄目だ。見つからなかった」
ブロリーも周辺を飛び回って探していたのだが無駄だった。

「はぁ、どうなるんでゲソ？」
ため息をついたイカ娘、彼女は少し諦めかけていた。
「そうね……もうあれから一週間もたつし……無事と言えるかどうかも分からないわ」
「無事よ！絶対に私が見つけ出す……ん……だ……か……」
立ち上がりこう叫んでいた千世だったが、途中で倒れてしまった。
「千世、大丈夫？ここ最近寝てないよ」
倒れそうになった千世を助けたのは希だったが、彼女の目の下に隅が出来ていた。彼女もまた、心配で眠れなかったのだ。
「二人とも、とりあえず休んでいてください。ここ最近寝てないでしょ？」
二人の様子を見て、新八がこう言った。
「大丈夫よ……巧を見つけるまでは……頑張るんだから」
途切れ途切れに千世はこう言った。
「オイ千世、オメーばてばてじゃねーか。あとはオラ達が何とかすっから、オメーはしっかり寝ろ」
「そうアル。巧を見つける前に千世と希が倒れちゃ意味無いアル」
「そうだそうだ！俺達に任せろ！」
悟空達がこう言った。
「……巧の事、お願いね」
「休んだらすぐに戻るから」
千世と希はこう言って、奥の部屋に向かった。
「よし、オラはまた空から巧と文乃を探す！」
「おう。じゃあ俺は情報を集めてくる」
「私はれもんの客に話を聞くネ！」
「皆さん、頑張りましょう！」
その後、彼らは自分にできる事を始めた。
「みなさーん、お疲れ様デース」
「あ！３バカ！」
ここで３バカがやって来た。

「貴様！何がお疲れ様デースだ！貴様らのせいで巧と文乃がなー！」
ベジータがクラークの胸ぐらを掴み、持ち上げた。
「ままま待って下サイ！実はその為に色々と発明品を作ったんデース！」
「発明品？」
クラークは後ろにあった機械を持ち出した。
「これはいなくなった人とかを探す『何でも居場所を暴きまｓｈｏｗ』デース。これは人とか物を探知する画期的発明品デース」
「よし。一か八かだ。これを使って探すぞ！ルフィ！こいつをれもんの方に動かすからちょっと手伝ってくれ」
「オッケー！」
その後、何でも居場所を暴きまｓｈｏｗをれもんの方に動かし、クラークから使い方の説明を聞いた。
「まずは対象となる人や物の写真や情報をこの何でも居場所を暴きまｓｈｏｗにインプットして下サーイ。その後はそのボタンをポチッと押すだけで何でも居場所を暴きまｓｈｏｗが探索を始めマース」
「よし、とりあえず始めよう」
ベジータが千世から借りていた巧の写真をその何でも居場所を暴きまｓｈｏｗに入れ、ボタンを押した。そして、その何でも居場所を暴きまｓｈｏｗがいきなり動き出し、海の方を向き、両脇にジェットを出現させて、飛んで行った。
「……」
「Ｏｈ！！大成功デース！！」
「やはり我々の科学力は素晴らしい！！」
発明の軌道に喜ぶ３バカ。そこにベジータがこう言った。
「おい、その後はどうなるんだ？」
「ああ、その後はその何でも居場所を暴きまｓｈｏｗがその方向に飛んでいきます」
「……貴様らバカかァァァァァァァァ！！そう言う事は先に言えェェェェェェェェェェェェェェェェ！！」

ベジータが超サイヤ人になりながら、３バカに向かってこう叫んだ。
「ベジータさん！でもその方向に飛んで行ったとしたらそこに巧さん達がいるんじゃないんですか？」
後ろで新八がこう言った。しばらくベジータは考えた。
「そうだ！そうだな、その方角に向かって飛んでいけば奴らがいるかもしれん！」
「どうします？」
「行くに決まってるだろ！３バカ！新八達にボートを貸してやれ！」
「「「アイアイサー！！」」」
その後、彼らは何でも居場所を暴きまｓｈｏｗが飛んで行った方角に向けて、海を突き進んで行った。

で、巧と文乃はどうしているかと言うと。
「ただいまー。結構魚捕れたよ」
「おかえり。無事でよかったわ」
二人はこの一週間でたくましく育った。巧もサバイバル技術を自己流で習得し、小屋周辺の地理もしっかりと把握した。文乃の方もこの島の木の実や魚の調理法もしっかりと把握し、料理の腕が上がって行った。
「どう？船見つけた？」
「いや、全然」
巧は文乃が焼いてくれた魚を食べながらこう言った。
「でも、希望を持とう。無いよりマシだろ？」
「そうね。いつかきっと助かるわ」
二人はこう言う会話を交わしながら食事を続けた。
「あ、そうだ。今日、この辺を散策してたらすごい物見つけたよ」
「すごい物？」
文乃は首をかしげた。その後、巧は文乃を連れてすごい物を見つけた所に向かった。

「うわ～、温泉じゃない」
そのすごい物と言うのは温泉だった。この一週間、風呂の代わりに水浴びをしていた二人にとって本当にうれしい物であった。
「じゃあどうする？誰先に入る？」
巧がこう言った。ここで文乃は気付いた。今、自分は想い人である巧と二人っきり。当然、今この時も二人しかいない。で、風呂に入ろうとしている。問題だ。色々と問題がある。サンジみたいなバカだと「混浴？ヒャッハー！俺にとって混浴はパラダイスだ！！よっしゃー！（ピーーーーー！）や（ピーーーーー！）や（ピーーーーー！）が俺の視線にィィィィィィ！！」と言うだろう。だが、巧は鈍感であり、そんな事気付くはずもない。しかも巧とは幼い頃からの付き合いで、羞恥心も何もない小さい頃は一緒に風呂に入っていた。
「た……巧が先に入れば？」
墓穴を掘った。自分の裸体が見られるのも嫌なのだが。かと言って巧のアレを見てしまうのもちょっと恥ずかしい。この無人島にタオルなんてものは存在しないに等しい。代理として長い葉っぱとかあるんじゃね？と思っていたのだが、温泉の周囲には長い葉っぱが生えている木なんて存在しない。あるとしたら海だ。この近くに海がある。
「う…うう～」
「どうしたんだ文乃？そんなに困った顔して」
「仕方ないじゃない、二人っきりで温泉だなんて……そんなの、久しぶりだし……」
文乃がそう返事をした後、巧はこう言った。
「いいよ。俺はちょっと離れた場所でなるべく文乃の方を見ない様に入るから。それでいいだろ？」
後ろから巧の声が聞こえた。文乃も彼の案を受け、水着を脱ぎ、温泉に入った。
「ふぅ……あったかい」

文乃は小さくこう言った。本当に癒されたのだ。ここ一週間風呂に入っていなくて。軽く水浴びはしたのだが、あまり癒されなかった。

「はぁ、皆どうしてるかな」

後ろの方で巧の声が聞こえた。生きるのに一生懸命で、千世や希、新八達の事を少し忘れていた。皆、自分達の事を心配しているのだろうと思うと。少し切なくなった。

「生きて……生きて皆と再会しよ」

「……そうだな」

二人が短い会話を交わした……その時だった。

ガサッ

ガサッ

草むらから、何かの音が聞こえた。

「な……何今の？」

「さぁ？何か動物が……」

ここで巧は思い出した。骸骨の近くで書かれていた文章に何か変な音がしたという文章があった。まさかそれは、この島に存在する……怪物ではないかと思った。

「まさか……な」

ガサガサッ

ガサガサガサッ

音がどんどん近付いてくる。それに伴い二人の不安もどんどん大きくなる。

「巧！」

怖さのあまり、文乃が巧の所に来た。体を隠しながら。
「どうなるの、私たちどうなるの！」
文乃の目は不安の色で染まっていた。
「とりあえず逃げよう、あの小屋まで何とか逃げれるはずだ！」
「わかった……キャア！」
走ろうとした文乃だが、足元が温泉のため、体のバランスを崩して倒れてしまった。
「文乃！大丈夫か！」
「ええ……」

ガサガサガサガサッ

ガサガサガサガサガサガサガサガサガサッ

何かの音が完全に温泉の近くまで来ていた。
「巧、逃げて！私の事はもうどうでもいいから！」
「ふざけんな！お前を見捨てて逃げられるかよ！」
弱気になった文乃が発した言葉を、巧がこう叫んで否定した。
「俺達いつも一緒だったろ？だったら、死ぬまで一緒にいてやる」
「巧……」
文乃は心の中で（巧の事を好きになってよかった）と思っていた。
文乃は巧に抱きつき、巧の方も文乃を抱きしめ、二人とも目をつぶった。そして、二人は最期にあの音の正体が何なのかを確かめようと、目を開いて音がした方を見た。そこには———

（（将軍かよォォォ

オオオオ

「今度食べるときははうちらの結婚式か？」
「ですね」
船からこんな会話が聞こえた。皆、完全に巧と文乃が出来ていると勘違いしてしまったようだ。
「「だから違うってばァァァァァァァァ！！」」
二人は（おまけに将軍）無事救出されたが、しばらくの間、混沌学院の間で巧と文乃が超えてはいけない一線を越えたという話で話題になった。

第１０８話：無人島に着いたら濱〇のつもりでこの先を生き抜け（後書き）

お知らせ

今日の０時に人気投票を締め切らせていただきます。投票する際は１１時５９分までやってください。０時以降に入った票はすべて無効となりますのでご注意してください。最初といった事が違うと思われるかもしれませんが、作者自身最初の時刻を忘れていた為、混乱してしまいました。本当にすみません。

第１０９話：長く使う道具ほど捨てるのが惜しくなる（前書き）

銀凪「今回は久しぶりに放課後ティータイムの連中が出ます」

梓「なるべく投票中にやってほしかったです」

銀凪「今回の脳内ＯＰは『Ｕｔａｕｙｏ！ＭＩＲＡＣＬＥ』でお願いしまーす」

第１０９話：長く使う道具ほど捨てるのが惜しくなる

午後の音楽室。ここは午後になると、唯達計音部の部室となる。
「は～、癒される～」
紬が持って来た紅茶を飲んで唯が癒されていた。
「いやほんと癒されるな～。今日は練習やめにしようぜ～」
同じく癒されている律がこう言った。
「二人とも！昨日もおとといもそう言って練習してないじゃないか！」
愛用ギター『エリザベス』を持った澪がこう言った。
「澪先輩の言う通りです！少しは練習した方がいいと思います！」
隣にいた梓もこう言った。
「二人ともまじめ過ぎなんだよ。少しは休むって言う事もした方がいいぜ」
「お前らは休み過ぎだろ！」
澪は律にゲンコツを喰らわせた。
「とにかく今日こそしっかり練習をしろ！いいな！」
「は～い」
「何で私だけゲンコツを……」
唯は立ち上がってギー太を持ち、律もゲンコツを食らってできたタンコブを押さえながらドラムの所へ向かった。
「じゃあ行くぞ～1，2，3！」

バキッ！

律がドラムスティックを叩いている時、その音は聞こえた。律が持っているドラムスティックの片方が折れてしまったのだ。
「あ……」
「どうした律？」

「いや～、実はドラムスティックが折れちゃってよ～」
「折れた……うわ～見事に割れたなこれ」
澪が律から折れたドラムスティックを受け取り、こう言った。
「これどうするの？」
その様子を見ていた紬が律に聞いた。
「う～ん、買い替えるしかないな～」
そう言いながら律は財布の中を見た。彼女の財布の中は、１０円玉と１円玉がたくさんと、千円札が一枚入っていた。
「これで買えるの？」
「ちょっときついなこれ」
折れたドラムスティックと財布の中を見渡しながら律は唯の質問にこう答えた。
「仕方ない。ちょっとさわちゃんに相談してみる」
律はその後、職員室に向かった。

「ええ？ドラムスティックが折れて演奏できない？」
職員室にて。律はさわ子にドラムスティックの事で相談しに来た。
「そうなんだよ。まさか練習する今に限ってこんなことが起こるなんてな～」
「そうね、今から楽器屋に行って買うのは？」
「……お金がちょっと足りないのでしっかりとしたドラムスティックが買えましぇ～ん」
「どうした？計音部で何かあったのか？」
丁度近くを通りかかったスネークがやって来た。
「ああスネーク先生。実はりっちゃんのドラムスティックが折れちゃったのよ」
「何だ？それが無いと演奏とかできないのか？」
「そうだよ。しっかりした奴じゃないとドラムの音が響かないんだ」
律とさわ子から事情を聞いた後、スネークは考えた。
「今思ったのだが……音楽室とかでドラムスティックっぽい棒とか

を使ってドラムをたたくのはどうだ？ほら、小太鼓を叩く棒と少し似てないか？」
「それはそうだけど……まぁそれでやってみるか。さわちゃん、音楽室の鍵ある？」
「丁度今ガルデモの子達がそこで練習してるわ。あの子達とも中いいんでしょ？」
「向こうのゆい達が練習してるのか。まぁ事情言えば何とななるかもな。相談に乗ってくれてありがとな～」
律はそう言って職寝室から出て行った。
「それよりスネーク先生。銀さんはどうなったの？もう休んで二週間は経ってるわよ」
さわ子は休んだ銀時の事をスネークに質問した。何故銀時が休んでいるかと言うと、前々回の話で千鶴によってボコボコにされた後、銀時は病院へ送られたのだ。
「いや、まだ怪我が治ってないんだ」
「そう。あの人ってオチで色々と悲惨な目にあうけど今回のようなケースもあるのね～」
少し笑いながらさわ子はこう言った。

で、音楽室からドラムスティックの代わりを持って来た後、律は軽音部に戻って来た。
「お待たせ～。りっちゃん、ただ今戻りました！」
「やっと戻ったか。よし！練習するぞ！」
その後、彼女らは自分の立ち位置に立って、練習を始めた。で、数分後。
「うーん、やっぱ何か違うな～」
ドラムをたたいていた律がこう言ったのだ。
「違うって何が？」
唯が近くに来てこう聞いた。
「何かさ、感触が違うんだよ。やっぱ長年使ってたドラムスティッ

クだからな～」
「そうか。律でも物に愛着を持つんだ」
澪が冗談交じりにこう言った。
「まーな。でもこのスティックになれるように頑張るよ。よし！もう一回やろう！」
律がそう言った後、練習が再開された。

その日の帰り。唯はこんな事を言い出した。
「ねぇ、皆でりっちゃんの為にあのドラムスティックを新しく買おうよ！」
「ええ？」
唯の言葉で誰もがこんな声を上げた。
「唯、別にそこまでしなくてもいいんだぜ」
「いや、でも文化祭までもうちょっとだよ。それまでに皆の息を合わせないと！」
「確かに唯の言う事もありだな。文化祭までに曲の演奏を完成させないと駄目だな」
律の隣にいた澪がこう言った。
「よし！じゃあ皆で楽器屋に行こう！」
片手をあげて、唯がこう言った。

で、いつもの楽器屋についたのだが。
「え？今日は休み？」
店の扉には『本日休業』と書かれた看板が置いてあった。
「そうみたいね……」
「しょうがない。また今度買いに来ようぜ」
「そだねー」
今日の所は購入をあきらめ、唯達は帰る事にした。

で、翌日の帰り。昨日通り楽器屋に行こうとしたのだが。

「このエロコック！また変なことしやがって！！」
「今日こそ死ね！！このドブみたいな匂いが体中からして汚いウジ虫が！！」
「ギャアアア

ー！？」
律はこう叫んだ。当たり前だ。ここ数日、澪が気絶した為家に帰る事になったのだ。
「サンジ君、本当にどうしようもないね」
「全くです。あの人毎日セクハラしてるんじゃないんですか？」
「らしいね」
「あれだけ痛い目にあっているのに、本当にどうしようもないです」
唯と梓はサンジについて会話をしていた。
「どうする？今サンジ君の騒ぎが収まったと思うから今のうちに買いに行く？」
「そうだあ。じゃあ行こう———」
「待って！本当に待って！一人じゃ怖いから！一人じゃ怖いから！」
サンジのお仕置きの現場を見て、完全にトラウマになった澪が涙声でこう言った。
「あ～、やっぱあの光景見てトラウマになったか」
「当たり前だよ。日に日にサンジ君の体の包帯の数が厚くなっていくんだもん」
唯が教室でのサンジの姿を思い出しながらこう言った。
「まぁ、今日はもう騒ぎ起こらないと思うから行ってくる———」
「澪！頼むから一人にしないでくれ！！」
澪が泣きながら律の足元を掴んだ。
「唯かむぎか梓でもいいから澪の相手してくれ。私一人で買いに行くから」
「気をつけてね～」
「いってらっしゃ～い」
唯達は出かける律を見送った。

何も難なく律は楽器屋で新品のドラムスティックを購入できた。
「いや～、あのバカ（サンジ）がまたセクハラしてなくてよかった～」

ドラムスティックが入ったレジ袋をぶら下げながら、律は楽器屋近くを歩いていた。そこに。
「死ねやこのストーカーゴリラエーンドエロコックがァァァァァァァァァ！！」
「ギャアアアアアアアアアア！！お妙さァァァァァん！！」
「俺その辺歩いてただけなんだけど何で攻撃を食らうのォォォォォォォ！？」
妙がストーカーゴリラとついでにエロコックをブッ飛ばしたのだ。
「あ！りっちゃん危ない！」
妙がブッ飛ばしたバカ二人が律に向かって飛んできた。
「おわァァァァァァ！！」
とっさの出来事だった。律は何か盾になるようなものを探した。で、新品のドラムスティックを手にした。
「喰らえェェェェェェ！！」
律が手にしたドラムスティックの先端は、バカ二人の鼻の穴に命中した。
「「ギャアアアアアアアアア

「買えたんですね」
「おう！」
「見せて見せて！」
唯達は律が飼って来たドラムスティックを見た。かなり綺麗で、前の物とあまり違わない大きさだった。
「これで練習ができるぞー！」
「うん！待ってろよ、次の文化祭！」
そう言って、軽音部の連中は笑いだした。

一方サンジと近藤は公園のブランコに乗っていた。
「ああ、今日は悲惨だ」
「そうだな。俺の場合は妙さんの攻撃に巻き込まれ、ナンパも失敗して、その上りっちゃんのドラムスティックを交わされたもんな。しかも滅茶苦茶高い奴」
「ああ……もう今月のこづかいねーよ。どうすればいいんだよ」
「「はぁ……」」
二人はうつむきながらブランコをこいでいた。

第１０９話：長く使う道具ほど捨てるのが惜しくなる（後書き）

裏情報！

銀八「何だいきなり」

銀凪「今回はちょっと混沌学院の裏情報をお伝えしたいと思います」

ルイージ先生について

銀八「え？ただの一発キャラじゃねーの？」

闇「それにしてはいろいろ長編に出てますよね」

銀凪「ルイージ先生についてはいろいろと考えています。まず炎について。それは原作のマリオシリーズみたいにファイアーフラワーを使って出していると考えてください。ここからはオリジナル情報で、実はなのはの知り合いです」

銀八「マジでか！？」

銀凪「ええ。これは後の長編にちょっと触れます。ルイージとなのはの過去について詳しく話も考えております。それは番外編で出すと思います」

闇「質問です」

銀凪「何だ？」

闇「これからも何か長編も考えているんですか？」

銀凪「結構思いついています。内容の予定としては」

人気投票編：もうちょいしたらやります。この前に人気投票の結果もお送りします。

切なき秋の恋編：あずにゃんとオリキャラの混沌学院らしくない本当に切ない恋物語を考えています。ちなみにあずにゃんの中の人のあの騒動の前に考えたものです。マジで。

ヴィヴィオ編：ヴィヴィオ出しまーす。

召喚大戦争編：これについてはまだ分かりません。もしバカテスにはまったらこの話をやります。

混沌学院チームバトルトーナメント編（仮称）：ガチバトルの展開です。これについてもやるかどうか……まぁバトルもやりたいんだけどね。

銀凪「以上の内容の長編を予定しています。なお、作者の都合でいろいろと話が変わると思いますが、あまり気にしないでください。以上の内容はあくまで予定ですから。ではまた次の話に会いましょう！！」

第１１０話：漫画の実写版は高い確率で……後はご想像にお任せします（前書き

銀凪「今回は荒川アンダーザブリッジの話です。ぶっちゃけこの話は実写ドラマがやっている時にやりたかった」

闇「何でやらなかったんですか？」

銀凪「いろいろと話があったからだよ。脳内ＯＰは『タイトルなんて自分で考えなさいな』では始まります！！」

第１１０話：漫画の実写版は高い確率で……後はご想像にお任せします

ある日。リクが買い物のため、学園近くの商店街にいた。
「えーっと、ネクタイピンはどこだったかな……」
呟きながら歩いていると、近くで人盛りが出来ていた。そこにはニノや村長、シスターなどクラスメイトや先生達もいた。
「皆、何やってるの？」
「ああリクか。何かげーのーじんとかいう奴がこの辺にいるって言うからどんな奴か見に来たんだ」
「げーのーじん……ああ芸能人の事か」
「しかし、誰がげーのーじんなのかさっぱり分からない。皆同じような人にしか見えない」
「ははは……しかし誰だ？何かの撮影で来てるのか？」
リクも興味を持ち、一体誰なのか見ようとした。
「はい！じゃあ大栗君！今から出番だよ」
「分かりました」
ロケバスの方から声がした。そこから人気俳優の大栗順がやって来た。彼が姿を現すと同時に女性達の歓喜の声が響き渡った。
「うわ～、やっぱりすごい人気だな」
「人気？あの男がか？」
「ええ。あの大栗順は今有名な俳優で色んな映画やドラマ、ＣＭにも出演してますよ」
「ほーほー。簡単にいえば引っ張りだこって言うわけだな」
「まぁそうです。しかし、何のドラマをやるんだ？」
リクは周囲を見渡して何のドラマをやっているか調べて見た。すると、ドラマのタイトルらしき文が目に映った。
「えーっと……『大井川アンダーザブリッジ』？すごいタイトルですね」
「ああ。でもどんなドラマだ？」

その時だった。女性の歓喜の声がいきなり止まったのだ。で、その変わりに村長の驚く声が聞こえた。
「村長？何かあったんですか？」
「あ……あれは……俺！？」
村長が指さす方向には、河童に変装した大栗順がいた。
「エエエエエエ！？あんな有名な俳優が河童の格好を……一体何のドラマだよ！」
「アアアアアアアアア！！」
今度は星が声を上げた。
「何だ、お前もいたのか」
「あ…あああ…リク、アレ見て見ろ」
「ん？」
星が指さす方向には、星と同じようなかぶり物を被った俳優がいた。
「俺がいるゥゥゥゥゥ！！」
「いや、どっからどう見たって違うだろ！」
驚く星に対してリクはこう言った。
「オイテメーら！俺らのまねをしやがって、一体何するつもりだ！」
村長が俳優陣に対してこう叫んだ。この時、周りからざわめきが生まれた。
「村長！ちょっとこんな所で騒ぎを起こさないでくださいよ！」
と、リクは小声で行ったのだが。
「リク！俺ァ悔しいぜ！無許可で俺のまねをされてとても悔しいんだ！物真似された人の気持ちがよく分かるぜ！」
「何だ何だ君達は！」
騒ぎが起きている中、ドラマの監督がやって来た。
「テメーか！俺らのまねをしろと指示したのは！」
「あわわわわ！」
怒りをあらわにしている村長は、監督の首を絞めた。
「一体何の騒ぎですか？」

ここで、河童の格好をした大栗順がやってきた。
「あ、順君！何か君がこの人のまねをしたって言って大騒ぎしているんだよ」
「僕がまねを？」
大栗は村長の方を見た。
「うわ、ホントに似てる」
「似てるじゃねーよ。俺は本物の河童だ」
「ほ……本物……」
村長の言葉を聞いて、大栗はちょっと引いた。
「だから、真の河童の称号をかけて俺と勝負だ！」
「エエエエエエエエエエエエエエ！？何言ってるんですか村長！！」
村長が発した言葉を聞いて、リクは驚いた。
「おー面白そうだな。村長がんばれ」
「ニノさん！何言ってるんですかアンタ！村長、有名人に勝負なんて———」
「リク、よく聞け。これは……河童の意地をかけた……戦いだ」
「……いや、カッコよく言ってもあまり意味無いって！」
「……分かりました」
「え？」
大栗は小さく返事をした。
「真の河童の称号をかけ、あなたと勝負しましょう」
「ちょっと順君？君何言ってるの？あんなの相手にしてたら撮影が！」
勝負を止めさせようと、監督が大栗を制止しようとしたのだが。
「監督、少し時間をください。僕はあの人を倒し、真の河童となって……ドラマの撮影に挑みます」
「いや！何言ってるの本当に！」
監督の言う事を聞かず、大栗は村長の所に行った。
「宣言しましょう。僕はあなたを超える」
「見せてやるよ。真の河童の魂を」

二人の間に、見えない閃光が走った。

と、いうわけで混沌学院グラウンド。今グラウンドの中央には村長と大栗が相撲の構えを取っていたのだ。

「何で相撲何だ？」

「さぁ？」

「キャー！！アレ大栗君よー！」

「何であの大栗があんな所にいるんだよ？」

「ってかアレ本当に大栗か？２Ｅの村長が二人いるみたいに見えるんだけど」

「あとでサイン貰えるかな～」

「土方死ねや！」

「お前が死ね総悟！」

学院の方からこんな声が聞こえていた。

「じゃあ二人とも、位置についてください」

行司のリクが中央に立ち、こう言った。村長と大栗、二人が睨め合う中、試合が始まった。

「始め！」

リクの合図とともに、二人は同時に前に向かった。で、二人とも互いのまわしを取ったのであった。

「ぐっ、ガァァァァァ！！」

「ぬぬぬぬぬ」

二人とも、気合を入れながら相手を投げようとした。

「しっ、真の河童の力、なめるなよォォォォォ！！」

村長が叫びながら、大栗の腰辺りに右手をのばし、左手を首元の所に近づかせて掴んだ。

「まさかあの構えは！」

「一本背負い！」

「必殺！河童背負い！」

村長が大栗を掴み、一本背負いを仕掛けた。だが。

「ふんぬっ！」
大栗が浮いた体を地上に戻すように、思いっきり足に力を入れたのだ。
「俳優魂を見せてやる！僕の一撃をくらえ！」
そう言い、張り手を放ってきた。村長の方も、バランスを取り、張り手を放った。
「おらァァァァァァ！！」
互いの張り手が同時に当たり、衝撃波が生まれた。衝撃波は周囲の砂を舞うように吹き飛ばして行った。
「オワァァァァ！！何だあの二人ィィィ！？」
行司を行っていたリクは、砂に目が入った為目を押さえた。
「オラオラオラオラオラオラオラ！！」
「カパカパカパカパカパカパカパ！！」
聞こえてくるのは二人の声。それと同時にぶつかり合う張り手の音も聞こえる。
「……今回はギャグ回じゃねーよな、バトル回だよなァァァァァァァァ！？」
リクのシャウトが空高く響いた。

激しい戦いが始まってから数時間後。二人の張り手勝負はついた。
「ゼェ、ゼェ……へへ、手の感覚がもうねーわ」
「僕もです……まさかここまでやるとは……」
「たりめーよ。俺が本物の河童だからな」
「だけど……僕があなたを超える」
そう言うと、大栗は構えを取った。
「へっ、最後の一撃を決めるつもりか」
「はい」
「なら俺もこの一撃で最後にしよう」
村長もこう言って構えを取った。そして、二人が構えを取ってからかなりの時間がたった。この時間の間、二人は一歩も動かなかっ

た。
「……」
「……今！」
次の瞬間、二人は同時に動きだした。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
「ハアアア

第１１０話：漫画の実写版は高い確率で……後はご想像にお任せします（後書き

ここで訂正かな？

銀凪「え～、銀凪です。以前感想欄にてこういう質問がありました。混沌学院はどこにあるんですか？この質問に対して俺は東京のどこかって答えましたが……子の設定を変更します」

銀八「何でだよ？」

銀凪「今回出てきた大井川、あれ、本当にあります」

梓「あるんですか！？」

銀凪「ああ、静岡でちょっと有名な川だ。というわけで、混沌学院は静岡の田舎のどこかにあるという設定でお願いします。以前修学旅行ネタで静岡に言ったという話がありますけど、少し無視してかまいません」

当麻「それやばいんじゃないか！？」

銀凪「いいんだよ！昔はそういう設定とか気にしなかったんだから！！」

一方通行「矛盾と書発生するぜ」

銀凪「多分何とかする！！」

イーノック「多分って……問題だな」

第１１１話：よその地域に来る時は前もって情報を入手しておけ（前書き）

銀凪「今回はサイトとルイズのデート話です」

梓「銀凪さんってネタが危なくなるとデートネタしますよね」

銀凪「……」

闇「今回の脳内ＯＰは『スキ？キライ！？スキ！！！』でお願いします」

第１１１話：よその地域に来る時は前もって情報を入手しておけ

ある休日の日。サイトとルイズは街に出かけていた。
「へ～、珍しい物ばかりね～。あそこの世界とは完全に別ね～」
設定として忘れていると思うけど、まだヒナギクがヤンデレの頃、ナギを殺そうとして黒魔術を行ったのだが、手違いでサイトとルイズを召喚してしまったのだ。あれからヒナギクはあの長編でヤンデレが治り、更に山崎という彼氏をゲットしたのである。
「驚いたろ？俺があの世界に来る前はこう言う所に住んでたんだよ」
「ふーん。アンタも何かえらい所で暮らしてたのね」
「まぁな」
ルイズと会話をしながら、サイトは歩いていた。その時、誰かが二人を呼んだ。
「おーい！サイトとルイズじゃねーか！」
「あ、東条」
そこにはお好み焼きを焼いている東条の姿があった。
「何やってんだ？もしかしてデートか？」
「いや、ルイズに混沌学院の周辺を見せてやろうと思ってさ。それで二人で町を歩いてるんだよ」
「そうかそうか。ついでだから俺の作ったお好み焼き食ってくか？」
「ああ。じゃあ二つ頼む」
「おう。ちょっと待ってろよ」
東条からお好み焼きを買い。二人は近くの公園で座ってお好み焼きを食べ始めた。
「おいしいわねこれ」
「ああ、お好み焼きも久しぶりだな」
「向こうの世界にこう言うの無いからね、私も初めて見たとき本当に驚いたわよ」
二人はこう言う会話を交わしていた。

「ん？ねぇサイト、あの建物何？」
「あれか？」
ルイズが指さす方向にはデパートがあった。
「あれはデパートだ。色々な店があの中にあるんだよ」
「面白そうね、行きましょうよ！」
「そうだな。何かありそうだからな」
彼らはその後、近くのデパートへ向かった。

「何ここ……色々あって迷うじゃない」
デパートの中に入り、ルイズがこの第一声を上げた。彼女がいた世界（名前完全に忘れた）ではこういう建物は滅多にない（ってかあるのか？）為、ルイズにとっては異様の光景である。
「ん！ちょっとあそこのお店に行きましょうよ！今かわいい服を見つけたのよ！」
「はいはい」
ルイズがサイトの手を握り、かわいい服を見かけた店に向かった。

その後、ルイズは手当たり次第に服を持ち、試着室へ向かった。
「サイト、これどう？」
ルイズが来ているのは大人っぽい紫色の服だった。
「いいんじゃないか？」
「じゃあ次、これは？」
次の服は赤いチャイナ服だった。
「いや、何か神楽と被る」
「おかわりヨロシ？」
「すまん、神楽のものまねしないでくれ。中の人同じだから」
「次はどう？」
次のルイズの衣装はかなりきわどい危ない水着だったのだ。
「ナイス！でもこんなのどこで見つけたんだ？」
「その辺にあったわ」

「ってかこのデパートすごいな」
「じゃあ次の衣装ね」
次のルイズの服はサイヤ人の戦闘服だったのだ。
「何でこんなのが売ってんだよ！」
「フッ、この服を気にいっているのか？」
その時だった。後ろからベジータの声が聞こえたのだ。
「ベジータ！何でこんな所にいるんだよ！」
「バイトだ。休日はこのデパートで戦闘服を売っているんだ」
「何でだ？」
「実はこの服、俺の手作りでな。だからこうやって売っているんだ」
「手作り！？初耳なんだけど！！」
「この作品じゃあこう言う設定なのだ」
「サイト、私の方を見なさい」
ルイズがサイトを呼んだ。で、その時のルイズの姿は……銀時の原作の衣装だった。
「いや、何でそんなの着てるんだよォォォォォォ！？」
店内でサイトのシャウトが響いた。
「お、こんな所にあったのか」
ここで銀時の声が聞こえた。彼は原作の衣装を取り、お会計の所に行った。
「あ、銀時さん。またこの衣装ですか？」
「ああ。これが俺の唯一の私服だからな」
会計の人とこんな会話を交わしていた。
「「「それしか私服ないのォォォォォォォォォォォォォ！！」」」

その後、ルイズとサイトは上の階のレストランに来ていた。
「いやー、久しぶりだな。レストランで食事なんて」
「私なんて初めてよ。しっかり教えなさいよね」
「はいはい」
サイトはルイズにレストランでの作法を教え、メニューを伝えた

後で料理が来るのを待った。その様子をあのバカ野郎が見ていた。
「あのやろ～、ルイズちゃんとデートかこのヤロ～」
そのバカ野郎とは２Ｚのセクハラ変態エロコックの称号でおなじみのサンジである。
「さて、様子見とするか」
サンジはサイトとルイズの様子を見始めた。
「お待たせいたしました。チーズハンバーグ２つお持ちしました」
「ありがとうございます」
どうやら二人は同じメニューを頼んだようだ。
「さて、いただくか」
「おいしそ～」
二人はハンバーグを食べ始めた。そっから数分の間は何もなかったのだが。
「サイト、ほっぺにソースついてるわよ」
「え？マジで？」
「もう、そっちのほっぺじゃないわよ」
ルイズがサイトのほっぺについたソースを拭こうとしたその瞬間だった。
「きゃ！」
ルイズがバランスを崩してサイトの方に倒れ込んだのだ。
「あ……」
「大丈夫か？」
「うん」
その様子をしっかりと見ていたサンジ。もちろんサイトに殺意を覚えた。
「ア・ノ・ヤ・ロ・オォォォ

その後、サイトとルイズはデパートから出てその辺を歩いていた。
「ねぇ、ちょっと疲れたわ」
「ああ。どっかその辺に休める場所ないかな？」
「それよりもう暗くない？」
「そうだな、そろそろ寮の方に――――」
その時だった。
「待てぇ！このリア充が！」
サンジの声が響いたのだ。続いてその後ろからソウカイジャーが現れた。
「出たよバカが」
「少し予想していたわ」
呆れた声でサイトとルイズはこう言った。
「夜遅くまで何でデートしているんだ？俺達に対しての嫌がらせか！」
「しらねーよ」
「とにかくゆるさねェ！俺達がテメーらを――――」
その時だった。突然ゲベが乗った車がバカ共を跳ね飛ばし、バカ共は星になった。
「……先に行くか」
「そうね」
そう言って彼らは寮に戻って行った。

だが、少し歩いたところで大雨が降って来たのだ。
「ウソでしょ？何でこんな雨が？」
「しらねーよ！ったく、こんな雨が降るなんて思ってもなかった」
何とか雨宿りを出来る場所を探そうと、彼らは辺りを見回していた。
「サイト！いい場所あったわよ！」
「ホントか！」
そう言ってルイズが指をさす場所を見た。その場所の近くにあっ

た看板にはこう書かれていた。
『ガンダーラ・ブホテル』
「またこのネタかよォォォ

数分後、雨も上がり、サイトとルイズは再び寮への帰り道を歩いていた。
「おいルイズ、機嫌直せよ。ってかお前が自分であの店に入ったじゃないか」
「知らないわよ。でも……もし……やるとしたら……」
「ばーか、変なこと考えるな。ただでさえハヤナギの方で問題になってるっつーのに」
「ごめん、先走っちゃって」
「いいって」
「それよりこの道暗いわね。ちょっと不安……」
ルイズが小さくこう言った。ルイズが不安そうなのでサイトはルイズの手を握った。
「サイト……」
「大丈夫だ。お前にもし何があっても、俺がお前の手を離さない。誓ったろ？お前を守るって」
力強いサイトのセリフ。その彼のセリフを信じたルイズも力強く、サイトの手を握った。二人は手を握りながら混沌学院の寮に帰って行った。

次回！
まさかまさかの人気投票の結果、それに不満を感じたキャラも多数いる。そんなバカ共がＴＯＰ２０のキャラに襲いかかる？次回混沌学院『人気もステータスの一つだと考えろ』長編、人気投票編開始！

銀凪「えーその前に人気投票の結果も発表します」

銀時「打倒新八！」

銀凪「まぁｗｋｔｋしながら待っていてください」

第１１１話：よその地域に来る時は前もって情報を入手しておけ（後書き）

銀凪「ついに次回！！人気投票の結果発表を行います！！」

ルイージ「俺の過去も暴かれる特別編もやる予定なのでよろしく！！」

番外編：相手が誰であろうとも勝負の時は気を抜くな（前書き）

銀凪「お待たせしました。番外編、人気投票結果発表、人気投票編1話を更新します。まず最初はルイージ先生の過去話からまいります。なのは達との激しい戦いを見て行ってください」

番外編：相手が誰であろうとも勝負の時は気を抜くな

これは今から数年前の話である。
「うわ、今日もまた結構来てるな」
当時の混沌学院高等部の下駄箱にて、ため息交じりにこう言う生徒がいた。
「おお、また果たし状か？ルイージ？」
彼の近くにいたクラスメイトがこう言った。
「ああ。ったく、本当にめんどくせーぜ」
当時、ルイージはあらゆる部活動の助っ人を主にやっていた。その時のルイージは自身の人並み外れた運動神経を使って助っ人をしていた。そのおかげもあってあらゆる大会で優勝して言ったのだ。その様子を見てた腕に覚えのある人が毎日ルイージに戦いを挑んでいたのだ。ちなみにルイージの所属している部活は料理部である。
「で、どうするんだ？挑戦受けるのか？」
「まーな。とりあえず言っても分からねー奴にはデコピンしておくわ」
そう言いながらルイージは果たし状を見ていた。
「……ん？何だこの字？小学生か？」
ルイージが手にしている手紙の文字は小学生が書いたような文字だったのだ。
「誰だよ？宛先人は？」
クラスメイトに言われたので、宛先人を見て見た。そこにはこう書かれていた。
『高町なのは　フェイト・T・ハラオウン　八神はやて』
その日の放課後。ルイージは手紙に書かれた決闘場所に来ていた。彼の目の前には小学生らしき少女、三人が立っていた。
「で、今日俺に果たし状出したのはテメーらか？」

ルイージがこう言った。
「そ……そうです」
「どうしよう、本気のつもりだよ」
「あちゃ～、こりゃ……まずいな」
少女達はこう言った。声を聞いた後、ルイージは大きなため息をついた。
「今日は帰れ。まだ小学生だろ？俺の相手じゃねーっての。帰って相棒の再放送でも見てな」
そう言ってルイージは帰ろうとした。
「待って下さい！私達は本気です！」
中心にいたオレンジ髪の少女がこう言った。
「はぁ、どうすっかな～？」
そう言って見学に来ていたクッパの方を見た。
「あれ？何でワシの方を見るの？」
「相談。俺どうした方がいい？」
「いやどうするも何も、戦った方がいいんじゃないの？あの子達もそう希望してるし」
「そうか？」
「そうそう」
クッパとの相談の後、ルイージは前を見た。
「仕方ねー。希望に答えてやる。とっととかかってこいよ。ちなみに最初の数分は動かねー。ハンデだ」
「よし、一気に行くよ！」
「「うん！」」
その後、少女達は手に持った宝石らしき物を取り出し、手を挙げた。その瞬間、光が少女たちを包み込み、彼女たちの衣装が変わった。
「本気で行きます！」
「……は？」
その時、ルイージは何があったのか分からなかった。突然のこと

だった。目の前の少女達が光に包まれて衣装が変わった。しかもそれぞれの手には武器らしき物が装備されている。
「ちょっと待って。君達何？今売出し中のマジシャンか何か？」
「えと……実は私達、魔法少女何です」
「は？魔法少女？」
そう言ってルイージは再びクッパの方を見た。
「クッパ、聞いたか？」
「しっかりと聞いた。気にするな。ワシも驚いている、一体何があったのか分からないんだ」
「……まぁいい、魔法少女だか何だかしらねーが戦ってやるよ！こい！」
「じゃあ行きます……受けて見て！私の全力全開！」
オレンジ髪の少女がこう言った。その後、手にした杖から大きな球体が現れた。
「……へ？」
「ディバイーン……バスタァァァァァァァァァァァァ！！」
そう叫ぶと、杖の先から巨大なビームが放たれた。
「オワァァァァァァァァァ！！」
ギリギリで避けたルイージ、だが金髪の少女がビーム状の剣でルイージの方に向かっていた。
「行くよ、バルティッシュ！！」
「ハァァァァァ！？どこの映画の武器ィィィィィィ！？」
金髪少女の武器を見てこう叫んだルイージ。だが、彼も炎を出し、右手に纏わせて応戦した。
「くっ！」
「あ……あぶね～」
安堵していた、だが、今度は茶髪の短髪の少女の周りにあった小さな球体がルイージに向かって飛んできたのだ。
「なっ、何だよこれ！」
今度は左手に炎を纏わせ、球体を跳ね飛ばした。

「これは……本気ださねーとヤバいな！」
そう言って、ルイージは両手に炎を集めた。
「一気に潰す！ファイナルファイアー！！」
両手の炎を投げ、一点に集中させて巨大な炎を生み出し、少女達に向かって放った。
「うわわっ、どうするんや！」
「協力してあの炎を消そう！フェイトちゃん、はやてちゃん！行くよ！」
少女達の方からこう言う声が聞こえた。
「無駄あがきしても無駄だぜ。この技は未完成だけど破れることが無い――――」
自慢しようとルイージがこう言ったその時だった。
「「「いっけェェェ

その後、彼女達は自分の名を名乗った。
「私はなのはです。高町なのはです」
「私の名前はフェイト・T・ハラオウンです」
「うちが八神はやてや」
「そうか。久しぶりだぜ、本気で戦えるなんてな」
そう言ってルイージは両手に炎を纏わせた。
「来い！魔法少女共！！この俺が相手してやるよ！！」
なのは達に向かってこう叫んだ。その言葉になのはは武器を構えてこう言った。
「じゃあ行きます！私達も、全力全開で行きます！」
「来い！」
その後、その場所から激しい衝撃音や火柱が上がって行った。そして数分後。
「ぜぇ……ぜぇ……やべぇ、久しぶりにマジで疲れたぜ。ぜぇ……ぜぇ……息を吐き出すだけで辛い……」
魔法を受け続けたルイージ、意外にもダメージは多く蓄積して行ったようだ。だがなのは達の方もルイージの猛攻でダメージを受けていた。
「次で決めるしかないよね……」
「うん！皆、もう一回協力技をやるよ！」
「これで一気に決めるのか？」
「それしか方法は無い！」
なのは達は再び協力技の構えを取った。
「来いよ……俺も全力で行くぜ！」
そう叫んだ後、ルイージは再びファイナルファイアを作り出し、なのは達に向かって放った。
「「「「いっけェェェ

「オワァァァァァァァ！！」
見学していたクッパは吹き飛ばされない様に地面にへばりつくように耐えていた。しばらくして煙が止み、ルイージとなのは達の姿が現れて来た。
「ル……ルイージ！」
クッパが目にしたのは倒れているルイージとなのは達の姿だった。
「大丈夫かー！」
「……全然、口が動いても体が動かねー」
倒れたままルイージはこう言った。
「うう……やっぱ負けちゃった……」
近くで倒れていたなのはもこう言った。
「なーにが負けだよ」
なのはに向かってルイージはこう言った。
「今回は引き分けだ」

翌日。混沌学院に登校してきたルイージの姿を見てクラスメイトは驚いた。
「ルイージ！お前何で包帯姿何だよ！」
「松葉杖使うって……どんだけー！」
昨日の戦いでルイージとなのは達は傷ついたのだ。クッパが事情をクラスメイト達に話し、そこからルイージの周囲にクラスメイトが集まった。
「マジで！お前魔法少女と戦ったの！」
「強かったか！」
「かわいかった！」
「変身するとき全裸になったか！」
「何バカな質問してんだお前は！」
このような質問が響いた。
「はぁ、俺が包帯姿になるぐらい強かった、で答えておくよ」
全質問に対してルイージはこう言った。

そして数年後。ルイージとクッパは高校を卒業した後、大学へ行き、そこで教員の資格を取り、教師の道を歩んで行った。で、彼らの担任する学校が決まる日が来た。
「どこだ？俺らが担任する学校は？」
「この紙に書かれているみたいだな」
クッパは手元にあった紙を取り出し、ルイージと見た。その紙にはこう書かれていた。

『混沌学院小学部』

「まさか、混沌学院に来るなんてな……」
「卒業して余りたってないから久しくもなんともないな」
そう会話しながらルイージ達は歩いていた。そして、ルイージはくえす校長と話をし、自身が担当する教室へ向かった。
「３Ｚか、変わったクラスって言ってたけど……まぁいいか」
そう言ってルイージは教室の扉を開けた。次の瞬間、目の前にタワシが飛んできた。
「な！」
難なく飛んできたタワシをキャッチしたのだが、一体誰がこんな事をしたのか分からなかった。
「あら、意外とやりますわね。あの新任教師の人」
金髪の少女が笑いながらこう言った。
「沙都子のトラップをかわすなんて、あの人すごいです」
その少女の近くにいた黒髪の長髪の少女がこう言った。
「……とりあえず席つけ。今から先生の自己紹介を始めるからな～」

そう言ってルイージは自己紹介を始めた。これがルイージと当時三年生だった５Ｚとの出会いであり、また高校生となったなのはとの再会もするのであった。なのはとの再会の話はまた後の話で。

番外編：相手が誰であろうとも勝負の時は気を抜くな（後書き）

銀凪「では続けて……お待たせしました、人気投票の結果を発表します！！」

混沌学院第２回人気投票結果発表

銀凪「ではただいまより……混沌学院第２回人気投票結果発表を行います！」

銀時「うっしゃー！打倒新八！」

新八「いきなりそんな事言わないでください！」

ハヤテ「そんなのやったって僕とお嬢様のワンツーフィニッシュに決まってるじゃないですか♪」

ナギ「そうだそうだ。私達の愛は無敵だ♪」

銀凪「え～、今回は前回より多くの票が届きました。それに関しては俺も―――」

神楽「お前のあいさつはどうでもいいからさっさと始めるネ！」

銀凪「じゃあ始めます。今回は２０位から発表します。では２０位は誰でしょうかね？この人です！」

２０位

けいおん！より　寿吹紬

仮面ライダー電王より　仮面ライダー電王　３０票

紬「同着……だと」

銀凪「えー本当に驚きました。ちなみに1位も同着でした」

ハヤテ「やりましたね！」

ナギ「まさかこんな奇蹟が起こるとは！」

銀凪「最後まで聞け。じゃあ次は17位です」

18位

俺の妹がこんなに可愛いわけが無いより　高坂桐乃　33票

桐乃「やった！」

銀凪「えーおめでとさん。出番ないくせに頑張った。じゃあ16位。何とこちらも同着です！」

17位

銀魂より　神楽

とらドラ！より　高須竜児　34票

神楽「うっしゃー！前回より上がったネ！」

竜児「お……俺！？」

大河「やるじゃない、意外に人気あるわね」

銀凪「では、次の１４位を発表しましょう！」

１５位

とらドラ！より　逢坂大河　３６票

竜児「……僅差で負けた……」

大河「これが現実よ♪」

銀凪「……続いてまいりましょう。１３位はこの人です」

１４位

銀魂より　山崎退　３７票

大河・神楽・竜児・ムギ・桐乃「「「「「なん……だと」」」」」

山崎「あの、どうかしたんですか？目が怖いですよ」

銀凪「気にするな続いては１３位です！」

１３位

とある魔術の禁書目録より　上条当麻　３９票

当麻「落ちた……完全に落ちた……」

銀凪「はい、じゃあ次の１２位にまいりましょう」

１２位

ハヤテのごとく！より　愛沢咲夜　４０票

咲夜「うちか」

新八「すごいですね」

咲夜「いや～何か照れるな。こんなに応援してくれる人がいるなんて」

銀凪「はい！じゃあ１１位にまいりましょう！」

１１位

魔法少女リリカルなのはシリーズより　フェイト・Ｔ・ハラオウン
４４票

なのは「フェイトちゃんすごい！」

フェイト「ありがとう」

銀凪「ここからベスト１０の発表に入りたいのですが。ちょっとここで俺がビックリした事を話します」

銀時「何だ？」

銀凪「これを見てくれ。こいつをどう思う？」

マーカス君人形　２３票

サンジ＆近藤　マイナス１０００票

銀凪　２１票

銀時「マーカス君人形……何か異様に票多いな」

新八「あの、サンジさんと近藤さんが何でマイナス何ですか？」

銀凪「実際にこうやって数回届いたんだよ。まぁマイナスにしないけどね」

新八「実際あの人達の票はいくつなんですか？」

銀凪「俺に負けてる」

銀時「そういうお前もマーカス君に負けてるじゃん」

銀凪「……ではついに１０位の発表です！」

１０位

灼眼のシャナより　シャナ　４５票

シャナ「フフン、当然の結果よ」

銀凪「いや～、今アニメまたやったり小説が終わったりしてるからね～。じゃあ９位の発表です！」

９位

魔法少女リリカルなのはシリーズより　高町なのは　４８票

なのは「私！」

銀凪「いや～、さっすが魔王。実は影で――――」

なのは「頭冷やす？」

銀凪「次にまいりましょう！８位はこの方です！」

８位

ハヤテのごとく！より　桂ヒナギク　５０票

ヒナギク？「ホッホッホ、当然のことよ！」

ヒナギク「何やってるのよ小太郎君！」

ヅラ「何って、同じ桂の名字だからやって来たのだ」

銀凪「ちなみにヅラは１３票です」

ヅラ「……」

ヒナギク「あ、暗くなった」

銀凪「ほっとけ。次は７位です！」

７位

魔法少女まどか☆マギカより　佐倉杏子　６３票

杏子「え！何で！」

銀凪「さぁ？人気あったんじゃねーの？次は６位の発表！」

６位

銀魂より　志村新八　６６票

新八「……前回よりちょっと落ちた？」

銀凪「ええ。少しだけ。じゃあ次はベスト５の発表！５位は！」

５位

魔法少女まどか☆マギカより　美樹さやか　６７票

さやか「フッフッフ、これが実力の差と言うものよ」

神楽「チクショー！」

まどか（１７票）「こんなに差があるなんて、こんなの絶対におかしいよ！！」

さやか「まどか、私泣くよ？」

銀凪「では４位の発表です！」

４位

ハヤテのごとく！より　綾崎ハヤテ　８２票

銀凪「前回王者、墜落！」

ハヤテ「……嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だァァァァァァァ！！！」

杏子「あいつ泣いてるぞ」

銀凪「知るか。では次は……１～３位まで同時に発表します！ではどうぞ！」

３位

ハヤテのごとく！より　三千院ナギ　８５票

１位

ＯＮＥＰＩＥＣＥより　モンキー・Ｄ・ルフィ

銀魂より　坂田銀時　２７９票

ルフィ「シッシッシ！今回は俺らがトップか！」

銀時「……マジで？マジでこうなった？」

銀凪「ハイ。投票中がヒナギク最後のヤンデレ編で、しかも丁度銀時ｖｓヒナギクの影響かもしれませんが、そのせいで結構票が来てました」

銀時「ウッシャアアア

ルフィ「どんな事だ？」

銀凪「２Ｚの中でベストカップルとか嫌いな奴とか」

銀時「面白そうじゃん」

銀凪「ここでいうけど、実際人気投票と同時期に嫌いな奴選手権とか言うのもやろうと思ったんだよ。だけどアンチ意見とかそんなのありそうだから結局辞めたけど」

銀時「へ～」

銀凪「じゃあ今日はこの辺でおしまいです。またこう言うような企画もやると思いますから、それまで応援よろしくお願いします！」

銀時「俺からも一言。投票ありがとう！」

銀凪「ではこれでおしまいです。混沌学院、これからもがんばります！」

土方「で？結局これでおしまいか？」

沖田「みたいでさぁ」

千世「納得できないわよ！何で私達より山崎が上にいるのよ！」

マミ「私の票……少なかった」

ほむら「美樹さやか、絶対に潰す！」

まどか「おかしいよ！本当におかしいよ！絶対におかしいよ！私がまどマギの主役なのに！」

妙「私なんて一票も来てないのよ？」

土方「まぁそれより……会議を始めるぞ」

沖田「ええ、この企画の結果発表に対する反乱の事ですね」

混沌学院第２回人気投票結果発表（後書き）

では続いて１１２話をご覧ください。そして本当にたくさんの応募ありがとうございます！！次やる時もよろしくね♪

第１１２話：（人気投票編）人気もステータスの一つだと考えろ（前書き）

銀凪「では参りましょう！！長編人気投票編！！今回の脳内ＯＰは『修羅』でお願いします！！」

第１１２話：（人気投票編）人気もステータスの一つだと考えろ

ある日の混沌学院、いつもは騒がしいのにこの日は不気味に静かだった。この異変を察したのは新八、そして丁度この場にいたさやかと杏子だった。

「あれ？何か異様に静かだな」

「そうですね。いつもはゲーセン並みに騒がしいのに」

そう声を漏らした。門は開いていたので彼らは入って行った。

「あ、新八。皆見なかったか？」

ここで咲夜がやって来た。

「いや、今来たばっかなので」

「おかしいな、いつもは先生達もいるのに……おかげで当番の仕事もできへん」

「そうそう、まどかもいつも私より先にいるはずなのに今日はいなかったんだよ」

「珍しい日もあるんだなと思ったんだけど……先生達もいないとなるとちょっとおかしいな」

その時だった。近くで爆発音とともに。

「不幸だァァァァァァァァァァ！！」

と、当麻の声が響いた。

「当麻さん！一体何があったんだ！」

「くたばれこの地味なくせにＴＯＰ２０に入ったクソ不幸野郎がァァァァァァァァァ！！」

近くで妙が当麻をボコボコにしていたのだ。

「姉上！一体何やってるんですか！」

「それはこう言う事だ」

新八の横で土方の声がした。

「あ、土方――――」

ドカァァァァァァァァン！！

土方はバズーカをぶっ放したのだ。

「ちょ！土方さん！アンタ一体何を！」

「うるせェェェェェェ！！俺より票を取りやがってェェェェェェェェ！！」

土方の雄叫びと共にバズーカの発射音が鳴り響く。新八達は何とかよけて行った。

「チッ、どこだあいつら！」

「もう逃げたみたいね、さっさと探して潰すわよ！」

遠くの方で土方と妙の声がした。新八達は壁の死角に隠れていた。

「い……いったい何でこんな事に？」

「知らん。何か票とか言ってたけど」

「とにかくまたどこかに隠れないと、ここにいるとばれる」

さやかの意見に賛成した新八達は何とかして隠れる場所が多い校内を目指して歩いていた。そこに。

「新八君！探したよ」

山崎の声が聞こえたのだ。

「え？山崎さん？どこですか？」

「ここです」

すると、声と共に新八の後ろの壁から山崎が現れた。

「オワァァァァァ！一体何で」

「隠し通路です。今はとにかくこっちに来て下さい」

そう言って新八達は山崎の後について行った。

隠し通路の隠し部屋。ここにはＴＯＰ２０のキャラがほとんどいた。

「ええ！今回の人気投票に不満を持った人たちが一斉に凶暴化！」

新八の声が響いた。

「はい。今回の結果がかなり嫌な人もいたようで、かなりの数の人が凶暴化になっています」
「でも、うちみたいに協力的な人もいるで」
はやてがこう言った。
「しっかし、いくらなんでもこんな事で凶暴化するなんて、本当に馬鹿みたいだぜ」
近くにいたヴィータもこう言った。
「だけど早く何とかしないと当麻さんみたいに被害者が出ます」
「え？当麻君やられたの？」
「はい。姉上にボッコボコにされてました」
「そう、お妙さん相手じゃ何もできないからね」
その後、彼らは作戦会議を始めた。

「よし！皆で協力してバカ共を倒そう！」
武器を持った新八がこう言った。もちろん作戦も考えてある。その作戦は単純明快、とにかく暴れるだけ。バカ達もこちらに対して暴れると思うのでだったらこっちも暴れればよくね？という意見が出たのだ。
「皆、気をつけてね。相手には凄腕も何人かいるから」
「分かりました。なのはさん達も気をつけて！」
そう言って彼らは外に飛び出して行った。

それから数分後。新八は咲夜と共に辺りを隠れながら歩いていた。
「ヤバいで、あいつらに見つかったら即アウトや」
「大丈夫です。僕が咲夜さんを守ります」
「ちょ、そんな事言うな。恥ずかしいや」
小声でこう会話をしていたその時だった。
「見つかったか？例の奴らは？」
土方の声が聞こえたのだ。今回の騒動、どうやら土方達のような票の少ないキャラが反乱を起こしたようだ。その中には妙、さっち

ゃん、九兵衛などがいる。彼らはかなり強い。もし戦いとなれば勝てるわけがないのだ。
「いいえ、まだよ」
「話だとどこかの隠し通路にいるみたいよ」
「しかし、場所が把握できてない」
「大丈夫だ。その話はまどかとほむらがその通路を探している。俺らはとにかくその辺を探すぞ。当麻みたいにそこら辺にうろついているかもしれないしな」
そう言って彼らはその場から離れて行った。
「ねぇ、話があるんだけど」
「どうした？」
「実は今回の投票、作者にも票が入ったのよ」
「何ィ！」
土方が大きな声を出してこう言った。
「あいつが俺らより多くの票を取っただと！」
「はい！本当にむかつくわ！」
「そいつは許せねーな。オイ、ＴＯＰ２０をやる前に……作者をやるぞ」
（（エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？））
新八と咲夜は心の奥でシャウトした。俺がもしやられれば、この作品は消えるに等しいのだ。
「ヤバいで！下手したらうちらの存在が」
「ええ、その前に阻止を――――」
声を潜めて会話をした二人、だが彼らの目の前にいるはずの土方達はあれ、お前何を――――――――
ドカ！

ズシャ！

バキ！

ギャアアアアアアアアアアアアアア！！

新八（あれ？何かおかしいですね）

咲夜（ああ、何やこれ？一体何があったんや？）

新八（でも書き方がおかしいですよ。台詞のかっこも「」じゃなくて（）だし）

咲夜（……なぁ、もしかして……）

新八（ええ。多分……）

新八・咲夜（（作者やられたァァァ

第112話：（人気投票編）人気もステータスの一つだと考えろ（後書き）

梓「作者さァァァァァァァん！！」

闇「ついにやられましたか」

ブロリー「ってか次回はどうなるんだ？」

イーノック「そうだな、問題はそこだ」

ルシフェル「少し危ないな」

銀八「次回までに戻ってこォォォォォォォォォい！！」

第１１３話（人気投票編）敵を欺くにはまず味方からって言うけど評判下がるぜ

銀八「オイィィィィィ！！作者どうなったんだァァァァァァァ！！」

梓「知りません！！とにかく話の続きはどうなるんですか！？」

一方通行「俺に聞くなよ！！」

第１１３話（人気投票編）敵を欺くにはまず味方からって言うけど評判下がるぜ

前回の話

今回の人気投票の結果に不満を持ったバカ共が反乱。で、新八達が戦う事になったんだけど、その前に作者が倒される。さて、どうなる？

新八（いや、どうなる？じゃねーよ！！）

咲夜（このままじゃ話が進まないで！！）

新八（あ……あれ？体が……）

咲夜（あ、作者復活したのか）

時は世紀末、こんな時代にも学校はあった。人は人より強くなるため、この学校、混沌学院に通うのであった！

混沌学院の拳

原作：銀凪ｍｋ？

書く人：漢丸出朗

この校舎に向かって走る男が一人いた！その男の名は！志村新八！

「許すまじ！闇将軍、銀時！！」

新八（って何じゃこりゃあアアアアアアアア！？）

咲夜（完全に別もんやないか！！）

新八（批判きますよ！そもそもこんな事しているから批判がきそうなんですけど！）

咲夜（あ！また体がおかしく！）

新八（多分言い争ってる！どうなるんだ！この先の展開はァァァァァァァァ！？）

パッチリ～ン♪

「は～い！ぱちゆり、始まるよ～！！」

原作：銀凪（混沌学院）

書いた人：百合我隙男

新八（って何じゃこりゃアアアアアアアアアア！！どっかで聞いたんですけど、この始まりかた！ってかぱちゆりって何？僕が主役なのかコレ！）

咲夜（書いた人の名前何！この話ってもろＧＬやろ！この作者あま

りＧＬ好まないって言ってたやないか！あ！また作風が変化する！）

「うわ！限界限界！」
そう言って僕は急いでトイレに向かって行った。だが、公園のベンチに座っていたいい男が僕の方を見ながら、つなぎのチャックを下に引いて行った。で、続いてこう言ったんだ。
「やらないか？」

新八（だからこの作者ＢＬは嫌いなんだって！）

咲夜（うわ！何か銀凪ｍｋ？お怒り見たいやで！体がまたおかしく――）

新八・咲夜（（ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！））

「……あれ？元に戻ってる」
新八が目を覚ますと、そこはいつもの混沌学院だった。
「元に戻ったんやな。それに微妙なナレーション。作者も復活したんやな！」
はい。突然行方不明になった漢丸出朗さんと百合我隙男さんの為にも頑張ります。

「「……あの二人消されたァァァァァァァァァァァ！！」」

一方さやかと杏子は魔法少女に変身し、いざという時に対応できるようにしておいた。

「一体誰だ？こんな事を考えたのは？」

「さぁ？でもいずれ正体が分かるでしょ」

そんな会話をしながら歩いていた。その時だった。どこからかシュッ！と音がし、細長い物が彼女らを襲ったのだ。

「な、何！」

「敵か！」

こう声を上げた後、敵がやって来た。その敵とは――――。

「ま……まどか！何でアンタが！」

まどかだったのだ。それに後ろからほむらとマミがやって来た。

「私も今回の結果に不満を持っているんだよ」

そう言って手にした弓を構え、さやかを狙った。

「おかしいよ！何で主人公の私が１０票程度で、さやかちゃんが６０越えしてるの！」

「それが……それが実力の差だ！」

「絶対におかしいよ！現実だとあまりさやかちゃんのグッズ売れてないのに！」

「まどか、それ言うと私でも怒るよ？」

「だから――――この私がこの全体的におかしい人気投票の結果を変えたげる！」

そう言ってまどかは弓矢を放った。

「くっ！まさかまどかまでも向こう側についたとは！」

「さやか！一旦引くぞ！向こうは遠距離用の武器、私たちの武器じゃあ反撃できない！」

「うん。その方が――――」

「無駄よ」

後ろからほむらの声が聞こえた。そして、ほむらの後ろにいたマ

ミがデカイ拳銃をこちらに構えていた。
「なっ！」
「しまっ――――」
「ティロ・フィナーレ！」
マミがこう言った後、辺りに爆発音が響き渡った。

同時刻、なのは達はある人物の事が気になり、ある場所へ移動していた。
「なのは、銀さんとルフィはこの近くか？」
はやては走りながらこう言った。今回のＴＯＰ２０には銀時、ルフィもいる。しかも同着１位という記録を作ったのだ。ここでも言うけどホント驚きました。なのはは反乱集が１位の銀時とルフィを襲いに来るのではないかと思い、彼らの元に移動していたのだ。
「確かこの先だったよね」
「ええ」
目の前に扉が見えて来た。いざという時のために扉を頑丈に閉じていたのだが、その扉は開いていた。
「しまった！」
「銀さん、待ってろや！」
急いで扉の先の部屋に向かった。そして、彼女達は絶句した。目の前にあったのは血まみれになり、倒れている銀時の姿があった。
「銀さん！」
なのはが銀時の元に駆け寄った。
「何とか生きてるみたいだけど……危ない状態」
「シャマル、治療頼むで！」
「はい」
シャマルが銀時の元に近づき、治療を始めた。
「これは酷い傷……一体誰がこんな事を」
「銀さんを倒すほどの実力の持ち主みたいね」
「でも銀さんを倒せる人なんて結構いるで、うちらみたいに」

「それよりルフィはどこに？もし銀さんが襲われたとなればルフィも――――」
「俺は無事だ！」
壁の方からルフィの声がした。少しして壁が外れ、ルフィとハンコック、それにサンジを除くルフィ海賊団と悟空、神楽もいた。
「わらわが助けたのだ。なのは、他の皆はどうじゃ？」
「ええ、皆暴動を止めるために戦いに行ったわ。私達は銀さん達の様子を見に来たんだけど……銀さんは……」
「銀ちゃん、アンタが死んでも私達は頑張るネ。あの夜空の一番星となって私達を見守っててネ」
「ば……か……まだ……死んでね……って……の……」
苦しまぎれに銀時がこう寝言を言った。
「……それより、銀さんを襲ったのは誰？」
「分からない。だけど……声は聞いたぜ」
小さくウソップがこう言った。
「よく聞けよ。俺はもう隠れてたんだけど。この部屋に銀さんが隠れに来たんだ。で、少ししてこんな会話が聞こえて来たんだ。『何でＴＯＰ２０に入ったお前らが俺を襲うんだ！』って。その後だよ、銀さんがやられたのは」
「ＴＯＰ……２０！」
なのはは驚いた。自分達ＴＯＰ２０のキャラが同じＴＯＰ２０のキャラを襲うわけがない。なのに、そのキャラは銀時を襲った。それは紛れもない事実だ。
「あ、そう言えばハヤナギはどこに行ったんだ？」
なのはが考え込んでいる中、ヴィータがこう言った。そしてなのはは気付いた。銀時を襲った犯人の正体を。

次回！
各地で始まるバトル、バトル！バトル！ＴＯＰ２０のキャラはあらゆるキャラの戦いを無事にこなす事が出来るのか？そして、今回

の騒動の黒幕がついに明らかとなる！次回混沌学院『黒幕は意外な人物というどんでん返しはよくあることだと思え』どうぞご期待！

第113話（人気投票編）敵を欺くにはまず味方からって言うけど評判下がるぜ

おまけコーナー

銀凪「俺、復活～♪」

梓「やっと復活したんですか」

イーノック「一体どうやって復活したんだ？」

銀凪「……秘密です」

第１１４話：（人気投票編）黒幕は意外な人物というどんでん返しはよくあるこ

銀凪「というわけで始めます。この長編意外と長くなりそうです」

銀八「どんだけだよ」

梓「早く終わらせて私がメインの長編を早くやってください」

銀凪「はいはい」

第１１４話：（人気投票編）黒幕は意外な人物というどんでん返しはよくある

新八達は武器を持って走っていた。もちろん、何があってもすぐに対処できるように装備しているのだ。
「……新八、何か声が聞こえてないか？」
「ええ、いったんここで待ち伏せしましょう」
こうしてやって来る相手に対して、新八達は待ち伏せを始めた。
数分後。足跡が近付いてきた。
「来た！」
「え！新八君！」
聞こえて来た声は山崎のものだった。しばらくして山崎とヒナギクが姿を現した。
「山崎さん、ヒナギクさん！」
「無事だったのね。安心したわ」
「そっちはどうや？何かあったか？」
「今のところ何も、たださやかさん達がまどかさん達と交戦して以降行方が分からないみたいです」
「そうですか……まどかさん達も気をつけないと」
「ええ。あの子達は戦う時は本気で強いからね」
「あとの要注意人物は他に―――」
その時だった。上から銃弾が降って来たのだ。
「誰だ！」
「私よ」
声の正体はほむらだった。彼女は上空から現れて来たのだ。
「くっ！厄介なのが来たわね！」
「あら、厄介なのは私だけじゃないわよ」
「ま……まさか！」
新八はまた上空を見た。そこにはマミが宙に浮いていて、彼女の周囲には無数の銃が浮いていた。

「……質問いいですか？」
「あら、こんな時に余裕ね。まぁいいわ。何でも答えるわ？」
「さやかさんと杏子さんはどうしたんですか？」
「倒したわよ、今は逃げれない様にまどかが見張りしてるけど」
「じゃあ次に……何でこんな事を！」
「決まってるじゃない、今回の人気投票の結果に不満を持ってるからよ」
新八の質問にこう答えたほむら、だがどこかに新八は違和感を感じていた。ほむらは冷静であまり喋らないイメージがある。人気投票であまり熱くならないはずだ。しかし、今の彼女は冷静なイメージを覆している。何かが彼女を変えさせたのだ。何者かがこの事件を起こしたのだ。そう新八は考えたのだ。
「……あ！校舎の外に松〇修〇が！」
「嘘！」
「いるの！」
新八はそう嘘を言い、マミとほむらの視線をそらし、その隙に逃げた。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
辺りで無数の生徒達の悲鳴が轟いた。その中央には紬、大河、シャナが立っていた。
「ふぅ、何考えてるのかしら、ろくに力もないくせに私達に襲いかかるなんて」
「そうよね～、それより唯ちゃん達は無事かしら？」
「無事よ。今桐乃がルイズ達の方に移動させたから、ルイズ達は私達の味方だから……でも何でこんな騒動が起きたの……」
そう呟いたその時だった。
「テメーら！これを見ろ！」
近くでサンジの声が聞こえた。
「サンジ？」

「何してるのかしら？」
サンジの声がした方向を見ると、そこにはドでかい容器をバックにしてサンジが立っていたのだ。
「エロセクハラスケベコック、何やってるの？」
「シャナちゃん、それ言いすぎ……お前ら、もう降参しろ」
「降参？それは私達のセリフよ」
「そうよ、私達は無意味な戦闘を好まないわ」
「……そうか、じゃあこれ見て同じセリフが言えるかな！」
そう言ってサンジはしっかりとシャナ達にドでかい容器を見せた。
その容器の中には……。
「竜児！！」
「悠二！！サンジ、お前！」
「おっと、動くなよ。もし動いたらこのボタンで容器の中に水をぶち込むぜ！」
容器の中にいる竜児と悠二は中で容器を叩いて、何か叫んでいるように見えるのだが、何を伝えたいのか分からない。
「無駄に喋るなよ。この容器のガラスは特別でな、防音を完全シャットアウトしているんだよ！その為何を伝えたいのかさっぱりと分からない！」
「くっ！！」
「卑怯ね」
サンジの卑怯な罠で、彼女らは動けないでいた。だが、紬の姿が消えていた。
「あら？ムギちゃんどこいったんだ？」
サンジがこう言ったその時だった。後ろの容器から何かが斬れたが聞こえたのだ。
「え？」
振り向いてどうなったのか見ようとしたのだが、その時に目の前にたくあんが飛んできた。
「へ？まさか———」

サクッ

たくあんはサンジの額に命中し、彼を仕留めた。

「皆〜、二人とも助けたわよ〜」

「……ムギ、アンタ一体何者！」

シャナがこう言ったのだが紬はスルーした。

「さて、ちょっとサンジ君には……お仕置きを与えないとね♪」

「う……うん……一体何があったんだ？」

気絶から目が覚めたサンジ。だが、中の様子が違っていた。

「へ？ここって容器の中じゃね？嘘だろ！何で！」

その時だった。足元から熱湯が流れて来たのだ。

「あっつ！！誰だ！こんなことしたの？あっつ！！まさかムギちゃん達か！あっつ！！俺が気絶している時に閉じ込めたのか？あっつ！！」

何とかサンジは助けを呼ぼうとしたのだが、サンジは身包み剥がされていた。

「嘘だろ……これじゃあ連絡があっつ！！ヤバい！これマジで絶体絶命あっつ！！誰か！誰か助けてあつあっつ！！ヤベ！もう膝元まで熱湯があつ！！」

容器の中で、サンジは苦しい目にあっていた。

一方新八達はほむら達から逃げていた。だが、逃げているだけじゃなかった。彼らはほむら達の隙を見て反撃するつもりだったのだ。

「姿は見えた？」

「いえ、まだです」

山崎とヒナギクは両手にあんぱんを持っていた。もしほむら達が現れたらそれでぶっ叩くつもりなのだ。

数分後、ほむらの姿が見えた。

「来たわよ、時を止められないように注意して！」
「はい」
ほむらの姿がはっきりとしてきた。そして山崎とヒナギクはほむらに近づいた。
「あなた達の方から出てくるなんてね」
「じゃあ喰らえ！」
有無も言わず、山崎はほむらの顔面目がけてあんぱんをぶつけた。
「……私を倒しても……後一人いるわよ？」
「そう、私の存在をね」
後ろからマミが現れた。だが、ヒナギクは余裕の笑みだった。
「何が後一人よ？敵もこっちも二人なのよ！」
そう叫び、ヒナギクはあんぱんをマミにぶつけた。
「……かかったわね」
「え？」
その時だった。一本の矢がこちらに向かって飛んできたのだ。
「な！」
「まさかまどかさんが！？」
「そうだよ、このおかしい人気投票を変えに来たよ！」
上空からまどかが降りて来た。彼女はすでに戦闘モードだ。
「くっ、さやかさん達を見張りしてたんじゃ！」
「ウィヒヒ、実はさやかちゃん達は奥深い所に閉じ込めたの、誰にも分からない所にね」
笑ってまどかはこう言った。
「武器のあんぱんももうない。何もできないね」
そう言ってまどかは弓矢を構えた。だが。
「ちょっと待ちな、ＴＯＰ２０以外がアンタらの味方だと思ったら大間違いだぜ」
「え？」
ドカ！！

衝撃音が聞こえ、まどかが地面に倒れた。
「よー、無事か？」
「あなたは……」
まどかを倒した人物、それは。
「高杉さん！」
高杉だったのだ。彼は倒れているまどか達を縄で縛り、身動きできないようにした。
「ありがとうございます。本当に助かりました」
「いいってことよ。しっかし、えらい事になってるな。誰が味方だか敵だかわかりゃーしねー」
周囲を見渡しながら高杉はこう言った。そして山崎達に向けてこう言った。
「今のうちだ。さやか達を見つけに行くぞ」
「え？でもだれにも見つからない所に隠したって———」
「心配すんな、俺らのクラスには発明の大天才がいるんだよ。とりあえず体育館倉庫に向かうぞ」
その後、山崎達は体育館倉庫に向かった。

同時刻、なのは達は屋上にいた。屋上には二人の生徒が立っていた。
「見ろ、皆人気投票の事で争っているぞ」
「ええ、本当に下のランクの人達は醜いですね」
「そうだな。あんな嘘一つでこんなにも人気投票の事でやけになるなんて」
「全くですね」
その生徒はこう言う会話をしていた。だがなのは達に気付いたらしく、下の状況を見ながらなのはに向かってこう言った。
「なのはさん達もそう思いませんか？」
「いいえ、そう思わない」

「確かに色んな事でやけになるというのはよくある事だと思う」
「そうですか。じゃあ一緒に見ませんか？この醜い争いの状況を？」
「うちらはその為に来たんやないで？」
はやてがこう言った後、なのは達は武器を構えた。
「……僕達と戦うんですか？」
「うん、あなた達を倒して、こんなバカ騒ぎを終わらせる！」
「……知ってたんだな、私達が黒幕だと」
そう言った後、彼らはなのは達の方を振り向いた。
「行くよ！ハヤテ君、ナギちゃん！！」
なのはこの騒動の黒幕であるハヤテとナギに向かってこう言った。

次回！
山崎達はさやか達を救うため、２Ｅの発明の大天才の所に向かった。彼らは無事にさやか達を助けられるか？そしてなのは達とハヤナギの戦いもどうなるのか！そして、この騒動は一体どうなるのか！次回混沌学院『いつまでも一位でいられると思うな』どうぞご期待！

第１１４話：（人気投票編）黒幕は意外な人物というどんでん返しはよくある

銀凪「いよいよ黒幕の正体があかされました」

銀八「ってか前回の話で分かりそうだったよな」

梓「ええ」

闇「ばればれなんですよ、あなたの推理は」

イーノック「探偵に向いていないな」

銀凪「……」

第115話：（人気投票編）いつまでも一位でいられると思うな（前書き）

銀凪「そろそろ人気投票編もクライマックスです」

銀八「どうなるんだオイ？」

梓「まぁ最後までみましょう」

第１１５話：（人気投票編）いつまでも一位でいられると思うな

山崎達は体育館倉庫の裏にいた。高杉の話だと騒動で教室に被害が及ばない様に２Ｅ総出でここに隠れているという事である。
「で、２Ｅの皆はどこにいるんです？」
山崎がこう言った。彼の目の前には体育館倉庫しかない。
「実はどこかに隠れているんだよ。ちょっと待ってな？」
そう言って高杉は携帯を取り出した。
「ああ俺だ。倉庫の前にいる……ああ、分かった。了解」
その後、体育館倉庫から音がした。
「高杉君、無事だったんだ」
そして倉庫の中からララが現れた。
「何とかな。山崎達も無事だったし」
「よかったよかった」
その後、高杉はさやかと杏子を救うという事をララに伝えた。
「え？さやかちゃん達を救う？」
「ああ、でも場所が分かんねーんだよ。何とか発明出来るか？」
「うん！任せといて！」
そう言ってララは倉庫に戻って行った。
「俺らも中に入ろうぜ」
「はい」
その後、山崎達は倉庫の中に入って行った。

一方新八達はルフィの所にいた。理由は携帯にルフィから連絡が入ったから。
「ルフィさん、無事だったんですね」
「おう！新八と咲夜も無事のようだな」
何とかルフィと合流できた新八＆咲夜。ちなみに場所は保健室である。

「銀さん……まさかこんな目にあうなんて」
「ああ、いくらギャグ補正で治るって言っても……これはやり過ぎだ」
「それよりヒナギクと山崎は？一緒にいるって思ったんだけど」
「今連絡したところ、高杉さんに救われて２Ｅの方にいるみたいです」
「それは良かった」
その後、ナミの携帯が鳴った。
「あ、何かしら……ヴィータから？何何……」
ヴィータからのメールを見て、ナミは絶句した。
「皆、支度して。黒幕が分かったわよ」
「何！」
ルフィが声を上げた。
「一体誰だ？」
「ヨホホホホホ！！少しお仕置きしないといけませんね～」
「スゥーパーな俺に任しておけ！」
「静かにして。いい？今回の騒動の黒幕はハヤナギよ」
「あいつらかよ」
「まぁ前回ワンツーフイニッシュで決めてたからな、自信あったんだろ」
「理由は分からないけど、とにかく相手は強敵よ？なのは達がもう戦ってるみたいだけど苦戦しているわ。私達も対策を練って戦いに――」
「そんなのいらねェェェェェ！！皆でブッ飛ばすぞ！！」
そう言ってルフィ達は行ってしまった。
「……仕方ないわね。新八、咲夜。アンタ達も来るわよね？」
「当然です」
「従兄として恥ずかしいわ。後でナギにゲンコツ入れてやる」
「やる気まんまんね。じゃあ行くわよ！」
そして、彼らも戦場へ向かって行った。

同時刻、山崎とヒナギクと高杉はララから渡された探知機でさやか達を探していた。
「どうだ？何か反応あったか？」
「今のところ何も――」
この時だった。今立っている地点で機械からピコンピコンと音が鳴ったのだ。
「音が鳴った、ということは」
「この辺にいるってことだな」
そう言って彼らは辺りを見回した。すると、山崎が一部の壁に違和感を感じた。
「ん？何かこの壁、他のと違って色が変だな」
近づき、壁を叩いた。すると、音を立てて壁が崩れた。
「……何これ？」
「さぁ？」
「あ！さやかと杏子が！！」
壁の中には縄で縛られたさやかと杏子がいた。
「おい！大丈夫か！？」
「うう……あれ？何で私達……」
「まどか達にやられて捕われたんだよ。でも安心しろ、助けに来たからな」
高杉がさやかと杏子を縛っている縄をほどいた。
「ありがとう」
「まどかの奴、あんな事するなんて……」
その時だった。上空から無数の矢が降って来たのだ。
「なッ！？皆、壁の中に入るんだ！」
この場にいた全員が開いた壁の中に入り、攻撃を防いだ。
「くそ、まどか達が復活しやがったか！」
高杉がこう言った。彼らの目の前にはまどか、ほむら、マミが立っていた。

「お前ら、どうやら向こうは戦う気らしいぜ」
「ええ、全くしょうがない人ですね」
「今度は手加減なしよ」
高杉と山崎は竹刀を構え、ヒナギクは周囲に紅桜を召喚した。
「さやか、杏子、お前らは傷ついてるから戦いに参加するな。かえって傷が悪化する」
「でも！アンタらが倒されたら！」
「大丈夫です、心配しないでください」
山崎はそう言った。
「大した自信ね、でも私達には一歩も近づけられ――――」
「それはどうかしら？」
ほむらの背後でヒナギクの声がした。
「なっ！」
「ハァァァァァ！！」
ヒナギクが紅桜を縦一閃に振り下ろした。ほむらはギリギリで避けたのだが、その後ろには――――
「隙あり！」
山崎がいた。山崎はほむらの背中の中央に向けて突きを放った。
「があっ！」
山崎の攻撃により、ほむらは近くの壁に吹き飛んだ。
「ほむらちゃん！」
「おっと、お前の相手は俺だぜ？」
まどかの近くで高杉の声がした。
「は！」
「おら！」
高杉の攻撃がまどかに命中し、まどかは地面に崩れた。
「ぐ……うう……」
「私を忘れちゃ困るわ」
上空でマミの声がした。上空には無数の銃が浮いていた。
「さぁ、私の攻撃から避けきれるかしら？」

「だったらこっちも数で勝負よ」
そう言ってヒナギクは空に無数の紅桜を呼び寄せ、銃に向けて飛ばした。
「くっ！こっちも数で勝負か！」
「さぁ、勝負よ！」
上空で紅桜と銃の激しい戦いが始まった。マミの銃がヒナギクに向けて銃弾を放とうとするが、紅桜がその銃を破壊する。そういった戦法のため、マミの銃の数が段々と減って来ていた。
「くぅ！！」
「どうやら私の方が優勢のようね。諦めたら？」
「まだよ！まだ終わってない！」
そう叫び、マミは巨大な銃を呼び寄せた。
「行くわよ、ティロ・フィナーレ！」
巨大な拳銃から大きな銃弾が放たれた。だが、ヒナギクは右手に持った紅桜を構え、空に飛んだ。
「ハァァァァァァァ！！」
叫びながら、ヒナギクはその銃弾を一刀両断した。
「そ……そんな……」
マミが驚きの声を上げた。だが、目の前にヒナギクが現れた。
「くらえ！」
「ぐぅ！！」
ヒナギクは刀の柄でマミの脇腹を殴り、彼女を気絶させた。
「つ……つよ」
その様子を見ていたさやかは思わずこう呟いた。
「さて、周囲に誰もいないから今のうちに保健室に行きましょ」
さやかの所にやって来たヒナギクがこう言った。

「ガアッ！！」
ルフィの声が聞こえる。彼は壁に叩きつけられていた。
「ルフィ！！」

「ふっ、どうやらルフィ達も私達のラブラブパワーには敵わないようだな」
「グッ、ゴムゴムの〜〜〜銃！！」
「だからそんな技は効きませんって」
ルフィが放った技をハヤテは軽くかわし、スタンドでルフィに攻撃した。
「ゴバァァッ！！」
「ハヤテ、あと少しだ、あと少しで私達が再びワンツーフィニッシュ出来るぞ！」
「やらすかよ！」
ナギの目の前に三刀流のゾロが襲った。しかしハヤテの蹴りがゾロに命中し、ゾロはぶっ飛んだ。
「ヒェェェェェ、あいつらマジで強いよ」
「ウソップ、何かいい手は無い？」
「ねーよ！そもそもあんなのに敵うわけねーだろ！」
「クラッチも効かない、あの子達本当に強いわ」
「どうすりゃあいいんだ？」
「私の魂も響きません……」
ルフィ海賊団は絶体絶命、前から戦っていたなのは達もかなり体力が消耗しているうえ、大きなダメージを食らったためチョッパーの手当てを受けていた。つまりほとんど戦闘不能に近い状態なのだ。
「ヤバいでこれ、本当にあいつら強い」
「二人でいる場合は本当に最強ですからね」
目の前にいるハヤナギに向かって新八と咲夜はこう言った。その時だった。
「ハァァァァァ！！」
上空からシャナの声が響き、ハヤナギに向かって攻撃を仕掛けて来たのだ。
「なっ！シャナさん！」
「応援に来たわよ！アンタらだけじゃあの二人には勝てないわよ！」

そう言って、シャナは刀から炎を放ち、ハヤナギの周囲を炎で包んだ。
「何ですか？ただ僕達の周囲を炎で包んだだけじゃないですか」
「あまり利口な選択じゃないな」
「そうかしら？」
シャナはにやりと笑った。彼女の後ろには、ウソップとフランキーが巨大扇風機を作っていた。
「扇風機……まさか風を使って炎を！」
「今さら気付いたって……」
「遅いぜ！」
ウソップが扇風機のスイッチをＯＮにした。扇風機から強い風が吹き、炎の威力を強くしていった。
「「ウワァァァァァァァァァ！！」」
威力を増した炎がハヤナギを包んだ。
「これで……この騒動も終わったのか？」
「いや、まだよ」
シャナが小さくこう言った。
「あの二人がこの程度で終わるわけがない」
その直後だった。炎が激しく動いて、消え去ったのだ。
「今のはまずかったですよ」
「だがこの程度じゃあ私達を倒せない」
炎を消し去ったハヤナギがこう言った。
「じゃあこれはどうだ！」
二人の背後からさやかが現れ、手に持った剣で攻撃を仕掛けた。だが、ハヤテがその攻撃を防御した。
「さやか、次は私がやる！」
続いて杏子の連続攻撃がハヤテとナギを襲った。だが、すんなりとその攻撃をかわして行った。
「……まさかあなた達が来ると思ってもいませんでした」
「どうやらまどか達がやられたようだな」

「そうだ、俺達が倒してやったぜ」
屋上の入口の方から高杉の声がした。そこには高杉と山崎、ヒナギクが立っていた。
「あなた達の仕業ですか……」
「まぁいい、丁度いい所にＴＯＰ２０に入った戦闘キャラが一斉に来たんだ、いい機会だ。こいつらを倒して私達が再び頂点に立とう」
ハヤナギはルフィ達を見てこう言った。

次回！
ついに始まるハヤナギとのバトル！ルフィ達は学院最強のハヤナギを倒して騒動を止められるか！そして勝利の女神は一体どちらに微笑むのか！次回混沌学院『上を知るにはまず下を知れ』どうぞご期待！

第１１５話：（人気投票編）いつまでも一位でいられると思うな（後書き）

銀時「オイコラ、作者はどこだ？」

銀八「どうした？もう一人の俺」

銀時「最近俺の扱いひどすぎねーか？今回の長編もあんまりでてねーし、その前の話だって出演してねーんだぞ」

梓「出てるだけでいいじゃないですか」

闇「私だって本編に出てみたいです」

銀時「……出たら出たで厳しいぞ。それより作者、もっと俺の活躍を書けェェェェェェ！！」

第１１６話：（人気投票編）上を知るにはまず下を知れ（前書き）

銀凪「今回で人気投票編は終わりです！！」

闇「最後の最後まで予想のつかないとか言ってました」

ブロリー「とりあえず見て行け」

第１１６話：（人気投票編）上を知るにはまず下を知れ

屋上でハヤナギｖｓ新八達ＴＯＰ２０集の戦いが始まろうとしていた。
「皆いいか？相手はハヤナギだ、油断すればあっという間に負けるぞ」
「ええ、何とかこの勝負、勝つわよ」
「何言ってるんですか？」
「勝つのは私達の方だぞ」
ハヤテとナギがこう言ってルフィの方に向かって来た。
「向こうから来たか！行くぜ、ギア２！！」
ギア２を使い、ルフィはハヤテに向けて蹴りを放った。
「無駄ですよ。いくらギア２を使ったって僕からはスローモーションで見えますよ」
「それはどうかな？」
ルフィがにやりと笑った。ルフィの背後からシャナが現れ、ハヤテの足に向けて突きを放った。
「がっ！！」
「油断大敵よ」
その後、ルフィは体制を崩したハヤテに向けて、ゴムゴムの斧を放った。
「ハヤテ！」
「おっと、アンタの相手は私達だよ」
ハヤテの所に駆け寄ろうとしたナギだが、目の前に杏子が現れた。
「チッ！邪魔だ、どけ！！」
「いやだね！」
叫びながら杏子は槍でナギを攻撃した。ナギは攻撃をかわしながら、後ろへ下がっていた。
「さやか！今だ！」

「オッケー！！」
ナギの後ろからさやかの声がした。
「しまった！！」
背後にさやかがいたのだ。つまり杏子はわざとナギが避けれるような攻撃をし、後ろへ下がらせてさやかと連激するという作戦をとったのだ。
「これで終わりだァァァァァァ！！」
「させるか！」
ルフィ&シャナと戦っていたハヤテがナギの元に猛スピードで駆け寄った。さやかの攻撃はハヤテに命中した。
「グウッ！！」
「ハヤテ！！」
「今だ！一気にハヤテを倒すよ！」
「ああ！」
さやかと杏子の攻撃により、ハヤテは傷つけられていた。
「グッ！……ウウゥゥ」
「ルフィ！今だよ！」
「オオオオオオオオオ！ゴムゴムのＪＥＴバズーカァァァァァァァァァ！！」
ルフィの攻撃がハヤテに命中し、ハヤテは入口の扉部分にある壁に激突した。
「ガ……アア……」
「ハヤテ！」
「どうやら、ハヤナギの時は強いけど個人の時はあまり強くないらしいですね」
新八がナギに向かってこう言った。
「あなた達の負けです。降参して下さい」
「まだだ！まだ私が残ってる！」
叫びながらナギはそう言い、スタンドを呼び寄せた。
「ハヤテの仇だ！私が貴様らを――」

「待って下さい……お嬢様……」
立ち上がったハヤテがこう言った。そして弱弱しく、彼はこう言った。
「一か八かです……お嬢様、僕と合体して下さい」
この発言を聞いて皆驚いた。
「バカヤロォォォォォォォ！！何言ってんだお前！本格的にこの小説を１８禁にするつもりか！」
「止めて！本当に消されるから！止めて！！マジで！！」
「考え直せ！ただでさえハヤナギの事で色々と意見が出てるのに！」
「……何勘違いしているんだ？」
「合体は合体でも……」
その後、ハヤテとナギはキスをした。だが、その時に彼らの体が光出したのだ。そして、光が止んだのだが、二人の姿は無く、ハヤテの髪形をして、ナギみたいに長いツインテールの人物がいた。
「「こう言う意味での合体ですよ？」」
その人物はハヤテとナギの合わさった声でこう言った。
「……え？つまり融合みたいなものですよね？」
「「ああ、私は愛の融合戦士、ハヤナギW！貴様らを倒す者だ！」」
そう言ってハヤナギは新八達に向かって走り始めた。
「「数えろ！貴様の犯した罪の数を！」」
「それ違う方のWだからァァァァァァァァ！！」
叫びながら新八は竹刀をふるった。だが、ハヤナギWが腕を振って攻撃を防ぎ、竹刀が遠くに弾き飛ばされた。
「しまった！」
「下がってろ！俺が行く！」
ルフィが腕を回しながらハヤナギWの所に向かって行った。
「ゴムゴムのＪＥＴ銃！！」
攻撃を放ったのだが、ハヤナギWはそれを片手しかも小指で受け止めた。
「何！？」

「「おやおや、その程度ですか」」
ルフィの拳を軽く叩いたハヤナギW、だがそれだけでルフィは吹き飛んだ。
「ルフィさん！」
「「ここであなた達に教えしましょう……私の戦闘力は……」」
「そんなの関係あるか！！」
「ウオオオオオオオオオ！！アルティメットハンマー！！」
ゾロとフランキーが同時に攻撃を仕掛けたのだが、ハヤナギWは気を放って二人を吹き飛ばした。
「「５３兆です」」
「それすごいのかよく分かりませんけど」
冷や汗を垂らしながら新八はこう言った。
「「つまり、この場にいる全員でかかって来ても、無駄なあがきという事です。例にしてたとえるとレベル１の勇者がドラクエ歴代のラスボスに挑むようなものです」」
「あの、たとえが分かりにくいんですけど」
「まぁ簡単に言うと秒殺されるってか？」
「「ゾロさんの言う通りです。ルフィさんが本気出して覇気出しても、ゾロさんが九刀流になっても、悟空さんが超サイヤ人４になっても僕達にとってはスライムと戦うようなものです」」
「チッ、なめた事言いやがるぜ」
「ああ。俺らも本気出さないとな」
「そうでもしねーとあの二人は……倒せない！」
ハヤナギWのセリフの後、ルフィは再びギア２を、ゾロは三刀流の構えを、そして悟空は超サイヤ人４になった。
「行くぞ！」
「「そんなにしたいんですか、後悔を。ならば絶望になる暗い後悔をさせてあげましょう！」」
再び戦いの幕が上がった。ハヤナギWの背後に瞬間移動した悟空がハヤナギWの頭めがけてハイキックを仕掛け、ルフィは目の前で

覇王色の覇気を纏ったゴムゴムの銃を放っていた。
「「そんな幼稚な攻撃が聞くと思っているんですか？」」
そう言うと、ハヤナギＷは瞬間移動し、攻撃を避けた。
「何！？」
「って、オワァァァ！！」
「へ？グアアアア！！」
目の前の敵が消えたため、悟空の蹴りはルフィに、ルフィの拳は悟空に当たった。
「消えた……一体どこに！」
「「ここですよ」」
ゾロの後ろから声がした。
「なっ！」
振り迎えろうとしたのだが、それより先に腹に違和感を覚えた。
ハヤナギＷの手刀がゾロの腹を貫いていたのだ。
「ガァァァッ……」
呻き声をあげ、ゾロはその場に倒れた。
「「まず一人」」
「ゾロォォォォォォ！！」
「野郎、許さねー！！」
怒りで、更に気のオーラが高まった悟空、彼はそのままかめはめ波の構えを取った。
「くらえ！１０倍かめはめ波ァァァァァァァ！！」
彼の両手から通常のかめはめ波より大きく、そして力強くうねりを上げているかめはめ波が放たれた。
「これで終わりか！」
「「いえ、まだまだです」」
ハヤナギＷがそう言った。
「「あなたが１０倍なら……僕達は１００倍です」」
そう言ってハヤナギＷもかめはめ波の構えを取った。
「「かめはめ波！！」」

その後、ハヤナギＷの両手から悟空のかめはめ波よりも力強いかめはめ波が放たれた。
「な！？」
ハヤナギＷがはなったかめはめ波はそのまま悟空を飲み込んだ。かめはめ波が放たれた後、ボロボロになった悟空が姿を現した。
「悟空さん！」
「ウオオオオオオオオオオオ！！」
ハヤナギＷの目の前からルフィの声が響いた。彼はただひたすら連続して拳をふるっていた。
「ゴムゴムのォォォォォ！ＪＥＴガトリングゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」
ルフィの猛スピードの攻撃でも、ハヤナギＷは簡単に避けていった。
「「連続攻撃というのは……こういうものですよ」」
その言うと、ハヤナギＷは手のひらをルフィの胸に当てた。
「何をするつもり――――」
次の瞬間、何度も衝撃音が響き、ボロボロになったルフィが宙を舞って地面に倒れた。
「「驚いたでしょ？今の瞬間に百発の衝撃を与えました」」
「……チートだ、あの戦闘力はチートだ！」
新八が絶望しながらこう言った。もう彼らに敵う奴はいない。本当にそう思っていた。ＴＯＰ２０の力ではあいつ等は倒せない……新八の目の色は絶望に染まっていた……そう、誰もがハヤナギＷを倒す事を諦めていた……。

その時だった！！
『待て、俺を忘れるな』
声が響いた。そしてグラウンドの方から巨大な足跡が響いた。
「あ……あなたは……」
絶望していた新八達の目の前に現れた救世主……その名も！

「「「最強さん！」」」
混沌学院小学部の理事長、最強さんであった。
『すまない、まさかこんな騒ぎになっていたとは思ってもいなかった』
「いいです、助けに来てくれただけでうれしいです」
『そうか……じゃあ、暴れるとするか！』
「「倒せますか？この最強の戦士であるハヤナギWを？」」
『当たり前だ、何故なら俺は最強だからな！』
最強さんがハヤナギWに向かってストレートパンチを放った。かなり重いパンチであり、受け止めたハヤナギWは大きいダメージを受けた。
「「グウッ！！」」
『次は左だ！』
「「なっ！？」」
二撃目が飛んできた。先ほどのダメージで体が動かないハヤナギWは避けられず、攻撃を受け、宙に浮かんだ。
「「あ……ああ」」
『くらえ！』
パンチ攻撃の後、最強さんは右足を大きく上に蹴りあげ、ハヤナギWを更に上に上げた。
『お前らの出番だ！』
誰かに向かって声を上げた。その瞬間、何者かがハヤナギWを斬り刻んだ。
「「ガアッ！だ……誰だ！？」」
「俺だ」
その声の主はハヤナギWに攻撃を終えた後、屋上に降りた。彼の正体は、クラウドだった。
「く……クラウドさん！」
「いつぶりだろう、話に出てくるのは」
「そう、ずっと待ってたんだよ」

屋上の入り口から西沢がやって来た。
「ここ最近本当に出番がなかった」
「2Zにとらドラ！、べるぜバブ、とっとこハム太郎など新作品新キャラがでてきて、更にそれをフォローするため作者が試行錯誤でネタを考えているから、私達の存在は空気と化した」
「それに踏まえ、ハヤテ、ナギ、お前らはいいだろう。読者からは色々危ないと言われるくらいに存在感があるんだ」
「そうだよ、出番があって、票が入るだけでもいい事なんだよ」
クラウドと西沢はハヤナギWに……いや、ハヤテとナギに語るように話を続けた。
「存在感があるだけでいい事だとは思わないのかお前達は！」
「そうだよ、前回が1位だからって関係ない！ハヤテ君、ナギちゃん！自分達の事を考えるだけじゃなくて、他の人の事も考えたらどう！？」
「そうだ、お前らは知らないんだ、下の下の事を」
クラウドと西沢にこう言われた後、ハヤテとナギは融合を解除した。
「……僕達が間違っていました」
「ああ、本当に私達は大馬鹿だ」
「自分達の事しか考えてなかった……」
地面に伏せた二人、どうやらもう戦意は失われたようだ。
「僕達がする事は、まず上を知るには下を知れ……というようですね」
「そうだな。そうしなければ、本当の意味での1位を……いや、ワンツーフイニッシュを取れないんだ」
「はい、次回頑張りましょう」
「そうだな」
その時だった。沖田が現れて、ハヤテとナギをつき落とした。
「「へ？」」
「じゃあ今すぐ知ってくださいよ。下の連中の事をね」

屋上の下には土方やまどか、今回の騒動で暴れた連中がいた。
「来いよ！俺らが下の事をたっぷりと教えてやらァ！！」
「ウェヒヒヒ、覚悟しててね♪」
その後、落下しながらハヤテとナギは互いの顔を見て、こう心の中で呟いたのであった。
（（人って……本当に醜い生き物だな））
その直後、ハヤテとナギの悲鳴が学院内に轟き渡ったのであった。

その日の夜、保健室にて一人、全く今回の長編で活躍できなかった銀時はこう呟いた。
「……俺本当に1位だよね？なのに何？この扱い？」

第１１６話：（人気投票編）上を知るにはまず下を知れ（後書き）

裏情報

梓「またこのコーナーですか」

銀凪「はい。だいぶ前に混沌学院で一番誰が強いんですかと質問が来たんですが、今回で結構ランキングが代わりました」

銀八「あんのかよそんなの」

銀凪「じゃあとりあえずランキングを見てください」

１０位　悟空

９位　ブロリー

８位　なのは

７位　コレット

６位　ルイージ

５位　紬

４位　妙

３位　千鶴

2位　ハヤナギ

1位　最強さん

銀凪「以上の内容です」

銀八「……あり？最強さんはわかるけど何でムギや妙、千鶴が入ってんだ？」

銀凪「この作品じゃあそのくらい強いんです。じゃあ次回会いましょう」

第１１７話：幼稚園の芝居ってよく台詞覚えられたな？って最近思うんだよね

銀凪「はいはーい、じゃあお話を始めまーす」

銀八「ＴＰＰだっけ？大丈夫か？」

梓「さぁ？」

当麻「まぁ今回の脳内ＯＰは『ＪＡＰ』で頼むぜ。ＢＡＳＡＲＡキャラは出ないけど」

第１１７話：幼稚園の芝居ってよく台詞覚えられたな？って最近思うんだよね

２Ｚ教室内。今ここの黒板にこう書かれていた。
『演劇を何にするか？』
実は数日後に迫っている小学部との交流企画として、高等部の連中がクラスごとに劇を披露することになったのだ。
「じゃあ何にするかどうか決めたいと思う。意見がある奴は手ぇ上げろ」
黒板の前に立っている銀時が気だるそうにこう言った。
「はい！」
最初に手を挙げたのは神楽、続いて彼女はこう言った。
「私は『〇が如く』をやりたいネ！」
「バッカヤロ～、子供がそんな難しい話理解できるわけねーだろうが」
「でもヒロインの子が――――」
「中の人ネタは止めろ。作者だってあのゲームやりたいんだけどそれ用の――――」
「携帯ゲームで出たんじゃないアルか？」
「アレは作者が体験版やって駄目だと思ったんだよ」
「あの、それより話を進めましょう」
新八が手を上げてこう言った。
「しゃーねーな、じゃあ次いるか？」
「はい！」
続いて手を挙げたのは悟空であった。
「悟空か、何かあるか？」
「先生、オラが質問する。子供が漫画で好きそうなのは何だ？」
「子供が好きそうなもの……熱いバトルかギャグか……」
「そう、だからオラは考えた。子供受けが出来そうなバトル、そしてギャグが満載の演劇を！」

「どんなんだ！」
しばらくの悟空は黙っていたのだが、少ししてこう口を開いた。
「……誰か考えてくれねーか？」
「考えてなかったのかよォォォォォォォォ！！」
まさかの展開で銀時は盛大にこう叫んだ。
「で、次いるか？頼むからまともにやってくれねーか？俺は俺でここ最近本当に出番ないんだよ！前の長編だって少ししか出番なかったし、その前の話も数話出てなかったんだぞ！本当に冗談じゃねーって、この作品本当にキャラ出し過ぎだコノヤロー！！」
「先生、ほぼ愚痴になっています」
ヒナギクにこう言われ、銀時は落ち着きを取り戻した。
「わりぃわりぃ、で、他に何かいい案ないか？なるべくオリジナルは避けてくれよな。訳がわかんなくなる」
その後、クラス内はがやがやしていた。
「何がいい？」
「アレがよくね？童話とかその辺」
「いいんじゃねそれで？」
「じゃあ何やる？」
「桃太郎でよくね？」
「裏をついて金太郎」
「白雪姫は？」
「前にネタでやっただろうが、アテムがぶっ飛んだじゃん」
「俺は『土方暗殺帳～死を呼ぶ黒きマヨ～』がやりたいでさぁ」
「何だよそれ、後その話俺が死ぬのか？」
「はい」
「そうかそうか、ならお前をこの場で屍にしてやらァァァァァァ！！」
そんな声が響いた。
「オイ騒ぐな、まぁ何の童話をやりたいかとりあえず言ってみろ」
「ハイ！！」

マルタが手を挙げた。
「私はシンデレラをやりたいです！」
「シンデレラか、王道だな」
「もちろん王子様はエミルで！」
「えええええ！？」
「オイオイ、そんな自己中で役を決めるな」
「そうだ！私とハヤテの方がお似合いだ！」
「オメーらは駄目だ、ステージ上で１８禁な事するつもりだろ」
「大丈夫です、やるとしてもディープキスぐらいです」
「バカかオメー」
とんでもない事を言い放ったハヤテとナギ、そんな彼らを無視して銀時は話を続けた。
「オイ、もしこれ以上案がねーならシンデレラでいいってことにするけどいいか？」
銀時が生徒達の方を見ながらこう言った。生徒達もいいんじゃね？面白くなりそうだな！物作りは任せろ、頑張るネ！土方死ねや！そのネタしつこいんじゃァァァァァ！！そんな声が上がった。
「どうやら賛成のようだな。じゃあ次に役を決める」
次に銀時は黒板に次のように文を書いた。

シンデレラ

意地悪な母親、姉二人

魔法使いのばあさん

馬

王子様

王子様の付添

「とりあえずここん所の役を決めたい。まず始めにシンデレラ――」

銀時がここまで行ったと同時にほとんどの女子が手を挙げた。

「……まぁ予想は出来たんだけどな」

「先生、一体どうするんだ？」

ルフィが興味なさそうにこう聞いた。

「仕方ねー、面倒だから別の方から決めるわ。意地悪なバカ3人はサンジとゴリラと糸目で決めて――」

「「「ちょっと待てェェェェェェェェ！！」」」

銀時の発言を聞いたバカ3人が異議を申し立てた。

「ちょっと待って下さい！何で俺らがバカ3人の役なんですか！」

「酷すぎるぜ！せめて王子様とかその辺の役にしてくれよ！」

「そうです！私達にも希望したい役があるんです！」

「うるせー、別にどうでもいいだろ。お前らが王子だったらシンデレラ絶望するぜ」

「なら！シンデレラ役はお妙さんで！」

「若の方がいいと思います！」

「俺なら誰でもいいさ！」

バカ共がこう騒いでいた。頭をかきながら銀時は妙達の方を見た。

「どうするお前ら？このバカをどうする？」

「あとで窓から捨てておきます」

「あとでと言わず今やってくれ」

「分かりました」

そう言った後、妙は手に持った暗黒物質（ちじょうさいあくのさつじんへいき）をゴリラたちの口の中にぶち込み、悶絶させた。その後で彼女はゴリラたちを窓から投げ捨てた。

「これでよし。じゃあとりあえずこのままだと話が続かないから俺が勝手にシンデレラと王子役を決めるぞ」

その後、ブーイングが飛んだのだが、銀時は気にせず黒板に生徒の名前を書き始めた。シンデレラと王子様の名前の所には。

・ロイド&コレット

・竜児&大河

・サイト&ルイズ

・悠二&シャナ

以上の4組だった。

「せんせーい。もしカップルでやるなら何で新八君と咲夜ちゃん、山崎君とヒナちゃんの組が書いてないんですか〜？ハヤテ君とナギちゃんは分かるけど」

手を上げて唯がこう言った。

「理由？単純だよ。銀魂の主役である俺より先に彼女が出来たからだよ！」

「ずいぶん身勝手な理由だね〜」

唯がこう言った。

「じゃあ先生と私がコンビで――――」

ロッカーからさっちゃんが出て来たのだが、銀時は飛んできた彼女を掴み、そのまま窓に向かって投げ捨てた。

「早く決めろ、出ないと話が続かないだろうが。作者だってこの話でもう数日詰まってるんだよ」

「それは作者のせいだと思いまーす」

「バーカ、そんな事言ったら作者に消されるぞ」

まぁその後は色々と意見が交わされた。で、2Z版シンデレラはこうなった。

シンデレラ：コレット

意地悪な母親、姉二人：３バカ

魔法使いのばあさん：お登勢

馬：土方、沖田

王子様：ロイド

王子様の付添：エミル、新八、山崎

音楽設定：紬

舞台設計：ゼロス、ハヤテ他数名

衣装設定：ナギ、ヒナギク他数名

以上の風になった。

「じゃ、来週から練習だからな。しっかりやれよ～」

そう言って銀時は去って行った。その様子をずっと見ていた者……いや、小動物がいた。それは２Ｚのペット、ハム太郎であった。

「へぇ～～～、ハム太郎君のクラス、シンデレラやるんだ～」

地下ハウスにて、ハム太郎はハムちゃんズに２Ｚの劇の事を話していた。

「そうなのだ、何か面白そうなのだ」

「あのクラスの劇か……見て見たいです～」

「不安しか出てこないのは気のせいか？」

「でも一体どうなるんだろうね～」

皆は２Ｚの劇が一体どうなるか話していた。

それからは、２Ｚの連中は劇の練習に取り組んでいた。
「え～っと……ああ神様～、何で私だけこんな目に～？」
「コレット、もう少し悲壮感を入れた方がいいと思うよ」
「そうかな？ああ神様！何故……何故私だけこんな目に！……こう言った方がいいかな？」
「そうそう！そのぐらいがいいよ」
コレットはマルタと協力して演技を磨いていた。その一方ロイドの方は。
「オイ土方、沖田。何かうまく動いてないけど」
「悪い、沖田が暗闇の中で俺を殺そうとしてるんだよ」
「殺すなんて人聞きの悪い。俺はただ土方さんを暗殺しようとしているだけでさぁ」
「暗殺も殺人も同じだろうが！」
馬役の沖田と土方はこんな喧嘩をしていた。
「ヒナギク、こっちの衣装は完成したぞ」
「あら、結構かわいいじゃない」
ナギは自分が作った衣装をヒナギクに見せた。
「ホント、かわいいわね」
衣装を目にした御坂がこう言った。彼女が作っている衣装にはカエルの姿をしたマスコットキャラ、ゲコ太がついていた。
「御坂、何これ？」
「ゲコ太。ついていた方がいいかなって思って」
「よくないと思うぞ。かえってじゃまだ」
「まぁちょっと自分で勝手にそう言うのつけたら駄目だと思うわよ」
ナギとヒナギクにこう言われ、御坂はうつむいた。
「お姉さま！なら私の衣装を見てェェェェェェん！！」
黒子がこう叫んだ。声がした方向を見ると、黒子がゲコ太の衣装を着ていたのだ。

「……」
「お姉さま、黒子に抱きついて～ん！！」
そう言って黒子は御坂に向かってこう言ったのだが、御坂はレールガンをぶっ放した。
「おい、あんまり騒ぐなよ」
近藤の声が聞こえた。
「あ、近藤さ―――」
御坂は近藤の方を振り向いて、吹いた。何故なら彼は今ドレスを着ているからだ。
「プププッ……何ですかその衣装」
「仕方ないじゃん！何かかってに母親役にされたんだからさ！」
彼はそう叫んだ。近くではサンジと東城が同じ様にドレスを着て、同じように笑われていた。まぁそんな感じで練習が続いて行った。

本番当日。彼らは練習を完璧にし、ほとんどどのタイミングでどの台詞で言うか、どんな動きをすればいいのか完全に暗記した。
「よし。じゃあオメーら。頑張ってこいよ」
当日の朝、銀時がこう言って生徒達を見送った。
「さて、今日は午前中で終わりだから……部屋戻ってジャンプでも見るかイヤッホー！」
そう言って銀時は教室から出て行った。その時彼らは知らなかった。シンデレラでめっちゃ重要なアイテム、ガラスの靴を忘れていた事を。
「へけ？あれってコレットさんがいつも練習のときにはいてるくつ……」
だが！ここに救世主的存在が現れた！そう、ハム太郎である！

次回！
ハム太郎は２Ｚの忘れもののガラスの靴を届ける事にした。２Ｚの劇は一体どうなるのか、ハム太郎は無事にガラスの靴を届けられ

るのか！次回混沌学院『忘れ物をした時の絶望感は誰もが経験した』
どうぞご期待！

第１１７話：幼稚園の芝居ってよく台詞覚えられたな？って最近思うんだよね

銀八「で、結局続くのかこの話」

銀凪「はい」

梓「一話完結の話は……」

銀凪「さぁ？」

一方通行「さァって、お前作者だろ。何とかしろよ」

銀凪「まぁいろいろと考えています。お楽しみに」

第１１８話：忘れ物をした時の絶望感は誰もが経験した（前書き）

銀凪「……」

銀八「ＴＰＰ……」

梓「大丈夫でしょうか……」

第１１８話：忘れ物をした時の絶望感は誰もが経験した

ハム太郎は何とか外に出て、ガラスの靴を何とかしようとした。
「う～ん、一体どうすればいいのだ？」
悩んでいると、犬の声が聞こえた。
「あ！定春君！」
外には神楽のペット、定春が立っていた。どうやら自由気ままに散歩していたようだ。
「定春君、ちょっといい？この靴を何とかできる？」
「あん！」
定春は宙に飛ぶと、ハム太郎が支えているガラスの靴を加え、ハム太郎は定春の背中に飛び乗った。
「よし、これで皆の所にガラスの靴を届けに行くのだ！」
「あお～ん！」
その後、定春とハム太郎は小学部の方へ向かって行った。

「えええ！ガラスの靴が無い！」
楽屋裏。新八はこういった。
「うん、あれ～？教室に忘れちゃったのかな～」
「どうするん？」
「どうするって、とりあえず出番が無い人が取りに行くしか――――」
「出番が無い？俺の事か？」
小さい声でクラウドがこう言った。
「いや、そういう意味じゃない。とにかく取りに行く――――」
『それではほぼメインに近いイベント。２Ｚの皆さんによるシンデレラの劇が始まります！』
「……時間がねーようだな」
小さな声でゾロがこう言った。
「そうだ！悟空の瞬間移動でぱぱっと」

「あの～、その悟空さんなんですけど～」
ヤムチャの発言の後、山崎が話を始めた。
「今日休みですよ」
「エエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？」
この発言を聞いたヤムチャは驚いた。
「何で！無駄に健康な悟空が何で休みなんだ！」
「今日近くのデパートが新装開店するから試食祭りだとか言って神楽さんとルフィさんと一緒に出かけました」
「何じゃそりゃあああ！？」
頼りの悟空不在。まさに絶体絶命だった。
「とにかく、ガラスの靴を使うのは魔法使いが出てくるの所よ。それまで何とかするしかないわ！」
ヒナギクがこう声を上げた。その後、何が何でも成功させるぞ！と２Ｚの連中は意気込むのであった。

一方。ハム太郎は定春の背中に乗ってグラウンドを走っていた。
「定春君、頑張るのだ！」
「あお～～～ん！」
定春は走るスピードを上げた。その様子を見ていた生徒達は驚いていた。
「おわ！何だありゃ！」
「どうした？」
その時、丁度２Ｎの連中がグラウンドで体育をやっていたため、この光景を見ていた。
「あれは……神楽が飼ってる定春じゃないか。何があったんだ？」
ベジータが少し疑問に思った。
「少し様子を見てくる」
「オイゴラベジータ！お前何授業をブルアァァァァァァァ！！」
ベジータが授業を抜け出そうとして怒った松平だが、丁度そこに定春が走って来てぶつかってブッ飛ばされた。

「……自習のようだな」
「よし、俺は定春の後を追う」
その後、ベジータは定春とハム太郎の後を追って行った。

劇が始まった。まず最初はプロローグとして最初の語りから始まるのだ。
『むか～し昔のことでした。ある所にシンデレラという女の子がいました。その子は義理の母と義理の姉二人に毎日こき使われていました。何でかって？知るかよ！』
という語りの後、コレットが出て来た。
「私はシンデレラ、お母様とお姉様にこき使われているかわいそうな女の子。何でこうなったのかは大人の事情でお願いします」
そう言いながらコレットはモップを振りまわしていた。しばらくして女装したサンジが出て来た。ちなみに彼は母親役である。
「シンデレラ～、今から私達はお城の舞踏会に行ってくるから、しっかりと留守番してるんだよ～（サンジ女声）」
サンジがこう言ったと同時に、子供たちの笑い声が響いた。笑い声を聞いたサンジは早足でステージ裏に向かった。
「ちくしょ～、何で俺がこんな目にあうんだ～？」
涙声で小さくサンジはこう言った。
「で、次はお登勢理事長の番だな」
男鹿が辺りを見回した。何故お登勢がいるのかというと、銀時が何とか説得して魔法使いのばあさん役として出演することとなったのだ。
「あたしはここだよ」
お登勢の声が聞こえた。
「早くしてくれ、あともう少しでアンタのでば――――」
声のした方を振り向くと、おぞましい光景がそこにあった。

その頃、定春の背中に乗ったハム太郎は小学部へ到着していた。

「え～っと、皆はどこにいるのだ？」
小学部についたのはいいのだが、２Ｚの連中がどこにいるのかはまだ分からないのだ。
「定春。貴様何やっているんだ？」
そこに跡を追っていたベジータがやって来た。
「神楽を追って来たのか？残念だが神楽はカカロットとルフィとともにデパートへ行ったとヤムチャが言っていたのだ……ん？」
ベジータはハム太郎が支えているガラスの靴の存在に気付いた。
「ガラスの靴？そう言えば前にカカロットと話した時にシンデレラの劇をやるとか言っていたな」
「あん！」
「ん？もしかして忘れ物か？」
その言葉に反応して定春は首を振った。
「そのようだな。待ってろ。俺様がどこで劇をやっているか話を――」
「おわ！何ですかこのデカイ犬は！？」
ここで調理の先生である小松がやって来た。
「貴様、小学部の先生か？」
「ええ。そうですけど……ってか何ですかこのデカイ犬は！」
「２Ｚの神楽のペットだ。忘れ物を届けに来たらしい」
「２Ｚ……ああ。今何か劇をやってるって聞きました」
「そうか、どこでやってるか分かるか？」
「体育館です」
「ありがとな、定春！急ぐぞ！背中のハムスターもしっかりと靴を支えてろよ！」
「あん！」
小松から劇を行っている場所を聞き、ベジータと定春、ハム太郎は体育館へ急いだ。
その一方で劇は魔法使いのばあさんが出てくる場面になっていた。

「オイどうすんだよ。もう時間ねーぞ」
土方が不安そうにこう言った。
「どうするって、誰か取りに行ったんじゃねーのかよ」
神崎は辺りを見回した。
「あれ……男鹿はどこいったんだ？」
「さぁ？」
しばらくして、声が聞こえた。
「あたしを見て気絶しちったよ」
「あ、りじちょ――――」
土方と神崎はお登勢の声がした方を見た。
「「……！？ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！」」
舞台裏で悲鳴が轟いた。
「あれ？今何かあったの～」
舞台に立っているコレットは悲鳴がした方を見た。
「まぁいいか。ああ、魔法使いのおばあさんでも魔法少女でもいいから私の願いをかなえてくれる人は現れないかしら～」
「だったら、僕とけいや――――」
今何か変な奴が現れたけどコレットは気付かず、それを踏みつぶし、舞台の外へ蹴り飛ばした。
『だったら、あたしが願いをかなえてあげるよ』
会場にお登勢の声が響いた。その直後、ＥＴＥＲＮＡＬ　ＢＬＡＺＥが鳴り響いた。
「あ……あなたは？」
『あたしは――――』
しばらくの間をおいて、あの姿をしたお登勢がやって来た。
「魔法熟女！リリカルおとせ！！」
そう、なのはからデバイスを借りたのだろう。お登勢があの最悪な魔法少女の姿で登場したのだ。
「オイィィィィ！！何やってんだあのババアアアアアアアアアアアアアア！！」

その様子を見ていた銀時は盛大に叫んだ。
「オイコラ！子供にトラウマを植え付けてんじゃねーよ！」
「なァァァにがトラウマじゃァァァァァァ！！あたしだって何歳になっても夢見る乙女何じゃァァァァァァ！！」
「お前が乙女な訳あるかァァァァァァァァ！！お前は乙女じゃなくて山姥だコノヤロー！」
「だれが山姥じゃァァァァァァァ！！」
「だったら、若さを取り戻すためにも僕と契約して———」
「うるせー！この腹黒ダークネスマスコットエイリアンがァァァァァァァァァ！！」
お登勢はそう言いながら足元の腹黒ダークネスマスコットエイリアンを銀時に向かって投げつけた。
「ギャアアア

ハム太郎を両手に乗せ、ヤムチャはこう言った。
「急いだ方がいいだろう。早くしないとガラスの靴を使うシーンになるのだろう」
「ああそうだな。こっちだ！」
その後、ベジータ達はヤムチャの後を追って行った。

で、劇の方はどうなったかというと、未だに銀時とお登勢の口喧嘩が行われていたのだ。
「今すぐ止めろ！このふざけた衣装を！」
「冗談じゃないよ！魔法使いって言ったらこの衣装しかねーじゃねーか！」
「いや、他にもあるだろうがァァァァァァァ！！俺は魔法使いって言ったらアンタが黒い服着てイ～ヒッヒ～みたいなおぞましい笑い声で鍋をかき回すアンタを思い浮かんだんだよ！」
「何だよそれ！」
そんな口喧嘩がステージ上で続いていた。
「……まぁこれで時間が稼げるな」
「そうですね」
新八と咲夜がこう言ったその直後だった。
「ついたぜ」
「オ～イ！ガラスの靴を持って来たぞ！」
「ベジータさん？」
新八がベジータの方へ行った。
「新八か。ハム太郎がガラスの靴を持って来たんだ」
「ええ！」
新八は定春の背中に乗っていたハム太郎を見つけた。
「すごいでハム太郎！皆のヒーローや！」
「とにかく靴が届いたって伝えましょう！」
その後、新八達はコレット達に靴が届いた事を伝えた。
「理事長！口喧嘩はもういいから劇を続けてください！」

「あぁ！……あ、そうだった。じゃあ時間無いから、さっさと魔法をかけるよ！」
「は～い」
それからは何とか話が続き、何事もなくエンディングを迎えた。
『２Ｚの皆さん、ありがとうございました！もう一度、盛大な拍手をお願いします』
ステージ上には無数の拍手の音が響いた。

翌日。ハム太郎のケースにはヒマワリの種がたくさんあった。
「昨日はよくやったぜ、ハム太郎。お前のおかげで何とか危機を回避できたんだからな～」
ヤムチャはこう言いながらヒマワリの種をハム太郎に与えていた。
「昨日そんな事があったなんてな～」
へらへらしながら悟空はこう言った。
「悟空、なるべく重要なイベントのときには休むなよ」
「分かった」
悟空はこう返事をした。
「定春も頑張ったアル。よい子ね本当に～」
そう言いながら神楽は定春と遊んでいた。
「神楽ちゃん、定春を教室に入れないでくれるかな？」
「たまにはいいじゃねーか！定春だって皆と遊びたいと言っているネ！」
「いや、遊ぶのはいいけど……」
定春にかまれ、血まみれになった銀時がこう言った。
「そん時は外で待機してもらってもいいか？」
「そうアルね」
笑いながら神楽はこう言ったのであった。
「……何これ？これでオチ？俺が噛まれておしまい？そんなオチ、俺は認めねぇェェェ

「ギャアアア

第１１８話：忘れ物をした時の絶望感は誰もが経験した（後書き）

銀凪「次回はラブチョリス編を元とした話をやります」

銀八「あ～、最近いろんな意味で有名なったからな……あの話」

銀凪「でもちょっとオレ風に変えますよ」

当麻「どうなるんだよ」

銀凪「次回のお楽しみという事で」

第１１９話：何事も夢中になるのはいいけど時間を忘れるな（前書き）

銀凪「さて、今回はあのアニメ銀魂である意味話題となった話をやります」

梓「最近銀魂人気ですね」

闇「ええ」

銀八「っつーことで今回の脳内ＯＰは『桃源郷エイリアン』だ！！」

第１１９話：何事も夢中になるのはいいけど時間を忘れるな

ある日の朝。銀時はいつものようにＨＲで生徒達の出席を取っていた。
「新八」
「はい」
「咲夜」
「はーい」
「ハヤテ」
「ナギと一緒にラブホへ行きました」
「あのバカップルは欠席っと……土方」
「死にました」
「何言ってるんだ総悟？本当に斬るぞテメー」
「ルフィ」
「うーす！」
「ゾロ」
「へーい」
「ナミ」
「はーい」
「サンジ……オイサンジ？」
サンジの声が聞こえない。銀時は不審に思い、サンジの席を見た。
「あり？サンジいねーじゃねーか。欠席か？」
「そうみたいですね」
「珍しいな。いつもなら女生徒にセクハラしまくってボッコボコにされてるのに……まぁいいか」
そう言いながら改めて出席取りを続けた。

数日後。銀時はサンジの事で分に思っていた。あれから数日が経つのだが、サンジは姿を見せないのだ。

「ど～もおかしいな」
「何がおかしいんですか？」
教室で机に座ってこう呟いたら、桐乃がやって来た。
「ああ、サンジの事だよ」
「サンジ？そう言えば最近出席しないわね。何かあったのかしら？」
「多分な。今日の放課後にあいつの部屋に行くから、お前も何か用あるか？」
「はい。この前貸した『妹と遊ぼっ！～アルティメットエディション０２～』を貸したまんまだから、返してもらえないと遊べないのよね」
「じゃ、放課後に俺んとこ来い。一緒にあいつの部屋に行くぞ」
というわけで、放課後にサンジの部屋に行く事となった。

放課後。銀時と桐乃は男子寮のサンジの部屋に来ていた。
「おーい、サンジー！いるのかー？」
「サンジ！この前貸したエロゲー返しなさいよ！」
何言っても部屋からは反応なし。銀時がチャイムを鳴らしてもサンジは来ない。
「……一体何があったんだ？」
「先生、鍵開いてます」
「何？」
扉を開け、二人は部屋の中に入って行った。部屋は暗く、カーテンが閉められていた。
「サンジー！どこだー！返事しろー！」
銀時がこう言ったのだが、返事は無かった。
「……ん？何か聞こえませんか？」
「あぁ？」
銀時が耳を澄ますと、サンジの笑い声がかすかに聞こえて来た。
「……隣の部屋から聞こえてくるな」
「何で笑ってるの？ちょっとキモい」

その後、笑い声が聞こえてくる部屋へ向かい、銀時は扉を開けた。
「サンジ、ここにいるのか？」
部屋に入って二人は驚いた。そこにあった光景とは！
『お待たせ～♪ちょっと待たせちゃった？』
「んふふ～、全然待ってないよ～」
そこにあったのは３ＤＳを手にしたサンジだった。
「オイ」
「さ～て、デートに行くか～」
「オイコラ」
「え～っと、まず最初はデパートへ」
「オイ」
「いや～、どの服も似合う――――」
怒りが頂点に達した銀時はサンジを３ＤＳごと床に叩きつけた。
「てて……先生！それに桐乃も！一体何の用ですか！？」
「その前に俺の質問に答えろ。お前一体何やってんだ？」
「これっすか？これは『ラブラブメモリーズ』っつーゲームです」
「何それ？ラブラブ？」
「ああ、最近発売した恋愛ゲームね」
「れ……恋愛ゲーム？」
「そう。簡単にいえばエロ要素をなくしたエロゲーみたいなものね」
「いや、よけい分からなくなったんだけど……とりあえずお前は授業に出ろ」
「授業？そんなのより静花ちゃんと一緒にいた方がいいです！」
「誰だ静花って！いいからお前は授業に出ろ！」
「嫌です！それなら静花ちゃんと一緒にいた方が――――」
「先生！とりあえず今回は戻った方がいいです！」
桐乃がこう言ったので、今回は戻る事にした。
「ったく、何なんだあいつ？変なゲームにはまりやがって」
寮の外にて。サンジの部屋から出て来た銀時はサンジがやってた

ゲームについて考えていた。
「何だっけ？そのラブラブ何つーゲーム。お前そういうゲームばっかやってるから何か分かるか？」
「いや、あのゲーム妹攻略できないらしいから興味ないのよね～」
「何だその理由？」
会話の後、銀時はため息を吐いた。
「ったく、どうすっかな～」
「先生、これ私の提案何ですけど」
「あん？」
桐乃の提案。それは一体どういうのかというと……。
「先生もそのゲームやって話しして、それで説得すればいいんじゃないですか？」
「はぁ！」
桐乃の提案は銀時もそのゲームをやって、その中でサンジを説得するものだった。
「俺がその訳分かんねーゲームをやる？」
「はい。まぁ分かんない所は私が教えますので」
「イヤイヤイヤイヤ、それよりも一応教師の俺がそんなもんやってたら、モラルが崩れるし、人気も下がるぜ」
「知りません。それより本当にサンジをどうにかしないとまずいですよ」
「まーな。この事がババアにばれたら恐ろしい事になる」
銀時は嫌嫌だが、サンジがやってるゲームを帰りに買い、やる事にした。

翌日、２Ｚにて。
『スタートボタンを押してね』
「ったく、言われなくても分かってるっての」
銀時は呟きながらスタートボタンを押した。
「先生、何やってるんですか？」

ここで新八が教室に入って来た。銀時は昨日の出来事を新八に話した。
「ああ、だから数日休んでたんですかあの人」
「そうだ。だから俺が何とか説得して戻そうと思ってるだけどよ……」
話しながら銀時は適当にボタンを押していた。
「ん？んだよ、最初っからヒロインいねーじゃねーか」
「こういうのはまず最初にフラグを立てないといけないのよ」
銀時が悩んでいると、桐乃が咲夜と共にやって来た。
「話は聞いたで。出来る限りうちらも協力するからな」
「協力って……一体どうすりゃあいいんだよ」
その時だった。
ドン！！
『おわ！？』
『キャア！！』
ゲームから声が聞こえたのだ。
「あ、ヒロインが出てきたみたいね」
「んだよ、最初っからベッタベタな展開だなオイ」
そんな事言いながら銀時はゲーム画面を見た。
『ごめんなさい！私、慌ててたのでつい……』
「あり？やけに素直な子だな」
『その子はそう頭を下げた後、どこかへ向かって行った』
「フラグが立ったみたいね。先生、その後は適当に話を進めて頂戴」
「へーへー」

それから数日。銀時は普通にラブラブメモリーズを進めて行った。桐乃と新八、咲夜はその様子を見るため、ほぼ毎日といっていいほど銀時の部屋へ行っていた。だが、その様子を見ていた人物がいた。
「せんせーい。今どうなってますかー？」
桐乃が扉をあけて、こう言った。

「おー、今二人くらい口説き落としたぜ～」
部屋から手を振りながら銀時は現れた。
「二人って、先生意外とすごいですね。誰ですか？」
「え～っと、この前ゲーム序盤でぶつかった奴、静花と、蓮西寺琴乃っつー女だな。今静花とデート中」
そう言って銀時は３ＤＳを見せた。
「へ～、銀さんこういうのじゃあモテモテ何ですね」
「新八、ブッ飛ばすぞ」
こんな会話を彼らはしていた。しばらくして、部屋のチャイムが鳴った。
「あ～？誰だ？」
銀時が部屋を出て、原価間の扉を開けると、そこにはあやせの姿があった。
「先生、失礼します」
「ああ。一体何の用だ？」
「あやせ、どうしたの一体？」
その後、あやせは部屋に入って銀時にこう話をし始めた。
「何をやっているんですか？」
何かを軽蔑するような目で、あやせは銀時にこう言った。
「何って……ラブラブメモリアルっつーゲームだよ。バカ（サンジ）がこのゲームにはまって休んでるから、何とかするためにこれやって話して、それで説得しようって思ってんだよ」
「……そうですか」
そう言ってあやせは再び、銀時の方を見た。
「そんな理由があったんですか。先生が桐乃を変な道に誘い込んだかと思って勘違いしていました」
「んなわけねーだろうが」
「でも……もし、もし変な道に誘いこんだら先生をブッ飛ばしますわよ（コロシマスヨ）」
「あの、あやせさん。ちょっと殺しますよって聞こえたんですけど

気のせいですよね」
新八はこう言ったのだが、あやせは話を聞き流した。
「で、そのラブラブ何とかって言うのが今はやってるんですか？」
元に戻ったあやせは皆に聞いた。
「一部の人がやってるみたいです」
「まぁサンジみたいな奴がやるんだけどな」
「私は妹キャラがいないからやらないだけよ」
新八、昨夜、桐乃はこう言った。
「へ……へ～」
あやせがこう言った……その時だった。
「オイちょっと桐乃、何かおかしくなったんだけど」
「私を呼ばないでよ、このゲームあんまり知らないんだから」
桐乃がそう言って銀時の傍へ寄った。同じく新八達も傍へよった。
画面にはこんなメッセージが書かれていた。
琴乃『嘘……何で……何で静花がアンタの家にいるのよ！？』
静花『だって……だって私は、私は銀君の彼女だもん！！』
琴乃『嘘……嘘言わないでよ。だったら証拠を見せなさいよ！！』
静花『いいわ』
そう言って静花は俺の顔の方をむき、自分の唇を俺に押しつけた。
続いて、唇を押しつけたまま、彼女は口を少し開き、俺の口の中に
自分のベロを入れて来た。
静花『あ……うん……』
静花はただ、喘ぎ声を出していた。だがその一方で琴乃が絶望し

たような目で、俺らを見ていた。

琴乃『い……いや！いやァァァァァァァァァァァ！！』

琴乃は叫んだ後、部屋から出て行った。

静花『……何処か行っちゃったね、あの女』

俺の方を見てこう言った。

静花『私、ちょっと買い物に行くね。銀君もお腹すいてるでしょ？』

彼女の質問に俺はああ、といった。まぁもう遅いし、腹もすいている。静花が作る料理はうまいんだよな。その後、静花は財布を持って出かけて行った。俺はキッチンに行って、後で静花にコーヒーを飲ませようかと思い、やかんに水を入れ、沸かし始めた。その時だった。俺の携帯のバイブが鳴り響いたのだ。静花からかなと思い、携帯を開いた。どうやら琴乃からのメールだった。件名は『ごめんね』と書かれていた。肝心の本文は何も書かれていない。しかし、改行の跡がある。俺は本文を開き、十字キーの下を押しっぱなしにした。そして、ある文字が目に入った。

『さよなら』

何の事だから分からなかった。だが、次の瞬間。

グサッ！！

何かが刺さる音がした。続いて体が弱ったような感じがした。力を振り絞って背後を見ると、血がついた包丁を持った琴乃が立って

いた。

琴乃『アンタのせいよ……アンタのせいで私は！』

琴乃が泣き叫ぶようにこう言った。だが、その声も段々と遠のいて行く。俺は唸り声をあげ、その場に倒れた。痛い、背中が痛い。痛い痛い痛い。そう思っている中、琴乃が俺の上に乗っかって、俺の腹に目がけて、包丁を突き刺してきた。それから走馬灯だろうか、過去のことが頭の中に流れて来た。ヤンチャだった小学生の頃、悪友と共にバカをした中学生の頃……そして、静花との出会い、琴乃との出会いの時も……。そんな事を思っていたら、俺の意識は段々と遠のいて行き、完全に消えた。

静花『帰って来たよ～ってあれ？……銀君？どこにいるの？鍵なんて開けてたら泥棒が……！？キャアアア

「何じゃこりゃあアアア

第１１９話：何事も夢中になるのはいいけど時間を忘れるな（後書き）

ブロリー「原作と変えたな」

銀凪「はい、ちょっと変えてみました」

パラガス「一体どうなるんですか？」

銀凪「とりあえず次回まで待て」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5269p/

混沌学院

2011年11月15日22時36分発行